第６節　蓮池庭

１．概要

（１）蓮池庭の位置と地形的特徴（第139・140・141・143図）

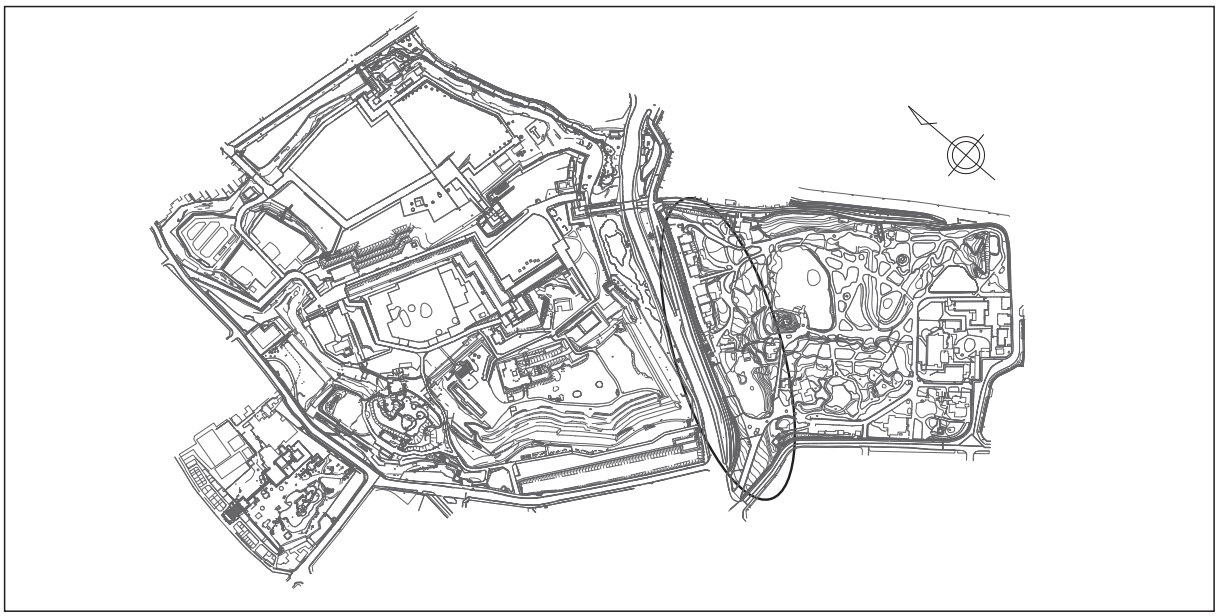
蓮池庭は、金沢城南東、蓮池堀（百間堀）の東側上手に位置する（第 139 図）。蓮池堀は、小立野台地本脈と金沢城側を分ける、北に開口する谷状地形に人口の手を加えて形成されたと考えられ、蓮池庭は大略その東側斜面に相当することとなる。庭園築造当初は、「蓮池の上」と言われていたが、やがて堀と同じ名称で呼ばれるようになった。なお蓮池庭の南東側、台地上部の平坦地は、蓮池庭築造の頃は武家屋敷地であったが、やがて藩有地（揚地）となり、学校敷地を経て、文政２～５年（1819～22）にかけて竹沢御殿が造営された。以後、竹沢庭として蓮池庭とともに兼六園の原形を形成してゆくこととなる。

蓮池庭の敷地は、南北（南西－北東）に長く、北側が開いた細長い三角形状を呈し、南北（長軸）約 400 m、北辺約 110～120 mを測る（第 140･143 図）。東の竹沢庭より全体に低く、隣接部分（東辺）は傾斜地であるが、その北部は緩やかで、中央から南部は急斜面となっている（第 141 図 E-F）。この西側の中軸部分も一様ではなく、北部は西側に開口した谷（不老坂）を擁するが概ね高く（標高約 47 m）平坦で、中央部は緩やかに南に下降する傾斜地、南部の瓢池付近で平坦（約 40 m）となるが、池の南からはまた下降する緩斜面となって南端（約 30 m）に至る（第 141 図 A-B）。蓮池堀に面した西辺北部の平坦面は馬場があった箇所で、中軸北部とは急斜面で隔てられているが、瓢池付近とは大きな高低差をもたず通じている。

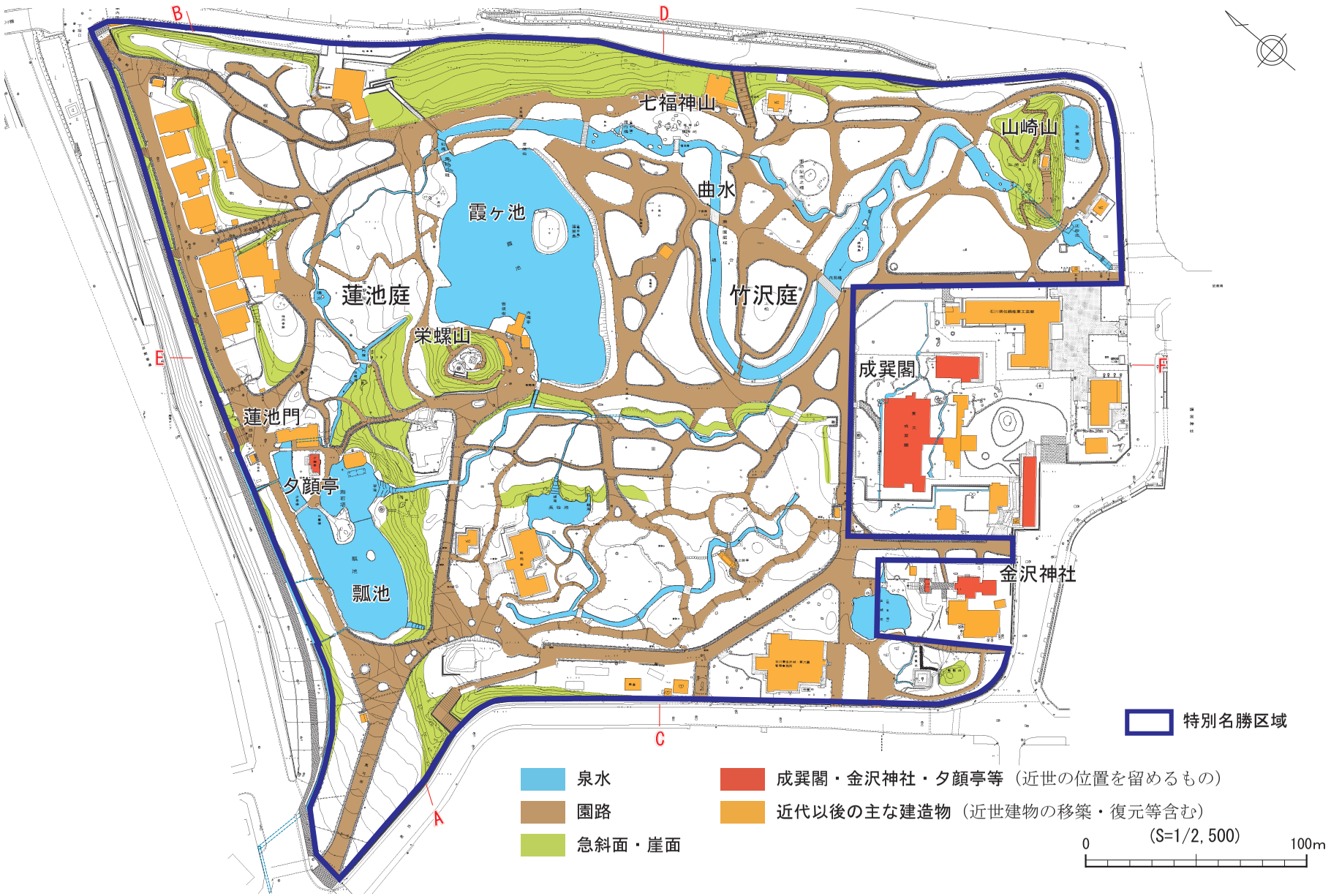
（２）現況（第140・142図）

蓮池庭は、現況では特別名勝兼六園の指定地に含まれ、庭園の構成要素の多くが受け継がれている（第 140 図）。瓢池の中島（現在は池との間が埋め立てられている）には、安永３年（1774）に造営された夕顔亭（滝見亭、中島亭）が現存している。

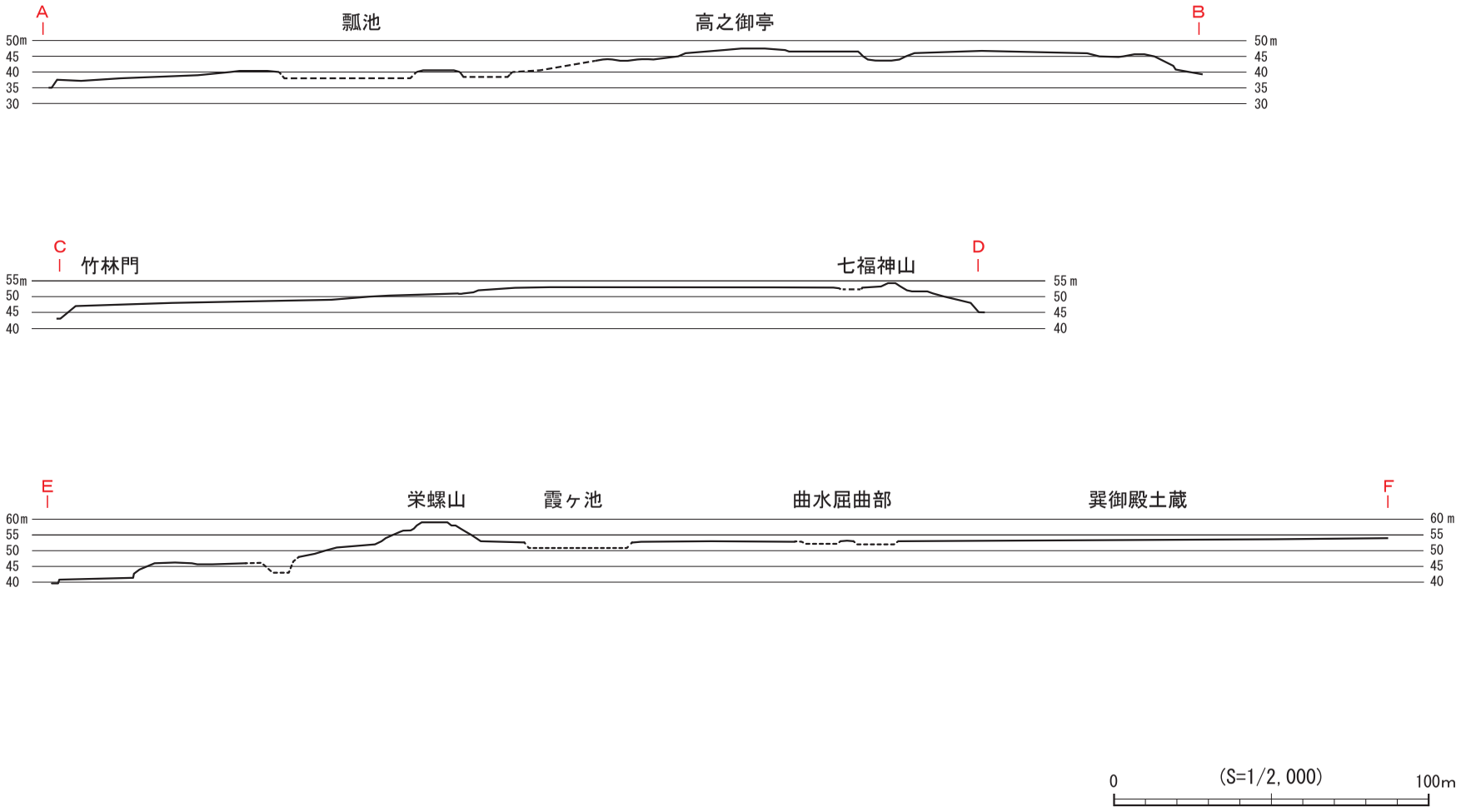
なお明治期以降、公園として広く開放されたこともあり、一時期には多くの茶店が進出し、瓢池西側にも林立していた（「金沢公園名所略図」明治 19 年（1886）、石川県立図書館蔵等）。現在でも北西部にあったかつての馬場を中心に茶店が集中している。



第 139 図　蓮池庭の位置（S=1/10,000）



第 140 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）全体図



第 141 図 兼六園（蓮池庭・竹沢庭）全体断面図

第 35 表　蓮池庭・竹沢庭関連年表

年号	西暦	事項	時期［蓮池］	時期［竹沢］	史料
万治 2	1659	蓮池堀の南東側に作事所が造営される 「越登賀三州志」	Ⅰ期	Ⅰ期	
延宝 4	1676	作事所が移転し、蓮池庭・座敷が造営される 「菅君雑録」（玉図加越能文庫）他	Ⅱ期		61-01
延宝 6	1678	５代藩主前田綱紀養女恭姫、蓮池の高御屋敷に行く			61-02
		前田綱紀､重臣達を「御座敷」「御数寄屋」において饗応する 「葛巻昌興日記」（加越能文庫）他			61-03
元禄 9	1696	前田綱紀、江戸から帰国するも二ノ丸修築により蓮池の上御屋敷に入る 「御親翰写 2」〈前田綱紀書状写〉、「政隣記」（加越能文庫）［加史 5］			61-06
		以後蓮池の上御殿と呼ばれ､綱紀は翌年初めまで居住する 「前田貞親手記」（加越能文庫）			
元禄 10	1697	奥村有輝の旧屋敷（蓮池庭上段の侍屋敷）が藩有地（揚地）となる 「元禄六年二月十六日より享保十三年迄覚書」（玉図奥村文庫）			
享保 10	1725	６代藩主前田吉徳の命により､「蓮池御亭」が撤去される 「中川長定覚書」（加越能文庫）	Ⅲ期		
享保 11	1726	「蓮池御亭」新設の運びとなり、庭も修築される 「中川長定覚書」			61-07
延享 4	1747	８代藩主前田重熙、蓮池亭にて年寄・家老らを饗応する 「日記頭書」「遠田日記」「大野木克寛日記」「政隣記」他［加史 7］			61-08
宝暦 5	1755	幕府国目付、金沢城・蓮池庭を巡見する 「泰雲公御年譜」（加越能文庫）他［加史 7］			61-09
安永 3	1774	11 代藩主前田治脩の命により、中嶋亭が造営され、滝が修築される 「太梁公日記」（前田育徳会）［加史 8］	Ⅳ期		61-11
					61-12
寛政 元	1789	この頃藩主・子弟子女の利用が多くみられる 「高畠厚定職事日記」			
寛政 4	1792	重臣達が蓮池庭を拝見する 「蓮池庭之図」［加史 10］			61-14
		元の揚地（のち竹沢庭）において学校が開校する 「御年譜」［加史 10］			
文政 2	1819	12 代藩主前田斉広の隠居所（のち竹沢御殿）の造営が着手される（～文政５年） 「御親翰帳之内書抜」「横山氏旧記」他［加史 12］			
文政 3	1820	蓮池庭を隠居所に取り込むため、間の道路が廃止される 「諸事覚書」（加越能文庫）［加史 12］			61-15
文政 5	1822	学校が移転し、隠居所の敷地広がる 「諸事覚書」［加史 13］	Ⅴ期	Ⅱ期	
		松平定信、兼六園の扁額題字を揮毫する 「花月日記」（天理図書館）			
		前田斉広、金沢城二ノ丸から竹沢御殿へ移る 「官私随筆」（加越能文庫、玉図奥村文庫）他［加史 13］			
文政 6	1823	竹沢御殿内に時鐘所が造営される 「諸事留牒」［加史 13］			
文政 7	1824	前田斉広死去 「官私随筆」他［加史 13］			
文政 9	1826	前田斉広正室真龍院、竹沢御殿と重複したもとの学校鎮守跡地を囲い、地面を清浄に保つように要望する 「奥村栄通御城方留帳」（奥村文庫）［石金研 2016b］			
天保 元	1830	「竹沢御屋敷」（もと竹沢御殿）の撤去が着手される 「本多政和覚書」（加越能文庫）	Ⅵ1 期	Ⅲ1 期	61-17
天保 8	1837	竹沢庭「書斎先」「書斎上之方」の水源水道・泉水の普請が行われる 「成瀬正敦日記」（加越能文庫）［加史 14］			61-19
					61-20
天保 9	1838	真龍院、江戸から国許入りし、蓮池庭・竹沢庭も訪問する 「成瀬正敦日記」他			
天保 10	1839	竹沢庭の泉水が拡張される　栄螺山に石塔が建立される 「成瀬正敦日記」［加史 15］	Ⅵ2 期	Ⅲ2 期	61-23
弘化 元	1844	竹沢御殿の建物のうち表居間等が撤去される 「世子御座所普請方御用主附一件」（加越能文庫）［石金研 2014b］	Ⅵ3 期	Ⅲ3 期	61-26
弘化 4	1847	竹沢庭大桝の移設工事が行われる 「成瀬正敦日記」			61-27
嘉永 4	1851	竹沢御殿の建物が書斎部分のみに縮小される 「成瀬正敦日記」［加史藩末上］	Ⅵ4 期	Ⅲ4 期	61-28
		金城霊沢碑が鳳凰山の岩窟内に設置される 「成瀬正敦日記」［加史藩末上］			61-29
嘉永 5	1852	竹沢鎮守で天満宮九百五十歳神忌の祝賀神事が行われた際、家中・町人に参詣・蓮池庭拝見が許可される 「成瀬正敦日記」「文慶雑録」他［加史藩末上］			61-30
		竹沢調練所が造営される 「官事拙筆」（奥村文庫）			
安政 6	1859	竹沢庭の泉水が修築される 「御用方書留」（奥村文庫）［加史藩末上］			61-33
万延 元	1860	蓮池庭と竹沢庭との間の塀等が撤去され、水道（樋）上門（兼六園門）建物は蓮池門に移築される 「御用方書留」［加史藩末上］	Ⅶ期	Ⅳ期	61-35
文久 2	1862	大桝が修築される 「御用方書留」			
文久 3	1863	竹沢庭に巽御殿が造営され、真龍院が居住する 「御用方書留」他［加史藩末上］			61-36
慶応 2	1866	金谷御殿の普請にかかり、竹沢庭が石や材木等資材置き場に利用される 「金谷御殿御普請諸事留」（玉図清水文庫）［石金研 2013b］			61-38
明治 2	1869	真龍院の八十余りの賀として、竹沢庭等において囃子が催される 「御能御囃子組扣帳」（玉図藤本文庫）［長山・西村 2005］			61-40
明治 4	1871	蓮池庭・竹沢庭ともに学校の管轄となる 「恭敏公日記」（前田育徳会）			
		元蓮池庭は与楽園（のち兼六園）と呼称され、一般に公開される 「触留」［加史藩末下］			61-41

＊本表の記載事項は主に［長山2006b］に依拠して作成した。

（3）蓮池庭の沿革（第35表）

第 35 表は、蓮池庭における普請・作事の記録を中心とした年表である。蓮池庭の変容については、主要な建造物の消長や滝の修築等の整備に係る史料を軸に区分を設定した。二ノ丸や金谷出丸とは異なり、敷地全体の時期区分と庭園の変容がほぼ同様となる状況である。

Ⅰ期（～1676）

延宝４年（1676）の作事所移転・庭園整備以前を一括する。作事所については、万治２年（1659）の設営とされ（「越登賀三州志」他）、これ以前については、慶長６年（1601）の珠姫入輿に従った侍臣の居住地となり、江戸町と呼ばれた（「三壺聞書」）等と伝わる。蓮池庭北西部に相当する茶店の改修に伴い実施された埋蔵文化財調査では、17 世紀初期の遺物を伴う屋敷地が検出されている。

Ⅱ期（1676～1725）

５代藩主前田綱紀により、作事所の城内新丸への移転、庭園整備・利用が行われた時期。18 世紀半ばにまとめられた「菅君雑録」（金沢市立玉川図書館加越能文庫）に、延宝４年（1676）蓮池庭造営の記事が見える。同時代史料の「葛巻昌興日記」（加越能文庫、第 36 表 61-02・03・05）等によると、造営の具体的な記述は少ないが、「御泉水」の他、「御座敷」「蓮池之高之御屋舗」「蓮池之上御亭」「御数寄屋」「馬場御亭」等の建物名が窺える。当該時期に限らず、18 世紀末期以前については外郭ラインを除き、庭園の状態を描く絵図･絵画史料が見当たらないこともあり、景観は詳細にできないが、敷地南部に池や池畔の亭（数寄屋）、敷地中央北寄りにやや大型の建物、敷地北西部の谷沿いに馬場を配する構成であったと推定され、現在の地割は当初から大きな変化なく継承されていると考えられる。

Ⅲ期（1725～1774）

６代藩主前田吉徳による「蓮池御亭」及び庭の修復以後、11 代治脩により更に整備が進められる段階以前を一括した。享保 10 年（1725）、襲封まもない吉徳は、蓮池庭の中心建物である「蓮池御亭」を一旦取り壊し、改めて再建した（「中川長定覚書」加越能文庫）。それまでの建物は、短期間であるが二ノ丸御殿改修時に藩主の執務場所とされたこともあり、「御亭」とはいえやや規模が大きかったと推定されるが、新たな御亭は規模を縮小して再建されたらしく、18 世紀末期以後の絵画・絵図に描かれる「高之御亭」は、この再建された建造物を原型とするものと考えられる［長山 2006b］。吉徳以後の藩主である７代宗辰・８代重熙・10 代重教も蓮池庭を利用しているが、目立った整備・造営の記録は見られない。

Ⅳ期（1774～1822）

11 代藩主前田治脩による整備以後、東側の隣接地に竹沢御殿が造営され、御殿の一部に取り込まれる以前の時期。安永３年（1774）、治脩は蓮池庭南部の池（現・瓢池）に流れ込む辰巳用水による滝を改修し、併せて中島に亭（夕顔亭、史料では「夕顔ノ御亭」「滝見御亭」「中島の亭」等と記される）を造営した（「太梁公日記」（公財）前田育徳会尊経閣文庫）。また安永５年（1776）には馬場を望む一角にも亭（内橋亭）を設ける等、後世まで伝えられる重要な構成要素が整備された。蓮池庭の具体的な景観を示す絵図・絵画の類はこの段階より知られる。

Ⅴ期（1822～1830）

蓮池庭が竹沢御殿に付随する形になって以降、竹沢御殿の建物の取り壊しが進められる天保元年（1830）までの時期。文政３年（1820）、12 代藩主前田斉広による隠居所（竹沢御殿）造営中に、それまで隣接していた学校との間にあった道が廃止され（「諸事覚書」加越能文庫、第 38 表 61-15 等）、蓮池庭は竹沢御殿の外庭として位置付けられることとなったが、ここでは竹沢御殿が一応の完成を見た文政５年（1822）を区切りとした。絵図によると、園内の地割形状についてはⅣ期と大差ないが、庭園の構成要素については、北側の淵状の池や、幾つかの見所が見られなくなる等の変化があった。

Ⅵ期（1830～1860）

竹沢御殿の取り壊しが始まり、竹沢庭との境界施設が撤去され、庭が一体化する万延元年（1860）までの時期。Ⅵ期中については隣接する竹沢庭と対応させ、天保８～10年（1837～39）頃を中心とするⅥ１期、天保10～弘化２年（1839～45）頃を中心とするⅥ２期、嘉永３年（1850）を中心とするⅥ３期、嘉永４年以降のⅥ４期に細別して変遷をたどることとする。この時期は、地割に大きな変化はないが、流れの経路が若干変化した他、橋が石橋に替わる等の変化があった。

なお、Ⅵ１期の景観を示す「金沢御城内外御建物絵図」（(公財）前田育徳会尊経閣文庫）は、天保４～９年（1833～38）頃の内容とされているが、竹沢庭において天保８年（1837）築造の可能性が高い栄螺山が描かれていることから、これ以降と推定する見解がある［長山2006b］。少なくとも蓮池庭・竹沢庭の範囲においては妥当と思われる。

Ⅶ期（1860～1871）

竹沢庭との間の門・塀が撤去され、両庭園が一体化した後、明治４年（1871）の廃藩までの時期。竹沢庭への出入り口であった水道（樋）上門が撤去され、蓮池門に移築された（兼六園門）。この時期は従前の枠組みが変わる時期で、隣接する竹沢庭の変容により、現在まで受け継がれる兼六園の景観がほぼ確立するのであるが、蓮池庭内の地割・構成要素等は凡そ保持されており、Ⅵ４期と大差ない状況である。

しかしながら、明治２年（1869）の版籍奉還により、知藩事となった旧藩主家の家政と藩庁の政務は峻別され、蓮池庭・竹沢庭の管理は、改革なった学校（中学東校）が担うこととなって大きく変化した。さらに明治４年（1871）２月には、日限等の取決めはあったが、四民の別なく庭園を公開することが布達された。管理や利用の観点からすれば最大の画期であるが、４か月後には廃藩置県が行われ、兼六園の管理は県に引き継がれていくこととなる。

第142図　蓮池庭の現況（瓢池付近　南から）

第 143 図　蓮池庭全体図

2．庭園に関する資料

（1）遺構

現存遺構

庭園の構成要素の多くが保存されている。竹沢庭に比べ、園路等近世以来の位置を踏襲している比率が高い。一つには斜面部分が多く、平地である竹沢庭と違い、園路の新たな開削や付け替え等が制約されたためと思われる。詳細は次項３で記述する。

発掘遺構

蓮池庭敷地の北西部（茶店通り）で茶店建て替えに伴う発掘調査が実施されている［石川県立埋蔵文化財センター1992］。調査区北西端下位で17世紀初頭の屋敷地が検出され、「三壺聞書」にみえる江戸町の一角である可能性が考えられている（第173図②･③）。地山（基盤層）は、南東端･中央･北西端と50cm以上の段差を持って下降しており（ただし北西端については中央との段まで確認、屋敷地面の下位は未検出）、17世紀初頭の段階では現況のような平坦地ではなかったことも判明した。

屋敷地は遺物の年代観から17世紀第１四半期のうちに廃絶し、その後埋め立てられている。埋め立て後の状況についてはあまり明確ではなく、中央地山面とほぼ同レベルで遺構面が形成されているが、この面を含む上位では近世の遺構は確認されていない。絵図との照合によれば、調査区は蓮池庭期の馬場や馬場に沿った流れと重なっているが、これらの痕跡や現況地盤との関係も不明で、近代以後の改修の影響と思しい。

（2）文献（第36～41表）

藩主・藩士の日記が主体で、造営や使用状況が窺えるものがある。成立期でもあるⅡ期では、「葛巻昌興日記」（第36表61-02・03・05他）に蓮池庭の記事が頻出する。葛巻昌興は５代藩主前田綱紀の側近で、奥小将・奥取次等を務めた。Ⅲ期では当時若年寄の地位にあった中川長定の職務日誌がある（「中川長定覚書」第37表61-07他）。Ⅳ期の事績は当該期の二ノ丸庭園と同様に、11代藩主前田治脩の日記（「太梁公日記」第37表61-10、第38表61-11・12、『加賀藩史料』に「太梁公手記」として収載）に詳しく、滝の改修や亭の造営など普請・作事に関わる記事だけでなく、茶事や鳥猟等使用の在り方について、当事者の視点から活き活きと綴られている。また津田正身等拝見を許された藩士による手記（「蓮池庭之図」第38表61-14）も幾つか伝わっている。Ⅴ期以後においても、13代藩主前田斉泰の側近であった成瀬正敦等、藩士の日記類が重要である（「成瀬正敦日記」第39表61-19～23、第40表61-27～29等）。長山直治氏の『兼六園を読み解く』［長山2006b］は、これらの文献史料に基づき、兼六園の歴史と利用を詳細に検討したもので、本書でも多くを拠っていることを特記しておきたい。

（3）絵図・絵画（第42～43表、第144～156図）

前項沿革（１（３））でも触れた通り、近世前期の絵図については、外郭を描くものが知られているのみで､内部の構成を窺うことはできない。石川県立歴史博物館所蔵の「兼六園蓮池庭之絵図額」（第42表・第145図62-07）は、前述した津田正身の庭園拝見に係る見聞記録として作成されたと考えられ［長山2006b］、寛政４～11年（1792～99）頃に成立した最も早い段階の絵図・絵画資料となる。竹沢御殿完成以前の詳しい史料はこの他に今のところ２点のみ（「金沢城内絵図」第42表・第146図62-08、「竹沢御殿絵図」62-09）であるが、御殿造営以後の絵図・絵画は竹沢庭とともに描かれるものが大半で10点以上知られる。また「兼六園絵巻」「巽御殿絵巻」（第43表・第154・155図62-25・26）は蓮池庭・竹沢庭の藩政期最末期の姿を描いた貴重な資料である。

なお構成要素においては､建物等を除き､近世史料に特定の名称が見られない場合が多く（第44表）、基本的には現在の名称を用いることとする。

第 36 表　蓮池庭・竹沢庭関連文献史料 1

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
61-01*	延宝 4(1676) 9	此月 元御作事所ニ蓮池御庭出来、御座敷被建 今蓮池上　（ママ） 御亭ト云、金子安左衛門重保・中村兵左衛門奉行之	菅君雑録	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山 2006b P23
61-02*	延宝 6(1678) 8.11	（敷） 十一日、御姫様蓮池之高之御屋鋪へ被為成御出	葛巻昌興日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山 2006b P28
61-03*	延宝 6(1678) 12.2	二日、於蓮池御舘本多安房藤原政長・横山左衛門小 （ママ） 野忠知・前田対馬菅原・奥村因幡平庸礼・同伊与 栄尚ニ賜御壺御口切之御茶、先八つ半過於御座敷 （裃） 御饗膳、御表少将中陪膳、各ふくさ小袖･上下着用、 横山志摩一宗・奥村兵部憙輝ハ御勝手ニ候ス、 御座敷より一町計へたゝれ御泉水際 終而御数寄屋にて御茶被下之、中将家御手自これを てんせらる、多賀直方・生駒直政・葛巻高俊・菊池 知辰扈従 本多政長以下五人於御数寄屋御茶被下之、退出以 後奥村兵部・横山志摩ハ於御勝手被下之、但御数 寄屋ニてこれをてんせられ、多賀直方を以被下之、 重而於御数寄屋可被下之ニ付、今般者御勝手ニて被 下候由御意有之、直方演述之、且亦藤田平兵衛安 （ママ） 勝・永井伝七郎正良・稲垣三郎兵衛連居ス、即此 三輩ニも右横山・奥村に被下御茶賜之訖 今日永井伝七郎・稲垣三郎兵衛御振舞之事、前日 ゟ奉之、即永井伝七郎所々案内して本多以下五人 同道也、いつれもふくさ小袖・上下也、奥小将中ハ 生駒右近御屋鋪ニて御腰物役之ニ付上下着之、其 外袴二てなり	葛巻昌興日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山 2006b P30_31
61-04*	貞享 3(1686) 8.15	十五日(中略)同日、於蓮池御亭、安房・佐渡・壱岐・ 伊豫四人江御茶被下、御料理二汁 後段御茶被下、已 五菜、 后御庭見物、所々御亭ニ御菓子等御飾物多、其已后御 花畠見物、馬場ノ方御亭於御前御馬拝見、終而馬場ノ 御亭ニテ御菓子・御吸物・御酒、右四人江御盃被下、 御勝手取持筑後・備前・玄蕃・与十郎・兵部・新左衛 門六人へモ、於御勝手御料理被下之、人々御差図ニテ 御酒数篇、年寄中謡、御酒宴夜ニ入、酉ノ下克相済、 御前被為入、何モ御茶被下退去、御馳走人、野村与 三兵衛　永井伝七郎　多賀甚六郎　小泉勘十郎　塩 川安左衛門　御膳奉行　千秋半右衛門　御台所奉行 野村四郎左衛門但御前御膳 不被召上 同日夜御月見ニ付、当番御使番已上、於檜垣ノ間・二 ノ御間、御菓子・御吸物・御酒被下、所々御番人於番 所、御歩已下於御台所被下之、	参議公年表	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 4 P848
61-05*	元禄 2(1689) 2.29	(略)蓮池之上御亭之御花御らんに御恭様御出被遊、	葛巻昌興日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山 2006b P38
61-06	元禄 9(1696) 8.11	八月十一日、晴天 一、去月晦日江戸御発駕、昨晩津幡ニ御止宿、今暁寅刻 御着城、但、二之御丸御作事有之故、蓮池之上御殿 江被為入候事、	前田貞親手記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	

第 37 表　蓮池庭・竹沢庭関連文献史料 2

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
61-07*	享保11(1726) 4.10	一、蓮池御亭之儀御腰懸等之儀、大絵図ニ御亭御腰懸之指図仕事候而、今日以兵庫入御覧候処、御腰懸之御好ハ無之、御亭之儀御好有之ニ付、大橋織江へ式部申渡候処、絵図出来、十一日、織江指出、以兵庫式部入御覧候処、是ニ而一段宜御座候、 御床之内、棚之義御尋有之ニ付、御床之内之でたな之段申上候処、左候ハヽ、御床ハ四尺五寸、其残を棚ニとり可申候、ふくろ棚迄ニ而ハ下のかた（出棚）（袋） さひしく可有之候間、ふくろの下二階たなつり可申候、右御棚つり申候ハ、ひちくニ而□□□、御（寂）（棚吊） 路地ニ有之、世俗ニやまい竹と申候而、ふしのこミ申様成竹有之物ニ候、左様之もの可然候、御棚戸張申候儀ハ、ミなと紙可然候、右張候戸ニ団扇ニ外之紙を張、御細工人ニ野駒欤、又一本草花欤為調可申候、ひき手ハ似合申様成もの、古物ニ可有之、惣躰軽クいたさせ可申旨、以同人被仰出候付而、委細大橋又兵衛へ式部申渡候、（節）（込）	中川長定覚書	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P49（部分）
61-08	延享4(1747) 10.10	十日　夕、於蓮池御亭、年寄中・御家老中・若年寄迄御菓子・御酒等被下之、紅葉見物仰被付、但十三日・十九日夕三度ニテ相済。	政隣記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	高木2014 P30
61-09	宝暦5(1755) 5.6	（略）御巡見之御道筋左ニ記、 （略）堂形御馬場通　蓮池御亭　此御亭ニ而 御休ミ、御湯漬出ル、御庭御廻り　石川御門 ゟ御入、河北御門 （略）	御国江公辺ゟ御目附衆御越御用一巻之事	金沢市立 玉川図書館 後藤文庫	
61-10	安永3(1774) 2.1	一、二月朔日八時過蓮池へ行。夕影。先へ叟事遣す。然處二つがひ参り居候、根笹の入に居候旨言上之。早々細ばかまになほし参り、小屋より見候處、根笹の一の辺に徘徊す。於蓮池庭獲物左之通。 一、二　羽　　小がもをとり 八半時頃小屋へ行見候處、根笹の一二の辺徘徊す。これよりあみたづさへ、根笹の方へ行。尤鳥は二つがひ也。根笹の二之方窓より見候處、最初は手前之方へ出、寄せの正真中へは入不申。此處随分寄せ際之窓よりためらふ内、二ヶつがひ共快くつく。寄せの向うへ小波瀾うつ。垣之内より左足をふみ出し、右の足をふみ出すと一時にあみを打出す。此調子甚むづかし。あみ甚圓くよくひろがる、少々あみのさきは高き故、寄せより少し間の有之、をとり向うへにぐる。且又寄せの左の方のはしに居候めとりも、左之方へきれのがれたり。をとり二の内一つは龍頭ぎは、一つは中程にて上る。何の苦もなく取上る。 殊之外あみからみ、先其まゝ小やへ持参、こゝにて余程あみをきる。此あみ江戸に而八兵衛へ申付すきたるあみ也。甚うちよきあみ也。貢・叟事供也。	太梁公日記 [太梁公手記]		加賀藩史料 8 P948_949

第 38 表　蓮池庭・竹沢庭関連文献史料 3

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
61-11	安永3(1774) 5.10	五月十日 八半時過蓮池へ行。漪漣。金谷門坂下より馬場の上迄早馬、坂下門迄序道、右坂の上より蓮池門迄又早馬。乗合一段宜。何之相替儀無之事。 随分ひかへ目に乗候故歩共何れも相つゞく。馬はわり口の儘也。尤無沓也。拍子一段宜。 蓮池がん石瀧出来、中々宜。去どもはゞは宜候へども、うすく、水少。滝壷無之故、滝の音も不宜。 色々いたし見候得ども中々不出來。何れにも右之趣典膳へ申聞候様命ず。 揚地へも行。然所石橋の辺不図存付よく見候所、滝の場所有。落口に獅子の自然石有。其勢ひ誠に妙也。かゝる石有とは聊心付す。今日時節到来して人々見出候事不思議也。鳥等一切居不申。草高き事長けに余れり。水は随分よく流而、沢に菖蒲色々咲申候。 夫より又蓮池へ行、滝之様子種々無量にいたすといへども、とかく元来水うすく、夫故滝ちゞまる也。 帰城七半時頃也。	太梁公日記 [太梁公手記]		加賀藩史料 8 P973
61-12	安永3(1774) 6.1	六月朔日八半時過蓮池江行。馬野分。往来共堂形馬場通り、出口松坂門也。 蓮池滝今日懸る。甚宜。凡そか程大きなる滝はいまだ不見位也。亭茂段々出来。芝も大形ふせ、泉水は水漫々甚すゞし。柴橋も出來す。先頃泉水際熊笹の内にむじな徘徊す。尤当春鼠をねらひに参り候節茂、七瀬の滝の方を徘徊す。橋之際に穴有、出入する。然処前月廿八日手木共寄合、親一疋・子一疋都合二疋打殺令賞味候由、権左衛門申す。揚地へも行。甚薮繁り鬱然。	太梁公日記 [太梁公手記]		加賀藩史料 8 P974
61-13	寛政3(1791) 10.27	十月廿七日、年寄中江蓮池上御庭拝見被仰付、同所御馬場に而乗馬被抑付御覧。畢而於御亭御菓子・御吸物・御酒被下之。	政隣記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 10 P285
61-14	寛政4(1792) 2.21	(略)抑蓮池の地は、遠く東南より連り、連山邐々として帯の如く、西は堂形御馬場、夫より金谷に接続せり。巨木樹林陰翳し、松間に楓樹を多く生植して、大石は山上水道所々に苔むしたるが其数を知らず。泉水は南より注いで苑中に入りへ地中深く回崖峨々として高く、盤石巌石を衝ておち、瀑布の濺沫樹石を蒙ひ、鼓の如く鳴りて苑中に満てり。泉流は西南へ回旋し、竟りにまた西へ趣き、樹杪には鳥雀かけり。池には水鳥こゝかしこに浮游し、鷺鷥は渚に一足を挙げ、魚は水草に傍うて潜む。泉上には反れる石橋を施し、泉流の行ところ、或は小鳥洲渚のある所、往々橋を設けざるはなし。滝見の御亭の左右に橋あり。西に続いて八橋を擬して、また東には愛本の橋をなぞらへり。池上には別館離亭あまたあり。中に就て瀑布に当り小島あり。為に瀧見の御亭あり。凡地上険易高低あり。所々芝を敷て偏に山中のごとし。東北に当りて所謂蓮池の御馬場あり。此ほとりに清泉ありて湧出す。うしろの断崖には春艸青くして、此水中に細石を敷き、清流いさざよく潺湲として、観馬の御亭の中央に通ふ。扨その両屋に跨りて橋を設けて、地上には細砂を敷て、晶々として明かに美し。右御苑の林泉のさま、喬木樹林、或は捨石の置き所、御亭の其中にも、往昔御浄手盆には、後藤家の彫など千緒万端、その致景あげて言ふべからず。誠に瀛洲に在が如く覚ゆ。(略)	蓮池庭之図		加賀藩史料 10 P316_317
61-15*	文政 3(1820) 8.15	一、蓮池之御庭、御座所江御取込ニ付、当十八日ゟ往来指留、同日ゟ坂下御門ゟ紺屋坂御門迄往来之儀、御城方ゟ一統申渡之別紙有之事、	諸事覚書 (前田道斉)	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P132(部分)

第 39 表　蓮池庭・竹沢庭関連文献史料 4

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
61-16	文政6(1823) 3.18_19 8.15	(略)同年八月十五日 中将様御能望月被遊、御祖母様初何茂拝見被　仰付候（略） 右終て夜中ニ相成候へとも御庭拝見被　仰付候旨ニ而、年寄女中同道ニ而御庭不残拝見、迚も咄ニも申されぬ程之結構之由、扨御間ノ内も御書斎等拝見、結構之御かさり付有之、（略）	竹沢御殿御就成後奥舞台開キ御能何茂様江拝見被　仰付候一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	金沢市史資料編３　近世一 P756_763
61-17*	天保元(1830) 1.6	一、竹沢御屋敷御建物之内、(平出)寿々姫様御居間等(補)鋪理之為、御自分様へ被下候分取畳之儀、当春ニ相成取懸候筈（略）	本多政和覚書	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P162
61-18	天保元(1830) 8.27	(略) 先達而故豊後守　御城代(方)御用在役中、従(平出)　真龍院様(ゟ) 被　仰出候者、竹沢御殿新成御地面ニ御建物被　仰付、古木大木多為御伐取、且者前々より之御鎮守も御替地被　仰付、其跡ニ御建物被　仰付候様被　遊御聞、右等之趣御心懸被為　思召候、仍之御鎮守跡之御建物取払、柵ニ而も被　仰付、御地面清メ置候様被 為成度、此旨豊後守江申入候様御内意(々)被　仰出候旨(ゟ) 文政十年岡田十郎左衛門罷帰り候節、申聞候由留御座候、右被　仰出候趣等、其砌先奉達　御内聴置候哉、相しらへ候得共、相知レ不申候、幸今般御建物之内御取畳ニ付、右御ケ処、御作事奉行詮義仕候処、別紙絵図面御式台辺懸紙仕指出候付、奉入御覧候、先只今之所、縄張為仕置、畢竟柵ニ而も可被　仰付哉、奉窺候、猶更被　仰出次第奉心得候、 以上、 別紙之分、都而写無之候、以下同、 (天保元年) 庚寅八月廿七日　(隆章・年寄)横山山城守	奥村栄通御城方留帳	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	石金研 2016b P129_130
61-19*	天保8(1837) 6.14	一、竹沢御屋敷御書斎先より参り候水源水道付替（略）但、内御庭入口兼六御門ニ而刀を取為持、内御庭ハ脇指迄ニ而相廻候振之事	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P149_150
61-20*	天保8(1837) 8.2	(略)竹沢御屋敷御書斎上之方御泉水縄張之通堀(掘)足(略)	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P164
61-21*	天保8(1837) 9.24	一、竹沢兼六御門辺之栗、御露地より指出、御台所申談、御認見届、明日金龍院様御牌前へ御備ニ付、木村へ引渡ス、	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P150
61-22*	天保9(1838) 閏4.29	一、竹沢幷蓮池御庭御仕法替ニ付、今(日脱)左之通夫々申渡 竹沢幷蓮池御庭之義、是迄御露地方手合相成居候処、　真龍院様御国江被為入候付、思召被為在候間、当分御次江御引揚被　仰付候旨被　仰出候条、得其意、尤御鎮守御用之義、幷御鎮守辺御掃除等之儀ハ、只今迄之通可被相心得候事 戊閏四月 右三十人頭柳惣兵衛呼立相渡ス、	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P215 加賀藩史料14 P909
61-23*	天保10(1839) 7.4	一、今日九ツ時過之御供揃ニ而、蓮池御縮内江可被遊御出旨被仰出、御近習頭江申談候事、但、竹沢御庭之さゝい山御好ニ而築足シ被仰付、御堀も広かり、右いたゝきニ三重之塔被仰付候分、先日より取懸罷在、今日第一番之笠石すへ候ニ付、竹沢御二階ゟ御見物之為、御広式向より御出之御様子也、	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料15 P59

第 40 表　蓮池庭・竹沢庭関連文献史料 5

No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
61-24	天保11(1840) 10.26	一、御間之内入候上、鏡之御間続九畳敷之内ニへリ取敷、其内ニ溜有之、其処へ御作事奉行等御挨拶ニ出ル、夫より右奉行先立ニ而御間々々御書斎御二階 等、夫々見分了而御書斎先より御庭へ出、サヽイ山・山崎山等夫々見分相済、如元御書斎先より内へ入、溜りへ引取候事、 但、サヽイ山塔之前、小石敷有之処ハ草り用候事無用、素足ニ而上り可申候事、	村井長貞日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2016b P153
61-25	天保12(1841) 3.25	京都山本安房介義　御殿内御間、暨竹沢御庭内拝見仕度旨御広式頭ヲ以相願候ニ付、御間分義ハ、今日 拝見被　仰付候得共、竹沢御庭之義ハ、当時御手[(入もカ)]無之、見苦敷相成居候趣申入、為相断候得共、再往強而相願候ニ付、明廿六日拝見可被　仰付旨被　仰出候間、此段一往御達申候旨坂井小左衛門申聞候事、	村井長貞日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2016b P176
61-26	弘化元(1844) 12	一、竹沢御屋敷之内、御取畳之儀、被　仰出、則御作事奉行へ申談置候処、御表御居間并御休息之御間等、御次暨御舞台懸紙を以、相伺候ニ付、則夫々奉伺候処、御取畳、今度之御普請ニ可被相用旨、御舞台檜木類者、仕抹致置候様被　仰出、其段申談、左之図取、岡田江相渡、竹沢御屋敷御休息之御間、御表御居間廻り、同御三之間、奥御舞台、別紙御画図面ニ懸紙を以、被申聞候ケ所、御取毀被　仰付、右木品等、今般御座所御補理御用ニ相立可申、右御舞台檜木類・御欄間等ハ仕抹いたし置、尤野物等者、是又今度之御用ニ差加候様、被　仰出候条、可被得其意候事、 十二月　　岡田隼人江	世子御座所普請方御用主附一件	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	石金研 2014b P77
61-27*	弘化4(1847) 11.19	一、竹沢御庭内御城江取入御用水大桝居替之義、御城方ニ而僉議有之、遠藤七兵衛等手合御作事与申談出来ニ付、右ケ所致見分候義有之(略)	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P202
61-28*	嘉永4(1851) 9.4	(略)竹沢内御庭今度御建物御取畳、御亭迄御残ニ付、以来外御庭同様ニ相心得候様被　仰出候旨申談有之、右之趣御庭方へも申談候様、御城方与力を以被仰聞候由、右之趣ニ付、是迄兼六園御門より内、帯刀・高足も不相成候へ共、以来不指支、蓮池御庭内同様ニ相成候由之事、	成瀬正敦日記	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P151 加賀藩史料 藩末篇上巻 P303
61-29*	嘉永4(1851) 11.27	一、今日退出、蓮池御庭へ罷越、金城霊沢之碑石岩窟之内へ建候所、出来見分いたし候事、	成瀬正敦日記 (近敦日記)	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 藩末篇上巻 P320
61-30	嘉永5(1852) 4-5	四月二十四日より二十八日迄竹沢御鎮守御神事、御家老以上幷に御次廻り拝礼有之由。二十七日・二十九日・晦日・五月朔日・二日御家中幷町方男女拝礼不指支。但男子は拾五歳以下也。御触渡有之。若年寄中御次廻りは子弟も願に而有之由。 四月二十七日天気宜、竹沢御鎮守拝参人多、蓮池御庭も拝見出来、貴賤群集のよし。二十九日・晦日は雨に而、晦日昼後少晴、蓮池御庭江拝見出来候よしなれ共、高足にては入不申に付、何れもすあしにて入候由也。	文慶雑録	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	加賀藩史料 藩末篇上巻 P351_352
61-31	嘉永6(1853) 3.晦日	一、今昼八半時之御供揃に而、竹沢御庭内に而御小将頭等備押等御覧被遊候に付、昼八時過御用番之外御城より直為見物被罷出。 (略)	官事拙筆	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫 (加越能文庫に写本あり)	加賀藩史料 藩末篇上巻 P484

第 41 表　蓮池庭・竹沢庭関連文献史料 6

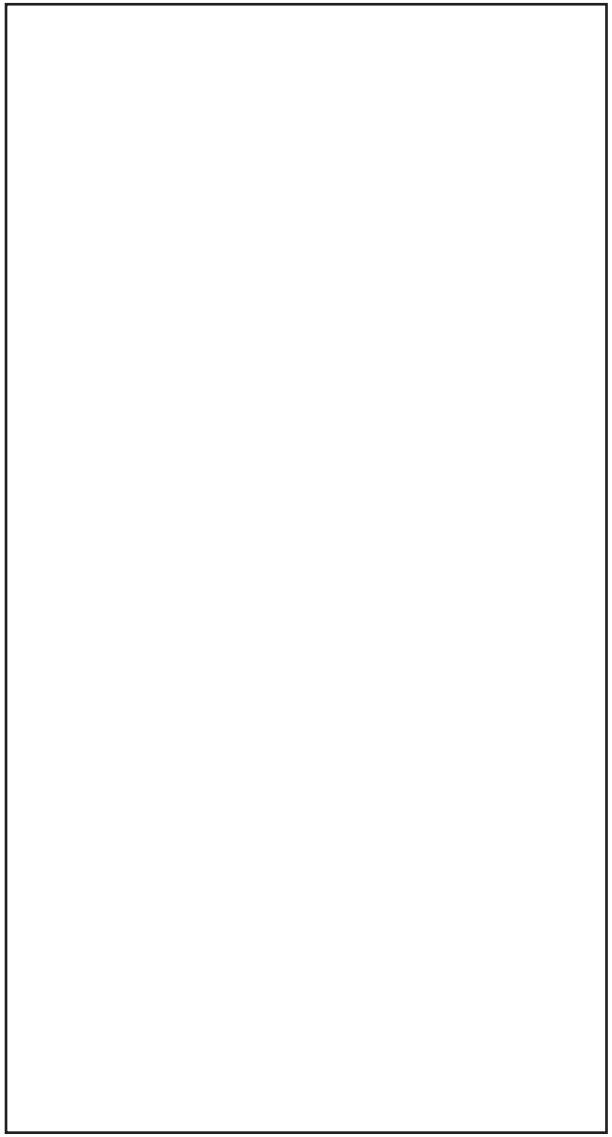
No.	年紀	内容抄	史料・文書名	所蔵	収載刊行物
61-32*	嘉永5(1852) 5.16	(略)堀脇御門之方より竹沢御庭内江入候、内御庭之処 (川カ) ゟ自分義、先江立罷越、御庭方小笠原恒三・北村彦 御城方之四人 七も出居、跡ゟ参り、尤与力共も不残召連候、足軽 則　内作事奉行山東長太郎出居候 先立いたし御庭内御畑等、且御書斎之外御取畳ニ成 ミ 内外　鶴一羽居候 候故、右ケ処見分、其外御亭・御庭内処々相廻り、 右御書斎御亭ニ而者刀取、御間之内も見分、夫ゟ蓮 戻道さゝい山 池御庭御物見等も同断(略)	官事拙筆	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	長山2006b P178
61-33*	安政6(1859) 3.12	一、竹沢御庭内先達而ゟ御好ニ而山懸御泉水等被仰 付、反橋茂二ケ処出来、一ケ処ハ未成就無之、から 堀ニ成居候へ共(略)	御用方手留	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	長山2006b P182 加賀藩史料 藩末篇上巻 1042_1043
61-34*	安政6(1859) 6.18	一、御城方二而遠江守相伺候、退出ゟ直竹沢御庭内 今度御長屋等土塀御取払ニ相成候ケ処、与力共も 召連見分、其節同処御庭方与力西谷大蔵等も出、 夫々相済、昼八時過罷帰候事、(略)	御用方手留	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	長山2006b P182(一部)
61-35*	万延元(1860) 11.4	一、昨日退出ゟ直、今度蓮池御門御長屋等出来ニ付、 与力共も召連見分、其節御作事奉行之内場附御横 目・御大工頭等も出居候、無程直ニ帰宅、右之趣今 日書立ニいたし以左膳等達御聴置候事、 　但、竹沢御庭内兼六園御長屋今度御取畳、蓮池 御門之処江御移替ニ相成、右額も相懸り候、委曲ハ 略之事、	御用方手留	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	加賀藩史料 藩末篇上巻 P1140 長山2006b P151_152
61-36*	文久3(1863) 8.2(8.14)	(略)真龍院様御居住処竹沢御屋敷内に就被仰付候、 タツミ 是以後巽御殿与相唱候様被仰出候、此段一統可被 申聞旨被仰出候、　八月 *八月十四日に移徙	御用方手留	金沢市立 玉川図書館 奥村文庫	加賀藩史料 藩末篇上巻 P1449
61-37*	慶応2(1866) 9.22	各望次第、竹沢御庭拝見被　仰付、右ハ象等為御 幸ニ付而被　仰出候よし也	御能拝見等御鷹 野等御出「毎日 帳書抜」	金沢市立 玉川図書館 加越能文庫	長山2006b P237
61-38	慶応2(1866) 9	金谷外御庭御馬見所御取畳之木品等、竹沢御庭内江 持運、且同所御庭内ニ有之候積石取出候ニ付、棟梁断 次第、竹林御門往来方不指支様、竹沢御庭方江急速 被仰渡可被下候之事、 寅九月　　御作事所	金谷御殿御普請 諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研2013 P176
61-39	慶応3(1867) 5	巽　御殿続山崎山辺ニ御腰掛壱ケ所相建候様被　仰 出候段、赤井伝右衛門申談候ニ付、別紙絵図面朱引之 通相建可申候間、此段御達申候、且御庭方江茂不指支 様可被仰渡候事、 卯五月　　御作事所 御城方	金谷御殿御普請 諸事留	金沢市立 玉川図書館 清水文庫	石金研2013 P210
61-40	明治2(1869) 1.15	(平出) 真龍院様御齢八十有余ニ被為至候ニ付、今日従 (十四代慶寧) 宰相様御賀被為　献、(略)先四ツ時頃ゟ御庭拝見被 仰仰付、　御医者中江先案内被　仰付、始め山崎山・ 氷室、夫ゟ相生松・陰陽石・流川之両岸奇石、或ハ燈 籠等、石橋・板橋数多ク、夫ゟ御池水之中嶋之風景、 御船小屋ノ内ニ御坐船等三艘有之、蓮池御亭ノ御飾 付、夕顔ノ御亭御釜之煮音・御花・御花器・御置物之 結構申迄も無之、殊ニ御亭之御庭之瀧ノ水、実も三国 無双とや申へき、(略)	御能御囃子組扣 帳	金沢市立 玉川図書館 藤本文庫	長山・西村 2005 P163_166
61-41	明治4(1871) 2	中学東校内、元蓮池御庭与楽園与改称、四民偕楽 之旨趣を以、以来左之通拝見日被取極候条、右日限 誰々に不寄、同所遊覧之儀不指支候事。(略)	触留		加賀藩史料 藩末篇下巻 1276_1277

第 42 表　蓮池庭・竹沢庭関連絵図史料 1

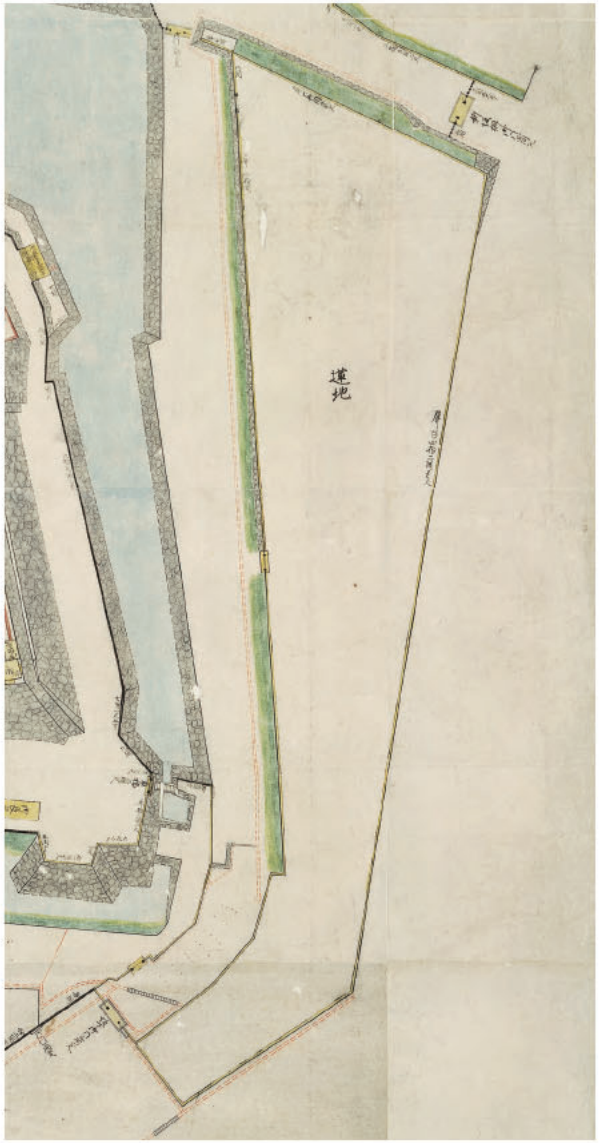
図	No.	題名	所蔵者等	請求番号等	作成年次	内容時期等		
144	62-01	金沢城内絵図	滋賀県立安土城考古博物館			蓮Ⅰ		金沢城全域図　万治２～延宝４年（1659～76 年）頃
144	62-02	金沢城絵図	石川県立歴史博物館	2-18-2 1613		Ⅱ		金沢城全域図　延宝４～元禄年間（1676～1704）頃
145	62-03	金沢城絵図	石川県立歴史博物館 竹下家文書			Ⅱ		金沢城全域図 元禄元年（1688）以後 D類
145	62-04	金沢城中地割絵図（蓮池庭）	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-12 ⑦		Ⅱ～Ⅲ		金沢城全域図（組図） 宝暦９年（1759）大火以前
144	62-05	金沢城御殿絵図	金沢市立玉川図書館 清水文庫	18.6-34		Ⅲ		金沢城全域図 宝暦５年（1755）頃
146	62-06	金沢城類焼後御普請等被仰付候絵図	金沢市立玉川図書館 加越能文庫	16.18-19		Ⅲ		宝暦大火後、焼失場所朱書
145	62-07	兼六園蓮池庭之絵図額	石川県立歴史博物館	2-18-2 1819	寛政４年（1792）作成　同 11 年（1799）補足	Ⅳ		絵画
146	62-08	金沢城内絵図	石黒信二氏			Ⅳ		金沢城全域図 文化７～13 年（1810～16）頃
146	62-09	竹沢御殿絵図	金沢市立玉川図書館 郷土資料	090-1517		Ⅳ		蓮池・竹沢全体図 文政２～５年（1819～22）頃
147	62-10	学校御絵図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大 1132		Ⅳ	竹Ⅰ	寛政～文政期
147	62-11	明倫堂・講武館等之図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大 1131	寛政６年（1794）	Ⅳ	Ⅰ	
148	62-12	竹沢御殿御引移前総囲絵図	金沢市立玉川図書館 清水文庫	18.6-54		Ⅴ	Ⅱ	蓮池・竹沢全体図 文政５～６年（1822～23）頃
148	62-13	竹沢御殿之図	石川県金沢城・兼六園管理事務所			Ⅴ	Ⅱ	蓮池・竹沢全体図 文政５～６年（1822～23）頃
－	62-14	竹沢御殿絵図	石川県立歴史博物館 村松コレクション	村松コレクション C		Ⅴ	Ⅱ	蓮池・竹沢全体図 文政５～６年（1822～23）頃
－	62-15	竹沢御屋敷総絵図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大 1127		Ⅴ	Ⅱ	竹沢御殿部分 文政５～６年（1822～23）頃 ただし他図との差異大きい
149	62-16	金沢御城内外御建物絵図 （蓮池滝見之御亭辺 蓮池御物見辺 蓮池高之御亭辺 竹沢御屋敷御馬場辺 竹沢御屋敷辰巳御門辺 竹沢御屋敷栄螺山辺 竹沢御屋敷御鎮守辺 竹沢御屋敷御間之内等）	（公財）前田育徳会			Ⅵ 1	Ⅲ 1	金沢城全域図（41 枚組図） 天保４～９年（1833～38）頃 ＊栄螺山の描写から、天保８～９年（1837～38）の可能性高い

第 43 表　蓮池庭・竹沢庭関連絵図史料２

図	No.	題名	所蔵者等	請求番号等	作成年次	内容時期等		
149	62-17	竹沢御殿絵図	真柄建設株式会社			Ⅵ1	Ⅲ1	蓮池・竹沢全体図 天保12年(1841)以前か
150 156	62-18	竹沢并蓮池御庭御囲之図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大1129		Ⅵ2	Ⅲ2	蓮池・竹沢全体図 天保10～弘化元年(1839～44)頃
150	62-19	竹沢御殿・兼六園並御鎮守古絵図(竹沢御殿・兼六園)	金沢市立玉川図書館 郷土資料	090-610①		Ⅵ2	Ⅲ2	蓮池・竹沢全体図 天保10～弘化元年(1839～44)頃
151	62-20	御城分間御絵図	(公財)前田育徳会		嘉永３年(1850)	Ⅵ3	Ⅲ3	金沢城全域図 嘉永元年～３年(1848～50)
151 156	62-21	竹沢御屋敷総絵図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大1126	安政３年(1856)	Ⅵ4	Ⅲ4	蓮池・竹沢全体図
152	62-22	兼六園古図(蓮池庭図)	金沢市立玉川図書館 向家文書	090-1025		Ⅵ	Ⅲ	蓮池堀側から兼六園を望んだ景観を描写
153	62-23	巽御殿之図	石川県立図書館	K520-9		Ⅶ	Ⅳ	蓮池・竹沢全体図 文久３年(1863)頃
153	62-24	兼六園図	金沢市立玉川図書館 大友文庫	大1133		Ⅶ	Ⅳ	蓮池・竹沢全体図 文久３～明治４年(1863～71)頃
154 155	62-25	兼六園絵巻	石川県立歴史博物館	1-5　6		Ⅶ	Ⅳ	文久３年(1863)以後
155	62-26	巽御殿絵巻	石川県立歴史博物館	1-5　6	文久３年(1863)	Ⅶ	Ⅳ	
198	62-27	辰巳旧園新造客殿図	金沢市立玉川図書館 泉景文庫	24.2-6		Ⅶ	Ⅳ以後	鉱山学所教師デッケンの住居を描いたもの 明治４年(1871)以後



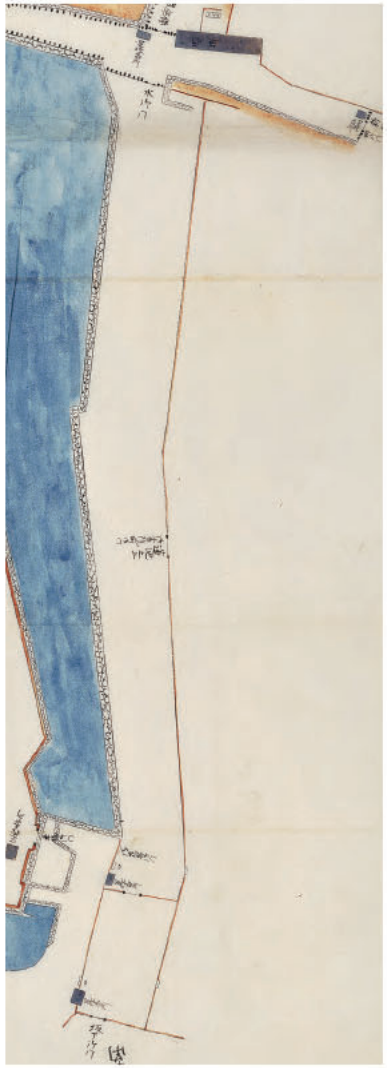
金沢城内絵図［滋賀県立安土城考古博物館蔵］62-01
蓮池庭Ⅰ



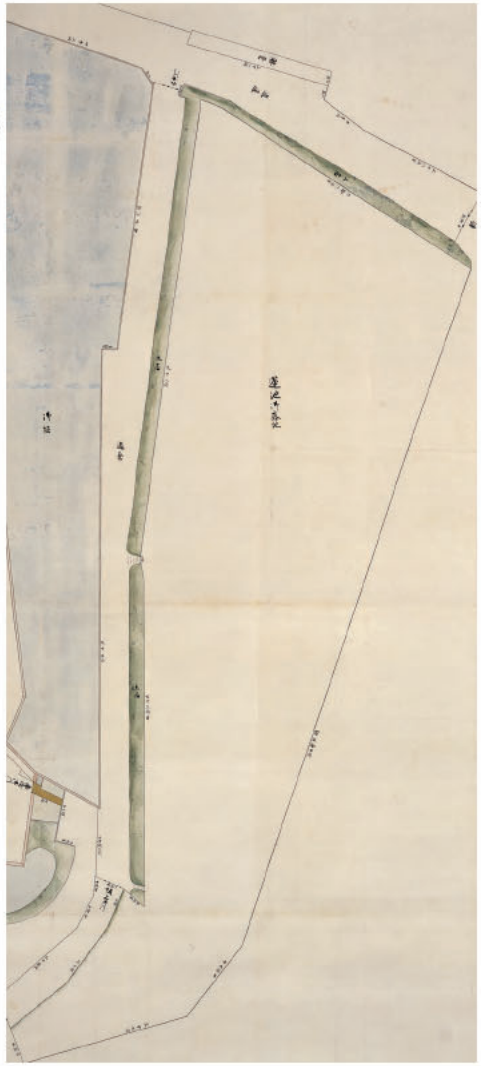
金沢城絵図［石川県立歴史博物館蔵］62-02　蓮池庭Ⅱ

金沢城御殿絵図［金沢市立玉川図書館蔵］62-05
蓮池庭Ⅲ

第 144 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 1

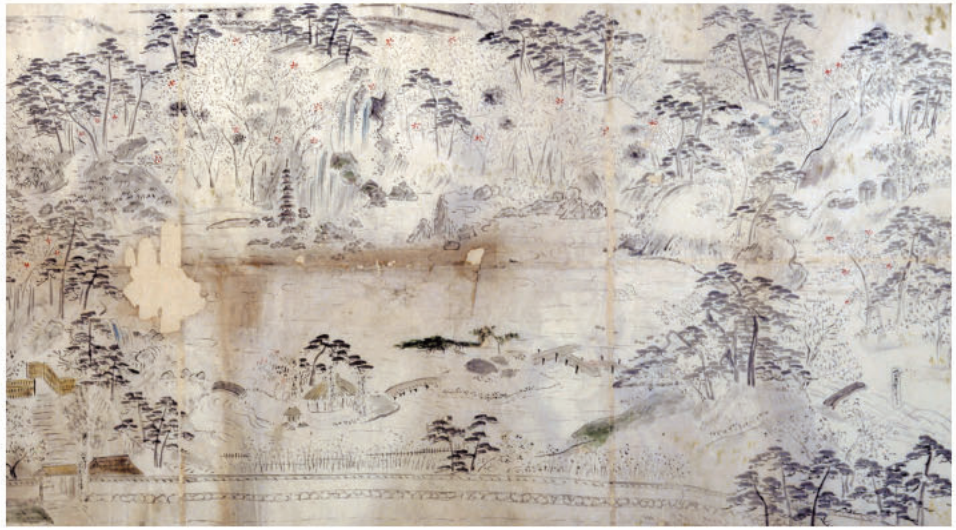


金沢城絵図
［石川県立歴史博物館蔵］
62-03　蓮池庭Ⅱ



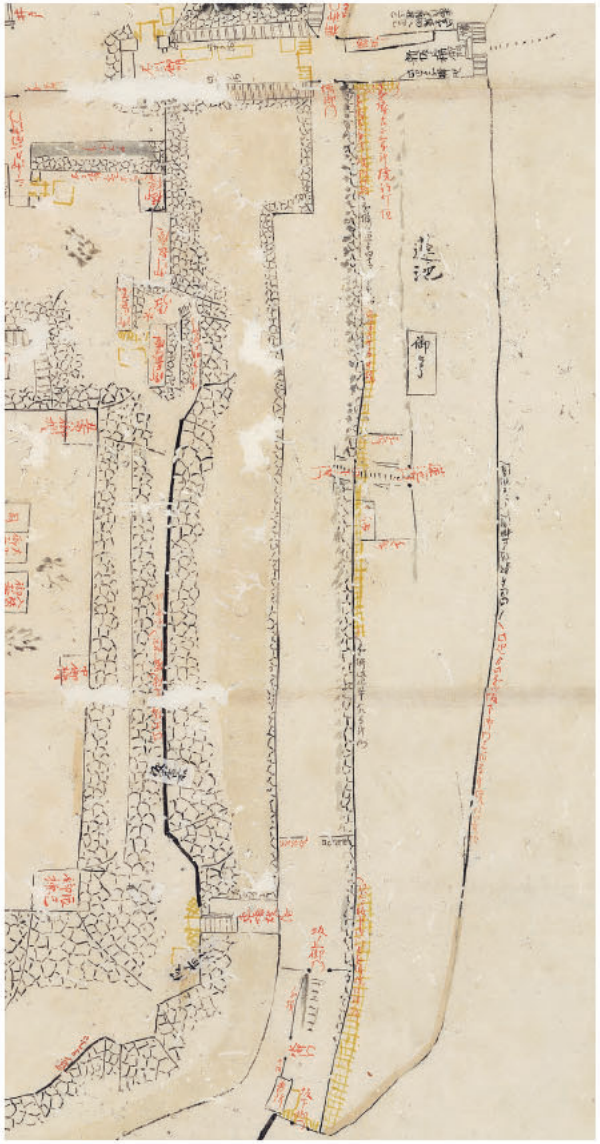
金沢城中地割絵図（蓮池庭）
［金沢市立玉川図書館蔵］
62-04　蓮池庭Ⅱ～Ⅲ

兼六園蓮池庭之絵図額［石川県立歴史博物館蔵］62-07　蓮池庭Ⅳ

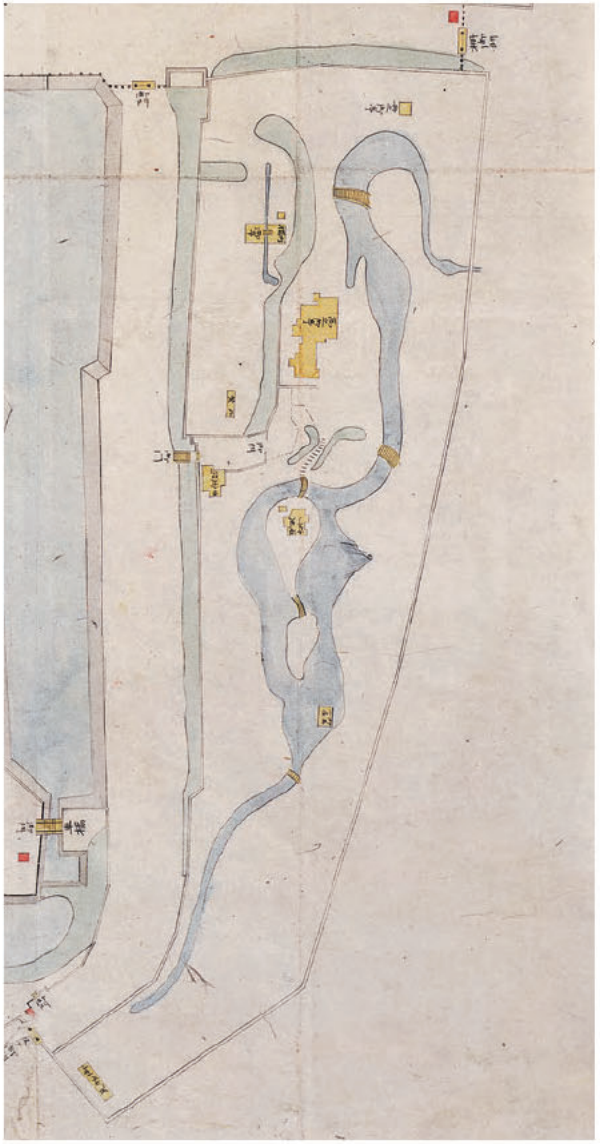


兼六園蓮池庭之絵図額［石川県立歴史博物館蔵］62-07　蓮池庭Ⅳ

第 145 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 2



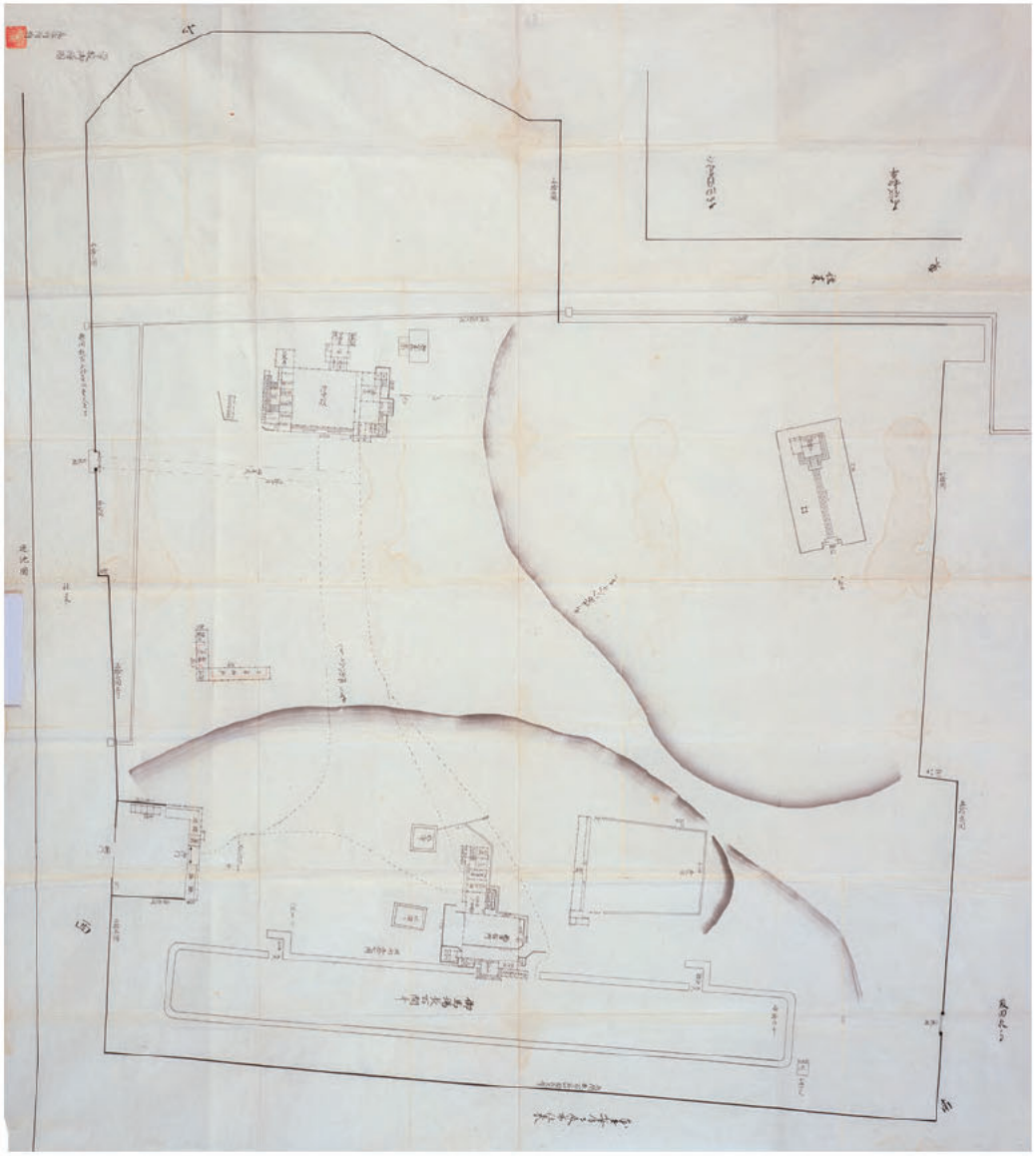
金沢城類焼後御普請等被仰付候絵図
［金沢市立玉川図書館蔵］62-06　蓮池庭Ⅲ



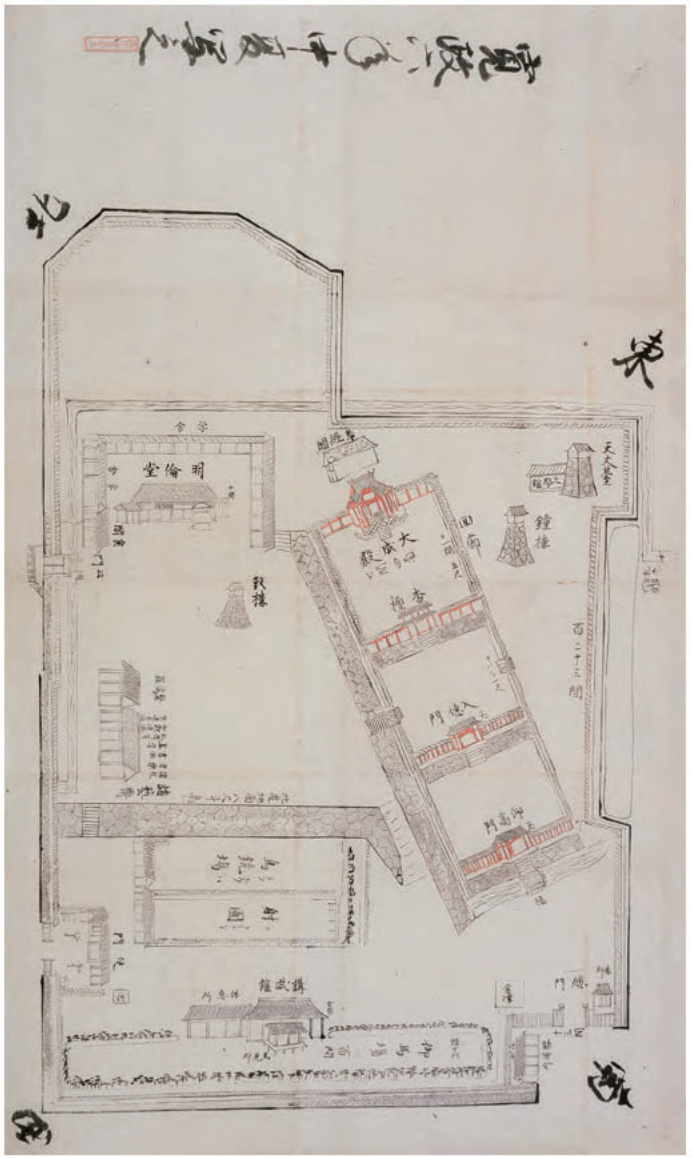
金沢城内絵図［石黒信二氏蔵］62-08　蓮池庭Ⅳ

竹沢御殿絵図［金沢市立玉川図書館蔵］62-09
蓮池庭Ⅳ

第 146 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 3

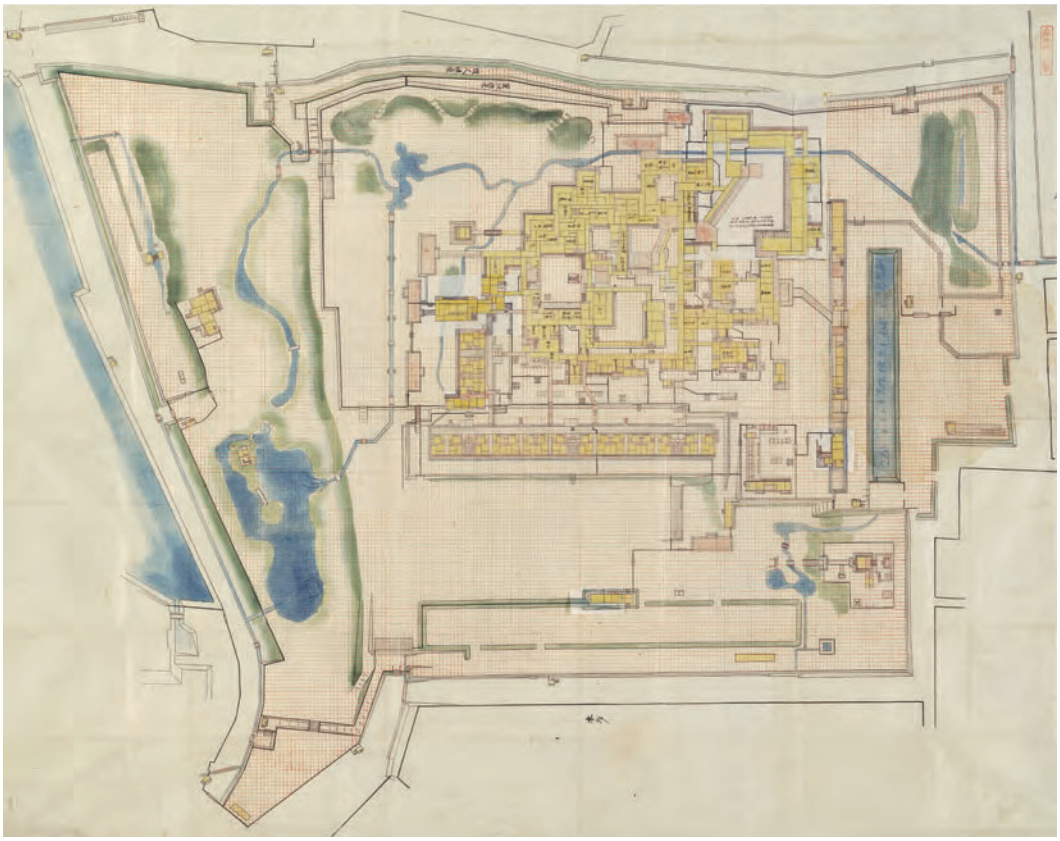


学校御絵図［金沢市立玉川図書館蔵］62-10　竹沢庭Ⅰ

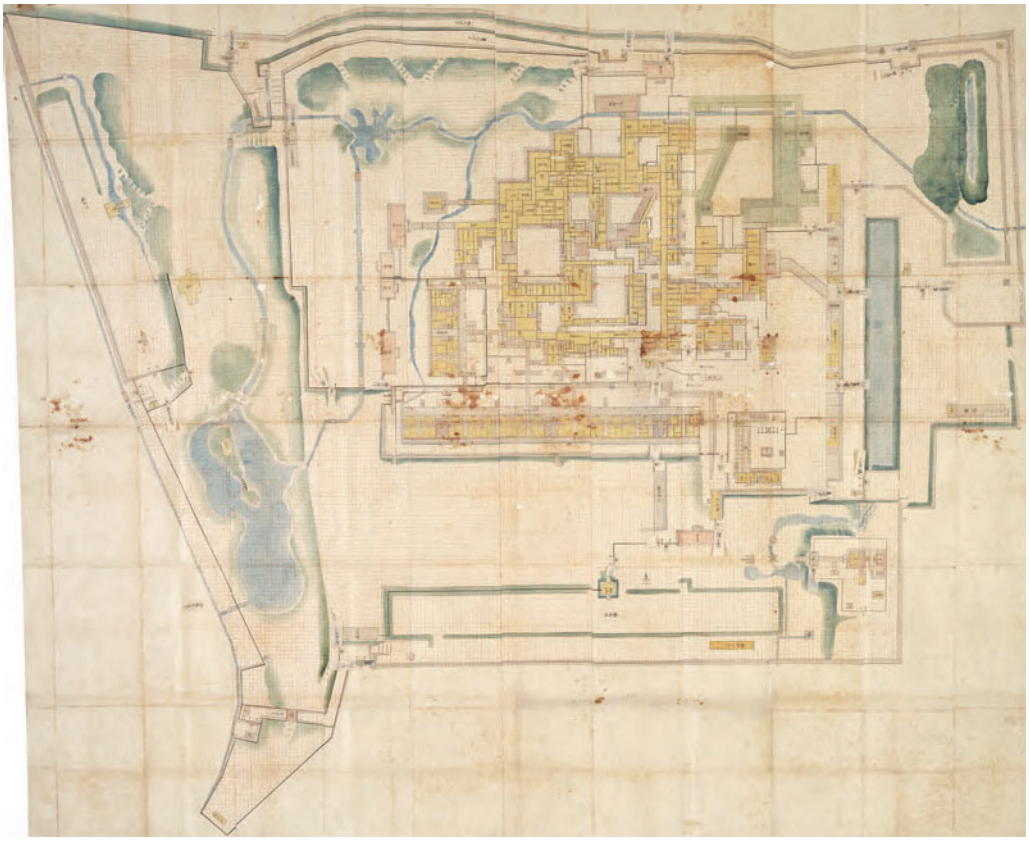


明倫堂・講武館等之図［金沢市立玉川図書館蔵］62-11　竹沢庭Ⅰ

第 147 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 4



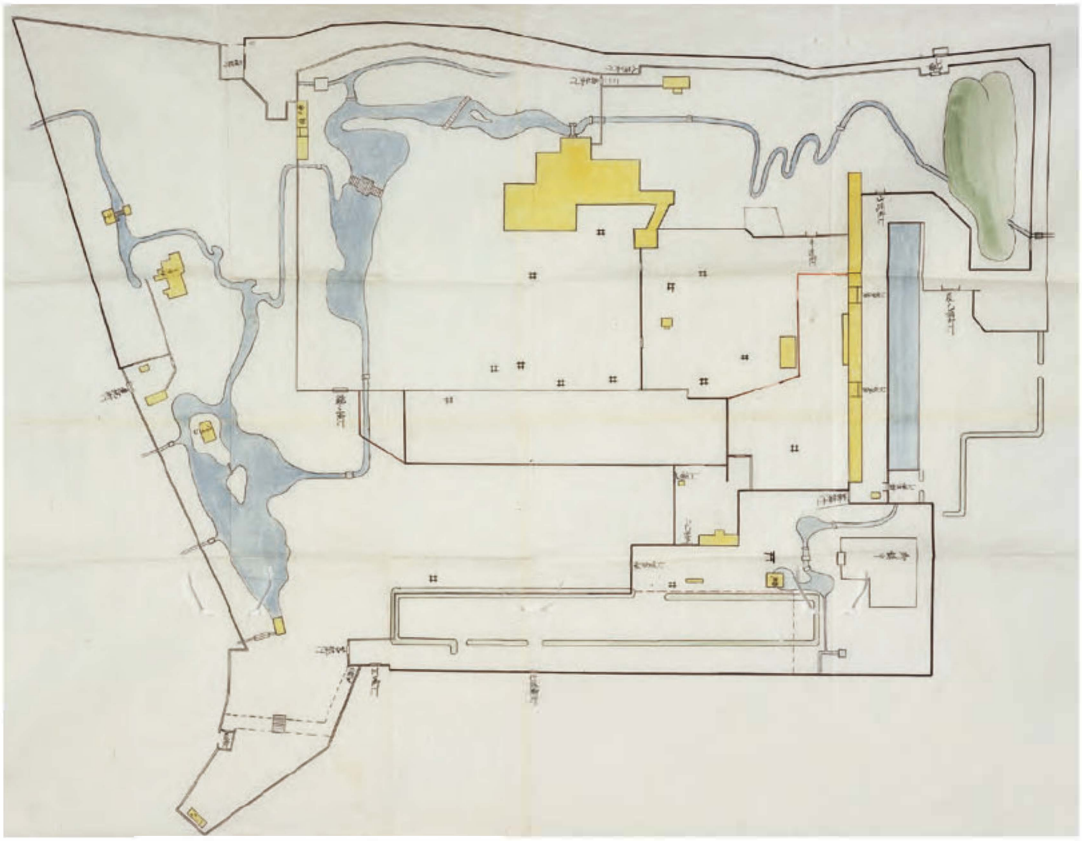
竹沢御殿御引移前総囲絵図［金沢市立玉川図書館蔵］62-12　蓮池庭Ⅴ　竹沢庭Ⅱ



竹沢御殿之図［石川県金沢城・兼六園管理事務所蔵］62-13　蓮池庭Ⅴ　竹沢庭Ⅱ

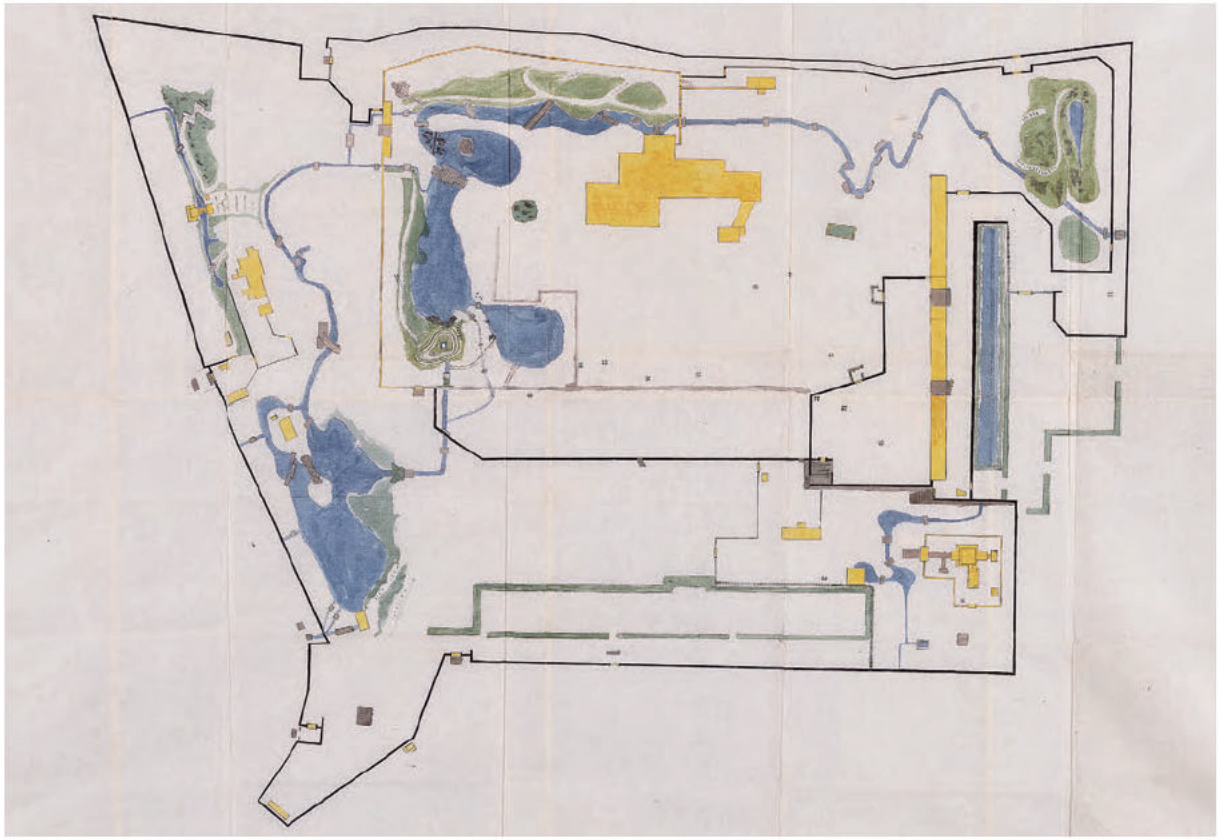
第 148 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図５

金沢御城内外御建物絵図（蓮池滝見之御亭辺　蓮池御物見辺　蓮池高之御亭辺　竹沢御屋敷御馬場辺　竹沢御屋敷辰巳御門辺　竹沢御屋敷栄螺山辺　竹沢御屋敷御鎮守辺　竹沢御屋敷御間之内等）　［（公財）前田育徳会蔵］62-16　蓮池庭Ⅵ１　竹沢庭Ⅲ１



竹沢御殿絵図［真柄建設株式会社蔵］62-17　蓮池庭Ⅵ１　竹沢庭Ⅲ１

第149図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図６

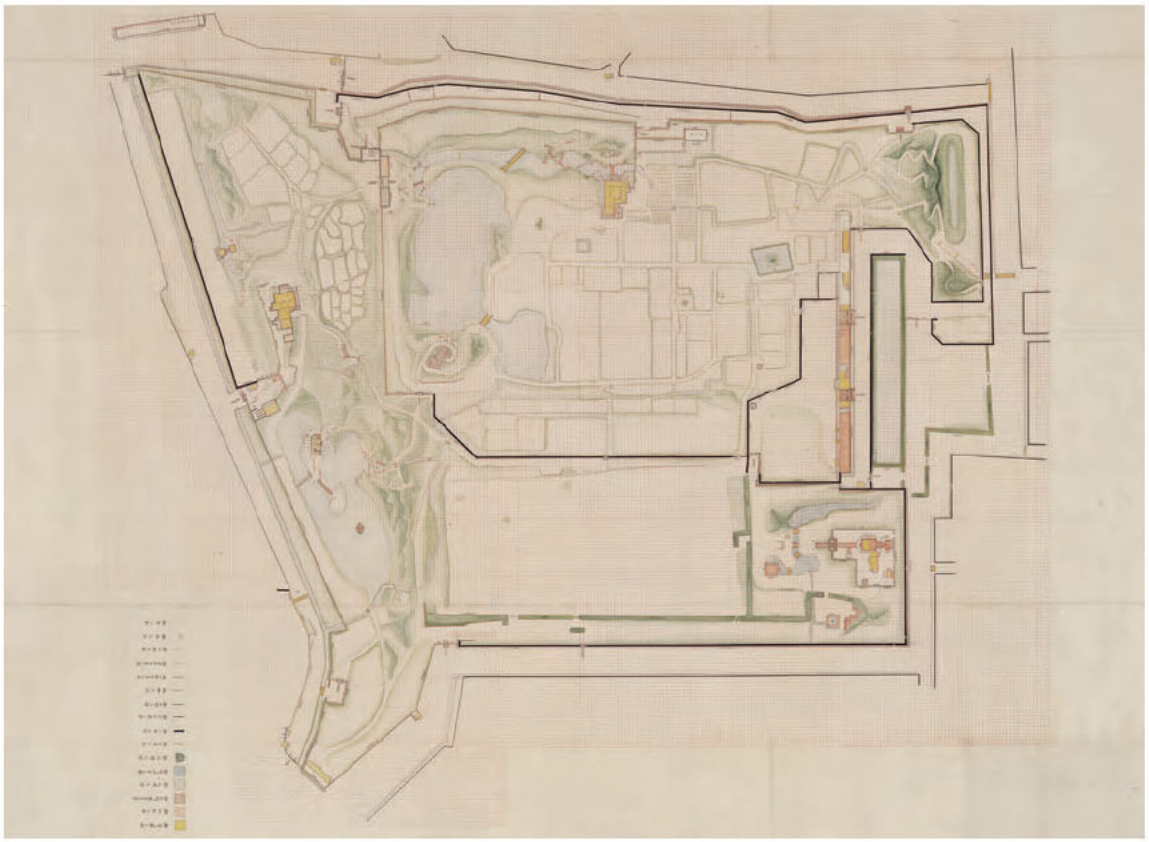


竹沢并蓮池御庭御囲之図［金沢市立玉川図書館蔵］62-18　蓮池庭Ⅵ２　竹沢庭Ⅲ２

竹沢御殿・兼六園並御鎮守古絵図（竹沢御殿・兼六園）［金沢市立玉川図書館蔵］62-19　蓮池庭Ⅵ２　竹沢庭Ⅲ２

第 150 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 7

御城分間御絵図［（公財）前田育徳会蔵］62-20　蓮池庭Ⅵ３　竹沢庭Ⅲ３



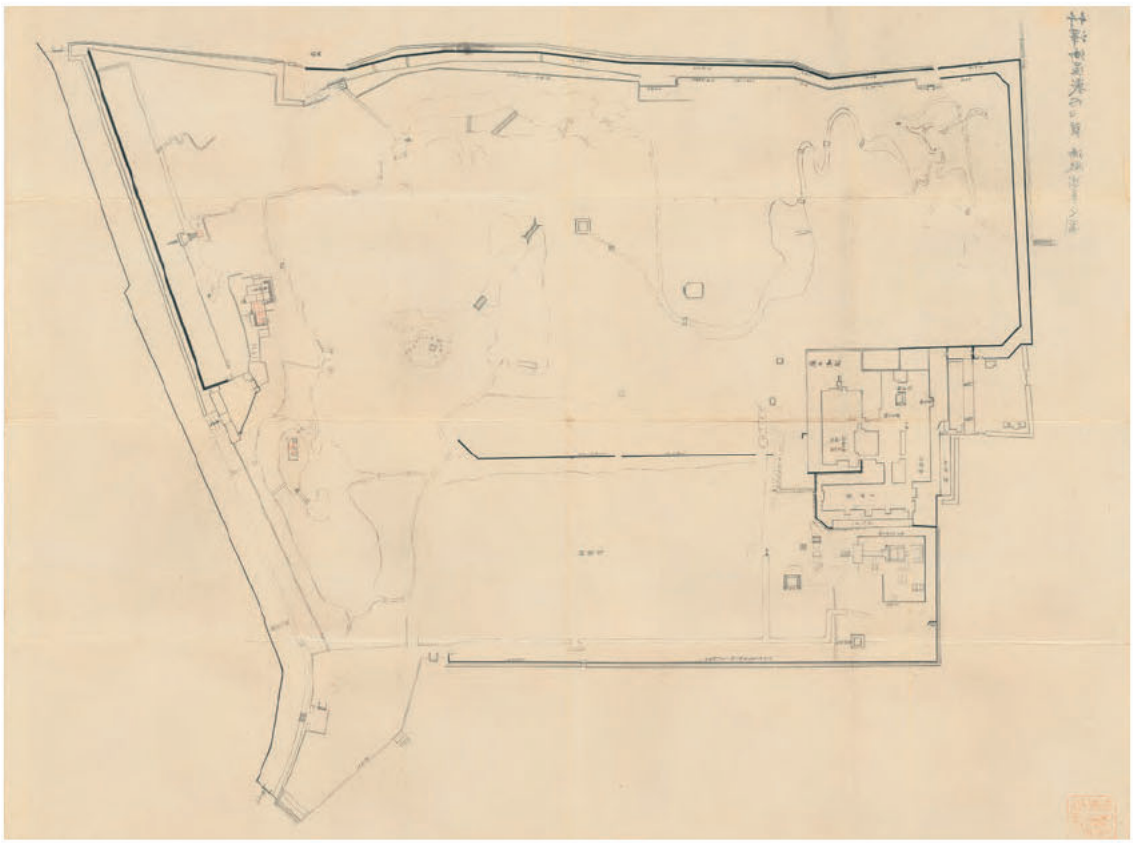
竹沢御屋敷総絵図［金沢市立玉川図書館蔵］62-21　蓮池庭Ⅵ４　竹沢庭Ⅲ４

第 151 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図８

兼六園古図（蓮池庭図）［金沢市立玉川図書館蔵］62-22　蓮池庭Ⅵ 竹沢庭Ⅲ

兼六園古図（蓮池庭図）［金沢市立玉川図書館蔵］62-22　蓮池庭Ⅵ 竹沢庭Ⅲ

第 152 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 9



巽御殿之図［石川県立図書館蔵］62-23　蓮池庭Ⅶ 竹沢庭Ⅳ

兼六園図［金沢市立玉川図書館蔵］62-24　蓮池庭Ⅶ 竹沢庭Ⅳ

第 153 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 10

兼六園絵巻［石川県立歴史博物館蔵］62-25　蓮池庭Ⅶ 竹沢庭Ⅳ

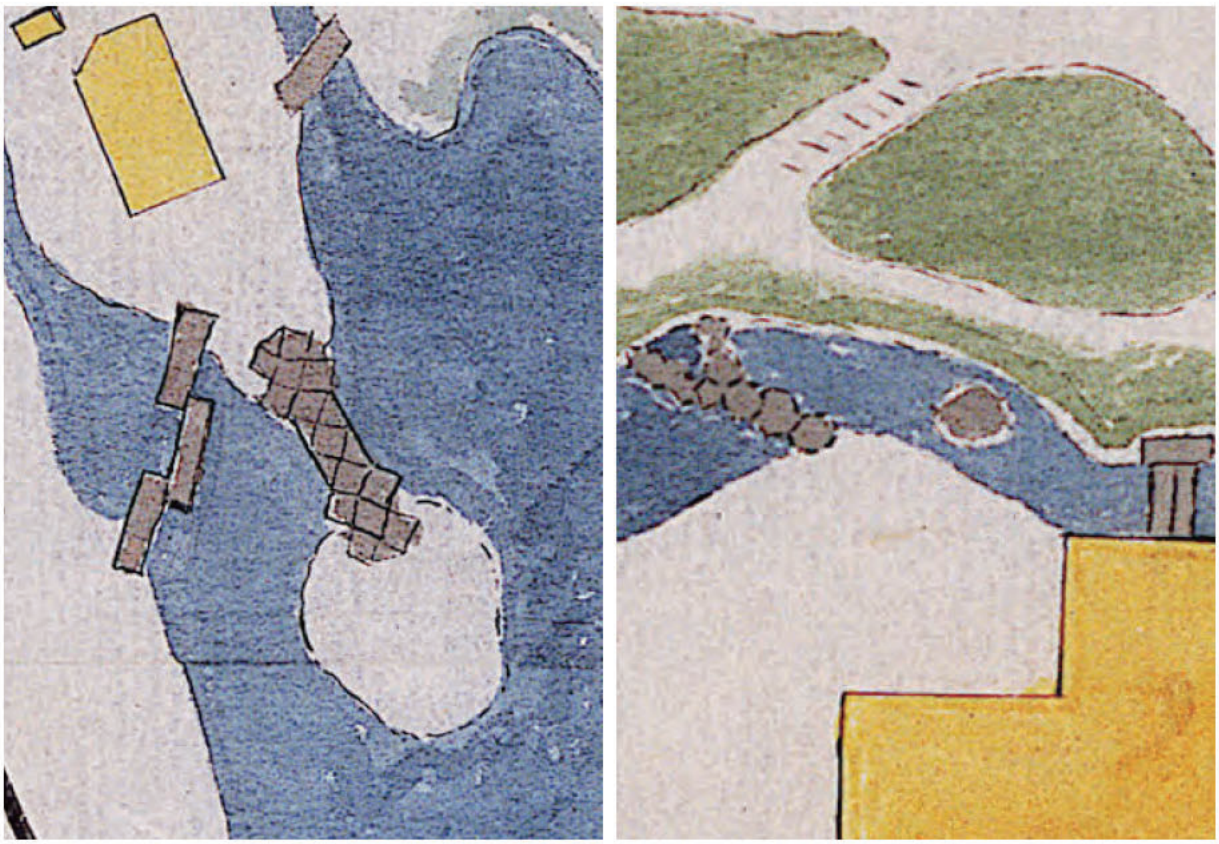
兼六園絵巻［石川県立歴史博物館蔵］62-25　蓮池庭Ⅶ 竹沢庭Ⅳ

第 154 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 11

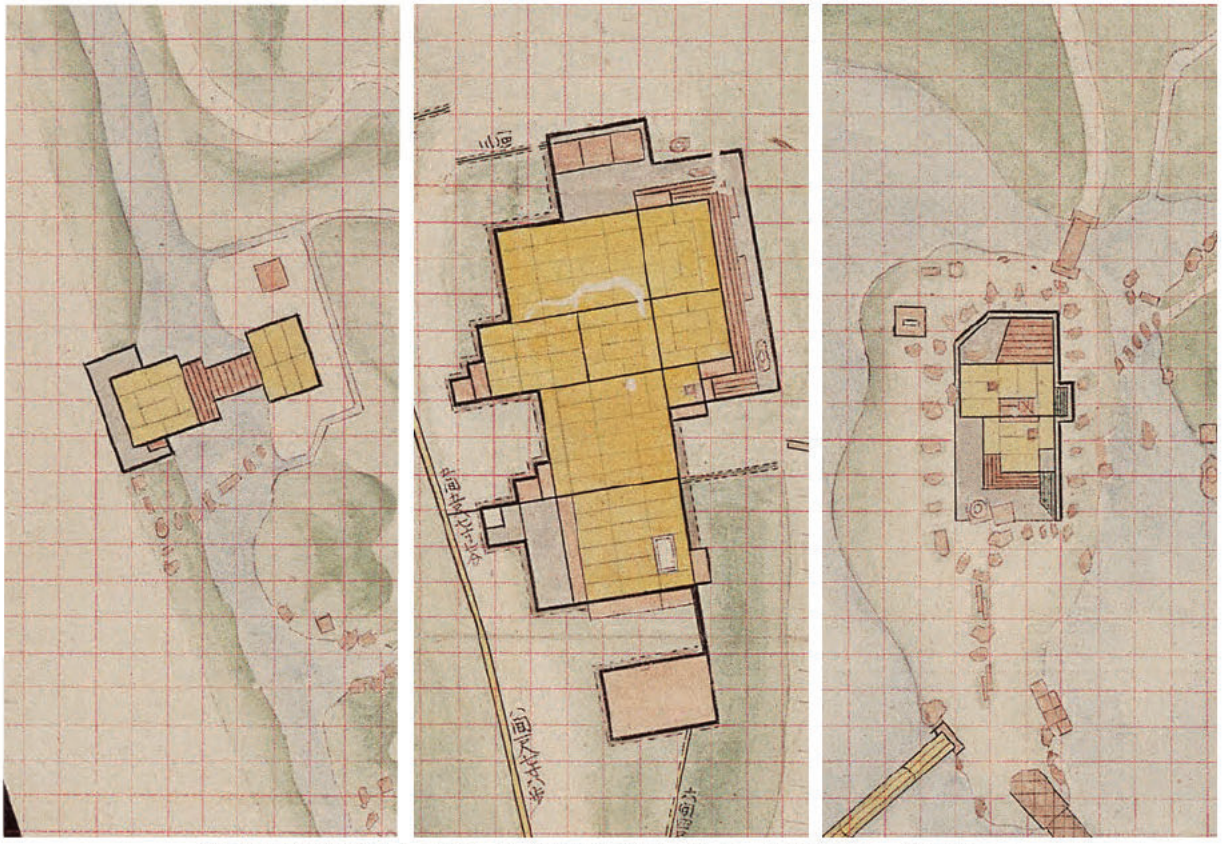
兼六園絵巻［石川県立歴史博物館蔵］62-25　蓮池庭Ⅶ 竹沢庭Ⅳ

巽御殿絵巻［石川県立歴史博物館蔵］62-26　蓮池庭Ⅶ 竹沢庭Ⅳ

第 155 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 12



竹沢并蓮池御庭御囲之図［金沢市立玉川図書館蔵］62-18　蓮池庭Ⅵ２　竹沢庭Ⅲ２
日暮橋　雁行橋（亀甲橋）　雪見橋



竹沢御屋敷総絵図［金沢市立玉川図書館蔵］62-21　蓮池庭Ⅵ４　竹沢庭Ⅲ４
内橋亭　高之亭　滝見亭（夕顔亭）

第 156 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）絵図 13

第 44 表　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）主要構成要素名称

近代以後					藩政期		
兼六園全史	金沢兼六公園之図	金城勝覧図誌	兼六公園誌	金沢公園名所略図	兼六園絵巻	御城分間御絵図	その他
1976(昭和51)	1905(明治38)	1894(明治27)	1894(明治27)	1886(明治19)		1850(嘉永3)	
真弓坂			真弓坂				
瓢池 蓮池		蓮池	瓢池				
翠滝	翠瀑	松蔭瀧 紅葉滝	翠瀑 松蔭瀑				七瀬滝*a
日暮橋		日暮橋					
夕顔亭	夕顔亭	夕顔亭	夕顔亭 瓢庵、観瀑亭		夕顔御亭	滝見御亭	中島御亭 *a ゆふかほの御亭、瀧見の御ちん*b
海石塔		海石塔	海石塔				
手水鉢 （伯牙断琴）		李白手水鉢	邯鄲手水鉢				
竹根石手水鉢		竹根石	竹石手水鉢				
蓮池門						蓮池御門	
獅子巌	獅石	獅子巌	獅子巌	獅子石			獅子ノ自然石*a
黄門橋 高門橋	黄門橋	高門橋 黄門橋	黄門橋				
	新清水			旧金沢池			
高之御亭 時雨亭	高之亭	高之亭	時雨亭 高之亭		蓮池御亭	高之御亭	
噴水	吹上		噴泉	吹上水			
内橋亭 鯰之亭	水亭	内橋亭 鯰之亭	内橋亭		内橋御亭	内橋御亭	
金城霊沢	金城霊沢		金城霊澤	金沢池			金城霊澤*c
鳳凰山	鳳凰山		鳳凰山				
山崎山 紅葉山	山崎山	山崎山 紅葉山	紅葉山 山崎山				山崎山*e
曲水	曲水	曲水	曲水				
鶺鴒島		鶺鴒嶋	鶺鴒嶼				鶺鴒嶼*f
七福神山 福寿山	七福神山	七福神山	福寿山	七福神石			
雪見橋		雪見橋	玩月橋				
雁行橋 亀甲橋		雁行橋	亀甲橋				
蠑螺山 観月台	螺蠑山	拳螺山 観月台	蝶螺山	サヾイ山	栄螺山		さゝい山*d
宝塔		三重塔	三層龕塔				三重之塔*d
霞ヶ池	霞ヶ池	霞池	霞池				
蓬莱島 亀甲島	亀甲山	蓬莱島		竹生島			
徽軫灯籠	琴柱燈	徽軫燈篭	徽軫式石燈		琴柱燈		
虹橋 虹霓橋、琴橋		虹霓橋					
千歳台		千歳台	千歳台				
根上松	根上り松	根上松	手栽松				

※『兼六園全史』では、複数の名称が挙げられている場合が多く、一部省略した。

a 太梁公日記(安永２年 1773)
b 兼六園蓮池庭之絵図額(寛政４年 1792、同11年 1799補足)
c 金城霊沢碑(天保15年 1844)
d 成瀬正敦日記(天保10年 1839)
e 金谷御殿御普請諸事留(慶応３年 1867)
f（鶺鴒島碑）(文久２年 1862)

３．庭園遺構の状況（兼六園全体遺構現況図：第 157 図、同現況全体図・絵図照合図：第 158 図、
蓮池庭遺構現況図：第 159・160 図、同現況・絵図照合図：第 161・162 図）

概要

前項２（１）の通り、蓮池庭における発掘調査では庭園に関する遺構は確認されていないため、以下では近世遺構の遺存状況と、現存遺構のうち主だったものについて特徴を記述する。

蓮池庭・竹沢庭ともに、文久３～明治３年（1863～1870）頃の景観を示す「兼六園図」（第 153 図 62-24、Ⅶ期）を主とし、安政３年（1856）作成の「竹沢御屋敷総絵図」（第 43 表・第 151 図 62-21、Ⅵ４期）・「巽御殿之図」（第 153 図 62-23、Ⅶ期）等により補足した絵図情報に基づき、描写された構成要素等の遺存状況を調査し、その結果を図示した（全体:第 157 図、蓮池庭北部:第 159 図、同南部:第 160 図）。調査においては、地表上に遺構が露呈している、あるいは痕跡を留めていることを第一の基準とし、第 157 図に大凡の分類を示した。ただし遺構が認められる場合でも、絵図の描写とほぼ合致するもの、位置は合致するが近代以後の改変が見られるもの、遺構（痕跡）がかなりの程度希薄なものなど、遺存の度合いに差があるのが実情である。また地上に遺構が見られないとしても、建物建設等により地盤が大きく削平されていない限り、基礎構造が地下に埋没して遺存している場合も十分に考えられる。

また第 158・161・162 図は、上記の絵図情報に係り、更に現況に合わせて調整・作成した合成図である。なお全体の基本内容は、Ⅶ期の「兼六園図」（62-24）に基づくが、縁辺部・土地の起伏・個別構成要素についてはⅥ４期の「竹沢御屋敷総絵図」（62-21）の描写がより詳細であり、62-24 が簡略に描いている箇所等については 62-21 により補足した。

構成要素概況

構成要素には、周囲の石垣・石積・水路・塀基礎、門石段、流れ、滝、池、中島、亭、橋、井戸、景石、石組、園路・石造物（石塔・灯籠等）等がある。

庭園の周囲には石垣や石積・水路が廻る。絵図には西辺・南辺に３箇所の門が認められるが、西辺中央の蓮池門のみが近世以来の位置と機能を踏襲している。園路は主に斜面部分において近世以来の位置を保ち、また現在廃道となっている園路跡も確認される。ただし平坦部分では改変が顕著である。

高所である敷地北側・東側から南側へと向かう流れの経路も、一部に改変が見られるが、大凡踏襲している。主要構成要素である敷地南部の池（瓢池）・翠滝等も近世の形状がよく保持されている。ただし水路や流れ、池の石組・石積・護岸等は、近代以後の改修と考えられる部分も看取される。

なお建造物は塀等も含めて多くが失われており、夕顔亭が残るのみとなっている。

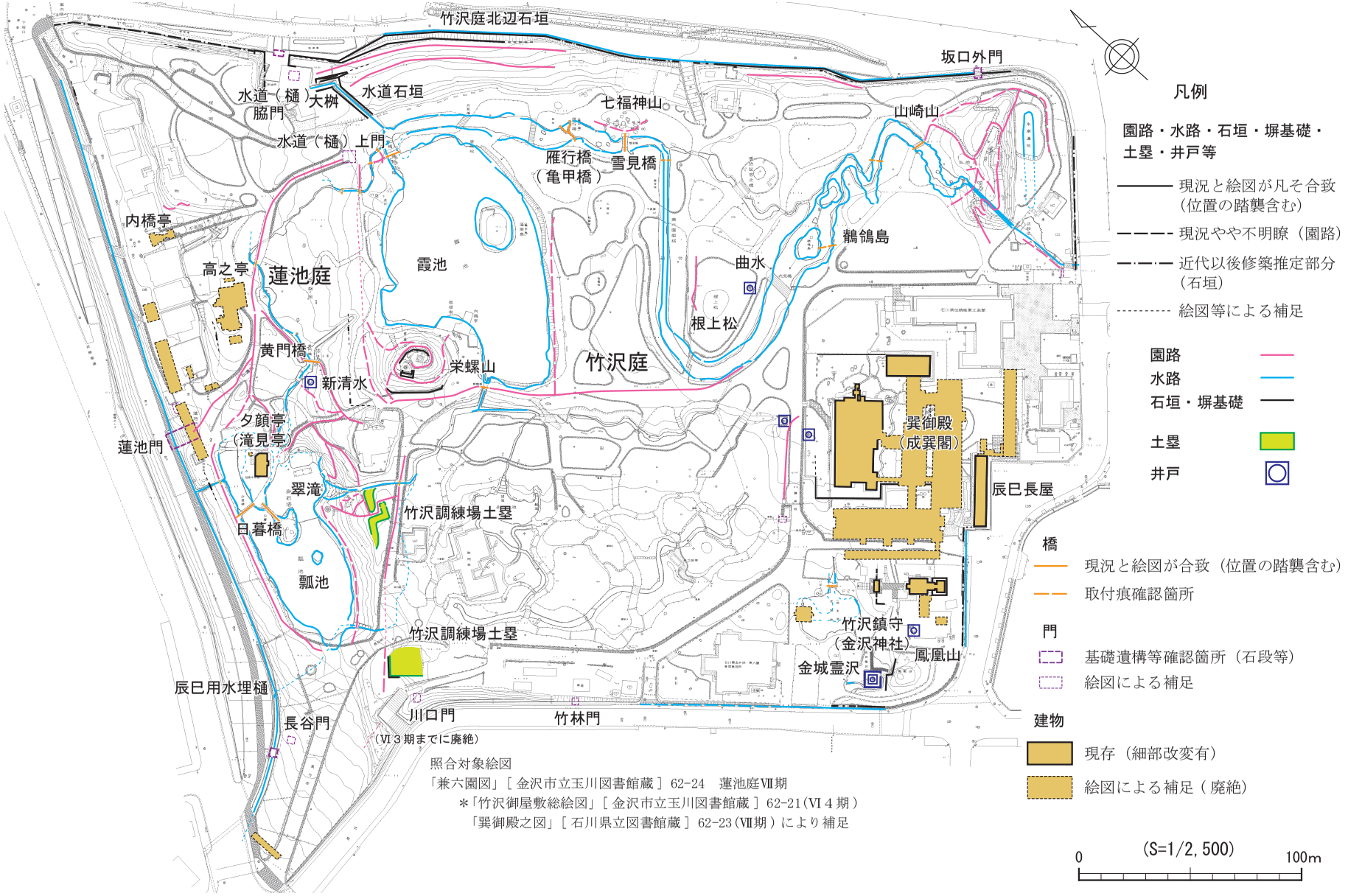
地割・区画施設

北辺石垣（第 163 図①～③）

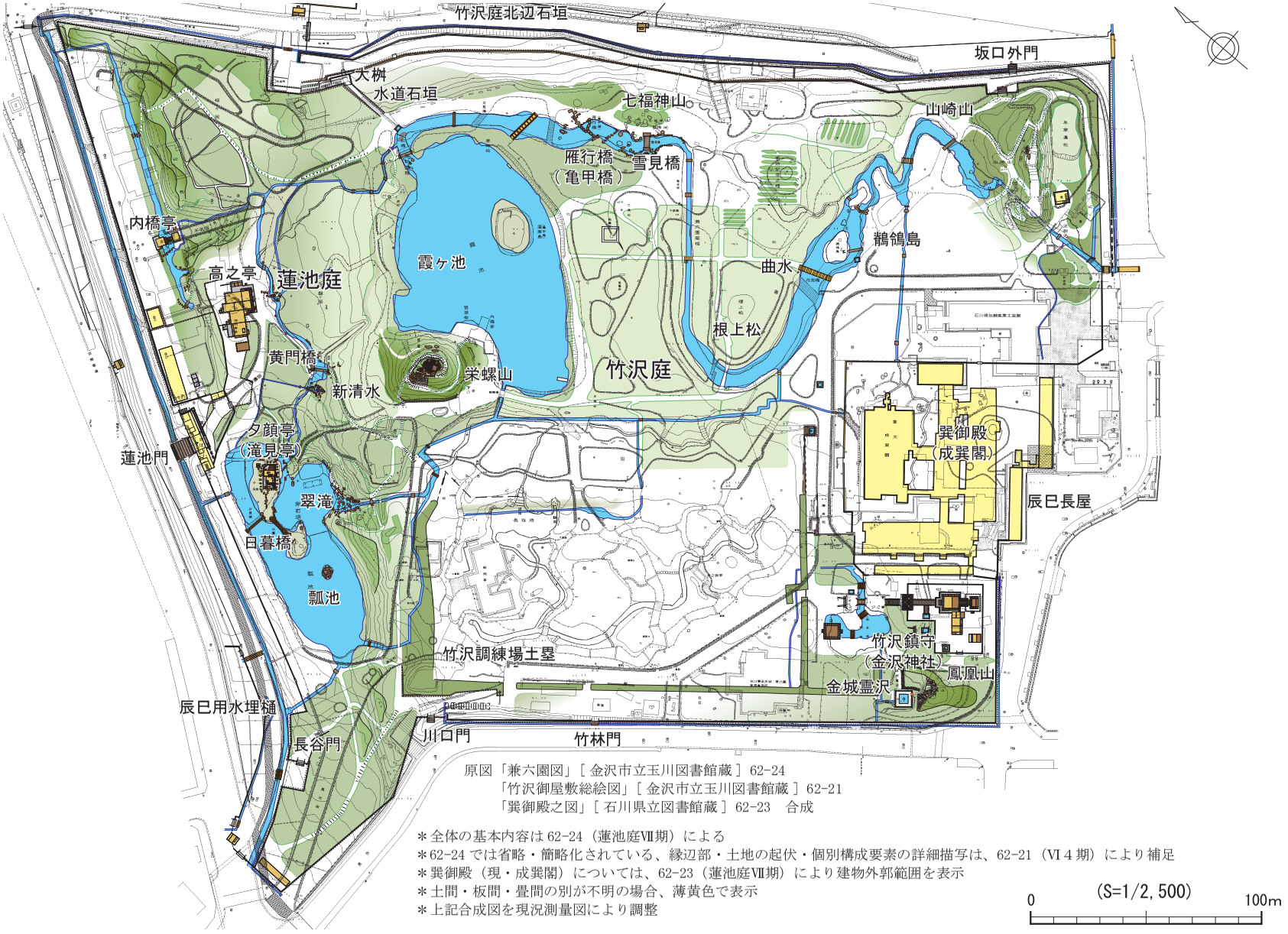
「竹沢御屋敷総絵図」（62-21）に描かれる蓮池庭の石垣は北辺のみで、土羽の上下に分かれた状態で表現されている。現況（第 163 図①、以下位置は第 159・160 図赤字参照）では土羽下方は川原石割石積の範囲が大部分で、比較的近年の改変とみられる。なお北辺西端（案内所裏）付近（②）では、戸室石の石垣石を含む積みが見られるが、谷積み状を呈する部分が目立ち、近代以後の改変である可能性も考えられる。土羽上方は石垣の存在は明瞭ではなく、基本的には撤去されたと推定されるが、面を揃えた石材が部分的に見られる（③）ので、根石等基礎部分付近が遺存している可能性がある。

西辺水路・側壁石積等（第 163 図④～第 165 図②）

蓮池庭西辺は、絵図によると西側の蓮池堀縁通路に沿って、塀・土羽、辰巳用水の余水等を集めた水路が描かれている。このうち塀は、南端を除き土羽下端より約７ｍ東側（内側）に位置し、ごく一部に基礎が残るのみとなっているが、土羽と水路はおおよその位置を保っている。蓮池門より北側では、かつて土羽上部に小型の石による石垣があり、文政５年（1822）に大型の川原石（「大川石」）で積み



第 157 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）全体遺構現況図（平面）



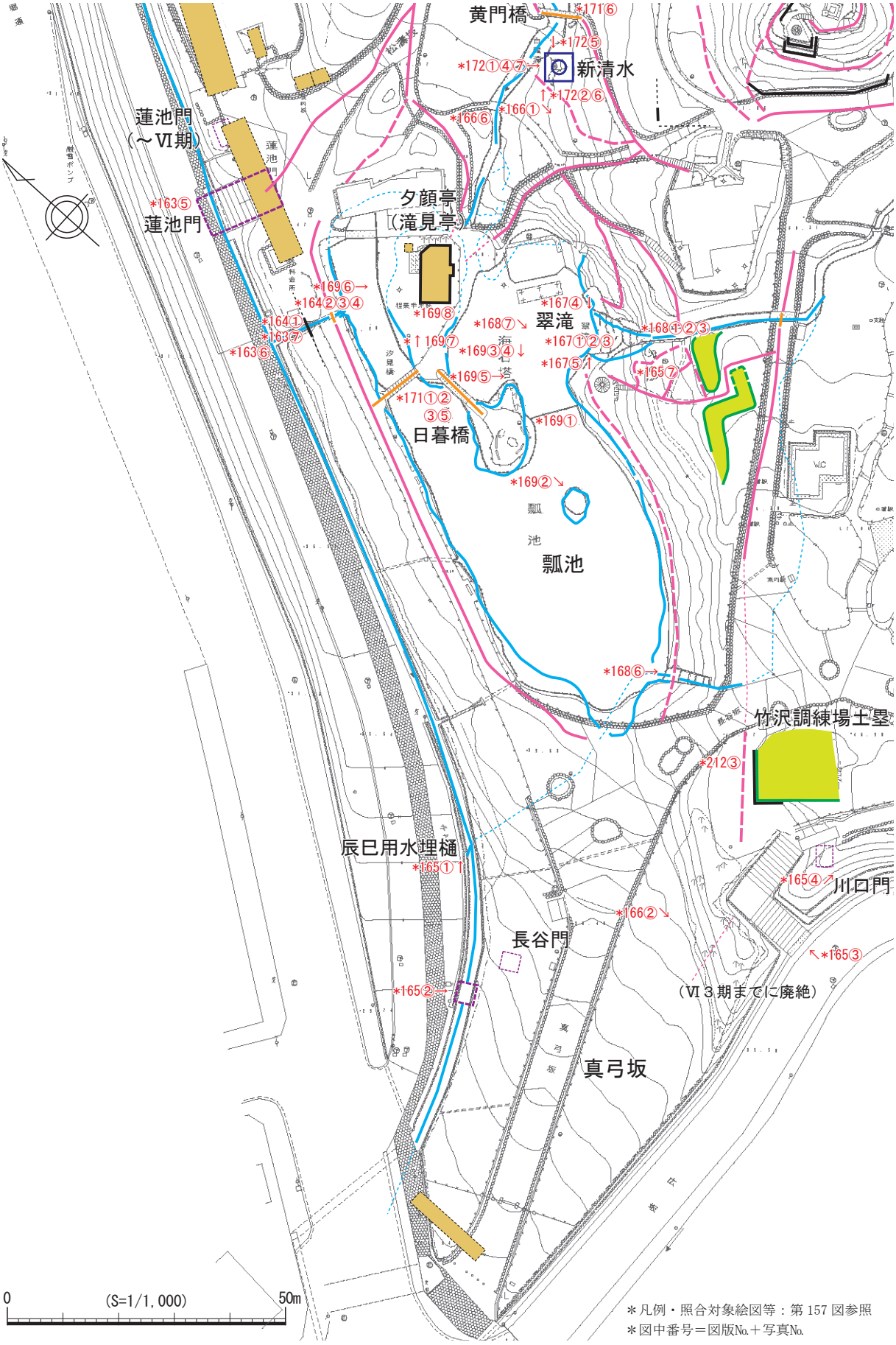
原図「兼六園図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-24
「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-21
「巽御殿之図」［石川県立図書館蔵］62-23　合成

＊全体の基本内容は 62-24（蓮池庭Ⅶ期）による
＊62-24 では省略・簡略化されている、縁辺部・土地の起伏・個別構成要素の詳細描写は、62-21（Ⅵ４期）により補足
＊巽御殿（現・成巽閣）については、62-23（蓮池庭Ⅶ期）により建物外郭範囲を表示
＊土間・板間・畳間の別が不明の場合、薄黄色で表示
＊上記合成図を現況測量図により調整

0　(S=1/2, 500)　100m

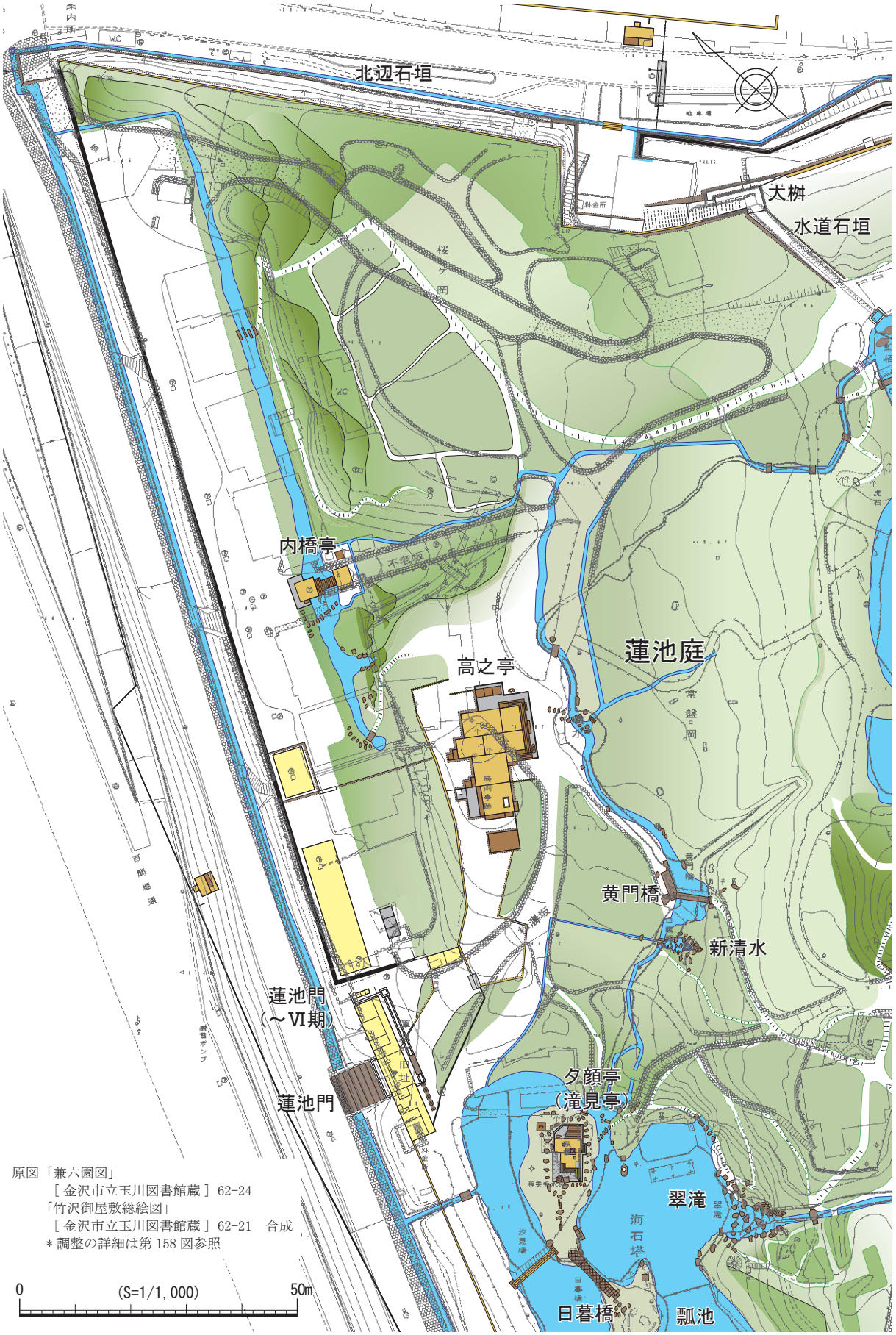
第 158 図　兼六園（蓮池庭・竹沢庭）現況全体図・絵図照合図

第159図　蓮池庭遺構現況図（北部）

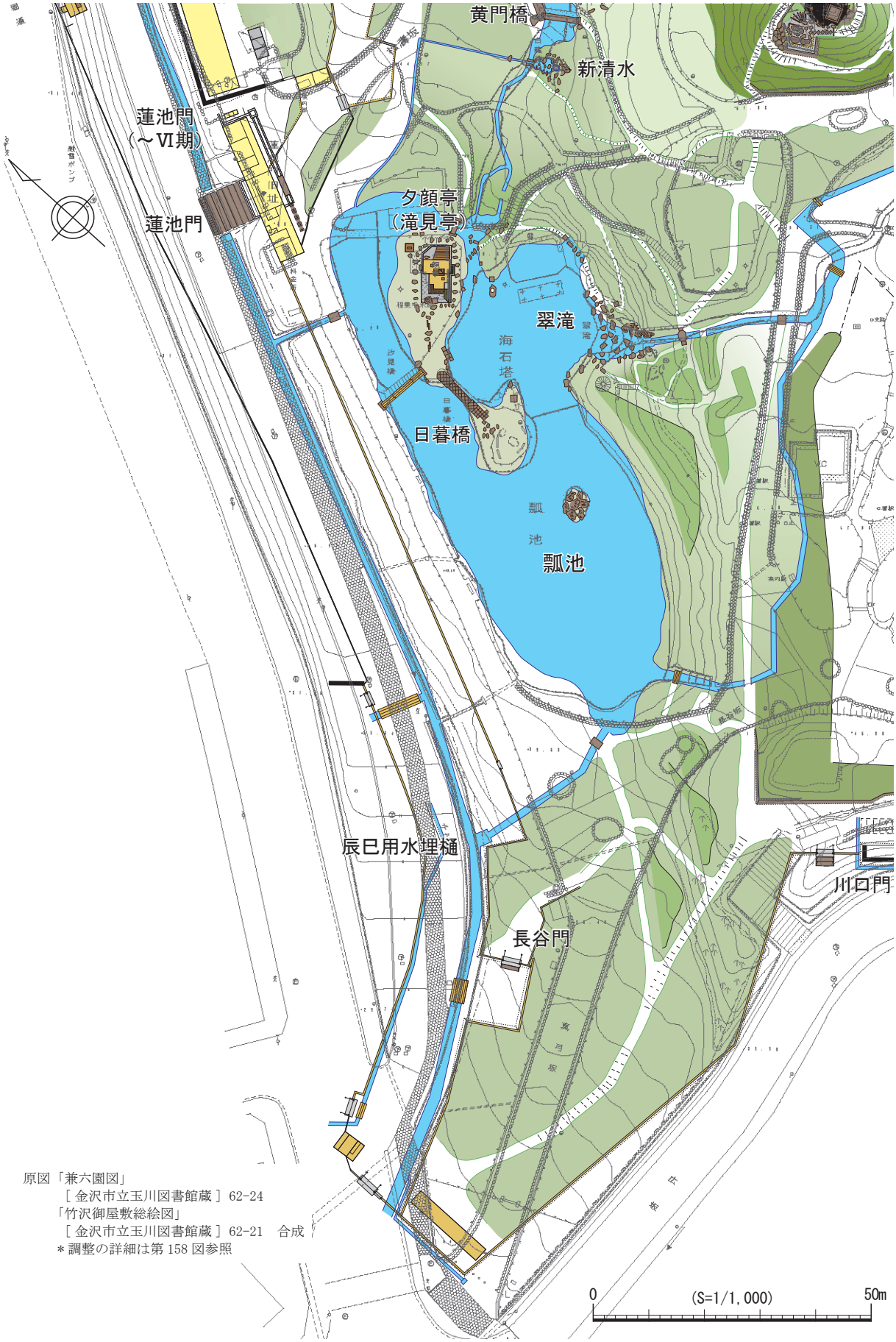


＊凡例・照合対象絵図等：第 157 図参照
＊図中番号＝図版№＋写真№

第 160 図　蓮池庭遺構現況図（南部）



第 161 図　蓮池庭現況・絵図照合図（北部）



原図「兼六園図」
［金沢市立玉川図書館蔵］62-24
「竹沢御屋敷総絵図」
［金沢市立玉川図書館蔵］62-21　合成
＊調整の詳細は第 158 図参照

第 162 図　蓮池庭現況・絵図照合図（南部）

直しが行われているが（「蓮池露路門等石垣積直図」金沢市立玉川図書館後藤文庫）、現況では確認できない。ただし北端付近には拳大の円礫が集中する箇所が認められ（第 163 図④）、あるいは石垣基礎・裏込等の名残かも知れない。水路とその石積は、とくに石積の石材・積み方から見て、確定は難しいが多くの部分が近代以後に修築されていると思われる。ただし蓮池門石段・瓢池排水路・大桝付近（辰巳用水石管）・長谷門付近等については、古相が窺われる。

蓮池門石段（第 163 図⑤） 蓮池門は、万延元年（1860）を境に位置・構造が変化しており、現存する門前の石段が、「兼六園図」の描写（第 162 図）と対応する。

石段は、段数 9、幅 7.38～7.45 m、奥行 7.46 m、一段の幅 0.74～1.04 m、高さ 0.15～0.28 m を測る（『兼六園全史』P182）。足がかり部分の踏石には戸室石方柱状材が用いられ、踏み面は土間としている。石段脇の耳石は、戸室石切石材もみられるが少なく、同粗加工石、川原石等で構成される。踏石には加工痕などから新旧の別が窺え、近代以後の修築を示唆している。上部三段中央付近の部材は特に真新しく、『兼六園全史』掲載の写真とも異なるが、他については厳密な時期判別は難しい。

絵図にみえる石段の幅・長さは、遺構とほぼ合致する。ただし段数については絵図では６段もしくは７段と看取され、現状の９段と異なる。絵図の表現に省略があるのか、後世の修理によるものなのか不明である。

瓢池排水路（第 163 図⑥～第 164 図） 瓢池から流れ出る北側の排水路（第 163 図⑥）は、約７m 西流したところで落差約 2.3 mの滝となっており（⑦）、小規模ながら特色ある構造を残している。滝の背面・側面の石積（第 164 図①）は、下位が戸室石切石、中位が戸室石粗加工石及び川原石、上位が川原石を石材とする。滝の落ち口に当たる部分には、水路を跨いで戸室石切石材（②）が橋状に架かる。絵図との照合から、水路を横断していた塀の基礎が遺存しているものとみられる。塀は明治後期の刷物には描かれておらず、失われた塀の基礎を架け替える可能性が低いとすれば、滝周辺の石積は、ある程度古相を留めていると推定される。

第 164 図③～⑤は、滝の落ち口・塀基礎付近の現況略測図・写真である。滝の幅は約 1.7 mであるが、滝の上部＝落ち口・塀基礎付近の水路幅は、両側を石積で塞ぎ、中央幅約 80cm に狭められている（④）。上部に架かる塀基礎は、全体に地衣類に覆われており不明なところもあるが、下面の観察によると、長さ 1.6 m以上、厚さ 20cm、幅 20～40cm 程度の戸室切石材を三基並べ、全体として幅 80～90cm の規模としている。なお、戸室石石材の東長辺に沿って、凝灰岩の柱状材（長さ 85cm、幅 20cm、厚さ 18cm）が重複しており、塀の地葺石と考えられる。

この塀基礎の下位となり、暗渠状態となる水路部分は、戸室石の板状切石材を底部・両側壁としてコの字状に組んだ石組樋で構成されているが（④・⑤）、塀基礎の東側（開渠部分）になると川原石積となり、間に通路の橋を介在させながら瓢池に接続する。

大桝付近（辰巳用水石管）（第 165 図①） 瓢池排水路から南へ約 100 m離れた地点で、蓮池庭西辺沿い水路底面が流れに斜行（北東－南西）して段を為す箇所がある。段を形成しているのは辰巳用水の石管である。現況では埋め立てられているが、この地点も瓢池からの排水路末端に相当する。池側には桝があり、ここが金谷出丸で利用される辰巳用水の起点で、埋樋により西辺水路の下を潜り、地中を伝って送られていた。現存する石管は、３単位確認され、全体で長さ 3.8 m、幅 40cm を測る。

長谷門付近（第 165 図②） 西辺南側の長谷門付近の水路護岸石積は、落とし積みが目立つ部分と、比較的大振りな川原石が粗いながらも布積みに積まれる部分が交互にみられる。絵図によると、長谷門への出入り口は土羽が切れて西辺沿い水路を渡る橋が架かっている（第 162 図）。第 165 図②の位置（第 160 図参照）は絵図との照合によりほぼ対応しており、最上部に見える矩形の石材より南側（写真右手）に出入り口が位置する可能性がある。ただし出入り口南端や対面側では石積の差異は顕著ではなく、検討を要する。

①北辺石垣　南東から

②北辺石垣下段北西部　北西から

③北辺石垣上段　北東から

④西辺土塀下石積　北から

⑤蓮池門石段　西から

⑥瓢池排水路　西から

⑦瓢池排水路 滝状部　西から

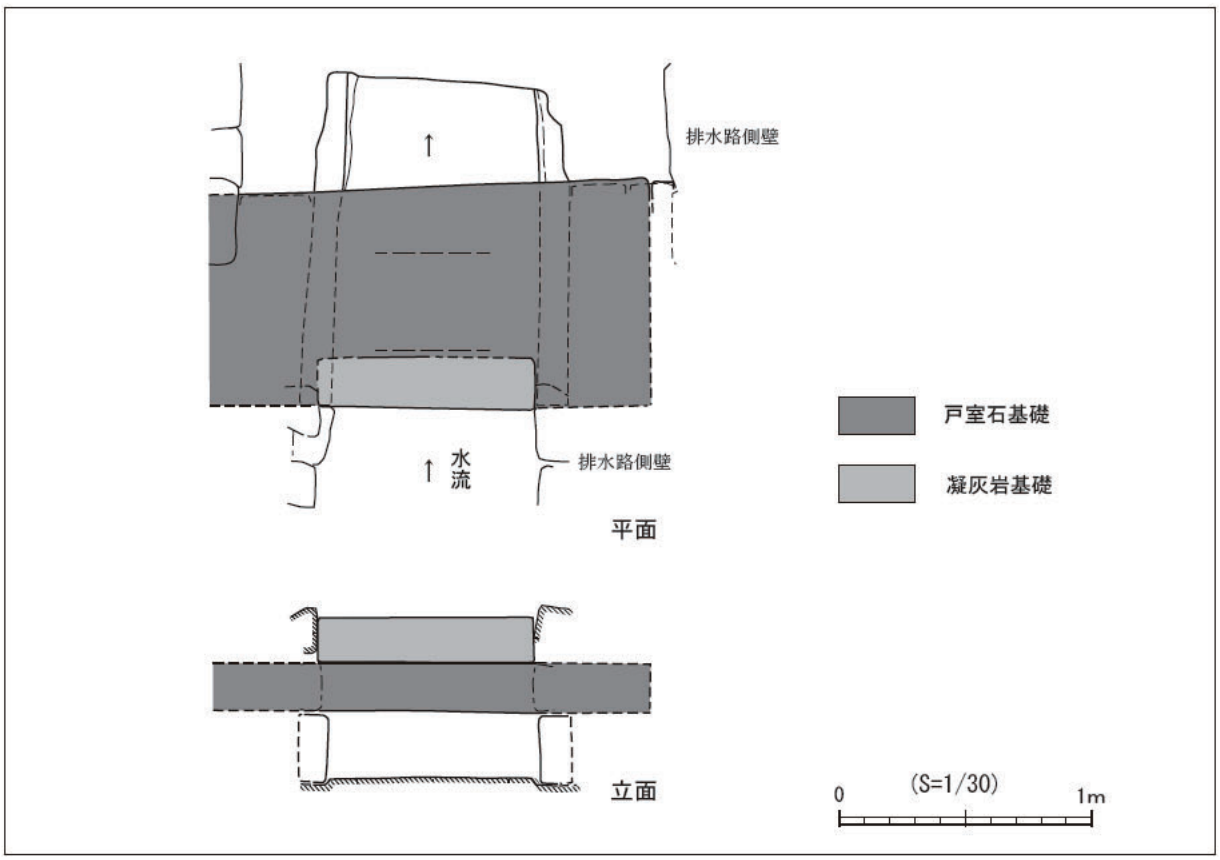
第 163 図　北辺石垣・西辺水路護岸・蓮池門・瓢池排水路写真

①瓢池排水路 石積　南西から

②西辺塀基礎（瓢池排水路上部）　北から

③西辺塀基礎（瓢池排水路上部）　東から

④西辺塀基礎（瓢池排水路上部）　南西から



⑤瓢池排水路塀基礎略側図

第 164 図　瓢池排水路写真 西辺塀基礎写真・略測図

①瓢池南西 辰巳用水石管　南から

②長谷門付近水路護岸石積　西から

③川口門石段（近代）　南から

④川口門付近現況　南西から

⑤高之亭西側塀基礎石積　西から

⑥園路（不老坂北）　東から

⑦園路（翠滝南側）　南から

第 165 図　瓢池南西辰巳用水石管・西辺水路護岸・南辺川口門・高之亭西側塀基礎・園路等写真

南辺（第 165 図③・④）

蓮池庭南辺は、藩年寄本多家屋敷との境をなす道路（広坂）に面する。西側末端では道路面とほぼ同じ高さで、南東に向かい道路と同じく上り傾斜となるが、竹沢庭との境に近い川口門付近では道路面よりも急激に高くなり、この間は切通し状を呈する（第 165 図④）。

川口門（第 165 図③）の現況は、道路から直交して入った後、右折れして竹沢側の高台に上がる石段となっていて、幅約６m、延長約 25 mを測る。石段通路面の側壁は大振りの川原石で構成され、谷積み状を呈する部分もあるが、おおよそ布積みで一見すると古相を呈している。しかし近世の絵図に見える川口門は、折れのない小規模な平入り形態を呈し、広坂との間の階段は数段分しか描かれていない。また現在の川口門最上部より東側に位置すると思われる。ただし、現状で遺構は確認できない。明治９年（1876）の「辰巳養水路分間絵図」（[辰巳ダム関係文化財等調査団 1983] 付図）には、当該付近に出入り口が描かれているが、その表現は近世の絵図に近い。このことから、現在の川口門は明治９年以後に改変された姿と考えられる。

なお近世絵図に描かれた川口門の位置・形状と、現況の道路面までの著しい高低差からみて、広坂道路面は近代以後に緩傾斜化されたようであり、現況の川口門はこの状況に対応して新たに設けられたと思われる。明治 34 年(1901)に広坂を改修したとの記録(『稿本金沢市史 市街編第四』P958)があり、上記に推定した工事はこの時の可能性がある。

敷地内部の塀等（第 165 図⑤）

蓮池庭内部においても塀自体は遺存していないが、中心的な建造物である高之亭西側では、塀の基礎とみられる川原石積が部分的に露呈している（第 165 図⑤）。塀の基礎については、地上でみられなくても、地中に埋没している可能性が十分考えられる。

園路

北部（第 165 図⑥）

蓮池庭で最も高所に位置する北部平坦面では、竹沢庭との境となる水道（樋）上門跡から高之亭跡に至る園路が、近世以来の位置を踏襲している。また西側下段の茶店通り（元の馬場）との間の急斜面には、絵図では３箇所の坂道が認められるが、現状ではこのうち中央についてその痕跡を辿れるのみとなっている（第 165 図⑥）。現状で一帯の主要導線となっている、水道（樋）上門跡から金沢城石川門方面側の桂坂口に至る園路や、西側下段の茶店に直通する不老坂は近代以後に整備されたもので、南部に比べて近世以来の園路が地表に痕跡を留める割合は低い。

南部（第 165 図⑦～166 図②）

蓮池庭南部では、北部に比べて園路の遺存状況は良好である。近代以後の新設は、南端の真弓坂と瓢池北東の東西坂道程度であり、現況園路のほとんどは近世に起源をもっている。とくに翠滝周辺の坂道は、川原石を用いた飛石が良く残り（第 165 図⑦）、近年の整備をあまり受けていないように見受けられる。また瓢池の北側や東側、新清水南側付近（第 166 図①）、真弓坂南東等、現在廃道になっている箇所も、おおよその痕跡が残る。このうち真弓坂南東の園路は、竹沢御殿に向かって南西から北東へ上る坂道が起源で、絵図の描写によるとⅣ３期までに廃されているが、尾根状の地形自体は現在まで形を留めている（②）。竹沢御殿期の絵図では坂道の側面に石垣が表現されているが、現地表上では確認できない。

泉水と関連施設

流れ（第 166 図③～⑧）

現況では蓮池庭に流れ込む水系は三筋に大別される。霞ヶ池北端に発する流れ（敷地北部）は、水道（樋）上門跡南側を通り（第 166 図③）、高之亭跡北側まで緩斜面を下り、大きく南へ曲がって瓢池に向かう。ただし高之亭までの間は近世の絵図には見られない流路で､元はより北側を迂回し（第

①園路（新清水南）　北から

②園路（真弓坂南東）　北から

③流れ・橋跡（水道（樋）上門西付近）　南から

④噴水　南から

⑤流れ（噴水南付近）　南から

⑥流れ（瓢池北）　北西から

⑦流れ（黄門橋北東）　西から

⑧流れ（黄門橋北東）　西から

第 166 図　園路・流れ・噴水写真

161 図参照)、北側平坦面の各所に分流を送っていたようであるが、これらの痕跡は確認できない。高之亭より南側では、近世絵図の位置とほぼ一致し、黄門橋を境に急流となって（第 166 図⑥）瓢池に注ぎ込んでいる。ただし護岸について、近代新設部分と明瞭な違いを見出すことは難しい。例えば新設部分の一部を含む高之亭付近から黄門橋にかけての護岸は、流れ内側に水平に突き出す平石と立石とを交互に配する特徴的なスタイル（⑤）であり、近世以来の位置を踏襲する部分においても、近代に改修された可能性を考える必要がある。

なおこの流れの中程、高之亭前に噴水が設けられている（④)。「兼六園絵巻」（第 154 図下左）に描写があり、遅くとも藩政末期には存在していた。霞ヶ池から埋樋により給水されていたと見られるが、現状では改修を受けている。噴水本体の外郭は戸室石製の八角柱状の構造物で、周辺は小型の池となって、花崗岩の方形平石材や滝坂石の柱状材等が配されている。なお「兼六園絵巻」では、本体は現況の構造物と同様の表現であるが、周辺はわずかに幅を増した淵状にしか描かれておらず、石の形状・配置も含め現状の景観とかなり異なる。噴水の周辺は近代以後に改修された可能性が高い。

霞ヶ池西岸中央付近に発する流れ(ただし上流 15 m程度は暗渠)は、深い渓谷状を呈し(第166図⑦)、直線的に下って黄門橋付近で前述の流路に合流している。護岸はやや大振りな川原石や戸室石を用いた石積が主体で、大型石材を縦方向に据え（⑧)、稜線を流れ内側に向ける箇所が目立つ。この流路は近世絵図にはみられないが、明治９年（1876）の「辰巳養水路分間絵図」に描かれているので、明治のごく初期に開削されたものである。

霞ヶ池南端、栄螺山南東麓に発する流れ（敷地南部）は、瓢池東岸北側で翠滝となって注ぎ込むものと、瓢池南端近くで小滝を形成するものに分岐する。このうち近世絵図の位置とほぼ合致する箇所は、霞ヶ池からの流出部と、瓢池への流入部付近で、これらの間は新規の開渠や暗渠となって旧状を保っていない。

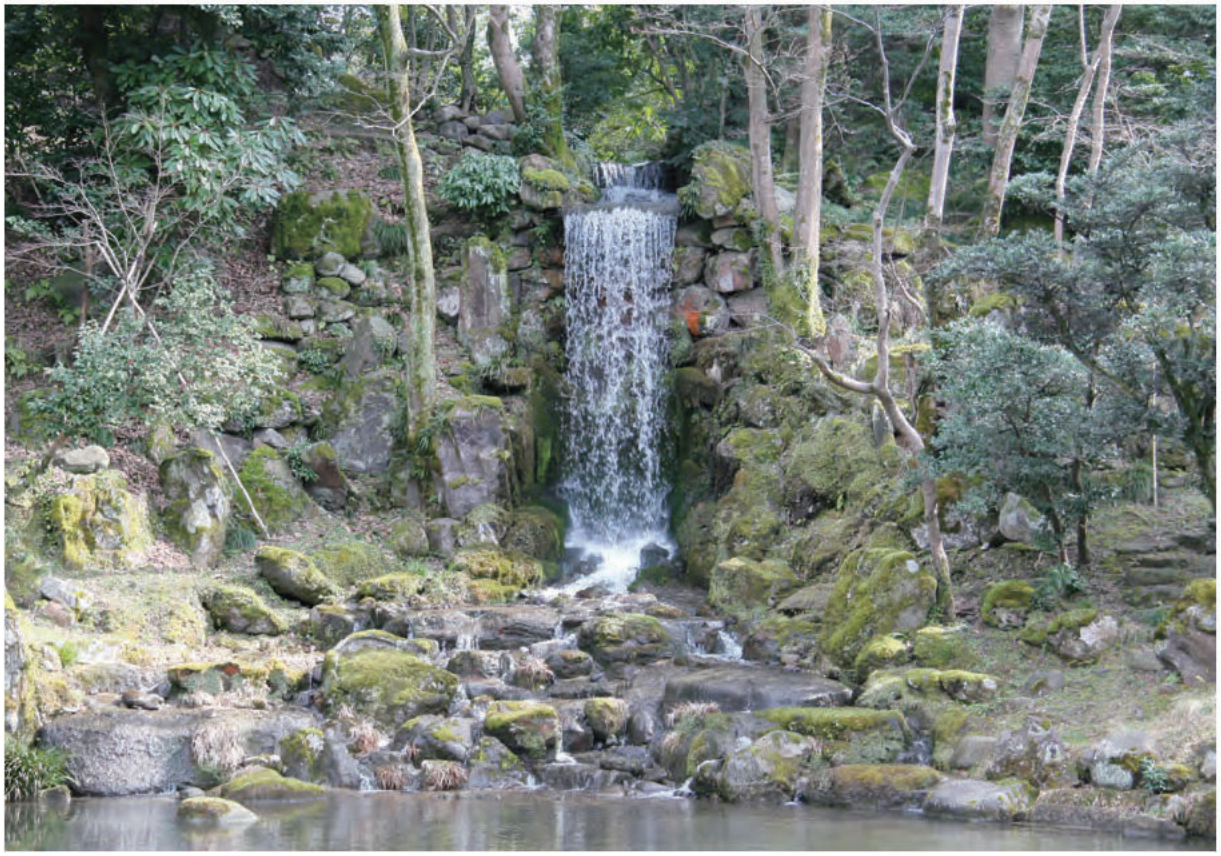
滝（第 167 ～ 168 図⑥）

翠滝（松蔭滝） 瓢池北東にある落差 6.2 mの布落ちの滝で、藩政期から園内第一の見所とされてきた。安永３年（1774)、それまでの滝を大規模な形状に改修したことが知られている（第 38 表 61-11・12)。現況の滝は、この安永期整備の姿を基本的に伝えているとみられる。

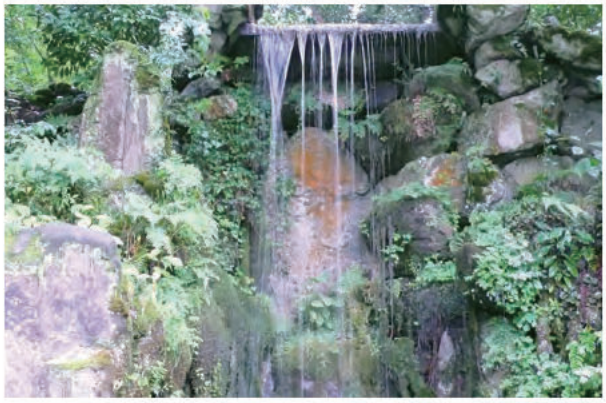
付近は近世以来の旧状を留めているところが多く、滝の上流の位置も支流との分岐点以降は変化がない。近世の絵図によると、滝口際に亀甲形をした石橋が描かれているが(第168図⑤)、現状では架かっていない。ただし流れの護岸両側ともに多角形の石橋の破片とみられる材が組み込まれており（①～④)、架橋されていたそのものである可能性も考えられる。このことはまた、流れの護岸については近代以後の改修が及んでいることを示唆している。

滝組本体部分（第 167 図①）は、切石材ではなく自然石等を主体に積み上げ、滝背面（②）や両脇に長大な立石を組み込んだ構造を呈する。水流の落下口には、深い滝壺は認められず、平面八の字状に広がり（③～⑤)、池面に向かって浅く段状に下降する石組が設けられている。この部分では立石は一、二点在するに留められ、広く平坦な平石や石垣転用材が配置されている。岩石種については、詳細観察には至っていないが、福浦石が最も多く、戸室石が次ぎ、滝石、滝坂石が散在する印象を受ける。とくに滝坂石は、19 世紀以後築造の石組に多用されているが、翠滝一帯ではあまり目立たたず、大規模な整備時期が 18 世紀代に遡ることと矛盾しない。

瓢池南東の小滝（第 168 図⑥）は、近世絵図と同じ位置に現存するもので、戸室石石組溝を滝口とし、滝石組には小ぶりの川原石のみを用いている。左右両壁から奥壁へは弧を描いて連なり、上面形はU字状を呈している。この構造自体が近世に遡るかどうか不明である。



①翠滝 全景　西から



②翠滝滝石組奥壁　西から

③翠滝滝石組前方 西から

④翠滝滝石組前方 北から

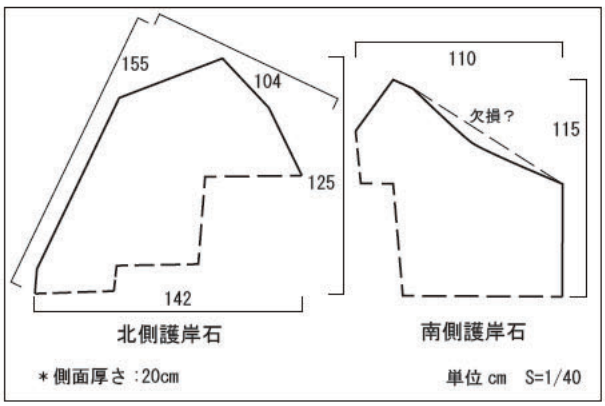
⑤翠滝滝石組前方 南から

第 167 図　翠滝写真

①翠滝上流護岸石　北から

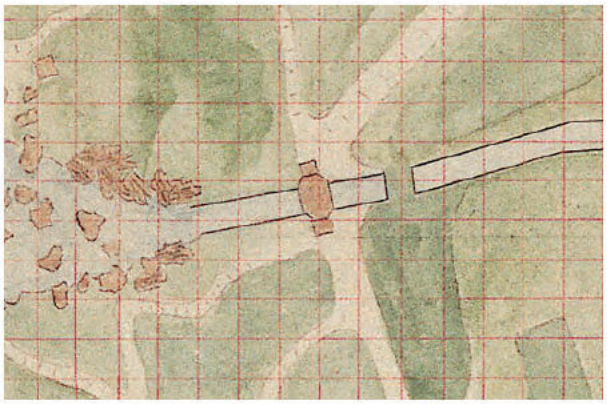
②翠滝上流護岸石北側　南から

③翠滝上流護岸石南側　北から



④翠滝上流護岸石（推定橋板片）計測図

⑥瓢池南東小滝　西から



⑤翠滝上流の石橋　「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］
62-21　VI 4 期

⑦瓢池 東半　北から

第 168 図　翠滝上流護岸石（推定橋板材）写真・絵図・計測図 瓢池南東小滝・瓢池写真

①瓢池北東部南側間仕切り　東から

②瓢池南側中島　北から

③瓢池中央中島　北から

④瓢池中央中島 景石　北から

⑤瓢池中央中島 護岸・景石　西から

⑥瓢池北側中島　西から

⑦夕顔亭　南から

⑧夕顔亭 手水鉢

第 169 図　瓢池・中島・夕顔亭写真

池（第 168 図⑦・169 図①・⑤）

現況では、噴水周辺等にも小型の池があるが、これらは近世の絵図には見られない。近世以来存続しているのは南端の瓢池のみである。

瓢池（第 168 図⑦） 南北に長い平面長円形を呈し、全長約 100 m、幅約 30～40 mを測る。北・東岸は高く、南・西岸は低い。護岸は上述の翠滝一帯を除き、大型石材を用いた石組は見られず、基本的に川原石積によっている。中島も含め、護岸石積の前面には小型の割石が充填され、池中心側との仕切りとして二重の丸太材が杭止めされている（第 169 図⑤）が、近世に遡る手法かどうかは不明である。傾斜した地形に立地しているため、池底の高さも一様ではなく、北･中央中島間（日暮橋下）、中央中島・池東岸間に切石材による仕切り壁があり（①）、これより北東が一段高い。この部分の池底は比較的締まった砂礫土であるが、来歴は確認できていない。

中島は現在では２基に見えるが、近代以後、北岸と北側中島の間が埋め立てられたためで、元は３基を数える。北と中央の中島、また北の中島と池西岸を結ぶ橋が架かる（日暮橋・汐見橋）。現在は陸続きである北の中島と池北岸にも、かつては石橋が２基架かっていた。

現況の平面形は、北側の埋立範囲を除き、近世絵図に描かれた汀線とよく一致している。近代以降多くの修築を受けたと思しいが、基本的な形状を変えるには至っていないと判断される。

中島（第 169 図②～⑧）

瓢池に浮かぶ３基の中島は、北側が最も大きく（長軸 30 m弱）、中央がこれに次ぎ（長軸約 17 m）、南はごく小さい（長軸約５m）。南側の小島（第 169 図②）はいわゆる岩島で、比較的小規模ながら立石主体で構成される。安政期の「竹沢御屋敷総絵図」(62-21)にもその表現が窺える。中央の中島(③～⑤）は平坦で、中心近くに平石、北端に石塔（「海石塔」）が配される。護岸は池本体よりもやや大振りの石材を用いるがあまり目立っていない。北端に位置する福浦石の平石（④・⑤）は、北側に突出した角を有する特徴的な形状で、亀尾石とする意図があったのかも知れない。

北側の中島（⑥）も中央と同じく平坦で、かつては失われたものを含め４か所の橋・沢渡があり、池中の中島でありながら園内経路の要衝でもあった。島の北半には竹沢庭も含めた兼六園全体で唯一残る、近世以来の庭園建造物「夕顔亭（滝見亭・中島亭）」が建つ（⑦）。中島全体が夕顔亭の露地空間であり、現況でも飛石や手水鉢が認められる。近世の絵図と比較すると、北側に飛石が見られない等の改変が窺えるが、総じて整合している部分が多い。

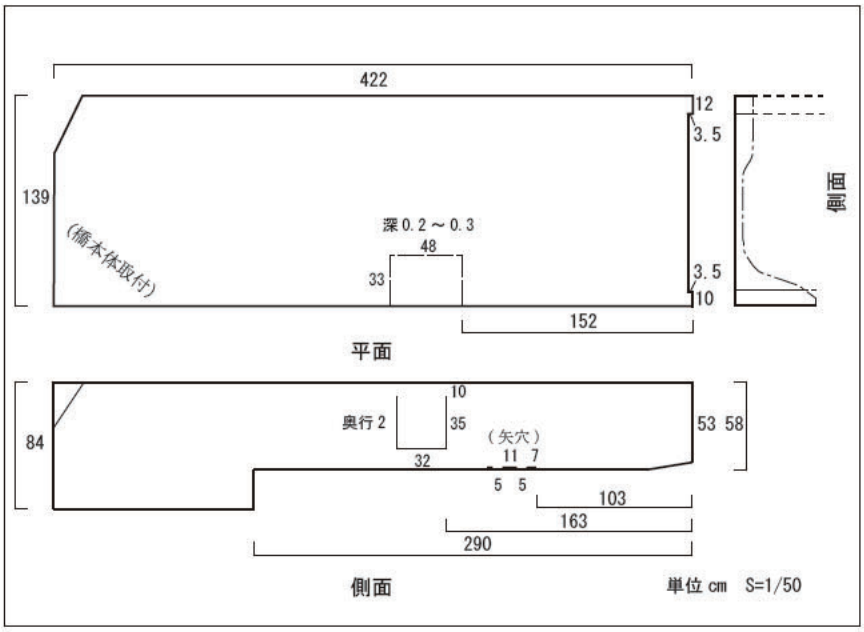
亭の南側には坪野石製の手水鉢（⑧）が配されていて、琴を枕に眠る人物のレリーフがあり、「伯牙断琴」等中国の故事に基づくとも、また加賀前田家に仕えた金工後藤程乗の作による等、多くの伝えがある。近年の研究では、元小松城に置かれていたもので、５代藩主前田綱紀により蓮池庭に移された可能性を指摘する見解が提示されており［加藤 2017］、注目される。

橋（第 170～171 図⑤）

蓮池庭において流れ・中島等に架かる橋は、現況で 10 か所ほどあるが、近世絵図と位置が一致する地点は７か所である。このうち構造物として旧状を窺い得るものに、中央部の黄門橋と南部の日暮橋の２基の石橋がある。

黄門橋（第 170 図） 敷地北側を南流する流れが急流となり、幽谷の感を深めている箇所に架橋された石橋（第 170 図①）で、橋東詰以東は傾斜の強い上り道となる。橋本体は緩やかな弧を描く長大な青戸室石の切石材で、長さ 6.2 m、幅１m、厚さ 0.4 mを測る（『兼六園全史』P71）が、長軸中央部は下方に向かいわずかに丸みを帯び、厚みが増している。また両側面には浅い段を造り出し、「桁と橋板の二枚石のように見せ」（同上 P72）る細工を施す。西岸（流れ右岸）には岸に沿って長さ 4.22 m､幅 1.39 m､厚さ 58～84cm を測る青戸室石の台石が据えられている（②～④）。本体･台石に加え、本体の両端に備えられた二段分の石段、東岸南側の橋挟み石等が、近世絵図に描かれた位置に残る。

①黄門橋全景　北西から



②黄門橋橋台石計測図

④黄門橋橋台石加工痕

③黄門橋橋台石側面　東から

⑤黄門橋橋台石積　北西から

第170図　黄門橋写真・橋台石計測図

絵図には台石南西にも大型で整形された平石が描かれるが、現況では確認できない。

台石については、『兼六園全史』で指摘された通り、下面に段があって橋を受ける部分が厚く、設置時にバランスや安定感が図られていると考えられるが、北面や東面（流れ側）にも切り込み加工が認められる点（②）は注意を要する。とくに北面の加工は、両端 10～12cm を除き、おそらく全面にわたり精巧に切り込まれたものである（④）。これらからすれば、台石は何らかの転用材であった可能性が高い。また橋の東岸側は、軟質の角礫混じり凝灰岩切石積（⑤）に取り付いており、橋本体の下面のわずかな丸みに合せ、石積上面を調整していることが窺える。

黄門橋架橋の時期については次項でも触れるが、寛政期（Ⅳ期）の作成とされる「兼六園蓮池庭之絵図額」（第 145 図 62-07 上）で、台石は見られないものの、該当する地点に石橋の表現がある。石橋の架橋自体は、古く遡る可能性がある。台石については、天保期以後（Ⅵ 1 期）の絵図から概ね描写されており、当初は具わっていなかった可能性がある。東岸取付部の石積についても、比較的新しい所産のように見受けられ、時期の特定はできないが改修を受けていると推定される。

日暮橋（第 171 図①～⑤） 瓢池の中央及び北側の中島を結ぶ、上面の四半敷（斜め格子目）・格子目意匠が特徴的な石橋である。敷石範囲の長さ 11.7 m、幅 1.62～1.7 mを測る。橋脚は両岸のみで、方柱状の戸室石切石材を組み合わせ、持ち送りで繋いだ三本の梁の上面に橋板（敷石中央部）を設置している（①・②）。橋板は全長 4.83 m、厚さ 0.14 mを測るが、後述の通り一石（一枚）ではない。橋板の両端には数～10cm 程度下がる段差を介し、平場が 2 段設けられ、地盤に至っている（③）。内側の平場は両端とも平面方形・四半敷意匠で 1 辺 1.63 m前後と同規模・同形である。外側の段は、北側は平面六角形（戴頭圭形）・四半敷意匠で長軸 1.35 m、南側は長さ 2.28 mを測り、この範囲のみ格子目意匠である。

橋板（中央部）の四半敷意匠は、斜位の正方形が 16 基、直角二等辺三角形が 16 基並ぶ形となっているが（④）、これらは単に刻線により表出された箇所と、元から分離している箇所とがある。目地の補修等により、観察し難い所もあるが、橋板（中央部）のみでも 15 程度の部材を組み合わせて構成されたものと推定される。

橋板の部材ごとの境は、橋全体の側面においても看取されるが、さらに詳細にみると、側面下半の調整の粗さが目立ち（①・⑤）、下面においては一層顕著である。これらのことから、日暮橋の橋板は、専用材として用意されたのではなく、別構造物の部材を転用したものであり、その候補としては、門や御殿玄関等に用いられる敷石が考えられる。

黄門橋と同じく、「兼六園蓮池庭之絵図額」（第 145 図 62-07 下）に該当地点に橋が見えるが、ここでは木橋ないし柴橋として描写されている。翠滝や夕顔亭と同じく、安永 3 年（1774）に「柴橋」が出来したとの史料があり（「太梁公日記」第 38 表 61-12）、日暮橋の前身とみられる。その他の絵図の描写から、Ⅵ 2 期（天保末以後）頃現在に至る形状に改修されたとみられる。

この他、流れの項で触れたが、翠滝上流の両岸に組み込まれた多角形の戸室石板状石材が、すぐそばに架かっていた橋の残欠である可能性がある（第 168 図①～⑤）。

新清水（第 172 図）

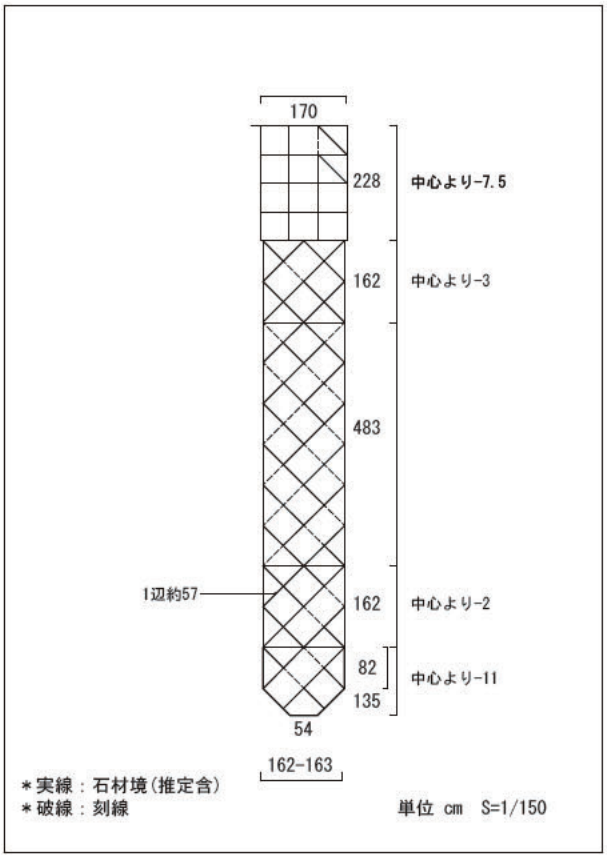
黄門橋の南側、流れの東岸（左岸）際に所在する遺構で、近代の一時期「新清水」と呼称されていた。現況では、東側の上り斜面を半円形に掘り込んで形成した幅・奥行約 2.8 m、背面高さ約 1.9 mの削平面の中心に、戸室石の筒形井戸側（径 123cm、高さ 40cm、厚さ 13cm）が据えられ、覆屋が設けられた状態となっている（第 172 図①・②・④）。井戸側内は浅く、底に近い側面に小孔が 2 か所あってわずかに通水しているようであるが、その水源や流末は確認できていない。

明治期の刷物にもこのような景観が描かれているが、Ⅵ 4 期（安政期）の「竹沢御屋敷総絵図」（③）の表現によれば、井戸側の前面＝流側に瓢箪形の池が接続し、ここで井戸から溢れた水を受け、更に

①日暮橋 全景 西から

②日暮橋 全景 北西から

③日暮橋上面 北から



④日暮橋 橋板計測図

⑤日暮橋橋板側面

⑥獅子巌 西から

第 171 図　日暮橋写真・計測図 獅子巌写真

その先は流れを跨ぐ石橋状の水路があって、瓢池に向かって送水するという構造が窺われる[1)]。

現在、流れは拡幅されているようであり、絵図と照合すると池の先端部と重複する形となるが、いずれにせよ井戸側前面に遺構を確認することはできない。他方、井戸側のある平坦面と流れ水面に大きな高低差はない（①・②）。また絵図における瓢箪形の池は、その輪郭が黄色の枠線で示されていることが看取される。これらの点を踏まえると、池は掘削によらず、漆喰や三和土等を用いて壁を盛り上げ構築されたと推定される。このようにして水位を上げ、開渠どうしを立体交差させるという、技巧に富んだ仕掛けを実現したとみられる。ただし、導水に必要と思われる切り込み等の細工は、現存する井戸側には確認できない。

なお本来の水源については、湧水あるいは霞ヶ池からの給水が想定され、上記の仕組みからすれば、後者の可能性が高いように思われるが、判然としない。

井戸側の両脇・背面については、掘り込みに沿って石組が設けられており（④～⑧）、絵図に描かれた景観を概ね保持しているとみられる。左脇（北側）は比較的小ぶりの石材が主に用いられるが、背面（東側）～右脇（南側）は大型の立石も目立ち、岩山状を呈する。岩石種は戸室石・滝坂石が主体となっており（⑦・⑧）、福浦石は少ない。数量では戸室石がやや多いが、大きさや配置の在り方からすると、滝坂石が目立つ。翠滝付近に比べると小規模であるが、蓮池庭を代表する石組と言える。

構築年代については、上記の通り、安政３年（1856）作成の「竹沢御屋敷総絵図」（第 43 表 62-21）に初めて描かれ、嘉永３年（1850）作成の「御城分間御絵図」（62-20）までは見られないので、この間である可能性が高い。

建物・名石（第 169 図⑦・第 171 図⑥）

蓮池庭に現存する近世建造の建物は、前述した夕顔亭（滝見亭･中島亭）のみである（第 169 図⑦）。「兼六園図」（第 43 表・第 153 図 62-24）に描かれる文久３～明治４年（1863～1871）頃の時点では、夕顔亭以外に高之亭、内橋亭、蓮池御門（長屋）等が残っていたが、明治の早い段階で撤去・移設されている（内橋亭は霞ヶ池池畔に移設）。建物基礎についても地表上には認められない。

黄門橋の東詰北側には、獅子巌（獅子石）と呼ばれる自然石が置かれている（第 171 図⑥）。全長１m程度の比較的小規模な自然石で、岩石種は滝坂石である。名称の通り獅子あるいは狛犬を思わせるような形状を呈する。「太梁公日記」安永３年（1774）５月 10 日の条に「獅子ノ自然石」（第 38 表 61-11）との記載があり、この石を指すものと考えられている。滝坂石の利用として比較的古い事例に属する。

馬場（第 173 図）

馬場は敷地の北西にあり、平場の形状をよく留めているが、明治期以降茶店が進出し、現在茶店通りとなっている（第 173 図①）。また馬場の北端近くでは、茶店の改修に伴い発掘調査が実施され、17 世紀初頭の屋敷地が検出されたが、庭園に直接関連する遺構については判然としなかった（②･③、前述２（１）、[石川県立埋蔵文化財センター1992]）。

註

1）平成 25 年８月 29 日の検討会・現地調査において、中田宗伯氏より御指摘頂いた。

①新清水 遠景 西から

②新清水 遠景 南から

③新清水

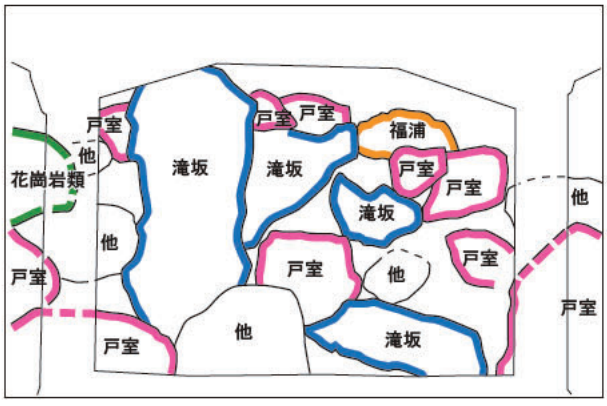
「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］
62-21 Ⅵ4期

④新清水 全景 西から

⑤新清水石組 北から

⑥新清水石組 南から

⑦新清水石組 近景

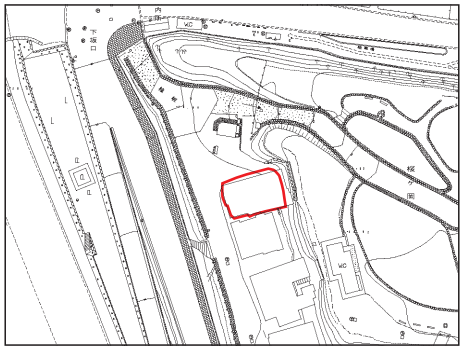


⑧新清水石組 岩石種構成

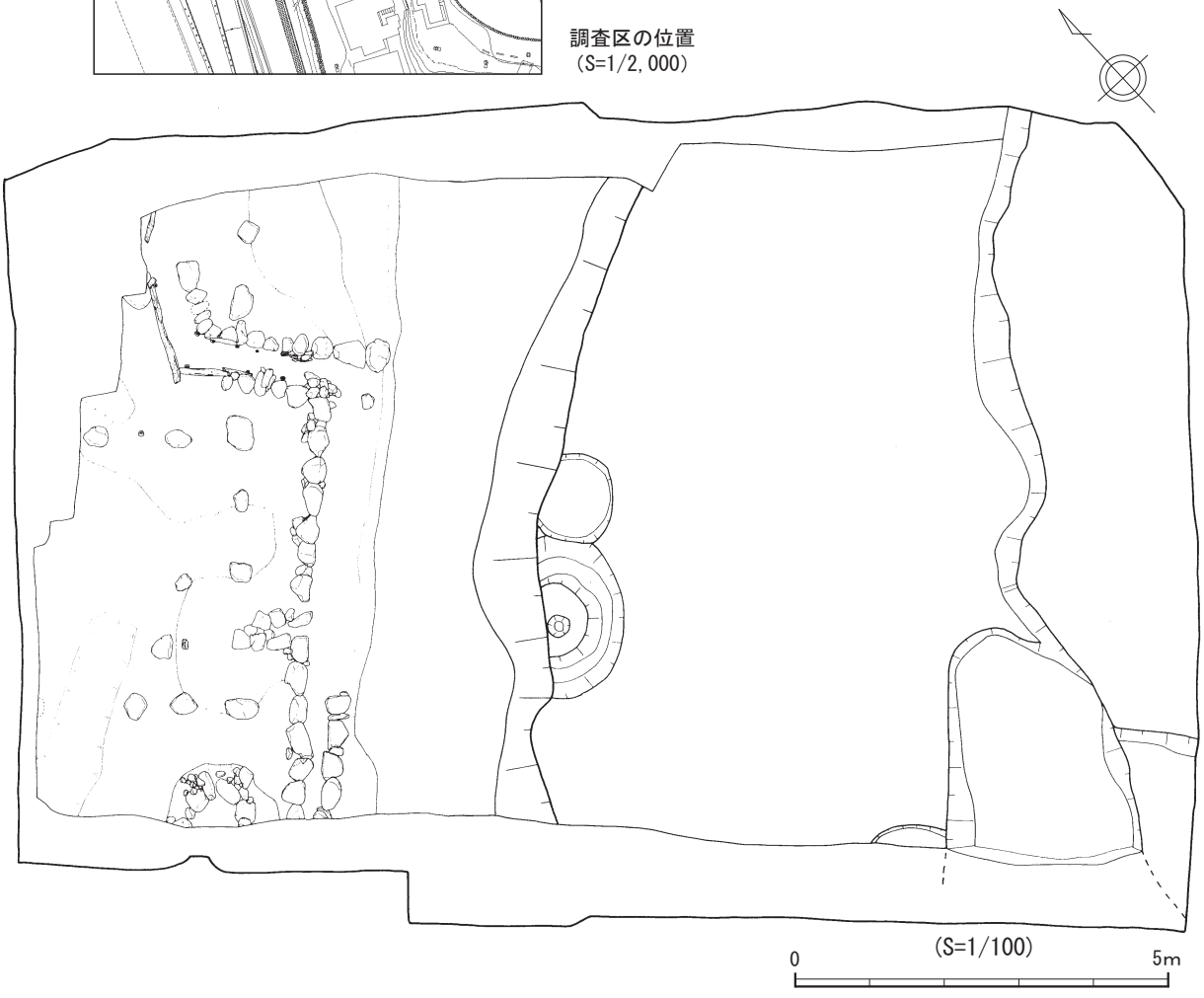
第 172 図　新清水写真・絵図

①馬場跡の現況　北から

②兼六園（江戸町跡推定地）第３遺構面 調査区と石川門



調査区の位置
（S=1/2,000）



③兼六園（江戸町跡推定地）第３遺構面全体図

②③:［石川県立埋蔵文化財センター 1992］PL23、第２，８図より転載・作成

第 173 図　馬場跡写真 兼六園（江戸町跡推定地）写真・平面図

4．各時期の様相

Ⅱ期（第 174 図）

構成等

延宝 4 年（1676）、当地にあった作事所が城内に移され、蓮池庭や御座敷（蓮池上御亭）等が造営された。工事は翌年も継続しており、同 6 年（1678）、一応の完成を見たようである。

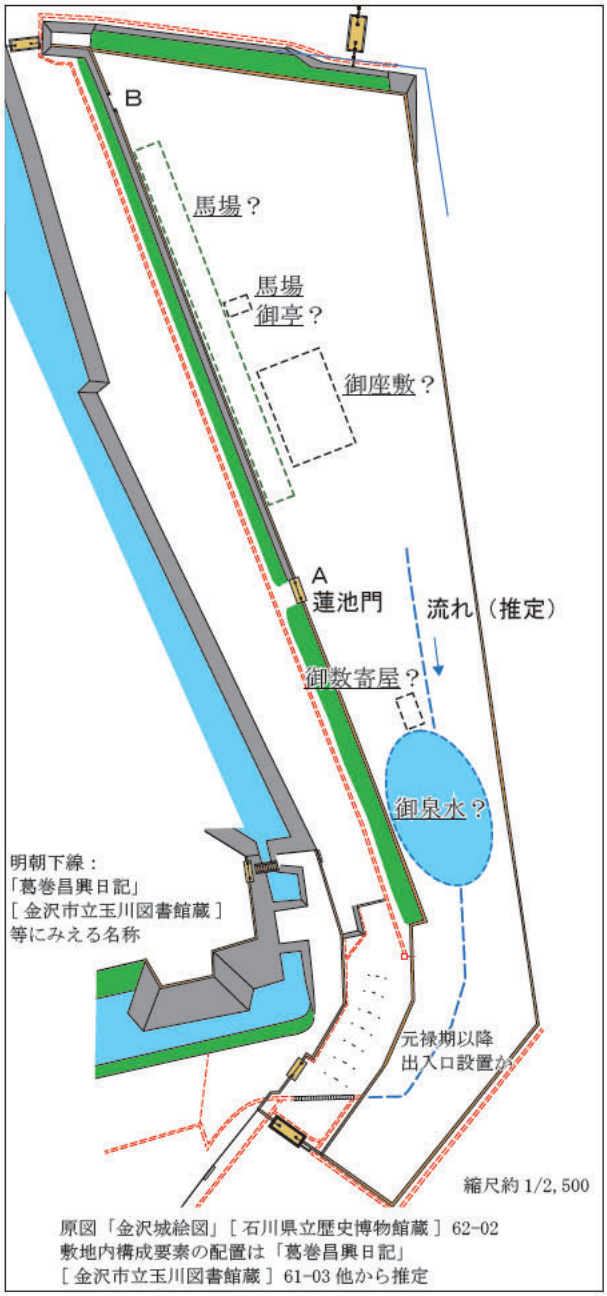
同年 12 月には重臣を招いた饗宴が行われており、この時の記録（「葛巻昌興日記」第 36 表 61-03）に、「蓮池御館」「御座敷」「御屋敷」「御数寄屋」及び「御泉水」の文言がみられる。［長山 2006b］では、「蓮池御館」は改まった言い方であり、「蓮池の高御屋敷」「蓮池の上御屋敷」という呼び方と同一とする。「蓮池御館」は第一義的には特定の建物群を示す名称と考えられるが、当該記事ではむしろ建物群を含む蓮池庭敷地一体を指していると思われ、「御座敷」「御屋敷」が敷地の中心を為す個別建物の呼称とされているようであり、一町（約 109 m）ばかり隔たった「御泉水際」には別に「御数寄屋」が設けられていた。

「御数寄屋」の呼称は当該記事のみで、本日記の別の箇所で「蓮池の上御亭」「蓮池の御亭」と呼ばれる建物と同一と推定されている。ただし蓮池亭の類称はこの後「蓮池の高（上）御屋敷」とも混同されていくという［長山 2006b］。この他、敷地には馬場と「馬場御亭」が設けられていた。

これらの施設を配した土地利用については、地形上の制約も関係し、18 世紀末期以降、絵図に描写された景観と大きく変わらないと思われ、「御座敷」「蓮池の上御屋敷」は高之亭（現・時雨亭跡）付近、「御数寄屋」「御泉水」は瓢池付近、また「馬場」「馬場御亭」は茶店通り付近に比定される。ただし高之亭と瓢池北岸は一町も離れておらず、一考を要する。

第 174 図は、以上の推定に敷地外郭を加えた配置概略図である。外郭線については「金沢城絵図」（第 42 表・第 144 図 62-02）を参考にしている。本図では、文献 61-03 に記載された「御座敷」からの距離に鑑み、「御数寄屋」「御泉水」を瓢池南半に想定している。これによると瓢池はⅡ期以降北に拡張したこととなる。あるいは瓢池の名称とも関連するのかも知れないが、もとより確証があることではない。

Ⅰ期には、石川門に近い西辺北端に出入り口があるが（「金沢城内絵図」、第 144 図 62-01）、Ⅱ期になると西辺中央に門が設けられた（A）。これが近世を通じて主たる出入り口となる蓮池門である。絵図 62-02 では北端の入り口がまだ



第 174 図　蓮池庭Ⅱ期庭園構成要素等配置図

描写されている（**B**）が、以降の絵図には明示されなくなる一方、西辺南側に１～２箇所の出入り口が見られるようになる。また外郭線については、Ⅰ期の 62-01 では土羽＋塀であるが、Ⅱ期の 62-02 では北辺から西辺北半が石垣となっている。ただし後出すると思われる「金沢城絵図」（第 145 図 62-03）では塀の表現のみとなる。

利用状況（第 45 表）

当該期には、①重臣等との饗宴、②藩主子女の遊覧、③馬場における馬の見分、④政務の場としての利用等が史料から読み取れる［長山 2006b］。

①は上述した延宝６年（1678）の他、貞享３年（1686）に４回確認されるが、あまり頻繁には行われなかったと思しい。延宝６年の饗宴は、蓮池庭披露の特別の行事で、口切の茶が振る舞われている特徴があり、［白幡 1997］ではこの茶事を築庭の契機とするが、［長山 2006b］では否定的である。

②では５代藩主前田綱紀の養女恭姫の利用（第 36 表 61-05）が抜きん出ており、「葛巻昌興日記」では綱紀以上に訪問していることが記されている［長山 2006b］。後述するⅣ期等でも同様であるが、藩主子女の利用頻度が最も高い。また③については①と一体化する場合もあるが、綱紀は蓮池庭の馬場を利用することが比較的多かったようである。

④については、庭園の利用とは言えないが、元禄９～10 年（1696～97）の数か月間、二ノ丸御殿修築のため、藩主前田綱紀がここで政務を執り、起居することもあったことが知られており、これ以降、「蓮池之上御殿」「蓮池之御殿」（61-06）とも呼称された。藩主が住まいし、執務できるだけの規模を持っていたこと、臨時とはいえ政庁機能を担える場であったことが特筆される。

Ⅲ期（第 175 図）

構成等

Ⅲ期の構成要素については、Ⅱ期以上に不明な部分が多い。享保 10 年（1725）の「蓮池御亭」取り壊しと庭園の改修をもってⅡ期との区切としたが、「蓮池御亭」が泉水縁の数寄屋を指すのか、中心建物としての「蓮池の上御屋敷」を指すのかが問題となる。［長山 2006b］では、庭園の改修を伴う工事が行われていることから、後者が相応しいとしている。取り壊し前の建物はそれなりの規模を有していたはずで、この点には違和感を覚えるものの、１年後にはより簡素な建物（「御亭」）が建てられており（「中川長定覚書」）、宝暦９年（1759）大火被災時（Ⅲ期末）の絵図（「金沢城類焼後御普請等被仰付候絵図」第 42 表・第 146 図 62-06）によると、敷地中央に建物を描き「蓮池御亭」としているので、［長山 2006b］の見方に従いたい。

新たな「御亭」は、６代藩主前田吉徳から床の間の仕様に細かな注文があったが（「中川長定覚書」第 37 表 61-07）、一方で簡素な建物でもあった。この建物がⅣ期以降も継承されたとみられる。またこの時「御腰懸」も遠景の見える所に設けられた（「中川長定覚書」）。［長山 2006b］が推定する通り、場所は蓮池庭北部で、後の「舟之御亭」の前身のようにも思われる。もっともⅣ期の項で後述するとおり、舟之亭以外にも小規模な建物があったようであり、特定は難しい。「中川長定覚書」にはこの他「御弓場亭」がみえるが、畳替えが行われており、新設の建物ではないようである。［長山 2006b］ではこれを「馬場御亭」のこととする。またやはり中川長定の手になる「若年寄方諸事控」（金沢市立図書館加越能文庫）には、泉水に浮かべる「御召舟」に関する記事もあり、これに関わる施設も設けられていた可能性がある。

第 175 図は、上記構成要素の推定配置状況と絵図から得た外郭線・門等の位置を合成した概略図である。Ⅲ期に該当する絵図には、大別３種がある（第 42 表・第 144～146 図 62-04～06）。18 世紀前半～中頃の景観年代と推定される「金沢城御殿絵図」（第 144 図 62-05）は、敷地北側において実際の地形との齟齬が大きいが、辰巳用水の経路が描かれており、第 175 図の外郭線は本図を原図とした。本図によると辰巳用水は敷地東側中央から進入し、「ハコ樋」で北に折れた後、「大桝」に達して

いる。大桝から北では「登り岡樋 三間二尺斗」との文字記載があり、以降は埋樋となるようである。「登り岡樋」については未詳であり、後考を俟ちたい。また中心建物である蓮池亭については、「金沢城類焼後御普請等被仰付候絵図」（第 146 図 62-06）に、簡略ではあるが位置が示されている。

なおこの他、享保 11 年（1726）に「御書院」「御数寄屋」「御亭」「御庭籠御座鋪」を記載する史料がある（「旧記・御作事方留帳」（加越能文庫）金沢市立玉川図書館蔵、[石川県金沢城調査研究所 2014b P11]。前後の脈絡等判然としないが、「中川長定覚書」に記される動向との整合性等、課題とすべき点がある。

以上の通り、Ⅲ期の構成については、享保 11 年（1726）頃には蓮池亭、腰掛、御弓場亭があり、庭園についても改修を行っていることが判明するが、Ⅲ期を通じて存在が確認できる庭園建造物は蓮池亭のみで、庭園改修の実態を含め、全体的に不明なところが多い。

利用状況（第 45 表）

当該期には、①重臣等との饗応、②重臣達による拝見、③藩主やその子弟の遊覧、④藩主やその子息による馬場での乗馬、⑤鷹狩、⑥藩主近臣による騎射、弓術稽古等の事例がみられる。

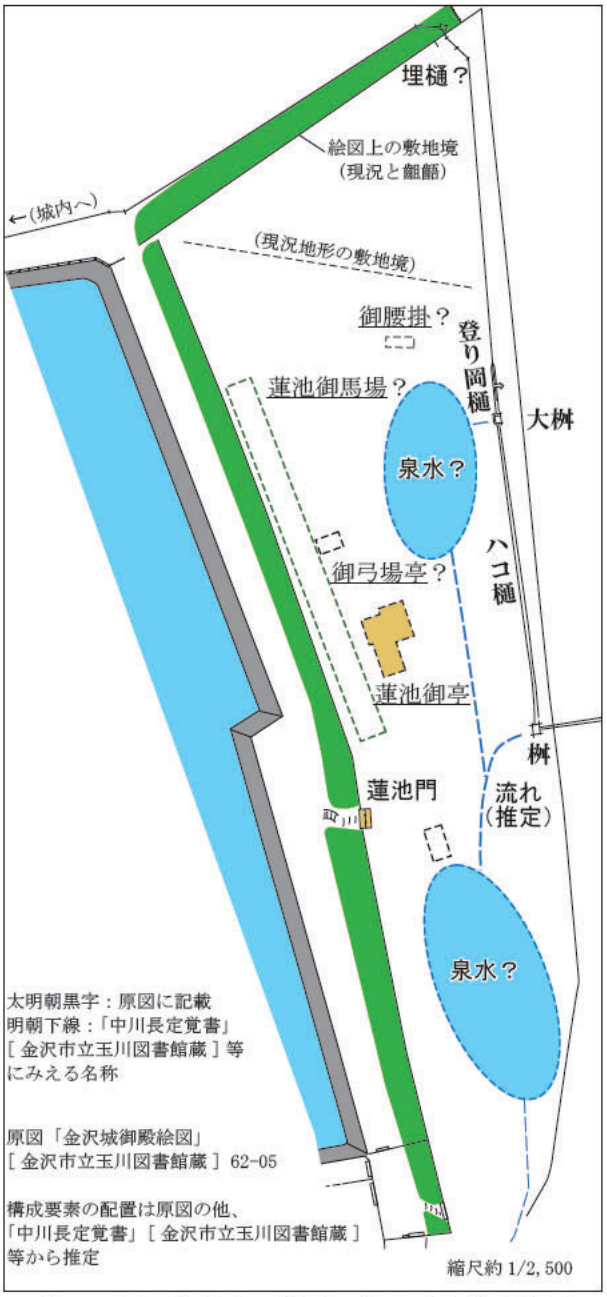
①については、８代藩主前田重熙の代、延享４年（1747）の紅葉見物にかかる遊宴が知られている（第 37 表 61-08）。[長山 2006b] では「重熙が藩主になって最初に入国した年であり…重臣達をねぎらい、交歓の機会としたのであろう」と推測している（P56）。この遊宴では、藩主本人が和歌を好むこともあり、重臣達も詩歌を作る等「文学の薫り高い催し」となった［長山 2006b P58］。また宝暦５年（1755）、10 代藩主前田重教の代には、幕府から派遣された国目付に対し、「蓮池御亭」で食事を供している（「御国江公辺ゟ御目附衆御越御用一巻之事」61-09）が、幕府関係者に対する蓮池庭での饗応はこの一例のみのようである。

②は①と類似する形をとるが、藩主の招きではなく、重臣達の拝見願いに応じたものであり、６代藩主吉徳の享保期の事例が知られている。③～⑥は①・②に比べ催事としての性質は低いようであり、記録に残らない事例も多いように思われる。③については 10 代藩主重教の母や姉、あるいは 11 代藩主治脩の養女といった女性が訪れている点が注目される。

Ⅳ期（第 176 図）

成立・契機等

蓮池庭も宝暦９年（1759）大火により、蓮池門が焼失する等の被害を受けたが、蓮池亭の方は焼け残る［長山 2006b］など壊滅的には至らず、しばらくは大きな変化はなかったものと思



第 175 図　蓮池庭Ⅲ期庭園構成要素等配置図

われる。画期は安永３年（1774）、前年からしばしば蓮池庭を利用していた 11 代藩主前田治脩が主導した、翠滝（七瀬滝）の改修と中島の亭（夕顔亭･滝見亭）造営によりもたらされた（「太梁公日記」）。また安永５年（1776）には、おそらくかつての「馬場之御亭」の後継として、改めて馬見所を兼ねた内橋亭が造営されるなど、18 世紀後半から末期にかけて次々と整備が進んだ。翠滝･中島亭（夕顔亭･滝見亭）・内橋亭は以後も存続し、現在まで受け継がれている蓮池庭のかなりの景観が、当該期に形成されたものと推測される。

造営体制

「太梁公日記」によると、普請・作事にかかる藩主の指示はかなり綿密であり、とくに当時七瀬滝と呼ばれていた翠滝に関しては、一旦完成したものの、滝の音が小さいことが満足できない旨を造営責任者であった藩士湯原典膳に伝え（第 38 表 61-11）、結局作り直させるに至っている（61-12）。

湯原典膳は当時、宝暦大火で類焼した二ノ丸御殿の表玄関等の再建にかかる御城造営方御用主付に任命されており、翠滝・中島亭の造営も併せて担当したと推測されている［長山 2006b］。中島亭についても、その設計図と思しき絵図を作成し、御用部屋（側近）の任にあった三宅権左衛門を介して藩主治脩に伺いを立てている［長山 2006b］。

なお露路方奉行とも言われる三十人頭については、後述の通り藩主治脩の蓮池庭利用時には日記に度々みえるのであるが、滝・亭造営にかかるくだりにはあらわれない。ただし三十人頭が差配したとみられる手木（足軽）が、園内にいた貉を「打殺令賞味」したとの話題が見え（61-12）、これらも現地の作業にあたっていたことを窺わせる。

構成等

当該期の敷地内部の状況が窺える絵画・絵図として、寛政４年（1792）作成・11 年（1799）補正と推測される「兼六園蓮池庭之絵図額」（第 42 表・第 145 図 62-07）、文化７年～13 年（1810～16）頃の内容と考えられる「金沢城内絵図」（第 146 図 62-08）、文政２～５年（1819～1822）頃の内容と考えられる「竹沢御殿絵図」（62-09）がある。62-09 はⅤ期との移行期に相当するが、地割や主な構成要素は前二者とほぼ共通している。

第 176 図は､62-09 を原図として製図し､各図の情報を併せて表示した。図中の**A**～**AD** は構成要素で、赤字は 62-07 のみに描写されていることを示す。また図左側には、構成要素の文字情報を提示した。赤字は 62-07、緑は 62-08 における記載を示す（62-09 には文字情報がみられない）。

区画施設

庭の外郭は、62-07 では低い石積を伴った塀の表現となっている。西辺中央の蓮池門（**A**）の他、62-07・09 では南側（**B**）、62-07 では東側（**C**）に小規模な出入り口らしき施設が描かれている。

泉水等

流れ（**D**）は北東高台から流れ込むが、園内に入って南北に分岐する。北の流れは大きく湾曲して南に転じたところで､淵状の池（**E**・**F**）を形成する。南の流れと合流した後は幅を狭め､南部の池（**J**）に至っている。この間に 62-07 では３基、62-09 では４基の橋が描かれている。

北東の橋（**G**）は、62-07 では木組に土を置き芝を貼った土橋状に見える。中央は木橋（**H**）で、62-07・09 ともに岸から斜め上方に突き出した拮木で橋体を支える刎橋として描かれている。62-07 には「愛本の橋うつし」との注記がある。愛本橋は越中国黒部川に架けられた長大な刎橋で、急流を跨ぐ奇観がよく知られていた。名所を模した見所を設けることは、大名庭園に一般的な趣向であるが、金沢城庭園ではあまり見られない。ただし刎橋については蓮池庭の他、玉泉院丸・金谷出丸に類例がある。南側の橋は石橋（**I**）であり、全体的な位置関係から見て、現存する黄門橋に比定されよう。

池**J**は現在の瓢池で、流れ**D**が注ぎ込む他、その築造が画期となった滝（**K**）が東の高台から落下している。現在の翠滝である。なお滝口の北側には層塔（**M**）が描かれるが、これは近代初期まで

長く残っていた。なお石塔は北側の池Fの南側にも描かれている（L、62-07・09）。池Jには中島が3基あり、北側には、翠滝と同時期に整備された亭（N）が閑所（雪隠）を伴って建つ。現在も遺存する夕顔亭である。前述の通り別称が多く、「太梁公日記」では「中島亭」の名で呼ばれるが、62-07では「ゆふかほの御亭、瀧見の御ちん」、62-08では「滝見御亭」と記されている。この亭のそばには2基の手水鉢が注記付きで描かれていて、南側は現存の坪野石製品と整合するが、北側の方は「しぐの御手水鉢」とあって、現存する硅化木を利用した手水鉢との対応関係は不明である。

中島は62-07では3基の橋で池岸と結ばれており、北側は石橋（O）、中央は橋Gと同様の土橋状（P）を呈し、南側はいわゆる八つ橋の形状（Q）となっている。Pは「太梁公日記」にみえる「柴橋」の可能性が考えられる。またQについては「高畠厚定職事日記」において、寛政元年（1789）四月に出来したとする八つ橋とみられる。ただし特徴的な形態ながら62-08・09では描かれていない。

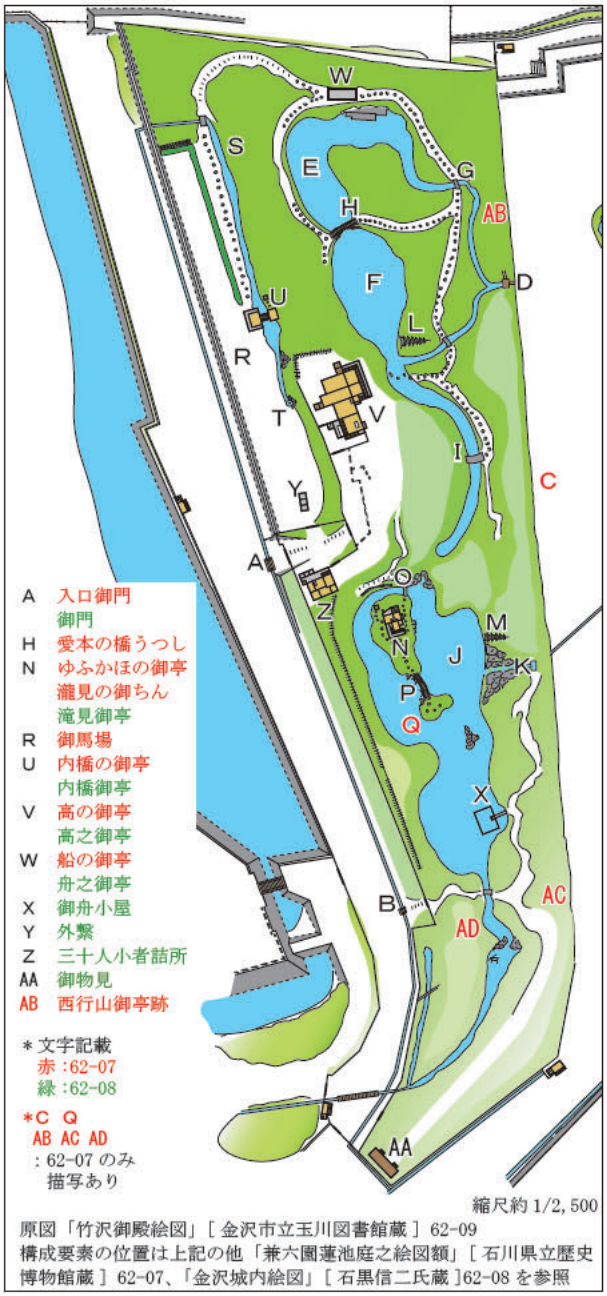
なお絵図には見られないが、「太梁公日記」には、池J付近に「舟橋」、また水禽猟にかかる「小屋」「寄垣」等の施設があったことが記されている。

園内の泉水はもう一か所、敷地北西において南北に延びる馬場（R）の東側崖沿いに流れ（S）が認められる。62-07とセットで作成されたと推定される藩士津田正身（政本）の拝見記（「蓮池庭之図」第38表61-14）には、馬場のほとりに「清泉」があり、（水が）湧出していると記す。62-07・08では明確ではないが、62-09では高之亭のある高台の下に井戸状の施設（T）が描かれ、ここから発した流れSは北に向かい、園外の水路に連結している。井戸状施設Tが「蓮池庭之図」の「清泉」であろう。「兼六園絵巻」に描かれた「臼水」（第154図62-25下）のこととみられる。現在は茶店通りの一角で、流れともども遺構は確認できず、辰巳用水を水源としない湧水ではなかったかと思われるが、判然としない。

流れSの中流には、安永5年（1776）造営とされる内橋亭（U）が位置する。流れを挟んで馬場に臨む西側の座敷と、崖を背後とする東側の座敷がそれぞれ独立しており、名称の由来となった橋により両建物が連結される形をとる。廃藩後しばらくして旧竹沢庭霞ヶ池池畔に移設され、大規模な改修を受けつつも今日まで形状を維持している。

建物他

滝見亭（中島亭・夕顔亭）・内橋亭の他、この段階の建物には、Ⅲ期から継続する敷地中央の高之亭（蓮池亭・V）、敷地北部の舟（船）之亭（W）、さらに池Jの南側に船小屋（X）、蓮池門の北側に馬繋（Y）、南側に庭の管理を担当した三十人組の詰所（Z）、敷地最南端に物見所（AA）等が



原図「竹沢御殿絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-09
構成要素の位置は上記の他「兼六園蓮池庭之絵図額」［石川県立歴史博物館蔵］62-07、「金沢城内絵図」［石黒信二氏蔵］62-08を参照

第176図　蓮池庭Ⅳ期庭園構成要素等配置図

みられる。このうち舟之亭は、「太梁公日記」安永３年正月二十日の条にみえるが［長山 2006b］、創建年代は明らかではない。62-07 に描かれた姿は、まさに舟の形をしており、腰懸のような簡易な建物であったろう。

また 62-09 には、泉水沿いの他、主に東側斜面地に飛石のある園路が描かれており、Ⅴ期以降とはやや異なる景観描写となっている。

この他 62-07 には、園内最高所とみられる北東部に「西行山の亭跡」（**AB**）や筥状の施設、南東部にも金工師後藤程乗ゆかりとする手水鉢等（**AC**）や流れの底に敷瓦を設けた箇所（**AD**）が描かれるが、これらについては 62-07 以外の情報が少なく不詳である。西行山亭跡は、この時点で既に建物は失われているので、Ⅲ期以前に造営されていたのかも知れない。もっとも広大な近世庭園では、廃墟を見所とすることも知られており［小寺 1989］、蓮池庭でもその趣向が取り入れられた可能性がある。

Ⅳ期は現存の蓮池庭に繋がる構成がほぼ固まった段階と言えるが、一方で舟之亭のように、18 世紀末～19 世紀初頭のうちで姿を消すものもあり、その点で当該期が庭園として最も完備された段階でもあったようにも思われる。

利用状況（第 45 表）

Ⅳ期の利用状況については、「太梁公日記」を主とし、さらに「高畠厚定職事日記」（金沢市立玉川図書館加越能文庫）や津田正身（人持組）、前田直養（前田土佐守家）ら高禄藩士の拝見記等、各期を通じて最も記録が多い。

「太梁公日記」に見える当該記事については、［長山 2006b］において詳細な検討がなされている。また「高畠厚定職事日記」も併せ、前者では安永２年（1773）８月～３年（1774）７月、後者では天明８年（1788）・寛政元年（1789）の利用者・回数等が集計されている（同書 P69 表２、P104 表３）。

「太梁公日記」に見える約１年間において、藩主前田治脩が蓮池庭を訪問した回数（日数）は 26 回を数える。最も多い利用の在り方は、水鳥等を対象にした猟（第 37 表 61-10）である。鳥猟に際しては、近習や三十人頭、川役の者名等に毎朝のように見分・報告させている水鳥の寄り付きの状態を見計らって出掛け、帰途に高之亭（蓮池亭）で軽食を摂ることが多かった。この他、蓮池馬場における藩士の騎射の見分、自身の乗馬、中島亭（滝見亭・夕顔亭）や翠滝造営の見分、側近や医者等を引き連れての巡遊、新築の中島亭での茶事等がある。巡遊・茶事ともに藩主に近侍する者とのみ行われており、年寄・家老層へのもてなしは認められない。

また「太梁公日記」には、兄である先代藩主重教の娘で自身の養女とした頴姫に関する記述も多く、都合５回の蓮池庭への訪問記事がみられる。

「高畠厚定職事日記」では、寛政元年（1789）の３月～11 月の間は、何らかの理由で記載が欠如した８月を除いても、藩主一族の利用は 37 回に及んでいる。このうち藩主治脩の利用は２回に留まり、主体は前藩主重教の子女と治脩の婚約者俊姫に主体が移っている。３月・５月が多いが、藩主一族による毎月数回の利用があったことが判明する。

以上のように、寛政初年までの史料では、藩主自身やその子女、あるいは側近といった範囲に関連する利用の記事が多いが、寛政３年（1791）・４年（1792）・11 年（1799）には、年寄・家老・若年寄等、重臣を対象とした饗応が行われている（第 38 表 61-13）。先に紹介した「兼六園蓮池庭之絵図額」（62-07）は、津田正身が寛政４年の経験を元に絵師に描かせ、更に寛政 11 年の饗応後に修正したものとされる。「蓮池庭之図」（第 38 表 61-14）は、この絵画に添えられた文章であった［長山 2006b］。

このうち寛政 11 年については、「元禄寛政間手記抄」（『加賀藩史料 10』収載、P925～926。原本は「前田直養覚書」（前田土佐守家資料館蔵）［長山 2006b］）として詳細な拝見記が残されている。10 月 23 日、藩主治脩より年寄・家老等重臣に対し、蓮池庭の紅葉を見物するようにとの達しが出された。一同は三十人頭（露地方奉行）の先導で蓮池門から上の御亭（高之亭）に通され、ここで亭の内部や付随す

る露地を見物した後、庭園内を下記の通り一巡している。

上の御亭（高之亭）→（ひよどり越え）→内橋亭・馬場→舟の亭→滝見亭（中島亭・夕顔亭）・滝（翠滝）・手水鉢（「伯牙断琴」）→上の御亭

ひよどり越えは、この史料にのみ見える名称である。上の御亭から馬場の方へ降りる経路に相当し、現在は直下に茶店が立ち並び旧状は留めていないが、さほどの高さはないもののかなりの急斜面に復元されるので、「平家物語」で名高い地名に擬えたのであろう。いずれにせよ「愛本橋うつし」と並び、蓮池庭では数少ない名所にちなんだ見どころのひとつである。

上の御亭に戻ると、改めて近習頭・御用部屋から藩主治脩の御意が伝えられた後、菓子・薄茶が供された。饗応と言っても藩主はその場に臨席せず、庭園の見物（拝見）自体が主目的となっている。

［長山 2006b］では、寛政３・４年は、蓮池庭の東側高台の揚地における学校建設、寛政 11 年は藩主治脩の結婚披露、または地震の後始末等があり、年寄・家老への慰労として、蓮池庭拝見が許されたとするが、一方で拝見できる階層が限られており、また頻繁に行われなかった点に留意している。

Ⅴ期（第 177 図）

成立・契機等

隣接地における竹沢御殿の造営にかかり、蓮池庭の性格が大きく変わった時期である。地割や主要構成要素の配置等、Ⅳ期からⅤ期、あるいはⅤ期からⅥ期の変容は、同時期以後における竹沢側の著しさに比べると目立たないと言える。

構成等

第 177 図は、竹沢御殿造営後の状況を示す「竹沢御殿御引移前総囲絵図」（第 42 表・第 148 図 62-12）を原図とする。

Ⅳ期までは、東側高台にあった学校敷地とは往来（道路）で隔てられていたが、竹沢御殿の造営に伴い、文政３年（1820）に往来が廃され、蓮池庭はこれに取り込まれることとなった（第 38 表 61-15）。この時、蓮池庭東側の塀は撤去されたとみられるが、北半の竹沢御殿主要部とは、水道（樋）上門（**A**）とここから南へ延びる塀による仕切りが設けられたので、一体化したわけではなく、蓮池庭は御殿外庭として扱われた。ただし南半の下部屋方から馬場に至る広い空閑地との間は、明瞭な区画施設がみられない。

蓮池庭の出入口は、正門と言える蓮池門以外、Ⅳ期ではあまり明瞭でなかったが、Ⅴ期では北側に内桝形状の水道（樋）脇門（**B**）、南側に長谷門（**C**）がある。もっともこれらは、蓮池庭側に立ち入ることはできるものの、むしろ竹沢御殿に通じる経路上の出入口とみられる。水道（樋）脇門**B**から東側は、竹沢御殿北縁に沿う「蓮池往来」「役人往来」に通じ、南側へ進むと水道（樋）上門**A**に至る。長谷門**C**は、蓮池庭南端を東西に横断する掘割状の通路（**D**）西端に位置する。通路**D**の東部は北へ急角度に曲がるとともに上り坂道（**E**）となって川口門（**F**）内に至っている。通路**D**はⅥ３期までには廃止され、埋め立てを受けたらしく、嘉永３年（1850）の「御城分間御絵図」（第 180 図原図）以後の絵図には描かれていない。現況でも確認できず、その通路**E**自体の痕跡は不明瞭であるが、竹沢側の高台に連なる斜面末端としての地形的特徴は良好に留めている。

Ⅴ期の主要構成要素については、敷地北側の湾曲する流れと淵状の池や、その周辺にあった舟之亭、愛本橋写しの木橋等が見られなくなっている。敷地南側の変化は少なく、上記の通り、門や通路が加わっているが、竹沢御殿との関わりによる。

利用状況（第 45 表）

Ⅴ期は蓮池庭が竹沢御殿に付属する形となった時期であるが、具体的にどのように利用されたのかは判然としない。ただし敷地北半の泉水が埋め立てられたのは、水田への改変等、新しい何らかの供用計画があった可能性がある。

Ⅵ期（第 178～181 図）

成立・契機等

竹沢御殿の取り壊しが進むが、竹沢庭＝内庭、蓮池庭＝外庭の関係は変わらず、警備等に関わる格式も、前者の方が高い状況が続いた。

造営・管理体制

当期の管理体制については、［長山 2006b］に一項を設けて詳しくまとめられており（P214～P217）、以下に略述する。

天保９年（1838）閏４月 29 日、藩主斉泰の意向により、蓮池庭・竹沢庭の管理体制について、露地方（三十人組頭）から、藩主の側近の事務を司る御次に変更することとなった（「成瀬正敦日記」第 39 表 61-22）。先代藩主（斉広）正室真龍院の入国を受けて「真龍院が蓮池庭に訪れる場合、御次から直接指示できるよう改めたと考えられる」［長山 2006b P215］。

御次の配下として新設された役職が「竹沢并蓮池御庭方」主付で、台所方の与力の兼役だったと推定されている。ただし管理体制変更後も、現場作業には三十人組（露地方）が関わっていた（「諸事要用雑記」嘉永２年９月 11 日条）。

なお、天保 11 年（1840）に竹沢庭内の普請･作事作業について城代が見分している事例があり（「村井長貞日記」第 40 表 61-24）、最高管理責任者の立場にあったと考えられる。

構成等

地割・区画等については、Ⅳ・Ⅴ期から大きな差異は認められない。ただし構成要素の形状や構造等に若干の変化が看取される。竹沢庭では、次のⅦ期に並行する段階（竹沢庭Ⅳ期）にも変容が進行するが、蓮池庭においては、現存する構成要素の景観がほぼ確定した時期と言える。

第 178～180 図は、「金沢御城内外御建物絵図」（Ⅵ１期、第 42 表・第 149 図 62-16）・「竹沢并蓮池御庭御囲之図」（Ⅵ２期、第 43 表・第 150 図 62-18）・「御城分間御絵図」（Ⅵ３期、第 43 表・第 151 図 62-20）の各絵図を原図とする。また第 181 図は、「竹沢御屋敷総絵図」（Ⅵ４期、第 43 表・第 151 図 62-21）を原図とし、現況地形に合わせて調整している。以下Ⅴ期（第 177 図）とも比較しつつ、各時期構成要素の特徴とその変容を併せて検討する。

泉水

瓢池（**G**）は、Ⅴ期（第 177 図）の段階では西岸に岬状の突出があり、文字通り瓢形を呈していたが、Ⅵ１期（第 178 図）以降は直線化している。このことから、瓢池の名称はⅤ期以前からあった可能性も考えられる。またⅣ期以来､池南側にあった船小屋（**H**）は､場所をかえつつⅥ３期（第 180 図）まで存続するが、Ⅵ４期には撤去され（第 181 図）、以後その跡地は陸地化している。

池に注ぎ込む流れは、Ⅵ２期（第 179 図）までは北からの**I**と、翠滝を形成する**J**のみであったが、Ⅵ３期（第 180 図）以降、池南端に接続する経路（**K**）が成立した。また池から流れ出す排水路については、Ⅴ期は１箇所（**L**）、Ⅵ１・２期は３箇所（**O**・**N**・**M**）、Ⅵ３・４期は２箇所（**O**・**M**）に変遷する。南端の**M**と敷地西辺の排水路が合流する箇所には大桝があり、金谷出丸へ向かう埋樋が分岐していて、現況でも確認できる（第 165 図①）。文政 13 年（1830）作成の「御城中壱分碁絵図」には、兼六園の主要部は描かれていないが、大桝と埋樋は表現されており、Ⅵ１期以後、桝の位置は移動していないことが看取される。一方Ⅴ期以前の大桝については､その存在も含めて情報に乏しくはっきりしない。なお、現況では暗渠を含め３箇所の排水路が機能しているが、近世の遺構は北側の１箇所（**O**）のみとなっている。

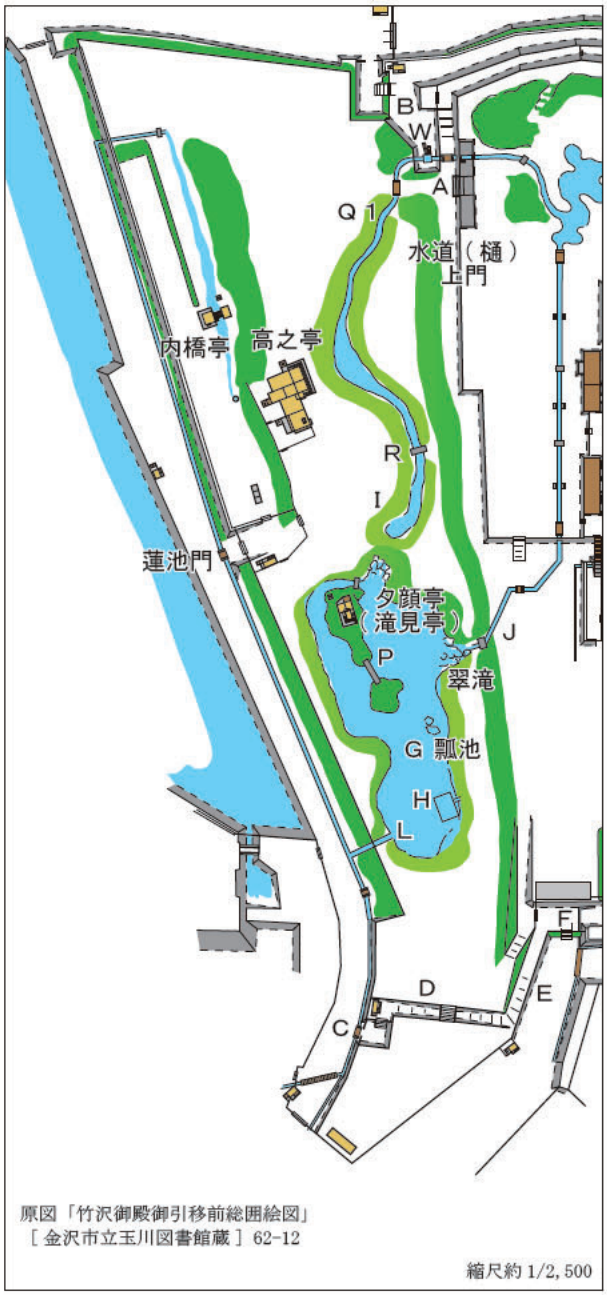
橋については夕顔亭（滝見亭・中島亭）のある北側中島と中央中島との間に架る橋（**P**）が、Ⅵ２期に石橋となっている（第 179 図、拡大第 156 図上）。絵図の表現から、現在の日暮橋の意匠・形状はこの頃に成立したと判断される。Ⅵ２期には日暮橋**P**の西側にも池西岸に向かって板橋らしき橋（**T**）

が架かり、Ⅵ3期（第180図）には現況の汐見橋とほぼ同じ位置となっている。また黄門橋（R）は、前代のⅣ期には石橋として史料に見えるが、Ⅵ1期（第178図）以降の絵図には西岸側に受石が表現されるようになる。

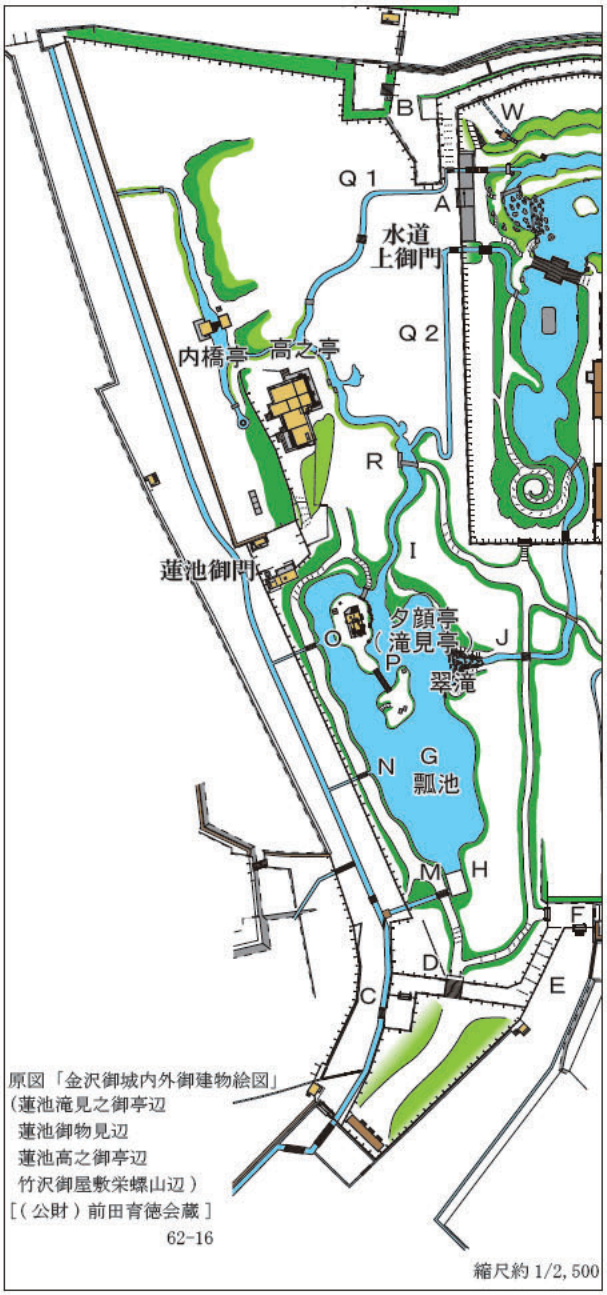
敷地北側では、竹沢側からの流れの経路（Q）に変化が認められる。Ⅴ期（第177図）には水道（樋）上門長屋下を通る1経路（Q1）で、Ⅵ1期（第178図）に水道（樋）上門南側を通って黄門橋（R）付近で流れQ1に合流する経路（Q2）が加わるが、Ⅵ3期（第180図）以降、竹沢庭からの流出口はQ2、流れ本体はQ1を踏襲する形状（Q3）となる。

この他、Ⅵ期中に出現する構成要素として噴水（S）・新清水（U）・水田（V）が挙げられる。

噴水Sは、高之亭の東側流れ中に設けられており、文久元年（1861）構築とされるが、これは同年に金沢城二ノ丸に噴水が出来したとの史料（「御用方手留」第14表31-39）を基に、蓮池庭の噴水をその試作と考える見方から導き出されたものらしく、論拠は確かとは言えない。



第177図　蓮池庭Ⅴ期庭園構成要素等配置図

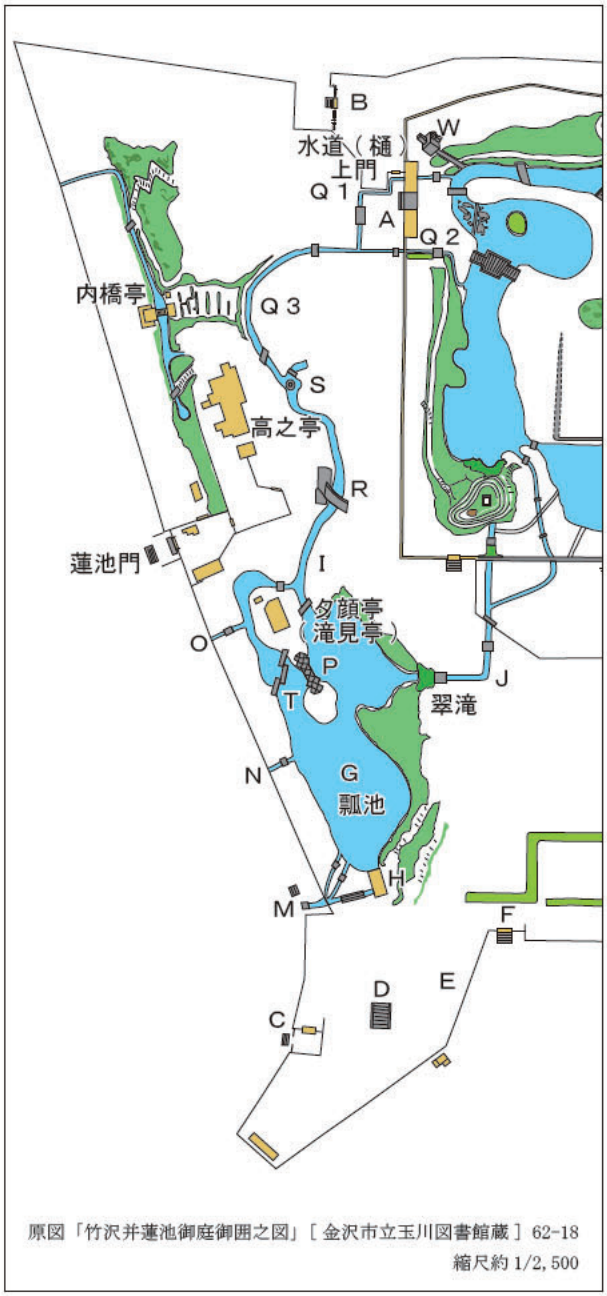


第178図　蓮池庭Ⅵ1期庭園構成要素等配置図

［長山 2006b］では、「兼六園古図」（蓮池庭図）（第 152 図 62-22）の景観年代を天保以降（1830）から万延元年（1860）までに比定し、さらに嘉永４年（1851）以降の可能性を示唆した上で、噴水本体部分に想定される箇所は破損していて不明ながら、噴出した水らしきものが描かれていることを指摘している。「兼六園古図」（蓮池庭図）（第 152 図 62-22）には天保 10 年（1839）建立の栄螺山の石塔が描かれているので、これ以降の景観年代が確かなところと思われる。

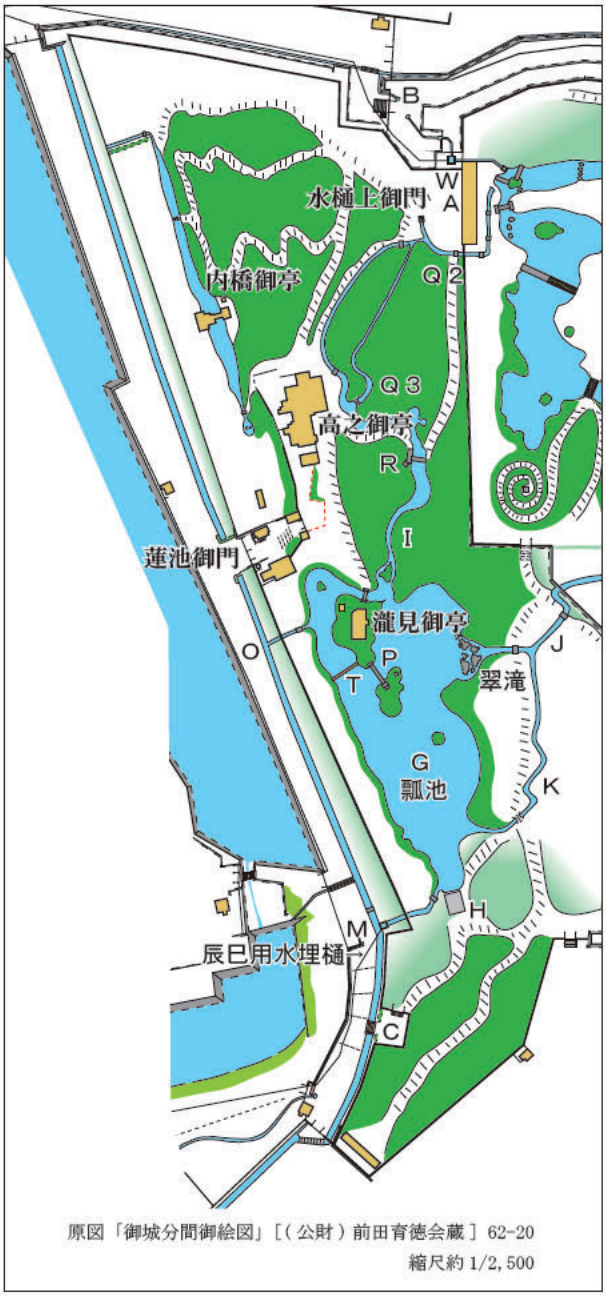
Ⅵ２期の「竹沢并蓮池御庭御囲之図」（第 179 図原図）やⅥ４期の「竹沢御屋敷総絵図」（第 181 図原図）には、高之亭前の流れの中に平面略円形の構造物が描かれている。特に前者は井戸筒状に表現されており、石灯籠等ではないとすれば、噴水の可能性が十分考えられる。

新清水Ｕについては、前述（３項）した通り、嘉永３年（1850）～安政３年（1856）の間（おそらくⅥ４期）に構築されたと考えられる。水田Ｖについては、Ⅵ２期の「竹沢御殿・兼六園並御鎮守古絵図」（竹沢御殿・兼六園）（第 43 表・第 150 図 62-19）に、流れＱ１・Ｑ２間に「田」と文字記載さ



原図「竹沢并蓮池御庭御囲之図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-18
縮尺約 1/2, 500

第 179 図　蓮池庭Ⅵ２期庭園構成要素等配置図



原図「御城分間御絵図」［（公財）前田育徳会蔵］62-20
縮尺約 1/2, 500

第 180 図　蓮池庭Ⅵ３期庭園構成要素等配置図

れるのが絵図上の初出となる。ただしこの図では流れQ２から水を引いている様子が窺えるので、水田の成立は、流れが最初に確認できるⅥ１期（第178図）まで遡る可能性も考えられる。Ⅵ４期（第181図）ではこの箇所の他、敷地北端（現・桜ヶ岡）一帯に、水田とみられる地割がある。ただし上記の絵画「兼六園古図」（蓮池庭図）（第152図62-22）では、両箇所は平地状に描かれ、水田かどうか明瞭ではない。

なお、辰巳用水の城内二ノ丸への起点となる「大桝」（W）については、時期によって蓮池側・竹沢側に交互に移設されており、第７節の竹沢庭で触れることとする。

利用状況（第45表）

13代藩主前田斉泰は、天保９年（1838）の前藩主斉広の正室真龍院の金沢下向に先立って、主に竹沢庭の普請を行っており（第39表61-19・20）、絵図にみえるⅤ期からⅥ１期にかけての変化に対応するものと考えられる。

真龍院は、天保９年９月６日に初めて蓮池庭・竹沢庭を訪れ、翠滝の景観を歌に詠んでいる。その後も真龍院・藩主斉泰・世子慶寧・斉泰生母栄操院や基五郎・豊之丞等慶寧の弟達などの藩主一族が、時には連れ立って蓮池庭・竹沢庭を利用している。これらのうちには、蛍や花火等、季節の風物詩を見物することもみられた。なお、斉泰・慶寧やその弟達の場合、蓮池馬場での射術見分や鷹狩りを行うこともあった。また、支藩である大聖寺藩関係として、第10代藩主正室寿正院や第14代藩主前田利鬯が蓮池庭を訪れているが、前者は本藩藩主斉泰の妹、後者は子息であり、血縁としては本藩の一族と同等であった。

藩主家以外の利用としては、京都御典医の事例（第40表61-26等）が知られており、二ノ丸御殿内等とともに蓮池・竹沢庭の拝見を願い出て、許可されたものである。

藩士達の場合は、藩主斉泰や世子慶寧の蓮池馬場での射術見分の後、側近らが斉泰・慶寧につき従って庭を廻った事例や、城代の庭園見分にあわせて、重臣達の拝見が許可された事例（嘉永５年（1852）８月27日等）が知られる。後者はⅥ３・４期のことであるが、重臣達の拝見願いは城代（年寄役）が取り次いでおり、酒食が供されることもなくなった。[長山2006b]では、庭園が「藩主による年寄・家老らに対する饗応の場ではなくなった」として、Ⅳ期以前からの大きな変容をここに認めている（P236）。

以上の通り、藩主一族以外の利用は極めて限定的であったが、唯一の例外として、嘉永５年（1852）の竹沢鎮守天満宮九百五十歳神忌に際し、４月27日・29日・晦日・５月１日・２日の５日間に限り、

原図「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-21
＊現況測量図により調整　　縮尺約1/2,500

第181図　蓮池庭Ⅵ４期庭園構成要素等配置図

家中・町方男女に参詣及び蓮池庭拝見を許可したことが挙げられる（第 40 表 61-30）。不特定多数への開放は、明治４年（1871）に至るまで、この一度だけであった。

Ⅶ期（第 182 図）

成立・契機等

万延元年（1860）、敷地東側の竹沢庭との境界施設が取り払われ、両敷地が名実ともに一体化した段階である。

［長山 2006b］では、複数の史料を丹念に突き合わせることで、両庭園間にある最大の出入り口であった水道（樋）上門に、松平定信揮毫の「兼六園」の扁額が掲げられており、それゆえに兼六園門・兼六園長屋と呼ばれ、これが扁額ごと蓮池門側に移設された経緯を明らかにし、またこのことから、本来兼六園と呼ばれた範囲は竹沢庭であったことを論じている。兼六園門と庭園の呼称を巡る問題については、次節（竹沢庭）において後述する。

なおこの移設により、蓮池門の位置は従前より若干南側に変更され、現況に至っている。

造営・管理体制

しばらくはⅥ２期の「御庭方」体制が存続し、上記水道（樋）上門撤去、蓮池門側への移設についても、城代（奥村栄通）が見分している（「御用方手留」（第 41 表 61-34・35）。

明治２年（1869）６月の版籍奉還を経て、14 代藩主慶寧は金沢藩知藩事となり、「藩政と知事の家政が分離され」ることとなった［長山 2006b P253］。蓮池庭・竹沢庭も、明治３年（1870）11 月には中学西校・東校の設立に伴い、公には学校の管理となった。ただし知藩事の一族の利用に際してはほとんど制約がなかった（「恭敏公日記」［長山 2006b P253～P254］）。

構成等

第 182 図は、「兼六園図」（第 43 表・第 153 図 62-24）の内容を基本とし、「竹沢御屋敷総絵図」（第 151 図 62-21）により補足し、現況に合わせて調整した合成図である。Ⅵ４期との差異は、門建物の移設と連動するように、蓮池門周辺の番所や物置・園路等の位置・形状に変動が生じた程度と考えられ、竹沢庭側の著しさに比べ、蓮池庭側にはほぼ変化がなかったことが看取される。

ただし、明治４年（1871）には、高之亭の跡地に理学学校が設けられており、明治３年（1870）11 月以降の学校管轄下において、変化は既に生じていたと判断される。

利用状況（第 45 表）

これもⅥ期の状況と同じく、当初は藩主一族が目立ち、真龍院の他、13 代藩主斉泰の正室溶姫、また大聖寺藩の藩主ながら斉泰の子息である前田

原図「兼六園図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-24
「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-21　合成
＊上記合成図を現況測量図により調整（第 158 図参照）

第 182 図　蓮池庭Ⅶ期庭園構成要素等配置図

利邕等の訪問記録がある。

明治２年（1869）には、文久３年（1863）に新設された巽御殿（現・成巽閣）を御座所としていた真龍院の八十余の祝賀として囃子が挙行され（「御能御囃子組扣帳」第 41 表 61-40）、これに携わった能役者達は、前日に竹沢庭・蓮池庭の拝見が許されている。竹沢庭北東側から霞ヶ池付近を経由し、「蓮池御亭」（高之亭）・「夕顔ノ御亭」（滝見亭・中島亭）の飾付や翠滝の絶景に感歎した後、竹沢鎮守天満宮に参詣している。

状況が一変するのは明治４年（1871）２月のことで、藩庁により「四民偕楽之旨趣を以」「誰々に不寄、同所遊覧之儀不指支候事」と公開の布達が出された（61-41）。当初は与楽園との名称であったが、まもなく文政以来の美称であった兼六園となり、廃藩を待たず、四民に解放された庭園として、現代に通じる変貌を遂げることとなった。

５．小結

（1）現存遺構の来歴（第183図）

現存遺構については、３項においてⅦ期の「兼六園図」（第 43 表・第 153 図 62-24）との照合を中心に記述したので、その時点での存在を指摘したこととなるが、各時期の様相を踏まえ、主要なものを対象に改めて来歴を整理する。第 183 図には、現況では確認できない構成要素も加え、主な来歴の一覧を示した。

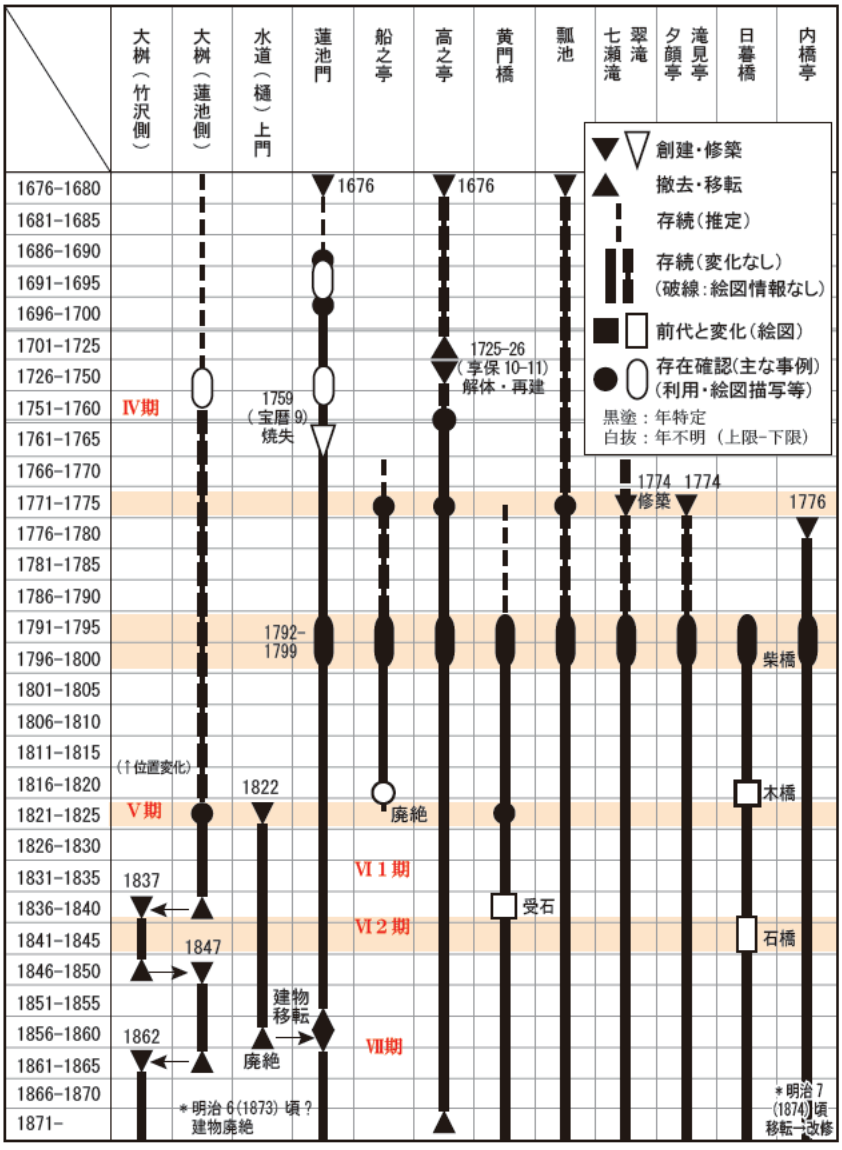
敷地・地割

全体の敷地造成については、Ⅰ期・Ⅱ期におおよそ行われ、土地の高低等の基本は、現在まで引き継がれているものと推定される。また、北西部に馬場、中央部に主要な建物と出入り口、南側に池泉を配置するという全体構成も、Ⅱ期において定まり、やはりⅢ期以降に継承されていると考えられる。

敷地周囲

北辺の石垣のうち、部分的に露呈している上部については、竹沢御殿造営時に遡る可能性があるが確定は難しい。また西辺の水路石積のうち、古相を呈するとした部分についても、いつまで遡及できるかは明確にできない。

蓮池門石段は、万延元年（1860）の水道（樋）上門＝



第 183 図　主な構成要素の来歴（蓮池庭）

兼六園門の移設を機に原形が形成されたと考えられる。蓮池門の南側に位置する小滝を伴う水路は、Ⅵ１期から同位置に存在している。

南部の敷地南端となる、広坂側に下る斜面は、竹沢御殿造営時（Ⅴ期）では、蓮池堀側と竹沢御殿南側を結ぶ通路（坂道）の基盤となっていた。Ⅵ３期には廃絶されたとみられ、Ⅵ４期の詳細な「竹沢御屋敷総絵図」（第 151 図 62-21）等では道として描写されておらず目立たないが、痕跡を明瞭に留めた事例である。

瓢池周辺

瓢池一帯は、近代以降にも、夕顔亭が立地する北部中島が北岸と地続きとなる等の変化はあったが、これらを除くと、おおよそⅥ２期のうちに現在の景観に近づいたものと考えられる。

瓢池の原形は、遺構から明確にできるわけではないが、おそらくⅡ期まで遡るとみられる。夕顔亭はⅣ期･安永３年（1774）の建造、翠滝も同年に修築された姿から大きく変わっていないと判断される。この他、日暮橋の前身となる「柴橋」が同時期に整備されている。Ⅴ期までには木橋に替ったようであり、Ⅵ１期の「金沢御城内外御建物絵図」（第 149 図 62-16）でも木橋のままであるが、Ⅵ２期の「竹沢并蓮池御庭御囲之図」（第 156 図 62-18）では四半敷意匠の石橋として描かれており、1840 年代頃に現在の形になったことが窺える。

黄門橋周辺

黄門橋は、Ⅳ期の「太梁公日記」中に散見される「石橋」のどれかに該当するかも知れないが確証はなく、寛政４～11 年（1792～99）頃の景観を示す「兼六園蓮池庭之絵図額」（第 145 図 62-07）にみえる石橋が、それと確認できる最初と思われる。なおⅥ２期の「金沢御城内外御建物絵図」（第 149 図 62-16）以降、現存する西側袂の受石も確認できる。３項では受石について、その加工状況から転用材と想定したが、絵図における初見時期からすると竹沢御殿で使用されていた石材であった可能性が考えられ、この段階で架け替えがあったとも思われる。東側袂の切石積もこの時か、それ以降の所産と考えるのが妥当であろう。ただし創建自体がいつまで遡るかは判然としない。

噴水・新清水については、３・４項で触れた。前者はⅥ２期・1840 年代頃構築の可能性、後者はⅥ４期中の構築が考えられる。

以上の通り、蓮池庭においては、おおよその構成は近世前期以来の状況を踏襲し、Ⅳ期以降、断続的に個別の構成要素が形を整え、現在に受け継がれる景観が形成されたと言える。

（２）変遷過程

（１）で指摘したこととも関連するが、蓮池庭の構成自体は、Ⅱ期の成立以来、基本的には踏襲されていると考えられ、急激な変化はほとんどなかったと言える。敢えて画期を求めるとすると、明治初年まで伝えられる、主要な構成要素の多くが成立したⅣ期における整備が特筆される。また、Ⅴ期は逆に構成要素の幾つかが廃止された点において注目され、またⅥ期中にも修築や意匠の変化、新奇な構成要素の追加があり、例えば日暮橋と、後述する竹沢庭の雁行橋（亀甲橋）が、特色ある石橋として改修されるのがほぼ同時期であること等、個別にみると重要な問題を包含している。しかしながら全体として変化は漸移的で、この点では、玉泉院丸と類似した傾向を示す。

一方、御殿空間との関わりという観点からすれば、大きく４段階に区分することが可能である。

第１段階（17 世紀後半～18 世紀初頭）は蓮池庭Ⅱ期に相当する。この段階は、敷地中心部に短期間とは言え「蓮池上の御殿」と呼ばれ、政庁機能を担ったやや規模の大きな建物があった。金谷出丸Ⅱ期においても、「書院」「座敷」と称される建物があり、これらと庭園を中心とした空間が形成されていた点で、共通性が窺える段階である。

第２段階（18 世紀前半～19 世紀初頭）は蓮池庭Ⅲ・Ⅳ期に相当する。蓮池庭では前代の「座敷」が一旦解体され、やや小規模な亭に建て替えられた。藩主家の屋敷・御殿敷地と庭園が隣接する金

第 45 表　蓮池庭・竹沢庭の主な利用状況

［長山 2006b］［池田 2016］等より作成

時期 蓮池	時期 竹沢	年月日	場所	主な利用者	利用内容	史料
Ⅱ		延宝6(1678)8.11	蓮池	恭姫(藩主綱紀養女)		「葛巻昌興日記」(玉図加越能文庫)
		延宝6(1678)12.2	蓮池	綱紀(藩主)・老臣	饗応、茶事	「葛巻昌興日記」［金沢古蹟志］
		天和2(1682)9.4	蓮池	綱紀・恭姫		「葛巻昌興日記」
		貞享3(1686)8.15	蓮池	老臣	拝領馬拝見、饗応	「葛巻昌興日記」「参議公年表」(加越能文庫)［金沢古蹟志］
		貞享3(1686)8.27	蓮池	京都芳春院(僧)	饗応、庭拝見	「葛巻昌興日記」「菅君雑録」(加越能文庫)
		貞享3(1686)9.15	蓮池	老臣	饗応、拝領馬見分	「葛巻昌興日記」「菅君雑録」
		貞享4(1687)3.7	蓮池	恭姫	桜見物	「葛巻昌興日記」
		元禄3(1690)7.13	蓮池	恭姫	蓮見物	「葛巻昌興日記」
		元禄9(1696)8.11～	蓮池	綱紀	居住・政務執行	「御親翰写2」<前田綱紀書状写>「政隣記」(加越能文庫)［加史5］
		元禄10(1697)5.2	蓮池	綱紀・家臣	射術見分	「菅君雑録」
Ⅲ		享保12(1727)10.11	蓮池	老臣	庭拝見(紅葉見物)	「中川長定覚書」(加越能文庫)「政隣記」他［加史6］
		享保13(1728)4.6	蓮池	吉徳(藩主)	馬見分等	「遠田日記」(加越能文庫)「政隣記」他［加史6］
		享保15(1730)3.7	蓮池	宗辰(藩主吉徳嫡子)	鳥猟（鷹狩）	「政隣記」［加史6］
		享保17(1732)4.5	蓮池	吉徳	乗馬	「中川長定覚書」
		享保20(1735)9.28	蓮池	宗辰	乗馬初め	「中川長定覚書」「政隣記」他［加史6］
		延享4(1747)10.10等	蓮池	重熙(藩主)・老臣	饗応、詩歌作成	「日記頭書」「大野木克寛日記」(加越能文庫)「政隣記」他［加史7］
		宝暦元(1751)3.16等	蓮池	重熙	病後保養	「大野木克寛日記」
		宝暦5(1755)5.6	蓮池	幕府国目付	巡見、食事	「泰雲公御年譜」(加越能文庫)他［加史7］
		宝暦7(1757)8.27	蓮池	実成院(藩主重教実母)		「泰雲公御年譜」
		宝暦7(1757)9.2	蓮池	操姫(藩主重教姉)		「泰雲公御年譜」
		安永2(1773)8.25	蓮池	顕姫(藩主治脩養女)		「太梁公日記」(前田育徳会)［太梁公日記4］
		安永2(1773)9.2,16,17	蓮池	治脩(藩主)	射術見分	「太梁公日記」［太梁公日記4］
		安永3(1774)2.1	蓮池	治脩	鳥猟（網）	「太梁公日記」［太梁公日記5］
		安永3(1774)3.10	蓮池	顕姫		「太梁公日記」［太梁公日記5］
		安永3(1774)4.26	蓮池	治脩	鳥猟（鳥銃）	「太梁公日記」［太梁公日記5］
Ⅳ		安永3(1774)7.1,3,7	蓮池	治脩・家臣	茶事	「太梁公日記」
		天明8(1788)4～寛政元(1789)11	蓮池	治脩・重教（前藩主）子女等	月平均４回程度訪問	「高畠厚定職事日記」(加越能文庫)
		寛政4(1792)閏2.21	蓮池	治脩・老臣	庭拝見、馬術見分、饗応	「蓮池庭之図」［加史10］
		寛政11(1799)10.24	蓮池	老臣	庭拝見	「元禄寛政間手記抄」他［加史10］ 「前田直養覚書」(前田土佐守資料館)
		文化9(1812)10.11	蓮池	斉広(藩主)		「政隣記」
Ⅴ	Ⅱ	文政6(1823)3.18	竹沢	斉広(前藩主)近臣家族等	奥能舞台開きに伴う庭拝見(見物)	「竹沢御殿御就成後奥舞台開キ御能何茂様江拝見被　仰付候一件」(加越能文庫)［金沢市史資料編3］
		文政11(1828)6.11	蓮池	斉泰(藩主)		「文政天保間諸事要用雑記」(加越能文庫)
Ⅵ1	Ⅲ1	天保3(1832)10.19	蓮池	斉泰(藩主)・栄操院(藩主実母)・延之助(藩主弟)	乗馬見分等	「温敬公日記」(前田育徳会)
		天保5(1834)10.13	蓮池	斉泰・寿々姫(藩主妹)等	会食	「文政天保間諸事要用雑記」(加越能文庫)
		天保8(1837)8.2	竹沢		泉水に鮎簗設置指示	「成瀬正敦日記」(加越能文庫)［加史14］
		天保8(1837)9.24	竹沢		栗前藩主牌前に供献	「成瀬正敦日記」
		天保9(1838)5.4	竹沢		桑畑造営を命じる	「成瀬正敦日記」
		天保9(1838)9.6	蓮･竹	真龍院(前藩主正室)・斉泰・栄操院(藩主実母)	庭見物（遊覧）・饗応	「文政天保間諸事要用雑記」「成瀬正敦日記」
		天保10(1839)5.20	蓮･竹	斉泰	射術見分等	「成瀬正敦日記」［加史15］
		天保10(1839)7.4	竹沢	斉泰・栄操院	石塔普請見分	「成瀬正敦日記」［加史15］
Ⅵ2	Ⅲ2	天保12(1841)3.26	蓮･竹	京都御典医	庭拝見	「村井長貞日記」(加越能文庫)［石金研2016a］「成瀬正敦日記」
		天保13(1842)8.22	蓮･竹	京都御典医	庭拝見	「成瀬正敦日記」
		弘化元(1844)5.1	蓮池	真龍院		「成瀬正敦日記」
		弘化元(1844)7.9	竹沢		西瓜前藩主牌前供献	「成瀬正敦日記」
		弘化2(1845)9.25	蓮池	慶寧(藩主嫡子)		「公私心覚」(加越能文庫)
		弘化3(1846)閏5.3	蓮池	斉泰・藩主子息	具足(鎧)歩行、蛍見物等	「成瀬正敦日記」
		弘化3(1846)閏5.9	竹沢		枇杷前藩主位牌前に供献	「成瀬正敦日記」
Ⅵ3	Ⅲ3	嘉永元(1848)7.17	蓮･竹?	斉泰・真龍院	花火見物	「成瀬正敦日記」
Ⅵ4	Ⅲ4	嘉永5(1852)4.24～5.5	蓮池	家中・町方男女	竹沢鎮守祝賀神事に伴う拝見	「成瀬正敦日記」「文慶雑録」(加越能文庫)他［加史藩末上］
		嘉永5(1852)5.16	蓮･竹	城代・年寄（老臣）	見分、竹沢庭内で鶴飼育	「官事拙筆」(玉図奥村文庫)
		嘉永5(1852)5.23	竹沢		水車の設置	「成瀬正敦日記」
		嘉永5(1852)8.27	蓮･竹	城代・家老・若年寄	調練場見分、庭拝見	「成瀬正敦日記」「官事拙筆」
		嘉永5(1852)10.18	蓮池	寿正院(前大聖寺藩主正室、斉広息女)		「成瀬正敦日記」
		安政2(1855)2.26	竹沢	斉泰・年寄	調練見分	「御用方手留」(奥村文庫・加越能文庫)「公私心覚」［加史藩末上］
		安政6(1859)正.29	蓮池	利鬯(大聖寺藩主、斉泰子息)･斉泰		「公私心覚」
		安政6(1859)3.12	蓮･竹	城代・年寄・家老等	改修箇所見分、庭拝見	「御用方手留」
Ⅶ	Ⅳ	文久3(1863)6.19	蓮池	斉泰・溶姫(藩主正室)		「公私心覚」
		慶応2(1866)9.22	巽御殿		象等見世物見物	「御能拝見等御鷹野等御出」「毎日帳書抜」(加越能文庫)他
		慶応2(1866)9	竹沢		金谷御殿普請資材置場	「金谷御殿御普請諸事留」(玉図清水文庫)［石金研2013ａ］
		明治2(1869)正.15	蓮･竹	真龍院･慶寧(藩主)･斉泰(前藩主)･能役者等	真龍院八十余の賀に伴い能役者ら庭拝見	「御能御囃子組扣帳」(玉図藤本文庫)［長山・西村2005］
		明治4(1871)2	蓮･竹		一般に開放	「御用方手留」「触留」［加史藩末下］

谷出丸とは異なる経歴を歩むこととなり、御殿空間から独立した庭園としてしばらく存続する。

第３段階（19 世紀前半）は、蓮池庭Ⅴ・Ⅵ期に相当する。蓮池庭が竹沢御殿の外庭に位置付けられた段階である。蓮池庭は、それまでは御殿空間から独立しているとは言え、金沢城本体側からの利用に供されていたのであるが、その状況が転換することとなった。庭園の位置付けを介して、金沢城本体と竹沢御殿との関係、ひいては近世城郭の構造における、変化の兆候を示唆する一事象として注目されるが、竹沢御殿の主であった第 12 代藩主前田斉広の急逝と御殿解体により、それ以上の進展を見せなかった。この段階も、金谷出丸の第３－１段階と対比される。

第４段階（19 世紀中葉～後半）は蓮池庭Ⅶ期に相当する。御殿空間との関わりでは、竹沢御殿の解体が進んだⅥ１期、または両庭が同格となった嘉永４年（1851）（第 40 表 61-28）も画期として考える必要があるが、いずれにしろ竹沢御殿の名残である建物が失われ、名実ともに御殿に直接付属しない広大な庭園空間が形成された段階として位置づけられる。

蓮池庭・竹沢庭の境界施設が撤去された理由については、史料には明確に記されておらず、［長山 2006b］でも述べられていない。

本期の景観を描く「兼六園図」（第 153 図 62-24）等の絵図によると、敷地間には、門・塀が撤去されたのみで、新たな園路等が設けられた様子は窺えない。竹沢庭は安政から文久にかけても普請されているが、蓮池庭の範囲にはあまり及んでいないようである。また、現況からの印象では、塀がなくなったとしても、蓮池側から竹沢側への景観は、土地の高低もあって大きく変わることはなく、竹沢側からについても、敷地境際の園路まで近づかないと変化は感じられなかったと思われる。

以上から、境界施設の撤去に伴う蓮池庭・竹沢庭の一体化は、第一義的には管理上の問題が大きかったのではないかと推測する。すでに嘉永４年（1851）に敷地が同格になったことで、境界に塀・門を設ける必要性は薄れていたと考えられ、維持への負担等からやがて撤去に至ったのではないだろうか。ただしこのことにより、庭園の広大さ・深遠さが一層進んだ印象を受ける。

（３）利用状況

蓮池庭には、利用に関する文献が多く残る。利用の形態は多様であり、重臣達への慰労の意味を込めた庭園の披露（見物の許可）・饗応、乗馬や射術の見分等、どちらかと言えば公的な色合いのものも少なくないが、藩主やその身内の遊覧に関する記録がやはり最も目立ち、版籍奉還後の最末期を除き、藩主一族が気随に振る舞うことのできる空間としての性格が強く窺える。

頻度の高い利用の在り方が、必ずしも本質的とは限らないが、江戸の大名屋敷における庭園において、しばしば第一に数えられる饗応の舞台装置としての機能は、その対象のほとんどが臣下であった蓮池庭の場合、さほど主体とはなっていないように思われる。

なお、明治４年（1871）２月の四民への開放を謳った布達は、岡山藩の後楽園（旧御後園）等とも比べてもより先進的であり、当時知藩事だった 14 代藩主前田慶寧の開明的性格を著わしているとされる［長山 2006b］。これには、明治３年６月に竹沢庭の一画を占めた巽御殿の主、真龍院（慶寧祖父斉広の正室）が死去し、その 11 月に学校（藩庁）の管理下になるなど、なお旧藩主家の特権が保持されていたとは言え、変革への過程を進んでいたことが前提にあった。廃藩はすぐ目前であったが、近代以降の公園への道は金沢藩が切り開いたと言える。

第７節　竹沢庭

１．概要

（１）竹沢庭の位置と地形的特徴（第140・141・184・185図）

竹沢庭は、金沢城南東、蓮池庭に隣接して位置する（第 184 図）。前節で記述した通り、蓮池庭は蓮池堀（百間堀）の東側（南東側）にある斜面地であり、この斜面の上方、小立野台地上部の平坦地が、竹沢庭の敷地となっている。

竹沢の名称については、12 代藩主前田斉広の隠居所として御殿を造営するに際し、敷地南東に位置する泉「金洗沢」（金城霊沢）から「金沢」とするべきところ、城の名称との混同を避け、斉広が子供の頃から所用のものに付けた「竹」印にちなみ「竹沢」としたと伝わる（『金沢古蹟志』）。

敷地の平面形状（第 185 図）は略方形を呈し、北西辺（金沢城側）約 300 m、北東辺 330 m、南東辺 280 mを測る（便宜上、北西辺を西辺、北東辺を北辺、南東辺を東辺、南西辺を南辺として記述する）。主要な平坦面はおよそ三段に構成され、霞ヶ池や曲水が広がる北側が上段（標高約 53 m）、南側に向かって狭い中段（標高約 50 m）があり、梅林等がある下段（標高 47～48 m）に至っている。

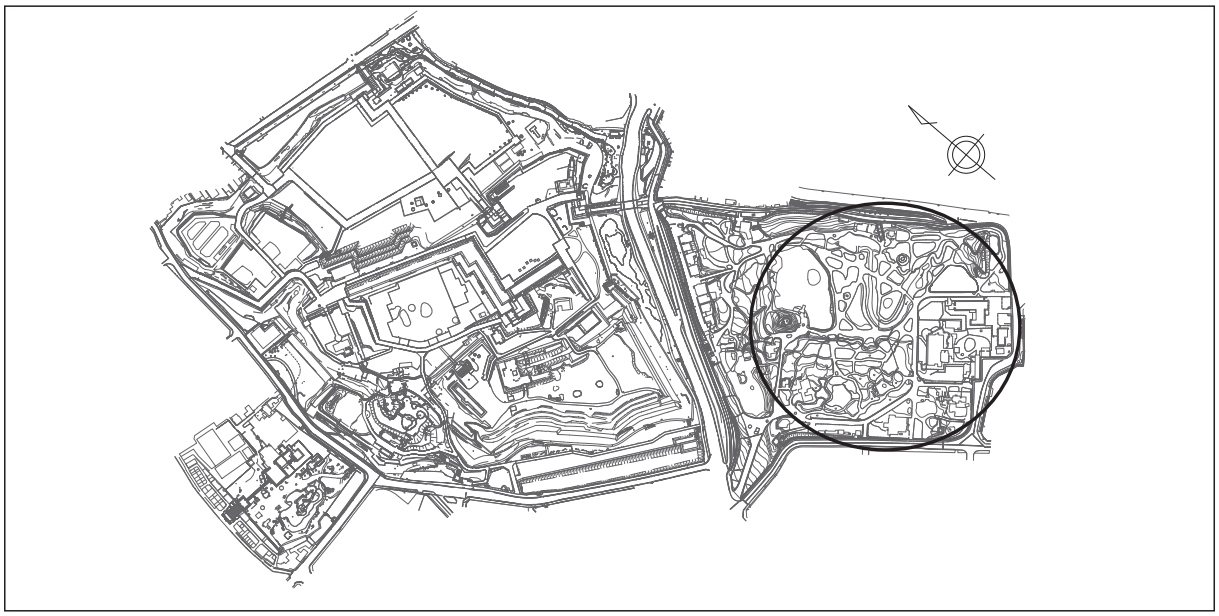
敷地の周囲については、蓮池庭に隣接する西辺は下降する斜面で、南部に向かうほど急となる。また北辺も西部から中央部にかけて急傾斜をなし、敷地外との比高差は 10 m以上に達するが、その東部では敷地外の地盤が高くなり、斜面自体は小規模となっている。南辺では敷地外との高低差は小さく、東辺ではほとんど差が見られない（第 140 図、第 141 図 C–D・E–F）。

（２）現況（第140・185・186図）

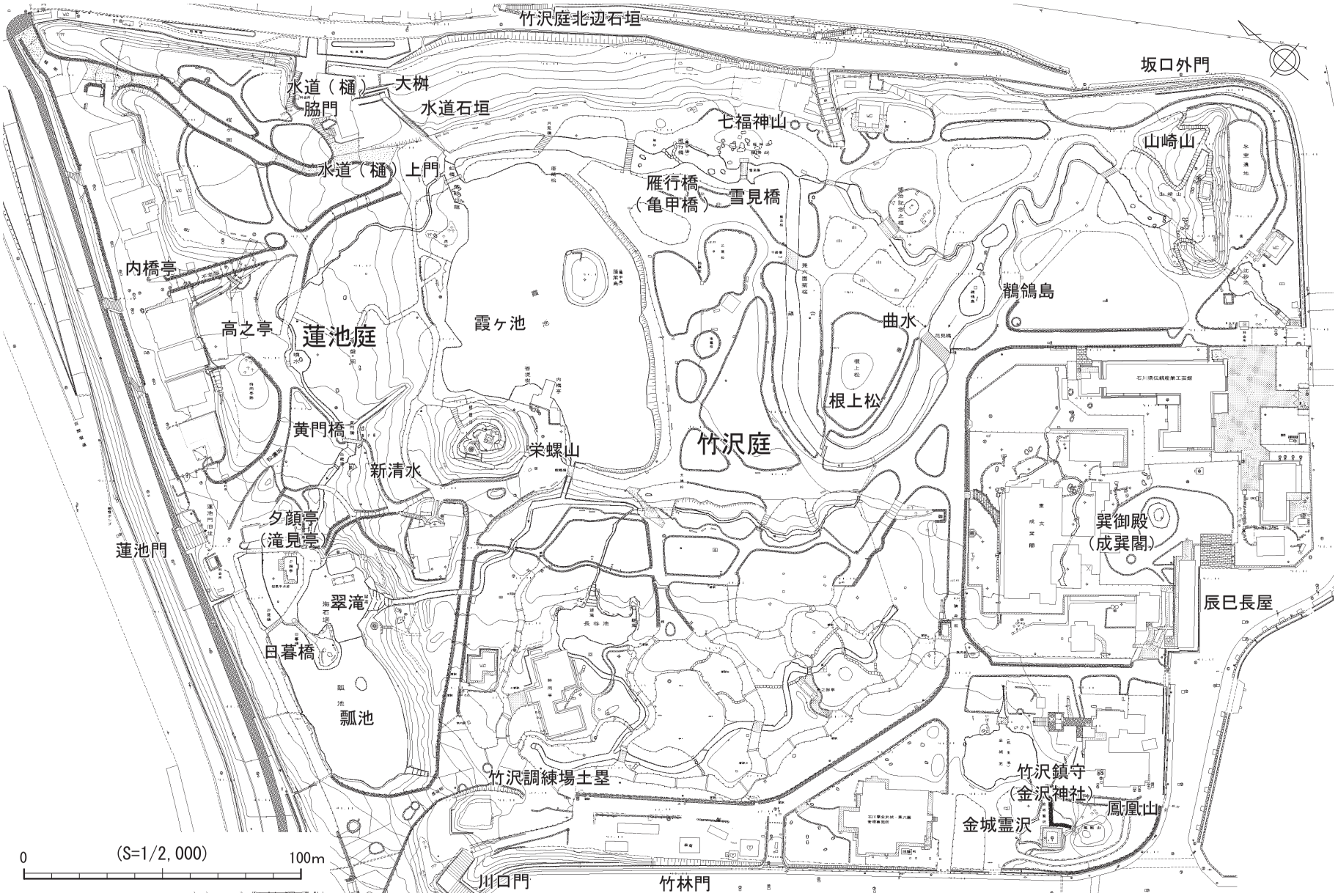
竹沢庭の大部分は、特別名勝兼六園の指定地に含まれ、蓮池庭と同様に庭園の構成要素の多くが受け継がれている。ただし南東部の重要文化財成巽閣及び金沢神社は指定地外となっている。竹沢庭に関する近世建造物はこれら二箇所にのみ残っている。

（３）竹沢庭の沿革（第35表）

竹沢庭の年表は、第６節第 35 表に示した。また関連文献史料・絵図史料・絵図写真についても、同じく第６節第 36～43 表、第 144～156 図に示した。竹沢庭の変容については、竹沢御殿の成立と御殿建造物の消長を軸に区分を設定した。



第 184 図　竹沢庭の位置（S=1/10,000）



第185図　竹沢庭全体図

Ⅰ期（～1822）

文政２～５年（1819～22）の竹沢御殿造営以前を一括する。本期は、武家屋敷地以前（～元禄 10 年・1697）・揚地（～寛政３年・1791）・学校（～文政５年・1822）の３期に細別される。このうち、武家屋敷が収公され、空閑地（揚地）となったのは、蓮池庭に短期間ながら藩主の居所があり、防火対策がとられたためであるが、蓮池庭遊興の延長として、藩主一族が揚地を逍遥することもしばしばみられた［長山 2006b］。また学校の造営に係り、当初孔子を祀る聖堂として計画されたものの、最終的には天満宮として造営された学校鎮守が、その後の竹沢御殿・竹沢庭の構成にも影響を及ぼすこととなる。またⅡ期との移行期である文政２～５年（1819～22）は御殿造営期であり、当初学校の北東部を御殿敷地に充てたが、最終的には学校が移転し、すべてが御殿域となった。

第 186 図　竹沢庭の現況　南東から

Ⅱ期（1822～1830）

12 代藩主前田斉広の隠居所として竹沢御殿が造営され、およそ御殿建物が維持された天保元年（1830）までの時期。蓮池庭Ⅴ期に対応する。二ノ丸御殿に勝るとも劣らない規模の建物群が建てられたが、斉広は文政７年（1824）に死去し、実質的に機能した期間は極めて短かった。天保元年（1830）以降、おそらく維持にかかる負担等から、撤去が着手されることとなった。この段階の庭園は、御殿に付属する比較的小規模なものであった。

Ⅲ期（1830～1860）

竹沢御殿建物の解体が進み、蓮池庭との境界施設がなくなる万延元年（1860）までの時期。蓮池庭Ⅵ期に対応する。本期は絵図の描写等から見て４期に細別される。

Ⅲ１期は「金沢御城内外御建物絵図」（（公財）前田育徳会、第 42 表・第 149 図 62-16）に反映される段階。本絵図には、天保８年（1837）に構築された栄螺山が描かれているが、天保 10 年（1839）にその山頂に設けられた三重石塔がみられない。金沢城内の描写とも併せ、天保８～９年（1837～38）の景観年代が推定される。また「竹沢御殿絵図」（真柄建設株式会社蔵、第 43 表・第 149 図 62-17）は 62-16 よりわずかに後出する景観内容と推定される。

御殿南西側の部屋方（長局）・広式等が撤去され、既に広大な御殿の面影を失っている。その一方、現在の霞ヶ池の原形が形成されている。

Ⅲ２期は「竹沢并蓮池御庭御囲之図」（金沢市立玉川図書館大友文庫、第 150・156 図 62-18）「竹沢御殿・兼六園並御鎮守古絵図」（竹沢御殿・兼六園）（金沢市立玉川図書館郷土資料、第 150 図 62-19）に反映される段階。両絵図には、天保 10 年（1839）に設置された栄螺山三重石塔（「成瀬正敦日記」金沢市立玉川図書館加越能文庫、第 39 表 61-23）と、金谷御殿の普請と連動し、弘化元年（1844）12 月から撤去されることになる御殿中枢部の表居間・舞台等（「世子御座所普請方御用主附一件」加越能文庫、第 40 表 61-26）がまだ描かれているので、景観年代はこの間と推定される。また天保 12 年（1841）に水道（樋）脇門外の袖柵が撤去されている（「村井長貞日記」加越能文庫、［石川県金沢城調査研究所 2016b P170～171］）。細部に亘るがこれも見られないので、より限定される可能性がある。御殿中枢部はⅢ１期から大きく変わっていないが、周囲に残っていた土蔵等の多くが失われている。

Ⅲ３期は弘化２年（1845）以後、嘉永３年（1850）作成の「御城分間御絵図」（（公財）前田育徳会、第 151 図 62-20）に反映される段階。御殿中枢部において奥能舞台等が失われた状態が描かれる。

Ⅲ４期は竹沢御殿に起因する建物がごく一部を残して撤去されたことに伴い、竹沢庭と蓮池庭が同格となった嘉永４年（1851）（「成瀬正敦日記」、61-28）以降の段階。安政３年（1856）作成の「竹沢御屋敷総絵図」（大友文庫、第 151･156 図 62-21）によると、御殿中枢部は書斎の一画を残すのみとなっている。庭園としての変容は第４項で詳しく検討するが、Ⅲ期を通じ、建物の撤去に反比例するように、池・流れといった泉水を主体に、庭園構成要素の占める割合が大きくなっていることが看取される。

Ⅳ期（1860～1871）

竹沢庭藩政期の最終段階である。万延元年（1860）、蓮池庭との境をなす水道（樋）上門やその続きの塀が撤去され、両庭園は名実ともに一体化された（「御用方手留」金沢市立玉川図書館奥村文庫、第 41 表 61-35）。一方でとくに竹沢庭側の変容は止まることなく、文久２年（1862）には大桝が現在見られる姿に改修され、同３年（1863）には 12 代藩主前田斉広の正室真龍院の居所として、竹沢庭の南東に巽御殿（現･成巽閣）が造営される（「御用方手留」、61-36）。また廃藩直前の明治４年（1871）には巽御殿の北側に鉱山技師として招聘したプロシャ人デッケンの洋館が建てられた。この間、流れや池の形状もⅢ期とは大きく変わり、現在まで受け継がれている姿が成立する。

明治４年（1871）２月の庭園公開以後の経緯は、蓮池庭の項で触れた通りで、廃藩後の管理は県に引き継がれていくこととなる。

２．庭園に関する資料

（１）遺構

現存遺構

詳細は次項３で記述するが、蓮池庭と同じく、近代以後も地割が大きく変容することはなかった。園路については広い平坦地であることも与り、近代以降、従来とは異なる方位をもったものが多く設けられ、近世の状況を踏襲する部分は少なくなっている。他にも蓮池庭に比べ、近代以後に付加・改変された部分が目立つが、池（霞ヶ池）や流れ（曲水）、築山を始めとして、近世に形成された主要部分は形状を良く留めている。

発掘遺構

竹沢庭敷地内での発掘調査は、敷地中央西部の築山「栄螺山」の石垣等修理工事に係る一件のみである。石垣修理の詳細については報告書［石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所 2012］に譲り、次項では発掘・ボーリング等による栄螺山の構造について触れる。

（２）文献（第36～41表）

藩士の日記が主体で、造営や使用状況が窺えるものがある。13 代藩主前田斉泰の側近であった成瀬正敦の日記は、蓮池庭とともに竹沢庭の記事が多く認められる（「成瀬正敦日記」）。この他年寄役で城代も務めた藩老臣奥村栄通の日記（「官事拙筆」「御用方手留」）等がある。蓮池庭に比べると、拝見記の体裁をとるものは少ないように思われるが、末期に近い明治３年（1870）、巽御殿に居た真龍院の八十余の賀に係り招かれた能役者達による史料（「御能御囃子組扣帳」第 41 表 61-40）があり、貴重な事例となっている。前節でも紹介した長山直治氏の『兼六園を読み解く』（［長山 2006b］）は、蓮池庭と竹沢庭を一体的に詳細に検討しており、兼六園の名称との関わり等重要な所見が披瀝されている。

（３）絵図・絵画（第42・43表、第144～156図）

竹沢御殿造営以後にかかる絵図は10点以上が知られる。蓮池庭とともに描かれるものがほとんどで、おおよその変遷をたどることができる。絵画では「兼六園絵巻」（第 43 表・第 154・155 図 62-25）や「巽御殿絵巻」（62-26）等が知られており、藩末期兼六園の景観の実態を窺うことができる。

３．庭園遺構の状況

概要

現存遺構の確認については、第６節３（１）に記載した通り、文久３～明治３年（1863～1870）頃の景観を示す「兼六園図」（第 153 図 62-24）を主とし、安政３年（1856）作成の「竹沢御屋敷総絵図」（第 43 表・第 151 図 62-21）・「巽御殿之図」（第 153 図 62-23）等により補足した絵図情報に基づき、描写された構成要素等の遺存状況を調査した。遺存状況の度合いに関する捉え方も前述の通りであり、第 187～189 図に概要を示した。また第 190～192 図は、上記絵図情報を現況に合わせて調整・照合した合成図である。

構成要素概況

石垣、石積、水路、塀基礎、門跡、流れ、池、中島、橋、築山、井戸、景石、石組、園路、御殿・鎮守、建物遺構等が遺存している。

周辺の区画施設のうち、とくに敷地北辺については、石垣および土塀基礎石積がおおよそ良好に遺存している。蓮池庭とは異なり主要部は広い平坦地で、落差を必要とする大きな滝は見られないが、池・流れや築山等が設けられ、藩政期以来継承されている名木も存在する。

敷地南東側には財団法人成巽閣として巽御殿主体部、辰巳長屋、土蔵等が遺存し、またかつての竹沢鎮守が金沢神社として存続する。

なお敷地南側の下段中央部は、明治期以後一旦私有地となり、県有地となって以後も、図書館・商品陳列所等の施設が建てられ、大きな改変を受けている。この区域の主要構成要素である長谷池は、「兼六園図」に見えず、明治９年（1876）の「辰巳養水路分間絵図」（辰巳用水土地改良区蔵、［辰巳ダム関係文化財等調査団 1983］付図）に現れるので、明治初期に築造されたと思われる。地表上に近世に遡る構成要素はみられず、地表下についても攪乱されている範囲が大きいと思われる。

地割・区画施設

北辺（位置：第 187・188 図上部、第 193～197 図③）

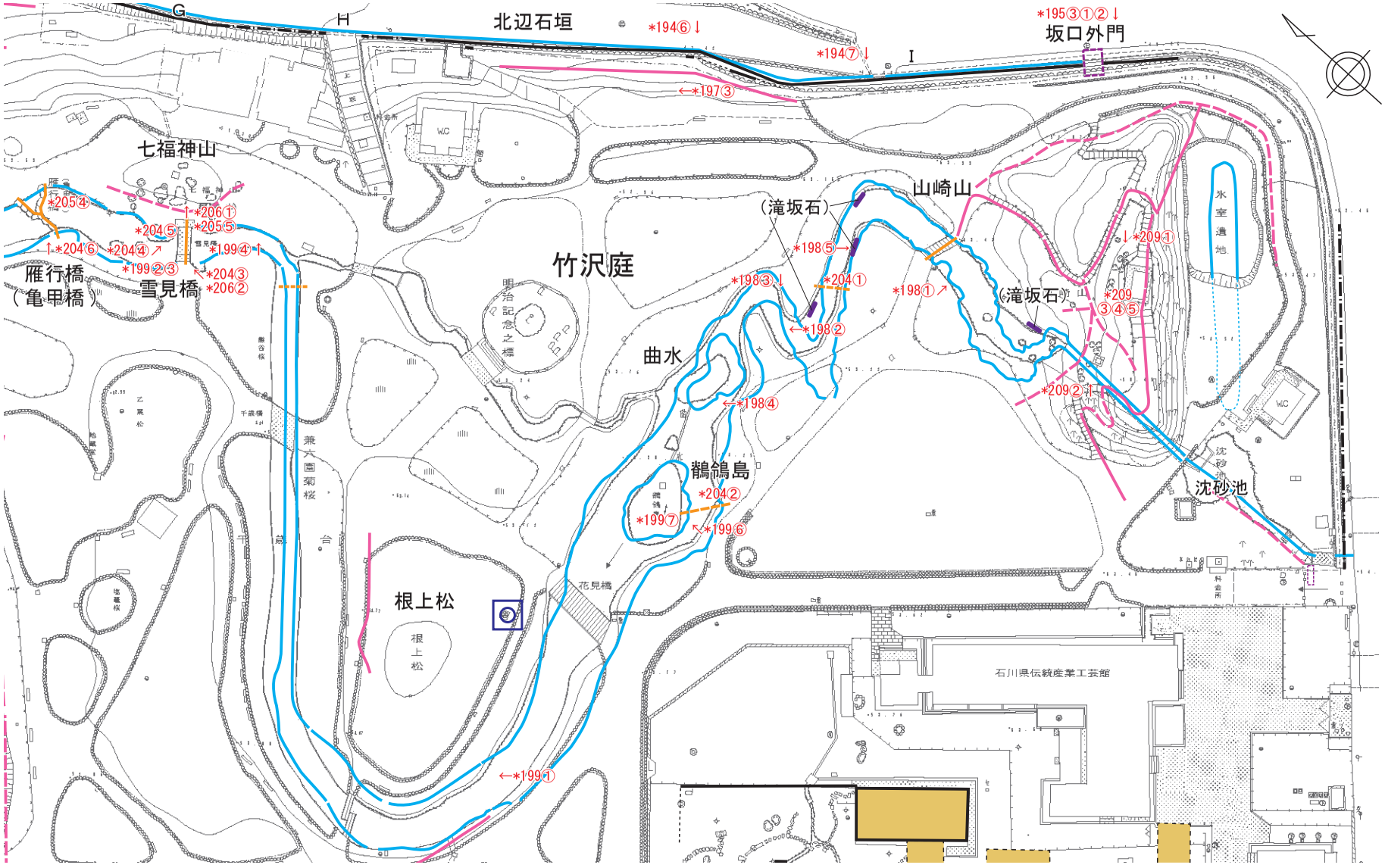
北辺は、西辺南半とともに、竹沢庭において敷地外との落差が大きい部分であり、霞ヶ池・七福神山地盤面から 10 m以上の高低差がある。後述するように、斜面には通路跡や帯郭状の平坦面が介在し、段状の地形を呈している。

石垣（第 193～194 図⑦） この北辺斜面最下段（敷地の最外縁）に石垣が遺存している。西端は水道（樋）脇門のある内桝形状の施設、東端は竹沢庭の北東角（東角）に至っていたと判断されるが、現在は角部分が弧を描くカーブに改修されている。水道（樋）脇門付近は矩折れの出角、これより東は鈍角の出角（鏑）・入角が見られる。後者の折れには不明瞭なものが含まれ、なお検討の余地はあるが、石垣面は 10 面程度（第 187・188 図Ａ～Ｉ）に分割される。ただし中央付近の面（Ｈ面）は、近代以降に開設された出入口（上坂）により分断されている。総延長は約 340 m、東側ＨＩ面間出角部（鏑）付近で、現道からの高さ約 2.6 mを測る（第 194 図⑥）。

東端部の蓮池庭との境では袖石垣状となり（Ａ～Ｃ面、第 194 図①・②）、内桝形状の空間を構成している。現状ではＡ面は茶店建物と接し大部分が確認できない。ＡＢ面間・ＢＣ面間はほぼ矩折れ（直角）の出角である（①）。矩折れの出角の角石は戸室石切石材であるが、全般に加工度は低い。ＣＤ間は入角で（第 193 図①）、ＤＥ間は出角となっている。Ｃ・Ｄ面の築石は戸室石の粗加工石材で、正面～側面は急角度を呈し、形状・調整（正面に丁寧なタテノミ痕）は比較的斉一的である。ＣＤ間入角では一石で凹面をなす石材が見られる。亀甲積様にも見える整然とした布積みで、石垣面の平板性は高く石口が小さい（第 194 図②）。

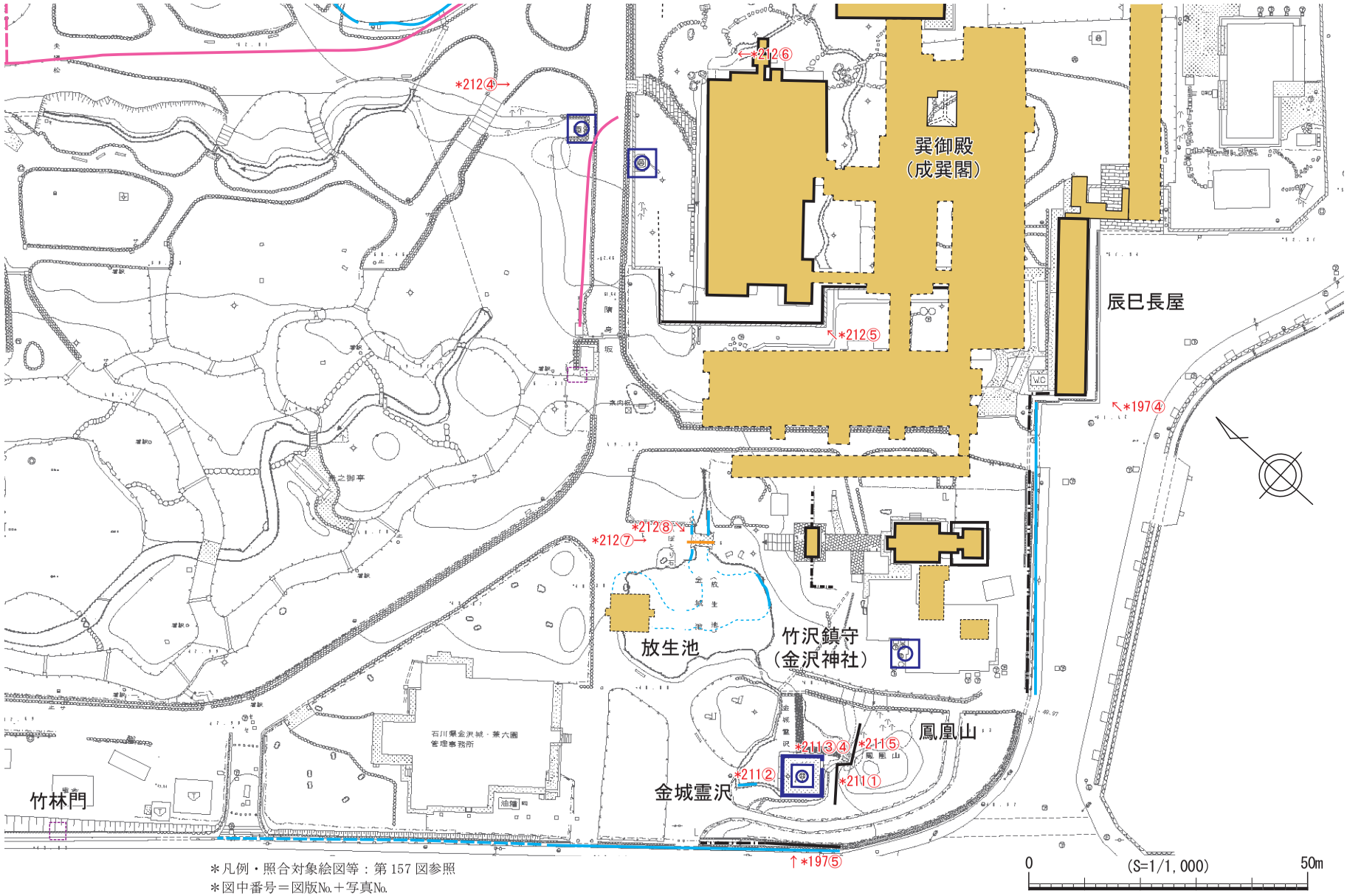
なお絵図では、Ａ面に水道（樋）脇門が直交して取り付いていた様子が窺えるが、現況では門本体

第 187 図　竹沢庭遺構現況図（西部）



＊凡例・照合対象絵図等：第 157 図参照
＊図中番号＝図版No.＋写真No.

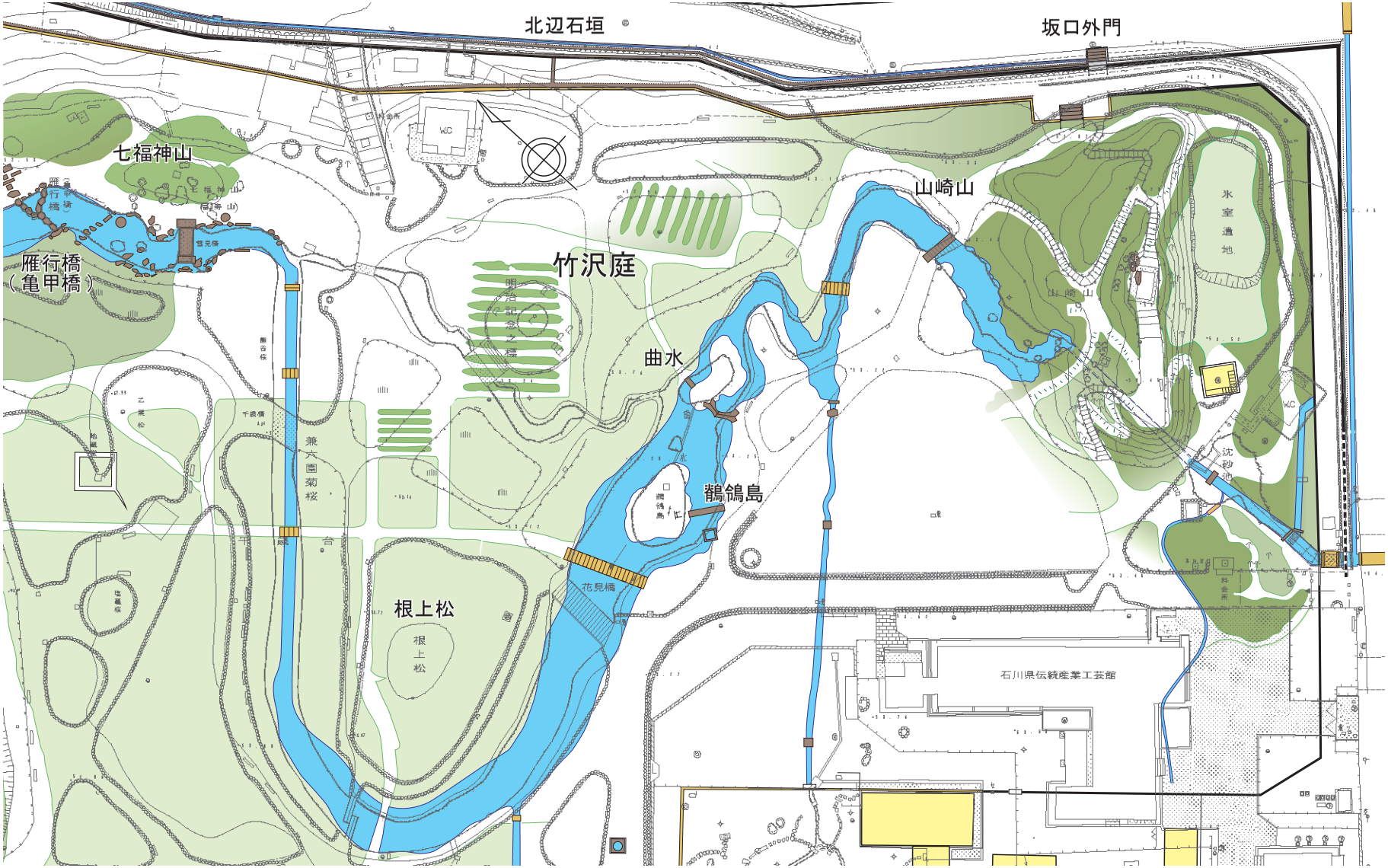
第 188 図　竹沢庭遺構現況図（北東部）



＊凡例・照合対象絵図等：第 157 図参照
＊図中番号＝図版No.＋写真No.

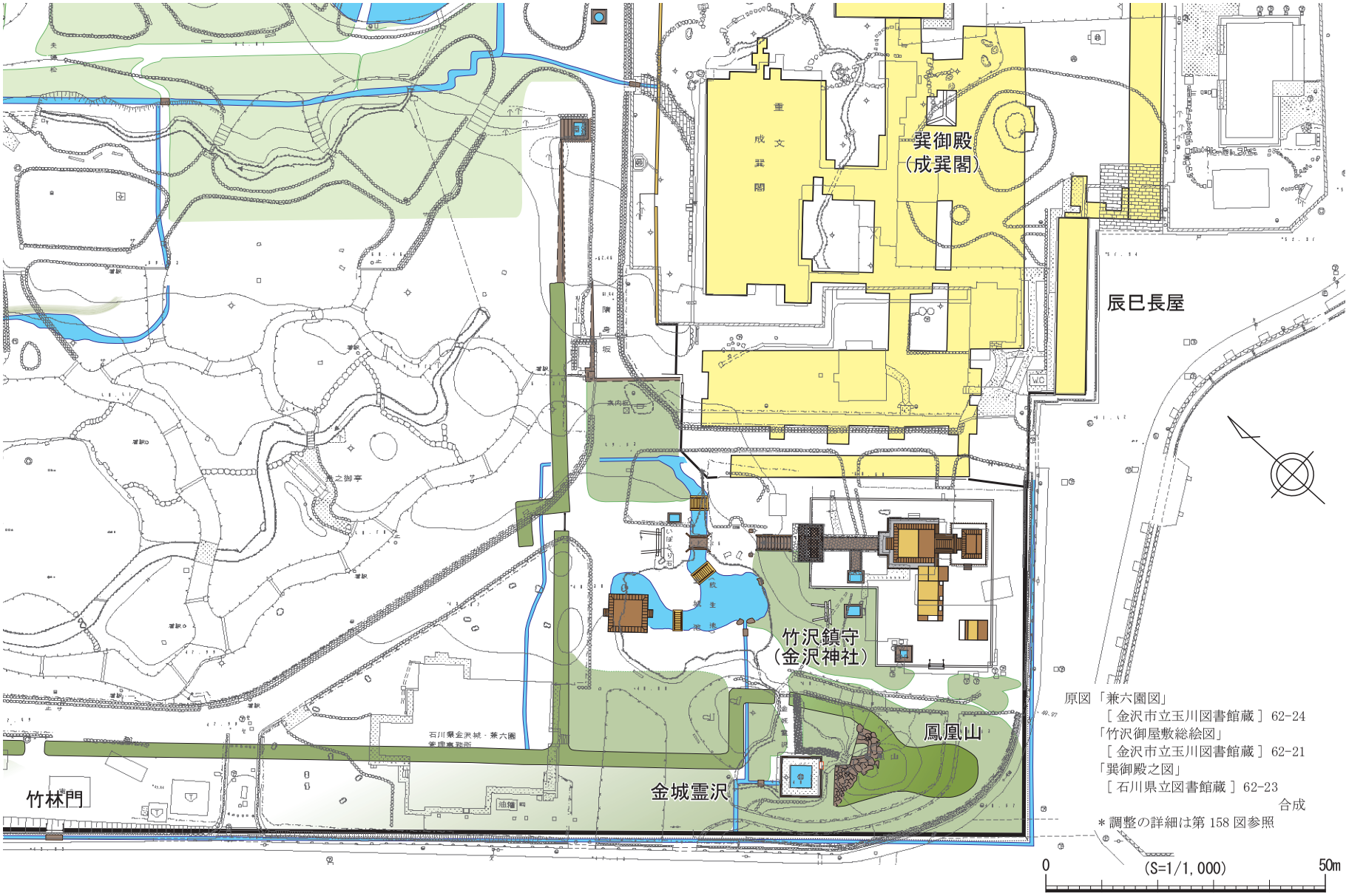
第 189 図　竹沢庭遺構現況図（南東部）

第 190 図　竹沢庭現況・絵図照合図（西部）



原図「兼六園図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-24「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-21
「巽御殿之図」［石川県立図書館蔵］62-23　合成　　＊調整の詳細は第 158 図参照

第 191 図　竹沢庭現況・絵図照合図（北東部）



第 192 図　竹沢庭現況・絵図照合図（南東部）

①北辺石垣Ｃ・Ｄ面 遠景　北西から

②北辺石垣Ｆ面 遠景　北西から

第 193 図　北辺石垣写真

①北辺石垣Ｂ面

②北辺石垣Ｃ面

③北辺石垣Ｅ面

④北辺石垣Ｆ面

⑤北辺石垣Ｇ面

⑥北辺石垣ＨＩ面間出角

⑦北辺石垣Ｉ面

⑧北辺石垣Ｆ面石樋

第 194 図　北辺石垣・石樋写真

は失われている。一方Ｂ面には、幅 11 ～ 12cm、奥行 0.5 ～ 1 cm、高さ 1.15 ｍを測る削り込み凹部が残る。対面する蓮池庭側にも同様の加工があり、天保 12 年（1841）に撤去された「袖柵」の痕跡の可能性がある。

Ｅ面より東側の折れは全て鈍角（鎬）で、ＨＩ面間のみ角石が用いられる。築石部は基本的に戸室石・粗加工石材が用いられ、布積みによるが、必ずしも一様ではない。

Ｅ・Ｆ面（第 193 図②・第 194 図③・④）では、面が大ぶりで四隅が丸みを帯びた石材が主体であるが、川原石や刻印のある古い石材も若干混在し、そのためか積みにやや乱れが生じている。石口は大きい。Ｇ面（第 194 図⑤）・Ｈ面西部（上坂口以西）も類似した様相を示すが、Ｅ・Ｆ面より石材の斉一性が高く、積みは比較的整っている。ただしＧ面には石口に塩化ビニール製のパイプが 10 箇所以上取り付けられており、解体を伴っていた可能性も考えられる。

Ｈ面東部（⑥、上坂口以東）では面が略方形を呈し、形状、調整等が斉一的な石材が多くなり、積みも一層整然とし平板性が高く、石口も小さい。上坂開削に伴う改修の可能性もあるが、西端Ａ～Ｄとも類似しており、判別し難い。Ｉ面（⑦）は全体的にＥ・Ｆ面に近く、石材はやや不揃いで、積みにも若干の乱れがある。後述する坂口外門跡より東へ 13 ｍ程続いた先は、川原石主体となり石材の寸法が小型化する。石垣プランも丸みを帯びた角形状であり、近代以後に改修された範囲となる。

石樋（第 194 図⑧）　Ｅ～Ｉ面には７箇所の排水用の石樋が認められる。本体は底面・両側面が一体で作り出されており、本体のみのものと、板状の蓋が取り付くものがある。本体の寸法はおおよそ幅 50cm 弱、高さ 30cm 程度であるが、調整等に差異があり、時期差が想定される。絵図には石垣上位の平坦面を横断する水路が３箇所描写されており、このうちＨ面上位に位置するものには直線延長上に石樋が見られ、両者は一体である可能性が高い。

坂口外門（第 195 図①～③）　石垣Ｉ面東側（ＨＩ間出角から東へ約 70 ｍ）には、上部幅約 3.0 ｍ、高さ約 1.6 ｍ、下部幅約 2.2 ｍを測り、逆台形状を呈して主に川原石が埋め込まれた石垣修築痕が認められる（①）。絵図との照合によれば、竹沢御殿への出入り口の一つである坂口外門があった場所に相当する。また川原石積の両側の面には、幅 15 ～ 28cm、奥行き３cm 程度の削り込みが２箇所ずつ認められる（②・③）。これらはレベルが不揃いで、石垣面を縦断するものではない。構造の詳細は不明であるが、石垣を半ば開放して設けられた幅一間半程度の出入り口で、下部には石段が備わっていたと推定される。また出入り口両側の削り込みは、柵・石段耳石等の取付痕跡の可能性がある。

土塀基礎（第 195 図④～⑥）　北辺石垣上部は斜面（土羽）となっていて（Ｆ面西端上で高さ約 1.5 ｍ）、この上に川原石主体の石材が２、３段程度積まれた石積が残存している。絵図との照合から土塀基礎と判断される。土塀は絵図では敷地の東辺・南辺まで続いているが、本体はすでに失われ、その基礎が明瞭に遺存しているのは北辺のみとなっている。ただし現況では石垣Ｃ～Ｆ・Ｉ面で観察されるだけで、崩落している箇所もあるようだが、基礎最下部は地中に埋まっているとも考えられる。

通路（段状地形）（第 196 図～ 197 図①～③）　石垣・土塀基礎の上方は、斜面に平行する段状地形を呈し（第 196 図①・②）、石垣Ｄ～Ｇ面沿いには３段（第 196 図③、第 197 図①）、Ｈ～Ｉ面西端は１段（第 197 図③）を数え、竹沢庭の主要構成要素が展開する平坦面に至る。

Ⅲ４期絵図（第 196 図①）との照合によると、石垣・土塀基礎上方には竹沢御殿（庭）中枢部外縁に沿った通路が二条設けられており、上坂口（図右側）のあたりに複雑な構成をとる出入口があり、御殿（庭）中枢部に進入できる仕組みになっていた。この出入口部以東では、通路は下方の一条のみとなり、山崎山北端付近で坂口門に到達していた。両通路間、また上方通路と更に上段との間の段差は、Ⅱ期には土羽と石垣で区切られていたが、Ⅲ３期までにともに石垣となっている。また石垣上には掛塀が設けられているが、Ⅲ３期には下方の板塀が失われている。ただしⅣ期絵図（第 190 図等）では上方の塀が見られず、逆に下方の塀が描かれており、複雑な経過を辿っている。

①坂口外門跡　全景　北東から

②坂口外門跡南東側

③坂口外門跡北西側

④北辺土塀基礎（石垣Ｆ面上）　北から

⑤北辺土塀基礎（石垣Ｆ面上）　北東から

⑥北辺土塀基礎（石垣Ｄ面上）　北から

第 195 図　坂口外門・土塀基礎写真

なおⅡ期絵図（「竹沢御殿御引移前総囲絵図」第 148 図 62-12）には、下方通路を「役人往来」、上方を「蓮池往来」との記載があり、通路であることが明示されている。

以上から、現状の段状地形における下段が「役人往来」、中段が「蓮池往来」に対応すると判断される。現状での下段・中段平坦面の幅は狭く 1.5～３m程度であり、尾根上の隆起により途切れる箇所が見られ、また石垣や塀基礎、排水溝・橋・水溜等も確認できない等、詳細に見れば絵図に描写される形状と必ずしも一致していない。ただし法面には部分的ではあるが小礫が集中する箇所があり、近代以後、石垣の撤去や崩落等の改変・変容があったと考えられる。

蓮池往来の上位の段は、絵図だけを見る限り高さの表現が明瞭でなく、御殿・庭中枢部との位置関係が判別し難いが、現況（第 197 図②）との照合により、中枢部平坦面より３m程度下がった帯郭状を呈することが了解される（第 196 図①・②）。

東辺・南辺（位置：第 188・189 図、第 197 図④・⑤）

東辺については、巽御殿（成巽閣）に属する辰巳長屋（第 197 図④）が敷地外に面しており、基礎石垣も含めこの部分は、御殿造営時の文久３年（1863）まで遡る。また北部の山崎山、南部の竹沢鎮守（金沢神社）背後に石積があり、近世の土塀基礎の位置を踏襲していると判断されるが、これらは近代以後に改修されたと考えられる。この他はほぼ地表上には痕跡を留めていない。

南辺については、近代以後崖状になった西端部分、また弧状となった東端部分を除く石積・水路は、おおよそ近世の土塀基礎の位置を踏襲していると判断されるが、大部分は近代以降に改修を受けている可能性が考えられる。ただし東端に近い石積が高くなる辺りでは、周囲と異なり、大型の川原石が多用され、乱積み状となる箇所があり（第 197 図⑤）、この部分については近世に遡る可能性を考えておきたい。なお、南辺西側に設けられた竹林門の位置については、遺構からは確認できない。

西辺・中段北辺（位置：第 187・189 図、第 197 図⑥・⑦）

竹沢庭西辺の区画施設は、Ⅲ４期までの絵図では掛塀と見られ、北端には水道（樋）上門をそなえ、蓮池庭との境界を為しているが、敷地南端まで延長せず、栄螺山付近で入角を形成しつつ、東側に折れ、竹沢庭中段の北辺を区画していた。なお塀・門はⅥ期には撤去される。

塀基礎や門の跡は地表上では明瞭ではない。ただし、霞ヶ池から蓮池庭黄門橋方面に分岐する近代以降の水路により分断された箇所（位置：第 187 図）で、蓮池庭側に面を向けた塀基礎の石積を２石確認しており（第 197 図⑥・⑦）、塀基礎根石列は地中に埋没している可能性が考えられる。

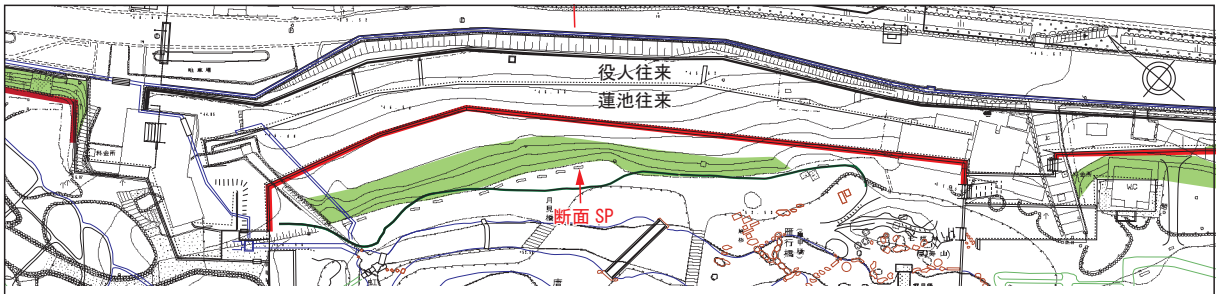
敷地内部の区画施設（位置：第 189 図、第 212 図⑤）

敷地内部の区画施設・門等は、絵図には多くの描写があるが、大半が基礎部分を含め地表上から失われている。数少ない例外として、巽御殿南側の南面石垣（位置：第 189 図、第 212 図⑤）が挙げられる。巽御殿以前の絵図にも近い位置に石垣が描かれているが、現況の石垣はやや北（北東）側に寄っており、御殿が造営された文久３年（1863）に、敷地南西側の造成に伴い、改めて構築されたと判断される。

隅角部は戸室石切石材、築石部は川原石を用いて布積みとしている。また御殿敷地内を流れる辰巳用水の吐水口である石樋が設けられている。一部戸室石石材が集中する箇所が見られるが、巽御殿の詳細絵図と照合すると、階段が設けられた出入口部が後代に塞がれたものと推定される。

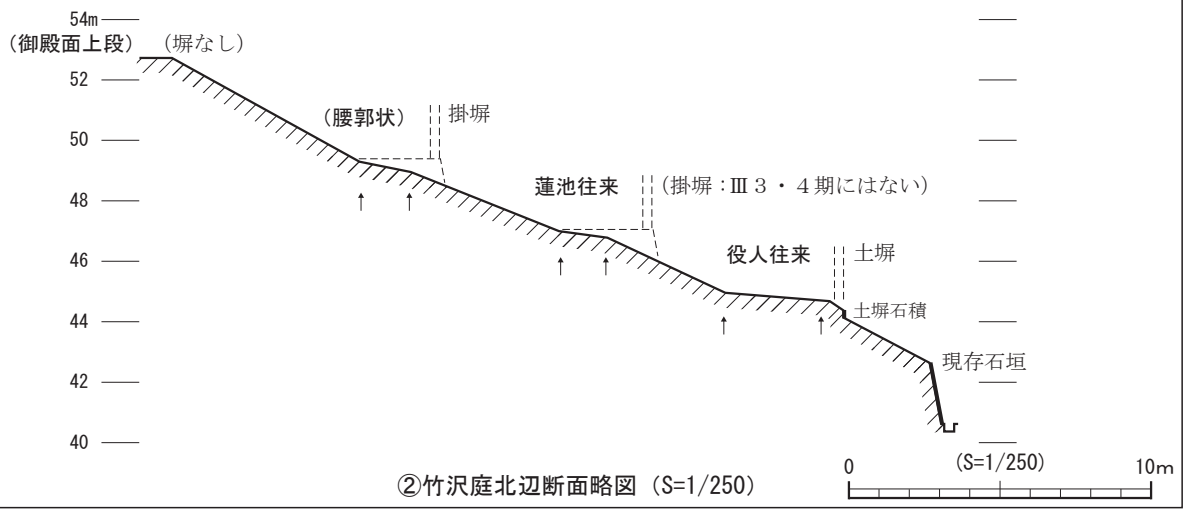
園路（位置：第 187 図、第 197 図⑧）

「竹沢御屋敷総絵図」「兼六園図」に描かれる中枢部平坦面の園路は、敷地の軸に沿った直線形を呈し、互いに並行・直交する特徴（第 191 図等）があるが、現況の園路は、不規則・曲線的で、敷地の軸に関わらず斜めに交わる箇所が多くなっており、改修が顕著である。近世から踏襲される箇所は少ないが、栄螺山・霞ヶ池・曲水南端を結ぶ経路（位置：第 187 図、第 197 図⑧）や、栄螺山や山崎山等築山部分の園路に認められる。



①竹沢庭北辺　地形と塀の配置状況（S=1/1,500）　赤太線：最上段の塀の位置　0　(S=1/15,00)　50m

原図：「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-21　Ⅲ４期



②竹沢庭北辺断面略図（S=1/250）

③中央付近　南東から

第 196 図　北辺段状遺構略測図・写真

①北辺段状遺構 中央付近　北西から

②北辺段状遺構 北西部上段　北西から

③北辺段状遺構 南東部　南東から

④辰巳長屋 全景　南から

⑤南東部石積　南西から

⑥西辺塀基礎　北から

⑦西辺塀基礎上面

⑧園路（栄螺橋南東）　北西から

第 197 図　北辺段状遺構・辰巳長屋・南東部石積・西辺塀基礎・園路写真

①曲水南東部 山崎山付近　西から

②曲水南東部 山崎山～中島間　南東から

③曲水南東部 出島状部分石組　北東から

④曲水南東部 中島石組　南から

⑤曲水南東部 護岸（滝坂石）　北西から

⑥描かれた曲水

「辰巳旧園新造客殿図」［金沢市立玉川図書館蔵］
62-27　Ⅳ期以降

第 198 図　曲水写真・絵画

泉水と関連施設（位置：第 187・188 図、第 198～205 図④）

泉水は、敷地東側から引き入れられた辰巳用水に拠っており、蛇行しながら西流する「曲水」と、その水が流れ込む「霞ヶ池」が中心となっている。その他これらから分岐する水路等がある。

曲水・霞ヶ池については、護岸等部分的な修築は重ねられていると推定されるが、形状・経路は、若干のずれはあるものの、Ⅳ期の絵図「兼六園図」の描写と大きな違いがない。曲水から分岐する流れ・水路は、近世に近い経路をたどるものもあるが、基本的には近代以後、形状が変わっていると判断される。また霞ヶ池から分岐して蓮池庭に至る流れ・水路のうち、栄螺山北側の経路はⅣ期絵図には見えず、近代以後の新設と考えられる。

流れ

曲水（第 198～199 図⑤） 敷地東側から引き込まれた辰巳用水が、山崎山の下を隧道となって流れ、蛇行を繰り返しながら霞ヶ池に至るまでの約 500 ｍに及ぶ経路を曲水と呼んでいる。近世に遡る名称であるかははっきりしない。

後述する通り、霞ヶ池とともに竹沢御殿造営時の姿から大きな変化を遂げているが、現況の平面形状はⅣ期絵図「兼六園図」に描かれる姿をほぼ踏襲している。流路幅や護岸状況から、著しい蛇行を重ねる南東部（第 198 図）、大きな湾曲部と直線部で構成され、緩やかで目立つ石組みが見られない中央部（第 199 図①）、七福神山や雁行橋（亀甲橋）等の見所の多い北西部（③～⑤）に大別される。

南東部の護岸では、屈曲する出島状部分や鶺鴒島等の中島部分において、比較的規模の大きい石組を配置する傾向が顕著である（第 198 図③・④）。また、長軸３ｍ前後に及ぶ長大な柱状の滝坂石を護岸に沿わせている箇所が幾つか見られる（⑤、位置：第 188 図）。中央部では土羽状ないし小型の川原石を一段積み程度とする構造が主体（第 199 図①）で、前者は杭護岸の可能性があるが明確ではない。

中央部北端に至り強く西に曲がった先を北西部とした。北西部の護岸は、福浦石・滝坂石を主体に花崗岩や珍しい木葉石（馬糞石）を交える（第 199 図②・③）。北岸には七福神山があり、岩島状の平石が数石散らされ、雪見橋や雁行橋（亀甲橋）が架橋される等、見所として強く意識されている感がある。なお北西部北岸東端に残る柱状（横位）の戸室石材（④）は、Ⅲ４期の「竹沢御屋敷総絵図」で旧御殿中枢部を区画する塀の内側に接して描かれた石材と一致する可能性がある（⑤）。西部末端ではやや石組がまばらとなり、霞ヶ池に注ぎ込む。

曲水中には、現況で２基の中島があり、平面形はともにひずんだ略円形を呈する。Ⅳ期の「兼六園図」では形状に若干の違いが見られるが、ほぼ同じ位置に描かれている。また曲水に架る橋は、現況で９箇所を数えるが、このうち「兼六園図」と位置が一致するものは４箇所であり、近世以来の姿を留めていると推定されるのは雪見橋・雁行橋（亀甲橋）の２箇所である。

鶺鴒島（位置：第 188 図、第 199 図⑥・⑦、第 204 図②） 鶺鴒島は陰陽石を祀る信仰施設としての性格を有する。東岸を中心に比較的大型の立石が据えられ、その中央にはかつて対岸に渡る橋が架かっており、現在でも対岸を含め橋の取付を示す加工石材や立石が認められる（第 204 図②）。橋取付部際には赤戸室石製の鳥居が建ち、やや離れて坪野石の石塔がある（第 199 図⑥）。これらの設置時期は不明であるが、文久３年（1863）作成の「巽御殿絵巻」に朱塗り・木製とみられる鳥居が描かれており、現存石鳥居はこれを踏襲している可能性がある。

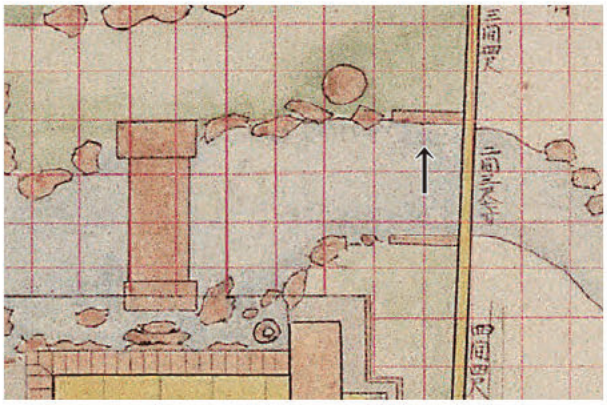
陰陽石（第 199 図⑦）は鳥居の先、島の南側にあり、滝坂石の陰石と花崗岩類の陽石からなる。陰陽石の背後に接して建つ石碑には、陰陽石側に行書体で和歌二首、反対側には「連理枝相生松」「天然形陰陽石」等の漢文が刻されている。文久２年（1862）、加賀藩に仕えた書家市河遂庵の筆になることを記し、「鶺鴒嶼」の呼称も見える（[小倉 1997]、現況では碑文の下端埋まる）。文久２年の段階で陰陽石を意識的に祀り、鶺鴒島（嶼）と呼ばれていることが注目される。

①曲水中央部 護岸　南から

②曲水北西部 護岸（木葉石）近景

③曲水北西部 護岸　北東から

④曲水北西部 護岸（戸室切石）　南西から



⑤描かれた護岸切石　「竹沢御屋敷絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-21　Ⅲ4期

⑥鶴鴫島 全景　南から

⑦鶴鴫島 陰陽石・石碑　南から

第 199 図　曲水写真・絵図 鶴鴫島写真

水道・大桝（位置：第 187 図、第 200・201 図①・②）

曲水（西部）が霞ヶ池に流入する手前で南に屈曲する箇所において、反対の北側に取水口が設けられ、暗渠が分岐している（第 200 図①）。金沢城内に向かう辰巳用水本流とも言うべき水道である（現在は送水されていない）。

分岐後は金屋石（緑色凝灰岩、越中西部産）製の石管（外形方柱形、内部円筒形刳貫）が二列、上面が露呈した状態で、北に向かい直進する（②）。前述の通り竹沢庭北辺は急斜面であり、一帯の地盤は取水口から約８ｍあたりから北側に下降していくが、水道部分については幅約 1.9 ｍの土手状の石垣基礎（③）が構築され、緩やかな勾配を保ったまま、斜面から突き出す形状をとる（⑤）。

取水口から 30 ｍ離れた地点で外法一辺 2.1 ｍの桝（④）が設けられており、これが大桝に相当する施設と考えられる。桝側面は、金屋石とみられる凝灰岩製・板状切石４枚で構成され、端部に切欠きを入れ仕口状に組み合っている（第 201 図①）。上部には鉄製箍が嵌められ補強されている。部材の高さは 76cm、厚さは 21cm を測る。桝内には土砂が堆積しており、底部の構造は不明である。

桝の主たる送水孔は西面（北西）に転換し、ここからは石管一列が接続される。桝の手前と同様、上面が露呈した状態で金沢城方面に延長し、急勾配となって下降する（②）。基礎は桝の手前と同様、土手状の石垣でスロープとなり、茶店建物付近まで 10 ｍ程度続いている。なお桝北面にも送水孔があり、現状では比較的近年のものと思われる土管が接続され、下方に落とす仕掛けとなっている。

水道石垣（第 200 図③、第 201 図③～⑤、第 202 図①）　基礎となる石垣は、桝の前後の直線箇所と桝の下方とで構造が異なる。前者（第 200 図③）は川原石を主体とした積みで、落とし積み状を呈する部分も散見される。後者は複雑な構成をとっており、とくに地盤が低い北面から見ると大別三段の構成となる（第 201 図③）。最下段は北面のみで、桝からやや離れた東側へも延長しているが、桝側に隅角部状の築留があり、小さな食い違いを作る。また、延長部を含め東側は切石積であるが、西側は戸室粗加工石・川原石を用いた積みとなっている。ただし西側延長は、現状では茶店屋内に取り込まれ、十分に観察できない。地盤に高低差があり、東側では高さは 65cm を測る。

中段も桝下方本体部分とこれに取り付く東側延長部で構成される。桝下方の本体部分は、東面・北面があり、平面Ｌ字状を呈する。東面南端は斜面に擦りつき、北東に出角が形成される。なお北面西端は家屋下屋内に取り込まれ、全容ははっきりしない。北面において高さ約２ｍを測る。石垣の類型は切石積で、周囲に縁取りをもち、丁寧に調整された多角形の石形が、おおよそ布積みに積まれている。金沢城石垣編年と照合すると７期の特徴をもつと言えるが、出角（隅角部）を構成する角石にも多角形を呈する面をもつものがあり、城内の石垣との違いも窺える。中段石垣上面には、石垣面と並行するように浅い切込み（５× 10cm、間隔不同 67～174cm）が帯状に巡っており、柵や塀に類する施設があったことが推定される（④・⑤）。なお下段・中段とも、北面中央には石管を分割して板状とした部材により、石樋が組まれており（④）、上方桝からの流水を受けていたとみられる。

上段は桝の下方に限定され、四面を備えた櫓台状を呈するが、南面・西面は水道基礎石垣が取り付き、これに覆われている。中段上面からの高さは約 1.73 ｍを測る。中段と同様、切石積であるが、石垣石の調整に精粗のばらつきがあり、統一感が低い。また北東出角（隅角部）の最下部角石の稜線が弧状に造り出される等、中段石垣面との差異が目立つ。この上段石垣の更に上部に、15cm 程度セットバックして戸室石製の地覆石が二段重ねられ、石面外側に合わせて桝が設置されている。下段石垣北面から桝上端までの高さは、約 5.5 ｍを測る。

なおこの他南西側において、中段石垣と上面のレベルが概ね対応する低い石垣がある。ただし水道基礎石垣の前面に付加されているようにも見え、中段石垣と一体かどうかは明確ではない。

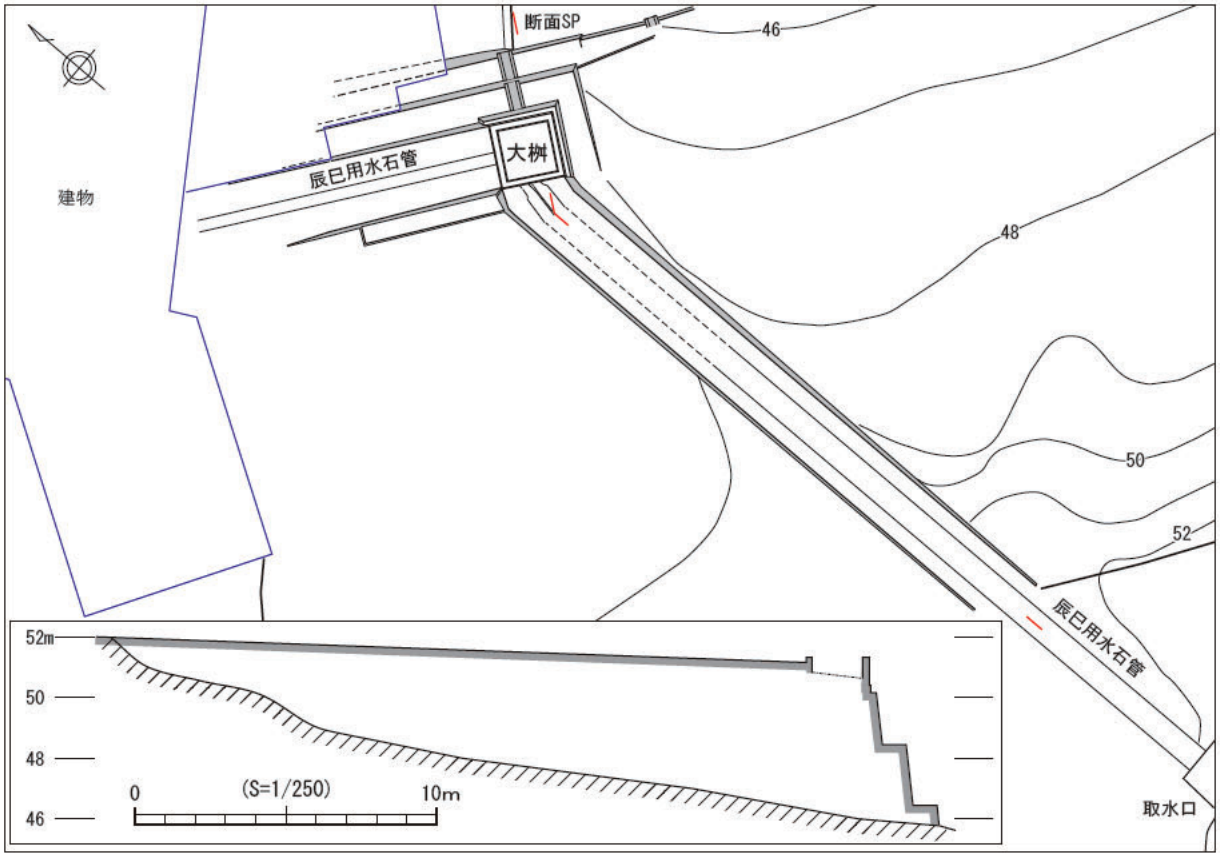
文献によると、文久２年（1862）に城内への送水口である大桝の改修が実施されており、Ⅳ期絵図に見える平面形状になったと推定される。現状は、「兼六園図」等の描写（第 202 図①）に類似して

①取水口　南から

②水道（辰巳用水石管）　南から

③水道石垣　北から

④水道屈曲部 桝（大桝）　南から



⑤水道関連遺構略測図

第 200 図　水道（辰巳用水）関連遺構写真・略測図

①水道屈曲部 桝（大桝） 南東から

②水道屈曲部 南西から

③水道石垣北面（桝下）

④水道石垣中段上面 構造物痕跡 北西から

⑤水道石垣中段上面 構造物痕跡 北西から

第 201 図 水道（辰巳用水）関連遺構写真

いるが、立面構成については判然とせず、現況のような三段に及ぶ石垣が存在していたかどうかは明らかではない。

その他の流れ・水路（位置：第 187 図、第 202 図②）

霞ヶ池から流れ出る水の経路は、蓮池庭に向かう流れ（北・南）、蓮池庭高之亭前の噴水に至る経路等がある。南側の流れは、蓮池庭・翠滝の上流に至るもので、池から小滝状となって流れ落ち、中段との境の法面を下るあたりまでが絵図と経路がほぼ一致する。この部分の護岸は川原石を主体とした布積み（第 202 図②）で、隅角部には戸室切石が配される。北側の流れは竹沢庭側については絵図と経路が一致しており、橋の位置も変わっていない。

池

霞ヶ池（位置:第 187 図、第 202 ③･203 図） 長径 118 m、幅 73 mを測る大規模な池（第 202 図③、第 203 図①・②）で、現在の形状になったのは文久３年（1863）以後のことである。付近の旧地形はもともと北東が高く、南西が低かったと推定され、水面の一定性を確保するために、池の南西側を中心に盛土造成がされていると考えられる。池岸は、南～西岸の栄螺山裾一帯（第 203 図③～⑥）が古相を保っているとみられ、南寄りでは比較的大きな石材による石組（④・⑤）、北寄りでは大ぶりの川原石積護岸（⑥）が主体となっている。西～北岸（⑦）は戸室石石垣材等が数段積まれた形状であるが、前後が反転するもの等も多く、面を意識しない積み方となっている。また南～東岸は杭護岸である。南～西岸以外は近代以後、かなり改変されていると推定される。なお池中北東寄りに中島（蓬莱島）が１基あり、周囲は川原石積護岸（⑧）となっている。これらの景観は、護岸等の詳細はともかく、「兼六園絵巻」（第 154 図 62-25 上）の描写とおおよそ一致するものである。

その他の池 竹沢庭の池には、このほか放生池（金沢神社前、位置：第 189 図）、長谷池（位置：第 187 図）、沈砂池・氷室跡（山崎山周辺、位置：第 188 図）がある。このうち長谷池・沈砂池は近世絵図には見られない。また放生池は、近代以後に拡張され、形状が大きく変わっている。氷室跡とされる窪地については、総構堀の名残である可能性が高く、近世絵図にも描写されている。なお明治２年（1869）の文献史料（第 41 表 61-40）によると、付近に氷室があったことは確かであるが、この池状の窪地に該当するかどうかは確かではない。

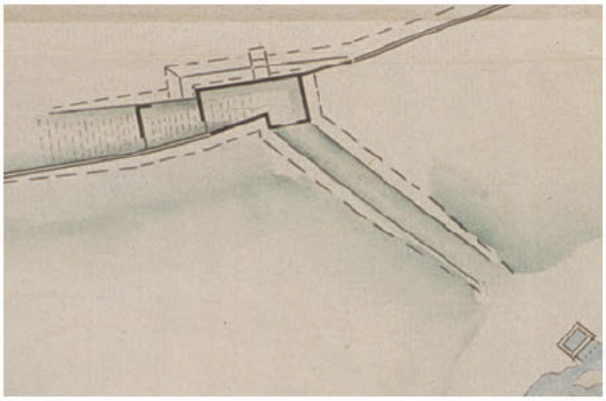
橋（第 204 ～ 205 図④）

曲水南東部（位置：第 188 図）については､最上流部の山崎山西端の橋が絵図と同位置に現存するが､構造等も踏襲しているかどうか明確ではない。これより下流の蛇行部では、橋本体は失われているが、橋挟み石が残っている箇所があり、とくに東岸側が顕著である（第 204 図①）。明治初期の絵画（「辰巳旧園新造客殿図」第 198 図 62-27）では木橋として描かれている。この他鶺鴒島に架っていた橋にも前述の通り取付痕跡（第 204 図②）が認められる。

中央部では、北西部との境付近にあった橋の取付部が一箇所確認できるのみである。南端の湾曲部において絵図に土橋の表現があるが、現状では不詳である。

曲水北西部（位置:第 188･187 図）では､七福神山に架る雪見橋､約 30 m西側に位置する雁行橋（亀甲橋）が、近世の状況を留めていると考えられる。なお曲水の最下流、霞ヶ池との境に架る虹橋は、平成に入ってから新材に取り換えられている。位置についても、近世絵図とは若干異なるようにも思われるが明確にできない。この他、雁行橋（亀甲橋）の西側にも木橋が架っていた。なお同じく雁行橋（亀甲橋）の西側にある現行の木橋２基は近世絵図とは異なる場所に設置されている。

曲水以外では、霞ヶ池から蓮池庭に向かう南北の流れに架る石橋が、絵図と一致する位置に認められる（位置:第 187 図）。矩形を呈するものが多いなかで､北側の一つは亀甲形をとる。亀甲形の石橋は､Ⅲ３期以後の絵図でよく描かれるようになるが､現状では雁行橋（亀甲橋）や当地点以外判然としない。ただし石橋本体については、近代以後の取り換えの可能性を排除し難いのが実情である。



①石垣等水道関連遺構　「兼六園図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-24　Ⅳ期

②水路護岸石積（栄螺橋南）　南西から

③霞ヶ池平面図

第 202 図　水道（辰巳用水）関連遺構絵図 水路写真 霞ヶ池平面図

①霞ヶ池 全景　北から

②霞ヶ池 全景　南西から

③霞ヶ池南岸 切石積　北東から

④霞ヶ池南～西岸 護岸石組　東から

⑤霞ヶ池南～西岸 護岸石組　刻印

⑥霞ヶ池南西岸 護岸石組　東から

⑦霞ヶ池西～北岸 護岸石組　　東から

⑧霞ヶ池蓬莱島 護岸石組　北東から

第 203 図　霞ヶ池写真

雪見橋（位置：第 188 図、第 204 図③～⑤）　曲水西部北岸の七福神山側に渡る石橋で、緩やかな弧を描く２枚の戸室石製橋板（長さ 4.75 m、厚さ 28・29cm、幅 1.11・1.13 m）が並べられ、流れの岸に接して設けた小型加工戸室石材に架構される（③・④）。橋板同士が接する部分を除き、稜部分には小さく面取が施される。また上面・側面の調整加工は丁寧で、特に側面では面の長軸に対し斜め方向となるタタキ痕が顕著である（⑤）。下面は中央寄りが側面よりやや厚く、調整加工は粗い。

橋の取付として、両岸ともに花崗岩の方形切石材が２基ずつ据えられている。寸法にはばらつきがあり、幅 74cm ～1.94 m、奥行き 1.07～1.32 m、厚さ 36～60cm を測る。２基合わせた幅は橋板（2.24 m）より広く、北岸で 3.34 m、南岸で 2.59 mを測る。

この地点に石橋が描かれるのは、Ⅲ１期の絵図からで、竹沢御殿造営期（Ⅱ期）まで遡らない可能性がある。なおほとんどの絵図や「兼六園絵巻」（第 206 図②）では橋板は１枚のように表現されているが、Ⅲ２期の「竹沢并蓮池御庭御囲之図」（第 156 図上）では２枚として描かれている。

雁行橋（亀甲橋）（位置：第 187･188 図、第 204 図⑥～205 図④）　10 枚の亀甲形の板石を平面「人」字形あるいは雁行形に組み合わせたもので（第 204 図⑥、第 205 図①･②）、長さ（西側の通り）約 5.2 mを測る。中心が最も高く、岸側三方に向かい低くなるように調整されている。橋板の継ぎ目には抉りを入れる等かみ合わせの細工がある。また継ぎ目の下には支えの石を置き、やはり抉りを入れて密着を図っているが、石自体は不定形である。亀甲形の板石は、10 枚とも平面形は異なるが、長さ 1.14～1.73 m、幅 82cm ～1.44 mに収まり、寸法は比較的均質である。側面の厚みは 15～29cm であるが、20cm 以下が多い。公園化以降長らく通行されていたため、どれも上面は摩滅し、かなり窪んでいる。側面の調整加工（第 205 図③・④）については、上端はタタキ調整が施されるものの、中位から下位にかけては粗く、欠けや窪みを残す個体もあり、雪見橋とは対照的である。下面の調整は粗く、中央部が厚くなっている。橋の取付には、平坦な板状の自然石を埋め込んで飛石状に設えている。

現況と同様の形状の橋が描かれるのは、Ⅲ２期の「竹沢并蓮池御庭御囲之図」（第 156 図上）以降であり、雪見橋に後出すると考えられる。

側面の調整加工の粗さから、亀甲形の板石は、橋本来の素材として造られたかどうか疑問が残る。Ⅲ４期の「竹沢御屋敷総絵図」には、辰巳門内の敷石として亀甲形の意匠が描写されているので、御殿建物周囲の敷石が転用された可能性も一考に値する。

井戸等

竹沢御殿期には井戸が多く設けられたが、現在まで残っているものは少なく、金沢神社社務所脇、成巽閣西側（位置：第 189 図）、曲水中部・根上松東（位置：第 188 図）の４基のみである。また金沢神社南側の金城霊沢（位置：第 189 図、第 211 図②）は、汲み井戸ではなく自噴する泉であり、金沢の地名の由来となった名跡として継承されている。

築山

七福神山（位置：第 188 図、第 205 図⑤～第 206 図②）

曲水西部北側に位置する低平な築山で、19 基の景石が配されている（第 205 図⑤）。このうち 15 基が能登・志賀町荒木海岸付近で採取された福浦石（安山岩）の特徴をもつ。細身の立石は西端に置かれ、曲水南岸の御殿書斎の正面近くには横幅のある安定感のある石が配置されている（第 206 図①）。築山の原形は竹沢御殿造営期（Ⅱ期）まで遡るとみられるが、現在に受け継がれた景観（②）は、御殿建物の多くが撤去されたⅢ期以降に形成された可能性が考えられる。いずれにしろ、竹沢庭の中では、古相が残る築山・石組である。なお築山山頂の石塔は明治初期に下る。

栄螺山（位置：第 187 図、第 206 図③～第 208 図）

霞ヶ池の南側にある小高い築山（第 206 図③）で、天保８年（1837）頃、霞ヶ池の拡張に伴い造営されたと考えられている。山麓の南西側園路から最高地点（標高 60.7 m）までの高さは 9.2 mを測る。

①曲水南東部 橋挟み石　北西から

②鶺鴒島対岸橋取付部　西から

③雪見橋 全景　南から

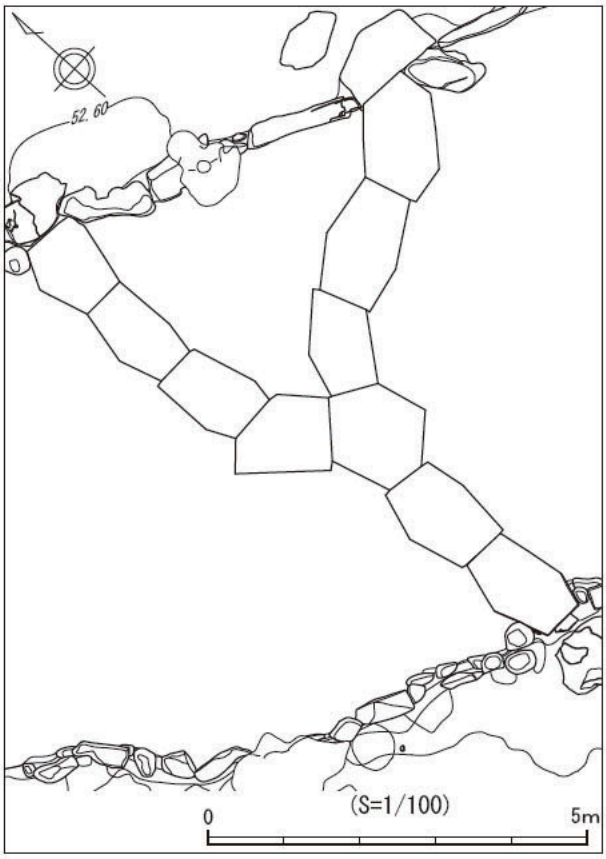
④雪見橋 全景　西から

⑤雪見橋 橋板北西側面

⑥雁行橋（亀甲橋） 全景　南西から

第 204 図　橋取付部・雪見橋・雁行橋（亀甲橋）写真

①雁行橋（亀甲橋） 全景　北西から



②雁行橋（亀甲橋）平面図

③雁行橋（亀甲橋） 橋板側面　北西から

④雁行橋（亀甲橋） 橋板側面　東から

⑤七福神山 全景　南西から

第 205 図　雁行橋（亀甲橋）写真・平面図 七福神山写真

①七福神山 石組中央部　南西から

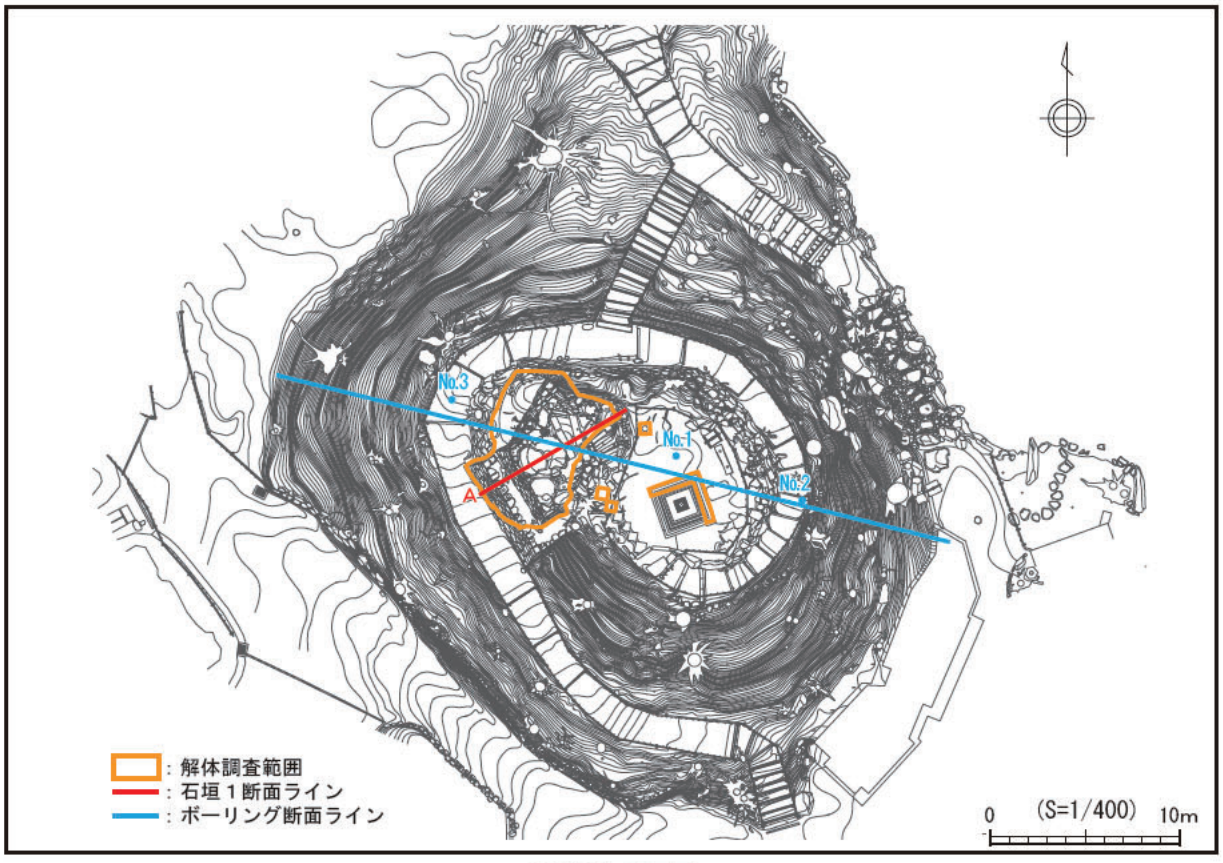
②七福神山・雪見橋等

「兼六園絵巻」［石川県立歴史博物館蔵］
62-25　Ⅳ期

③栄螺山 全景　南西から

④栄螺山

「竹沢御屋敷絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］
62-21　Ⅲ４期



⑤栄螺山平面図

第 206 図　七福神山写真・絵画 栄螺山写真・絵図・平面図

右回りの登攀路の大部分や、山麓～山腹の石垣・石積、山頂の石組・敷石・石塔等、全体にⅢ４期絵図（「竹沢御屋敷総絵図」、④）に描かれた状況を良好に留めている。

石垣は南西側（⑤）にあり、山裾に一段、山腹の登攀園路上位に二段の構成となっている。築石部は川原石主体、角部は戸室石とするものである（第 207 図①、上位二段について平成 21～23 年度に解体調査・修復工事を実施［石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所 2012］）。石垣西側の園路伝いには乱積状の石組が続くが、北側にかけて川原石主体の整った石積となり、山頂に至っている。

山頂は広い下段と石垣上部に対応する上段とに分かれる（第 208 図①）。下段には戸室石の敷石、三重石塔、手水鉢等がある。このうち正方形切石の対角線を連ねた意匠的な敷石は、上段への導線となっている。三重石塔（第 208 図②）は天保 10 年（1839）、竹沢御殿の主であった 12 代藩主前田斉広の供養を目的に造営されたもので、高さ約 6.4 ｍを測る。北側（霞ヶ池側）に拝石が配され、正面となっている。下段から低い石段を介した上段の周囲には滝坂石の立石等が配され、平坦面には福浦石とみられる大型の平石が数基敷かれている。ここに建つ傘状の東屋は、明治 10 年代の版画等では確認できるが、近世の絵図には表現されていない。

南側石垣の解体修理に伴う調査では、現存石垣の背後にも石垣が埋没していることが確認された（第 207 図②、第 208 図③）。内部構造としての石積ではなく、ある時期に露呈していた古段階の石垣と判断されている。地中レーダ探査の結果から、現存石垣よりやや広がりをもつと推定される。栄螺山の形状は、構築当初以後変容していることが窺えるが、詳細な段階比定までは至っていない。

また解体調査とあわせてボーリング調査が３箇所実施され（第 208 図④）、地山や盛土層の状況が確認されている。報告書では２層の上面もしくは下面を栄螺山造成時の基盤とみなす案が提示されているが、その場合竹沢御殿の基盤面が高くなる等の問題点も挙げている。栄螺山南麓の石垣や、その南に位置する滝上門の基盤を考慮すると、３・４層が細分される可能性も想定される。あるいは竹沢御殿以前の土層とされている５層上面が御殿基盤面で、４層以上を霞ヶ池外周・栄螺山造成土として、周囲一体を嵩上げしたとも推測し得るが、確定することは難しく、今後に課題が残っている。

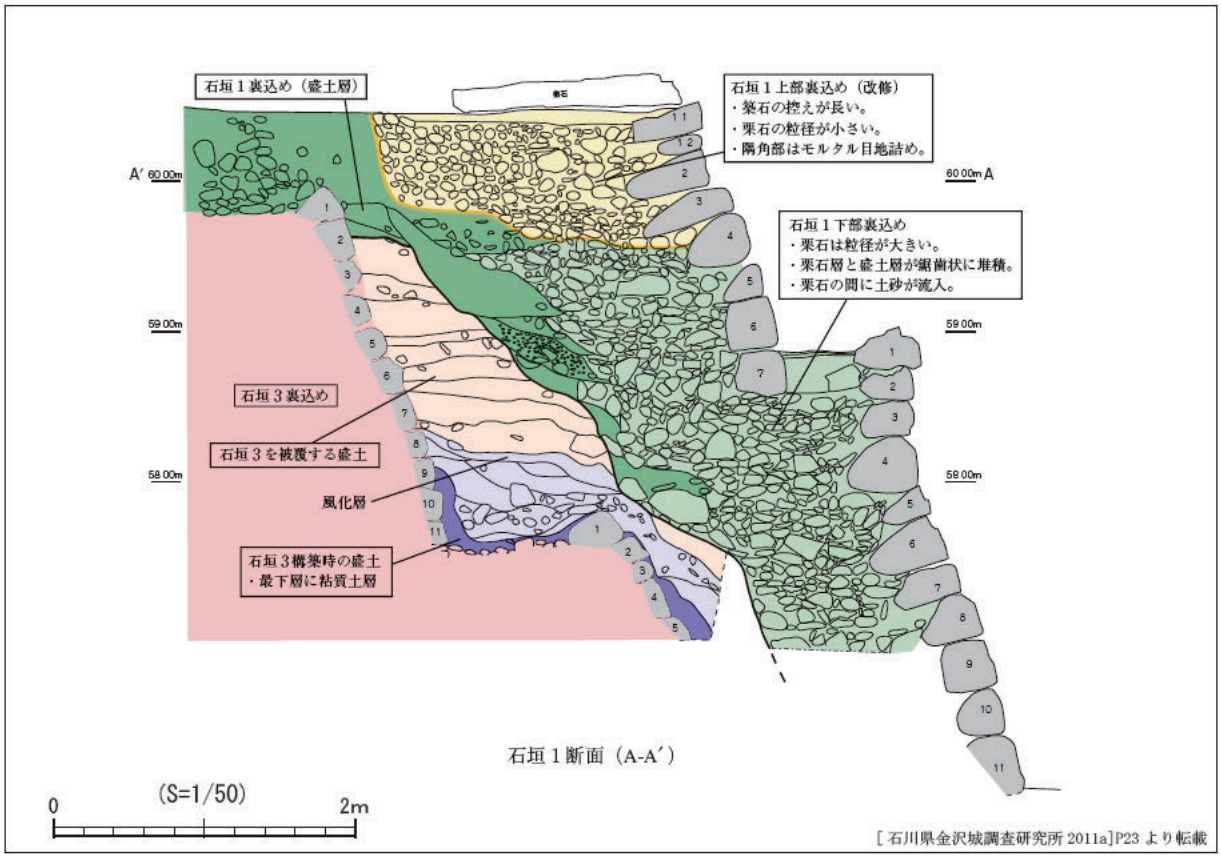
山崎山（位置：第 188 図、第 209・210 図、第 46 表）

敷地東端に位置する。東側は池を伴い、急斜面をなすが、西側は緩やかな裾部が広がる。山裾の園路面から山頂部までの高さは約６ｍを測る。山頂平坦面は南北に連なり、最高所には明治後半頃より東屋が設けられている。山頂よりやや下った緩やかな西側斜面に、景石が約 40 基程度配されている（第 209 図）。山崎山一帯は、慶長期に構築された総構の路線に重複しており、形状の特徴からみても、総構の土塁を起源とする見方が有力である。

第 210 図は現況に「兼六園図」の園路を重ねた照合図で、併せて景石岩石種の分布状況を示した。ある。このうち**A**の部分は、現況では廃止されているが、明治後期の写真においても園路が延長しており、現存する景石等の配置から見ても、その名残が看取できる。東斜面北側に設けられた**B**も同じく廃道であるが、斜面に並行する撓みとして認識できる。一方、東斜面南側の**C**は崩落したらしく現在痕跡を留めていない。また南側の園路**D**は、絵図では二折れに描かれているが、現状では大きく一折れするのみとなっている。南側山腹にはやや傾斜が緩やかに見える部分があるが、道の痕跡としては不明瞭となっている。

山崎山西側斜面の石組（景石）は、山頂に近い北東側のやや高所と、南西側のやや低い位置に集中し、おおよそ旧園路・等高線に沿い、南北に長く展開している。主体となる岩石種は滝坂石と戸室石で、これに福浦石が続く構成である（第 210 図・第 46 表）。寸法と岩石種はある程度対応しており、滝坂石は全体的に高さ・幅ともに大きいものが多く、戸室石は重複しつつこれよりやや小ぶりであり、福浦石は幅のある平石（第 209 図⑤）を主体とする傾向が窺える。細身の立石が目立ち、とくに滝坂

①栄螺山石垣南西面（石垣１） 修復後



［石川県金沢城調査研究所 2011a］P23 より転載

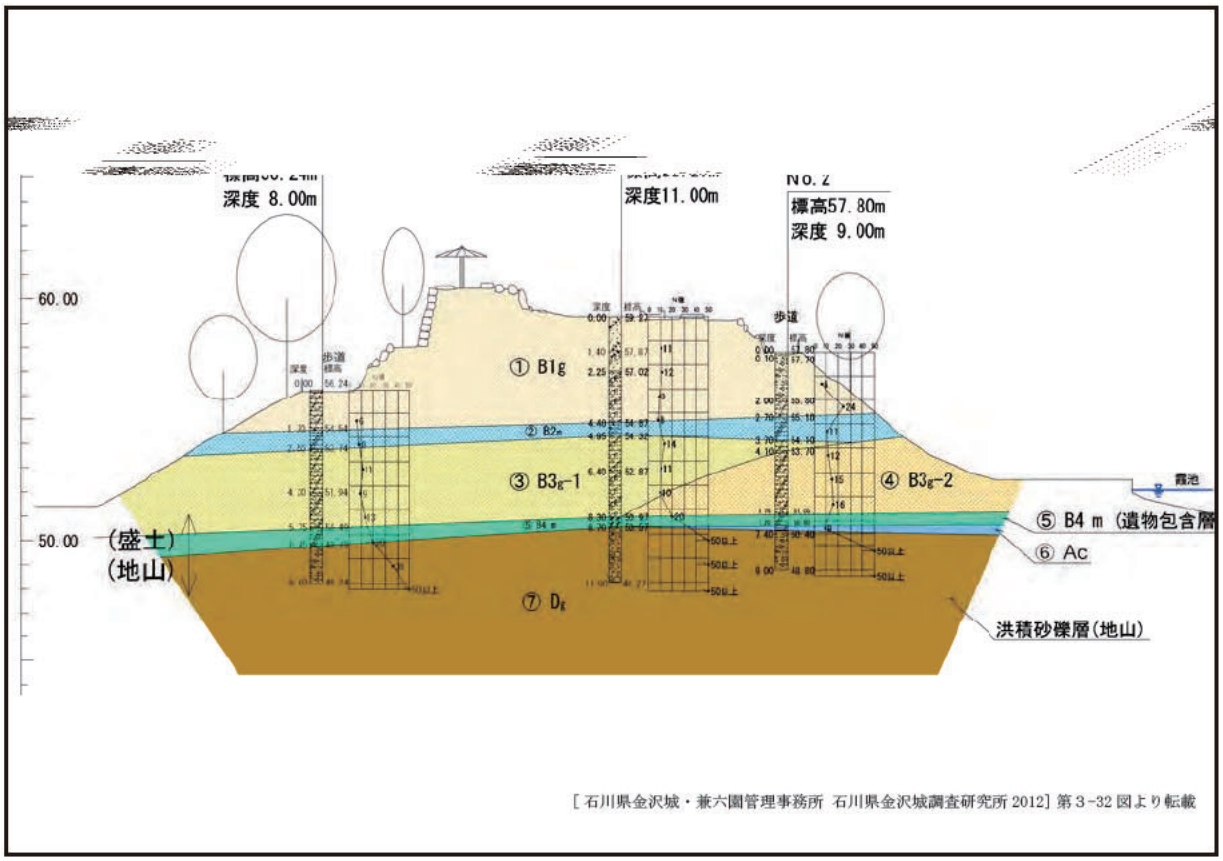
②栄螺山石垣南西面（石垣１）断面略図

第 207 図　栄螺山石垣写真・断面略図

①栄螺山頂部　北東から

③栄螺山内部石垣検出状況　南西から

②栄螺山石塔　北西から



［石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所 2012］第３-32 図より転載

④栄螺山地層推定断面図（ボーリング調査）

第 208 図　栄螺山写真・地層推定断面図

①山崎山石組 全景　北東から

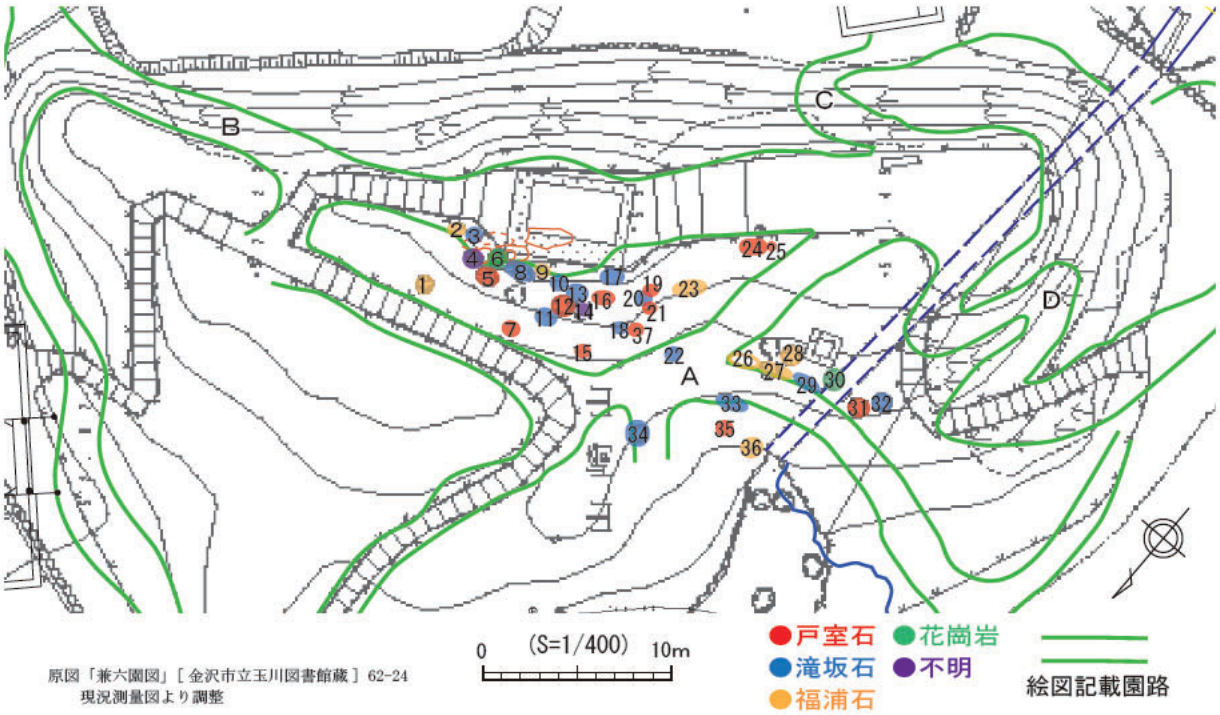
②山崎山石組 全景　南西から

③山崎山中央部景石　西から

④景石（滝坂石）

⑤景石（福浦石）

第 209 図　山崎山写真



第 210 図　山崎山石組 岩石種構成分布略図

第46表　山崎山景石 岩石種構成・計測表

No.	岩石種					寸法(cm)			備考
	滝坂	戸室	福浦	他	不明	高さ	幅	奥行	
1			1			74	128	64	
2			1			69	102	89	
3	1					115	50	41	立石 側面矢穴
4					1	55	96	53	
5		1				110	92	51	線刻？
6				1		98	69	61	花崗岩類
7		1				86	97	95	石垣石状
8	1					69	190	38	
9			1			41	62	25	
10	1					56	79	48	平石
11	1					100	95	43	
12		1				62	94	44	平石
13	1					143	107	51	立石 裏面ノミ状痕
14				1		34	53	49	川原石
15		1				57	97	67	石垣石状 割面有
16		1				79	139	43	加工痕
17	1					83	120	53	
18	1					123	99	48	立石
19		1				90	90	55	立石 割面有

No.	岩石種					寸法(cm)			備考
	滝坂	戸室	福浦	他	不明	高さ	幅	奥行	
20	1					107	100	42	
21		1				61	60	40	
22	1					35	83	56	
23			1			63	124	44	
24		1				65	120	86	割面有 ノミ状痕
25		1				24	64	38	加工痕
26			1			83	173	32	
27			1			39	161	115	
28			1			74	76	72	生痕？
29	1					119	230	47	
30				1		155	153	78	花崗岩類 表面に径1～2㎜の小礫多い
31		1				104	106	65	割面有 裏面矢穴
32	1					95	145	41	
33	1					87	200	33	
34	1					154	150	100	
35		1				60	106	54	
36			1			84	144	65	
37		1				29	47	37	
計	13	12	8	3	1				

①金城霊沢南東石垣　北から

②金城霊沢 全景　北西から

③鳳凰山岩窟 全景　北西から

④鳳凰山岩窟内部

⑤鳳凰山石組　北東から

第 211 図　金城霊沢・鳳凰山写真

①竹沢調練場土塁（西側出入口）　南西から

②竹沢調練場土塁（西側出入口）　東から

③竹沢調練場土塁（南西角部）　北から

④巽御殿（成巽閣）　北西から

⑤巽御殿石垣 南西部出角

⑥巽御殿 飛鶴庭　南東から

⑦竹沢鎮守（金沢神社）　北西から

⑧竹沢鎮守 参道石橋　北から

第 212 図　竹沢調練場土塁・巽御殿（成巽閣）・竹沢鎮守（金沢神社）写真

石は凹凸の著しい奇抜な形状を呈するものが多い（第 209 図③・④）。

また南西石組の側には御室の塔と称される花崗岩製の五重石塔が建つ。明治初期の作と考えられる絵画（「辰巳旧園新造客殿図」、第 198 図⑥）にも描かれており、設置は近世末期に遡るとみられる。

現況の園路はⅢ４期の「竹沢御屋敷総絵図」（第 151 図 62-21）とは異なり、文久３年（1863）以降の景観を示すⅣ期の「兼六園図」（第 153 図 62-24）の描写とよく類似しており、現在に近い景観がこの間に形成されたと考えられる。文久３年（1863）に山崎山の南西に巽御殿が造営され、明治３年まで 12 代藩主正室真龍院が居住していたこととの関連が窺われる。

鳳凰山（位置：第 189 図、第 211 図）

竹沢庭敷地の南西、金沢神社南側・金城霊沢（第 211 図②）の背後にある築山である。金城霊沢の背後は垂直に近い石垣面（①）であり、下部は大型川原石積主体、中～上部はやや粗い矩形の切石材が谷積み・落とし積みに積まれている。Ⅲ４期の「竹沢御屋敷総絵図」に描写があり、構築は安政期以前に遡る。

石垣の北側続きには岩窟が設けられている（③・④）。入口は上辺 1.6 m・下辺 2.6 m・高さ 2.0 mの逆台形を呈する。奥行は 2.4 m、奥壁は上辺 2.1 m、下辺 2.4 m、高さ 2.0 mを測る。側壁・天井は矩形、奥壁は多角形主体の面をもつ切石で積まれており、岩石種は、滝坂石（側壁・天井）・戸室石（奥壁･天井）で構成される。底面も切石材によるとみられるが岩石種等は不詳である。岩窟には、嘉永４年（1851）に設置された「金城霊沢碑」が遺存する。碑本体は根府川石、台座は坪野石製である。岩窟の外側に露呈し、景石ともなっている石材の岩石種は滝坂石で占められている（⑤）。

鳳凰山自体の築造年代を示す史料は不詳であるが、嘉永３年（1850）作成の絵図以前には描写がなく、金城霊沢碑の設置と一体的に施工された可能性が高いように思われる。

竹沢調練場土塁（位置：第 187・160 図、第 212 図①～③）

蓮池庭翠滝上流と、旧川口門付近には、嘉永４年（1851）に造営された調練場の遺構が部分的に認められる。翠滝の上流は、調練場の西側出入口に相当し、築山状となった土塁と通路部分が遺存している（第 212 図①・②）。北側の直線状の土塁は、基底幅約５m、長さ約 10 mを測る。南側の土塁はやや崩れているが、鍵形の平面形状を留める。この間は折れをもつ通路となっている。なお出入口の外側（西側）は瓢池に下る急斜面であり、どのように機能したかは判然としない。川口門付近は、調練場の南西角に相当し、この部分が一辺 15 m程度の築山状に改変された状態で残る（③）。元からの外郭ラインである南面・南面には、川原石を主体とする石垣が認められる。

巽御殿・竹沢鎮守（位置：第 188・189 図、第 212 図④～⑧）

竹沢庭に関連する建物として、成巽閣（巽御殿）･金沢神社（竹沢鎮守）がある。巽御殿（第 212 図④）は文久３年（1863）、12 代藩主正室真龍院の隠居御殿として造営された。現存する建物は居間･対面所･寝所･茶室等の御殿主要部と、竹沢御殿期に遡る辰巳長屋（巽御殿造営時に移設･縮小）及び土蔵で、役人詰所や部屋方等は失われている。御殿主要部に付属する庭園は名勝に指定されており、茶室である清香書院・清香軒に面する平庭（飛鶴庭）については（⑥）、流れを建物内部に取り込み内露地とする等、趣向が凝らされている［金沢市 2016］。また前述の通り、御殿の基礎となる石垣（⑤）も当該時期の遺構として重要である。

竹沢鎮守（⑦）は、先行して存在していた学校鎮守（天満宮）を、改めて竹沢御殿の鎮守として勧請したもので、本殿は棟札によると寛政６年（1794）に創建されている。勧請・移転の年紀については諸説あるが、竹沢御殿の造営時には全容が整っている。後世に修築を受けた部分もあるが、門前の石橋（⑧）や灯籠等を含め、造営当初の状況をほぼ踏襲していると考えられる。

4．各時期の様相

Ⅱ期（第 213 図）

成立・契機等

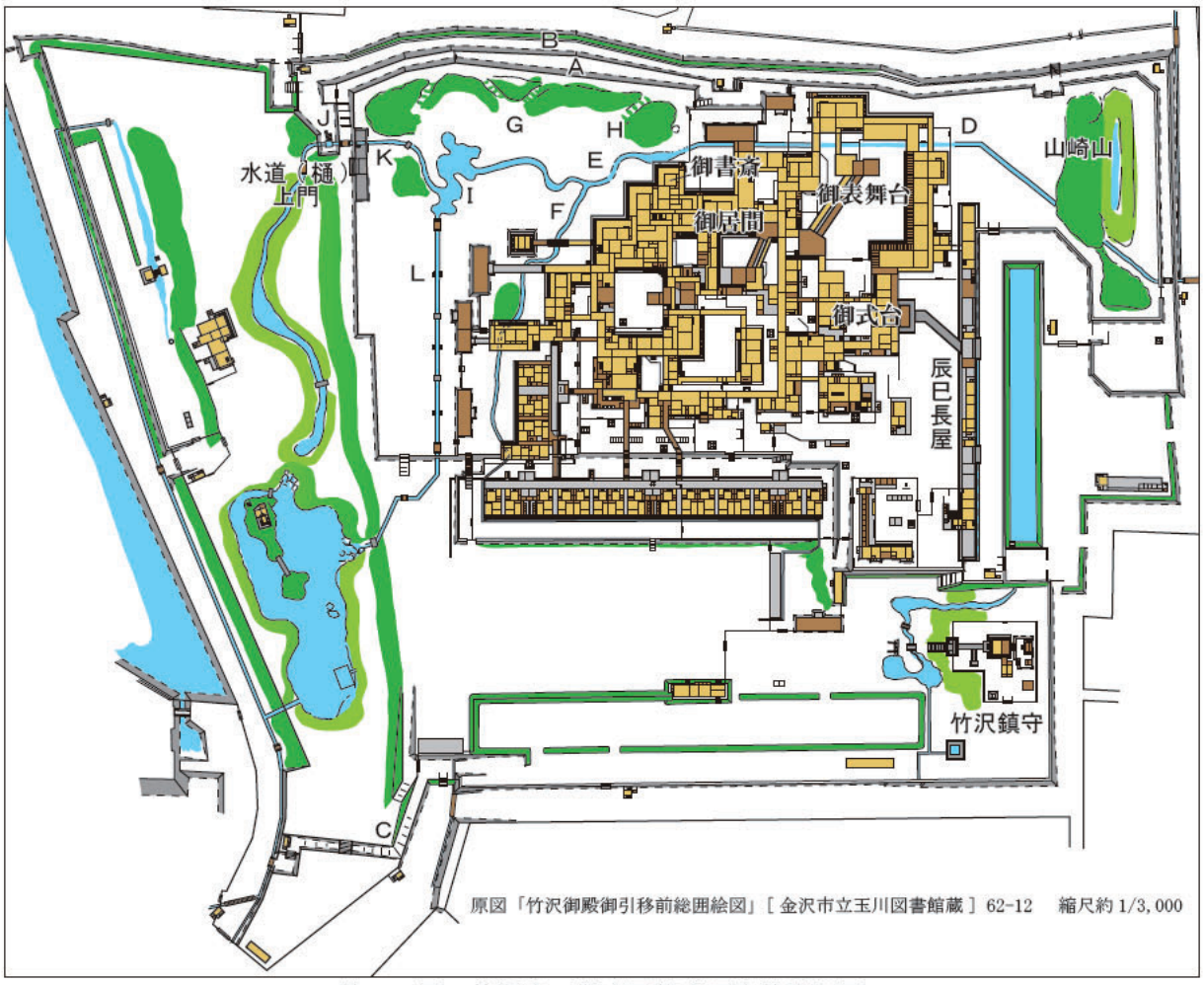
竹沢御殿造営は､12 代藩主前田斉広の隠居に端を発する。年寄前田直時への書簡(「御内御用留」(加越能文庫）収録､『金沢市史　資料編３』[金沢市史編さん委員会 1999]）には、従来隠居所に充てられていた金谷出丸を陰地として嫌い、高台として保養にふさわしく、金沢城を防御する拠点となる地を選んだとするが、[長山 2006b] では、防御に関する言及は、揚地（藩有地）でありながら放置されてきた経緯もあり、口実と推量している。この他、正門（辰巳門）を城と反対側（小立野側）に設けようとしている点などに、前藩主の居住所として相対的な独立性が窺われる。

御殿造営体制全般については [長山 2006b] に詳しく、庭園部分は明確ではないものの、御殿造営費に係り紹介された史料に、造営全体額が銀 3,300 貫目近くに上る中、露地方（庭園）に係る費用は約 19 貫目であることがみえる。

御殿造営は文政２年（1819）に開示され、同年中に幕府への申請、造営方組織の編成等が進み着手された。同５年（1822）までに工事は一段落し、斉広が金沢城内二ノ丸より移徙するが、翌年にかけて表能舞台等が増設されている。

構成等

第 213 図は、竹沢御殿造営時の状況を示す「竹沢御殿御引移前総囲絵図」（第 42 表・第 148 図 62-



第 213 図　竹沢庭Ⅱ期庭園構成要素等配置図

12)を原図とする。敷地最外郭の北･東･南側は､石垣ないし石積を基礎とする土塀等で囲繞されている。さらに御殿主要部の建つ上段は蓮池側と中段側、下部屋方の建つ中段もまた蓮池庭側と下段側に、それぞれ石垣が設けられている。下段のみ蓮池庭側に目立った区画は認められない。

北端西半の段状地形には、三筋の区画施設が描かれており、最北の外郭が石垣と土塀、中位が土羽と掛塀、上位が石垣と掛塀という構成である。土羽上面は蓮池往来（**A**）、下位石垣上面は役人往来（**B**）との名称が記載された通路である。なお絵図では明確ではないが、現況との対比によれば、上位石垣の上面もまだ御殿建物の建つ主郭より低い帯郭状を呈する面である（前項第 196 図参照)。

南西端にも蓮池庭南端を堀切状に横断し、上り坂道となって竹沢庭川口門付近に至る通路（**C**）がある（前節第 166 図②参照)。

敷地上段・中段には竹沢御殿建物の主体が造営される。御殿の正面は東（図右）で、前面に平面が一直線をなす水堀があり、これに平行して正門である長大な辰巳長屋が建つ。長屋の西側に御殿建物が展開する。中段には部屋方等の建物が造営されている。下段は馬場が主体を占め、東側には竹沢鎮守が配置される。竹沢鎮守については、この後若干の増設等があるものの、大規模な変動なくおおよそ現在まで受け継がれる。

庭園の構成要素の動脈である辰巳用水は、敷地東端から敷地内に入り、山崎山の北端を隧道として御殿側に導かれているが､表居間･書斎に至るまでは直線的（**D**）で､書斎 - 水道（樋）上門の空閑地（**G**）に入って緩やかに曲流している（**E**)。流れの北側には築山（**H**）が設けられているが、御殿側との間に橋は描かれていない。流れＥは､書斎の西側で小流（**F**）をまず分岐させる。**F** は離れ状の別棟「御清之御間」（「竹沢御殿之図」第 42 表・第 148 図 62-13 に記載）の前を通り、中段・下部屋方の周囲を廻り下段に至る。本流の方は、空閑地の西で入り組みの著しい小型の池（**I**）を形成し、ここで水道（樋）上門を通り抜けて大桝（**J**）・蓮池庭北部に至る経路（**K**）と、敷地西辺に並行して直線的に南下し、蓮池庭翠滝の上流となる経路（**L**）に分岐する。

当該期の庭は、**E**・**G**・**H**・**I** が展開する空間部分が主体で、二ノ丸や金谷出丸と同じく、御殿に付属する庭であった。ところで水道（樋）上門は、文政５年（1822）に松平定信が揮毫した兼六園の扁額が掲げられており、兼六園門とも呼ばれた。このため当初の兼六園は、上記御殿付属部分を指していたと考察されている［長山 2006b]。なお、兼六園の命名は松平定信によるものではないことが、その日記の解読・検討から指摘されており（渡邊金雄氏・渡邊小夜子氏の調査研究による、[本康 2016])、[長山 2014] では 12 代藩主正室真龍院の実家である鷹司家が想定されている。

この他水路**L** が通り、南端に滝上門のある土蔵群裏手の空閑地については､「鶴之御庭」として金網を巡らせていた（『金沢古蹟志』）との話も伝わる。後述するようにⅢ４期には竹沢庭に鶴がいたことを示す史料（第 41 表 61-32）があり、竹沢御殿造営当初の段階から飼育していた可能性もある。

利用状況

文政６年（1823）の奥舞台開きの能の上演に係る家中の拝見記において、庭園にも案内されたことが記されている（第 39 表 61-16)。ただし具体的な状況には言及されていない。

Ⅲ１期（第 214 ～ 216 図）

成立・契機・造営体制等

文政７年（1824)、前藩主で隠居であった前田斉広が死去した。竹沢御殿の建物はしばらくそのまま維持されたが､文政 13 年（天保元年､1830）には撤去が始まり（第 39 表 61-17)､天保 10 年（1839）までには、主要部としては奥（能）舞台・表居間・書斎付近のみが残された。撤去の理由としては、維持管理の手間の軽減、解体による古材の活用や払い下げによる収益が想定される［長山 2006b]。

天保８年（1837）には「書斎先」「書斎上之方」の泉水・水源水道の付替・拡張が行われた（「成瀬正敦日記」61-19・20)。この２年後の天保 10 年（1839）には泉水（池）が拡張され、栄螺山に石

塔が造立されている（「成瀬正敦日記」61-23）。

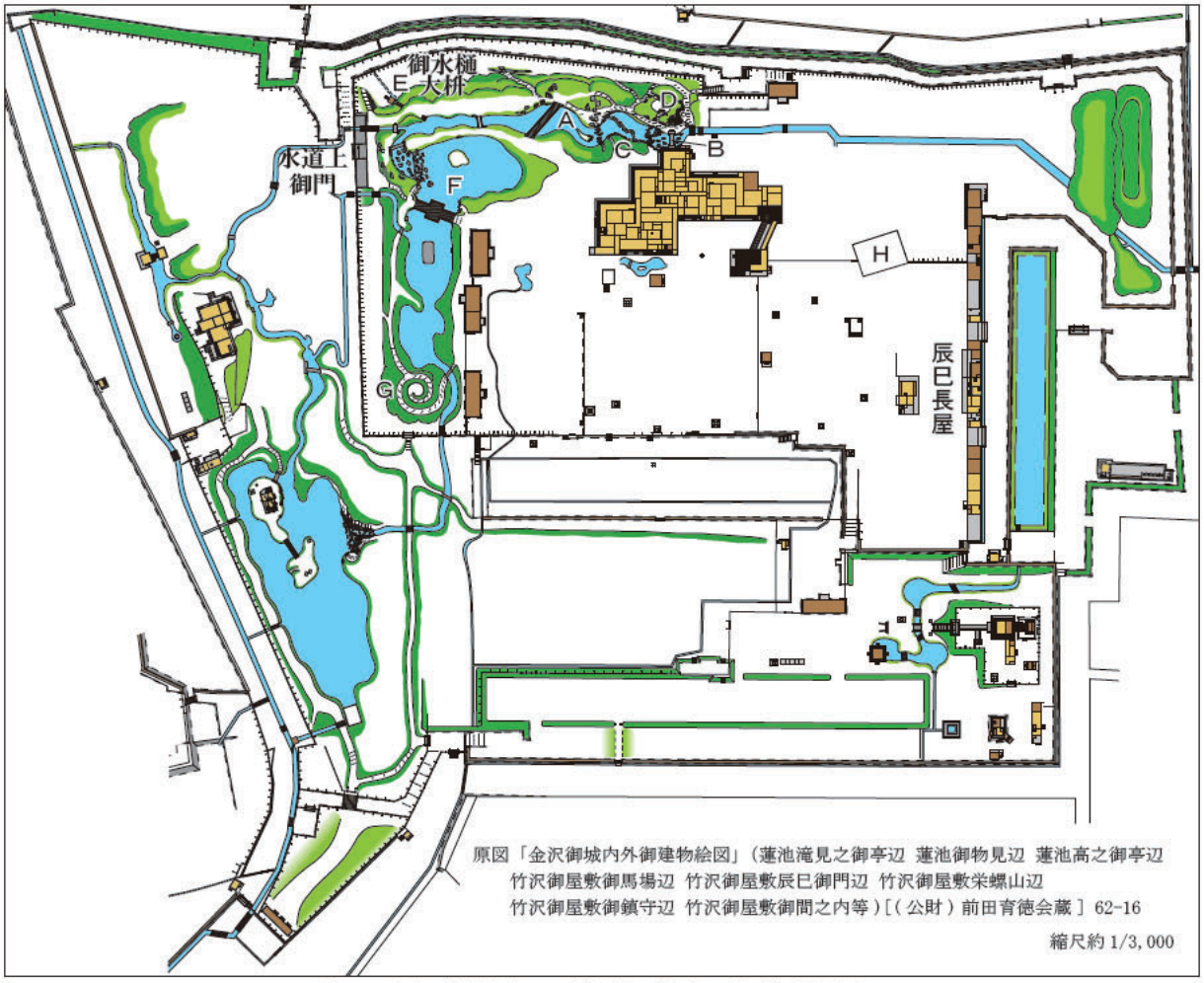
また天保９年（1838）閏４月には、蓮池庭・竹沢庭の支配が露地方から御次方に改められた（「成瀬正敦日記」61-22）。この年は、前藩主正室真龍院が江戸から金沢へ下向することとなっており、真龍院の庭園訪問時に備え、藩主（13 代斉泰）に近い御次から直接指示できるようにしたと推測される［長山 2006b］。

構成等

第 214 図は「金沢御城内外御建物絵図」（第 42 表・第 149 図 62-16）の竹沢御殿（当該時期の呼称は「竹沢（御）屋敷」に変更）該当部分で、天保８～９年（1837～1838）の景観を示すと考えられる。敷地全体・上段・中段周囲を囲む石垣・塀等はほとんど変わっていない。

庭園の構成要素は、Ⅱ期から変化がみられる。辰巳用水の取り込み部から書斎までは前代と同様直線的で、この辺りは建物が撤去され空閑地となったとは言え、明確な庭園化は図られていないようである。しかしわずかに残された書斎付近より西側に広がる、従来からの庭園部分については、辰巳用水の流れはその幅が拡張され、現況に近い平面形状となった（A）。「御書斎上之方御泉水」を掘り足したとする史料（第 39 表 61-20）に対応すると考えられる。

流れは書斎の縁側下までにほぼ重なり、対岸に向かい石橋の雪見橋（B）が架橋されている。この他にも木橋や飛び石が狭い範囲に集中して設けられたが、現況まで踏襲されるのは雪見橋Bのみである。西側の木橋（C）はいわゆる八つ橋の形式をとるが、現況では雁行橋（亀甲橋）の位置にほぼ重なる。雪見橋B北側の石組（D）は、七福神山の原形と考えられるが、この段階では東側にも巡るよ



第 214 図　竹沢庭Ⅲ１期庭園構成要素等配置図１

うに描写されている。

流れの西端近く、水道（樋）上門経由の水路が分岐する手前に木製の施設があり、その北西延長（図左上）には大型の桝（**E**）がある。石川門を経由して城内に送られる水道の起点、大桝を示す。「竹沢御屋敷御書斎先より参り候水源水道付替」とする史料（61-19）に対応すると考えられる。

水道（樋）上門を経由し蓮池庭に向かう経路の分岐点の先に石橋（現・虹橋の原形）があり、その向こうは大規模な池（**F**）が広がる。現在の霞ヶ池の西半に相当する。池の中央やや北寄りには中央が広まった木橋が架り、橋以北は池中に多くの景石や石灯籠がみられる。池**F**からも二箇所の水路が分岐し、それぞれ蓮池庭の黄門橋付近と、翠滝上流とに至っている。

池**F**の南側に渦巻状の園路をもつ築山「栄螺山」（**G**）がある。天保期の文献史料（第 39 表 61-23、第 40 表 61-24）に「さゝい山」「サゝイ山」として見え、名称が近世に遡ることが明白な数少ない事例である。天保８年（1837）の流れ・池普請に伴い、掘削土を盛り上げて築造されたと考えられる。

残された辰巳長屋と奥舞台の中間に、塀で囲まれ、御殿建物とは軸を異にする矩形の区画（**H**）がある。Ⅱ期では御殿の玄関付近に相当し、このような区画は認められなかったが、御殿造営以前のⅠ期まで遡ると、学校鎮守（天満宮）本殿があった箇所に相当することが判明する（第 42 表・第 147 図 62-10）。学校鎮守は当初は孔子を祀る聖堂として計画されており（62-11）、結果として実現しなかったものの、建物主軸について方位を意識して設定された点に当初計画の名残が認められる。このように区画**H**は、御殿建物撤去後に、改めて学校鎮守跡地を反映したものと判断される。

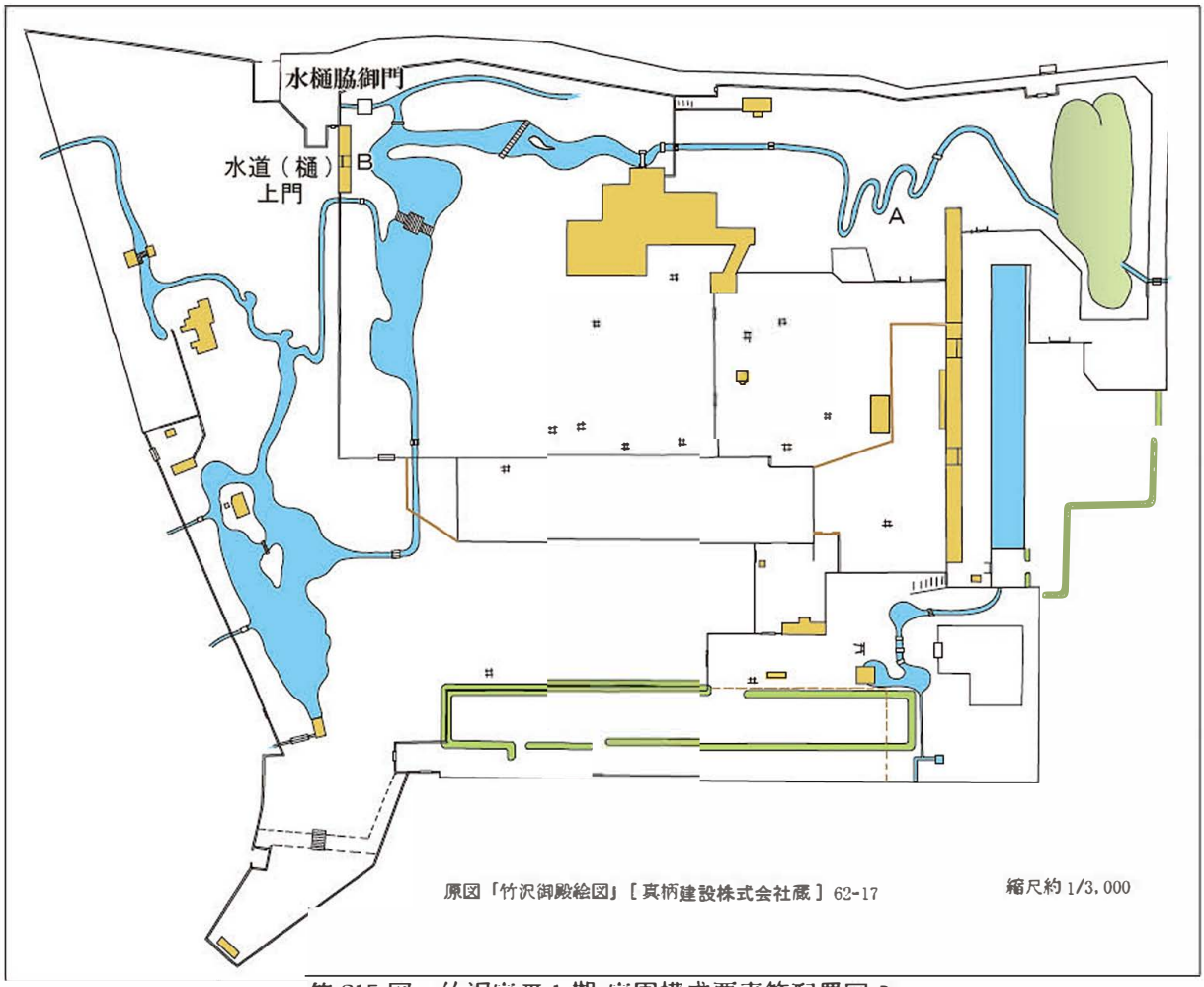
なお、この間の経緯を窺い得る文献史料が存在する（「奥村栄通御城方留帳」第 39 表 61-18）。これによると 12 代藩主前田斉広没後、江戸に居た正室真龍院は、竹沢御殿普請の際に学校鎮守を移転させ、その跡に建物を造営したことを気にしていたとし、御殿建物を撤去し、鎮守跡地を柵で囲い、地面を清めておくように要望していた（文政 10 年（1827））。文政 13 年（天保元年、1830）の御殿建物撤去の際、作事奉行が詮議し、御殿式台付近に鎮守跡地を示したとみられる図面を城代に提出、藩主の上覧にも及んだ。この時点で実地に縄張りをし、いずれ柵の設置を命じられることも想定している。区画**H**は以後も受け継がれ、その後変容を遂げつつ、曲水中の鶺鴒島となって現在に至っている。

第 215 図は、「金沢御城内外御建物絵図」（62-16）に後出するとみられる「竹沢御殿絵図」（第 43 表・第 149 図 62-17）を原図とする。絵図 62-17 には栄螺山が描かれていないが、竹沢庭西辺の土蔵が失われており、建物の撤去が進んでいる状態を示す一方、北側の水道（樋）脇門外の袖柵が描かれており、天保 12 年（1841）以前の景観を示す。

庭園の構成要素としては辰巳用水南東部に特徴的な蛇行**A**が生じている。この絵図では蛇行が三単位表現されていて、後続する絵図では二単位であることから、実態を厳密に反映しているかどうかやや疑問は残るが、曲水の姿が漸移的に変化していることが窺える。

また本図では、他では「水道（樋）上門」とされていた蓮池庭との境界となる門**B**について、唯一「兼六圓（園）」（第 216 図）と記載する。当該門が、第 39 表 61-21 等の史料にみえる「兼六園門」であることを示すとともに、扁額が竹沢御殿側（門の裏側）に掲げられていた可能性を示唆する表現となっている。

この他、絵図には反映されていないが、天保８年（1837）８月には竹沢泉水に鮎簗を設け、鮎を獲って広式に差し上げるよう指示が出されている（「成瀬正敦日記」『加賀藩史料 14』）。園内の鮎漁については後にも記録があり、これらの鮎は文意からすれば犀川から辰巳用水を通じて入り込んできたものであろう。また同９月には「兼六園門」あたりで収穫された栗を金龍院（12 代藩主斉広院号）の霊前に供えているので（「成瀬正敦日記」第 39 表 61-21）、竹沢庭には栗の木が植樹された一画もあったことになる。さらに天保９年（1838）５月には桑畑を設ける計画も協議されている（「成瀬正敦日記」［長山 2006b］［池田 2016］）。

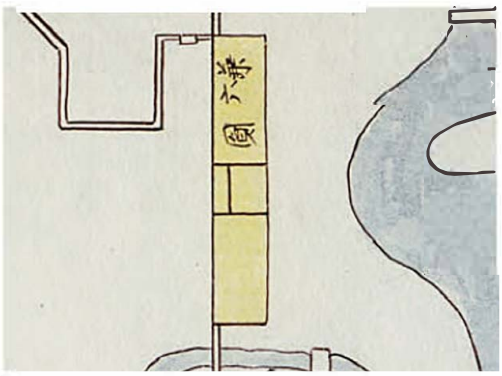


第 215 図　竹沢庭Ⅲ 1 期 庭園構成要素等配置図 2

利用状況

天保８・９年（1837・38）年の普請・整備は、９年８月に金沢に入国した真龍院を迎えるためであるところが大きく［長山 2006b］、13 代藩主前田斉泰は江戸から戻った天保９年４月以降、頻繁に蓮池庭に足を運び、整備について直接指示している様子が窺える（「文政天保間諸事要用雑記」加越能文庫、［長山 2006b］）。

天保９年９月６日、真龍院は初めて蓮池庭・竹沢庭を訪問し、斉泰やその生母栄操院とともに逍遥した。「竹沢庭御書斎」に飾り付けがなされたこと等が史料に見えるが、具体的な次第は不明である（「文政天保間諸事要用雑記」「成瀬正敦日記」、［長山 2006b］）。



第 216 図　「兼六圓（園）」の文字記載
「竹沢御殿絵図」［真柄建設株式会社蔵］62-17

Ⅲ２期（第 217・218 図）

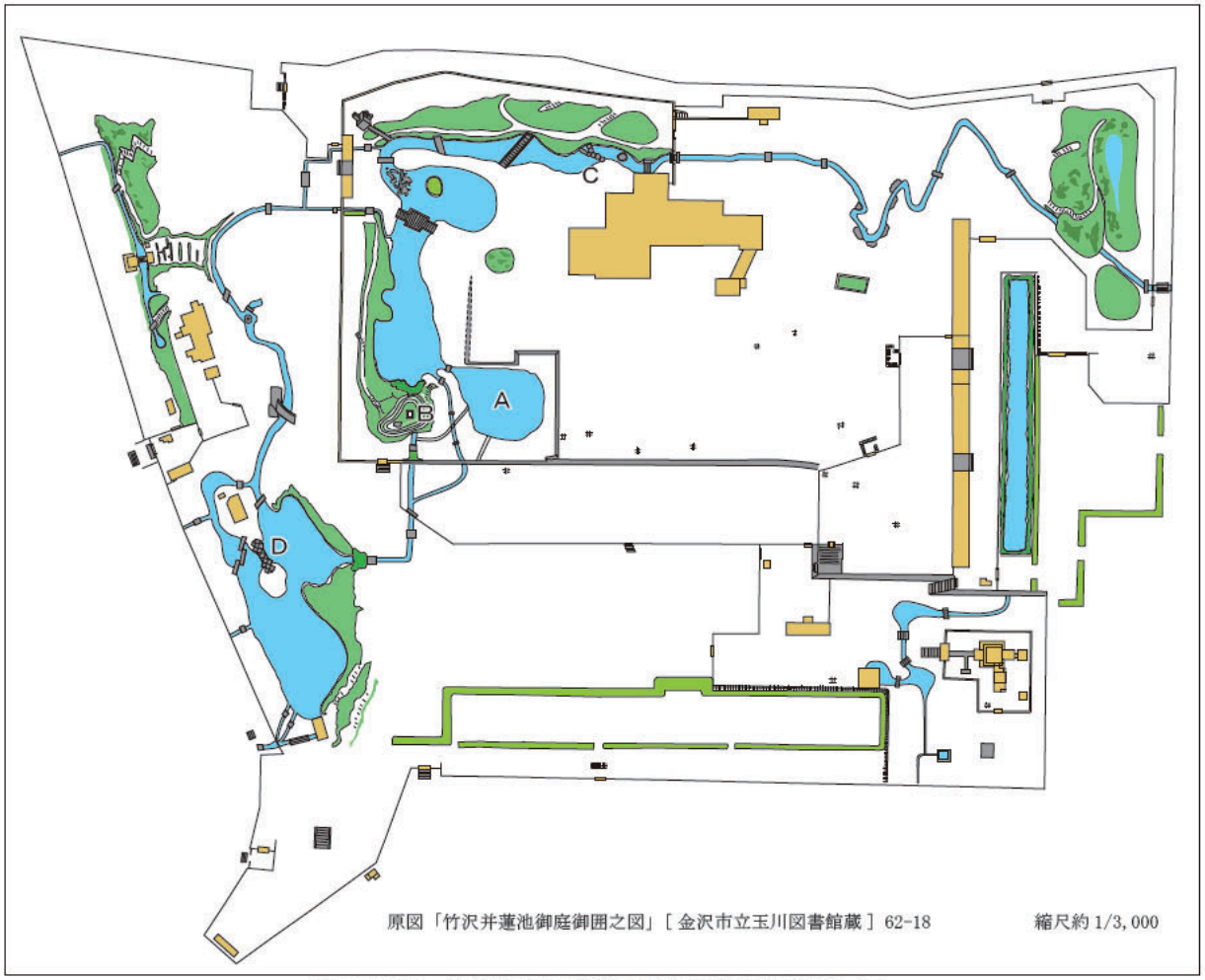
構成等

第 217・218 図は、天保 10 年（1839）ないし天保 12 年（1841）以降の景観を示す「竹沢并蓮池御庭御囲之図」（第 43 表・第 150 図 62-18）と「竹沢御殿・兼六園並御鎮守古絵図」（竹沢御殿・兼六園）（62-19）をそれぞれ原図とする。原図の内容は類似しているが、池や水路の描写から、62-19 が後出すると推定される。

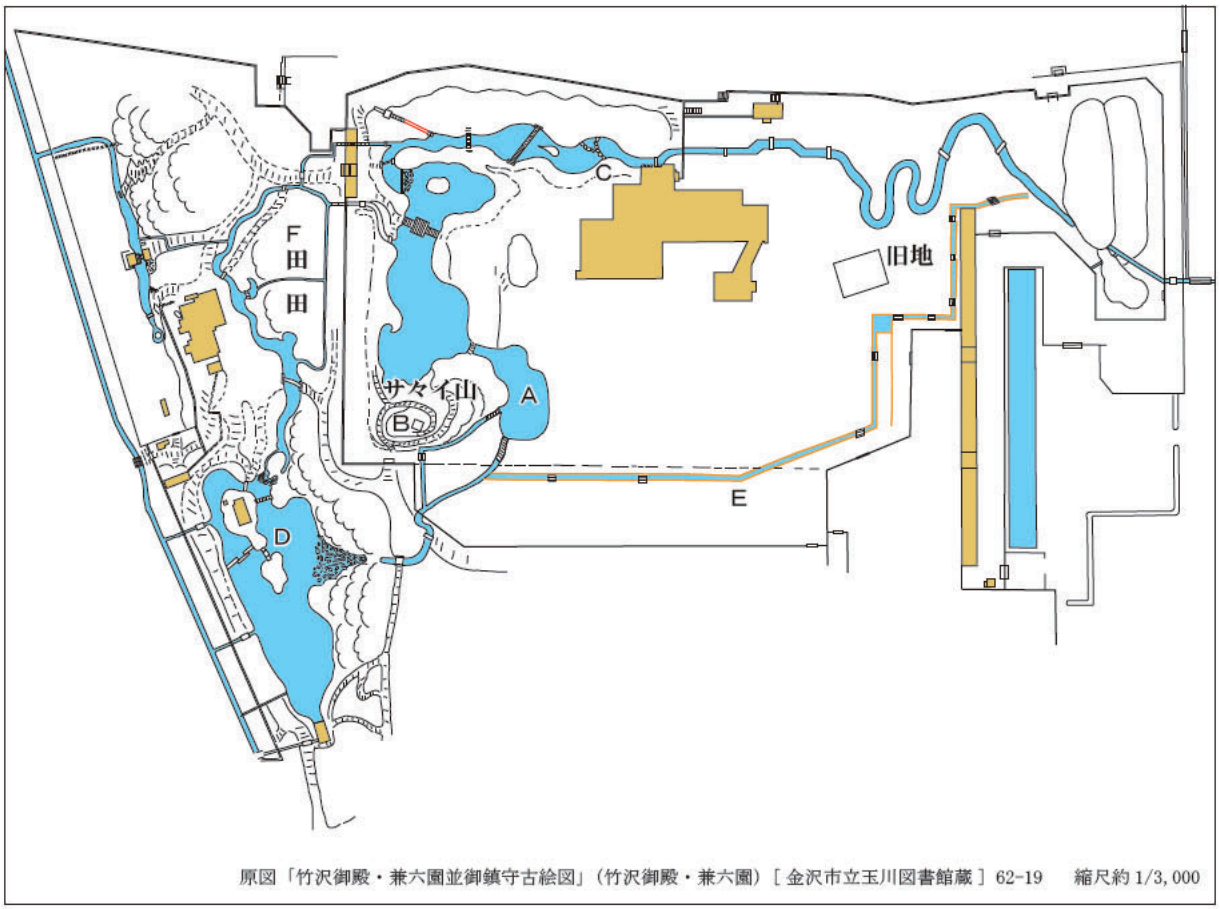
Ⅲ１期との差異として、池（霞ヶ池）が南東部に広げられ（A）、栄螺山もまた拡張し、頂部に石塔（B）が設けられていることが挙げられる。これらと関連して、池から分岐する水路にも変化が認められる。第 217 図に明示されるように、Ⅲ期までの霞ヶ池が展開する範囲は、当該期の拡張部を含め、竹沢御殿敷地上段においては若干低い区域であった。竹沢御殿の地盤の在り方に影響されていたと言えるが、Ⅳ期にはこの制約が解消されることとなる。栄螺山頂部の石塔Bは、前藩主前田斉広の供養塔として造立されたもので、天保 10 年（1839）７月４日に普請が始まり、その様子を藩主斉泰や栄操院らが竹沢屋敷の二階から見分している（「成瀬正敦日記」第 39 表 61-23）。なお石塔の製作・組立は、穴生である奥家（穴太家）が携わっていた（「奥源兵衛家系」［石川県金沢城調査研究所 2008c］）。

また、曲水西部において、Ⅲ１期では木製とみられる八つ橋が架っていた箇所に、雁行橋（亀甲橋）（C）が現況と同様の意匠として現れている（「竹沢并蓮池御庭御囲之図」第 156 図上）。この橋については文献史料に見えないが、前節で触れた蓮池庭の日暮橋（D）も同じ絵図に現況の姿で描写されており、兼六園を代表する意匠の成立時期としても当該期は注目される。

Ⅲ２期中の変化としては、敷地内部の塀等の区画が全体的に見られなくなることや、山崎山西側から分岐し、南回りの経路をとる水路（E）の出現（第 218 図）等が挙げられる。水路Eは北側の曲水と比べて直線的で、橋もすべて木橋であり、鑑賞に供されたとは考え難い。これを描く絵図 62-19 では、蓮池庭側に「田」の文字記載がある。竹沢庭側にはそれと分かる描写や文字記載はないものの、畑があったことは確かであり、水田等農地の経営に関連する施設だった可能性も考えられる。



第 217 図　竹沢庭Ⅲ２期庭園構成要素等配置図１



第 218 図　竹沢庭Ⅲ２期庭園構成要素等配置図２

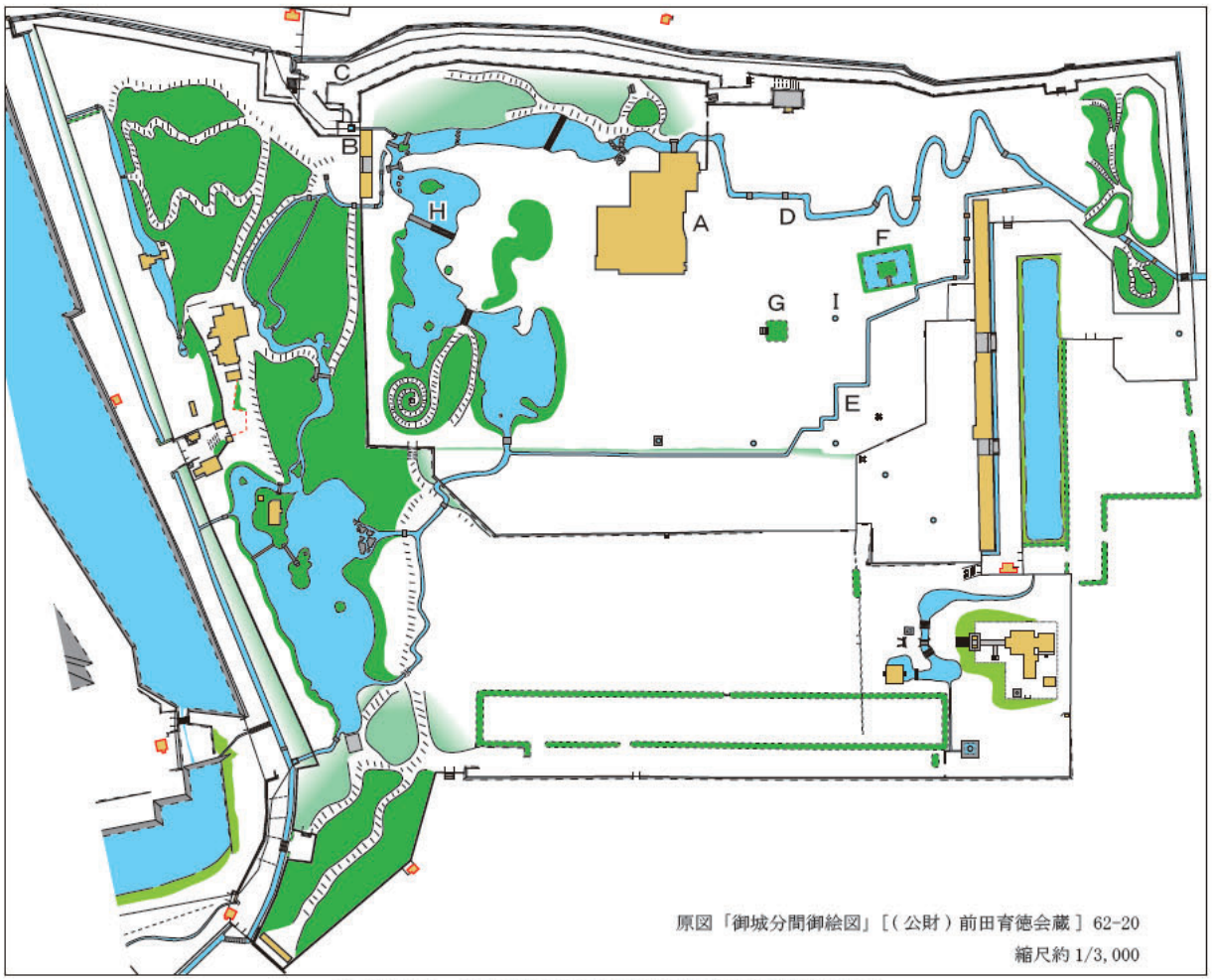
利用状況

前節で触れた通り、当該期には藩主やその子女等が蓮池庭を利用した記録が多く見られる。詳細がはっきりしない部分もあるが、竹沢庭も同様であったと考えられる。この他、藩主や一族の診察のために招聘された京都御典医が、天保 12･13 年（1841･42）に竹沢庭･蓮池庭の拝見を許可されているが、外部の人間による利用として希少な事例である（「村井長貞日記」第 40 表 61-25、［長山 2006b］）。また当該期は、畑や作物に関わる記録が目立ち（第 45 表）、西瓜・枇杷・瓜等は、前藩主斉広の牌前に供えられたり、真龍院への進物とされている。この他、枝大豆、いものこ等が作付されていたことや、城下の藩有の畑から柿の木を移植したこと等が史料に見える（［長山 2006b］［池田 2016］）。畑については、蓮池庭と比較しても、竹沢庭の特徴の一つと言っても大過ない印象を受ける。

Ⅲ３期（第 219～221 図）

構成等

第 219 図は、嘉永３年（1850）作成「御城分間御絵図」（第 43 表・第 151 図 62-20）を原図とする。御書斎を中心とした建物群（A）は奥舞台等東半を失い、一層縮小している（「世子御座所普請方御用主附一件」第 40 表 61-26）。また大桝（B）は水道（樋）上門の外側（蓮池庭側）に移し替えられている。これは弘化４年（1847）の普請記録に対応するものと推定される（「成瀬正敦日記」61-27）。庭園構成要素等については、Ⅲ２期から大きく変化した印象が薄いが、北辺斜面の蓮池・役人往来間の土羽が石垣となったこと（C）、水路・流れの経路が変更され、屈曲が増していること（D・E）、鎮守跡地が小規模な溝を巡らせた島（F）となっていること等が看取される。また敷地中央部には一辺三間程度の平面方形の区画（G）が見られ、現在も残る根上松とみられる（第 220 図）。西側の池



第 219 図　竹沢庭Ⅲ３期庭園構成要素等配置図

第 220 図　根上松　北西から

第 221 図　井戸　東から

中央北寄りに架っていた橋は、Ⅲ１期以来中心が矩形に広がる木橋であったが、ここでは中心の幅の広い部分がなくなり、西半が石橋に変容している（H）。この他Ⅲ２期の段階では多く残っていた、御殿主要部一帯の井戸が急速に減少している。このうち根上松と鎮守跡地の間にある井戸（I）は現存し（第 221 図）、井戸側から桜の木が生えた井戸として近代初期の版画にも描かれている。

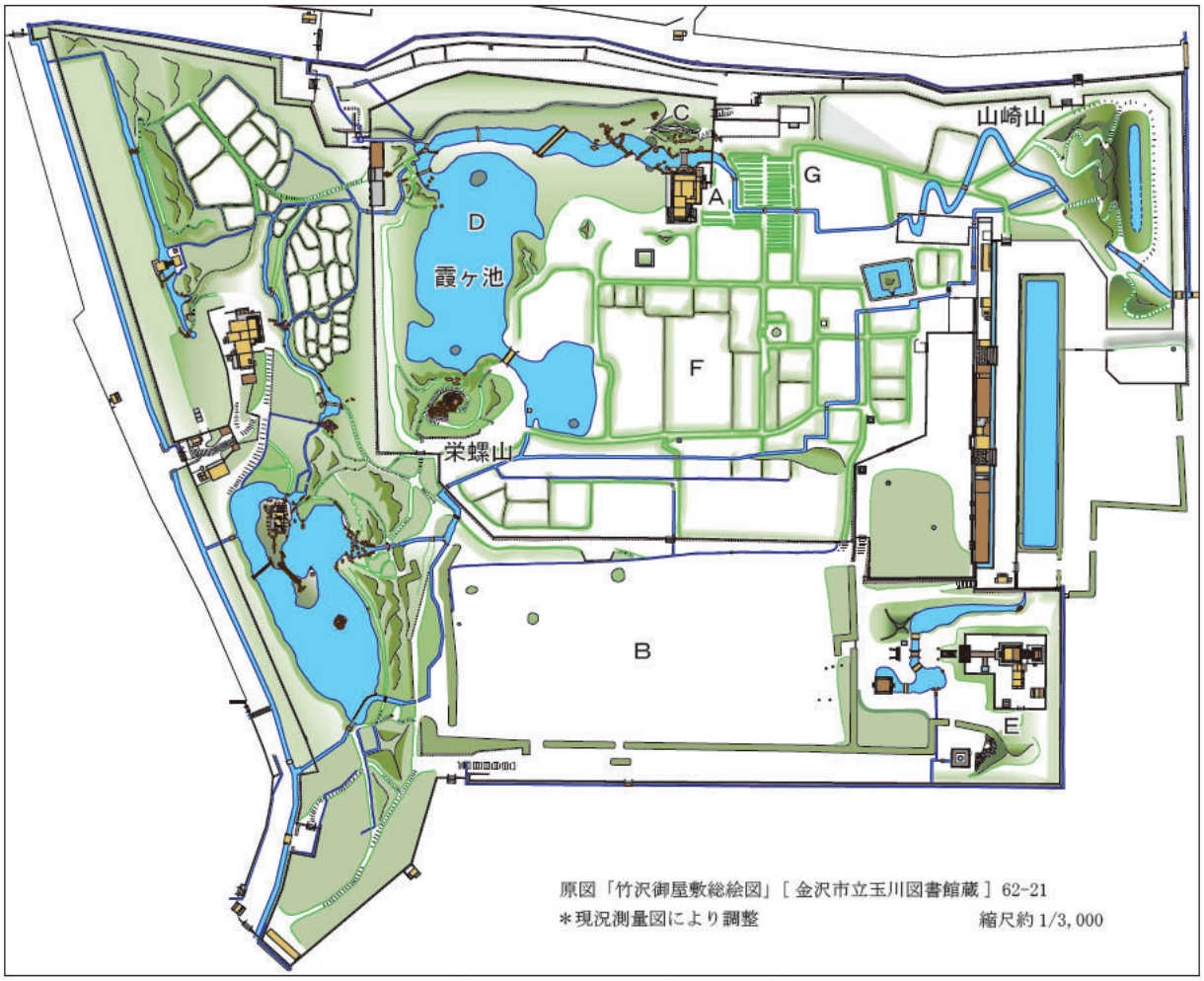
Ⅲ４期（第 222 図）

構成等

第 222 図は、安政３年（1856）作成「竹沢御屋敷総絵図」（第 43 表･第 151 図 62-21）を原図とする。建物群は元の御書斎の一部のみとなるまで縮小している（A）が、これは嘉永４年（1851）に行われた（「成瀬正敦日記」第 40 表 61-28）。またⅢ１期以来一貫して大きな変化がなかった敷地下段の馬場は、嘉永５年（1852）より軍事演習を行う調練場（B）として改造され（第 45 表、[長山 2006b]）、下段全体に土塁が広がることとなった。現在部分的に残る遺構はこの時構築されたものである。

曲水等の流れや池の形状等は、基本的に前代Ⅲ３期を踏襲しているが、七福神山（C）の場合、景石の配置等、現況にかなり類似した状況が絵図表現から窺える。また霞ヶ池についても、西半の幅がやや拡張され、当初から存在していた中央北寄りの橋が撤去される（D）等の差異が見られる。金城霊沢の背後には、落とし積状の石垣と岩窟を擁する築山（鳳凰山）（E）がある。嘉永４年（1851）に金城霊沢碑を岩窟に収めたとする文献（「成瀬正敦日記」第 40 表 61-29）があり、この時築造された可能性が考えられる。

竹沢庭中央部には、敷地の軸に沿った園路が数条通り、整然と並行・直交し、矩形の区画を形成している（F）。区画の内側は畔状の表現で更に細分される。同図の蓮池庭側には比較的類似する描写があり、一見して棚田等水田を示すものと判断できるが、竹沢庭のこの区画は水田かどうか判然としない。また書斎東側には細長い長円形ないし角丸長方形状の区画が整然と列をなしている状態が見られる（G）。[長山 2006b] ではこれを畑の畝としており、最も妥当な見方と思えるが、他にも花壇な



第 222 図　竹沢庭Ⅲ４期庭園構成要素等配置図

どの可能性が考えられる。いずれにしろこれらについては、前代からの変化とみなすべきか判断するのが難しい。なお嘉永５年（1852）、書斎先に水車が取り付けられたことが史料に見えるが（第 45 表、[長山 2006b]）、絵図には描かれていない。

利用状況

御殿の残存建物が、嘉永４年（1851）の撤去・縮小により、亭並みの規模となったため、庭全体についても、それまで禁じられていた帯刀・高足が解禁される等、外庭とされる蓮池庭と同じ格式に変更された。蓮池庭との一体化が進んだが、両者を隔てる塀・門はまだ健在である。また後述するように、利用状況の差異が窺える記録も残る。

当該期は、①前田斉泰や真龍院ら、藩主と近親者による利用、②調練場での調練・見分（第 40 表 61-31）、③城代・家老らによる拝見等が知られる（第 45 表）。このうち③は、②の調練場普請（嘉永５年）の見分に併せて願い出されたものであるが、家老らが藩主斉泰の許可を得たにも関わらず、城代（年寄）側の都合を優先して日時が変更された事例がある［長山 2006b］。

なお同年には、竹沢鎮守の祭礼（天満宮九百五十歳神忌）に関わり、制限付ながら武家（家中）・町人に参詣と蓮池庭の拝見が許可されたが（「文慶雑録」第 40 表 61-30 他、『加賀藩史料藩末篇上巻』）、竹沢庭については、藩主斉泰や子息豊之丞、真龍院らが訪れており、蓮池庭とは異なり開放されていない。

Ⅳ期（第 223 ～ 225 図）

造営体制

安政６年（1859）から翌万延元年（1860）にかけて、竹沢庭と蓮池庭とを区画する塀・門の撤去が行われた。万延元年（1860）には長屋門であった水道（樋）上門（兼六園門）が蓮池門に移され、名実ともに竹沢庭と蓮池庭は一体化した（「御用方手留」第 41 表 61-34・35）。

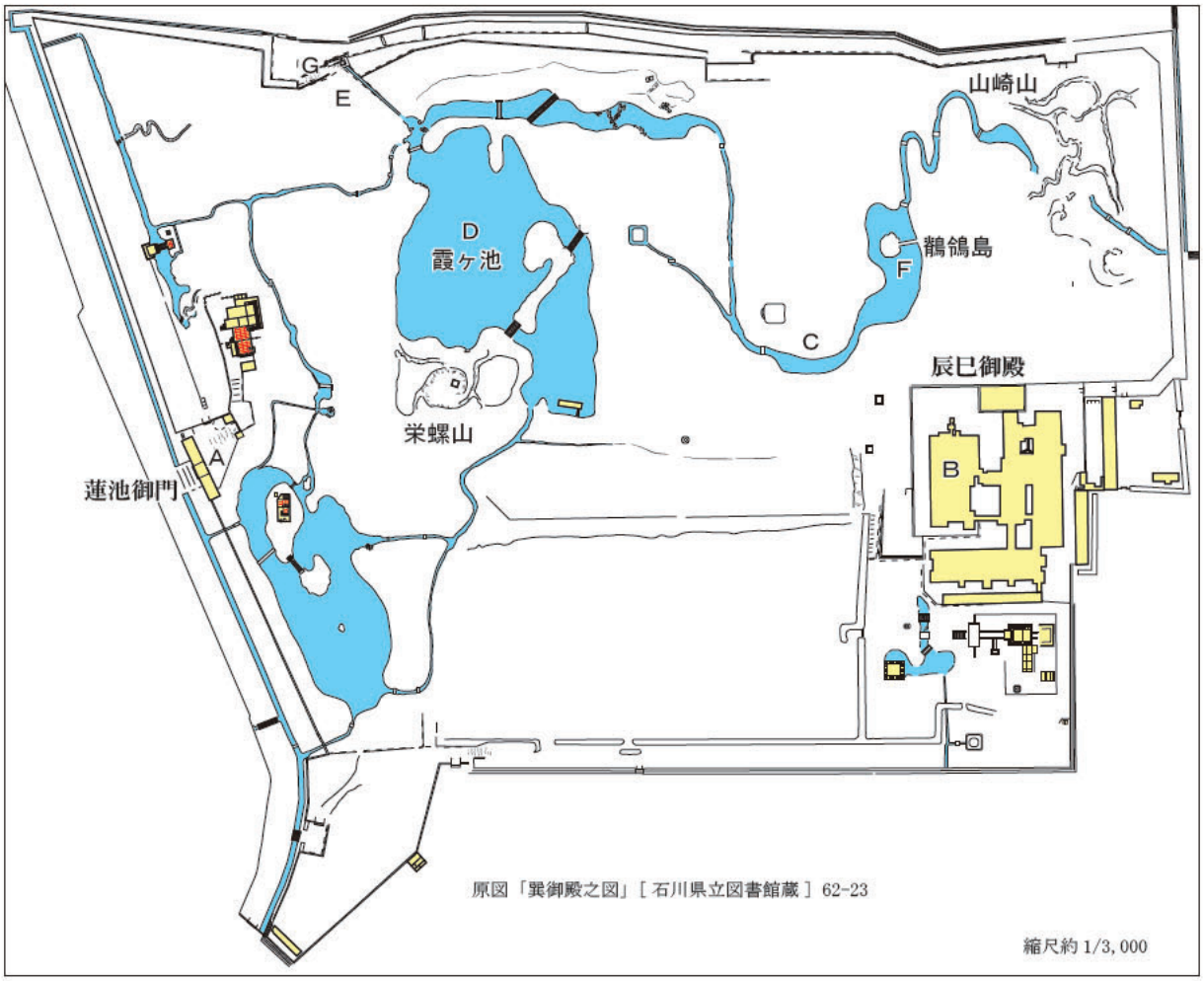
構成等

第 223 図は、巽御殿造営（文久３年（1863））当初の景観を示すと推定される「巽御殿之図」（第 43 表・第 153 図 62-23）を原図とする。Ⅲ４期の景観（第 222 図）と比較すると、蓮池庭との間の塀・門がみられず、万延元年以降の状況が反映されている。蓮池門の位置には長屋門（**A**）があり、これが元の水道（樋）上門（兼六園門）で、扁額ごと移されている（「御用方手留」第 41 表 61-35）。第 224 図は廃藩後の明治６年（1873）の刊本（『金沢展覧会品目 人』）の挿絵で、門と扁額が健在であるが、扁額が内側に向けて掲げられている点が注目される。

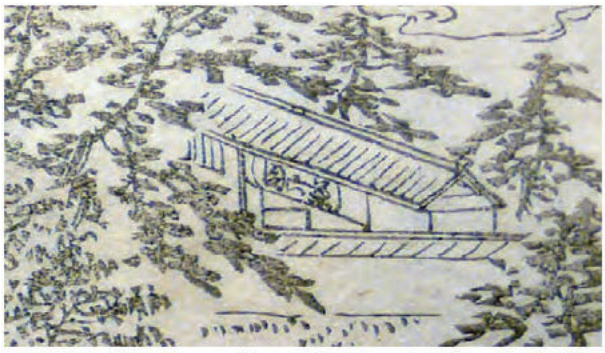
御殿建物の一部として残されてきた書斎も、文久３年（1863）の時点では既に撤去されている。また図の題目通り、敷地東側には巽御殿（**B**）がある。巽御殿は、藩主前田斉泰の正室で 11 代将軍徳川家斉の息女である溶姫の金沢下向に係り、真龍院の新居として造営された。

この他の大きな変化として、曲水中央部（**C**）や霞ヶ池（**D**）の形状、大桝（**E**）の位置等が挙げられる。曲水本流**C**は、Ⅱ期から一貫して敷地北側を流れていたが、Ⅳ期に至り南側に大きく湾曲する形状となった。この結果、鎮守跡地の島状区画は、曲水に取り込まれて平面形も変容し、現存する鶴鴿島が形成された（**F**）。霞ヶ池**D**は東側に拡張され、築山が取り込まれ中島となった。大桝**E**は三度位置が移り、竹沢庭側に配置されている。城内への経路は、北側崖面を横断し、水道（樋）脇門付近で西側へ屈曲するとともに、階段状に下降する石垣構築物（**G**）を土台とする。

これらのうち大桝については、文久２年（1862）の普請記録がある（「御用方手留」［長山 2006b P202］）。絵図に描写された形状は、末端の水道（樋）脇門付近が失われているが、現存遺構（水道石垣）と概ね整合している。また安政６年（1859）に竹沢庭で泉水等の普請が命じられ、二箇所の反橋が架けられたとの史料（「御用方手留」第 41 表 61-33）があり、絵図に描かれた霞ヶ池の形状と対応する可能性がある。曲水については、鶴鴿島に残る石碑の紀年が文久２年（1862）であり、この時に修築



第 223 図　竹沢庭Ⅳ期庭園構成要素等配置図 1



『金沢展覧会品目 人』［石川県立図書館蔵］

第 224 図　蓮池門に掲げられた兼六園の扁額

されたとも考えられる。

第 225 図は、藩政期の景観として最も後出する「兼六園図」（第 43 表・第 153 図 62-24）を基に、Ⅲ 4 期の「竹沢御屋敷総絵図」の表現等を合成し、現況に合わせて調整したものである。第 223 図に比較すると、霞ヶ池の中島（H）が縮小して水面が広がり、ほぼ現況通りの形状となっている。曲水中央部（湾曲部）の形状も、第 223 図の形状を踏襲しつつ、より現況に近くなっている。この他、山崎山（Ⅰ）の園路は、第 223 図原図の描写が粗く、差異は不明であるが、少なくともⅢ 4 期の状況とはかなり相違しており、現況に近くなっている。山崎山背後の平面矩形の施設（J）は、氷室とする指摘があり［竹井 2004］·［南 2009］、史料 61-40（第 41 表）からもこの付近にあったことが知られる。ただし山崎山付近に腰掛を設ける計画があったことを示す慶応 3 年（1867）の史料があり（第 41 表 61-39）、この腰掛である可能性も考えられる。後者だとすると、絵図の作成年代は慶応 3 年（1867）以降となる。

文久 3 年（1863）作成の「巽御殿絵巻」（第 155 図 62-26）では、御殿建物の背景に曲水や根上松、霞ヶ池が認められる。曲水の護岸は石組等が見られず、現況とあまり変わらない。一方鵜鴒島には鳥居が描かれているが、朱塗の木造のように思われ、そうだとすれば現況とは異なる。また敷地全体は

疎林のように描かれ、広場が目立つ現況とは異なる印象が強い。

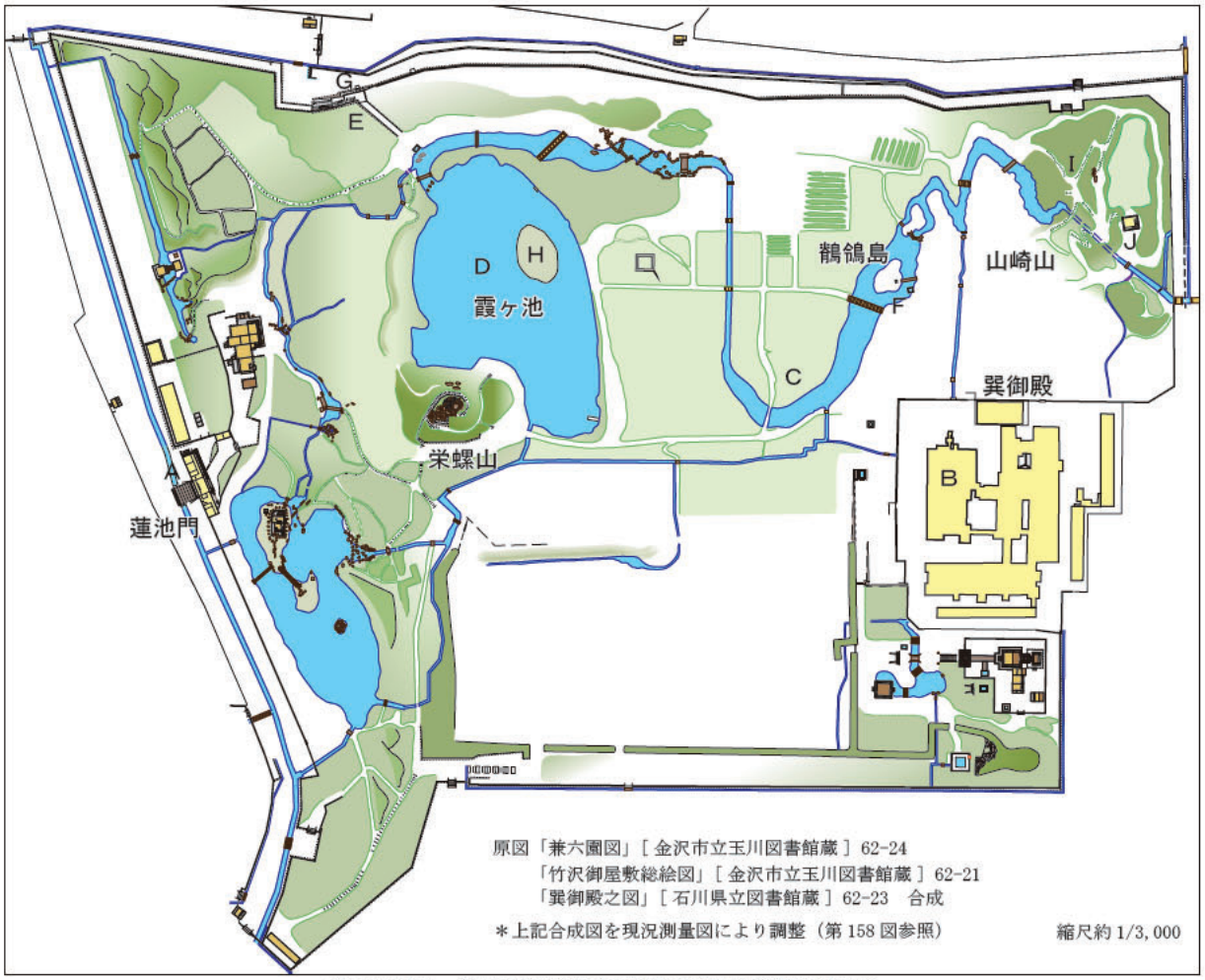
「兼六園絵巻」（第 155・206 図②）に描かれた景観も、作成年代は特定されていないがⅣ期と判断される。ただし、霞ヶ池の形状（第 155 図 62-25）は第 225 図と同様で、辰巳御殿創建時からやや下った時期の景観が描写されているようである。このうち例えば七福神山付近（第 206 図②）は、護岸や流れの中の景石には相違も見られるものの、主要な石組や石橋の様子はほとんど現況と変わらない。

利用状況

当該期も前代に引き続き、藩主一族の逍遥の記録があるが、特筆されるものに慶応２年（1866）に見世物として運ばれた象等が巽御殿・竹沢庭において 14 代藩主前田慶寧、前藩主斉泰、真龍院ら藩主一族や重臣達が見物している事例がある（第 41 表 61-37）。また明治２年（1869）、巽御殿を居所とした真龍院の八十余の賀を祝う囃子に伴い、招聘された能役者達が竹沢庭・蓮池庭の拝見を許された際の記録が残る（61-40）。この時の拝見経路は、山崎山・氷室⇒鶺鴒島（陰陽石・相生松）⇒霞ヶ池⇒高之亭（蓮池亭）⇒夕顔亭・滝⇒竹沢鎮守の順であった。この史料からは、山崎山付近に氷室があったこと、鶺鴒島にすでに相生松が具わっていたこと等の他、霞ヶ池に御座舟を浮かべ、藩主慶寧自ら舞い、太鼓を打ったこと等も判明する。

版籍奉還後の明治３年（1870）、真龍院が没し、11 月には竹沢庭・蓮池庭とも学校の所管となった。とは言えなお藩主一族の利用はこれに強い制約は受けなかったようである。

廃藩直前の明治４年（1871）２月には、蓮池庭・竹沢庭を併せて、当初は與楽園、半月後には兼六園と称し、身分に関わらず四民に公開することとなった（第 41 表 61-41）。



第 225 図　竹沢庭Ⅳ期庭園構成要素等配置図２

５．小結

（1）現存遺構の来歴（第226図）

現存遺構については、３項においてⅢ４期・Ⅳ期絵図との照合を中心に記述したので、その時点での存在を指摘したこととなるが、各時期の様相を踏まえ、主要なものを対象に改めて来歴を整理する。

敷地、地割

Ⅰ期の学校段階に遡る部分も考えられるが、大部分はⅡ期の竹沢御殿段階に造成された状況を継承している。南東隅の竹沢鎮守はⅡ期に設けられて以来存続している。隣接する下段はⅠ期の学校段階から馬場が置かれ、Ⅲ４期には調練所に修築されて、その際の土塁が部分的に残っている。上段は、池・流れ・築山等、庭園の主要な構成要素が設けられ、個別には著しく変化したが、竹沢御殿の地割を踏襲するところが大きかった。

敷地周囲

敷地周囲の区画として、地表上に姿を留める遺構は北辺石垣等多くはないが、ほとんどⅡ期の竹沢御殿段階に遡る。この他辰巳長屋等成巽閣周辺は、Ⅳ期の巽御殿造営に伴い生じている。なお、蓮池庭との境界に石積が一部認められるが、これはⅢ４期まで存続していた塀の基礎である。

北辺段状遺構

段状遺構中段・下段は「蓮池往来」「役人往来」に相当する通路跡で、Ⅱ期の竹沢御殿段階以来の遺構である。なお、役人往来の基盤となる法面は、Ⅱ期・Ⅲ１期の絵図では土羽表現であるが、嘉永３年（1850）の「御城分間御絵図」（Ⅲ３期、62-20）では石垣となっている。ただし現状において、地表上で確認できない。

曲水

曲水については、Ⅱ期の竹沢御殿段階以降修築を重ね、すでにⅢ１期に曲水西部の拡張があり、やや遅れて東部の蛇行が形成される。Ⅲ２期中には南側へ流路が分岐し、Ⅳ期に至りこの南流部分をベースに本流を大きく湾曲させる形状となって現況に連続している。ただし前述の通り、Ⅲ２～４期の北側流路と南側流路は性格がやや異なる可能性があり、とくに後出の南側流路は、園内に設けられた農地との関連を想定した。

曲水にかかる橋も時期によって変化している。なかでも現在も見どころとなっている曲水西部の雪見橋・雁行橋（亀甲橋）は、ともにⅡ期の竹沢御殿段階には見られない。また前者はⅢ１期、後者はⅢ１期の木橋（八つ橋）を経てⅢ２期に石橋化しており、成立の時期が異なっている。

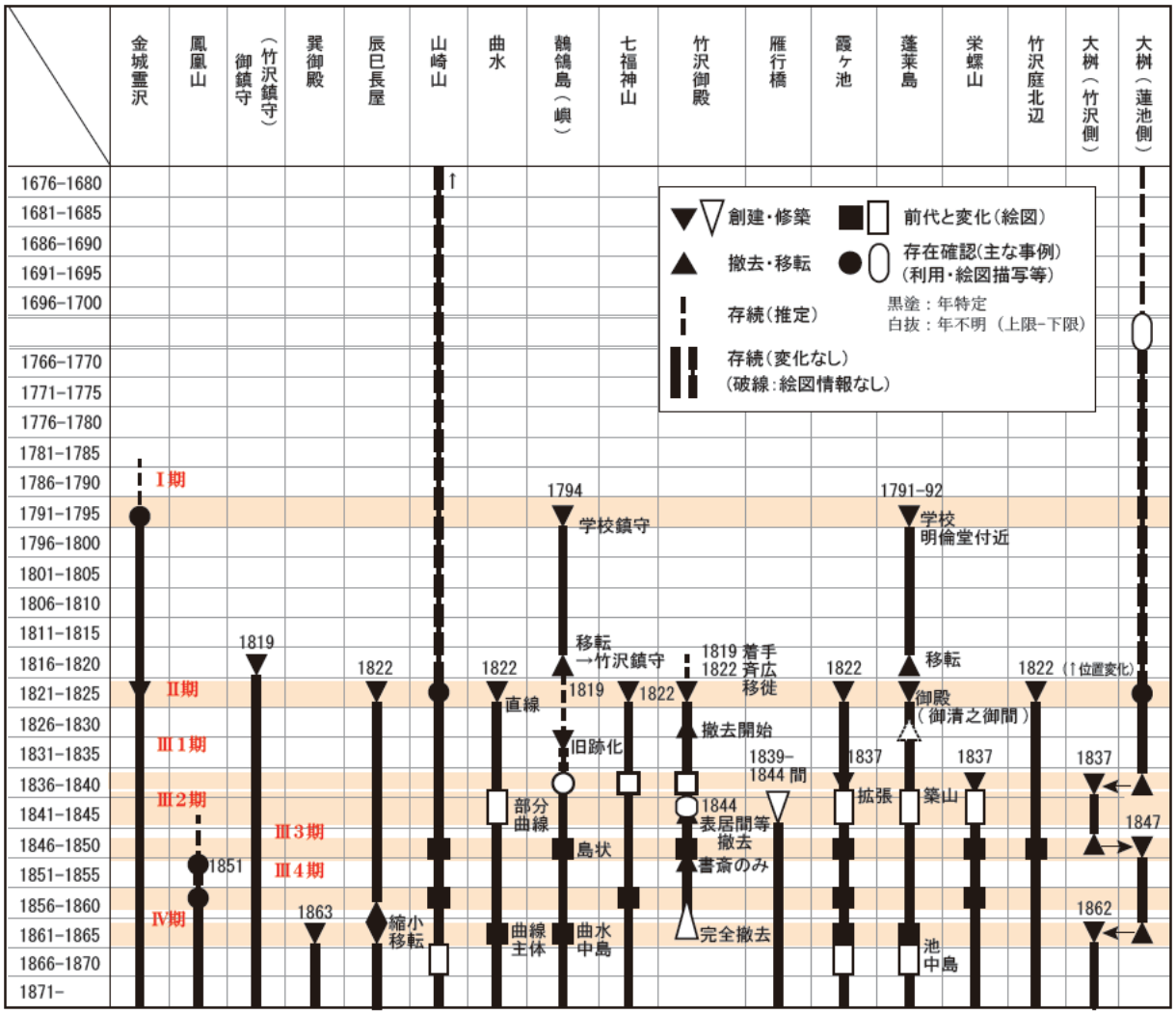
鶺鴒島（第 227 図）

前項でも記述した通り、竹沢御殿以前、Ⅰ期の学校段階の鎮守敷地が起源であり、Ⅱ期に御殿建物に覆われたが、Ⅲ期以降は 12 代藩主正室真龍院の要望もあり、旧地として保たれることとなった。Ⅲ３期までには周囲に溝が巡るようになり、Ⅲ４期の段階でなお鎮守敷地以来の軸を保持していたが、Ⅳ期に至り曲水に取り込まれ、平面形状も変化した。各期の絵図及び文献史料の照合により、上記の来歴が明らかになったが、形状のみならず鎮守敷地としての性質までも変容し、石碑に記されるように文久２年（1862）の段階で鶺鴒嶼と呼ばれることとなった経緯は判然とせず、課題として残っている。

霞ヶ池

曲水と同じく霞ヶ池もⅡ期の竹沢御殿段階からの変化が大きく、Ⅲ１～３期には南側、Ⅲ３～Ⅳ期には東側へ水面を拡張し、現況に至っている。

霞ヶ池に浮かぶ中島（蓬莱島）は、Ⅱ期の竹沢御殿段階では、御殿書斎側から渡廊下で結ばれた独立棟である「御清之御間」辺りに相当する。Ⅲ１期の取り壊し以降は築山状を呈し、Ⅲ４期には半ば池に囲まれた岬となり、Ⅳ期に至り池中の中島に変容している。



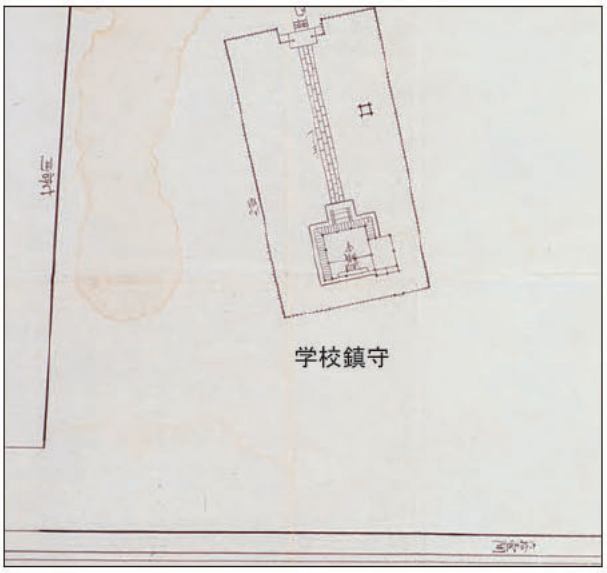
第 226 図　主な構成要素の来歴（竹沢庭）

山崎山・七福神山・栄螺山

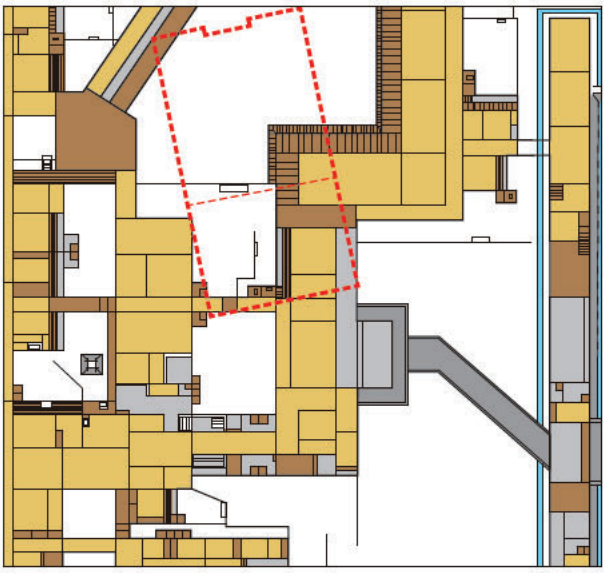
敷地東端の山崎山は、前述の通りその形成は極めて古く、慶長期の総構土塁の残欠と考えられている。Ⅱ期の竹沢御殿段階で敷地内に取り込まれているが、庭園の構成要素としてどのように扱われていたかはっきりしない。Ⅲ３期・Ⅲ４期において、山頂や周囲を巡る園路が形成されているが、Ⅳ期では異なった経路となり、これが現況へと継承されている。

七福神山は、築山としてはⅡ期の竹沢御殿段階に既に成立しているとみられるが、石組の存在が明らかになるのはⅢ１期で、この段階では石組の平面形状が現況と異なっている。Ⅲ４期には現況に近い配石に変容している。

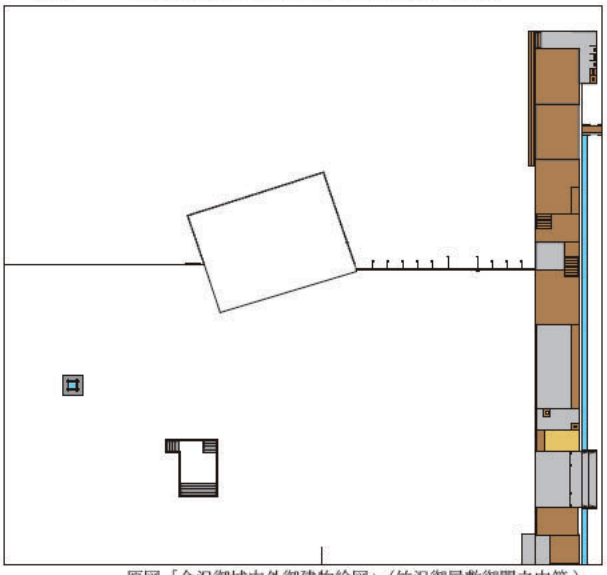
栄螺山は、Ⅲ１期、天保８年（1837）の泉水（霞ヶ池）拡張の際、その掘り上げ土を用いて築造されたと考えられている。この段階では比較的正円に近い平面を呈する。Ⅲ２期には南東側へに拡張され、石塔が設置されている。Ⅲ３期の絵図によると正円に近くなっているが、変化の傾向としては齟齬があり、あるいは描写上に問題があるのかも知れない。Ⅲ４期には石垣や石組の位置も含め、ほぼ現況通りとなっている。



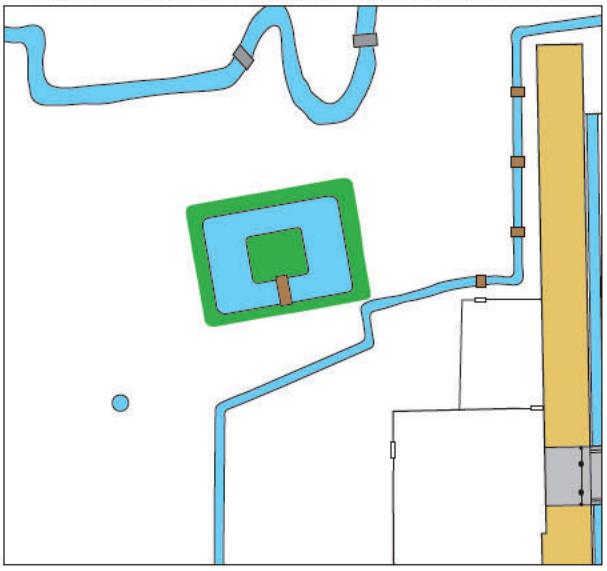
Ⅰ期　「学校御絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］ 62-10



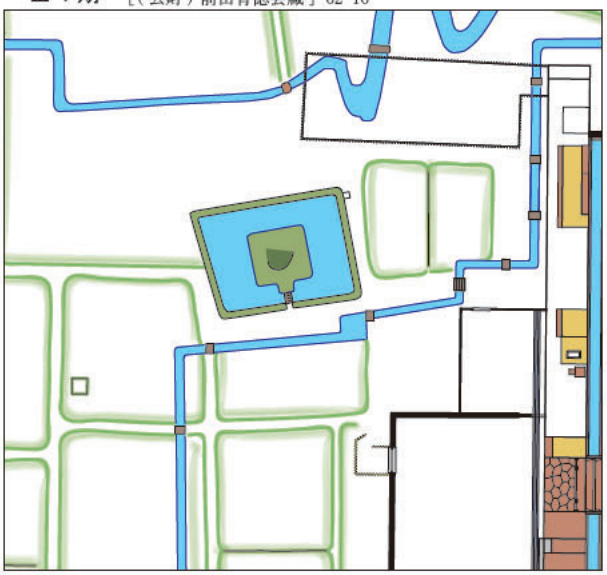
Ⅱ期　原図「竹沢御殿御引移前総囲絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-12



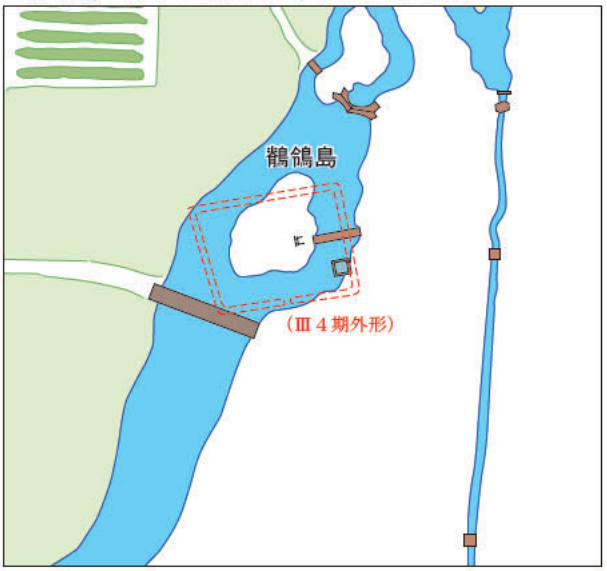
Ⅲ１期　原図「金沢御城内外御建物絵図」（竹沢御屋敷御間之内等）［（公財）前田育徳会蔵］62-16



Ⅲ３期　原図「御城分間御絵図」［（公財）前田育徳会］62-20



Ⅲ４期　原図「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-21



Ⅳ期　原図「兼六園図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-24

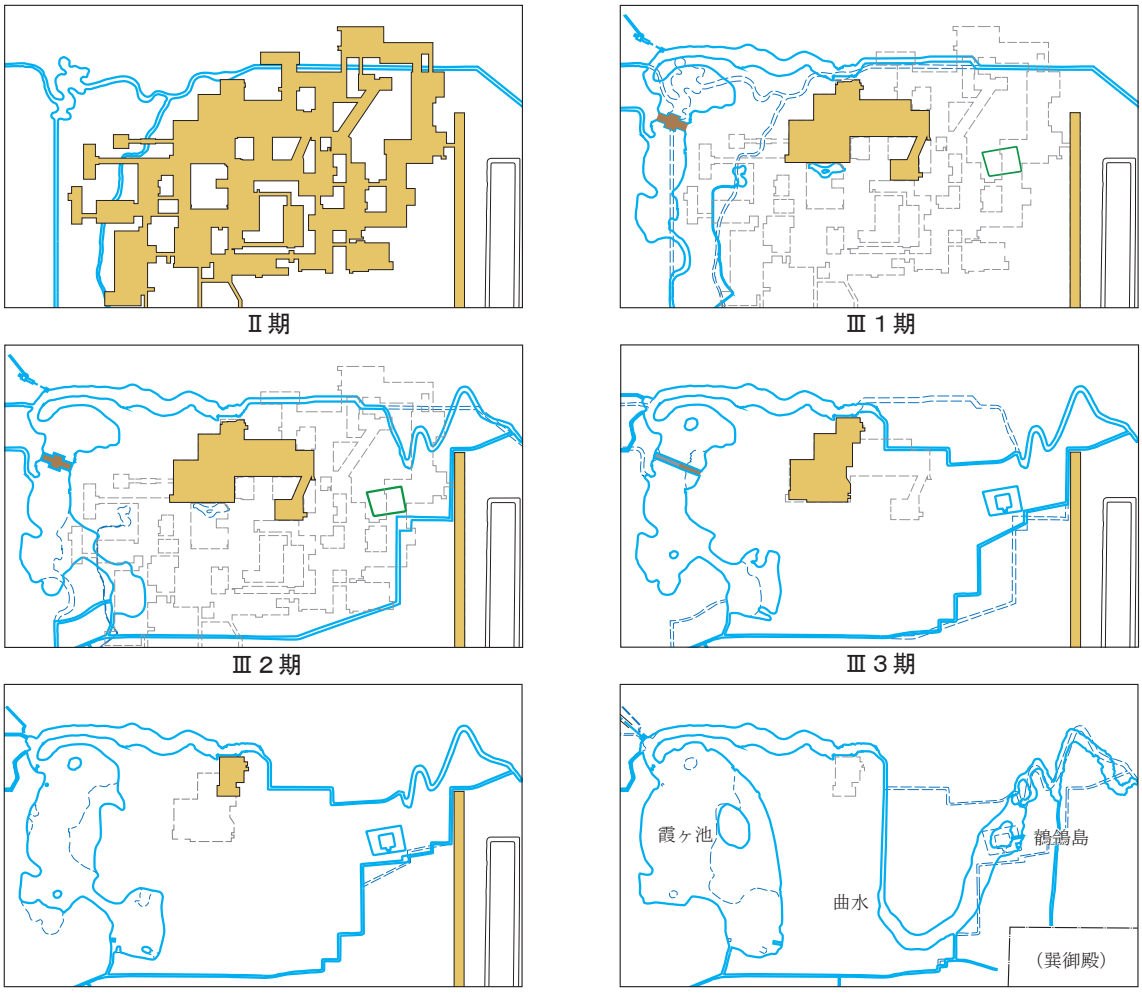
第 227 図　学校鎮守から鵜鴻島への変遷過程（縮尺約 1/1,000）

（2）変遷過程（第 228 図）

隣接し先行する蓮池庭に比較して、竹沢庭は短い存続時期に関わらず著しい変容を遂げた。**第１段階**（Ⅱ期）は竹沢御殿に名実ともに付属する段階で、具体的な内容は判然としないが、七福神山付近の原形が形成されたとみられる。**第２段階**（Ⅲ期）においては、なお竹沢御殿期の建物が残り、御殿の格式を保ちつつも、実態は泉水・築山等の構成要素は大規模化し、庭園の広大化が進行する。ただし霞ヶ池を例にとると、Ⅳ期にかけて拡張の一途を辿ったが、それぞれの段階で橋等の施設が設けられては撤去されている通り、Ⅳ期の形状を目指して一貫して進められたわけではない。兼六園の成り立ちを論じた［龍居 1997］では、13 代藩主前田斉泰による、蓮池庭と竹沢庭の一体化の意志を想定しつつも、御殿縮小化にともなう修景整備が、兼六園成立過程の実態とする。ただし金谷出丸等の状況等と比較しても、比較的短い単位での意匠替えは、それなりの意義を見出せるように思われる。

蓮池庭との間の門・塀が撤去され、両庭園が一体化した**第３段階**（Ⅳ期）では、曲水・霞ヶ池が更に伸長・拡大し、庭園の広大化が極まった感がある。なお敷地南東部には、竹沢庭の整備ととりわけ縁の深い真龍院の御座所として巽御殿が造営され、御殿との関係が再び生じることとなったが、広大な庭園の一角に御殿が設けられた形であり、従前のような御殿に付属する庭園に戻ったわけではない。

ただ池・泉水の拡張は、当初はⅡ期の竹沢御殿段階の地割に強く影響を受けていたと思われる。Ⅲ４期絵図に明瞭に示される、整然とした矩形の地割も、元の御殿建物の軸を踏襲していると推定され



縮尺約 1/4, 000

Ⅱ　期「竹沢御殿御引移前総囲絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-12
Ⅲ１期「金沢御城内外御建物絵図」［（公財）前田育徳会蔵］62-16
Ⅲ２期「竹沢御殿・兼六園並御鎮守古絵図」（竹沢御殿・兼六園）［金沢市立玉川図書館蔵］62-19
Ⅲ３期「御城分間御絵図」［（公財）前田育徳会蔵］62-20
Ⅲ４期「竹沢御屋敷総絵図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-21
Ⅳ　期「兼六園図」［金沢市立玉川図書館蔵］62-24　　等を参照して作成

第 228 図　竹沢庭の変遷（御殿建物・泉水）

る。概して竹沢庭においては、竹沢御殿、あるいはさらに先行する学校段階以来の地割や旧跡をある程度伝承することと、著しい変容が併存している印象を受ける。

（3）その他の特色

竹沢庭には、桑・枇杷・西瓜・瓜・枝大豆・栗・柿・菊花等、さまざまな作物・果樹・花卉が育てられていた［長山 2006b］［池田 2016］。Ⅲ 4 期の「竹沢御屋敷総絵図」（第 151・222 図）には、書斎の東側を中心に畑の畝もしくは花壇と思われる表現がある。庭園南側の広大な矩形区画も、果樹等の畑の可能性も考えられる。また霞ヶ池には辰巳用水を通じて鮎が入り込んでいたらしく、鮎簗まで設けられている。

一方、蓮池庭にも絵図に田が描かれていることが知られているが、文献史料には見られない。こと畑や作物については、竹沢庭に関連して言及されており、収穫物は物故した 12 代藩主等の牌前やその正室真龍院に奉じられている。

この他「金谷御殿御普請諸事留」（第 41 表 61-38）には、木材・石材等が保管されていたことが記されている。このように竹沢庭では、直接鑑賞にかかるもの以外の構成要素もよく認められ、著しい変容と相俟って、様々な目的や利用に対応し得る空間だったと考えられる。

（4）兼六園門について

文政５年（1822）、前田斉広の依頼により松平定信が揮毫した兼六園の扁額（石川県立伝統産業工芸館に展示）については、［長山 2006a］・［長山 2006b］等において、蓮池庭と竹沢庭との境にあった水道（樋）上門に掲げられていたことが指摘されている。また万延元年（1860）以降は、建物ごと蓮池門の位置に移され、明治６年（1873）頃までその地にあったとされる。

長山氏は、「成瀬正敦日記」等の史料により、蓮池門→兼六園門→竹沢内庭という導線を読み取り、竹沢庭の入口に兼六園門があったことから、竹沢庭が当初兼六園と呼ばれていたと結論付けている。ただし前述してきた通り、兼六園の扁額が、門の内側（竹沢御殿側）に掲げられていたこと（第 216・224 図）については、検討が必要と思われる。

扁額は、門の正面・入口側に掲げられるのが一般的とみられる。門と庭のみの関係であれば、水道（樋）上門の正面、蓮池庭側に扁額が掲げられるのが通常の在り方と思われるが、水道（樋）上門は、竹沢御殿全体からすれば裏口に相当し、反対側の辰巳門から御殿中枢に至る経路の延長が、竹沢庭への正式な導線であったと判断される。これを踏まえると、内向きの空間を対象に、門の内側に扁額を掲げることとしたものと推定される。

一方で、例えば江戸・水戸徳川家の庭園として著名な小石川後楽園では、御殿付属の内庭との間に唐門が設けられていたが、御殿・内庭側が正面であり、ここに扁額が掲げられていた。門の向きが逆になる点が極めて異例となるのであるが、これを除くと、竹沢御殿・御殿付属の庭（当初の竹沢庭）・蓮池庭の位置関係に類似していると言え、課題が残る。

これらの問題については、御殿・庭園・出入口・扁額の位置関係に関する類例を踏まえた上、機会を改めて再考を期したい。

第８節　その他

１．丹後屋敷（第 229 図）

丹後屋敷は、城域の西端、金谷出丸の北に位置する。現在は埋没しているが、金谷出丸とは東西方向の空堀で仕切られていて、地形は緩やかに北に下降しているものの概ね平坦である。現況は住宅や大型の施設等の敷地となっていて、地表上に近世遺構は確認できない。

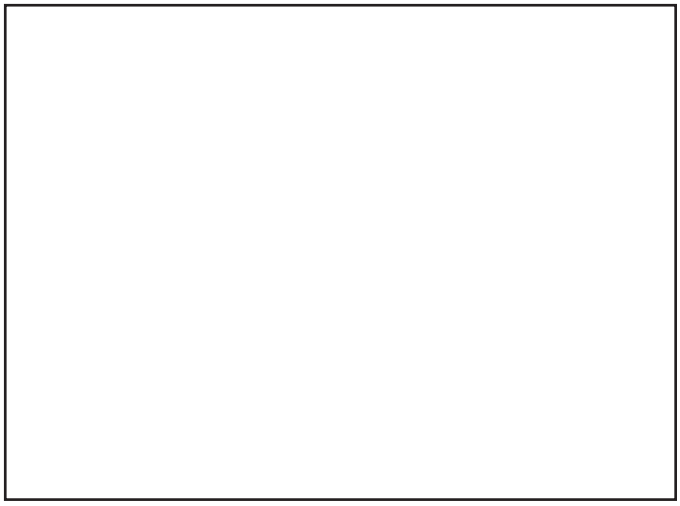
名称は、前田対馬守家の祖長種の次男、前田長時（通称丹後）の屋敷であったことに由来する。前田長時は延宝４年（1676）に没するが、以後の絵図の多くに丹後屋敷の名が記載されている。

長時没後間もない時期の景観年代を示す「金沢古城図」（石川県立図書館蔵）には「用地」とあって、早い段階に藩有地化されたと考えられる。19 世紀初めには花畑等になっていたようであるが、天保 11 年（1840）・同 13 年（1842）には「御鎮守稲荷」（「村井長貞日記」、［石川県金沢城調査研究所 2016b P152］）・「御鎮守稲荷堂」（「官私随筆」、第 27 表 51-18）等とあり、社の存在が知られる。この「御鎮守」については、明治以後、現野々市市の徳用村に譲与されたとする史料があり、そこでは丹後屋敷の庭から移したとある。もっとも金谷御殿で祀られていた社殿を譲り受けたとする所伝もあり、判然としないところもあるが［小倉 1988］、丹後屋敷に庭があった可能性を示唆するものである。

嘉永３年（1850）の「御城分間御絵図」によると（第 229 図）、上記の「御鎮守」は敷地北東を占め、鳥居・手水・社殿とこれらを結ぶ参道が見られる。

一方、北西中央寄りの一角には、金谷出丸の池・流れ（泉水）からの余水が引き込まれており、これと重複して縦横に通路数条が設けられ、水路との交点は主に木橋が架かっている。水路は竹沢庭Ⅲ２～４期の絵図にみられた状況に類似しており、歪んではいるが区画的な通路の形状と併せ、一体は畑の機能があったと推定される。通路の配置状況や出入口の位置から、金谷出丸（金谷御殿）との関係が深いように見え、鎮守についても金谷出丸の鬼門を意識している可能性がある。

以上のように嘉永頃の丹後屋敷は、鑑賞にかかる庭園構成要素の存在は不明であるが、鎮守や畑地と考えられる区域を抱え、広い意味で庭園としての要素を有していたと考えられる。



「御城分間御絵図」［（公財）前田育徳会蔵］
第 229 図　丹後屋敷

２．堂形（第 230 図）

堂形は城域の南側、本丸南西辺に沿ったいもり堀の外側に位置する。17 世紀初頭以前は武家地だったが、寛永８年（1631）までには藩用地となり、米蔵が置かれた。万治３年（1660）には馬場が設けられ、近世後期になると城内にあった細工所がこの一角に移転し、また隣接して学校が造営される等、藩関係の施設が多く見られた。明治６年（1873）以降、南東部一帯が石川県庁となり、周囲を含め公共施設用地と推移した。県庁は平成 15 年に移転し、現況は旧県庁本館の一部を利用したしいのき迎賓館がある他、公園として整備されている。

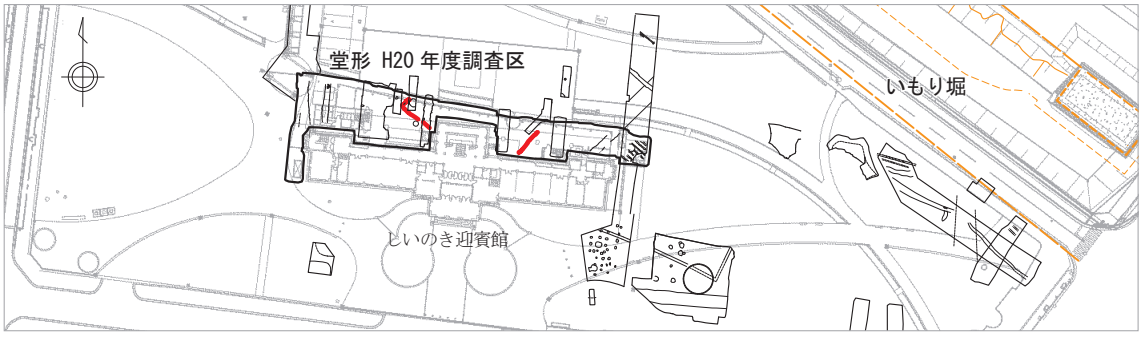
県庁移転やいもり堀の公園整備等に伴い、（財）石川県埋蔵文化財センターや石川県金沢城調査研

究所により発掘調査が実施されている（第２章第３節参照）。

ここで取り上げるのは、平成 20 年度に検出された近世初期段階の堀跡とされる遺構［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2012］で、全容は不明であるが、北東方向に開いたコの字状の平面形が想定され（第 230 図①）、幅は約 30 m、深さは最大 2.3 mを測る。西側の調査区では掘り込み下端に胴木が検出され、掘り込み法面に残る栗石の存在とも併せ、石垣による護岸があったと判断される。また想定される石垣の控えは 50～60cm 程度で、胴木の前面から細かな戸室石砕片が見られることからも、石垣は切石積だったと考えられる（第 230 図②）。

一方堂形に係る古伝として、越中組大工肝煎与三右衛門の父で、過去に城中普請に携わった浄雲なる人物の口上覚書と、「金沢堂形地古覧図説」（京都大学附属図書館谷村文庫）が伝わる（第 230 図③）。史料には浄雲の 60 年程前の記憶として、米蔵以前に所在した武家屋敷の跡地に書院・泉水が造営され、書院は５間× 14～５間、泉水は幅６～７間、長さ 20 間程であったこと、他に牡丹畠があったこと等が記されている。史料を検討した森田平次（柿園）は、この頃の書院・泉水造営の記録は他には見えないものの、図には他の史料との比較から符号するところもあり、考証に有益な図と評価する（「温故集録」金沢市立玉川図書館蔵、［金沢市立玉川図書館 2003 P209～211］）。

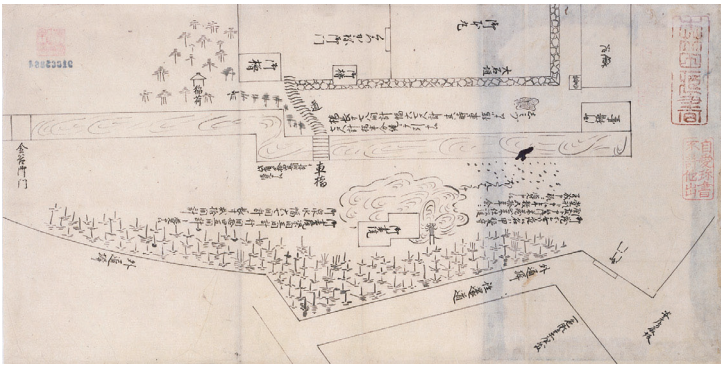
上記報告書ではこの史料にも着目し、発掘遺構が泉水である可能性も検討すべき課題に挙げている。付近の玉泉院丸の池（泉水）の西岸も一部直線的な石垣護岸であり、同様の施設であったとしてもおかしくないが、史料は年紀を欠き、曖昧なところもあって、文献史料・発掘遺構ともに、傍証・類例等を探求する必要がある。



①堂形　調査区・遺構の位置　　堀跡検出範囲　　堂形（県庁跡地）・いもり堀南岸発掘調査地点　　いもり堀推定復元ライン

石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2012『金沢市 金沢城跡２－堂形（第３・４次調査）－』第１図・第 144 図等をもとに作成

②平成 20 年度第４面６区　堀跡胴木検出状況



③金沢堂形地古覧図説［京都大学附属図書館蔵］

石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2012
『金沢市 金沢城跡２－堂形（第３・４次調査）－』巻頭図版８より転載

第 230 図　堂形の遺構・絵図

第５章　東ノ丸庭園遺構埋蔵文化財確認調査

第１節　調査の概要

１．調査の経緯

東ノ丸は、第４章第２節で記述した通り、初期の段階では、西側に隣接する本丸と並んで中枢域を形成していたと考えられる郭である。そのため、初期金沢城の構造解明を目的とする確認調査（平成14～24年度）に係り、その対象範囲として、トレンチ調査（平成17年度）やボーリング調査（平成22～24年度）を実施した。

なかでも平成17年度の調査では、東ノ丸南東部に焦点を当てた。この箇所は、近世の絵図（「金沢城本丸･東丸之図」［金沢市立玉川図書館蔵］）では､斜面状ないし馬蹄形を呈する地形が描かれていて、調査着手以前においては、池の跡と見る他、土壇状の地形である可能性も考慮して、天守跡地の候補とする見方もあった。このことから地形の実態を確認する目的で、トレンチ調査を実施することとした（2005-7地点)。

調査の結果、絵図に描写された地形は落ち込み状を呈しており、あわせて戸室石の景石や板状石材等が検出されたことから、一帯は庭園で、池もしくは築山の斜面に相当すると考えられた。ただし、落ち込み状地形の範囲や、景石の広がり等は、調査地点が１箇所だけにとどまったこともあり、十分な情報を得られなかった［石川県金沢城調査研究所2014d］。

平成24年度以後は、初期金沢城の構造に係る調査成果を取りまとめつつ、改めて庭園遺構を主な調査対象とした。ボーリング調査の結果からは、東ノ丸南部に南へ開口する谷状の地形が存在することが推定され［石川県金沢城調査研究所2014d］、翌25年度にはこの地形の延長を追及するとともに、その上部に重複するとみられる落ち込み状地形の範囲を絞り込むべく、ボーリング調査地点を追加した。この結果、東ノ丸南部の自然地形の状況についてはかなり明確になったが、庭園遺構とみられる落ち込み状地形については、近代以後も含めた造成土の細分・意義付け等に困難さが伴い、なお検討の余地が残ることとなった。

これらの経緯を踏まえ、平成26年度は、落ち込み状地形の範囲・形状の確認や、2005-7地点で一部確認した景石や地形の広がりを追及するため、改めてトレンチを２箇所設け、発掘調査を実施することとした。この調査において、庭園遺構の基盤となる初期の造成土等を確認したが、後述するように初期造成土の傾斜・深まりを明らかにするには、幅２ｍ未満のトレンチでは十分でなかった。このため平成28年度に改めてボーリング調査を追加し、発掘調査結果を補足することとした。

本報告では、以上の経緯のうち、平成26年度の発掘調査および平成25・28年度のボーリング調査について主に詳述し、必要に応じ過年度の調査結果について言及する。

なお、第１章第１節に記述したとおり、調査は金沢城調査研究事業の一環であり、国庫補助事業として石川県が実施する「県内遺跡発掘調査等事業」の一部を構成する。また史跡金沢城跡を対象とした保存目的調査（発掘･ボーリング調査）であり、調査年次ごとに文化庁に現状変更申請を提出し、その許可を受けて実施するものである。

２．調査地点の設置（第231・232図）

平成26年度の**発掘調査**ではトレンチを２箇所設定した（第231図)。設定の手順は次の通りである。まず近世後期の絵図（「金沢城本丸・東丸之図」［金沢市立玉川図書館蔵］）にある落ち込み状の描写を池跡の名残と見て、現況地形と照合した（第232図)。他方、従前より本丸･東ノ丸主要部では、

動植物保全の観点から発掘調査は園路部分に設けることとしており、今回もこの方針に基づいた。

2014-1 地点は、以上の条件の元、落ち込み状地形の西側に相当し、北側及び東側に下降する地盤の検出を想定して設定した。現地表の標高は58～58.3ｍで、トレンチは幅1.6ｍ、園路の分岐点に沿ったＬ字形の平面形を呈し、南北方向の北部は延長16ｍ、東西方向の南部は延長10ｍ、面積約42㎡を測る。

2014-2 地点は、平成17 年度に景石や板状石材を確認した2005-7 地点の南東側延長部分であり、庭園遺構の連続性を追求するため設定した。「金沢城本丸・東丸之図」の落ち込み状の描写本体からはやや南へ外れるが、近世前期の「金沢城東之御丸・御本丸絵図」（金沢市立玉川図書館蔵、第20図22-03）等では、2005-7 地点とともに方形の斜面状部分の範囲に包括されている。現地表の標高は南東側が最高所で59.1ｍを測り、築山状の高まりを除く東ノ丸郭面の最高地点（辰巳櫓周辺）に連なる。北西側は緩やかに下降し、58.7ｍ前後となるが、2005-7 地点側は更に低くなっている。トレンチの幅は1.6～1.9ｍ、長さは4.5ｍ、面積約８㎡を測る。なお調査地点北西部では、隣接する2005-7 地点南東部の一部を再堀し発掘区を繋げた。

ボーリング調査においては、「金沢城本丸・東丸之図」に見える落ち込み状描写の範囲・形状確認に係り、その周辺・内部に該当すると考えられる部分にH25-2～8 地点、H28-1～3 地点を設定した。この他、本丸東堀の範囲・形状確認に係るH25-1 地点、東ノ丸東面石垣の基盤確認に係るH25-9～11 地点を設けており、併せて報告する。

３．調査の方法

（1）発掘調査

発掘調査においては、近代以後の土層上部を重機により掘削し、近代土層下部より以下を人力で掘削した。近世に属するピット等の遺構については、調査区内で部分的に検出されたものであり、埋土の掘り下げを行った。近世の造成土のうち、2014-2 地点の庭園遺構埋立土（Ⅱ層）は下位遺構面の検出のため掘削した。近世初期の土層（Ⅲ層、両地点とも）については部分的に断割を行った。

調査記録については、実測図作成・写真撮影等を行った。主として土層断面図・個別詳細図は直営、調査区一帯の測量図・調査地点全体の平面図は業者委託により作成した。写真はフィルムカメラによりリバーサルの35mm・120mm フィルムを用いた他、デジタルカメラを多用して撮影している。

調査地点の埋戻しに際しては、発掘停止面上を土嚢等で保護し、表示措置を行った。埋戻し土は発生土を用い着手前の状況に復した。

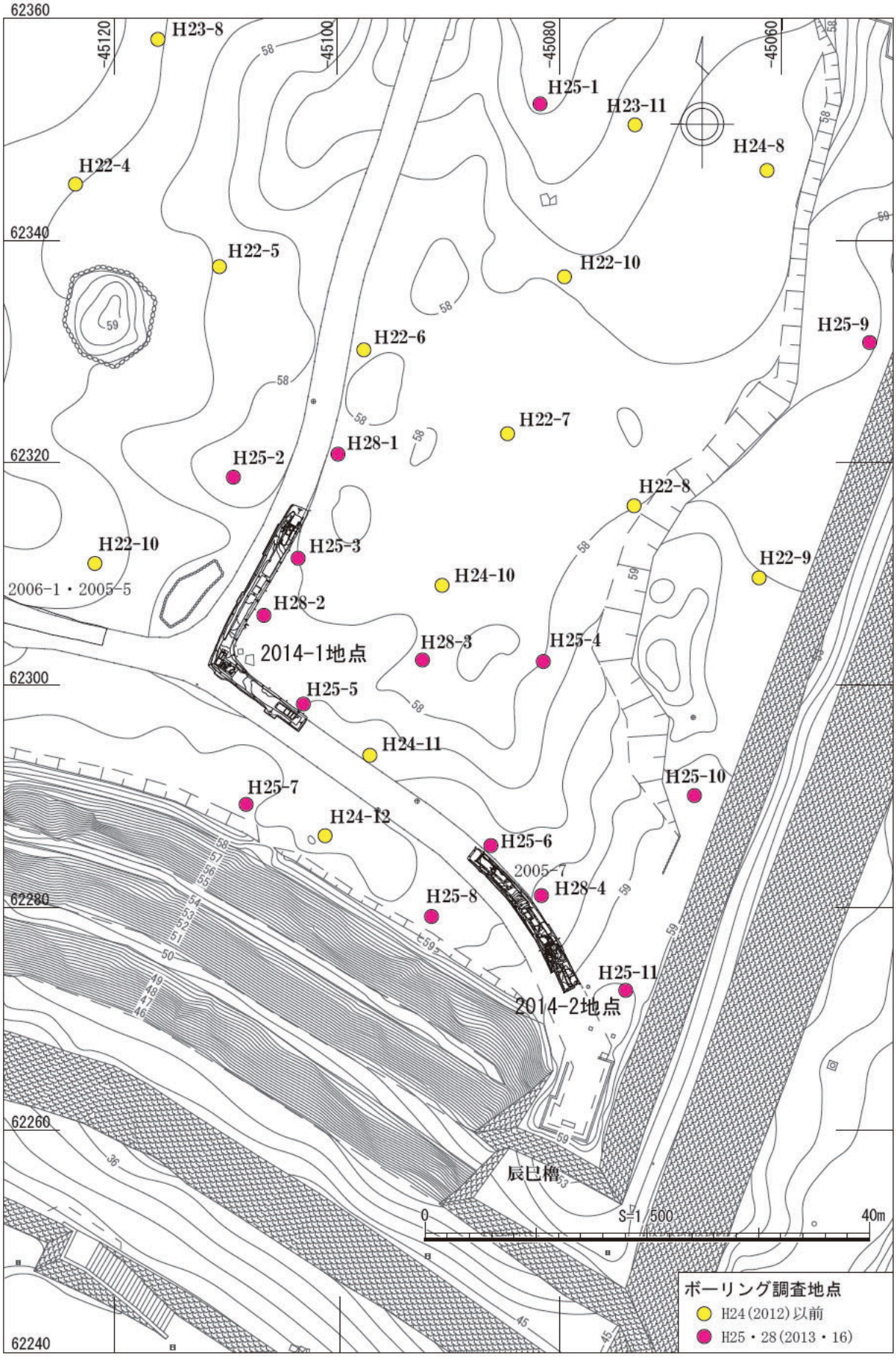
（2）ボーリング調査

ボーリング調査は委託業務として実施した。発掘では到達できない深度における土層の採取が可能であり、大型遺構や大規模造成土の規模・構造、造成以前の旧地形等の探求に関して有効である。本書では平成25 年度・28 年度の成果を中心に報告する。

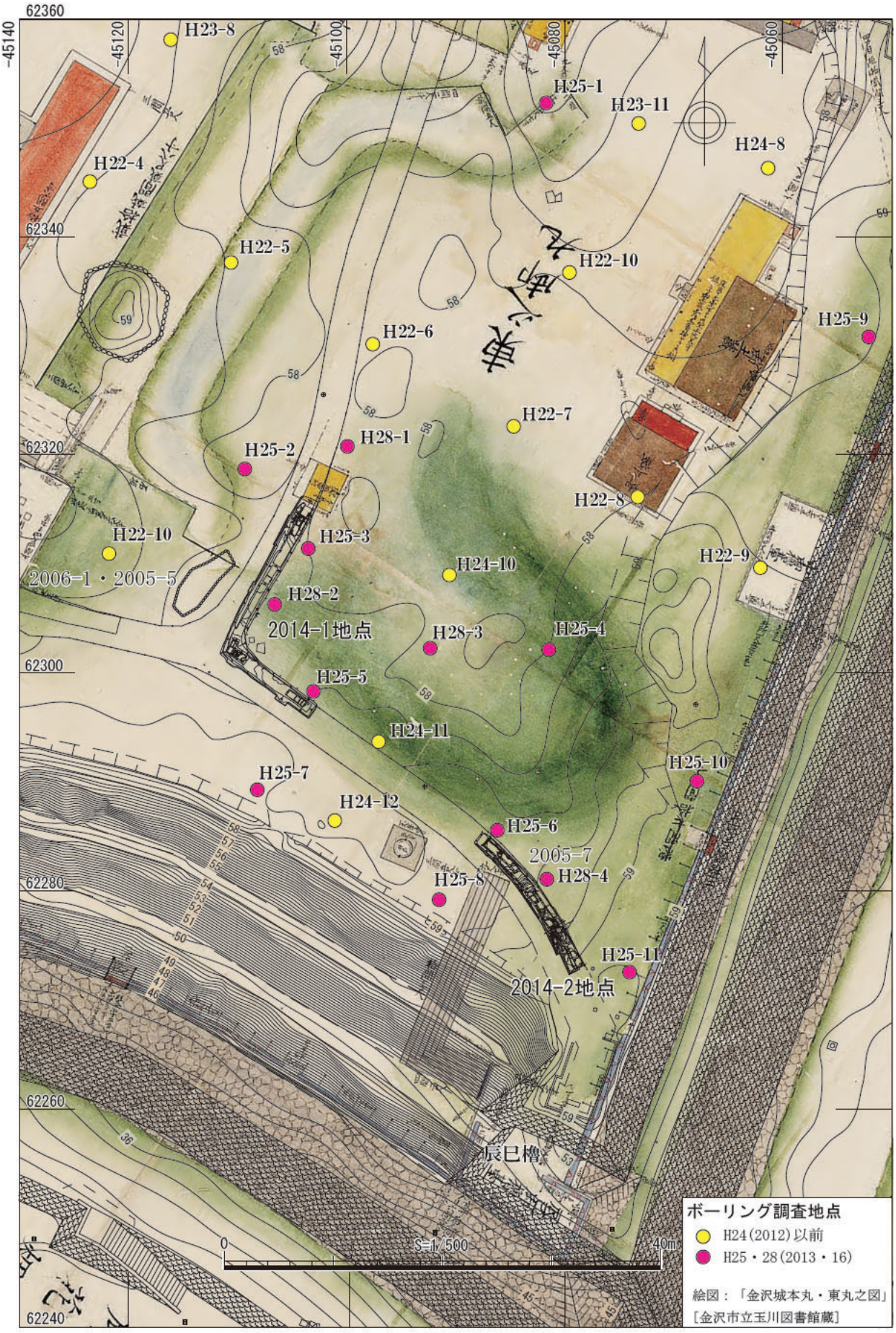
（3）出土品整理

経過・内容については第１章第２節で言及した。取り上げた出土遺物については洗浄・選別は直営で行い、記名・分類・接合・実測・トレースの大部分は（公財）石川県埋蔵文化財センターに委託した。また鍵となる造成土出土遺物については、実測しなかったものも含め、計測や詳細分類集計等の作業を行った。

この他、出土資料の自然科学的調査として、2014-2 地点の景石について岩石鑑定を依頼するとともに（金沢大学酒寄淳史氏）、珪藻・花粉分析を委託して実施した（第４・５節）。



第 231 図　東ノ丸調査区　発掘調査地点・ボーリング地点位置図



第 232 図　東ノ丸調査区・絵図照合図

第２節　発掘調査

１．2014-1 地点（第 233 ～ 247 図、第 47 ～ 50 表）

（1）調査過程（第 233・234 図等）

2014-1 地点では、近代の土層（造成土・Ⅰ層）が厚く堆積していることから、標高約 56.5 ～ 56.8 m（現地表から約 1.4 ～ 1.5 m前後）の深さで検出された砂利層まで重機により掘削した。調査区の形状等から、全体にわたって掘り下げることは困難と判断し、北部北端・北部中央・北部南端（南部西端）・南部東端の４箇所で、幅 0.6 ～ 1.0 m、長さ 1.0 ～ 1.5 m程度のサブトレンチ（ST1 ～ ST4）を設け、砂利層以下の土層堆積状況を探ることとした。

北部北端の ST1 では標高 55.5 mに至っても近代の土層が続いたが、北部中央の ST2 では 55.8 m付近で硬化面を確認し、近世土層（Ⅱ層）の上面と判断した。北部南端の ST3 では南端コーナー部において標高 56.45 mの高さで近世初期の土層を検出したが、北側・東側では急激に下降していた。Ⅱ層が確認できないこととともあわせ、近代に盛土を行う前に、近世の土層を削平していることが窺われた。南部東端の ST4 では、標高 56.33 ～ 56.14 m、55.78 mの２面の硬化面を検出した。上部硬化面を近世土層上面と推測したが、検討の余地を残すこととなった。

確認された範囲は限定的であるが、近世初期の土層が南西側で高く、北・東側に低くなる状況を確認することができた。

（2）基本土層（第 237 ～ 239 図）

Ⅰ層　近代以後の土層である。Ⅰａ層は、表層に近い整地土・表土・掘り込み埋土等を一括した。おおよそ金沢大学期～金沢城公園期に形成されたと考えられるが、掘り込みの一部は旧陸軍期に遡る可能性もある。Ⅰｂ層は 1.1 ～ 1.5 m程度の厚さを保つ造成土で、南側から北側へ押し出されるように斜めに堆積している。調査地点北端付近ではこの傾向がとくに顕著で、黄褐色・褐色系と黒褐色・暗褐色系の土層が互層をなしている。Ⅰｃ層は最上面が砂利層（Ⅰｃ1 層）となるが、以下は灰褐～褐色を呈する砂質土が主体となる造成土で、厚さは最大で約１mに及ぶ。砂利層からはガラス瓶の破片が出土した。砂利層以下では、近代以後に生産されたと確定できる遺物は出土していないが、近世後期以後の釉薬瓦を全体的に含む。とくに北端のサブトレンチ ST1 では、釉薬瓦の他近世末期に属する陶磁器がまとまって出土した。付近には足軽番所があり、元はこの番所に備えられていたものとみられる。厳密な時期は不詳だが、明治のごく初期、番所が撤去されるとともに造成（Ⅰｃ層）が行われ、廃棄された陶磁器や瓦が混入したと推定される。

Ⅱ層　サブトレンチ ST2・ST4 で検出した、Ⅰｃ層の下位層である。Ⅰｃ層との境では硬化面が形成され、Ⅱ３層では焼けた瓦小片等も観察される。Ⅰｃ層が造成される直前の状況を示しており、基本的に近世に形成された土層とみられる。掘り下げた部分は少なく（Ⅱ２・Ⅱ３層は上面検出のみ）、出土遺物もごく少量であるが、瓦は燻瓦のみで釉薬瓦は認められない。

Ⅲ層　サブトレンチ ST3 においてⅠｃ層の下位で検出された土層である（第 239 図）。Ⅲ層には後述するとおり近世初期の遺物が含まれる。また褐色・黄褐色・明黄褐色・黒褐色粘質土層等が整然と堆積しており、本丸周辺の既往の調査例に照らし、寛永８年（1631）以前の近世初期の土層と判断した。これらのことからⅡ層との上下関係は確認されないものの、より下位にあるものとみなした。また調査過程の項でも触れたが、Ⅲ層は、南から北・東にかけて急激に落ち込んでおり、上面にはⅡ層のように硬化面が介在せず、微細な凹凸にⅠｃ層下部が入り込んでいる状態であった。これらのことから、ST3 付近ではⅠｃ層が造成される前に当時の地盤が削平され、この時Ⅱ層やⅢ層の上部が失われたと推定される。

なおボーリング調査によれば、地山レベルはST1・ST2間に位置するH25-3地点で標高54.66 mと深く、更に南側へ下がる傾向にあり、一帯は谷状地形の上位に相当すると考えられる。

（3）遺構等（第233～236図：平面図、第237～238図：断面図、第239図：ST3、第242～245図：写真）

Ⅱ層（近世後期地面）

Ⅱ1層（ST4、第238図）・Ⅱ3層（ST2、第237図）の上部は硬化面を形成しており、上記のとおり近代初期の造成以前の本丸・東ノ丸の地面を反映しているとみられる。これらの検出範囲はごく狭く、Ⅱ1層が180cm × 54cm（第236図）、Ⅱ3層が64cm × 56cm（第235図）のみであるが、サブトレンチ内ではおおよそ平坦である。ただし、ST3内のⅢ1層は標高56.5 mで確認されており（第237・239⑧図）、Ⅱ1層は標高56.33～56.14 m、Ⅱ3層は標高55.8 mと低くなっている。ST3付近ではⅡ層が失われているとみられるので、ST間での高低差はより大きくなる。また、調査地点北部のST1では標高55.5 mでもⅠc層が続いており（第237図）、Ⅱ層は更に下位に位置づけられる。

これらのことから、近世後期において、ST3付近が高く、北側・東側に地面が下降していることが明らかとなった。

Ⅲ層（近世初期造成土・遺構埋土）

Ⅲ層面の状態

ST3では黄褐色・黒褐色粘質土を主体的な構成層とする土層を確認した（第239図）。検出面には顕著な起伏があり、サブトレンチ南西隅が高く（Ⅲ1層）、北側･東側に向かい下降している状況であったが、検出面自体の形状は、上記のとおり近代に一部削平を受けたためとみられる。ただし、北側のST1・ST2（第237図）、東側のST4（第238図）ともに、Ⅲ層該当レベルにおいて同層が見られないので、近代の改変にかかわらず、その上面についてはもとから北側・東側に向かって下降していたと判断される。したがって上記のⅡ層上面の下降は、Ⅲ層上面の傾斜に影響を受けていると考えられる。

土層構成

Ⅲ層の主体となる土層構成は次のとおりである。Ⅲ1層（標高56.5 m）は北側・東側に加え西側も急角度となって尖峰状を呈し、削平が著しい。Ⅲ5層は戸室石破片や10cm大の川原石が多く混じる土層で、やはり北・東・西側を削られている。この下位に相当する黄褐色粘質土のⅢ8層まで近代の削平を受けており、東側はなお傾斜面をなすが、北側はやや平坦（標高55.9 m台）となっている。

Ⅲ9・Ⅲ10～12層はST3南西隅深掘り部のみで確認した土層で、前者は暗褐色、後者は明黄褐色を呈する。Ⅲ9・11層からはコビキAによる粘土切り離し痕を残す丸瓦等、おおよそ元和期以前に主体的な瓦が数点出土した。これらの層は、北側に向かって下降する状況が窺えるので、Ⅲ層自体が傾斜している可能性もあるが、その上位のⅢ8層は北側の遺存レベルを見る限り、むしろ北側に向かってやや上がっていたように推定され一様ではない。なお後述するとおり、Ⅲ4・5・8層面ではピット状の遺構を検出した。Ⅲ3・6・7層は、これらの遺構埋土である。

調査地点北部に落ち込み（窪地）が存在することは明らかであるが、Ⅲ層自体が傾斜しているのか、それともⅢ層を掘り込んで形成されているのかは、本調査地点のみの情報では判断できなかった。

形成時期

層中や後述する遺構出土遺物の年代観等から、Ⅲ8層以下は元和期頃までに形成された可能性があるが、検討の余地がある。

2014-1P01・2014-1P02（第239図）

ピットないし土坑状の遺構である。P01はⅢ8層上面、P02はⅢ4・5・8層で検出されたが、本来の掘り込み面は程度の差こそあれ攪乱を受けており、より上位の層が基盤面であった可能性もある。ただし埋土の状況からⅢ層中に収まると判断される。P01はほぼ水平に、P02は北側・東側が低くなるように上部を削られている。

P01 は ST3 北端に位置する。北側・西側は調査区外に延び、全形は不明である。検出部分の断面形は緩やかな弧状を呈する。検出部分の平面規模は 46cm × 28cm 以上、深さ 32cm を測る。埋土は上端に明黄褐～黄褐色粘質土・灰黄褐色砂質土の混土層（Ⅲ 6 層）、以下の大部分は黒褐色粘～砂質土である（Ⅲ 7 層）。Ⅲ 7 層から 17 世紀初期の特徴をもつ土師器皿（第 240 図 P01）が出土した。

P02 は ST3 東端に位置する。東側は調査区外に延び、全形は不明であるが、検出部分（西側）の平面は入り組んだ形状を示す。断面は勾配が一定でなく、東端付近で急傾斜となる落ちがあるが、底部とみられる検出最深部は平坦である。検出部分の平面規模は 91cm × 74cm、深さ 74cm を測る。

その他

近代の土層については基本土層の項で記述した通りであるが、砂利層（Ⅰc1 層）について補足する（第 237・238 図）。本層はⅠc 層最上面に該当し、北部北半（ST2 以北）を除く地点全域で検出された。厚さは数 cm ～10cm 程度で、粒径 5mm 前後の砂利で構成される。標高は 56.5～56.8 m、近代初期のある期間の地表面と判断される。

（4）出土遺物（第240・241図:実測図、第47～50表：観察表、第246・247図：写真）

Ⅲ層

第 240 図 P01 は 2014-1P01 から出土した土師器皿で、全体の 1/2 程の破片である。全体に器壁が厚く、小さく平坦な底部から斜めに体部が立ち上がる形状を呈し、口縁内端にかすかに面をもつが目立たない。胎土は細かな砂粒を比較的均一に含む（D）。京都系土師器皿の名残を留めるB類の一種で、1620 年前後より以前に流行の主体があると考えられる。

第 241 図 T01・T02 はⅢ 9 層、T03 はⅢ 11 層直上から出土した燻瓦である。T01 は丸瓦で、内面の粘土切り離し痕はコビキAを示す。T02・T03 は平瓦で、T03 の狭端面上部には緩やかで幅の広い面取りが認められる。これらの瓦も 1620 年前後より以前に使用されていた可能性が高い。

Ⅱ層

第 241 図 T04 はⅡ 3 層（ST2 底面）から出土した燻瓦（平瓦）である。

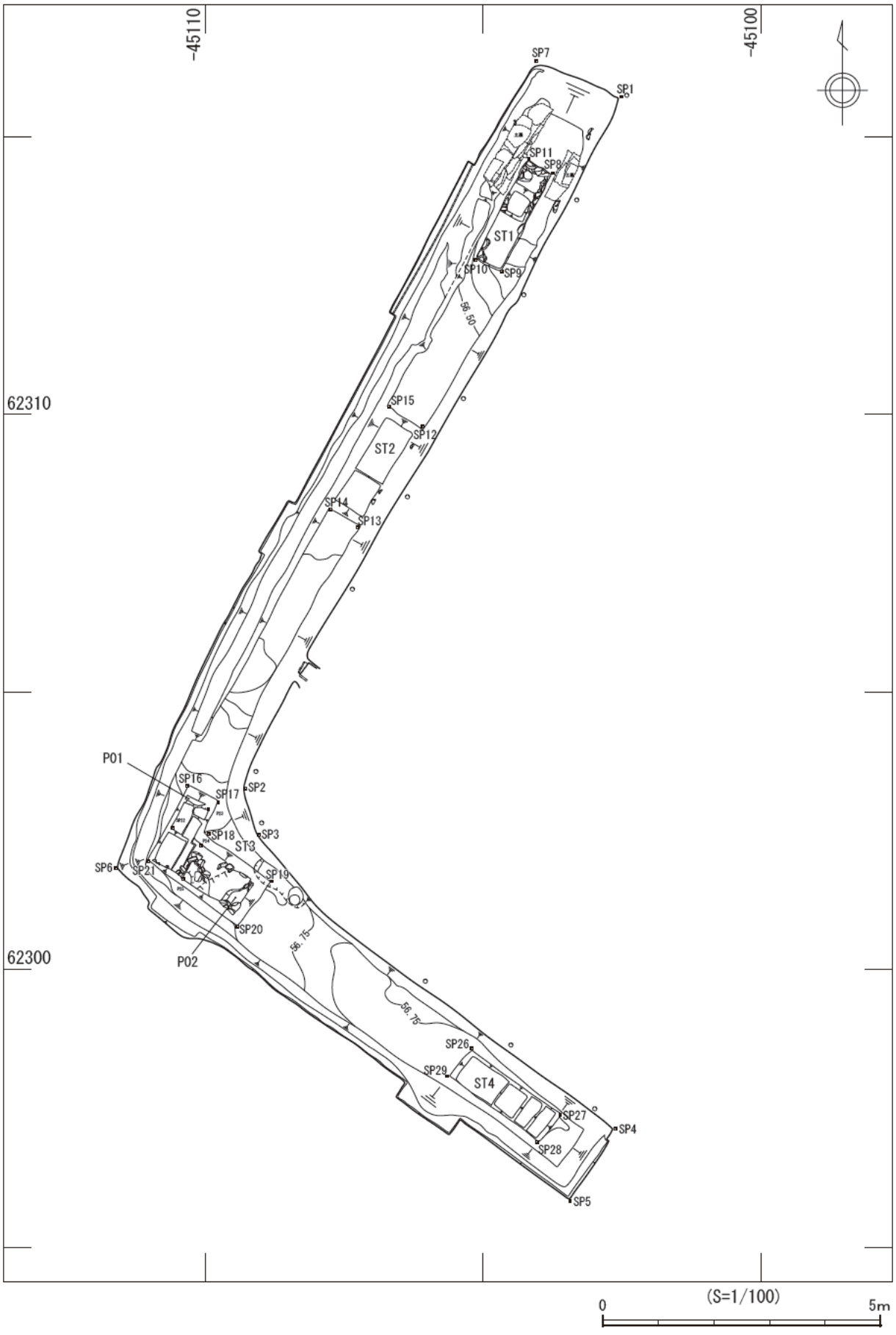
Ⅰ層

第 240 図 P02～ P07 は 17 世紀初頭以前の陶磁器で、本来Ⅲ層に属していた可能性がある。中国磁器青花皿（P02）・壺（P03）、中国陶器彩釉盤（P04）、瀬戸美濃陶器鉄釉ヒダ皿（P06）・青織部向付（P05）、土師器皿（P07）等がある。なかでも鳳凰文が窺える P03 は優品と言える。

第 241 図 T07～ T15 は燻瓦で、瓦当・刻印を有する資料の拓本である。軒丸瓦（T07～ T09）は珠文数が 14 個と推定されるタイプで（Ⅱ）、T07 は巴の尾が右回りとなる。軒平瓦（T10～ T13）のうち T12・T13 の瓦当は三葉文である［石川県金沢城調査研究所 2014d 第 110 図］。

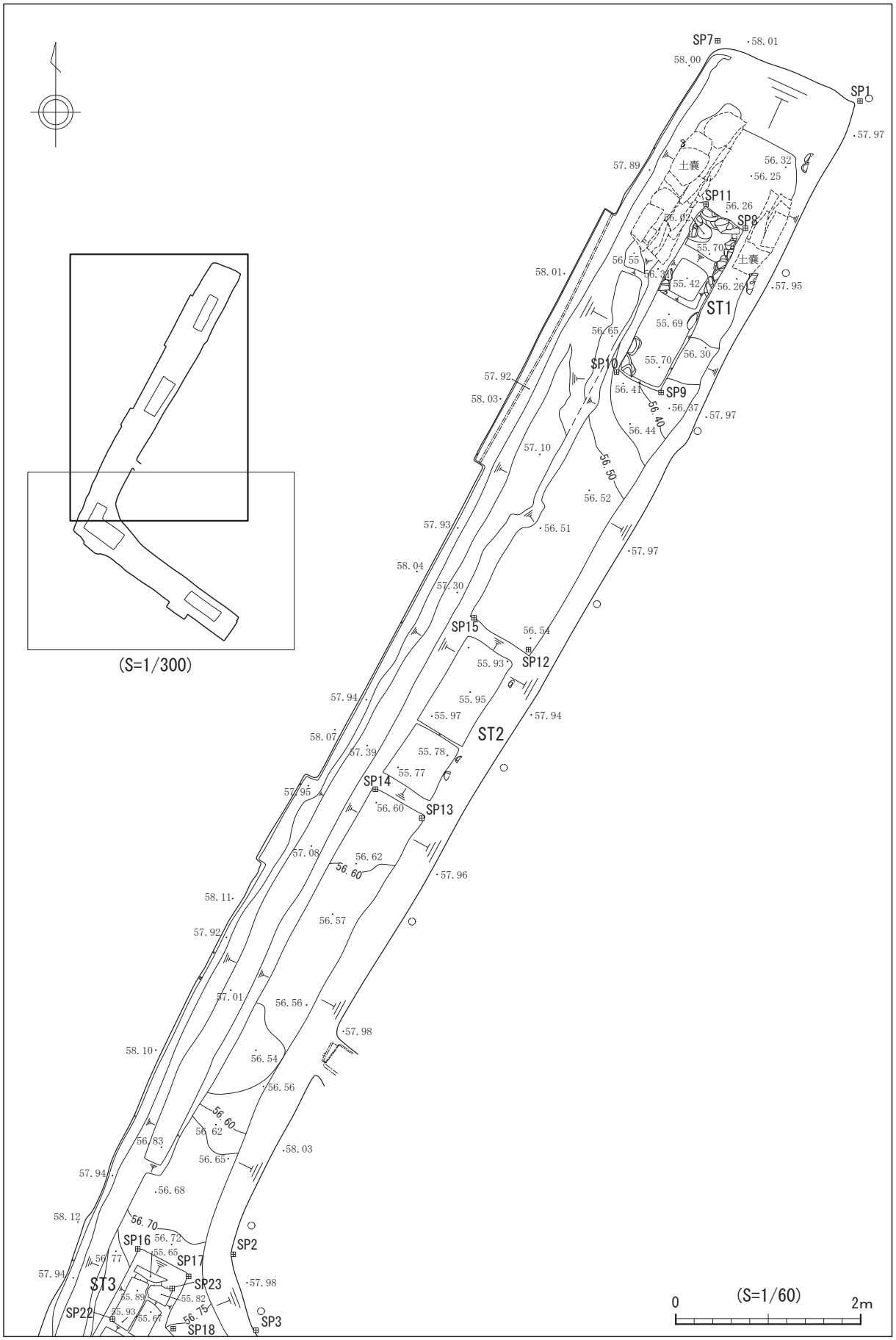
第 240 図 P08～ P18 は、Ⅰc 層（近代造成土下層）から出土した陶磁器である。このうちⅠc1 層からの出土で古相を呈する P08 を除く他は、釉薬瓦（第 241 図 T06 等）とともに ST1・Ⅰc6 層に集中する傾向が認められ、まとめて廃棄された可能性が高い。器種は碗（磁器：P09～ P12、陶器：P13～ P15）が主体で、他に土瓶（P16・P17）・火鉢（P18）等を伴う。このうち P09 は端反の瀬戸磁器染付碗で、19 世紀前半に位置付けられる。他の資料もおおよそ 18 世紀末～19 世紀代の年代を示す。また、第 241 図 M01 は銅釘、S01 は硯である。

本地点付近では、絵図によるとすぐ北側に足軽番所が存在していた。上記近世後期の陶磁器群は本来この番所にあった可能性があり、明治４年（1871）以降、番所の撤去に係り廃棄されたと推測される。出土状況からすれば、番所の撤去・陶磁器の廃棄・周辺の造成が一連に行われたとも考えられる。

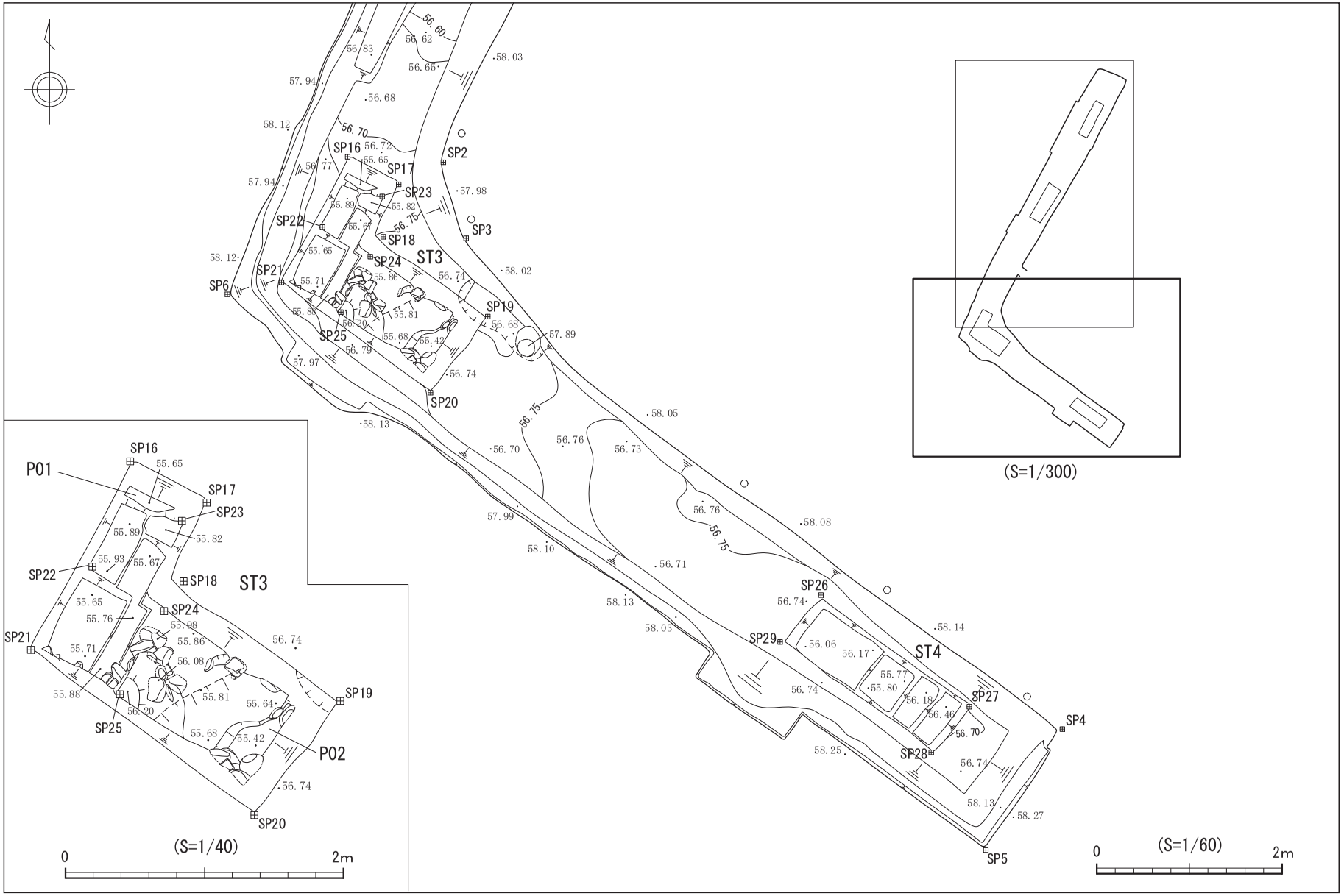


第 233 図　2014-1 地点　調査地点平面図

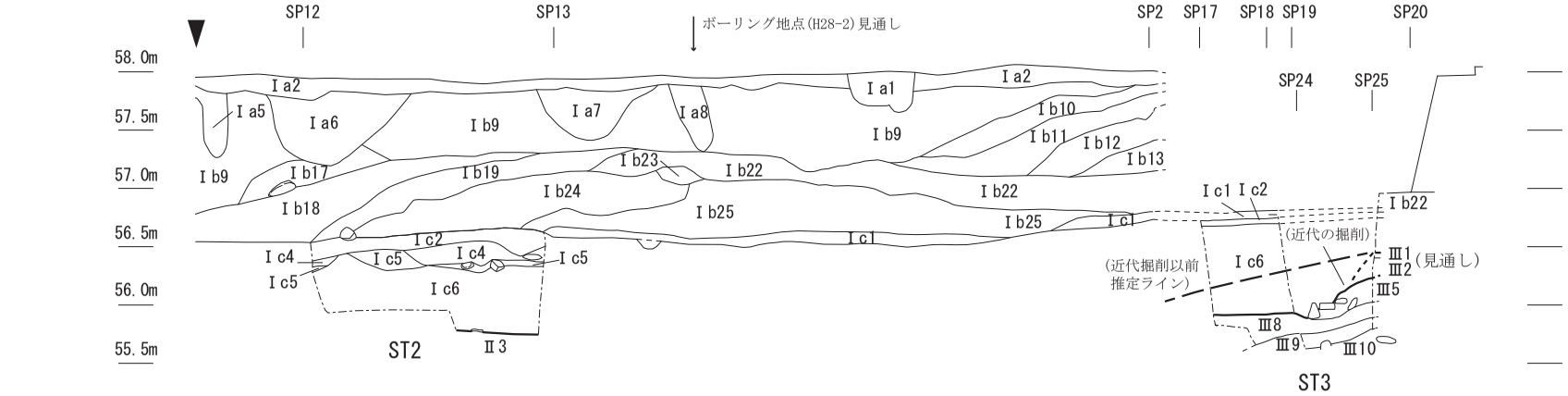
第 234 図 2014-1 地点　調査地点平面図・垂直写真

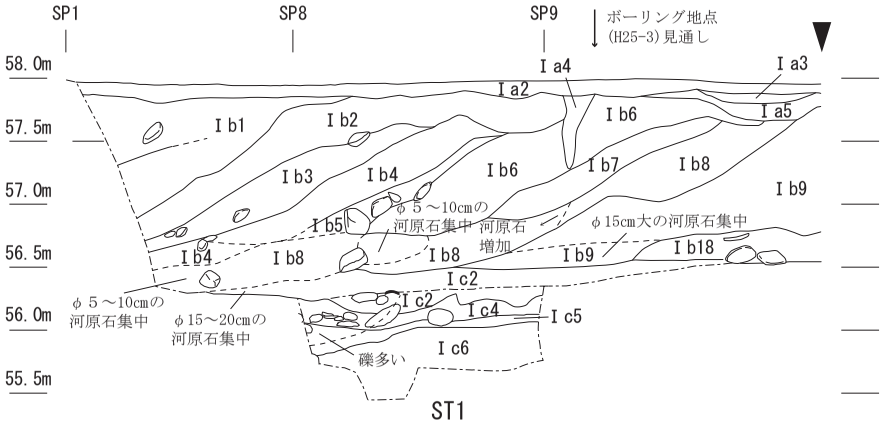


第 235 図　2014-1 地点　調査地点北部平面図



第 236 図　2014-1 地点　調査地点南部平面図





Ⅰa：近代以後

Ⅰa1　10YR2/3 黒褐色粘質土（水道の掘方、園路の砂利を含む、しまり悪い）
Ⅰa2　（表土）10YR3/3 暗褐色粘質土（上方に園路の砂利を多く含む）
Ⅰa3　（クリカラ砂）
Ⅰa4　10YR3/3 暗褐色砂質土
Ⅰa5　10YR3/2 黒褐色砂質土
Ⅰa6　10YR3/3 暗褐色砂質土（10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土ブロック混じる）
Ⅰa7　10YR3/2 黒褐色粘～砂質土（径1～3cm大の礫多く混じる、しまり悪い）
Ⅰa8　10YR3/4 暗褐色粘質土（鉄パイプが埋設、Ⅰb9層よりも色が暗くしまり悪い）

Ⅰb：近代以後

Ⅰb1　10YR3/4 暗褐色粘質土（Ⅰa2と同質だが砂利を含まない、2～3cmの平円礫を少量含む、しまり悪い）
Ⅰb2　10YR4/6 褐色粘～砂質土
Ⅰb3　10YR3/3(4/6) 暗褐色砂質土（10YR4/6 褐色粘質土ブロック顕著に混じる）
Ⅰb4　10YR5/6 黄褐色砂質土　（小礫多量に混じる、しまり悪くもろい）
Ⅰb5　10YR3/3 暗褐色砂質土（小礫多く混じる、北側20cm大の大型礫混じる）
Ⅰb6　10YR4/4 褐色砂質土（小礫多く混じる）
Ⅰb7　10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色粘～砂質土
Ⅰb8　10YR5/6～3/2 黄褐色粘質土・黒褐色粘砂質土、互層状（層厚5cm程度）
Ⅰb9　10YR3/3 暗褐色砂質土（10YR4/6 褐色粘土小ブロック（1cm以下）多く混じる）
Ⅰb10　10YR3/3 暗褐色砂質土（0.5cm程度の小礫少量含む、Ⅰb13層よりもしまり強い）
Ⅰb11　10YR4/6 褐色粘質土（粘性比較的強い、10YR3/3 暗褐色粘質土が混じる部分あり、下部に5cm大の円礫混じる）
Ⅰb12　10YR3/3 暗褐色砂質土（0.5cm程度の少礫多く混じる、2～3cmの円礫わずかに混じる）
Ⅰb13　10YR3/3 暗褐色粘質土（7.5YR5/6 明褐色粘質土がブロック状に混じる、15cm大のシルト質の礫含む）
Ⅰb18　10YR2/2 黒褐色粘質～シルト質土（比較的均質）
Ⅰb19　10YR2/2・5/6 黒褐色粘質土（10YR5/6 黄褐色土不定形ブロック多く混じる）
Ⅰb22　10YR2/2・5/6 黒褐色粘質土（10YR5/6 黄褐色土不定形ブロック多く混じる）
Ⅰb23　10YR3/3 暗褐色粘質土（Ⅰb22層に類似した黒褐色粘質土がブロック状に混じる）
Ⅰb24　2.5YR3/3 暗オリーブ褐色粘質土（7.5YR5/8 明褐色粘質土ブロック少量混じる、鉄錆状を呈する部分あり）
Ⅰb25　10YR3/3 暗褐色粘質土（2～3cmの円礫少量混じる）

Ⅰc：近代初期

Ⅰc1　10YR3/3 暗褐色粘質土混じり 0.5～3cmの礫主体の砂利層（東部より礫がやや少ない）
Ⅰc2　10YR4/2 灰黄褐色粘砂質土（しまり強い、鉄錆状を呈する部分が多く混じる）
Ⅰc3　10YR3/3 暗褐色粘質～シルト質土（暗い色調、比較的均質）＊ST2西壁等で確認・本図になし
Ⅰc4　10YR4/4～3/4 褐～暗褐色砂質土（Ⅰc2・Ⅰc5に比べ色調明るい、ST1では礫多く混じる）
Ⅰc5　10YR4/1 褐灰色粘砂質土（やや灰色味強い、暗い色調）
Ⅰc6　10YR4/3～4/4 にぶい黄褐～褐色砂質土（礫・釉約瓦混じる（ST1では特に多い）、Ⅰc2層より粘性低く砂質）

Ⅱ：近世

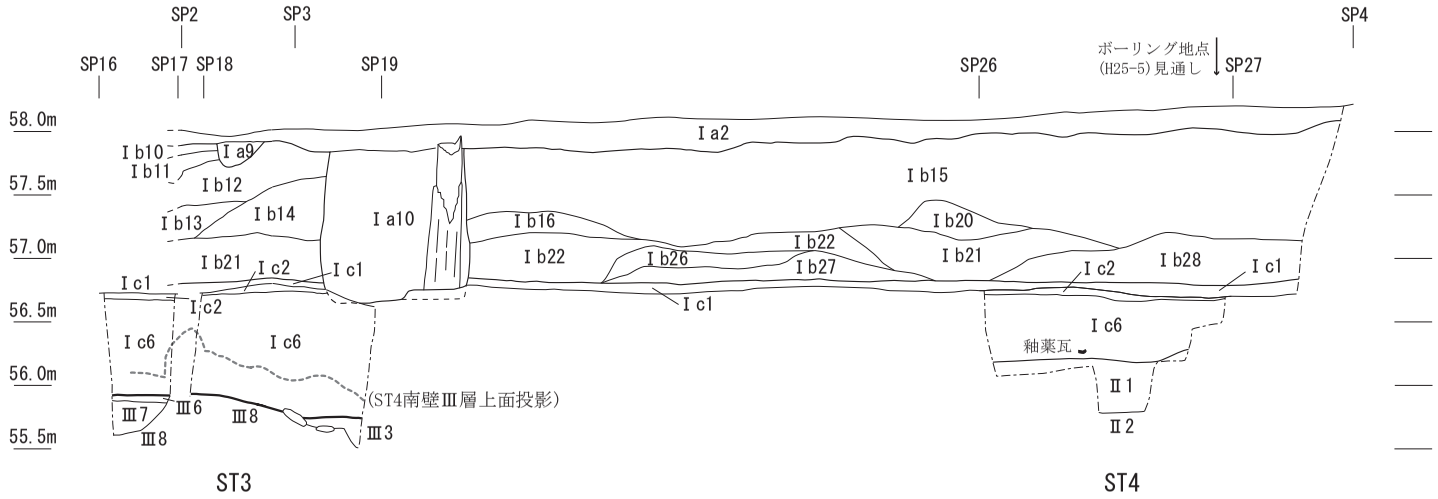
Ⅱ3　10YR4/3 にぶい黄褐色粘～砂質土（上面固くしまる（硬化面）、明黄褐色粘土小ブロック（1cm大）・黒褐色粘土小ブロック・焼けた瓦小片混じる）

Ⅲ：近世初期

Ⅲ1　10YR5/3～4/3 にぶい黄褐～暗褐色砂質土（10YR5/3 にぶい黄褐色粘土ブロック混じる、しまり悪い）
Ⅲ2　10YR5/6 黄褐色粘質土（0.3～1cm程度の小礫多く混じる）
Ⅲ5　10YR4/4 褐色砂質土（戸室石・20cm台の礫混じる）
Ⅲ8　10YR5/6～6/6 明黄褐～黄褐色粘質土（比較的均質、10YR7/1 灰白色粘土～シルトブロック顕著に混じる）
Ⅲ9　10YR3/4 暗褐色砂質土
Ⅲ10　10YR6/6 明黄褐色粘質土（10YR7/1 灰白色粘土～シルト小ブロック顕著に混じる。ST3西壁にのみ確認

0　(S=1/60)　2m

第237図　2014-1地点　北部東壁断面図



Ⅰa：近代以後

Ⅰa2　10YR3/3 暗褐色粘質土（表土　上方に園路の砂利多く混じる）
Ⅰa9　10YR3/4 暗褐色粘質土（Ⅰa2と同質だが砂利混じらない、2～3cmの平円礫少量混じる、しまり悪い）
Ⅰa10　10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（木柱掘方埋土　しまり弱く、10cm大の円礫微量混じる、5cm未満の小礫少量混じる）

Ⅰb：近代以後

Ⅰb10　10YR3/3 暗褐色砂質土（0.5cm程度の小礫少量混じる、Ⅰb13層よりもしまり強い）
Ⅰb11　10YR4/6 褐色粘質土（粘性比較的強い、10YR3/3 暗褐色粘質土が混じる部分あり、下部に5cm大の円礫混じる）
Ⅰb12　10YR3/3 暗褐色砂質土（0.5cm程度の小礫多く混じる、2～3cmの円礫わずかに混じる）
Ⅰb13　10YR3/3 暗褐色粘質土（7.5YR5/6 明褐色粘質土がブロック状に混じる、15cm大のシルト質の礫混じる）
Ⅰb14　10YR3/4 暗褐色粘質土（7.5YR5/6 明褐色粘質土ブロックわずかに混じる、5cm程度の円礫少量混じる、Ⅰb12層よりしまり悪い）
Ⅰb15　10YR5/6～3/4 黄褐～暗褐色砂質土（5～10cmの礫少量混じる）
Ⅰb16　10YR3/4 暗褐色砂質土（10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック多く混じる、基本的にⅠb15層に類似）
Ⅰb20　10YR3/3 暗褐色粘質土（均質、10YR8/2 灰白色粘土ブロック混じる）
Ⅰb21　10YR3/4 暗褐色砂質土（10cm大の円礫多く混じる）
Ⅰb22　10YR2/3 黒褐色粘質土（均質、礫あまり混じらない、5YR4/6 焼土ブロック（1cm以下）微量に混じる）
Ⅰb26　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（砂質分比較的多い、5～10cm大の礫多く混じる、しまり強い）
Ⅰb27　10YR3/3 暗褐色粘質土（5～10cm大の礫少量混じる、Ⅰb22よりも明るい）
Ⅰb28　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（5～10cm大の平円礫少量混じる、しまり強い）

Ⅰc：近代初期

Ⅰc1　10YR3/3 暗褐色粘質土混じり 0.5～3cmの礫主体の砂利層
Ⅰc2　10YR4/2 灰黄褐色粘砂質土
Ⅰc6　10YR4/3～4/4 にぶい黄褐～褐色砂質土（礫・釉約瓦混じる、Ⅰc2層より粘性低く砂質）

Ⅱ：近世

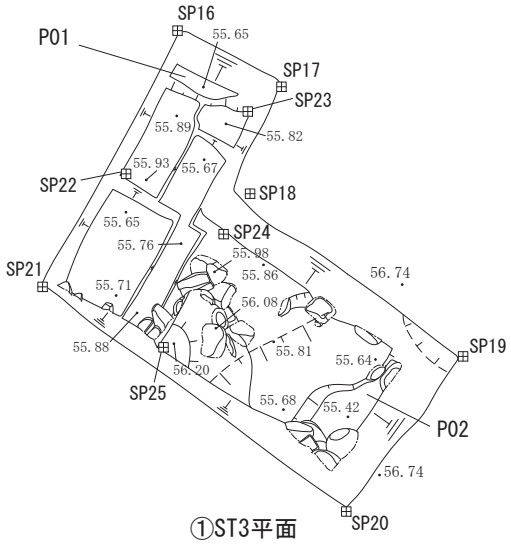
Ⅱ1　10YR4/4 褐色砂質土（Ⅰc6層よりもしまり強い、5cm未満の礫混じる）
Ⅱ2　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（Ⅱ1層よりもしまり強い、0.5cm程度の小礫混じる）

Ⅲ：近世初期

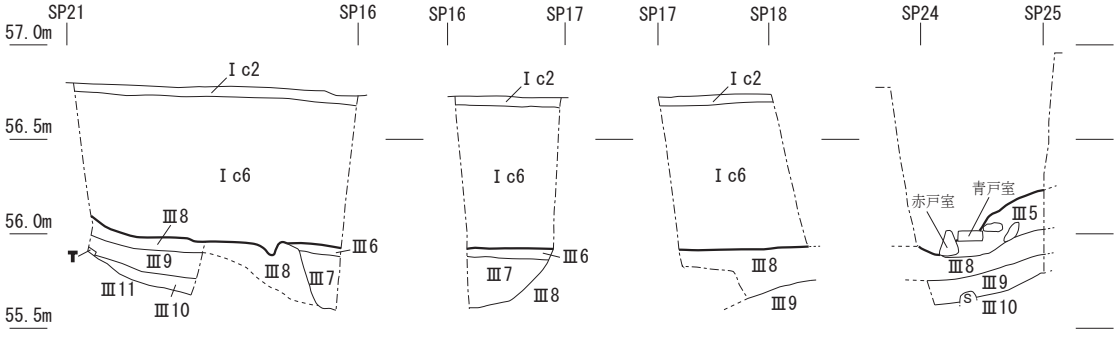
Ⅲ3　10YR4/3～4/4 にぶい黄褐～褐色粘砂質土（遺構（P02）埋土　黄褐色粘質土と褐色土の混土、長軸20cm台の礫混じる）
Ⅲ6　10YR5/6・4/2 （明黄褐～）黄褐色粘質土，灰黄褐色砂質土（混土層　遺構（P01）埋土）
Ⅲ7　10YR2/2 黒褐色粘～砂質土（遺構（P01）埋土　10YR7/1 明黄褐色土小ブロック（径0.1～0.2cm）多く混じる）
Ⅲ8　10YR5/6～6/6 明黄褐～黄褐色粘質土（比較的均質、10YR7/1 灰白色粘土～シルトブロック顕著に混じる）

0　(S=1/60)　2m

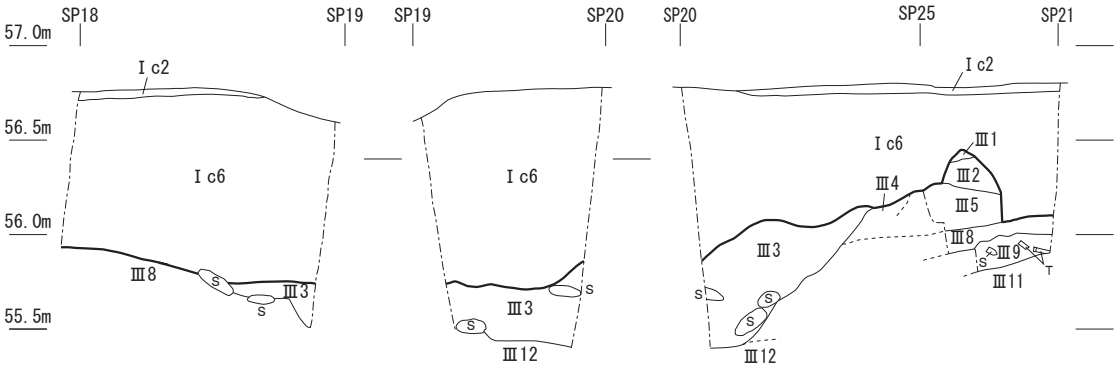
第238図　2014-1地点　南部北壁断面図



①ST3平面



②西壁　③北壁(西)　④東壁(北)　⑤中央セクション



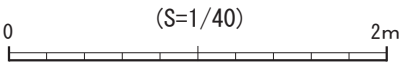
⑥北壁（東）　⑦東壁(南)　⑧南壁

Ⅰc：近代初期

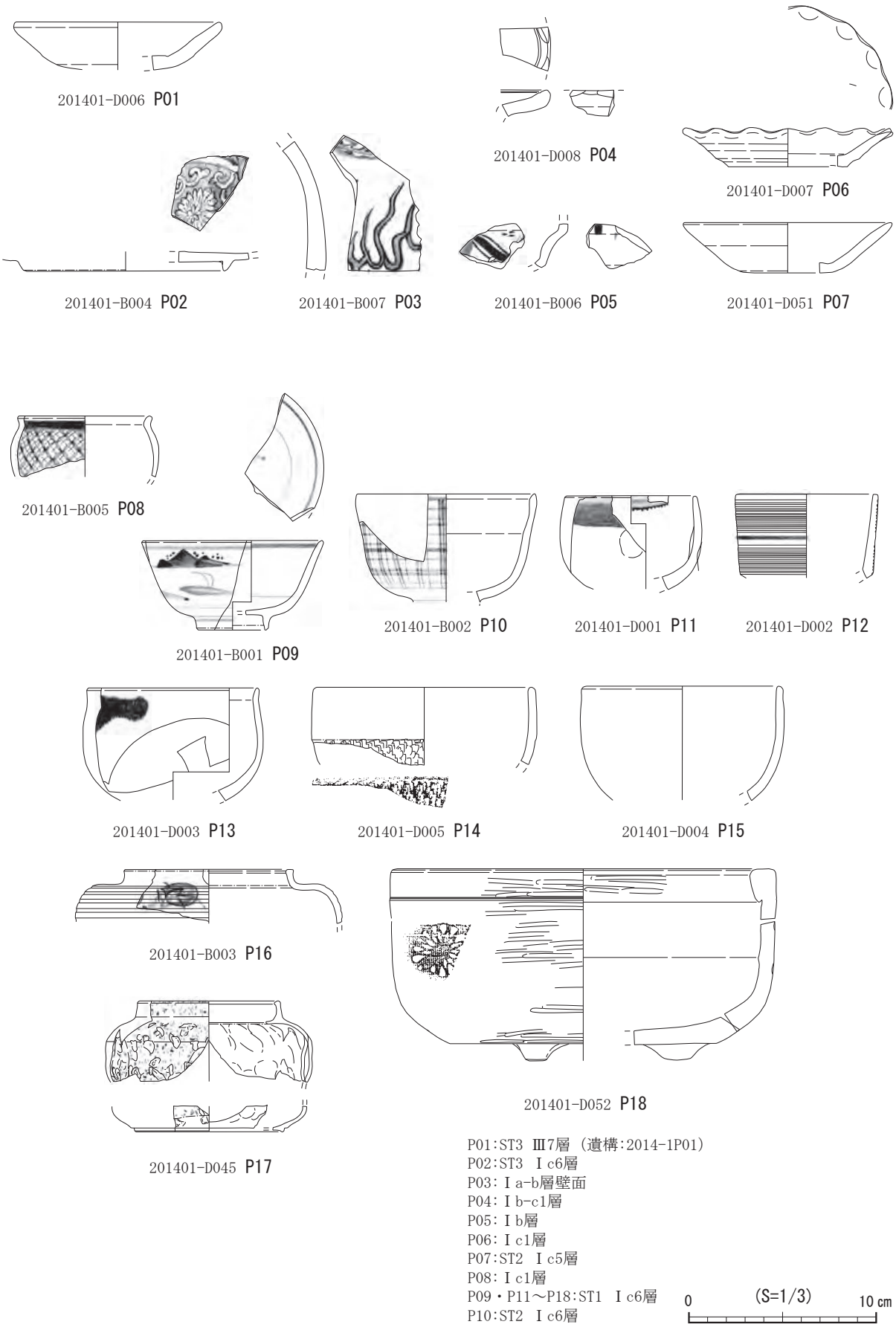
Ⅰc2　10YR4/2 灰黄褐色粘砂質土（しまり強い、鉄錆状を呈する部分が多く混じる）
Ⅰc6　10YR4/3～4/4 にぶい黄褐～褐色砂質土（礫・釉約瓦混じる（ST1では特に多い）、Ⅰc2層より粘性低く砂質）

Ⅲ：近世初期

Ⅲ1　10YR5/3～4/3 にぶい黄褐～暗褐色砂質土（10YR5/3 にぶい黄褐色粘土ブロック混じる、しまり悪い）
Ⅲ2　10YR5/6 黄褐色粘質土（0.3～1cm程度の小礫多く混じる）
Ⅲ3　10YR4/3～4/4 にぶい黄褐～褐色粘砂質土（遺構(P02)埋土　黄褐色粘質土と褐色土の混土、長軸20cm台の礫混じる）
Ⅲ4　10YR2/2 黒褐色粘質土
Ⅲ5　10YR4/4 褐色砂質土（戸室石・20cm台の礫混じる）
Ⅲ6　10YR5/6・4/2 （明黄褐～）黄褐色粘質土，灰黄褐色砂質土（混土層）（遺構(P01)埋土）
Ⅲ7　10YR2/2 黒褐色粘～砂質土（遺構(P01)埋土　10YR7/1 明黄褐色土小ブロック（径0.1～0.2cm）多く混じる）
Ⅲ8　10YR5/6～6/6 明黄褐～黄褐色粘質土（比較的均質、10YR7/1 灰白色粘土～シルトブロック顕著に混じる）
Ⅲ9　10YR3/4 暗褐色砂質土
Ⅲ10　10YR6/6 明黄褐色粘質土（10YR7/1 灰白色粘土～シルト小ブロック顕著に混じる。ST3西壁にのみ確認
Ⅲ11　10YR5/6～4/6 黄褐～褐色粘質土（10YR4/1～3/1 黄灰～黒灰色粘土ブロック混じる）
Ⅲ12　10YR5/6～4/6 黄褐～褐色粘質土（10YR4/1～3/1 黄灰～黒灰色粘土ブロック混じる、Ⅲ11と同一か）



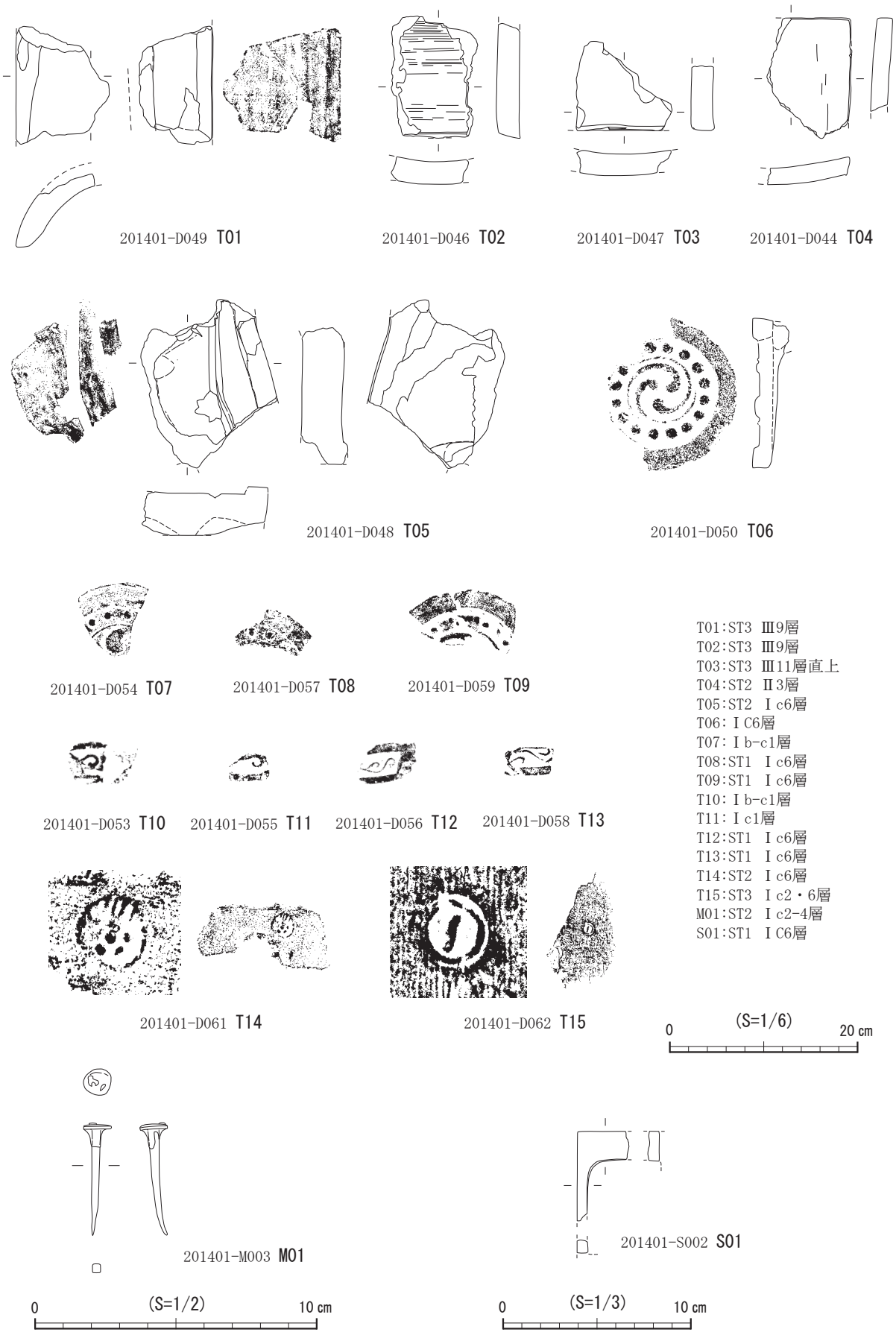
第239図　2014-1地点　ST3平面図・断面図



P01:ST3 Ⅲ7層 (遺構:2014-1P01)
P02:ST3 Ⅰc6層
P03:Ⅰa-b層壁面
P04:Ⅰb-c1層
P05:Ⅰb層
P06:Ⅰc1層
P07:ST2 Ⅰc5層
P08:Ⅰc1層
P09・P11～P18:ST1 Ⅰc6層
P10:ST2 Ⅰc6層

0 (S=1/3) 10 cm

第 240 図　2014-1 地点　出土遺物実測図　陶磁器



第 241 図　2014-1 地点　出土遺物実測図　瓦・瓦拓本（瓦当・刻印）・金属製品・石製品

第47表　2014-1地点　出土遺物観察表　陶磁器

（）は残存値

図版	報告番号	種別	器種	出土地点	出土層位・遺構等	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		産地	形状特徴	特記事項	ID(実測番号)
240	P01	土器	土師器皿	2014-1	ST3　Ⅲ7層（2014-1P01）	10.9	6.6	2.5	手づくね		D	にぶい橙	在地	B類		201401-D006
	P02	磁器	皿	2014-1	ST3　Ⅰc6層		10.9	(1.1)	ロクロ	青花	1Ba	白	中国景徳鎮系		割れ口に煤付着	201401-B004
	P03	磁器	壺	2014-1	Ⅰa-b層壁面			(6.9)	ロクロ	青花	2Ba	白	中国景徳鎮系			201401-B007
	P04	陶器	盤	2014-1	Ⅰb-c1層			(2.3)	ロクロ	彩釉（鉛釉、鉄釉）	Ⅱ 2Ba	にぶい黄褐	中国華南			201401-D008
	P05	陶器	皿（向付）	2014-1	Ⅰb層			(2.3)		長石釉、鉄絵、銅緑釉	Ⅱ 2Ba	灰白	瀬戸・美濃		織部	201401-B006
	P06	陶器	皿	2014-1	Ⅰc1層	10.9		2.1	ロクロ	鉄釉	Ⅰ 2Ba	灰	瀬戸・美濃	ヒダ皿		201401-D007
	P07	土器	土師器皿	2014-1	ST2　Ⅰc5層	11.05	5.2	2.7	手づくね		C	褐灰～黒灰	在地	B類？		201401-D051
	P08	磁器	直口？	2014-1	Ⅰc1層	7.0		(3.2)	ロクロ	染付	2Ba	白	肥前			201401-B005
	P09	磁器	碗	2014-1	ST1　Ⅰc6層	9.6	3.6	4.8	ロクロ	染付	2Ba	灰白	瀬戸・美濃			201401-B001
	P10	磁器	碗	2014-1	ST2　Ⅰc6層	9.4		(5.8)	ロクロ	染付	2Ba	白	瀬戸・美濃			201401-B002
	P11	磁器	碗	2014-1	ST1　Ⅰc6層	6.8		(5.0)	ロクロ	透明釉	2Ba	灰白	肥前			201401-D001
	P12	磁器	碗	2014-1	ST1　Ⅰc6層	7.6		(4.5)	ロクロ	透明釉、鉄釉	2Ba	灰白	肥前			201401-D002
	P13	陶器	碗	2014-1	ST1　Ⅰc6層	9.0		(6.0)	ロクロ	灰白釉、暗灰釉、緑灰釉	Ⅰ 2Aa	灰白	京・信楽			201401-D003
	P14	陶器	碗	2014-1	ST1　Ⅰc6層	11.5		(4.2)	ロクロ	灰釉、鉄釉	Ⅰ 2Aa	灰黄 黒い細砂少量含むが堅い	瀬戸・美濃			201401-D005
	P15	陶器	碗	2014-1	ST1　Ⅰc6層	10.6		(6.1)	ロクロ	鉄釉	Ⅰ 2Ba	浅黄	瀬戸・美濃			201401-D004
	P16	陶器	土瓶	2014-1	ST1　Ⅰc6層	9.0		(2.9)	ロクロ	灰釉、染付、鉄絵、白泥	Ⅰ 2Ba	にぶい橙				201401-B003
	P17	陶器	土瓶	2014-1	ST1　Ⅰc6層	7.4	7.8	上部(4.4) 下部(1.4)	ロクロ	灰釉	Ⅰ 2Ba	灰黄 黒雲母含む				201401-D045
	P18	土器	火鉢	2014-1	ST1　Ⅰc6層	19.8	14.2	[10.3]	輪積み＋回転台	印花文	E1	にぶい橙 焼土塊少 雲母少	在地	柱状脚		201401-D052

第 48 表　2014-1 地点　出土遺物観察表　瓦 1

軒丸瓦

（ ）は残存値　［ ］は復元値

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	瓦当	寸法(瓦当) a	b	c	d	胎土		釉色	特記事項	ID(実測番号)
241	T06	瓦	軒丸瓦	2014-1	Ⅰ C6層	釉	巴Ⅲ－１ｂ	16.0	11.85	11.2	2.5	B2	橙 粗砂多、礫少	暗赤褐色		201401-D050

丸瓦

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法(体部) a	b	c	d	e	f	g	胎土		特記事項	ID(実測番号)
241	T01	瓦	丸瓦	2014-1	ST3　Ⅲ９層	燻	(12.3)	(10.0)			(7.85)	2.6		C2	灰色、粗砂並、やや焼成不良	コビキ A	201401-D049

平瓦

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法(体部) a	b	c	d	e	破片最大幅	胎土		特記事項	ID(実測番号)
241	T02	瓦	平瓦	2014-1	ST3　Ⅲ9層	燻	(13.1)		(7.1)		2.4	9.1	A1	灰白 粗砂並		201401-D046
	T03	瓦	平瓦	2104-1	ST3　Ⅲ11層直上	燻	(9.6)				2.3	10.2	A1	にぶい浅黄 粗砂並、焼成不良		201401-D047
	T04	瓦	平瓦	2014-1	ST2　Ⅱ3層	燻	(12.9)	(7.6)		(1.2)	1.8	8.9	A1	灰白 粗砂並		201401-D044

道具瓦

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法(体部) a	b	c	d	e	f	g	h	胎土		特記事項	ID(実測番号)
241	T05	瓦	鬼瓦	2014-1	ST2　Ⅰ c6 層	燻	長 (18.0)	幅 (14.5)	高 (5.7)						C2	灰白 粗砂並、気泡多、焼成良好		201401-D048

軒丸瓦（拓本）

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	瓦当	寸法(瓦当) a	b	c	d	胎土		特記事項	ID(実測番号)
241	T07	瓦	軒丸瓦	2014-1	Ⅰb-c1層	燻	巴Ⅱ	(8.1)	(5.5)	(3.5)	(2.6)	A2	灰白及び変色 粗砂多	瓦当周縁内側・珠文に指圧痕	201401-D054
	T08	瓦	軒丸瓦	2014-1	ST1　Ⅰc6層	燻	巴Ⅱ	(6.4)	(4.2)	(2.5)	(3.8)	B1	灰白 粗砂・礫並		201401-D057
	T09	瓦	軒丸瓦	2014-1	ST1　Ⅰc6層	燻	巴Ⅱ	(5.5)	(3.3)		(1.9)	C2	灰白　細砂		201401-D059

第 49 表　2104-1 地点　出土遺物観察表　瓦 2

軒平瓦（拓本）

（ ）は残存値　［ ］は復元値

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	瓦当	寸法(瓦当)				寸法(体部)		胎土		特記事項	ID(実測番号)
								a	b	h	i	a					
241	T10	瓦	軒平瓦	2014-1	Ⅰb-c1層	燻	?	(8.6)	(7.2)	2.4	(4.0)	(6.7)		C1	灰白 粗砂並、焼成不良、縞あり		201401-D053
	T11	瓦	軒平瓦	2014-1	Ⅰc1層	燻	?	(4.5)			(3.3)			C1	灰白　粗砂並、焼成不良		201401-D055
	T12	瓦	軒平瓦	2014-1	ST1　Ⅰc6層	燻	三葉文Ⅴ	(7.1)		1.9	2.3	(4.2)		A2	灰白 粗砂並		201401-D056
	T13	瓦	軒平瓦	2014-1	ST1　Ⅰc6層	燻	三葉文Ⅳ？	(6.2)			2.1			A1	灰白 粗砂並		201401-D058

平瓦（拓本）

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法(体部)					破片最大幅	胎土		特記事項	ID(実測番号)
							a	b	c	d	e					
241	T14	瓦	平瓦	2014-1	ST2　Ⅰc6層	燻	(5.0)				2.4	6.9	A1	灰白 粗砂多	刻印、釘穴	201401-D061

道具瓦（拓本）

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法(体部)								胎土		特記事項	ID(実測番号)
							a	b	c	d	e	f	g	h				
241	T15	瓦	輪違い	2014-1	ST3　Ⅰc2・6層	燻	長 14.3	幅 (10.1)			2.1				A1	灰白色　粗砂並、縞あり	刻印	201401-D062

第 50 表　2014-1 地点　出土遺物観察表　金属製品・石製品

金属製品

（ ）は残存値　［ ］は復元値

図版	No.	種別	器種	出土地点		全長(cm)	全幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	特記事項	ID(実測番号)
241	M01	銅製品	釘	2014-1	ST2　Ⅰc2-4層	4.0	カサ0.95×1.0 体部0.3×0.3		2.6	銅	鉛付着、体部断面方形	201401-M003

石製品

図版	No.	種別	器種	出土地点		全長(cm)	全幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	色調	材質	特記事項	ID(実測番号)
241	S01	石製品	硯	2014-1	ST1　Ⅰ C6 層	(4.8)	(2.75)	(0.7)	(8.3)				201401-S002

金沢城跡　東ノ丸等全景　南から

2014-1地点北部　調査着手前状況　南から

2014-1地点南部　調査着手前状況　西から

2014-1地点　表土等除去　北から

2014-1地点　壁面精査　北から

第 242 図　2014-1 地点　遺構写真 1

2014-1地点北部　Ⅰc層検出状況　北から

2014-1地点北部　Ⅰc層面　南から

2014-1地点南部　Ⅰc層面　西から

2014-1地点　ST1　南から

2014-1地点　ST1　南東から

2014-1地点　ST2　Ⅱ層検出状況　北西から

204-1地点　ST3　Ⅲ層検出状況　南から

2014-1地点　ST3　P01遺物出土状況

第 243 図　2014-1 地点　遺構写真 2

2014-1地点　ST3　Ⅲ層遺物出土状況　北から

2104-1地点　ST3　Ⅲ層調査状況　南から

2014-1地点　ST3　Ⅲ層調査状況　西から

2014-1地点　ST3　Ⅲ層調査状況　北東から

2014-1地点　ST3　P01　南から

第 244 図　2014-1 地点　遺構写真 3

2014-1地点　ST4　南から

2014-1地点北部　全景　北から

2014-1地点北部　ST2付近東壁土層

2014-1地点北部　全景　南から

2014-1地点南部　全景　西から

2014-1地点南部　全景　東から

実測作業

埋め戻し作業

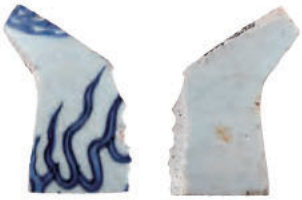
第 245 図　2014-1 地点　遺構写真 4

201401-D006 P01

201401-D008 P04

201401-B006 P05

201401-B004 P02



201401-B007 P03

201401-D007 P06

201401-D051 P07

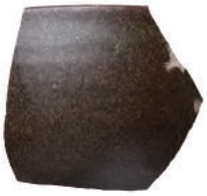
201401-B005 P08

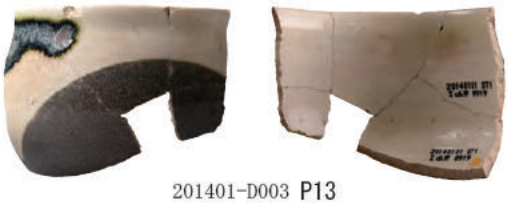
201401-B001 P09

201401-D001 P11

201401-B002 P10

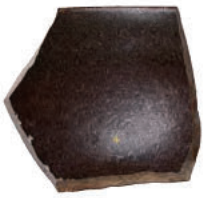
201401-D002 P12





201401-D003 P13

201401-D005 P14



201401-D004 P15

201401-B003 P16

201401-D045 P17

201401-D052 P18

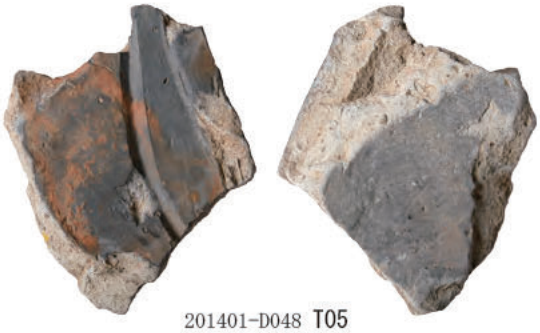
第 246 図　2014-1 地点　出土遺物写真 1　陶磁器

201401-D049 T01

201401-D046 T02

201401-D047 T03

201401-D044 T04



201401-D048 T05

201401-D050 T06

201401-D054 T07

201401-D057 T08

201401-D059 T09

201401-D061 T14

201401-D053 T10

201401-D055 T11

201401-D056 T12

201401-D058 T13

201401-D062 T15

201401-M003 M01

201401-S002 S01

第 247 図　2014-1 地点　出土遺物写真 2　瓦・金属製品・石製品

（5）小結

2014-1 地点は、近世後期の絵図にある窪地状の描写を池跡の名残と見て、その実態や広がりを追求する目的で設定した。

調査の結果、一帯には厚さ２ｍを超える近代の造成土（Ⅰb･c 層）が堆積していることが明確となった。そのためもあって近世面の検出は部分的に留まったが、調査地点北部中央（ST2）･南部東端（ST4）で近世後期以来の地面･造成土（Ⅱ層）、調査地点南西（ST3）で近世初期の造成土（Ⅲ層）を確認した。これらの上面のレベルから、近世初期の段階で、地盤が南西に高く、北・東に下降している見通しを得た。このことから東ノ丸南部には、近世初期から池が存在していた可能性が考えられる。

２．2014-2 地点（第 248 ～ 272 図、第 51 ～ 56 表）

（1）調査過程

2014-2 地点は、前述の通り平成 17 年度に調査した 2005-7 地点の南東側延長部分に相当する（第 248 図等）。調査に際しては新規に掘削する部分のほか、景石 S03（上部）等が確認できる範囲まで、2005-7 地点の南側の一部についても埋め戻し土を取り除き再掘した。

上部には 2005-7 地点から連続して、近代以降の掘り込み埋土が堆積しており、これと樹木の根による攪乱が重複していた。これらの正確なプランははっきりせず、近世層上面の認定にも手間取ることとなったが、本地点では近代土層の直下に、近世初期の瓦が多く混じる土層（Ⅱ層）が北西に向かって下降するように堆積していることを確認した。ただし上層のⅡ９層等は近代の攪乱を受けており、実際の堆積状況より急傾斜となっていた。Ⅱ層は後述するように寛永８年（1631）大火後しばらくの間に形成された近世初期の造成土で、本調査区ではこれより新しい近世層を確認できなかった。近代以後の攪乱・削平によることと、とくに調査地点南東側は、築城初期からの郭最高所に近く、意図的な整地以外、後代の土層堆積が発達する箇所ではなかったかも知れない。

調査地点中央部は、近代以降の掘り込みと樹木根の攪乱により、Ⅱ層の遺存が悪く、影響が下位のⅢ層に及んでいた。2005-7 地点の調査結果ともあわせ、本地点のⅢ層上面が庭園遺構機能時の地面であるとみて、調査地点全域で検出作業を行った。この結果、Ⅲ層上面もまた標高 58.8 ｍ～56.5 ｍにかけて北西側に下降しており、Ⅱ層の状態はこれに影響を受けていることが判明した。またⅢ層を基盤とする景石を検出した（S01・S02）。今回再掘した 2005-7 地点南東で検出していた S03 とあわせ、両地点で原位置を保つ景石を３基確認することとなった。Ⅲ層については南東上部を中心に幅 40 ～ 50cm、深さ 50cm の断割を行い、土層構成の一部を確認する等したが、この間に大きな変化はなく、大別層としてはさらに下位に続く状況を示していた。

（2）基本土層（第254～256図）

Ⅰ層　森林部分表土、金沢城公園整備に係る整地層、掘り込み埋土（Ⅰ 14 層他）等、近代以後の土層を一括した。

Ⅱ層　近世初期ないし前期の土層。近世初期の瓦、板状石材が多く混じる層（Ⅱ９層･Ⅱ 12 層）がある。庭園遺構を埋め立てた造成土である。にぶい黄褐色～暗褐色の粘～砂質土が主体で、おおよそしまりは悪い。

Ⅲ層　近世初期の土層。景石基礎との関係から、庭園遺構斜面部分自体を築造するために形成されたものとみられる。焼土や焼けた瓦等が若干混じる。土質は多様で黒褐色粘質土、黄褐色粘土、砂礫を含むもの等があり、20 層以上に分層される。

（3）遺構等（第248～253図：平面図、第254～256図：断面図、第257・258図：景石、第263～269図：写真）

Ⅲ層斜面（第 253 ～ 256 図）

Ⅲ層は景石 S01 ～ S03 の基盤となっており、斜面を形成する上面が庭園遺構面となる。2005-7 地

点の調査で 2005-7SX01 として報告したものに相当する［石川県金沢城調査研究所 2014d］。また検出された景石のうち最も下位にある S03 の配置が、Ⅲ層下部と一体的になされていることから、Ⅲ層全体が庭園造成に関する土層と判断される。

上面形状

Ⅲ層上面は、攪乱により原形を留めていない範囲もあるが、第 253 図に等高線・傾斜変換線を復元して図示した。調査地点南東端から北西へ約 1.7 ｍの範囲では、現地表下 10 数 cm、標高 58.7～58.8 ｍにⅢ層上面が平坦に展開する（第 253 図Ａ以南）。これより北西側は下降する斜面となるが、2005-7 地点との境である景石 S03 下部（標高 56.5 ｍ）までの間、勾配は一様でなく、複数の面で構成されている。斜面Ｂは緩やか（約 20°）で、S02 が設置されている。続く斜面Ｃは勾配が強く（約 45～68°）、この斜面を背後として S01 が配されている。斜面Ｄは緩やかな撓みをなすが（約 12～13°）、平面形では南東側にやや入り込んだ谷状ともなっている。斜面Ｅは再び急斜面（約 40～42°）に変じ、この北東側に S03 が配されている。S03 はＥ以北斜面を背後とするが、高さ 150cm を越えており、斜面に接するのは下半のみで、上半背後 60～70cm 分はⅢ層上面より突出し、より上段に設置された S01 上端とほぼ同じ高さに達している（第 254・255・258 ②図）。

検出斜面は全体で長さ 4.9 ｍ以上、高さ 2.3 ｍ以上を測る。なお後述する S04 はⅢ層上面で検出したものの、原位置を保っておらず、検出位置より上位に配されていた可能性があるが、斜面の一部が近代の掘り込みや樹木の根により攪乱を受けていることも預かってはっきりしない。

この斜面については、平成 28 年度のボーリング調査の結果より、勾配を大きく変えず池底まで続いていると推定されたことから、池法面の一部（延長）と想定している（第３節）。

造成状況（第 254～256 図）

Ⅲ層は未詳の部分が多いが、検出した範囲では、①北西部下方、層位では上層に相当し、強い傾斜を有するⅢ 1 層･Ⅲ 2 層、②景石の背後や掘方の埋土であるⅢ 3 層～Ⅲ 5 層、③北西から中央付近、層位では中層に相当し、やはり傾斜を有するⅢ 6 層～Ⅲ 12 層、④南東部上方、層位では下層に相当し、水平気味に堆積するⅢ 13 層～Ⅲ 18 層、⑤北西部下方の断割で確認したⅢ 19 層～Ⅲ 21 層に大別される。Ⅲ 1 層・Ⅲ 2 層は、景石 S01 から S03 の間の斜面を形成する表層で、黒褐色・暗褐色シルト質土が主体である。2005-7 地点の調査報告［石川県金沢城調査研究所 2014d］ではⅣ 1 層とし、庭園存続時の流土とみなしていたが、今回の調査で S03 の背面を支持していることが明確となり、庭園築造の最終段階に施工された造成土・整地土の上層と考えるに至った。またこのことに伴い、2005-7 地点南端における土層の分層について見直し、修正を図っている。

Ⅲ 3 層は景石 S01 背後の、Ⅲ 4 層・Ⅲ 5 層は景石 S02 掘方の埋土である。Ⅲ 6 層は斜面中部から上部の比較的広い範囲に展開し、S02 の掘り込み面でもある。Ⅲ 7 層～Ⅲ 10 層（第 256 図等）は粘土･粘質土で、このうちⅢ 9 層は景石 S01 の背面下部に接しており、さらに下位のⅢ 11 層・Ⅲ 12 層とともに S01 と一体的に造成されたとみられる。

Ⅲ 13 層～Ⅲ 18 層（第 255 図等）は、上位層の背後（南東側）に位置する。Ⅲ 13 層～Ⅲ 16 層は北西方向に落ち込むことなく水平気味に堆積しており、Ⅲ 17 層・Ⅲ 18 層は層中で発掘を停止しているため層の傾斜は明確ではないが、いずれも各層の北西端が斜面を形成している状況が窺える。Ⅲ 14 層･Ⅲ 15 層･Ⅲ 17 層には焼けた瓦片を多く含む。なおⅢ 17 層は北西側に明褐色砂や平円礫が混じり、細別できる可能性がある。

Ⅲ 19 層～Ⅲ 21 層（第 254 図等）は、景石 S03 下部背後（南東側）の断割で確認した。Ⅲ 12 層より下層であるが、Ⅲ 17 層との関係は明確ではない。黄褐色・黒褐色粘質土の互層をなし、水平気味に堆積して S03 下部に密着する。S03 の掘方内根固め層である可能性もあるが、S03 の配置と一体的に施工された造成土とみるのが妥当と思われる。

Ⅲ 14 層・Ⅲ 15 層・Ⅲ 17 層から出土した瓦は、丸瓦の切り離し痕はすべてコビキＡ技法による等、17 世紀初期以前の特徴を示す一方､火災により被熱し赤化した破片が多い。これらからⅢ層の施工は、近世初期でも築城当初に遡るとは考え難い。慶長７年（1602）もしくは元和６年（1620）の本丸火災以後と考えられる。

景石（第 257・258 図、写真第 267～269 図）

Ⅲ層斜面部分で原位置を保つ景石は、今回の調査で新たに確認した S01・S02（第 257 図）、平成 17 年度調査（2005-7 地点）で確認した S03（[石川県金沢城調査研究所 2014d] では 2005-7 地点 S01 として報告、第 258 図①）の都合３基である。ただしどの景石もトレンチ内での部分的な検出に留まり、全形は不明である。この他にⅡ層による埋め立て以前に動いたと考えられる景石 S04 がある。

原位置を保つ３石は、いずれも基礎が設置される土層面が異なる（第 258 ②図）。ただし前項で触れたように、S03 の高さは S01 の倍以上あり、上端レベルはほぼ同一となっている。また S02 下半は近接する S01 上半と同レベルの位置にあるが、S02 下半は地中に埋め込まれているので、視点にもよるが景観上の重複は顕著ではない。

[**S01**]（第 257 図①）

斜面中央付近、南壁側に位置する。奥行に乏しい板石状の立石で、検出部分の正面観は略方形状を呈し、約 16° 前方（斜面下方・北西側）に傾いて立つ。高さ 59cm 以上、幅 41cm 以上、厚さ（奥行）30cm を測る。表面の色調は灰色を呈し､側面･上面には層状の皺（節理面）が顕著に認められる。石質は安山岩（斜方輝石－オージャイト－安山岩）で､能登外浦に産出する福浦石とみられる（第４節）。

基礎については、Ⅲ 12 層まで掘り下げたが掘方は認められず、斜面の造成と一体的に配置されたとみられる。Ⅲ 11 層・Ⅲ 12 層以下の造成からすでに据えられ始め、背後（南東側）ではⅢ 9 層（黄褐色系の粘土層）・Ⅲ 6 層により中部付近まで、より高所の S02 が配置された後Ⅲ 3 層によって上部近くまで埋められている（第 255 図）。前方（北西側）はⅢ 2 層がわずかに（厚さ５cm 程度）接しているだけで、庭園機能時には正面の大部分が露呈していたとみられる。

[**S02**]（第 257 ②図）

最上部からやや下がった斜面上方、トレンチ南壁側に位置する。側面付近のごく一部が検出できただけで、大部分が調査区外に延長する。形状は明確ではないが、丸みのある平石で、上面はⅢ層と並行して緩やかに傾斜している。高さ 66cm 以上､幅 17cm 以上､奥行 93cm 以上を測る。表面が淡黄褐色、側面・割面は灰白色の色調を呈し、目立った凹凸のない平滑な花崗岩（黒雲母－花崗岩）で、能登地方・羽咋市周辺に産出する滝石とみられる（第４節）。

Ⅲ 6 層を基盤とする掘方を有し、工程上 S01 より後に配置されたことが判明している（第 255 図）。掘方内は黄褐～褐色粘質土（Ⅲ 4 層）で充填されており、検出部分では根固め礫は見られない。なお S01 との間をⅢ 3 層で埋め立てられることにより、本体前面の急な立ち上がり部分は地中となる。この結果、庭園機能時の S02 の露呈部分はほぼ上面のみ（高さ約 27cm）となっている。

[**S03**]（第 258 図①）

斜面下方、トレンチ北壁側に位置する。奥行の乏しい板石状の立石である。調査区外の部分が大きいと考えられ全体形状は明確ではない。約 12° 後方（斜面上方・南東側）に傾いて立つ。高さは 153cm 以上､幅 58cm 以上あるが､厚さ（奥行）21cm とたいへん薄い。石質は赤色を呈する戸室石（角閃石安山岩）で、側面に層状の皺（節理面）が顕著に認められる。背面上部に残る矢穴からみて盤状に割り取られた石材である。

石材は南側側面中央から北側（調査区壁側）下方に向けて上下に割れており、若干のずれが認められる。平成 17 年度調査では、S03 の上半が、近代以降一旦掘り出された形跡があることから、この時の攪乱により折損した可能性を念頭に置いていたが、今回改めて背面を精査した結果、矢穴を確認

し、割れは意図的な分割によるものであることが判明した（第 258 図①下段）。矢穴は半割状のものが上石・下石それぞれ２箇所、合計４箇所認められるが、上石矢穴（①・②）の規模（矢口長 11～12cm）や矢穴間の距離（10cm）は、下石矢穴（③・④）のそれとほぼ一致しており、元は２箇所に穿たれた矢穴（①－③、②－④）であって、石材の割り取りにより分離されたものと判断される。

このことから、S03 は産出地で母岩から採取された後更に小割され、その状態で城内東ノ丸に搬入され、景石として配置されるに際し改めて組み直されたと考えられる。

S03 の下端は未検出であるが、上端から 1.2～1.3 m下位の土層面においても掘方は確認できず、斜面の造成と一体的に配置された可能性が高い。Ⅲ 21 層以下の造成から据えられ、Ⅲ 20 層・Ⅲ 21 層により背後下部、Ⅲ 1 層により中部まで埋められている。なお上記の矢穴はⅢ 1 層により覆われている。庭園機能時は、背面高さ約 60cm、前面高さ約 150cm 分が露呈していたとみられる。

［**S04**］（第 252・253・254 図、写真第 269 図）

斜面下方、トレンチ北壁側に位置する。S03 のすぐ後方（南東側）にあり、最も近接している箇所では 20cm しか離れていない。全形は不明であるが、厚みのある塊状を呈し、検出部分の大きさは高さ 60cm、幅 42cm、厚さ（奥行）49cm を測る。色調は淡黄灰色で、径５cm 台までの礫が多く含まれる硬い石質である。岩石種はスコリア凝灰岩で、やや質感は異なるが滝坂石の可能性がある（第４節）。

Ⅲ 1 層・Ⅲ 2 層にやや食い込む形ではあるが、基礎が十分に埋め込まれている状態ではなく、上面に乗っているものと看取される。S03 にほとんど隠れてしまう位置とも併せ、原位置を保っているとは考えられない。ただし S03 との狭い空隙はⅡ層で埋め込まれているので、近代以後の攪乱によるのではなく、庭園の廃絶後、埋め立てまでの間に原位置から移動したと判断される。

なお S04 のように原位置から遊離した状態でⅡ層中に含まれる景石は、2005-7 地点でも認められる。

Ⅱ層（第 254・255 図）

Ⅲ層斜面全体を覆い、埋め立てている土層である。2005-7 地点の堆積状況と併せて復元すると、瓦等をさほど含まないⅡ 1 層～Ⅱ 8 層が、Ⅲ層斜面の景石 S01 ～ S02 間まで及んでいたと推定される。ただしⅢ層斜面に反映される落ち込み自体を水平に均すまでには至らず、Ⅲ層上面より緩やかな斜面を形成するに留まっている。

2014-2 地点側では、近代の掘り込みにより上面（埋め立て後の遺構面）が失われていたが、下部の土層堆積状況を明確にすることができた。Ⅲ層斜面･景石を直接覆っている土層（Ⅱ 9 層～Ⅱ 13 層）は、瓦・板状石材を多量に含む土層（Ⅱ 9 層・Ⅱ 12 層）とあまり含まない土層（Ⅱ 10 層・Ⅱ 11 層・Ⅱ 13 層）に大別される。Ⅱ 9 層・Ⅱ 12 層は間にⅡ 11 層が介在するが、出土した瓦の様相、また接合資料の点から、その上下関係は同時期施工の順序の差として理解される。

Ⅱ層での下部と上部との関係については、出土した瓦の時期相に違いが見られないこと、景石を覆うⅡ 9 層がそのまま露呈していたとは考え難いこと、とくに景石 S03 についてはⅡ 9 層のみの被覆では強い段差が生じ不自然であること（第 254 図）等から、一体的に施工されたと判断される。

主にⅡ 9 層･Ⅱ 12 層で出土した瓦は、被熱･赤化したものが見られないが、従前より寛永８年（1631）大火前後に位置づけられていた廃棄資料と同様の特徴をもつ。このことから、Ⅲ層斜面に反映される庭園遺構面は、寛永８年（1631）の大火を契機に埋め立てられたと考えられる。

Ⅰ層・近代以後の掘り込み（第 254・255 図）

2014-2 地点・2005-7 地点の境付近では近代以降の掘り込みが幾つか重複しており、Ⅱ層に対する攪乱が著しい。とくに景石 S03 は正面上半が露呈するまで一旦掘り返されている。

（4）出土遺物（第259～262図：実測図等、第51～56表：観察表等、第270～272図：写真）

Ⅲ層

Ⅲ層からは陶磁器・瓦・石製品・金属製品が出土しているが、掘削範囲が小さいこともあり、いずれも少量である。第259図P19～P21は陶磁器で、P19は中国磁器青花碗、P20は備前陶器瓶、P21は信楽陶器壺である。T16～T21は燻瓦である。焼成がやや不良であるためか、表面がにぶい黄橙色、あるいは器壁中心部が黒褐色を呈するものが見られる。T16～T18は丸瓦で、いずれも内面の粘土切り離し痕はコビキAを示す。T19～T21は平瓦で、T19・T21の器壁は2.4cmと厚い。第261図M02は鉛塊、S02は凝灰岩製の小型鉢である。

Ⅱ層

陶磁器は少量であるが、瓦は比較的多く出土している。ただし完形に復元できるものは少ない。この他板状石材、戸室石残欠等が伴出した。なお瓦について、Ⅱ9層とⅠ14層とを混同して取り上げてしまったものが多いが、ごく少量の釉薬瓦片等を除き、ほとんどがⅡ9層に帰属するとみられる。

第259図P22～P25は陶磁器で、P22は瀬戸・美濃陶器天目茶碗、P23は越前陶器擂鉢、P24・P25は土師器皿である。P24・P25は平坦な底部から短い体部が立ち上がるC2Ⅰ1類で、中でもP25の形状は寛永8年（1631）前後によくみられる。

第259図T22～第261図T43は瓦である。T22は軒平瓦で、瓦当文は花文である。本丸周辺ではこのタイプは多くないが、東ノ丸丑寅櫓東側2003-3地点出土の寛永8年（1631）大火廃棄資料等に見られる［石川県金沢城調査研究所2008d］。本調査地点の燻瓦で瓦当文が判明するものはこの1点のみである。

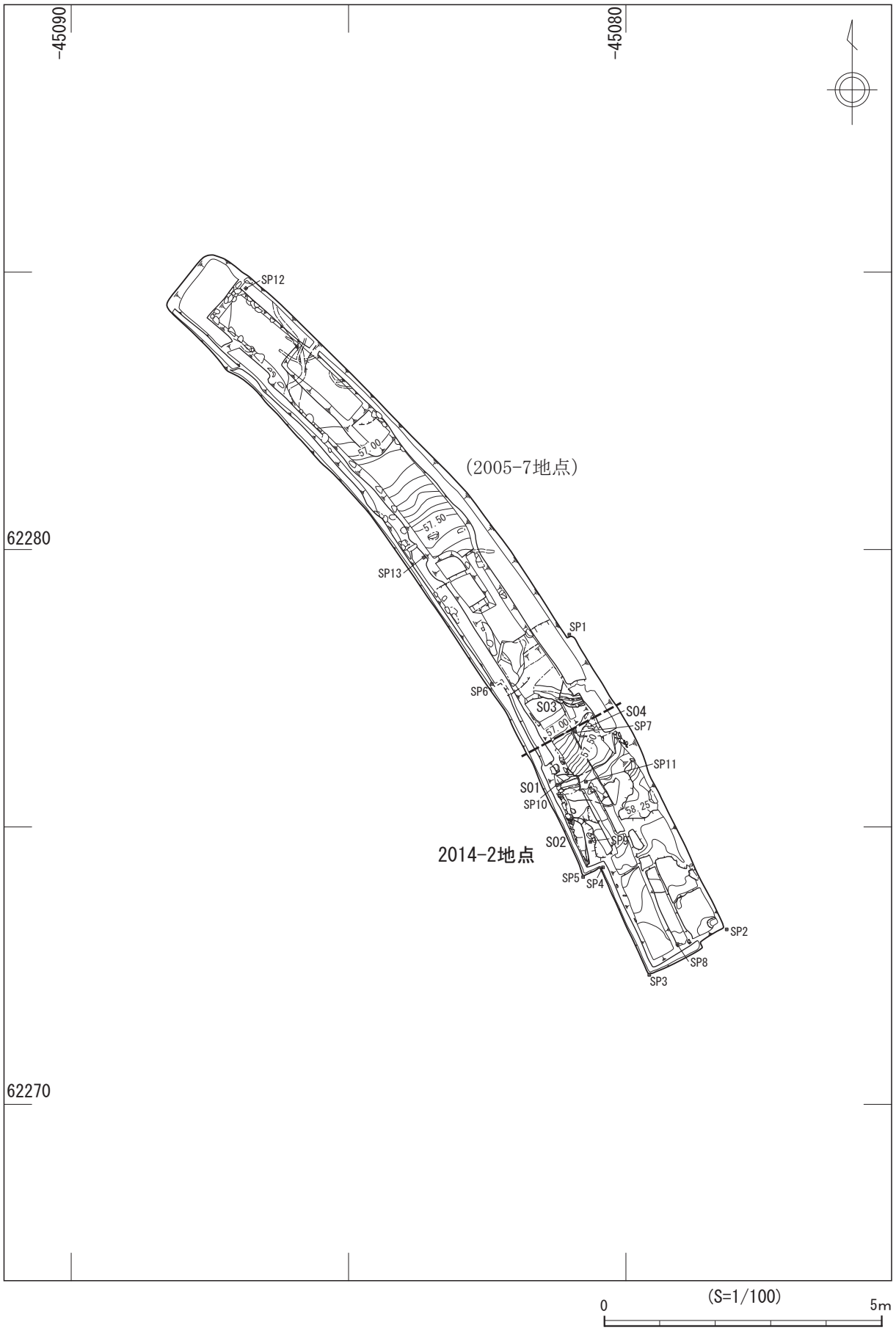
第259図T23～第260図T32は丸瓦である。いずれも内面の粘土切り離し痕はコビキBを示す。第261図T33～T43は平瓦である。完形に復元できるものはないが、T35は広端幅、T33・T34は全長が判明しており、それぞれ26cm・28.7cm・29.3cmを測る。狭端面（前方）が残るものは、いずれもミガキ状の平滑調整を呈し、端面縁は丸みを帯びず、比較的強い稜を成している。上面側には横方向・幅広のナデ状調整痕が見られる。

第56表・第262図は、丸瓦切り離し痕及び平瓦の器厚について、Ⅱ層・Ⅲ層出土資料を対比したものである。丸瓦においては、Ⅲ層はコビキA、Ⅱ層はコビキBが主体である。平瓦の器厚に関しては、Ⅲ層が薄手から厚手まで散漫に分布するのに対し、Ⅱ層・2005-7地点Ⅲ層は20～23mmに集中する傾向が認められる。Ⅱ層出土の瓦は、全般に2002-7地点Ⅵ層、2004-1地点SK11等［石川県金沢城調査研究所2008d P269］と特徴が類似しており、同じく寛永8年（1631）大火に伴い廃棄されたものと考えられる。ただしⅡ層出土資料は被熱の痕跡が見られない。憶測になるが、強い熱を受けなかった一群がまとめて廃棄された箇所を調査したものと解しておきたい。

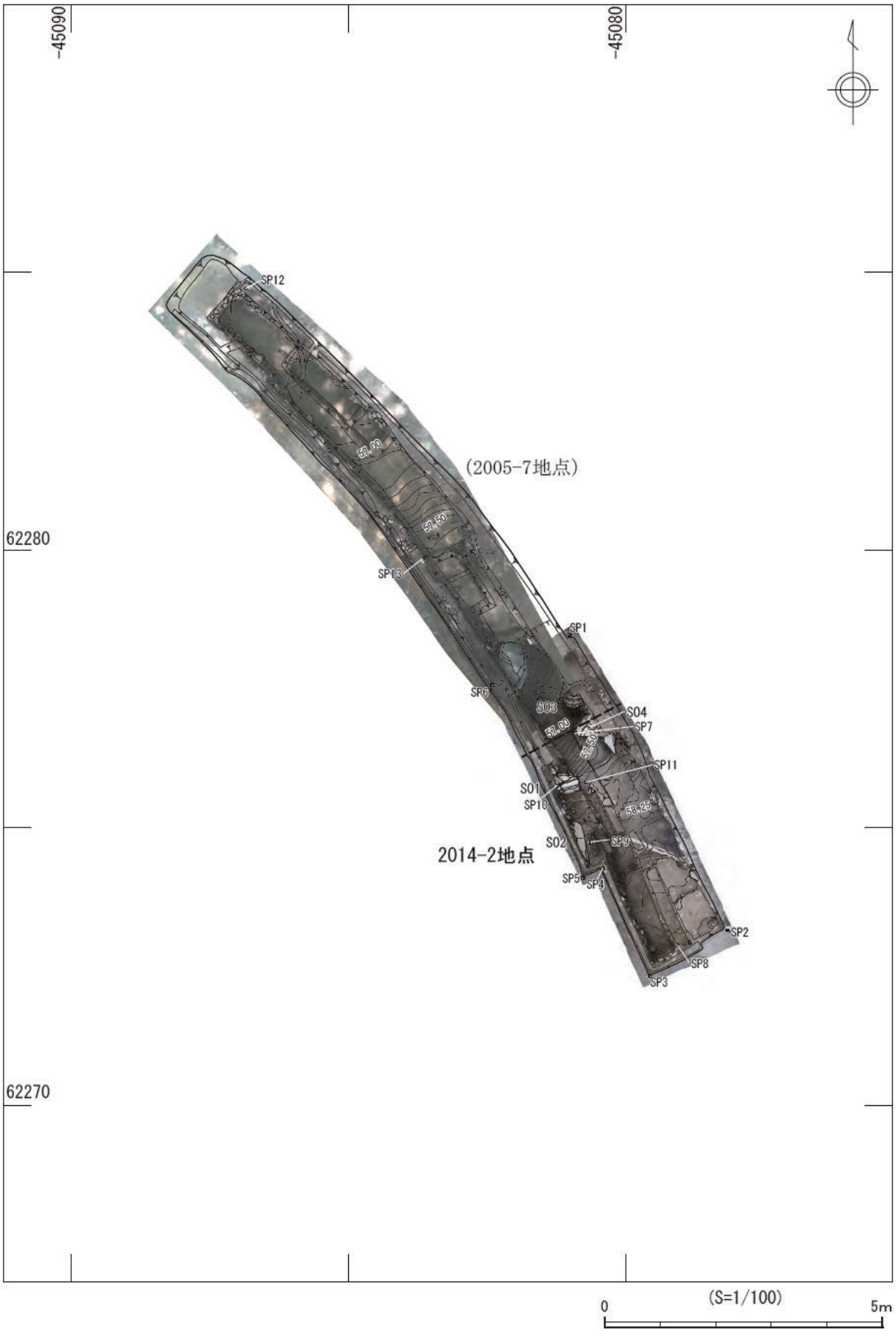
（5）小結

2014-2地点は、2005-7地点で確認した遺構（景石・斜面等）の南東方向への延長を追求する目的で設定した。

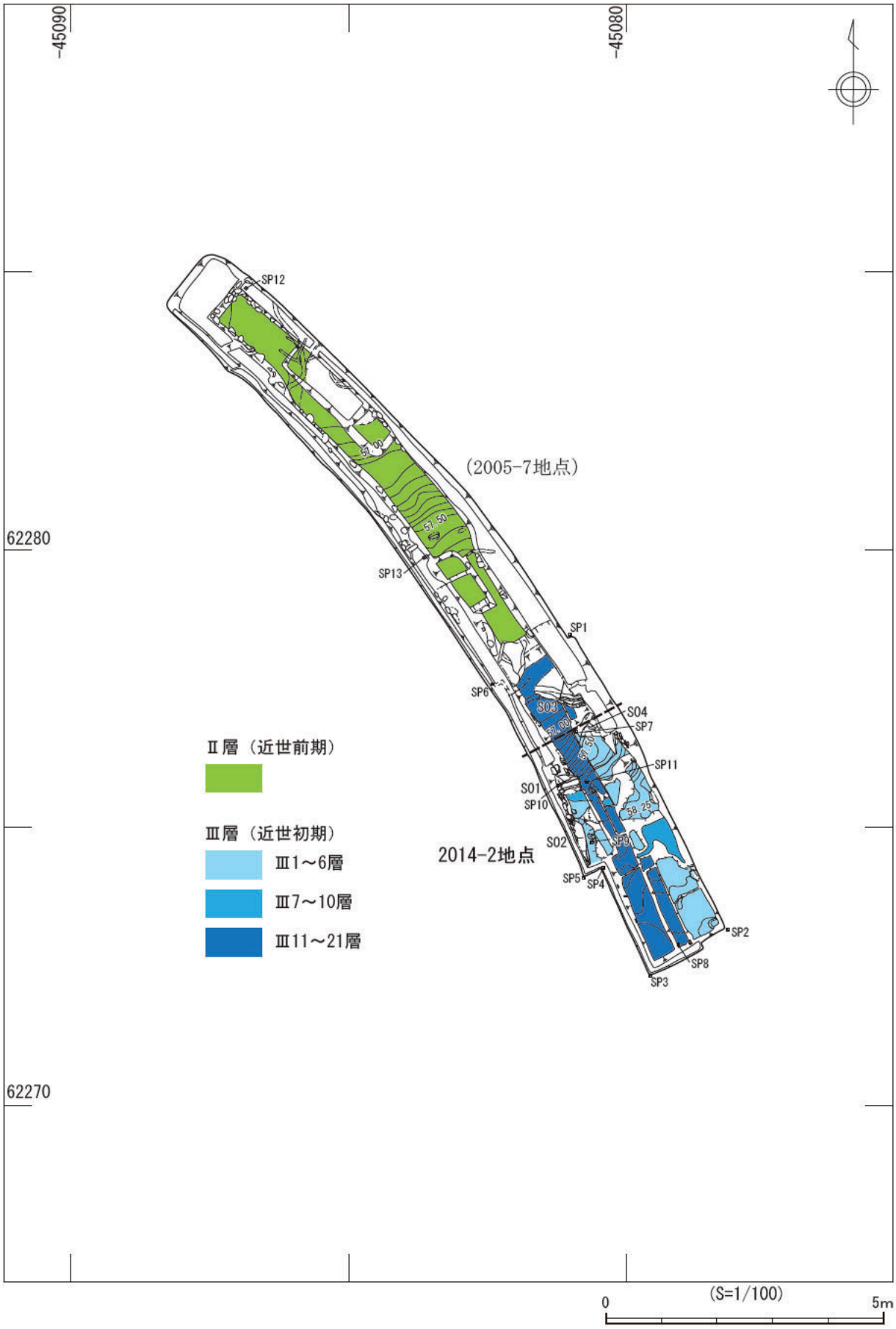
調査の結果、新たに原位置を保つ景石を2基確認し、南東から北西方向に下降する斜面＝庭園遺構面の在り方が明確になるとともに、景石の構造や土層の形成について、2005-7地点の調査報告所見を一部改めることともなった。景石については、戸室石や、滝石・福浦石とみられるもの等、後代の庭園に継承される多様な組み合わせが認められた。斜面については、池法面の一部（延長）である可能性が考えられる。斜面の造成は、土層に焼土が混じることや、出土した瓦の特徴等から、17世紀初頭から元和6年（1620）頃までの間に行われたと考えられる。また庭園遺構の廃絶は、埋立土（Ⅱ層）に混じる瓦の特徴から、寛永8年（1631）の大火を契機としたと考えられる。



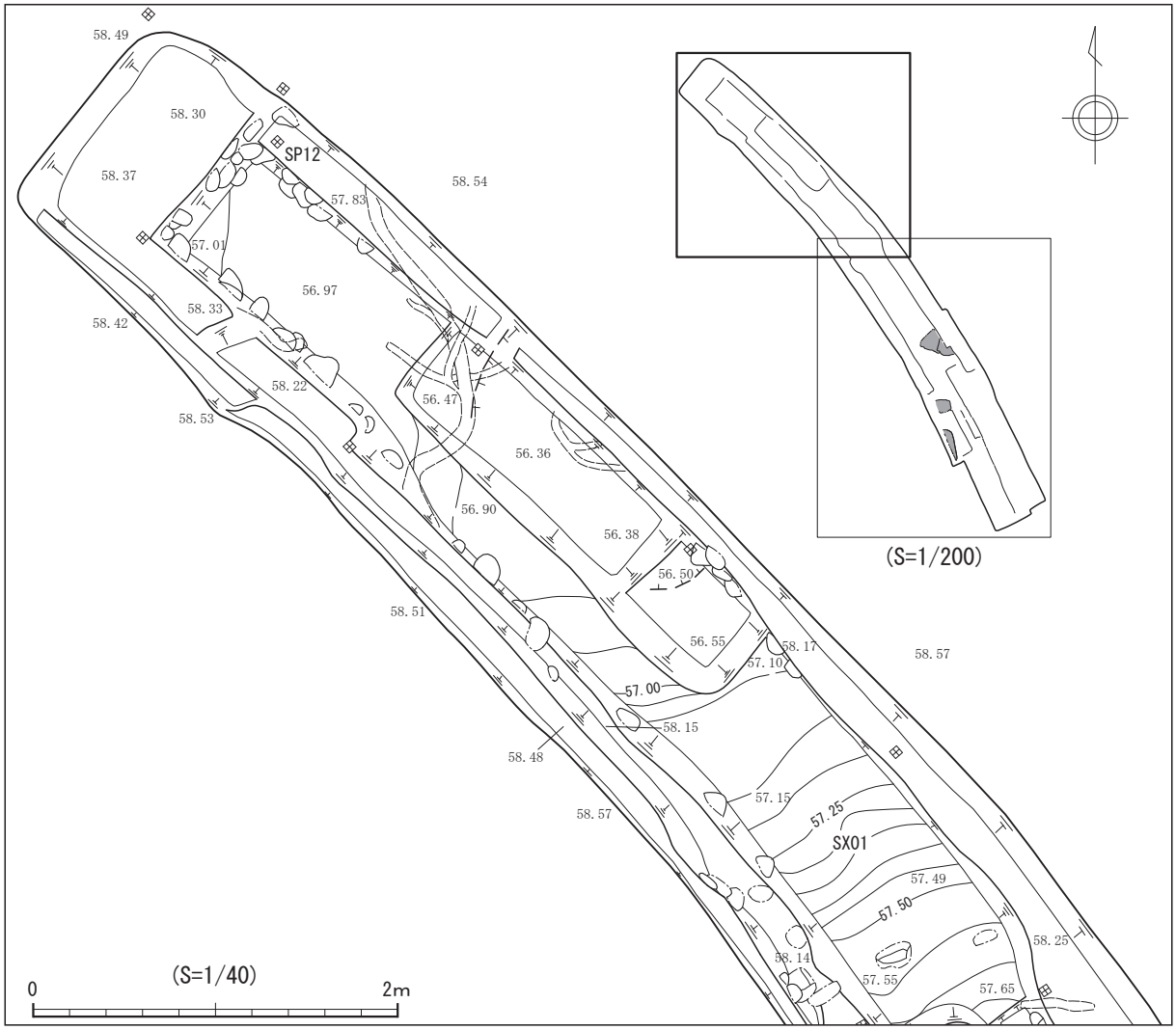
第 248 図　2014-2 地点・2005-7 地点　調査地点平面図



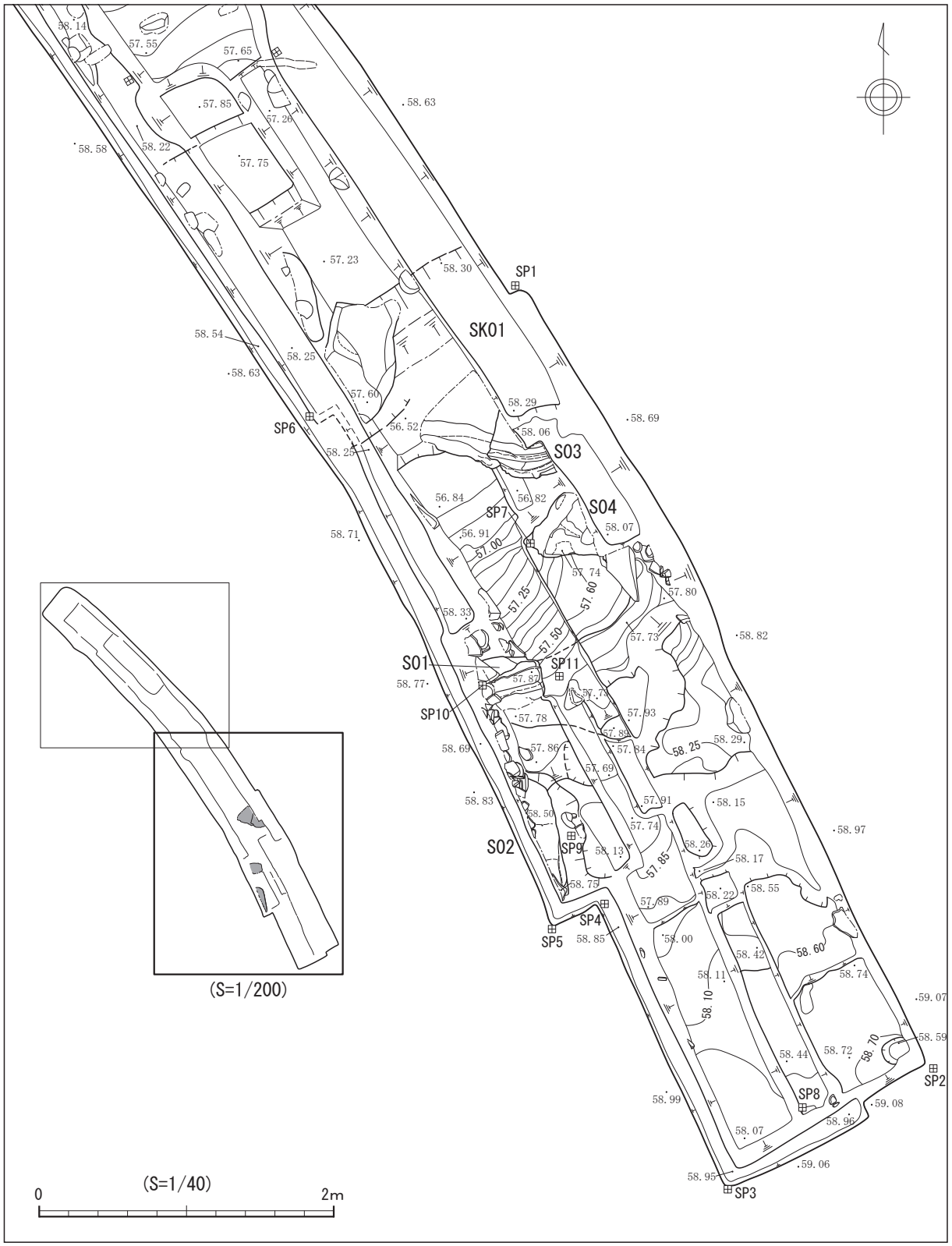
第 249 図　2014-2 地点・2005-7 地点　調査地点平面図・垂直写真



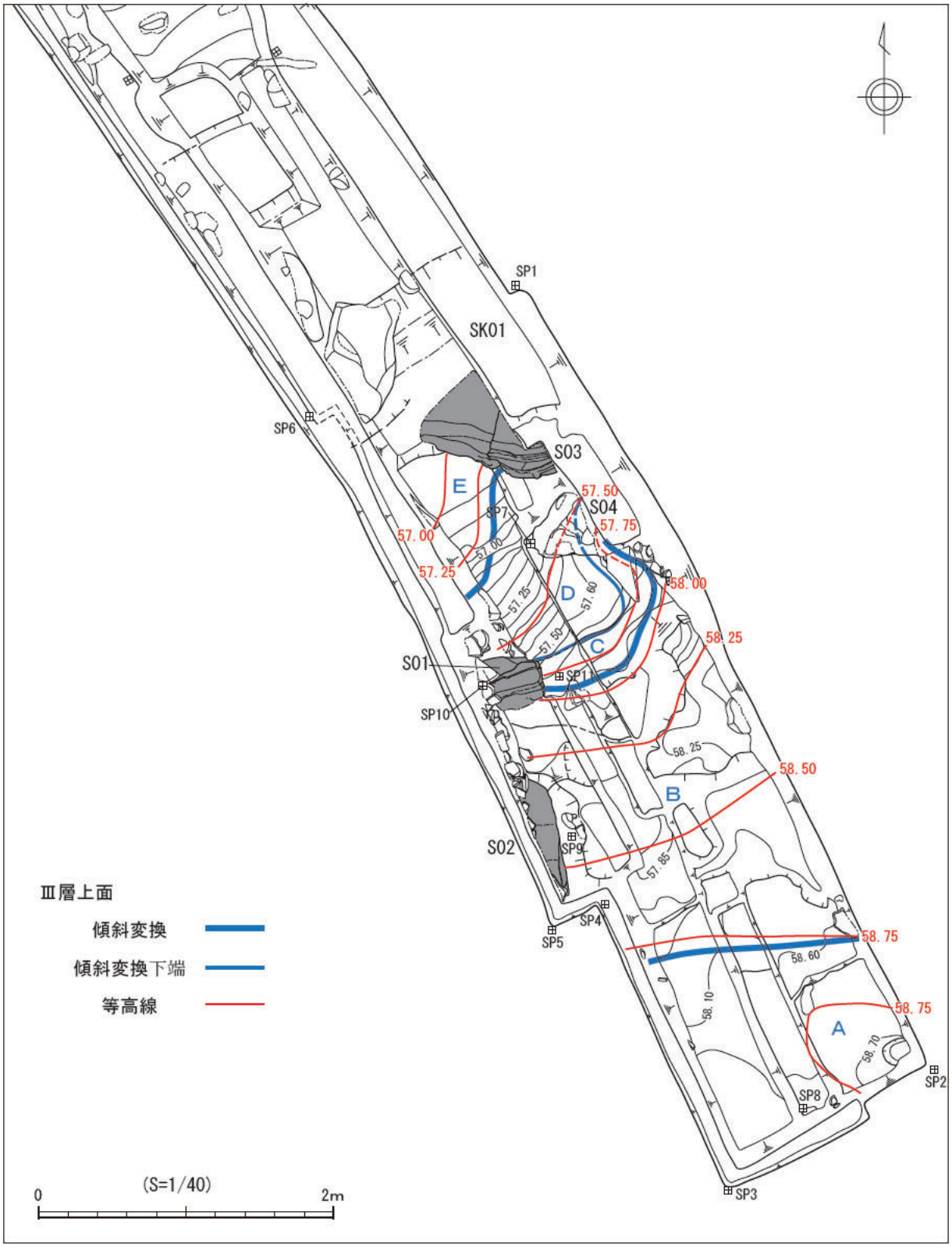
第 250 図　2014-2 地点・2005-7 地点　検出面色分け図



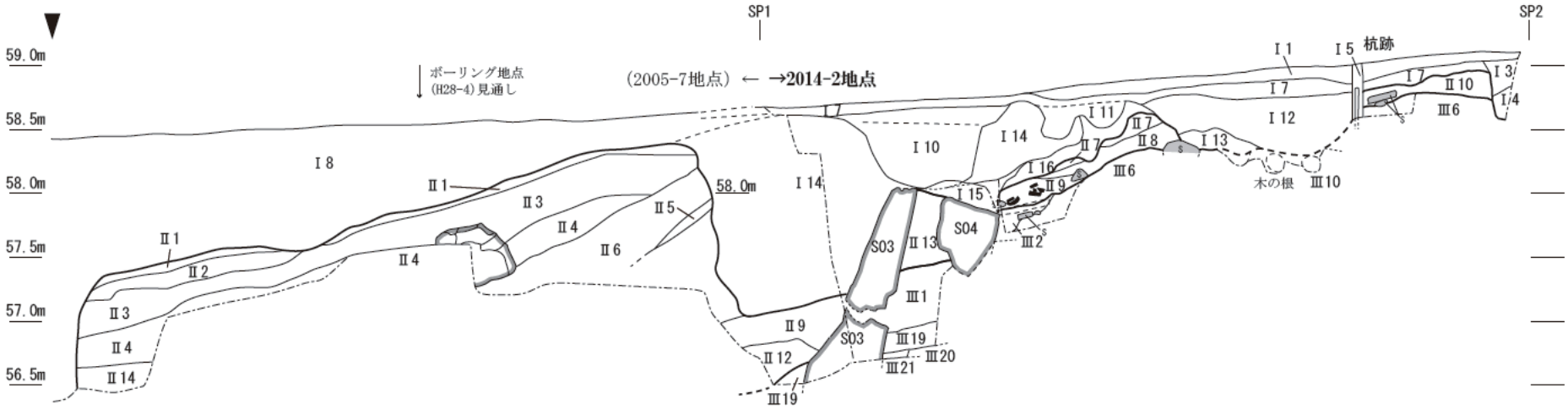
第 251 図　2014-2 地点・2005-7 地点　調査地点北部平面図

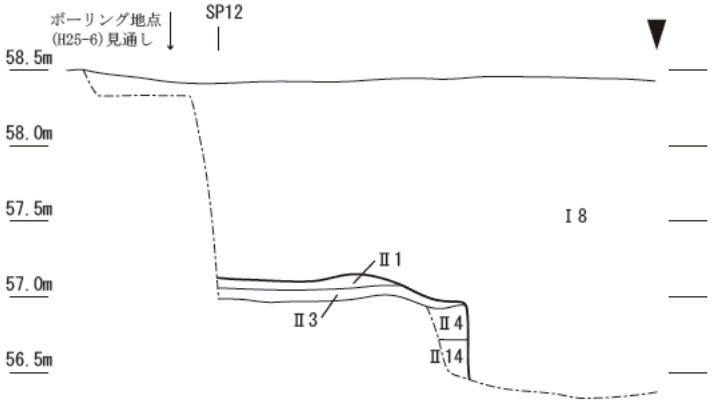


第 252 図　2014-2 地点・2005-7 地点　調査地点南部平面図



第 253 図　2014-2 地点・2005-7 地点　調査地点南部平面図　Ⅲ層上面の状況





Ⅰ：近代

Ⅰ1　（豆砂利、腐植土層）
Ⅰ3　10YR3/3 暗褐色砂質土
Ⅰ4　10YR6/3・5/3・4/3 にぶい黄橙～にぶい黄褐色砂質土（地盤改良剤？混じる）
Ⅰ5　10YR3/3～3/4 暗褐色砂質土（腐植土質）
Ⅰ7　10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色砂質土（表面近く黒褐色を呈する、旧表土）
Ⅰ8　暗茶褐色砂質土（上部腐植土化）
Ⅰ10　10YR3/3 暗褐色砂質土（近代土坑埋土　1～3cm大・10cm大の礫多く混じる、腐植土質、鉄片等包含）
Ⅰ11　10YR3/3 暗褐色砂質土（10cm大の礫・燻瓦片混じる、しまり悪い）
Ⅰ12　10YR3/3 暗褐色砂質土（比較的均質、ややしまる）
Ⅰ13　10YR2/2 黒褐色砂質土（しまり悪くもろい）
Ⅰ14　10YR3/3 暗褐色砂質土（黄褐色細粒混じる、色調やや明るい、ややしまる）
Ⅰ15　10YR4/6・3/3　褐色粘～砂質土・暗褐色砂質土（混土状、10YR5/6 黄褐色粘土ブロック（2～3cm大）若干混じる）
Ⅰ16　10YR2/3 黒褐色粘～砂質土（黄褐色小粒若干混じる）

Ⅱ：近世

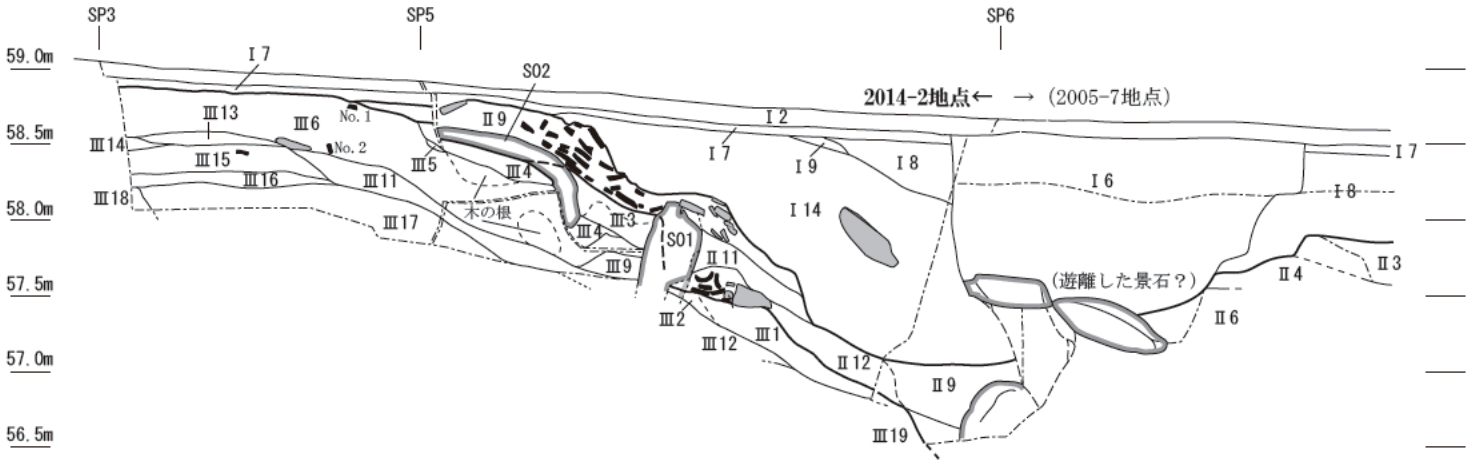
Ⅱ1　黒褐色粘～砂質土
Ⅱ2　暗黄灰褐色粘～砂質土
Ⅱ3　濁黄褐色粘～砂質土（黄褐色土塊多く混じり主体をなす、暗黄灰褐色土と混合）
Ⅱ4　灰黄褐色粘～砂質土（黄褐色粘土塊、灰黄褐色砂質土等で構成　焼土若干混じる）
Ⅱ5　灰黄褐色粘質土（層状ブロック）
Ⅱ6　暗灰茶褐色粘～砂質土（黄褐色粘質土・砂質土小塊（径1～2cm)多く混じる、径1cm以下の焼土塊若干混じる）
Ⅱ7　10YR4/3～4/4 にぶい黄褐～褐色シルト質土（暗褐色土若干混じる、均質）
Ⅱ8　10YR3/3・5/6 暗褐色粘質土・黄褐色粘質土（混土層、モザイク状に混じる）
Ⅱ9　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐色粘～砂質土（暗褐色土をベースとし、黄褐色粘質土が混じる。瓦・板状石材極めて多く混じる）
Ⅱ10　10YR3/3 暗褐色粘～砂質土（不定形黄褐色粘質土小ブロック若干混じる。一部（北壁）で板状石材混じる）
Ⅱ11　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐色粘～砂質土（Ⅱ9層と土質類似、黄褐色粘質土の割合高い。瓦・板状石材少ない）
Ⅱ12　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐色粘～砂質土（Ⅱ11層と土質類似、瓦・板状石材極めて多く混じる）
Ⅱ13　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐色粘～砂質土（景石間の土、しまり悪くもろい）
Ⅱ14　10YR2/2～2/3 黒褐色粘質～シルト質土(Ⅲ2層に類似した質感を呈する）

Ⅲ：近世初期

Ⅲ1　10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色シルト質土（均質、10YR2/2・10YR5/8 黒褐・黄褐色粘質土ブロック若干混じる）
Ⅲ2　10YR2/2～2/3 黒褐色粘質～シルト質土（均質、Ⅲ1層に比べ粘性高く暗い色調）
Ⅲ6　10YR3/3 暗褐色粘～砂質土（しまりやや悪い、10YR5/6 黄褐色粘土ブロック（径5cm大）散在）
Ⅲ10　10YR3/4 暗褐色シルト質土（均質）
Ⅲ19　10YR5/6～4/6・10YR4/3～4/4 黄褐～褐色砂質土・にぶい黄褐～褐色砂質土（大きなブロック単位の混土層か）
Ⅲ20　10YR3/2 黒褐色粘質土（しまり悪くもろい）
Ⅲ21　10YR5/4～5/6 にぶい黄褐～黄褐色粘土（10YR7/1 灰白色粘土ブロック、1～2cm大の礫若干混じる。Ⅲ7・9層に比べて若干粘性低い。S03に密着）

0　(S=1/50)　2m

第 254 図　2014-2 地点・2005-7 地点　東壁土層断面図



Ⅰ：近代

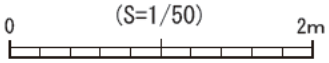
Ⅰ2　（クリカラ砂）
Ⅰ6　暗褐色砂質土（径3～10cmの礫多く混じる　近代土坑埋土）
Ⅰ7　10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色砂質土（表面近く黒褐色を呈する、旧表土）
Ⅰ8　暗茶褐色砂質土（上部腐植土化）
Ⅰ9　褐色粘質土（層状ブロック）
Ⅰ14　10YR3/3 暗褐色砂質土（黄褐色細粒混じる、色調やや明るい、ややしまる）

Ⅱ：近世

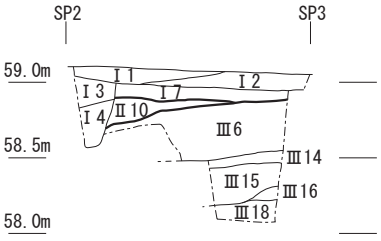
Ⅱ3　濁黄褐色粘・砂質土（黄褐色土塊多く混じり主体をなす、暗黄灰褐色土と混合）
Ⅱ4　灰黄褐色粘・砂質土（黄褐色粘土塊、灰黄褐色砂質土等で構成　焼土若干混じる）
Ⅱ6　暗灰茶褐色粘・砂質土（黄褐色粘質土・砂質土小塊（径1～2cm）多く混じる、径1cm以下の焼土塊若干混じる）
Ⅱ9　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐色粘～砂質土（暗褐色土をベースとし、黄褐色粘質土が混じる。瓦・板状石材極めて多く混じる）
Ⅱ11　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐色粘～砂質土（Ⅱ9層と土質類似、黄褐色粘質土の割合高い。瓦・板状石材少ない）
Ⅱ12　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐色粘～砂質土（Ⅱ11層と土質類似、瓦・板状石材極めて多く混じる）

Ⅲ：近世初期

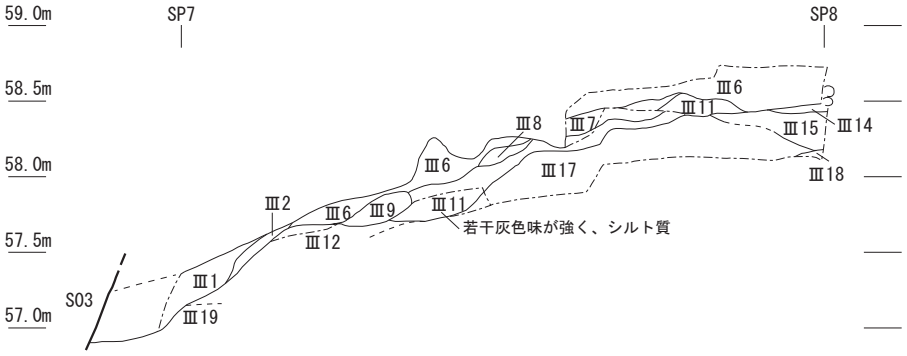
Ⅲ1　10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色シルト質土（均質、10YR2/2・10YR5/8 黒褐・黄褐色粘質土ブロック若干混じる）
Ⅲ2　10YR2/2～2/3 黒褐色粘質～シルト質土（均質、Ⅲ1層に比べ粘性高く暗い色調）
Ⅲ3　10YR3/3・3/2・5/6 暗褐色粘～砂質土・黒褐色粘質土・黄褐色粘質土（混土、暗褐色土は上部に多い、黒褐色・黄褐色土は特にモザイク状）
Ⅲ4　10YR5/6～4/4 黄褐～褐色粘質土（SO2掘方埋土　10YR2/2 黒褐色粘質土・10YR3/3 暗褐色粘～砂質土ブロック状に混じる、ベースは赤味強い）
Ⅲ5　10YR2/3 黒褐色粘質土（SO2掘方埋土　黄褐色土小ブロック若干混じる）
Ⅲ6　10YR3/3 暗褐色粘～砂質土（しまりやや悪い、10YR5/6 黄褐色粘土ブロック（径5cm大）散在）
Ⅲ11　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐色砂質土（焼土片若干混じる、ややしまる）※土質は必ずしも均質ではなく、細別の可能性もあるが、粘土層の下位層として一括
Ⅲ12　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐色砂質土（焼土片・炭片・数ミリ～2cm大の小礫・黄褐色土小粒等多く混じる、総じてモザイク状を呈する、硬くしまる）
Ⅲ13　10YR3/3 暗褐色粘質土（10YR2/3 黒褐色粘質土若干混じる）
Ⅲ14　10YR2/2 黒褐色粘質土（10YR4/6・10YR5/6 褐色・黄褐色粘土多く混じる、東端では上部に焼けた瓦片多く混じる）
Ⅲ15　10YR3/3 暗褐色粘～砂質土（焼土もしくは焼けた瓦片多く混じる）
Ⅲ16　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐色粘～砂質土（10YR5/6 黄褐色粘土ブロック・小粒混じり、全体に上層に比べ若干明るい色調を呈する）
Ⅲ17　10YR3/3 暗褐色砂質土（東部では全体に暗い色調であるが、西部では焼土・焼けた瓦の小片の他、明褐色砂粒（7.5YR5/8）、砂粒に包含されるように4～5cm大の平円礫が上部主体に混じる）
Ⅲ18　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（暗褐色土のベースに黄褐色土砂粒がモザイク状に混じる、全体としてにぶい黄褐色を呈する）
Ⅲ19　10YR5/6～4/6・10YR4/3～4/4 黄褐～褐色砂質土・にぶい黄褐～褐色砂質土（大きなブロック単位の混土層か）



第255図　2014-2地点・2005-7地点　西壁土層断面図



①2014-2地点 南壁



②2014-2地点 中央断割東壁

Ⅰ：近代以降

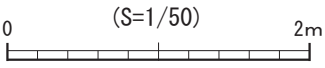
Ⅰ1　（豆砂利、腐植土層）
Ⅰ2　（クリカラ砂）
Ⅰ3　10YR3/3 暗褐色砂質土
Ⅰ4　10YR6/3・5/3・4/3 にぶい黄橙～にぶい黄褐色砂質土（地盤改良剤？混じる）
Ⅰ7　10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色砂質土（表面近く黒褐色を呈する、旧表土）

Ⅱ：近世

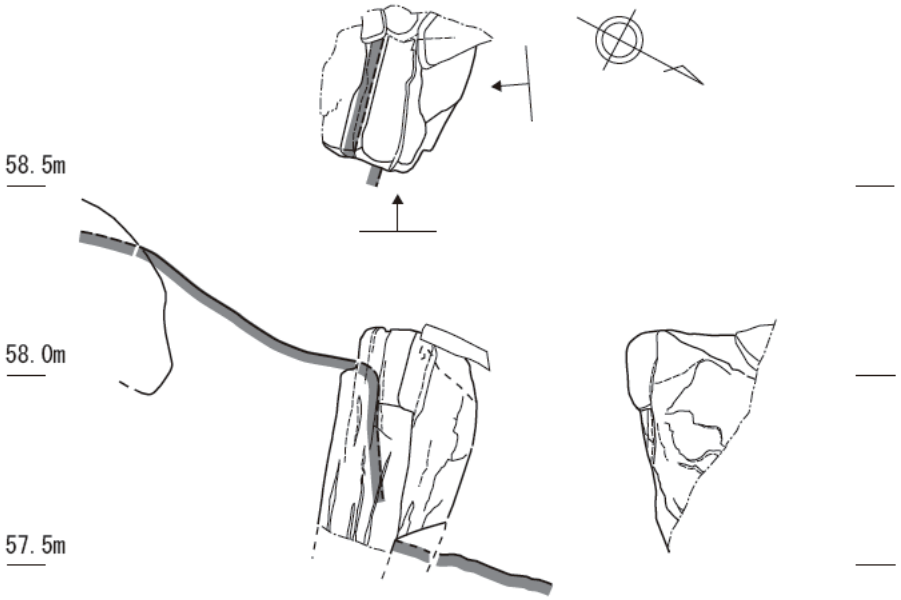
Ⅱ10　10YR3/3 暗褐色粘～砂質土（不定形黄褐色粘質土小ブロック若干混じる。一部（北壁）で板状石材混じる）

Ⅲ：近世初期

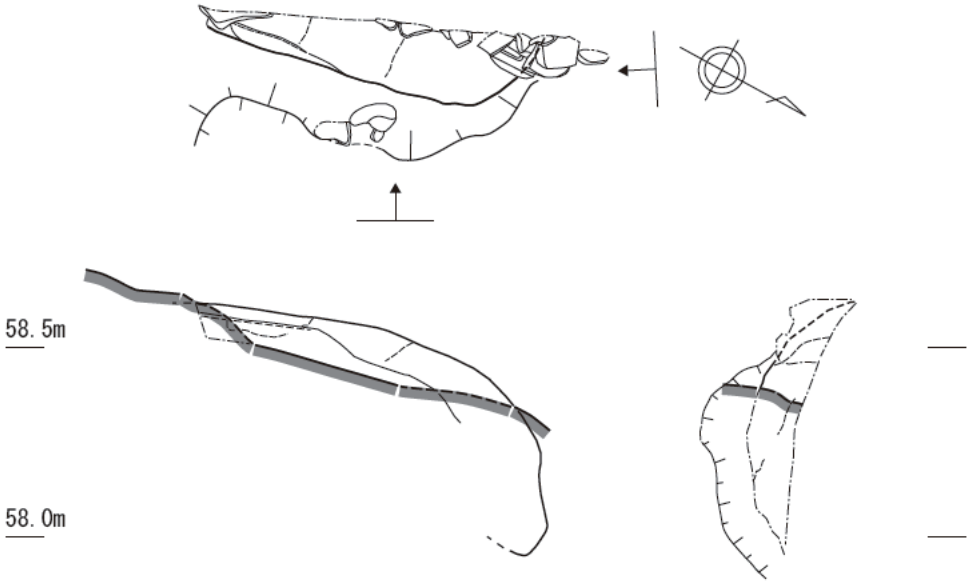
Ⅲ1　10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐色シルト質土（均質、10YR2/2・10YR5/8 黒褐・黄褐色粘質土ブロック若干混じる）
Ⅲ2　10YR2/2～2/3 黒褐色粘質～シルト質土（均質、Ⅲ1層に比べ粘性高く暗い色調）
Ⅲ3　10YR3/3・3/2・5/6 暗褐色粘～砂質土・黒褐色粘質土・黄褐色粘質土（混土、暗褐色土は上部に多い、黒褐色・黄褐色土は特にモザイク状）
Ⅲ6　10YR3/3 暗褐色粘～砂質土（しまりやや悪い、10YR5/6 黄褐色粘土ブロック（径5㎝大）散在）
Ⅲ7　10YR5/6 黄褐色粘土（比較的均質、10YR3/2～2/2 黒褐色粘土ブロック若干混じる）
Ⅲ8　10YR5/6・4/3・2/3 黄褐・にぶい黄褐・黒褐色粘質～粘土（混土、Ⅲ7・Ⅲ9に比べ混合度高い）
Ⅲ9　10YR5/4～5/6 にぶい黄褐～黄褐色粘土（均質、炭片混じる、S01背後では（5㎝大の礫含む）黒褐・暗褐色粘質～粘土混じる）
Ⅲ11　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐色砂質土（焼土片若干混じる、ややしまる）※土質は必ずしも均質ではなく、細別の可能性もあるが、粘土層の下位層として一括
Ⅲ12　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐色砂質土（焼土片・炭片・数ミリ～2㎝大の小礫・黄褐色土小粒等多く混じる、総じてモザイク状を呈する、硬くしまる）
Ⅲ14　10YR2/2 黒褐色粘質土（10YR4/6・10YR5/6 褐色・黄褐色粘土多く混じる、東端では上部に焼けた瓦片多く混じる）
Ⅲ15　10YR3/3 暗褐色粘～砂質土（焼土もしくは焼けた瓦片多く混じる）
Ⅲ16　10YR4/3～3/3 にぶい黄褐～暗褐色粘～砂質土（10YR5/6 黄褐色粘土ブロック・小粒混じり、全体に上層に比べ若干明るい色調を呈する）
Ⅲ17　10YR3/3 暗褐色砂質土（東部では全体に暗い色調であるが、西部では焼土・焼けた瓦の小片の他、明褐色砂粒（7.5YR5/8）、砂粒に包含されるように4～5㎝大の平円礫が上部主体に混じる）
Ⅲ18　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（暗褐色土のベースに黄褐色土砂粒がモザイク状に混じる、全体としてにぶい黄褐色を呈する）
Ⅲ19　10YR5/6～4/6・10YR4/3～4/4 黄褐～褐色砂質土・にぶい黄褐～褐色砂質土（大きなブロック単位の混土層か）



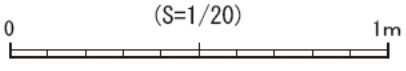
第256図　2014-2地点　南壁・中央断割西壁土層断面図



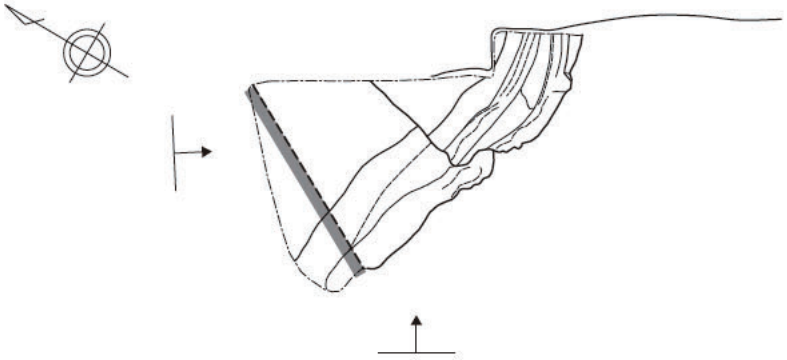
①景石 S01 平面図・立面図

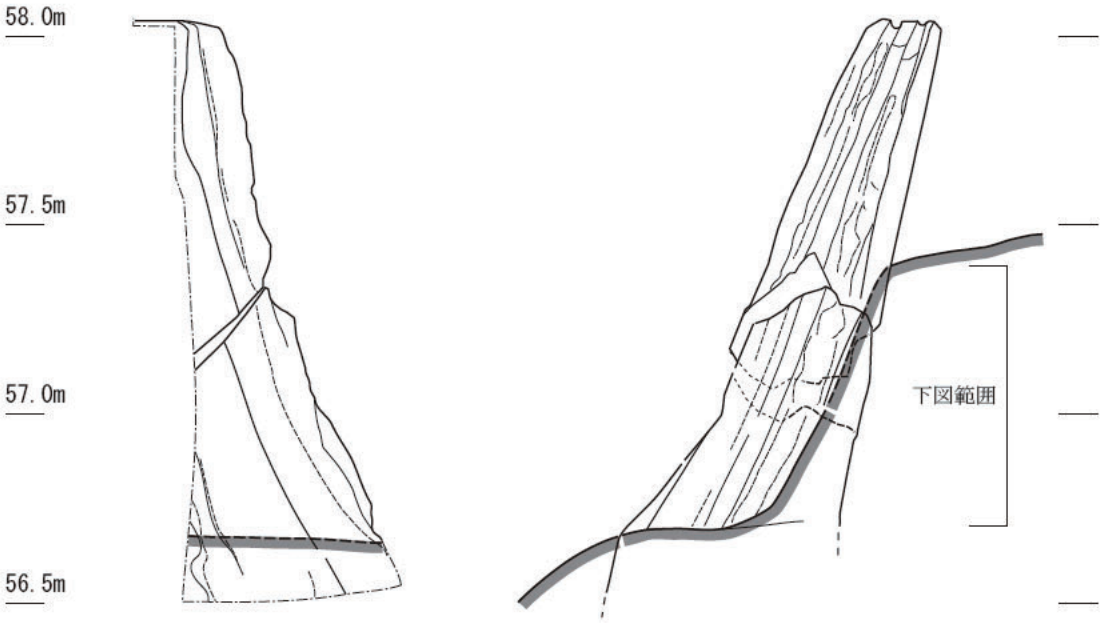


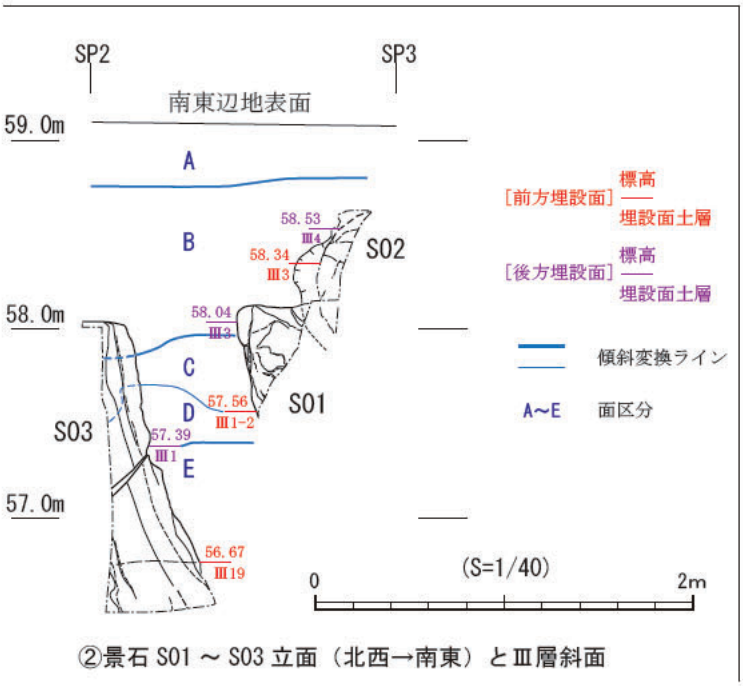
②景石 S02 平面図・立面図



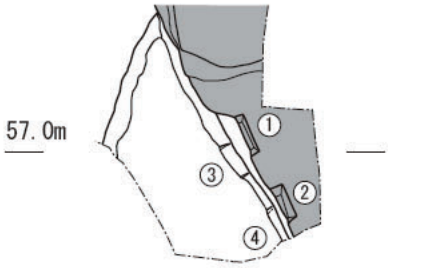
第 257 図　2014-2 地点・2005-7 地点　景石平面図・立面図 1





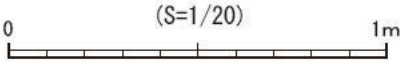


②景石 S01 ～ S03 立面（北西→南東）とⅢ層斜面

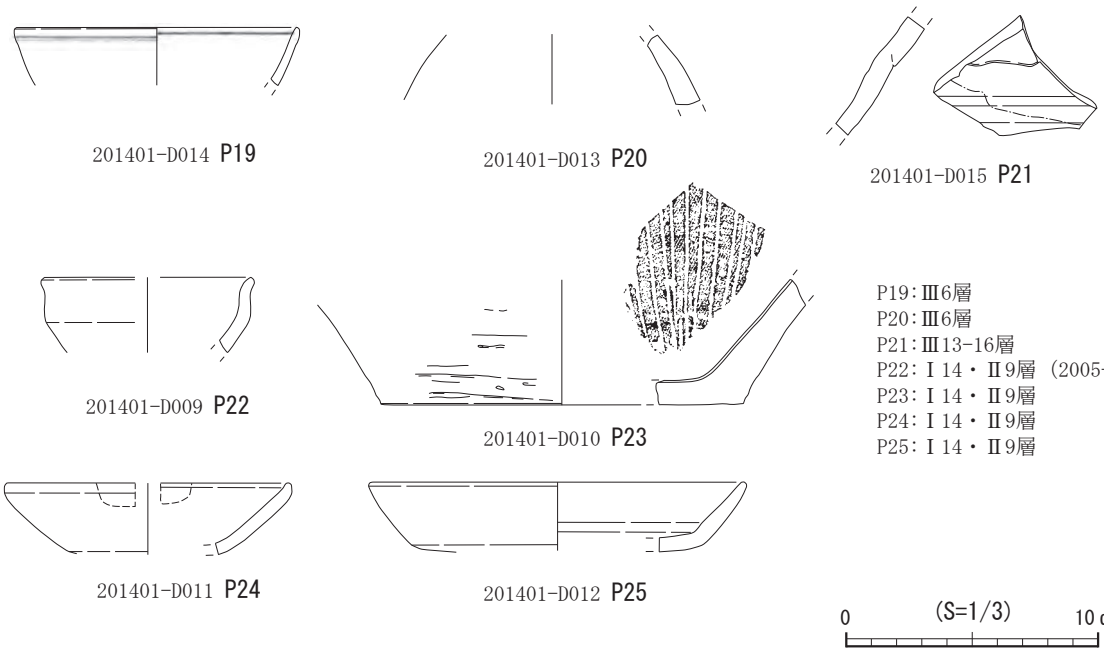


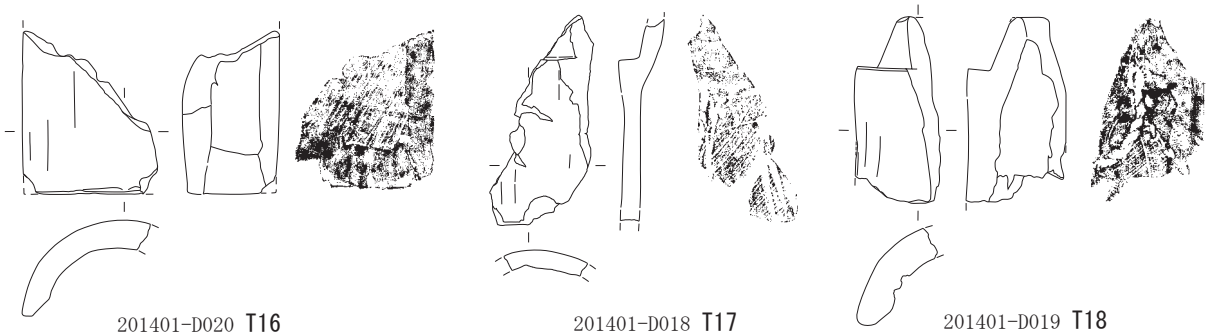
後面矢穴周辺立面

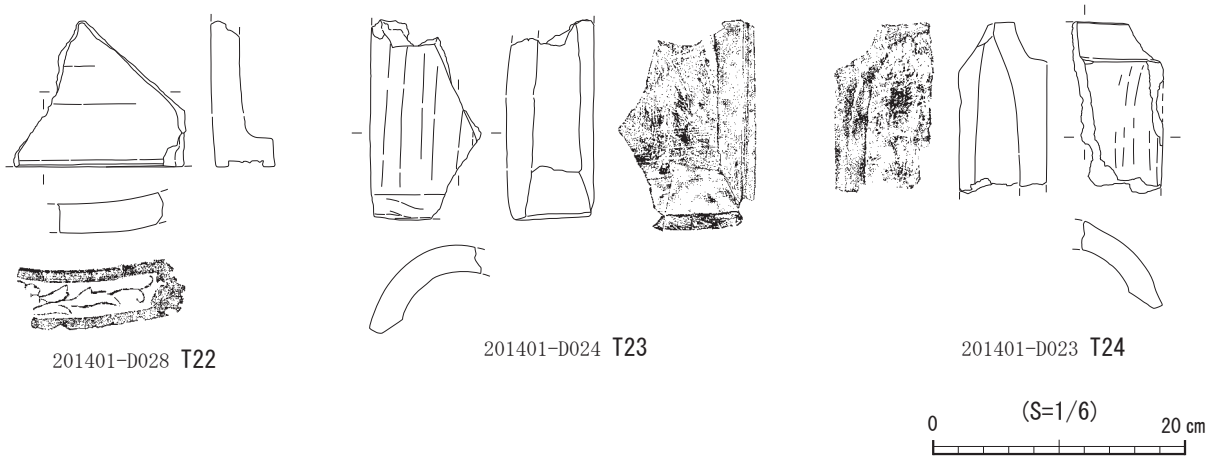
①景石 S03　平面図・立面図



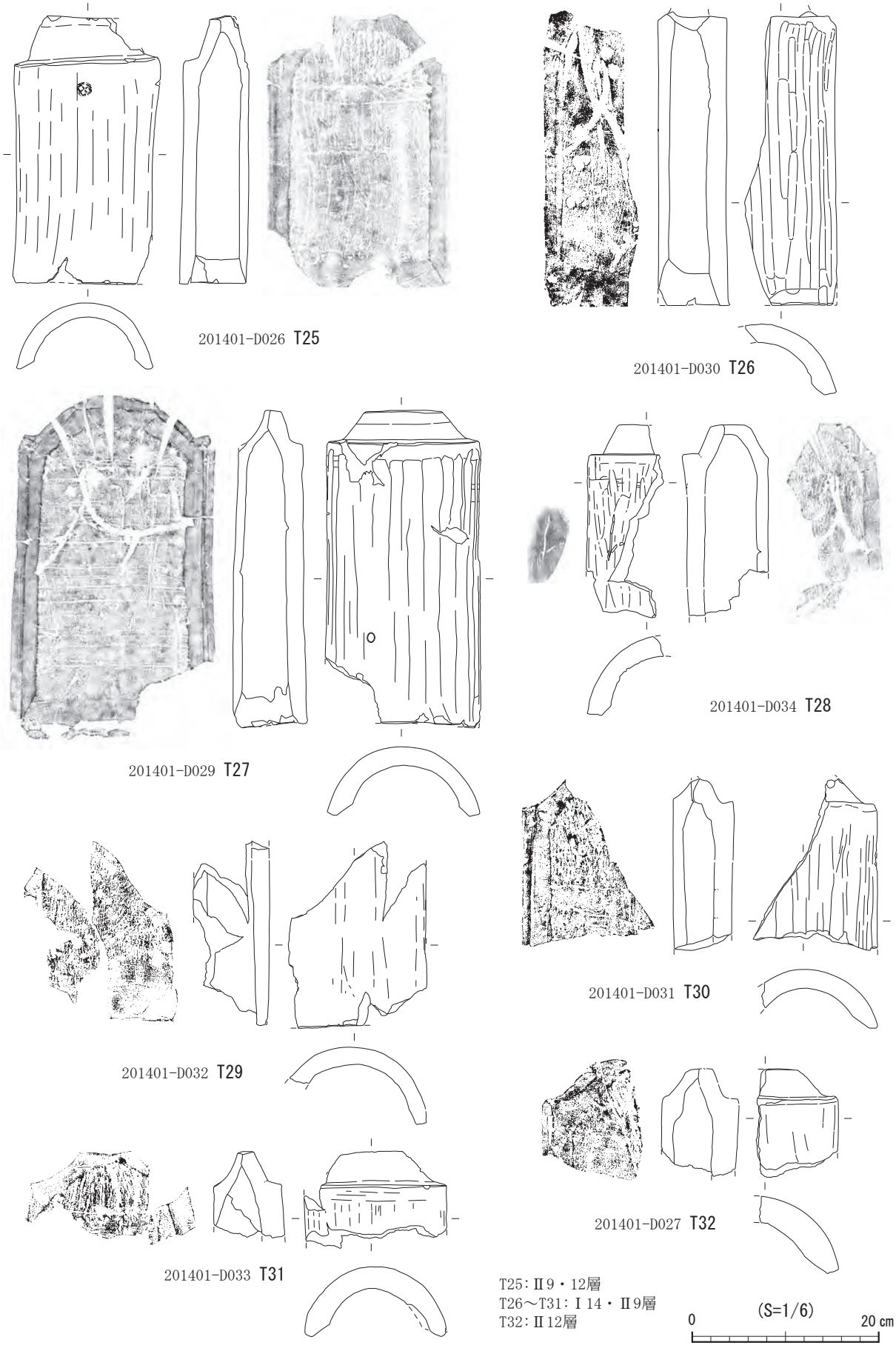
第 258 図　2014-2 地点・2005-7 地点　景石平面図・立面図 2



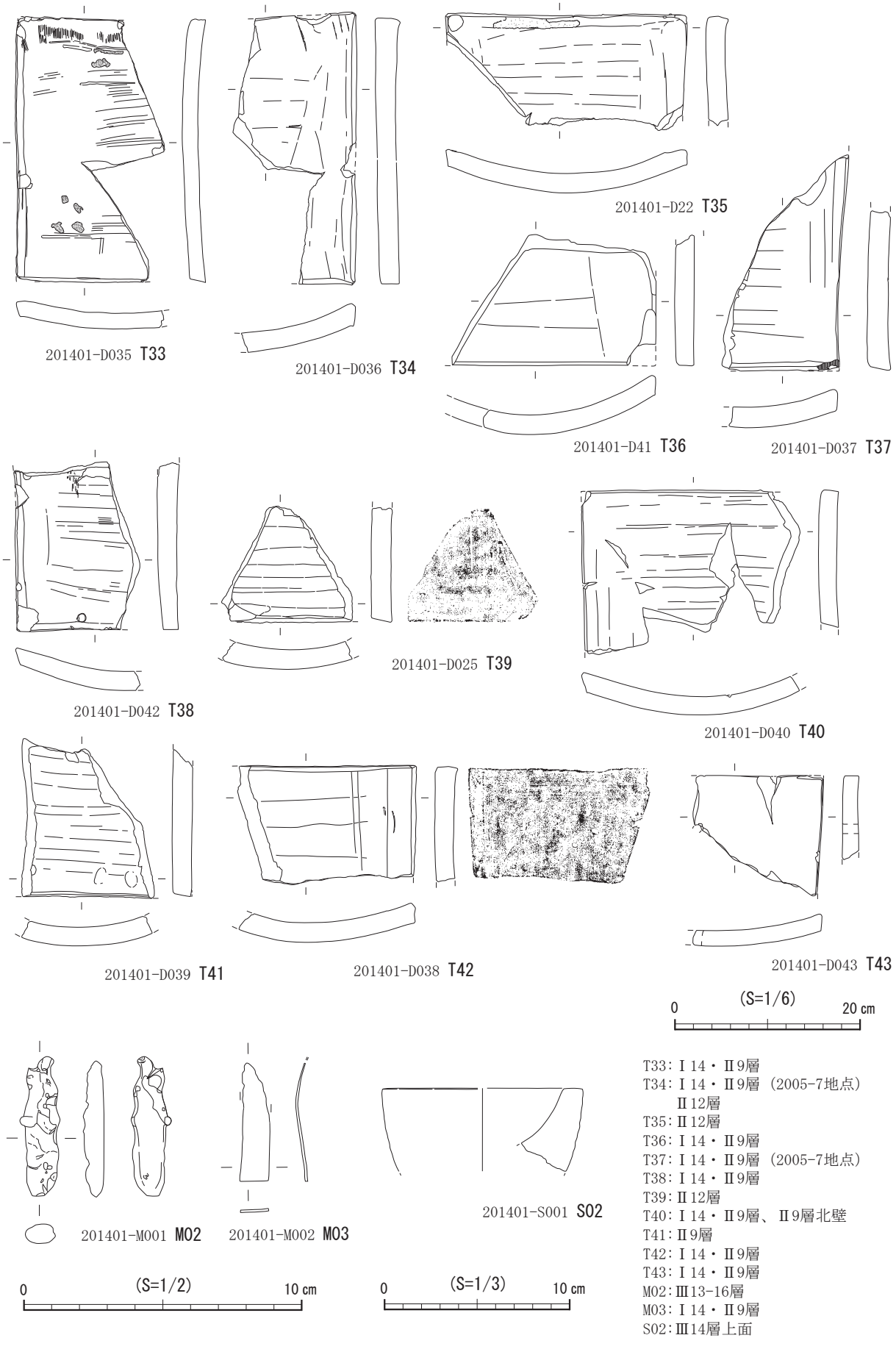




第 259 図　2014-2 地点　出土遺物実測図　陶磁器・瓦 1



第 260 図　2014-2 地点　出土遺物実測図　瓦２　(S=1/6)



T33:Ⅰ14・Ⅱ9層
T34:Ⅰ14・Ⅱ9層（2005-7地点）
Ⅱ12層
T35:Ⅱ12層
T36:Ⅰ14・Ⅱ9層
T37:Ⅰ14・Ⅱ9層（2005-7地点）
T38:Ⅰ14・Ⅱ9層
T39:Ⅱ12層
T40:Ⅰ14・Ⅱ9層、Ⅱ9層北壁
T41:Ⅱ9層
T42:Ⅰ14・Ⅱ9層
T43:Ⅰ14・Ⅱ9層
M02:Ⅲ13-16層
M03:Ⅰ14・Ⅱ9層
S02:Ⅲ14層上面

第261図　2014-2地点　出土遺物実測図　瓦３・金属製品・石製品

第 51 表　2014-2 地点　出土遺物観察表　陶磁器

（ ）は残存値

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形・整形	釉薬・装飾等	胎土・色調等		産地	形状特徴	特記事項	ID(実測番号)
259	P19	磁器	碗	2014-2	Ⅲ6層	11.1		(2.3)	ロクロ	青花	2Ba	灰白	中国景徳鎮系			201401-D014
	P20	陶器	瓶	2014-2	Ⅲ6層			(2.8)	ロクロ	焼締	Ⅰ2Ba	にぶい赤褐	備前			201401-D013
	P21	陶器	壺	2014-2	Ⅲ13-16層			(4.8)	ロクロ	灰釉	Ⅰ2Ba	灰黄褐	信楽			201401-D015
	P22	陶器	碗	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層（2005-7境）	8.2		(3.0)	ロクロ	鉄釉	Ⅰ3Ba	にぶい黄橙	瀬戸・美濃		天目茶碗	201401-D009
	P23	陶器	擂鉢	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層		14.4	(5.0)	ロクロ		Ⅰ3Ca	灰黄	越前			201401-D010
	P24	土器	土師器皿	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	11.2	6.4	(2.8)	手づくね		C	にぶい黄橙	在地	C2 Ⅰ1	口縁部油煙痕	201401-D011
	P25	土器	土師器皿	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	14.8	11.6	2.8	手づくね		E2	にぶい黄橙	在地	C2 Ⅰ1		201401-D012

第 52 表　2014-2 地点　出土遺物観察表　瓦 1

軒平瓦

（ ）は残存値　［ ］は復元値

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	瓦当	寸法(瓦当)									胎土		特記事項	ID(実測番号)
								a	b	c	d	e	f	g	h	i				
259	T22	瓦	軒平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	花文Ⅲ	(11.5)	(11.6)			(9.4)	4.5	2.8	2.5	2.2	A2	にぶい灰黄 粗砂多		201401-D028

丸瓦

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法(体部)							胎土		特記事項	ID(実測番号)
							a	b	c	d	e	f	g				
259	T16	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅲ11層	燻	(13.0)	(10.7)			(7.7)	2.3		B2	灰白　粗砂少量	コビキA、内面布圧痕	201401-D020
	T17	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅲ11・13-16層	燻	(16.7)	(6.8)				1.5		C2	にぶい黄橙　粗砂・礫並、焼成やや不良	コビキA	201401-D018
	T18	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅲ11層	燻	(14.8)	(6.9)	4.2	(3.3)	(7.9)	2.5	4.3	B2	灰白　粗砂並	コビキA、内面紐状圧痕	201401-D019
	T23	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅱ12層	燻	(15.9)	(8.9)			7.0	2.1		A2	にぶい黄灰 粗砂少、緻密、焼成良	コビキB	201401-D024
	T24	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅱ12層	燻	(13.4)	(7.0)	2.9	(5.9)	(7.0)	2.1	5.6	B2	灰白　粗砂並、焼成良	コビキB	201401-D023

第 53 表　2014-2 地点　出土遺物観察表　瓦 2

丸瓦

（ ）は残存値　［ ］は復元値

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法（体部）							胎土		特記事項	ID（実測番号）
							a	b	c	d	e	f	g				
260	T25	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅱ9層 Ⅱ12層	燻	28.8	15.7	4.8	(12.4)	7.1	1.6	5.4	B1	灰黄 粗砂並	コビキB、刻印、内面布圧痕	201401-D026
	T26	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(31.5)	(9.9)			7.7	2.1		B2	灰白　粗砂並	コビキB、内面紐状圧痕	201401-D030
	T27	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	33.2	16.65	3.1	13.3	7.95	1.9	5.1	B2	灰黄　粗砂少、緻密	コビキB、内面紐状圧痕	201401-D029
	T28	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(20.4)	(8.2)	3.2	(5.5)	(8.4)	2.0	(7.5)	B2	灰黄　粗砂少	コビキB、内面紐状圧痕	201401-D034
	T29	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(20.0)	(14.9)			(8.2)	1.9		A2	にぶい灰白　粗砂少	コビキB	201401-D032
	T30	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(18.4)	(13.4)			6.6	2.0		A2	にぶい灰黄　粗砂並	コビキB	201402-D031
	T31	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(11.0)	(15.2)	1.8	(11.8)	7.6	2.4	5.8	A2	灰黄　粗砂並	コビキB	201401-D033
	T32	瓦	丸瓦	2014-2	Ⅱ12層	燻	(11.7)	(8.9)	2.95	(7.05)	8.3	2.65	5.35	A2	灰白　粗砂並	コビキB、内面布圧痕	201401-D027

平瓦

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法（体部）					破片最大幅	胎土		特記事項	ID（実測番号）
							a	b	c	d	e					
259	T19	瓦	平瓦	2014-2	Ⅲ19層	燻	(9.75)				2.4	7.3	C1	灰白　粗砂並、 やや焼きが甘い		201401-D016
	T20	瓦	平瓦	2014-2	Ⅲ17-18層	燻	(11.0)				1.9	13.25	B1	にぶい黄橙　粗砂並、 礫少、焼成やや不良		201401-D017
	T21	瓦	平瓦	2014-2	Ⅲ6層 東壁	燻	(9.4)				2.4	11.9	C2	断面サンドイッチ状、 外側淡橙 内側黒灰		201401-D021
261	T33	瓦	平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	28.7	(11.6)	(14.6)	1.4	1.7	16.0	B2	灰白		201401-D035
	T34	瓦	平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層 (2005-7地点) Ⅱ12層	燻	29.3				2.15	13.3	B2	灰白 粗砂並、礫少、気泡あり、焼成良		201401-D036
	T35	瓦	平瓦	2014-2	Ⅱ12層	燻	(12.5)	26.0		2.6	2.1		A2	黄灰　粗砂並、焼成良		201401-D022
	T36	瓦	平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(14.2)		(19.0)	4.3	2.1	21.2	B2	灰白　粗砂少		201401-D041
	T37	瓦	平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層 (2005-7地点)	燻	(23.3)		(12.8)	1.9	2.2	12.8	B2	灰白　粗砂少		201401-D037
	T38	瓦	平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(18.4)		(11.3)		2.2	13.5	B2	灰白　粗砂並	釘穴の下書きか	201401-D042
	T39	瓦	平瓦	2014-2	Ⅱ12層	燻	(12.7)				2.15	14.1	A2	黄灰　粗砂少		201401-D025
	T40	瓦	平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層 Ⅱ9層北壁	燻	(17.8)	(20.0)			2.0	23.6	B2	灰黄　空隙並		201401-D040

第 54 表　2014-2 地点　出土遺物観察表　瓦 3

平瓦

（ ）は残存値　［ ］は復元値

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		表面処理	寸法(体部)					破片最大幅	胎土		特記事項	ID(実測番号)
							a	b	c	d	e					
261	T41	瓦	平瓦	2014-2	Ⅱ9層	燻	(17.3)				2.2	14.3	B2	灰白　粗砂並、礫少、焼成良		201401-D039
	T42	瓦	平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(12.9)	(19.4)		2.1	2.1	19.4	B2	灰白　粗砂少		201401-D038
	T43	瓦	平瓦	2014-2	Ⅰ14・Ⅱ9層	燻	(13.0)	(13.8)		1.9	1.7	14.0	B2	灰白　粗砂少	釘穴	201401-D043

第 55 表　2014-2 地点　出土遺物観察表　金属製品・石製品

金属製品

（ ）は残存値　［ ］は復元値

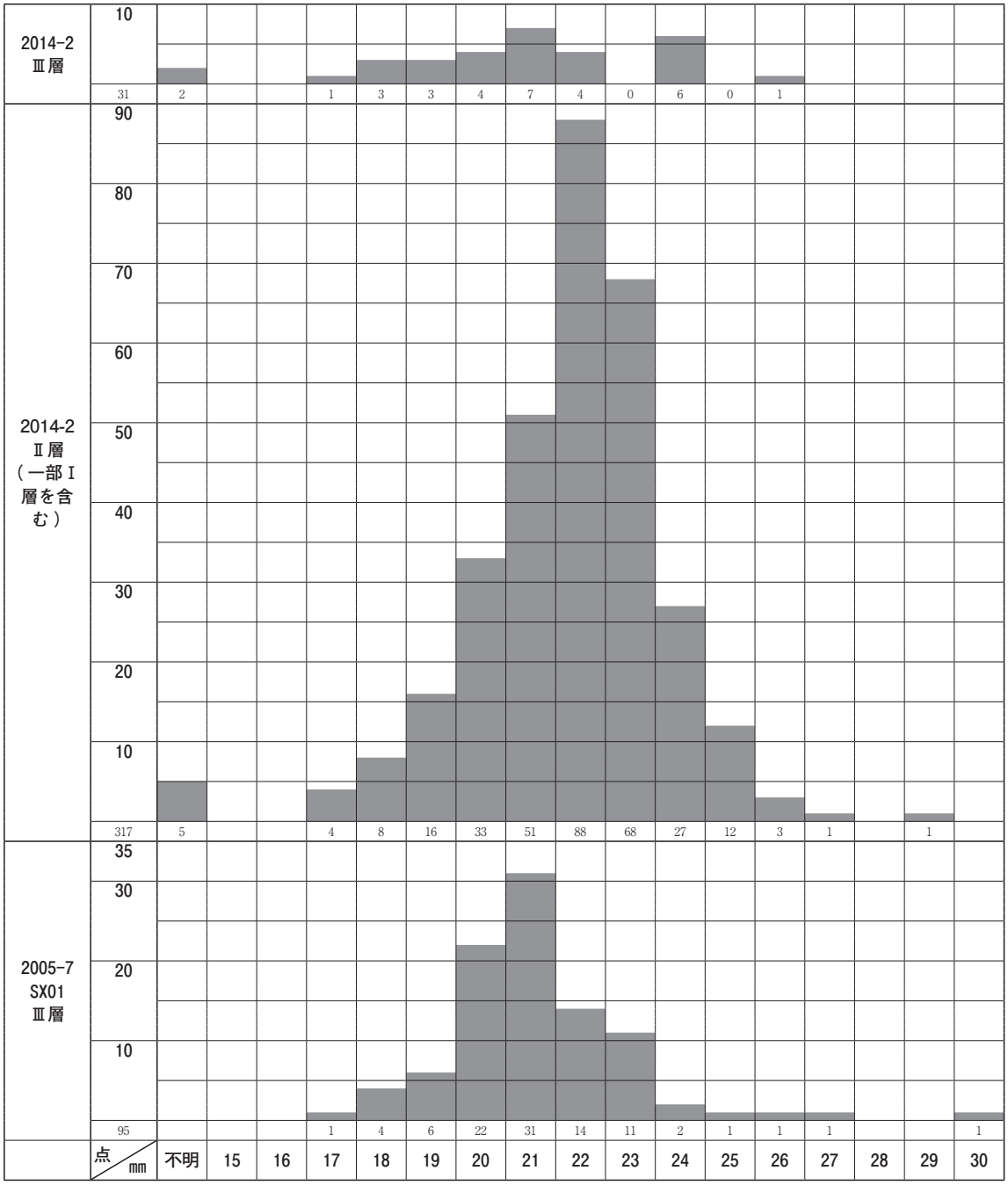
図版	報告番号	種別	器種	出土地点		全長(cm)	全幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	材質	特記事項	ID(実測番号)
261	M02	鉛製品	鉛塊	第２地点	Ⅲ13-16層	5.1	1.45	0.70	23.1	鉛		201401-M001
	M03	銅製品	銅板	第２地点	Ⅰ14・Ⅱ9層	(4.3)	1.0	0.1	2.0	銅		201401-M002

石製品

図版	報告番号	種別	器種	出土地点		全長(cm)	全幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	色調	石質	特記事項	ID(実測番号)
261	S02	石製品	石鉢	第２地点	Ⅲ14層上面	口径[21.6]		器高(9.0)	230.8				201401-S001

第 56 表　丸瓦切り離し痕集計表

	Ⅱ層 （一部Ⅰ層を含む）	Ⅲ層
コビキA コビキB 不明	4 47 35	4 1 5
合計	86	10



第 262 図　平瓦器厚分布図

2014-2地点　調査着手前状況　南東から

2014-2地点　表土等除去　南東から

2014-2地点　遺構検出作業

2014-2地点　Ⅲ層検出状況　北西から

2014-2地点　Ⅲ層検出状況　北から

第 263 図　2014-2 地点　遺構写真 1

2014-2地点　Ⅲ層検出状況　南東から

2014-2地点　景石精査　北西から

2014-2地点　全景　北西から

2014-2地点　全景　北から

第 264 図　2014-2 地点　遺構写真 2

2014-2地点　北部　北西から

2014-2地点　全景　南東から

2014-2地点　北部　景石背面　南東から

第 265 図　2014-2 地点　遺構写真 3

2014-2地点　北部　東から

2014-2地点　西壁土層断面　南

2014-2地点　西壁土層断面　中央南

2014-2地点　西壁土層断面　中央北

2014-2地点　西壁土層断面　北

第 266 図　2014-2 地点　遺構写真 4

2104-2地点　東壁土層断面

2014-2地点　中央断割東壁土層断面

2014-2地点　南壁土層断面

2014-2地点　景石S01・S02　北西から

2014-2地点　景石S01　北西から

2014-2地点　景石S01　東から

第 267 図　2014-2 地点　遺構写真 5

2014-2地点　景石S02　北西から

2014-2地点　景石S02　上面

2014-2地点　景石S02　東から

2014-2地点　景石S03（左）・S04（右）　西から

2005-7地点　景石S03　北西から

第 268 図　2014-2 地点　遺構写真 6

2014-2地点　景石S03　後面矢穴

2014-2地点　景石S04　北西から

2014-2地点　景石S04　上面

現地指導風景

測量作業

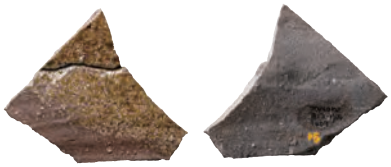
埋め戻し作業（遺構養生）

埋め戻し完了状況

第 269 図　2014-2 地点　遺構写真 7

201401-D014 P19

201401-D013 P20



201401-D015 P21

201401-D009 P22

201401-D010 P23

201401-D011 P24

201401-D012 P25

201401-D020 T16

201401-D018 T17

201401-D019 T18

201401-D016 T19

201401-D017 T20

201401-D021 T21

201401-D028 T22

201401-D024 T23

201401-D023 T24

第 270 図　2014-2 地点　出土遺物写真 1　陶磁器・瓦 1

201401-D026 T25

201401-D030 T26

201401-D029 T27

201401-D034 T28

201401-D032 T29

201401-D031 T30

201401-D033 T31

201401-D027 T32

第 271 図　2014-2 地点　出土遺物写真 2　瓦 2

201401-D035 T33

201401-D036 T34

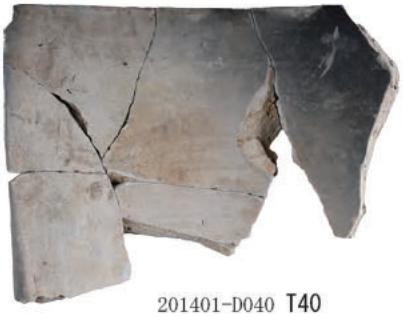
201401-D022 T35

201401-D041 T36

201401-D037 T37

201401-D042 T38

201401-D025 T39



201401-D040 T40

201401-D039 T41

201401-D038 T42

201401-D043 T43

201401-M001 M02

201401-M002 M03

201401-S001 S02

第 272 図　2014-2 地点　出土遺物写真 3　瓦 3・金属製品・石製品

第３節　ボーリング調査

１．はじめに

本事業におけるボーリング調査については、［石川県金沢城調査研究所 2014d］で記載した通り、自然地形・造成の概況、大型遺構の規模・広がりを把握することを主眼としている。また本事業が対象としている本丸・東ノ丸は森・藪が広がっており、本格的な発掘調査に比較して、自然環境への影響が軽微であると考えられることも、ボーリング調査の利点として挙げられる。

上記報告書では、平成 18 年度より 24 年度までに実施した合計 53 箇所について報告しているが、その後平成 25 年度・28 年度に 15 箇所実施した。この間の経過については、本章第１節で記述した通りであり、従前に引き続き自然地形等を追求した他、平成 17 年度の確認調査に端を発する東ノ丸庭園遺構（池遺構）の実態把握を目的とした。

本節では平成 25・28 年度調査地点を中心に、関連する過年度のボーリング調査地点・発掘調査地点も含め検討し、主に池遺構の構造・規模・広がり等についての所見を報告する。

２．調査の経過と結果概要

第１節で東ノ丸庭園遺構の調査に係る経緯と経過について概略を記述した。本項では改めて、平成 25 年度ボーリング調査・平成 26 年度発掘調査の結果を踏まえ、平成 28 年度にボーリング調査地点を設けた経過とその結果に関する概要を記述する。

平成 25 年度調査では、東ノ丸の自然地形の状況が把握された一方、約 30 m離れた H25-3 地点・H25-6 地点において、ほぼ同レベルで地山上に厚さ 15cm 程度の戸室石が検出され、遺構面の存在も予測されたが、全般的に池遺構について明らかにできたところは少なく、造成土の区別が課題となった。

平成 26 年度調査では、遺構推定範囲の北西部（2014-1 地点）においても、近世後期段階には大規模な窪地が存在することが明らかになった。ただしそれは近代の造成土が深いレベルまで認められることから得た間接的な知見であった。一方で遺構上端と目される箇所・レベルでは、黄褐色・黒褐色の粘質土・シルト質土主体の土層（本節Ⅲ層）が認められた。これと同質の土層は、遺構南東端の 2014-2 地点でも景石と一体的に施工されていることが分かり、近世初期造成土の上部の指標とみなし得るに至った。また、遺構斜面を直接覆う瓦廃棄層を検出したこと（2014-2 地点）、近代造成土の下層が比較的均質な砂質土で構成されていたこと（2014-1 地点）等も、ボーリングコアの堆積状況を読み取る上で重要な知見となった。

これらを踏まえ、平成 28 年度のボーリング調査では、Ⅲ層の延伸部分検出を見込み、発掘調査では到達できなかった遺構の法面下部（H28-2 地点・H28-4 地点）に加え、底面（H28-3 地点）・遺構の広がり（H28-1 地点）について、併せて確認することを目的とした。

調査の結果、ほぼ想定通り、H28-2 地点・H28-4 地点でⅢ層及びその上位で近世の遺構埋土（本節Ⅱ層）を検出し、近世初期から窪地（池遺構）が形成されていたことが明確となった。また H28-3 地点では 2014-2 地点と同様の瓦廃棄層が検出され、廃棄層の下端が H25-3・H25-6 地点等から推測していた遺構面のレベルとおおよそ合致することも判明し、これを池遺構の底面と考え得るに至った。

３．方法

調査ボーリングはオイルフィード式ボーリングマシン（YBM-05）を使用し、掘削孔径φ 86mm のオールコアボーリングとして実施した。孔壁の崩壊が著しく掘削が困難な場合にはケーシングを挿入し、泥水を孔内へ循環することで孔内崩壊を防止した。ボーリングで採取した試料は、入念に観察し

柱状図（JACIC 様式）にまとめ、コア箱に整理・保管した。

４．基本土層（第 274 図凡例）

ボーリング調査地点で採取したコアの土層大別については、［石川県金沢城調査研究所 2014d］で示した大別を基本とするが、とくに池遺構周辺においては、平成 26 年度の発掘調査における所見（第２節）との対比により、28 年度ボーリング調査において検出した造成土の細別･意義付けが進捗した。以上を踏まえ、今回の報告では、25 年度以前の地点についても改めて検討し、所見について修正することとした。細別については第 274 図の凡例に示した。

Ⅰ　表土・近代造成土

腐植質土や公園整備に係る整地土は表土とした。近代造成土は、包含遺物等から近代以後の形成が明らかな土層で、従前の知見では、近世造成土との区別も困難な部分があったが、平成 26 年度の発掘調査において検出した、特徴的な砂質土主体層（2014-1 地点Ⅰｃ層）を指標とすることで、整合的な理解が得られることとなった。

Ⅱ－Ⅳ　近世造成土

近世の人為的な土層を総称した。

Ⅱ　近世前期以後

上部は灰黄褐色・暗灰褐色粘～砂質土が互層状を呈し、粘性は低く、礫・瓦が混じる場合を典型とする。下部は瓦廃棄層、もしくは炭化物・焼土混じり暗褐色土等で構成される。コアに含まれる丸瓦で、確認できた粘土切り離し痕はコビキＢである。本層は池遺構廃絶時の埋土であり、寛永８年（1631）頃に形成されたものと考えられるが、遺構存続時の流入土や、近世中後期の土層と区別しきれていない可能性がある。ただしいずれにしろ後二者はさほど厚く堆積していないと推測している。

Ⅲ　近世初期

黒褐色粘質土・シルト質土、黄褐色粘質土・シルト質土等で構成され、均質。明瞭な互層となる状態もみられる。2014-2 地点（発掘地点）では、景石と一体的に施工されており、庭園築造に関わり造成された部分があり、近世初期造成土の上部とみなされる。本層も識別が比較的容易であり、鍵層となっている。施工の年代は明確ではないが、17 世紀初頭以後と推定される（第２節）。なお 2014-2 地点では、上記した特徴をもつ土層の下位に、砂質・砂礫質主体の土層が認められるが、これらも庭園造成土とするか、あるいは次のⅣ層に含めるべきか、検討を要する。

Ⅳ　近世初期

各調査地点の下位でみられる土層で、Ⅲ層ほど均質ではない。このうち北部は比較的単調で、褐～黄褐色シルト質土主体である。南部では上部・下部に大別した。上部は灰褐～黄褐色粘質土、暗褐～灰黄褐色や褐灰色シルト質土、暗灰褐色シルト質土等、ややばらつきがあるが、いずれも灰褐色土を基調とした色調が主体となる。下部は比較的まとまりがあり、黄褐色と黒褐色の粘質～シルト質土がモザイク状・マーブル状に混在する状況が主体となる。H24-11 地点・H25-5 地点では地表下 4.6～5.6 ｍで瓦小片が出土しており、平瓦の厚みが古相を窺わせるものの、年代の特定には至っていないが、基本的に郭自体の造成土とみなされる。

なお、東ノ丸東辺でのみ検出された砂質土層で、一見卯辰山層に類似するがそれほど固結していない特徴をもつものがあり、初期造成土の可能性があるが確定しがたい。東ノ丸南部の造成土と比べ均質で細別が難しく、厚く堆積している。

Ⅴ　地山（黒ボク・段丘堆積物・卯辰山層）

黒ボク・段丘堆積物・卯辰山層に細別した。このうち黒ボクは近世以前の旧表土と目される。段丘堆積物・卯辰山層については、調査地である金沢城跡以外において詳細な地質学的な調査研究が進

められている［石川県金沢城調査研究所 2014d］。

調査地においては、段丘堆積物は小立野段丘の堆積物に対応する。小立野段丘堆積物は、全域をとおして変朽安山岩・凝灰岩類・流紋岩からなる礫層［藤 1975］が主体であるが、その上位には泥質土層が分布する。この土層は、段丘の離水後に堆積した風成堆積物のローム層と考えられ、褐色を呈する粘土やシルトからなり、層中に２枚の広域火山灰（ＡＴ･ＤＫＰに比定）が検出されている［中村他 2003］。以上より小立野段丘面の形成時期は６～５万年前と考えられている。

卯辰山層は、先段丘形成期の堆積物であり、日本海開口により形成された堆積盆地を埋積する堆積岩類を主体とする地層のうち上位に属する。第四紀中期更新世において、主に浅海以浅の水域、一部は内湾～淡水域で堆積した中粒・粗粒砂岩を主体とし、数枚の粘土層と礫層を挟む。礫層の礫はほとんどが半グサレ礫となり、礫径は場所によって様々で小礫～巨礫より構成される。礫種は、安山岩・流紋岩・砂岩・片麻岩・チャートである。本層の形成時期は約 80～50 万年前と推定されている。構成土層の典型として、褐～灰色の固結シルト層の存在が挙げられる。

５．調査地点の位置

東ノ丸（中央～南部）におけるボーリング調査地点の配置は、第 231・232 図（第１節）に示した。個々のボーリング地点の概略は第 57 表に、詳細情報は第 277～297 図に提示した。平成 25・28 年度ボーリング調査地点の配置は、①東ノ丸南部の池遺構周辺が主体であるが、その他②本丸東堀（北端、H25-1 地点）、③東ノ丸東辺（H25-9～11 地点）にも設定している。①については次項で詳細に触れることとし、本項では②・③の状況について所見を記す。

②の本丸東堀については、中央･南部について過年度にボーリング調査･発掘調査が実施されており、堆積層や深さ等の情報を得ていたが、絵図の描写によると（第 232 図等）、堀の北端は複雑に屈曲し、18 世紀後半頃まで木橋が架かっている等、やや様相が異なっており、中央部以南との差異がないかどうかを確認する目的で、ボーリング（H25-1 地点）を実施した。その結果、底面と目される地山面が標高 54.88 ｍで検出され、中央部以南で確認した底面より約１ｍ浅いことが判明した。また底面近くに流入土と思われる砂質土が 20cm 程度堆積していたが、水性堆積を窺わせるものとは言い難い。この上位は細別の難しい埋土で、近代以後に埋め立てられたと推測される。このように、本丸東堀北端については、中央部以南とは底面のレベルが異なり、一体的ではなかったとみられる。ただし、水槽･池といった機能が想定されるものの、この点を積極的に示唆する情報を得ることはできなかった。

③の東ノ丸東辺については、すでに H22-9 地点（中央部）・H24-9 地点（北部）を設定しており、段丘堆積物相当とした土層について砂質が目立ち、東ノ丸中央部以西との違いが顕著であった［石川県金沢城調査研究所 2014d］。平成 25 年度には、北部－中央部間（H25-9 地点）、南部（H25-10・11 地点）にも設定し、東ノ丸東辺全体の傾向であるかを確認することとした。その結果、最南端の H25-11 地点では明瞭な段丘礫層が検出されたが、その他の２地点では、標高 56.02 ｍ～56.29 ｍの間を上限として、過年度地点と同様の砂質土が検出された。この土層はボーリング最下端となる標高 51 ｍ程度まで変化なく連続している。その性格については、一概に段丘堆積物とは言い難く、初期造成土の可能性があるが、瓦等遺物の包含等は確認できず、確定することが難しい状態にある。

６．東ノ丸池遺構周辺の調査結果

（１）基本図面（第273～275図）

第 273 図は東ノ丸南部の池遺構周辺の平面概要図である。調査結果を反映し、池遺構の推定範囲、遺構に対する調査地点の位置解釈等を図示している。また調査地点をつなげた軸を設定しているが、これらは地点ごとの土層断面図（柱状断面図）を配列して作成した池遺構周辺の断面配列図（第

274・275 図）に対応する。なお各調査地点それぞれを結んだライン（軸）は必ずしも直線にならないが、概略断面図上の調査地点配置はおよそ直線的に補正している。

（2）平面の状況（第273図）

池遺構周辺の調査地点設定においては、過年度の調査成果の他、近世絵図の描写も参考としている。19 世紀前葉頃の景観年代を示す「金沢城本丸・東丸之図」（金沢市立玉川図書館蔵）は、馬蹄形の緑色帯が表現されており、池の名残の窪地とみなしたところ、おおよそ整合する調査結果を得た。

第 273 図に示した調査地点については、Ⅲ層・Ⅳ層（近世初期造成土）の検出標高により、４群に分類・色分けしている。

紫色で示した地点（H25-10、H25-11、2014-2 南）は最も高く、標高 58.0 m以上を測るが、これは東ノ丸東面石垣とその背後の土塁状地形が郭平坦面より高い（池遺構存続時において２～2.5 m程度）ことに起因する。橙色の地点（H25-2、H28-1、H22-6、H22-7、H22-8、H24-12、H25-7、2014-1 南西、2005-5 東）は標高 56.5 m以上を指標とした。H25-2 地点、H25-7 地点は隣接地点との関係からみて削平を受けているとみられる。また H25-8 地点も近代の改変が著しいが、同様に近世初期造成土は本来高い位置にあったと推定される。これらは絵図の緑色帯部分の外側に相当している。

水色で示した地点（H25-4、2014-2 北、H28-4、H24-11、H25-5、2014-1、H28-2）は、土塁状地形の斜面に相当する 2014-2 北を除き、標高 55.2 m～56.2 mを指標とした。これらは紫色・橙色の地点より内側に位置する。

濃い青色で示した地点（H25-3、H24-10、H28-3、H25-6）は標高 55.0 m前後を測り、おおよそ一定している。水色で示した地点より、さらに内側に位置する。このうち H25-3・H25-6 地点では、顕著な初期造成土面は認められなかったが、地山面のほぼ直上に厚さ 15cm 程度の戸室石がみられる点が共通する。また H28-3 地点では標高 55.1 mより上位に瓦の堆積層が認められ、その下位では瓦･礫･粘性土が混在する状況が 40cm ほど続いている。

以上から、紫色・橙色で示した地点は、池遺構の外縁（遺構外）、水色で示した地点は法面、濃い青色で示した地点は底面にそれぞれ対応すると判断される。

（3）断面の状況（第274図）

断面配列図（第 274 図）において、各地点の土層堆積状況とその連続性を示し、池遺構法面の推定ラインを加えた。なお後者については、本丸北西部の確認調査で検出した池遺構 2008-1SX01 の法面勾配（高さの近似から主として東側）を参考としている。始めに長軸（南東－北西､以下東西とする）断面を取り上げ、全体の状況に係る所見を記述し、南北断面については主としてそのラインでの特徴を示すこととする。

①A：東西断面

池遺構の長軸に対応する。基盤となる**自然地形（段丘堆積物層・Ⅴ層）**は西側（本丸側）が高く、東ノ丸南部中央（H28-3 地点）付近では約２m下がる。東側へは若干の高低をもちながらも、概ね平坦に推移する。

近世初期造成土（Ⅳ層）は、郭東辺（H25-11 地点）では、土塁状の高まりとなって石垣上端の背後を構成し、その厚みは約５mに達するが、石垣面から軸上で約 15 m北西へ離れた H28-4 地点では 1.8 m程度に減じる。Ⅳ層上面の標高は 56 m弱で、推定される当該期の郭面の高さよりやや低い。西側 H25-2 地点では、Ⅳ層が 56.1 mで検出されているが、隣接地点との対比からすれば削平を受けているとみられ、本来は 56.5 m以上と考えられる。

一方でこの間の郭中央部では､やや地山（Ⅴ層）が低くなっている H28-3 地点でⅣ層が認められるが、上面の標高は 54.7 mと東西端より 1.5 m以上低い。地山（Ⅴ層）がやや高い H25-3・H25-6 地点ではⅣ層自体みられないが、地山を若干整えその直上に配置されたと思しき戸室石の上面は標高 54.8

～54.9ｍを測る。３地点とも近似した数値を示し、水平を意識した遺構面の存在が窺える。

近世初期造成土（Ⅲ層）は、東部の土塁状高まりに付加するように認められ、景石の設置と一体的に施工されている。H28-4 地点では、2014-2 地点よりも低い位置で検出され、Ⅲ層が中央部に向かい落ち込む状況が認められる。ただし東端は他の縁辺部に対し２ｍ以上高く、これに応じて法面も長くなっている。

このように、近世初期造成土（Ⅲ・Ⅳ層）の検出状況から、東西両端が高く、中央部が低く水平を意識した面をなす窪地（池遺構）の存在が判明した。長軸は推定約 50ｍ、深さ約 1.5～２ｍを測る。

近世前期以後造成土（Ⅱ層）は、東西両端を除き、2014-2 地点・H28-4 地点・H25-6 地点・H28-3 地点・H25-3 地点で認められる。Ⅲ層・Ⅳ層を基盤とする窪地を埋めている状況が窺え、窪地が近代以降に形成されたものでないことが明確となった。このうち H28-3 地点では、標高 55.6ｍ～55.1ｍの間、50cm に及ぶ瓦堆積層が検出された。粘土切り離し痕が確認できる丸瓦片（４点）はいずれもコビキＢで、2014-2（2005-7）地点Ⅱ層出土資料と同様の傾向を示しており、遺構底面を覆う、寛永８年（1631）頃の廃棄層と考えられる。瓦廃棄層の下位は、瓦・礫・粘性土が混在する状況が 40cm ほど続き、明確な造作は認められないが、景石の抜き取り等、底面への影響によるものと推定される。標高 55.1～54.7ｍの間に底面を想定すれば、H25-3 地点・H25-6 地点、また H24-10 地点等ともおおむね整合する。

なお本断面軸では、Ⅱ層は中央より東部に厚く堆積している。近代の削平の結果である可能性もあるが、近世前期以後も窪地であったことからすれば、当該期の実態を反映している可能性が高い。

またⅡ層とⅢ・Ⅳ層との間には、明確な水性堆積層は検出されていない。なおⅢ層最上部相当層を対象に珪藻分析を行っているが（第５節）、常時湛水していた痕跡は得られていない。

近代造成土（Ⅰ層）により、池遺構の名残りである窪地は埋め立てられ、さらに東ノ丸東辺の高まりに近づけるよう、郭全体が嵩上げされている。東西断面ラインでは顕著ではないが、近代造成土下層（砂質土）の段階が窪地の埋め立て、上層の段階が郭面の嵩上げに対応すると考えられる（2014-1 地点）。

②Ｂ～Ｄ：南北断面

南北断面では、**地山（Ⅴ層）**は南側へ下降する傾向を示す。**近世初期造成土（Ⅳ層）**は北側では１～２ｍ弱の厚みであるが（H22-6 地点・H28-1 地点・H22-7 地点・H22-8 地点、）、池遺構の窪みを挟む南側（主としてＣライン：H25-5 地点・H24-11 地点・H25-7 地点・H24-12 地点等）では地山が低くなるため、より厚くなっている。とくに後述する谷状地形の中軸近くに推定される H25-7 地点では４ｍ以上に及ぶ。ライン中央部の４地点のうち、H25-3 地点（Ｂライン）・H28-3 地点（Ｃライン）・H25-6 地点（Ｄライン）は東西軸（Ａライン）で言及した。残る H24-10 地点（Ｃライン）も、Ⅳ層上面の標高が 54.9ｍを測り、上記３地点が形成する水平面と整合する。以上からこの面は池遺構の底面と考えられる。

なおＣライン南側の上記各地点では、造成土の差異が不明瞭なところがあり、また H25-5 地点・H24-11 地点でのⅣ層上部の認識・帰属など、検討に手間取ることとなったが、池遺構の法面に対応するとみることで、概ね整合的な解釈が可能と考えている。

近世初期造成土（Ⅲ層）はＢラインの 2014-1 地点・H28-2 地点、Ｄラインの H25-4 地点で認められる。H28-2 地点では厚さわずか６cm であったが、黄褐色シルト質土層として、南側の 2014-1 地点で検出された同様の土層から連続し、約１ｍ下降した法面下部に至ったものと判断した。直上には炭化物や焼土粒の混じる暗褐色土（Ⅱ層下部）が堆積しており、近世前期以前から窪地であったことが明確になった。一方 H25-4 地点では、黒褐色・黄褐色・明灰色粘質土が約 20～40cm の厚さで互層となって、標高 55m 程度の地山面（Ⅴ層：黒ボク層）に盛土造成されており、他の地点ではみられな

い特異な状況を呈する。Ⅲ層上面の標高は56.2ｍとかなり高く､池遺構外縁に近い。本地点の位置は、近世後期の絵図を参考にすると、窪地のやや内側に入りこんでいるようにも見え、またすぐ東側には、来歴は不明であるが、塁状を呈する東ノ丸東辺でも一段高い築山状の地形が迫っている。派生する課題はあるものの、これらから本地点については、付加的に築造された出島の一部であった可能性を想定しておきたい。

近世前期以後造成土（Ⅱ層）は、概ねライン南側で高く、北側（Ｂライン H25-3 地点・Ｃライン H24-10 地点）でやや低いレベルで検出される。東西軸の状況と併せると、およそ南～東側が高く、北～西側に低いという傾向が見受けられる。池遺構周辺の施設・構築物については、遺構として確認されていないが、遺構廃絶時に削平され埋立土となった対象として、南～東側に築山が存在したことも想定できる。

（4）池遺構以前の地形（第274・275図）

池遺構以前の地形に係り、第 275 図に地山面の推定等高線（黄色）と東西断面（Ｅ・Ｆ）、第 274 図Ｃに南北断面を示した。これによると、東ノ丸南部中央西寄りに、南に向かい開口する、幅 20～30 ｍの谷状地形が認められる。谷状地形の中心に近いと思われる H25-7 地点での地山検出面は標高 51.6 ｍで、東ノ丸で最も高い、H22-7 地点検出の地山面（55.9 ｍ）から 4.3 ｍ低い。もっとも東ノ丸南部は全体的にも中央部より低く、H25-7 地点の東に隣接する H24-12 地点では地山面の標高は 54.0 ｍであり、その差は 2.4 ｍとなっている。

この地形の性格については①自然地形､②遺構ともに可能性があるが､判然としない。①については、前面（南側）の石垣面も輪取りであり、両側に尾根を擁する凹部となっていることは明らかで、本地形はその延長谷頭部分とも推定されるが、黒ボク層等が見当たらない点等、人為的な要素を排することが難しい。②では竪堀の可能性がまず挙げられるが、そうだとすると郭平坦面に大きく食い込み、却って郭面の機能を制限しているようにも思われる。この他石垣構築に関わる作業路等も想定されるが、いずれにしろ可能性の指摘に留まる。

なお池遺構は、前述の南北断面（Ｃライン）からみて、谷状地形の傾斜を直接利用しているようには窺えない。ただし平面的には重複しており、選地に際し地割が意識されていたことも考えられる。

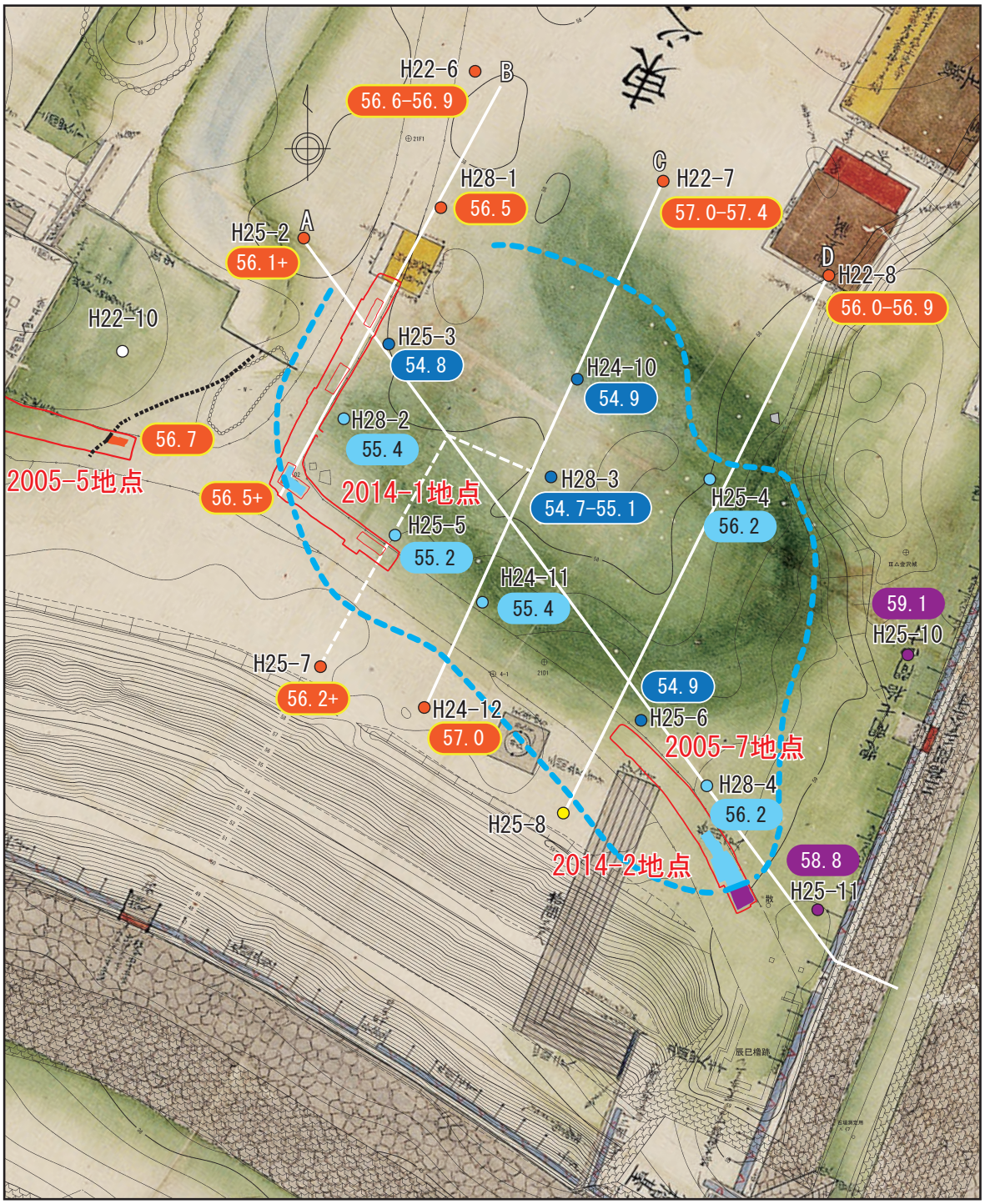
７．小結

平成 17 年度の発掘調査から、28 年度のボーリング調査まで、東ノ丸南部の庭園遺構について追求した。その結果、推定長軸約 50 ｍ、幅約 25～30 ｍ程度、深さ約 1.5～２ｍ（南東部では約４ｍ）の規模をもつ窪地の存在が明らかとなり、発掘調査における景石等の検出状況とも併せて、池遺構と判断した。築造年代については 17 世紀初頭以後と推測され、寛永８年（1631）頃に埋め立てを受け、廃絶したと考えられる。

なお池遺構の築造過程については判然としないが、近世初期造成土（Ⅳ層）が、池遺構形成に直接関係しているとは考え難く、旧地形（谷状地形）を埋め立て、郭面を造成した（Ⅳ層段階）後、改めて掘削･整地した（Ⅲ層段階）とするのが妥当のように思われる。ただし形状が異なる原形があって、これを改修している、または地割を踏襲している可能性は否定できない。この他、給水・排水施設の有無等、今後に残された課題も多い。

第 57 表　ボーリング地点一覧表

地点	位置	深度 m	特徴・成果等
H22-6	東ノ丸中部	8	近世初期造成土を確認、地山高い
H22-7	東ノ丸中部	8	近世初期造成土を確認、地山高い
H22-8	東ノ丸中部	8	近世初期造成土・黒ボクを確認、地山高い
H24-10	東ノ丸南部	8	池遺構底面に相当
H24-11	東ノ丸南部	8	池遺構法面、谷状地形に相当
H24-12	東ノ丸南部	8	谷状地形に相当
H25-1	東ノ丸北部	6	本丸東堀の北端に相当、堀中央部（H22-5）より地山高い
H25-2	東ノ丸南部	6	池遺構外縁、地山高い
H25-3	東ノ丸南部	6	池遺構底面に相当
H25-4	東ノ丸南部	6	池遺構法面に相当、特徴的な造成土、黒ボク等を確認
H25-5	東ノ丸南部	6	池遺構法面、谷状地形に相当、地山未検出
H25-6	東ノ丸南部	6	池遺構底面に相当
H25-7	東ノ丸南部	8	谷状地形に相当
H25-8	東ノ丸南部	8	近代以後の造成土厚く堆積
H25-9	東ノ丸北東部	8	東ノ丸東縁辺、地山（段丘礫層）ないし地山質造成土検出
H25-10	東ノ丸南東部	8	東ノ丸東縁辺、地山（段丘礫層）ないし地山質造成土検出
H25-11	東ノ丸南東部	8	東ノ丸東縁辺、初期造成土・地山（段丘礫層）を確認
H28-1	東ノ丸南部	5	池遺構外縁、地山高い
H28-2	東ノ丸南部	6	池遺構法面に相当
H28-3	東ノ丸南部	6	池遺構底面に相当、瓦廃棄層検出
H28-4	東ノ丸南部	5	池遺構法面に相当



絵図：「金沢城本丸・東丸之図」［金沢市立玉川図書館蔵］

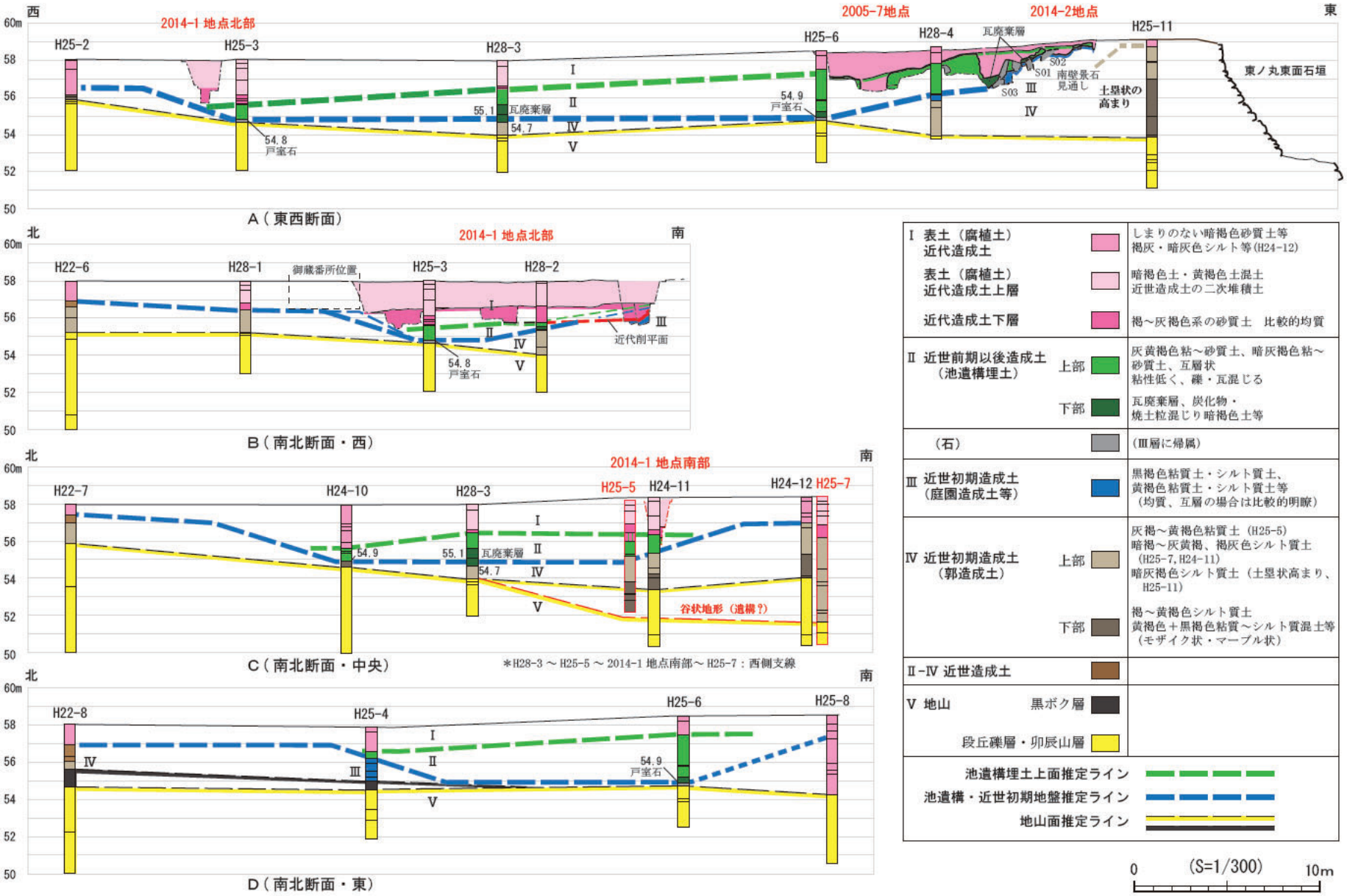
0　40m

ボーリング地点（遺構面標高・推定復元含）
- ：池遺構外縁　58.8m～
- ：同　外縁　56.5m～
- ：同　法面
- ：同　底面
- ：初期遺構面等不明
- ：その他

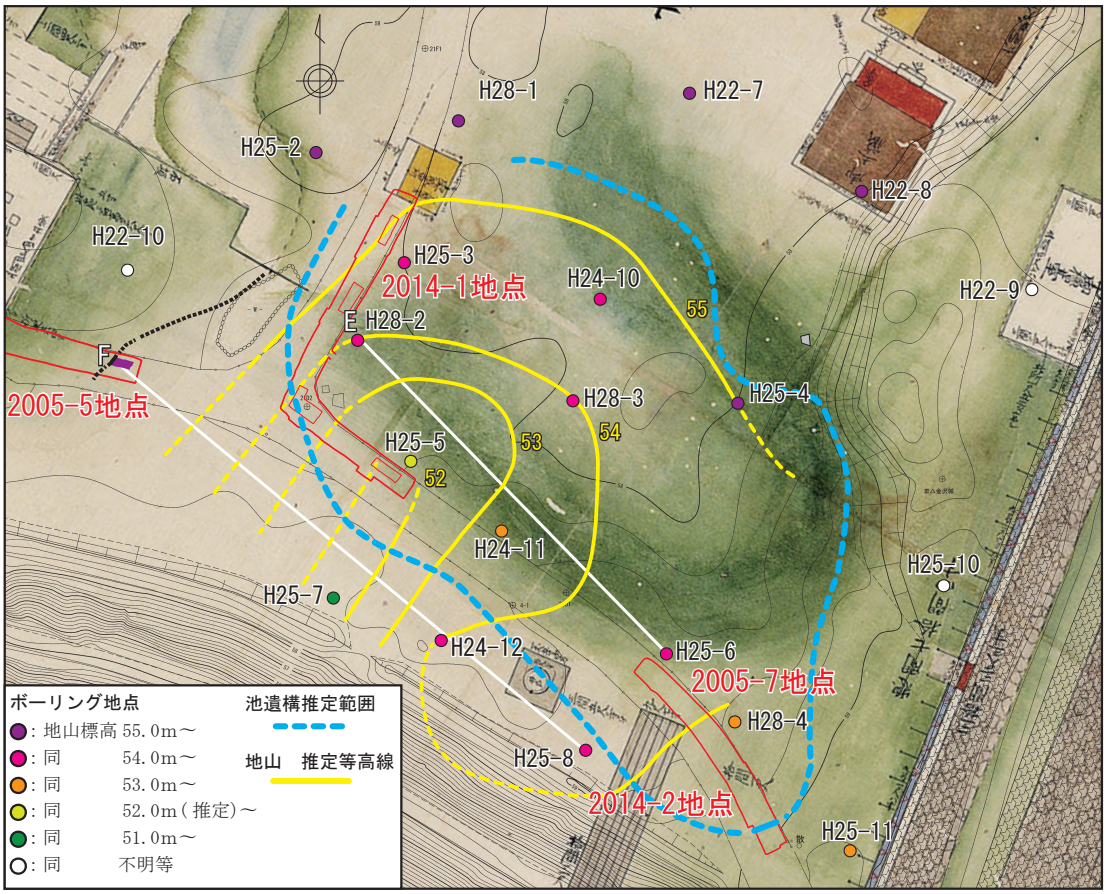
発掘調査地点（遺構面標高）
- ：池遺構外縁　58.8m～
- ：同　外縁　56.5m～
- ：同　法面

池遺構推定範囲

第 273 図　東ノ丸池遺構周辺　平面概要図



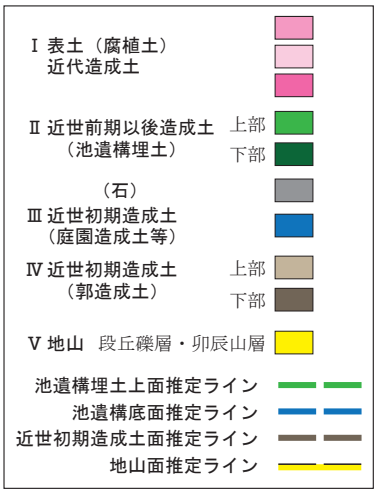
第 274 図　東ノ丸池遺構周辺　柱状断面配列図

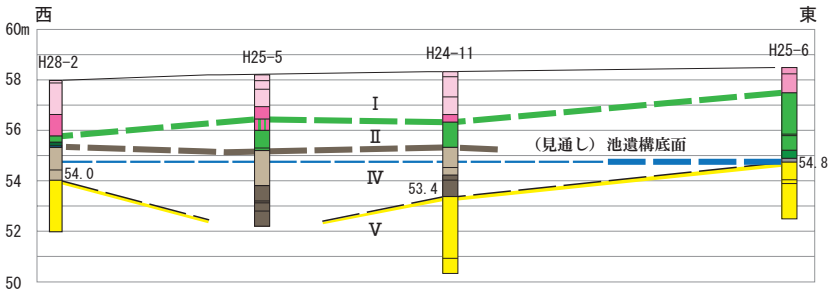


絵図：「金沢城本丸・東丸之図」［金沢市立玉川図書館蔵］

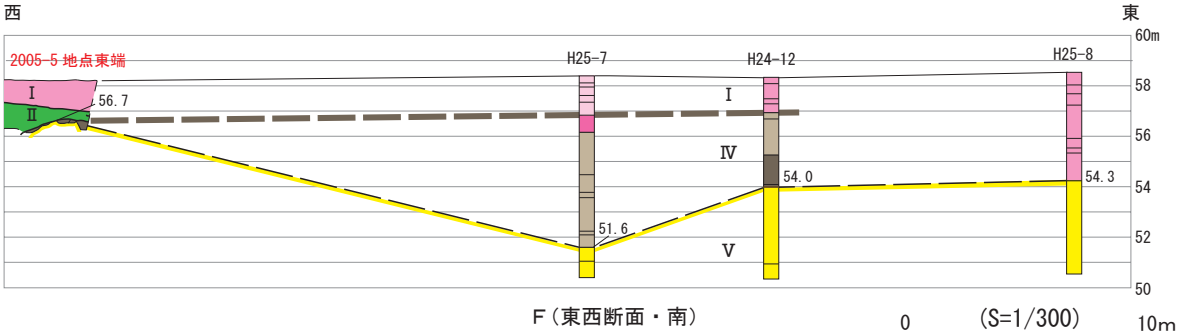
0 S=1/500 40m

東ノ丸南部地山面推定等高線





E（東西断面・北）



F（東西断面・南） 0 (S=1/300) 10m

第 275 図　東ノ丸南部地山推定等高線・柱状断面配列図

H25-2地点

H25-7地点

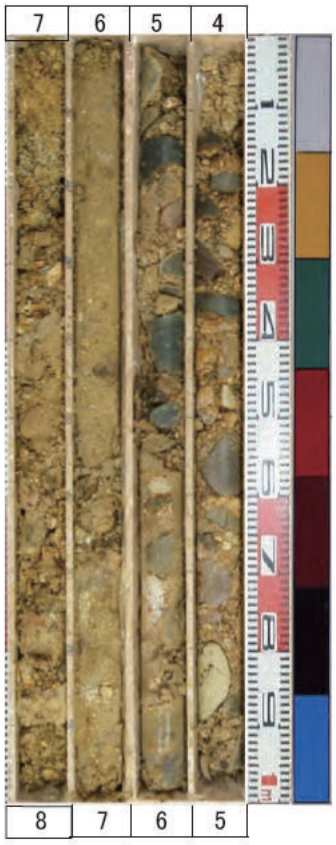
H25-9地点

H28-3地点

H28-4地点

第 276 図　ボーリング作業風景写真

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.01						
1	56.91	1.10	1.10		礫混り砂質シルト	暗褐	全体に草根を混入する。 砂分は、細～中砂主体。 礫は径10～20㎜の亜円礫主体。 最大径は80㎜程度。 全体に黄色と黒色を呈する砂が混入する。
	56.61	0.30	1.40		シルト	茶褐 暗褐	比較的均質なシルト。深度1.3～1.4mは細砂分を含む。
2	56.01	0.60	2.00		礫混りシルト	茶褐	比較的均質なシルト。 径10㎜程度の亜角礫を少し混入。 所々に黄十黒の混土を挟む。
	55.21	0.80	2.80		砂質シルト	茶褐	細砂分を含むシルト。 深度2.4mからは砂分やや多い。 整地土と考えられる。 コアは強い指圧で凹む程度。
3	54.86	0.35	3.15		礫混りシルト質砂	褐灰	砂は細砂主体。半固結状を呈する。 径10㎜程度の亜円礫を少し混入する。
4					シルト混り砂礫	褐灰	全体にシルト分を少量混入する砂礫。 締まりはやや緩い状態。 礫は、径10～40㎜の亜角～亜円礫主体。 最大径は70㎜程度。 マトリックスは、砂分が優勢で、中～粗砂主体。 深度4.0～4.5m、5.0～5.5mは粗砂が多い。
5							
6	52.01	2.85	6.00				
7	50.81	1.20	7.20		礫混りシルト質砂	黄灰	径5～30㎜程度の礫を混入する砂。 砂分は、微細～細砂主体。 深度6.00～6.55mは微細砂主体。 深度6.55～7.20mは全体にシルト分を多く混入する。
8	50.01	0.80	8.00		シルト混り砂礫	褐灰	全体にシルト分を少量混入する砂礫。 基質は緻密で締まった状態である。 マトリックスは、砂分が優勢で、中～粗砂主体。



〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卯辰山層

第277図　ボーリングコア詳細柱状図1（H22-6地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	57.98						
					礫混り砂質シルト	暗黒褐	軟質なシルトで全体に草根を混入。砂分は細砂主体。深度0.0～0.1mはシルト質砂で表土。礫は径20～50㎜の亜円～亜角礫主体。深度0.4mに、赤褐色の陶器焼片、及びL＝100㎜程度の釉薬瓦片を混入。
	57.43	0.55	0.55				
					玉石混り砂質シルト	暗褐	
1	56.98	0.45	1.00				L＝80～100㎜の玉石を含むシルト。砂分は微細砂主体。コアは、指圧で容易に凹む程度の硬さを示す。
					礫混り砂質シルト	暗褐	
						暗灰褐	やや軟質なシルトで、砂分は部細～細砂主体。礫は、径10～30㎜の亜角～亜円礫主体。最大径は60㎜程度。
2	55.88	1.10	2.10				深度1.5mに黒色炭化物を混入する。深度1.6mに20㎜程度の土器を混入する。深度1.9m～2.1mに黄十黒の混土を挟む。
					砂混りシルト	茶褐	全体に均質なシルト。砂分は、微細砂主体。コアは、固結状で強い指圧で凹む硬さ。
3							深度3.1～4.0mは粘土分が多く比較的軟質である。
4	53.53	2.35	4.45				深度3.1～3.5mは含水比が高く特に軟らかい。
					シルト質砂礫	灰褐	全体にシルト分を多く混入する砂礫。マトリックスは、シルトが優勢。礫は、径10～50㎜の亜角～亜円礫主体。基質は緻密で締まった状態である。深度6.4m、7.9m付近にL＝150㎜程度の礫を混入する。
5							
6							
7							
8	49.98	3.55	8.00				

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卯辰山層

第278図　ボーリングコア詳細柱状図2（H22-7地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.04						
1	56.94	1.10	1.10		礫混りシルト	暗褐	全体に草根を混入する。 深度0.2mに燻瓦片を混入する。 深度0.4～1.0mに径40～50㎜の亜円礫を少量混入する。 最大径＝70㎜。
	56.29	0.65	1.75		礫混り砂質シルト	暗褐灰	径20～40㎜の亜円礫を少し混入する。最大径＝60㎜。深度1.2～1.3mに細～中砂層を挟む。深度1.4m付近に黒色炭化物を混入する。深度1.7m付近に径50㎜の赤戸室石を混入する。深度1.75mに灰色の粘土層を挟む。
2	56.04	0.25	2.00		砂質シルト	褐灰	
	55.64	0.40	2.40		礫混り砂質シルト	黄褐	径10㎜程度の亜円礫を若干混入。粘土分を少し含み、粘性強い。
3	54.69	0.95	3.35		シルト	黒褐	砂分は、細～中砂主体。 全体に径10㎜程度の亜角礫を若干混入。整地土と考えられる。
4						褐	比較的均一質な半固結状を呈するシルト層。 上部に20㎜程度の亜円礫を僅かに混入する。 3.3～3.4m間で色調が黒褐色から褐色へ漸移している。 下部にいくにつれて細砂分を含むようになる。 深度5.5～5.8mは砂質シルト。
5	52.24	2.45	5.80				
6					シルト混り砂礫	褐灰	全体にシルト分を混入する砂礫。 礫は、径30～50㎜の亜角～亜円礫主体。 最大径＝140㎜。 深度6.5mまではシルト分を多く含み、締まりはやや緩い状態。 6.5m以深はマトリックスは砂分が優勢で、中～粗砂主体。
7							
8	50.04	2.20	8.00				

〈凡例〉

- Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土
- 表土（腐植土）近代造成土上層
- 近代造成土下層
- Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土）上部
- 下部
- （石）
- Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
- Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土）上部
- 下部
- Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
- Ⅴ 地山 黒ボク層
- 段丘礫層・卯辰山層

第279図　ボーリングコア詳細柱状図3（H22-8地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
		57.96					
1	56.96	1.00	1.00		礫混りシルト	暗褐	全体的に不均質で、微細～細砂を僅かに含み、径2～4cmの亜円礫をまれに混入する。 部分的に腐植質を示す。 0.4mに径10cmの大礫含む。
	56.76	0.20	1.20		砂混りシルト	黒褐	腐植質で、草の根を所々に混入する。 以深のシルト質砂に漸移する。
	56.56	0.20	1.40		シルト質砂	褐灰	均質なシルト質細砂からなる。
2	55.96	0.60	2.00		礫質シルト	暗褐～灰黄褐	砂分を不均質に含む。径1～3cmの亜円～亜角礫を混入し、径4～7cmの中～大礫が点在する。 1.60～2.00mは径4～7cmの中～大礫を多産する。シルトは黄灰色を呈す。
	55.61	0.35	2.35		礫混りシルト	暗褐	有機質なシルト。2.10mに釉薬瓦片を含む。2.20～2.30cmに赤色粒(焼土)が点在する。
	55.46	0.15	2.50		礫質シルト	灰赤	
	55.34	0.12	2.62		砂混りシルト	黒褐	2.50mに赤戸室を含む。
3	54.91	0.43	3.05		シルト質砂礫	暗褐～灰黄褐	黒・黄の混土。2.6mに炭化物片を含む。
	54.61	0.30	3.35		砂混りシルト	暗褐	径2～7cmの亜円礫主体。最下部に有機質シルト挟む。2.90mに青戸室の礫を含む。
4						灰褐	黒・黄の混土。 径3～5cmの亜円～板状円礫主体の礫支持で、径7cmを超える大礫が点在する。(最大径は13cm)。 礫種は流紋岩～安山岩質溶岩および火砕岩主体。
5						黄褐	マトリックスは全体として固結し、指圧では凹まない。
					シルト混り砂礫	暗灰褐	3.85、5.75mに青戸室、4.45mに赤戸室の礫を含む。
6						黄褐	5.25～5.45mはマトリックスがやや腐植質な砂混りシルトからなり、5.35mに炭化物片を含む。 固結度は低く、指圧で容易に凹む。
						黒褐	5.80～6.05mは径1cmの亜円礫を含む塊状のシルト混り粗砂を挟む。
7						黄褐	6.05m以深はクサリ礫が点在し、6.90m以深で多産する。 6.35～6.70mはマトリックスが炭化物を多産するシルトからなる。 6.15mに赤戸室、6.90mに青戸室の礫を含む。
8	49.96	4.65	8.00				

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卯辰山層

第280図　ボーリングコア詳細柱状図4（H24-10地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.35						
	58.15	0.20	0.20		砂混りシルト	黒	表土。 腐植質で、枯れ葉や草の根を多産する。
					有機質シルト	暗褐	軟質で、砂分を不均質に多く含む。 径0.2～5cmの亜円～亜角礫を多産し、 径6cm前後の中～大礫を混入する。 0.80～1.00m炭化物含む。
1	57.35	0.80	1.00				
					礫質シルト	暗褐～灰黄褐	径1～6cmの礫を多く含む(最大径10cm)。 赤色粒(焼土)点在する。 1.15mに青戸室の礫、炭化物片を含む。
	56.65	0.70	1.70				
	56.35	0.30	2.00		砂混りシルト		均質で砂分やや多く含む。 赤色粒(焼土)点在する。
2					礫質シルト	暗褐	径1～6cmの礫を不均質に混入する。 含水比高くやや軟質である。 赤色粒(焼土)点在する。
3	55.35	1.00	3.00				
					礫混りシルト	暗褐～灰黄褐	上位層と概ね同様の様相を呈するが、 礫分はやや少ない。
	54.55	0.80	3.80				
					砂質シルト	暗褐	有機質で含水比高く軟質。 礫分を不均質に含む。
4	54.25	0.30	4.10				
	54.05	0.20	4.30		礫混りシルト	暗褐～灰黄褐	黒・黄の混土で炭化物片を所々に含む。
					礫質シルト	灰褐～暗灰	上部10cmは灰白色の粘土からなり、さらにその下位には厚さ1cmの炭化物の薄層を挟む。 細～粗砂、細～中礫を含み、径3～5cmの亜角～亜円礫を混入する。全体的に不均質で色調変化が著しい。 4.65mにいぶし瓦含む。 4.65m、4.75mに厚さ1～2cm程度の青灰～褐色の粘土層を挟む。
5	53.40	0.65	4.95				
6					シルト混り砂礫	灰褐	径1～2cmの亜円礫主体のやや基質支持で、径3～7cmの亜角～亜円礫が点在する。 礫種は、流紋岩～安山岩質溶岩および火砕岩主体。 礫はほとんどがクサリ礫で、径の大きいものは、外縁のみが変質している。 マトリックスは固結し、指圧では凹まない。 6.90mに赤戸室の礫を含む。
7	50.95	2.45	7.40				
					礫混り砂	暗灰褐	中砂主体で、細粒分に富む。径3～5cmの亜円礫を所々に含む。塊状無層理で、葉理などの堆積構造は不明瞭。 固結度はやや低く、指圧で崩れる。 7.55m、7.70mに炭化物を含む。
8	50.35	0.60	8.00				

〈凡例〉

- Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土
- 表土（腐植土）近代造成土上層
- 近代造成土下層
- Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部
- 下部
- （石）
- Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
- Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
- 下部
- Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
- Ⅴ 地山 黒ボク層
- 段丘礫層・卯辰山層

第 281 図　ボーリングコア詳細柱状図 5（H24-11 地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.37						
	58.12	0.25	0.25		砂混りシルト	黒褐	表土。腐植質で、枯れ葉や草の根を多産する。砂分を僅かに含み、基底に径1～3cmの亜円～亜角礫を混入する。
	57.52	0.60	0.85		礫混りシルト	褐灰	細～中礫を多産し、径1cmの亜円～亜角礫を所々に含む。
1	57.32	0.20	1.05		砂混りシルト	暗灰	全体として均質な、やや腐植質のシルトからなり、砂分～細礫を僅かに含む。
	56.97	0.35	1.40		礫質シルト	灰褐～暗褐	砂分を不均質に混入する。細～中礫を多産し、径1cmの亜円～亜角礫を所々に含む。
	56.72	0.25	1.65			暗褐	腐植質で、腐植木片や木の根を含む。径1～3cmの亜円～亜角礫を多産する。最上部に径9cmの粗石含む。
2					礫混りシルト	暗褐～灰黄褐	砂分を不均質に混入し、細～中礫を多産し、径3～6cmの亜円～亜角礫が点在する。 赤色粒(焼土)が点在し、炭化物片を僅かに含む。 2.5mに青戸室の礫を含む。
3	55.29	1.43	3.08				
	54.12	1.17	4.25		礫質シルト	暗灰褐	黒・黄の混土で、径3～6cmの亜円～亜角礫を多産する。 3.55～3.68、3.90mに炭化物片を含む。
4	54.02	0.10	4.35		有機質シルト	黒褐	全体として均質で、腐植質なシルトからなり、褐色のクサリ礫(径0.2～2cm)が点在する。
5					シルト混り砂礫	灰褐	亜円～板状円礫を主体とする礫支持。礫種は流紋岩～安山岩質溶岩および火砕岩主体。 マトリックスは固結し、指圧では凹まない。 4.9mまでは径1～3cm主体で、径7～10cmの大礫が点在する。 4.9m以深は径4～10cm主体(最大径12cm)。 5.9m以深はクサリ礫を多産し、火砕岩礫は内部まで軟質化し、溶岩の大礫は外周が褐色を呈す。 6.30mに赤戸室、6.35、6.90mに青戸室の礫を含む。
6						黄褐	
7	50.97	3.05	7.40				
	50.37	0.60	8.00		礫混り砂	灰褐	中～粗砂主体で、細礫を含む。部分的に傾斜15°の葉理が発達する。 6.87m以深は径1cmの円礫を含む細砂からなる。
8							

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卯辰山層

第 282 図　ボーリングコア詳細柱状図 6（H24-12 地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	57.11						
	56.98	0.13	0.13		有機質シルト	黒褐	表土。草根多く含む。
	56.56	0.42	0.55		礫混りシルト		全体的に不均質でやや有機質。 粗砂～径0.5cm(最大径9cm)の亜角～亜円礫を不均質に多く含む。
	56.44	0.12	0.67		シルト質砂礫	暗灰	径0.5～3cmの亜円礫主体。 マトリックスは砂混りシルト。 最下部には最大径9cmの礫含む。
1	56.21	0.23	0.90		礫混りシルト	黄褐	
						褐	黒・黄の混土。全体的に不均質で粘土分多く含む。黄褐色シルトの割合がやや高く、大型ブロック状で混入する。 粗砂～径0.5cm程度(最大径2cm)の亜角～亜円礫を僅かに含む。
	55.11	1.10	2.00		礫混り砂混りシルト	赤褐	
2	54.88	0.23	2.23			褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。 中砂～径6cm(最大径15cm)の亜角～亜円礫を非常に多く含む。 下部ほど締り良く、最下部は指圧でようやく凹む程度。1.35m赤戸室礫(径7cm)、1.40m青戸室礫(径6cm)。 1.45～1.75mは一体の赤戸室石の巨石(L＝30cm)。1.8m赤戸室礫(径4cm)。
3							2m以深礫分若干少なくなる。 2.05m赤色粒(焼土)含む。 最下部には径8cm+の礫含む。
4					シルト混り砂礫	灰褐	粗砂～径3cm(最大径11cm)の亜角～亜円礫主体。 径5cm以上の礫を5～7個/m含む。 4.4m以深全体的に礫径やや大きくなる。 2.25～2.95mマトリックスは暗褐色の砂混りシルトで、上位層と類似した色調・様相を呈する。 2.95m以深マトリックスはシルト混り中砂。 所々クサリ礫化がみられ、中～大礫は一部外周が変色し褐色を呈す。 柱状コア部分は指圧では崩れないが、一部変質部分は崩れやすい。
5							
6	51.11	3.77	6.00				

〈凡例〉

- Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土
- 表土（腐植土）近代造成土上層
- 近代造成土下層
- Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部 / 下部
- （石）
- Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
- Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部 / 下部
- Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
- Ⅴ 地山 黒ボク層
- 段丘礫層・卯辰山層

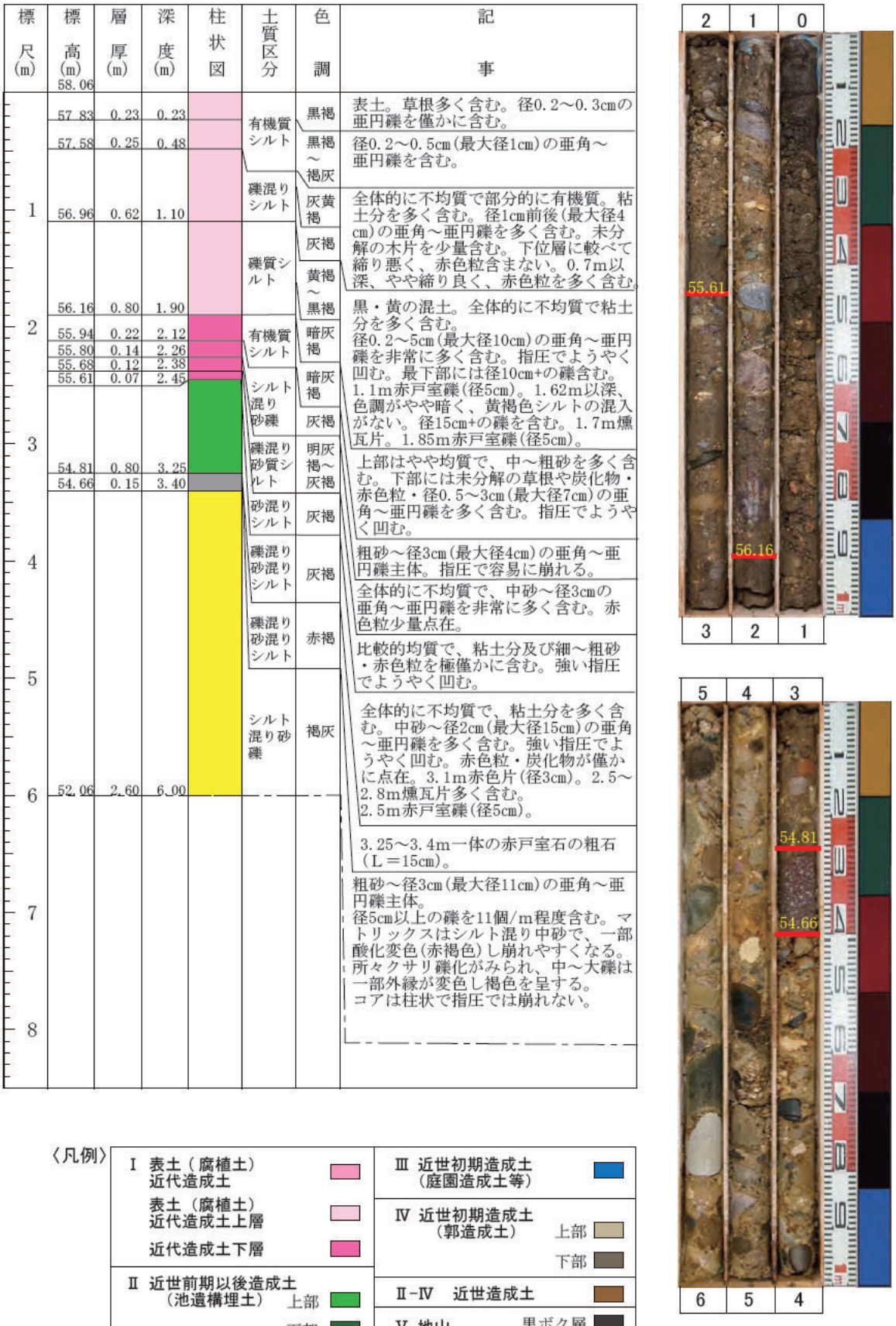
第283図　ボーリングコア詳細柱状図7（H25-1地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.06						
	58.01	0.05	0.05		有機質シルト	黒褐	表土。草根多く含む。
					礫混り砂混りシルト		全体的に不均質で有機質。草根僅かに含む。粗砂～径1cm(最大径2cm)の亜角～亜円礫を含む。
	57.49	0.52	0.57				
1					シルト質砂礫	灰褐	粗砂～径5cm(最大径9cm)の亜角～亜円礫主体。 マトリックスは砂混りシルト。 一部明黄褐色シルトをブロック状に含む。 指圧で容易に崩れる。 0.85m青戸室礫(径5cm)。
	56.11	1.38	1.95				
2	56.02	0.09	2.04		礫混りシルト	灰黄褐	全体的に不均質で粗砂～径0.5cm(最大径1cm)の亜角～亜円礫を多く含む。指圧で容易に凹む。
	55.86	0.16	2.20		粘土質シルト	黄褐	比較的不均質。黄と茶黒色の粘土質シルトがマーブル状に混ざる。指圧でようやく凹む。
	55.76	0.10	2.30		粘土質シルト	明黄褐	ローム。均質で、強い指圧でようやく凹む。
	55.66	0.10	2.40		砂混りシルト	灰白	中～粗砂を多く含む。径0.1～0.2cmの軽石片を多く含み、下位ほど砂分・軽石片多くなる
3							
4					シルト混り砂礫	明灰褐～褐	粗砂～径3cm(最大径11cm)の亜角～亜円礫主体。 径5cm以上の礫を5～13個/m含む。 マトリックスはシルト混り中砂。 柱状コア部分は指圧では崩れないが、一部変質変色部分は崩れやすい。 中～大礫は一部外縁が変色し、褐色を呈する。 2.8～5m間マトリックス酸化変質し、指圧で容易に崩れる。 赤褐色を呈する。
5							
	52.06	3.60	6.00				
6							

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卵辰山層

第284図　ボーリングコア詳細柱状図8（H25-2地点）



第285図　ボーリングコア詳細柱状図9（H25-3地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	57.89						
	57.64	0.25	0.25		有機質シルト	黒褐	表土。径0.5～1cmの亜角～亜円礫を僅かに含む。
1	56.61	1.03	1.28		有機質シルト	黒褐～褐灰	全体的に不均質で粘土分多く含む。粗砂～径2cm(最大径4cm)の亜角～亜円礫を僅かに含む。指圧で容易に崩れる。最下部に赤色粒が僅かに点在。
	56.22	0.39	1.67		礫混り砂混りシルト		全体的に不均質で粘土分多く含む。粗砂～径1cm(最大径8cm)の亜角～亜円礫を多く含む。所々径1cmの黄褐色シルトをブロック状に混入する。指圧でようやく凹む。1.45m炭化物(径1cm)。
	55.97	0.25	1.92		礫混りシルト	灰黄褐	
2	55.55	0.42	2.34		粘土質シルト	黒褐～黄褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。粗砂～径1cm(最大径2cm)の亜角～亜円礫を僅かに含む。指圧でようやく凹む。1.7m、1.85m燻瓦片。1.78～1.87m黒・黄の混土。1.87～1.92m灰色粘土質シルト主体。
	55.23	0.32	2.66		粘土質シルト	黄褐～明黄褐	
	54.99	0.24	2.90		粘土質砂礫	黒褐	
3	54.55	0.44	3.34		粘土質シルト	明灰	黒・黄の混土。比較的均質で、明黄褐色シルト(ローム)の割合がやや高い。径1cmの円礫を僅かに含む。
						黒褐	
4	53.49	1.06	4.40		粘土質シルト	黄褐～明黄褐	比較的均質。黒褐色粘土質シルト(黒ボク)主体で、明黄褐色シルト(ローム)を径1cm以下のブロック状に含む。強い指圧でようやく凹む。
	52.89	0.60	5.00		シルト質砂	褐灰～灰	径5～7cmの亜角礫主体。マトリックスは黒・黄の混土。強い指圧でようやく崩れる。2.7m青戸室礫(径5cm)。
5							黒ボク。概ね均質で有機質。所々未分解の草根含む。ロームをブロック状に僅かに含む。下位層との境は漸移的。強い指圧でようやく凹む。
	51.89	1.00	6.00		シルト混り砂礫	褐灰	ローム。概ね均質で、下部には径0.2cm以下の軽石片を多く含む。強い指圧でようやく凹む。
6							細～中砂主体で、4.7m以深はシルト層との互層。径0.2cm以下の軽石片を多く含む。4.7m以浅は径1～5cmの亜円礫を僅かに含む。強い指圧でようやく凹む。
7							粗砂～径2cm(最大径12cm)の亜角～亜円礫主体。径5cm以上の礫を8～10個/m含む。マトリックスはシルト混り中砂～シルト質中砂。下位ほど礫径大きくなり、マトリックスはシルト質となる。指圧では崩れない。
8							

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卯辰山層

第 286 図　ボーリングコア詳細柱状図 10（H25-4 地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.20						
	57.97	0.23	0.23		有機質シルト	黒褐	表土。草根多く含む。径0.5～1cmの円礫を僅かに含む。
	57.63	0.34	0.57			褐灰	全体的に不均質で粘土分を多く含む。中砂～径1cm(最大径11cm)の亜角～亜円礫を多く含む。指圧で容易に凹む。所々赤色粒点在。
1						灰褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。中砂～径1cm(最大径11cm)の亜角～亜円礫を多く含む。指圧で容易に凹む。礫が多い部分と少ない部分が混在。1.26～1.75m間は、径3～4cmの礫が混じるが、基調は砂質。1.90m付近赤色粒点在。
	56.94	0.69	1.26				
	56.45	0.49	1.75		礫混りシルト	暗灰褐	
2						灰褐	
	56.00	0.45	2.20				2.2m以深礫分やや少ない。2.4m付近赤色粒、2.7m炭化物(径2cm)混じる。
	55.30	0.70	2.90			褐灰	
3	55.20	0.10	3.00		砂質シルト	褐	細砂を多く含み、径1cm前後の亜角礫僅かに含む。指圧で凹む
4					礫混り砂混りシルト	灰褐～黄褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。上位層に較べ粘土分の割合高く、礫分少ない。中砂～径0.5cm(最大径7cm)の亜角～亜円礫を不均質に含む。指圧で凹む。
	53.81	1.39	4.39				
	53.20	0.61	5.00			黒褐～黄褐	黄・黒の混土。全体的に不均質で粘土分多く含む。上位層に較べ礫分少ない。中砂～径2cm(最大径3cm)の亜角～亜円礫を僅かに含む。指圧で凹む。
5	53.05	0.15	5.15		シルト混り砂		中～粗砂主体。指圧で凹む。
	52.80	0.25	5.40		砂混り粘土質シルト	灰褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。指圧で凹む。
6	52.20	0.60	6.00		シルト混り砂礫	褐灰	全体的に不均質。粗砂～径4cm(最大径6cm)の亜角礫主体。マトリックスは砂混りシルトで、部分的に有機質。指圧で容易に崩れる。5.5m燻瓦片。5.6m、5.8m青戸室礫(径5cm)。

〈凡例〉

- Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土
- 表土（腐植土）近代造成土上層
- 近代造成土下層
- Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部
- 下部
- （石）
- Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
- Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
- 下部
- Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
- Ⅴ 地山 黒ボク層
- 段丘礫層・卯辰山層

第287図　ボーリングコア詳細柱状図11（H25-5地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.50						
	58.25	0.25	0.25		有機質シルト	黒褐	表土。草根多く含む。径0.5～1cmの亜角～亜円礫を僅かに含む。
					砂混りシルト	灰褐	全体的に不均質で上部はやや有機質。粘土分多く含む。中砂～径1cm（最大径2cm）の亜角～亜円礫を含む。指圧で容易に凹む。下部には赤色粒を多く含む。0.65m径1.5cmの赤色片含む。
1	57.50	0.75	1.00				
					礫混りシルト	黒褐～黄褐～暗灰	全体的に不均質で部分的に有機質。粘土分多く含む。中砂～径2cm（最大径5cm）の亜角～亜円礫を多く含み、部分的に礫分優勢となる。炭化物・赤色粒多く点在する。
2						灰褐	0.5mまでは、色調変化に富む。 1.05m燻瓦片。 2.02m以深礫分やや少なく、赤色粒は含まない。 2.0～2.15m大型木片。
	55.86	1.64	2.64				
	55.80	0.06	2.70		粘土混り砂礫	灰	径1～5cmの亜角～亜円礫主体。マトリックスは上位層と同じ灰褐色シルト。指圧で容易に崩れる。
3					礫混りシルト	灰褐	
	55.22	0.58	3.28		礫混り砂混りシルト	暗灰～灰褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。径0.2～5cmの亜角～亜円礫多く含む。指圧で容易に凹む。 2.87～3.28m以深礫分やや少ない。
	54.90	0.32	3.60				
	54.75	0.15	3.75				
4					礫混りシルト	褐灰	層相は上位層とほぼ同等だが、上位層に較べて礫分多い。所々赤色粒点在。指圧でようやく凹む。
						青灰	3.6～3.75m一体の青戸室の粗石（L＝15cm）。
	54.05	0.70	4.45				
	53.90	0.15	4.60		シルト混り砂	明黄褐～灰白	全体的に不均質で、径0.2～0.5cm（最大径1cm）の亜角～亜円礫を僅かに含む。深度方向に色調・粒度が漸移的に変化する。指圧でようやく凹む。 3.9m青戸室礫（径5cm）。 4.1～4.2m、4.4～4.45mやや砂混りで径0.2～0.5cmの軽石片を多く含む。
5						黄褐	
					シルト混り砂礫	褐灰	細～中砂主体。径2～4cmの亜角礫を僅かに含む。
	52.50	1.40	6.00				粗砂～径3cm（最大径8cm）の亜角～亜円礫主体。径5cm以上の礫を12個/m含む。マトリックスはシルト混り中砂。指圧では崩れない。 5.3m青戸室礫（径5cm）。
6							

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卯辰山層

第288図　ボーリングコア詳細柱状図12（H25-6地点）

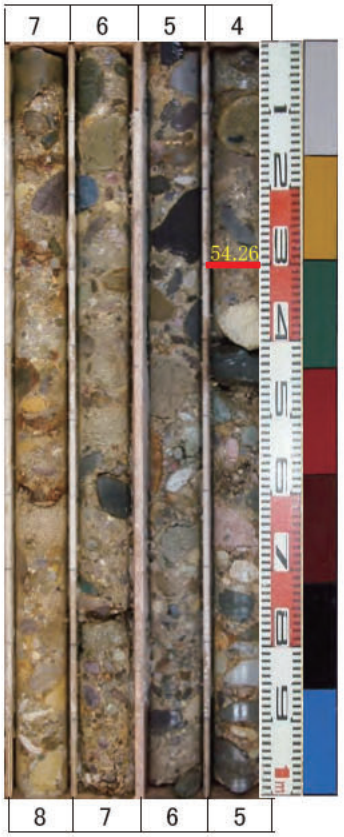
標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.42						
	58.14	0.28	0.28		有機質シルト	黒褐	表土。草根を多量に含む。径5mm程度（最大径10mm）の亜角～亜円礫を僅かに含む。
	57.98	0.16	0.44			灰	層相は上位層とほぼ同等で、上位層に較べてやや締り良い。径5mm+の大型木片含む。
	57.65	0.33	0.77				
1	57.38	0.27	1.04		礫質シルト	暗黄褐	不均質で粘土分多く含む。中砂～径0.5cm（最大径8cm）の亜角礫多く含む。指圧で容易に凹む。
					砂混りシルト	黒褐～黄褐	黄・土の混土。概ね均質で粘土分多く含む。指圧で容易に凹む。
	56.86	0.52	1.56				
2					シルト質砂礫	灰褐	中砂～径6cm（最大径8cm）の亜角～亜円礫主体で、部分的にマトリックス優勢。指圧で容易に崩れる。1.50m燻瓦片。
	56.18	0.68	2.24		礫混りシルト	褐灰	上下層に比べやや均質。中砂～径2cm（最大径6cm）の亜角～亜円礫を多く含む。所々赤色粒点在。指圧で容易に凹む。
3					礫混り砂混りシルト	褐灰	層相はほぼ上位層と同等で、上位層に較べて細礫分多く含む。中～下部には所々炭化物・赤色粒点在。強い指圧でようやく凹む。2.4m燻瓦片。3.60m以深、やや粘土質となる。
							全体的に不均質で粘土分多く含む。中砂～径5cm（最大径8cm）の亜角～亜円礫を多く含む。強い指圧でようやく凹む。
	54.50	1.68	3.92				
4	53.80	0.70	4.62		礫質シルト		比較的均質な粘土質シルト主体。希に径1cm前後の亜角礫含む。下部は明黄褐色シルトを径1cm以下のブロックで含む。最下部は帯状に赤褐色を呈する。粗砂粒大の軽石片多く含む。
	53.59	0.21	4.83		礫混りシルト		黒・黄の混土。全体的に不均質で粘土分多く含む。
5					礫混りシルト	黒褐～黄褐	4.83～5.20m黒褐色粘土質シルト(黒ボク)の割合高く、5.1～5.2mは径1cm前後の亜角～亜円礫を含む。5.2～5.62m黄褐色シルト(ローム)の割合高く、径1～2cm(最大径3cm)の亜円礫を所々含む。5.62～6.16m黒褐色粘土質シルト(黒ボク)の割合高く、径0.2～1cm(最大径2cm)の亜角～亜円礫を多く含む。最下部は礫分優勢。
6	52.26	1.33	6.16				
	52.12	0.14	6.30		シルト質砂礫	暗灰	径0.5～3cm(最大径4cm)の亜円礫主体。マトリックスは上位層と同じ。指圧で容易に崩れる。
	51.62	0.50	6.80		礫質シルト		
7					シルト混り砂礫	褐灰	全体的に不均質で黒褐色粘土質シルト(黒ボク)主体。径0.5～5cm(最大径5cm)の亜角～亜円礫を非常に多く含む。強い指圧でようやく凹む。
	51.07	0.55	7.35				
					シルト混り砂	褐	中砂～径5cm)最大径9cm)の亜角～亜円礫を多く含む(径5cm以上の礫を僅かに含む)。指圧では崩れない。最下部に炭化物点在。
8	50.42	0.65	8.00				中～粗砂主体。若干のシルト分を含む。所々径0.2～0.5cmの亜円礫含む。

〈凡例〉

- Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土
- 表土（腐植土）近代造成土上層
- 近代造成土下層
- Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部 / 下部
- （石）
- Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
- Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部 / 下部
- Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
- Ⅴ 地山 黒ボク層 / 段丘礫層・卵辰山層

第289図　ボーリングコア詳細柱状図13（H25-7地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.56						
	58.06	0.50	0.50		有機質シルト	黒褐	表土。草根多く含む。 中～粗砂を僅かに含む。
	57.71	0.35	0.85				全体的に不均質。所々草根含む。粗砂～径0.3cmの亜角礫を僅かに含む。赤色粒僅かに点在。 指圧で容易に凹む。下位層との境は漸移的。
1	57.26	0.45	1.30		礫混り砂混りシルト	灰褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。中砂～径1cm(最大径7cm)の亜角～亜円礫を含む。所々赤色粒点在。指圧で容易に凹むが上位層より締り良い。
2						灰	全体的に不均質で、粘土分多く含む。中砂～径3cm(最大径30cm)の亜角～亜円礫を多く含む。所々赤色粒・炭化物点在。指圧で凹み、下部ほど締り良い。1.5～1.8m一体の安山岩の巨石(L=30cm)。1.43、1.85m燻瓦片。2.05～2.10m粘土質シルト(黒・黄の混土)主体。2.15m赤戸室礫(径5cm)。2.33m以深、礫分少なく、礫径も小さい(径1cm以下(最大径3cm))。
	55.94	1.32	2.62			灰褐	
	55.56	0.38	3.00		シルト混り砂礫	灰褐	
3	55.36	0.20	3.20			明青灰	径2～20cmの亜角～亜円礫主体。マトリックスは上位層と同じ。2.8～3.0m一体の青戸室の粗石(L=20cm)。
					礫質シルト	灰褐	
					シルト混り砂礫	灰褐	全体的に不均質。細砂を多く含み、部分的に有機質。径0.5～2cm(最大径4cm)の亜角～亜円礫を非常に多く含む。赤色粒僅かに点在。指圧でようやく崩れる。 3.16m赤戸室礫(径2cm)。
4						明青灰	
	54.26	1.10	4.30			灰褐	全体的に不均質。径0.5～6cm(最大径35cm)の亜角～亜円礫主体。マトリックスは上位層と同じだが、最下部(4.14～4.18m)は粘土質シルトとなる。指圧でようやく崩れる。3.35～3.7m一体の青戸室の巨石(L=35cm)。 4.00m青戸室礫(径7cm)。
5							
6					シルト混り砂礫	灰褐	粗砂～径5cm(最大径10cm)の亜角～亜円礫主体。 径5cm以上の礫を8個/m含む。 マトリックスはシルト混り中砂。 部分的に幅1cm程度で帯状に変色し赤褐色を呈する。 礫は一部クサリ礫化。 中～大礫の一部は外縁部が変色し褐色を呈する。 指圧では崩れない。
7							
8	50.56	3.70	8.00				



〈凡例〉

Ⅰ 表土(腐植土)近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土(庭園造成土等)
表土(腐植土)近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土(郭造成土) 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土(池遺構埋土) 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
(石)	段丘礫層・卯辰山層

第290図　ボーリングコア詳細柱状図14(H25-8地点)

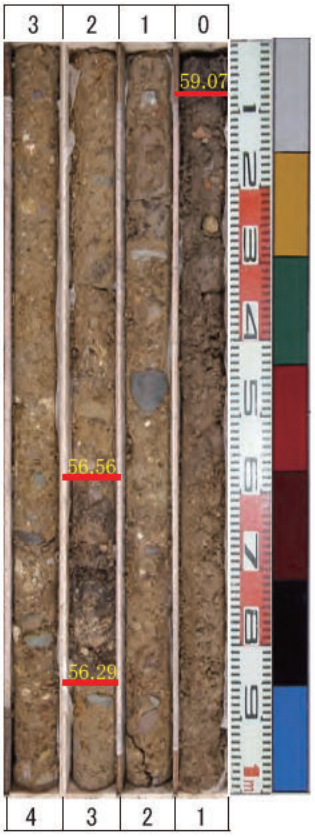
標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.98						
	58.79	0.19	0.19		有機質シルト	黒褐	表土。草根多く含む。
	58.48	0.31	0.50		礫混り砂混りシルト	黒褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。 上部は径0.5～1cm(最大径7cm)の亜円礫多く含み、径5cm以上の礫を僅かに含む。 下部は中砂～径0.3cm(最大径3cm)の亜角～亜円礫多く含み、所々赤色粒点在する。
	58.28	0.20	0.70			黒褐～褐灰	
	58.04	0.24	0.94				
1	57.86	0.18	1.12			灰褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。中砂～径0.3cm(最大径4cm)の亜角～亜円礫多く含み、下部ほど礫分および礫径が大きい。0.9m青戸室礫(径5cm)。
	57.12	0.74	1.86		礫混りシルト	黄灰褐	0.94m以深、上位層に較べ、軟質で含水やや高い。指圧で容易に凹む。
2	56.72	0.40	2.26		礫混りシルト	暗黄褐	全体的に不均質で砂分・粘土分多く含む。 中砂～径2cm(最大径5cm)の亜角～亜円礫を多く含む。 所々赤色粒点在。指圧で容易に凹む。
	56.13	0.59	2.85		礫混り砂混りシルト	黒褐～明黄褐	1.86m以深、やや色調暗く、礫分多い。 1.95m燻瓦片。
3	56.02	0.11	2.96				黒・黄の混土。層相は上位層と同じだが、やや色調暗く、礫分多い。中砂～径5cm(最大径7cm)の亜角～亜円礫を多く含む。 指圧で容易に凹む。
					砂質シルト	褐灰	全体的に不均質で中砂多く含む。径3cm以下の亜円礫を僅かに含む。指圧でようやく凹む。
4					礫混りシルト質砂	明褐灰	細～中砂主体。 細粒僅かに含む。 径0.2～0.5cm(最大径6cm)の亜角～亜円礫を不均質に多く含む。 指圧でようやく凹む。 3.65m厚さ0.2cmの有機質土層挟在する。 4.07m以浅所々灰白色のシルト混りの砂が径1～6cmの大きさでブロック状に混入する。
5	53.45	2.57	5.53				
						灰褐	5.53m以深、やや砂分多い。
6	52.29	1.16	6.69		礫混りシルト混り砂	褐灰	中～粗砂主体。細粒分僅かに含む。 径0.2～0.5(最大径4cm)の亜角～亜円礫を多く含む。 上位層に較べ礫分少ない。 所々炭化物点在。 指圧でようやく凹む。 7.79m炭化物(径1cm)。
7							
8	50.98	1.31	8.00				

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅳ 近世初期造成土？
（石）	Ⅴ 地山 黒ボク層
	段丘礫層・卯辰山層

第291図　ボーリングコア詳細柱状図15（H25-9地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	59.14						
	59.07	0.07	0.07		有機質シルト	黒褐	表土。草根多量に含む。中砂～径0.3cmの亜角～亜円礫を僅かに含む。
	58.57	0.50	0.57		砂混りシルト		全体的に不均質で中～粗砂を多く含む。所々径1～3cmの亜円礫・草根含む。0.28m以浅は赤色粒多く点在。
1					砂質シルト	灰黄褐	全体的に不均質。細砂を多く含む。径0.5～1cm（最大径5.5cm）の亜角～亜円礫を多く含む。1.05m以深、粘土分多く含む。
	57.94	0.63	1.20				
	57.88	0.06	1.26		有機質シルト	暗灰褐	指圧で容易に凹む。
							粘土分多く含む。
						暗黄褐	
2					礫混りシルト質砂	黄灰褐	細～中砂主体で、細粒分多く含む。径0.5～1cm（最大径5.5cm）の亜角～亜円礫含む。1.59m以深、礫径やや小さく、最大径2.5cm。1.91m以深、色調やや明るく、中砂分を多く含む。指圧でようやく凹む。
	56.81	1.07	2.33				
	56.67	0.14	2.47		礫質シルト	暗黄褐	径0.5～2cm（最大径6cm）の亜角～亜円礫を非常に多く含む。強い指圧でようやく凹む。
	56.56	0.11	2.58				
	56.29	0.27	2.85		礫混りシルト混り砂	黄褐灰	比較的均質な細～中砂主体。炭化物多く点在する。径4cmの亜円礫含む。
3					礫混りシルト	黒褐～明黄褐	黄・黒の混土。全体的に不均質で部分的に有機質。粘土分多く含む。径0.5cm（最大径3cm）程度の亜角～亜円礫多く含み下位ほど礫分多い。強い指圧でようやく凹む。
					礫混りシルト質砂	灰褐	全体的に不均質。細～中砂主体で径0.5～2cm（最大径5cm）の亜角～亜円礫を含む。強い指圧でようやく凹む。3.00～3.30m炭化物点在。4.2m炭化物点在。
4	54.84	1.45	4.30				
					シルト質砂	灰褐～明黄褐	全体的に不均質。細～中砂主体で褐灰色シルト質細～中砂と明黄褐色シルトが径4～8cmでブロック状に多く混入する。強い指圧でようやく凹む。4.4m炭化物点在。
	54.54	0.30	4.60		礫混りシルト質砂	灰褐	
5	54.18	0.36	4.96				
					シルト質砂	灰	全体的に不均質。細～中砂主体で径0.5～1cm（最大径6cm）の亜角～亜円礫を多く含む。
	53.86	0.32	5.28		礫混りシルト質砂	灰褐	概ね均質な細～中砂主体で、黄褐色のシルトをブロック状に含む。
6	53.01	0.85	6.13				全体的に不均質。細～中砂主体で径0.5～1cm（最大径3cm）の亜角～亜円礫を含む。5.75m炭化物点在。最下部には径6cmの礫含む。
					礫混り砂	暗黄褐	
	52.68	0.33	6.46				比較的均質な中砂主体で僅かに細粒分含む。径2～6cmの円礫を極まれに含む。所々明黄褐色のシルトをブロック状に混入する。
7					礫混りシルト質砂	灰褐	
							全体的に不均質。細～中砂主体で細粒分多く含む。径0.5～2cm（最大径3cm）の亜角～亜円礫を含む。所々厚さ5cm程度で黒褐色有機物となる。
8	51.14	1.54	8.00				

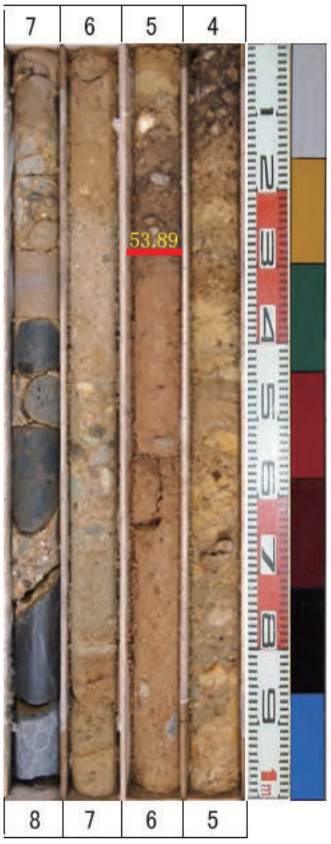


〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅳ 近世初期造成土？
（石）	Ⅴ 地山 黒ボク層
	段丘礫層・卯辰山層

第292図　ボーリングコア詳細柱状図16（H25-10地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	59.17						
	58.81	0.36	0.36		礫混り砂混りシルト	黒褐	表土。草根多く含む。中砂～径0.3cmの亜角～亜円礫を僅かに含む。
1	57.99	0.82	1.18		礫混り砂混りシルト	暗灰褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。中砂～径0.3cm（最大径7cm）の亜角～亜円礫を含む。所々赤色粒・炭化物点在。下部ほど炭化物の混入量多い。指圧で容易に凹む。
	57.94	0.05	1.23		有機質シルト	暗灰	粘土分多く含む。まれに径3cm以下の亜角礫含む。所々赤色粒点在。
2	57.02	0.92	2.15		礫混り砂混りシルト	暗灰褐	全体的に不均質で粘土分多く含む。中砂～径0.3cmの亜角～亜円礫を含み、まれに径3cm以下の亜角礫含む。下部には所々赤色粒点在する。指圧で凹む。
3					礫混り砂混りシルト	黒褐～明黄褐	黄・黒の混土。 全体的に不均質で部分的に有機質。粘土分多く含む。 中砂～径0.3mm（最大径5cm）の亜角～亜円礫を含む。 下部ほど礫分多い。 指圧でようやく凹む。
4	55.04	1.98	4.13		シルト質砂	褐灰～明黄褐	微細砂主体で、全体的に不均質。明黄褐色シルトが径3～20cm程の大きさでブロック状に多く混入する。指圧でようやく凹む。 5.17m青戸室礫（径2.5cm）。
5	54.04	1.00	5.13				
	53.89	0.15	5.28		礫混りシルト	暗黄褐	黒・黄の混土。黄褐色粘土質シルト（ローム）の割合が高い。径0.5～1cmの円礫を僅かに含む。指圧でようやく凹む。
6	52.95	0.94	6.22		砂混りシルト	赤褐	ローム。全体的にやや不均質で、径2～5cmの亜角礫僅かに含む。径0.1cm以下の軽石片多く含む。指圧でようやく凹む。下位層との境界は漸移的。
	52.72	0.23	6.45		砂質シルト	灰褐	全体的に不均質。径0.1cm以下の軽石片を多く含む。径1cm以下の亜角礫を僅かに含む。
	52.52	0.20	6.65		シルト混り砂礫	褐灰	粗砂～径3cmの亜角～亜円礫主体。マトリックスはシルト混り中～粗砂。指圧では崩れない。
7	52.12	0.40	7.05		礫混り砂		均質な細～中砂主体で下位ほど細粒。細粒分および径0.5cm以下の亜角～亜円礫を僅かに含む。部分的に傾斜15°の葉理が発達する。
					シルト混り砂礫		
8	51.17	0.95	8.00				粗砂～径2cm（最大径27cm）の亜角～亜円礫主体。径7cm以上の礫を4～5個/m含む。礫は一部外周が変質し、褐色を呈する。マトリックスはシルト混り砂。指圧では凹まない。



〈凡例〉

- Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土
  - 表土（腐植土）近代造成土上層
  - 近代造成土下層
- Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土）
  - 上部
  - 下部
- （石）
- Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
- Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土）
  - 上部
  - 下部
- Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
- Ⅴ 地山
  - 黒ボク層
  - 段丘礫層・卵辰山層

第293図　ボーリングコア詳細柱状図17（H25-11地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.01						
	57.76	0.25	0.25		有機質シルト	黒褐	表土。粗砂～径4㎜の礫を若干含む。腐植質で、草根を多く含む。
	57.51	0.25	0.50		礫混りシルト	黒褐～黄褐	全体的に不均質でやや腐植質。粗砂～径40㎜の亜角～亜円礫を含む。表土から、盛土へ遷移し、下部ほど礫が多くなる。
1	56.81	0.70	1.20		礫混り砂質シルト	黄褐～暗黄褐	1.20mまで不均質で、以下は砂質優勢。 粗砂～径30㎜の亜角～亜円礫を含む。0.75～1.20mにL＝5㎝以上の礫を多く含む。1.00mに青戸室礫（L＝5㎝）。1.30m付近に赤色粒を僅かに含む。
	56.46	0.35	1.55				
2					礫混り砂質シルト	黒褐～黄褐	黒・黄の混土。全体的に不均質で粘土分を多く含む。黄褐土の割合が多く、大型ブロック状で混入する。粗砂～径50㎜の亜角～亜円礫を含む。2.30mにL＝12㎝の礫を混入する。下部ほど締りが良くなり、指圧でようやく凹む。
	55.26	1.20	2.75				
	55.21	0.05	2.80		シルト質粘土	黄褐	均質な粘土。強い指圧でようやく凹む。
3	55.06	0.15	2.95			明黄褐	ローム。均質な粘土。強い指圧でようやく凹む。
					シルト混り砂礫	灰褐	粗砂～径30㎜の亜角～亜円礫主体（最大径90㎜）。 マトリックスは砂混りシルト。 3.40、3.90～4.60mのマトリックスの一部が酸化変質し赤褐色を呈す。 全体的に締りが良く柱状のコアで採取される。
4							
5	53.01	2.05	5.00				

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卵辰山層

第294図　ボーリングコア詳細柱状図18（H28-1地点）

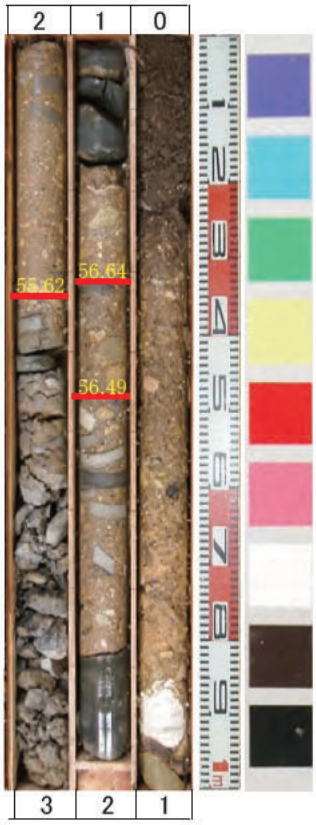
標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	57.98						
	57.88	0.10	0.10		有機質シルト	黒褐	表土。粗砂～径4㎜の礫を含む。 草根を多く含む。
1						黒褐 灰褐	全体的に不均質で黒褐・灰褐の粘土をブロック状に混入する。 粗砂～径40㎜の亜角～亜円礫を含む。 腐植物、草根を若干混入する。 0.40m、1.20mに赤色粒・炭化物を少量含む。
	56.63	1.25	1.35		礫混りシルト		
2						灰褐	やや均質で粘土分を多く含む。 粗砂～径40㎜の亜角～亜円礫を含む。 腐食物・草根を若干混入する。 1.40～1.65mに赤色粒を点在する。 1.85mに赤色粒を含む。指圧で凹む。
	55.78	0.85	2.20				
	55.54	0.24	2.44		礫混り砂混りシルト	黒褐～黄褐灰	黒・黄の混土。黒褐と黄褐灰の粘土をブロック状に混入する。粗砂～径10㎜の赤角～亜円礫を含む。2.30mに赤色粒を含む。
	55.39	0.15	2.59				
	55.33	0.06	2.65		礫混りシルト	黄褐灰	焼土が密集する粘土。 赤色粒・赤色片を多く含む。
3					礫混り砂混りシルト	黄褐灰	黄灰褐の均質な粘土。中砂を含む。 径40㎜の礫を混入する。
	54.43	0.90	3.55		礫混りシルト質砂	黒褐	全体的に均質で締まりの良い砂質土。中砂を主体とし、径2～4㎜の亜角～亜円礫を含む。 炭化物を少量点在する。
	54.03	0.40	3.95		礫混りシルト	褐灰	全体的にやや均質で粘土分を多く含む。暗褐色の粘土をブロック状で混入する。粗砂～径40㎜の亜角～亜円礫を含む。全体的に締りが良いが、3.85～3.95mに酸化変質がみられ、指圧で崩れる。
4							
5					シルト混り砂礫	灰褐	粗砂～径50㎜の亜角～亜円礫主体。 マトリックスは砂質シルト。 全体的に締りが良く、柱状のコアで採取される。
	51.98	2.05	6.00				全体的に酸化変質がみられ、赤褐色を呈す。
6							

〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卯辰山層

第 295 図　ボーリングコア詳細柱状図 19（H28-2 地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	57.97						
	57.69	0.28	0.28		有機質シルト	黒褐	表土。径2～5㎜の礫を少量含む。 草根を多く含む。
1	56.64	1.05	1.33			暗灰 黄灰	全体的に不均質で粘土分を多く含む。粗砂～径10㎜の亜角～亜円礫を含む。暗灰・黄灰色の粘土をブロック状で混入する。0.85mにL＝8㎝の礫、1.00mにL＝7㎝、8㎝の礫を混入する。腐食物、草根を若干混入する。 下部になるにつれ締りが良くなる。
	56.49	0.15	1.48		礫混りシルト	暗灰褐	やや均質で粘土分を多く含む。径2～40㎜の亜角～亜円礫を含む。指圧でようやく凹む。
2	55.62	0.87	2.35			褐灰	やや均質で粘土分を多く含む。粗砂～径10㎜の亜角～亜円礫を含む。1.70mまでに燻瓦片を7個含む。1.70mにL＝12㎝の礫を混入する。2.00m以深で燻瓦片を4個含む。赤色粒を点在する。
	55.07	0.55	2.90		礫混じりシルト質砂	灰褐	燻瓦片が密集する。マトリックスは砂状に崩れた瓦片を含むシルトで空隙が多い。
3	54.67	0.40	3.30		シルト混り砂礫	明黄褐	全体的に不均質で礫、燻瓦片を多く含む。 マトリクスは粗砂混じりシルト。 3.00mにL=10㎝の礫を混入する。
	53.97	0.70	4.00		礫混りシルト	灰白	全体的に不均質で粘土分を多く含む。 粗砂～φ10㎜の亜角～亜円礫を含む。 3.40mに赤戸室礫(φ=40㎜)。 赤色片・炭化物を含む。
4	53.82	0.15	4.15			明黄褐	ローム。概ね均質。強い指圧でようやく凹む。
	53.67	0.15	4.30		シルト質粘土	灰白	フラッドローム。概ね均質。 径20～40㎜の礫を含む。
5					シルト混り砂礫	灰褐	粗砂～径50㎜の亜角～亜円礫主体。 全体的に締りが良く柱状のコアで採取される。 マトリックスは砂混りシルト。 4.95m以深からマトリックスに酸化変質がみられ赤褐色を呈す。 変質箇所は指圧で崩れるほど脆い。
6	51.97	1.70	6.00				



〈凡例〉

Ⅰ 表土（腐植土）近代造成土	Ⅲ 近世初期造成土（庭園造成土等）
表土（腐植土）近代造成土上層	Ⅳ 近世初期造成土（郭造成土） 上部
近代造成土下層	下部
Ⅱ 近世前期以後造成土（池遺構埋土） 上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土
下部	Ⅴ 地山 黒ボク層
（石）	段丘礫層・卯辰山層

第 296 図　ボーリングコア詳細柱状図 20（H28-3 地点）

標尺(m)	標高(m)	層厚(m)	深度(m)	柱状図	土質区分	色調	記事
	58.75						
	58.45	0.30	0.30		有機質シルト	黒褐	表土。径2～4㎜の礫を少量含む。 草根を多く含む。
	57.83	0.62	0.92				全体的に不均質で粘土分を多く含む。粗砂～径30㎜の亜角～亜円礫を含む(最大径50㎜)。0.70mにL=10㎝の礫を混入する。 腐植物・草根を混入する。
1							全体的に不均質で粘土分を多く含む。
					礫混りシルト	暗灰褐	粗砂～径5㎜の亜角～亜円礫を含む。
							1.80mに赤戸室礫(40㎜)。
2							草根を若干混入する。
							締まりが悪く、指圧で凹む。
	56.23	1.60	2.52				
	56.13	0.10	2.62			灰褐	黄・灰の混土。不均質で粘土分を多く含む。
	55.82	0.31	2.93		シルト質粘土	灰褐～褐灰	概ね均質なローム起源と想定される粘土。 2.70mから締りが悪く、指圧で容易に凹む。
3							
	55.45	0.37	3.30		礫混りシルト	褐灰	概ね均質で粘土分を多く含む。径2～10㎜の亜角～亜円礫を含む。 全体的に締りが悪く、指圧で凹む。
							全体的に不均質でL=5㎝以上の礫を多く含む。 マトリックスは粘土。 4.00～4.30mのマトリックスは黒・黄の混土。 4.60mに赤戸室礫(径30㎜)。 下部ほど締りが良く強い指圧でようやく凹む。
4					シルト質砂礫	褐灰～明灰褐	
	53.95	1.50	4.80				
	53.80	0.15	4.95		礫混りシルト	明灰褐	均質な粘土。径40㎜の礫を含む。 強い指圧でようやく凹む。
5	53.75	0.05	5.00				
					シルト質砂礫	灰褐	径10㎜の礫を含む。上部の地層境界で風化がみられ、褐色を呈し脆くなっている。

〈凡例〉

Ⅰ 表土(腐植土) 近代造成土		Ⅲ 近世初期造成土 (庭園造成土等)	
表土(腐植土) 近代造成土上層		Ⅳ 近世初期造成土 (郭造成土)	上部
近代造成土下層			下部
Ⅱ 近世前期以後造成土 (池遺構埋土)	上部	Ⅱ-Ⅳ 近世造成土	
	下部	Ⅴ 地山	黒ボク層
(石)			段丘礫層・卵辰山層

第297図　ボーリングコア詳細柱状図21（H28-4地点）

第４節　石材鑑定

酒寄　淳史（金沢大学）

１．岩石記載

東ノ丸庭園遺構の発掘調査によって得られた４個の岩石試料①～④（第 298・299 図）について、岩石薄片を作成して偏光顕微鏡観察を行った。目視および顕微鏡観察によって明らかになった岩石名と岩石学的性質は次の通りである。

試料①：斜方輝石－オージャイト－安山岩（第 300 図 (a)）

斑状組織を呈する火山岩である。斑晶は斜長石（最大長径 2.1mm）が主体で、オージャイト（3.0mm）、斜方輝石（2.1mm）、および鉄－チタン酸化物（0.6mm）を副成分として含む。斜長石斑晶にはしばしば累帯構造がみられ、蜂の巣状構造あるいは汚濁帯を有するものも少量ながら存在する。オージャイトを主体とした集合斑晶がみられる。石基は、斜長石、斜方輝石、鉄－チタン酸化物、およびシリカ鉱物などからなる。石基の中により粗粒な石基鉱物からなる部分が不規則に分布し、不均質な組織を形成している。

試料②：黒雲母－花崗岩（第 300 図 (b)）

粗粒な鉱物からなる深成岩である。主な構成鉱物は、石英、アルカリ長石、および斜長石であり、斜長石は他の二者よりやや乏しい。副成分として黒雲母と鉄－チタン酸化物を含み、少量の白雲母やジルコンが認められる。黒雲母の一部は変質し、緑泥石に置き換わっている。

試料③：スコリア凝灰岩（第 300 図 (c)）

多孔質な火山噴出物であるスコリアに富む火山砕屑岩である。丸みを帯びた外形を呈するスコリア（最大長径 15mm）を主体とし、変質した火山岩や凝灰岩等の岩石粒子（５mm）および石英や長石の鉱物片（1.5mm）を伴う。スコリアには 0.2mm 前後の短冊状の斜長石が多数含まれ、時に斜長石斑晶も観察される。スコリアどうしの粒子間にはしばしば孔隙が形成され、二次的に成長したシリカ鉱物によって埋められている場合もある。

試料④：含かんらん石－角閃石－斜方輝石－オージャイト－安山岩（第 300 図 (d)）

斑状組織を示す火山岩である。斑晶は斜長石（最大長径 2.4mm）が主成分で、副成分としてオージャイト（2.5mm）、斜方輝石（2.1mm）、鉄－チタン酸化物（0.6mm）、および少量ではあるが、オパサイト化を受けて黒色不透明な仮像を呈する角閃石（0.8mm）から構成される。また、斜方輝石の反応縁に取り囲まれ、変質鉱物に置き換わったかんらん石（長径 1.4mm）も微量ながら観察できる。斜長石斑晶はしばしば累帯構造を示し、時に蜂の巣状構造あるいは汚濁帯を有することもある。鉄－チタン酸化物を伴い、オージャイトと斜方輝石の両方またはどちらかを主体とした集合斑晶がしばしば観察できる。石基は、斜長石、斜方輝石、鉄－チタン酸化物、およびシリカ鉱物などから構成される。

２．県内産庭石との関係

試料①と④はともに安山岩であるが、試料④には①にみられない角閃石斑晶が少量ながら含まれる。試料④は板状節理の発達した溶岩由来の板石からのものであり、玉泉院丸の板石の試料と同じ岩石学的性質を有するが、それらの産地については現時点では不明である。試料①は、志賀町荒木荒木隧道付近の「福浦石」と同じ斑晶組み合わせを有し、類似した岩石学的性質を示す。

試料②は深成岩の試料である。県内産の深成岩の庭石として知られているのは、羽咋市滝町に産出する「滝石」である。「滝石」は花崗岩や花崗閃緑岩からなり、その中には試料②とほぼ同様の性質を示す黒雲母－花崗岩も存在する。

試料③のスコリア凝灰岩と同じ岩石名の庭石には、犀川上流の滝坂地区に産する「滝坂石」がある。金沢市内におけるスコリア凝灰岩の分布は限られており、試料③は「滝坂石」かそれと同層準の類似した岩石に由来する可能性も考えられる。ただし、「滝坂石」の試料が手元にないため、顕微鏡を用いた詳細な岩石学的な比較は行っていない。

試料①

試料②

試料③

試料④

試料番号	調査地点	景石番号 層位	備考
①	2014-2	S01	原位置を保つ景石　Ⅲ層中に設置　高さ 59cm+・幅 41cm+・奥行 30cm
②	2014-2	S02	原位置を保つ景石　Ⅲ層中に設置　高さ 66cm+・幅 17cm+・奥行 93cm+
③	2014-2	S04	遊離した景石　Ⅱ層中に包含　高さ 60cm+・幅 42cm+・奥行 49cm+
④	2014-2	Ⅱ9 層	遊離した板石　Ⅱ9 層に包含

第 298 図　試料一覧

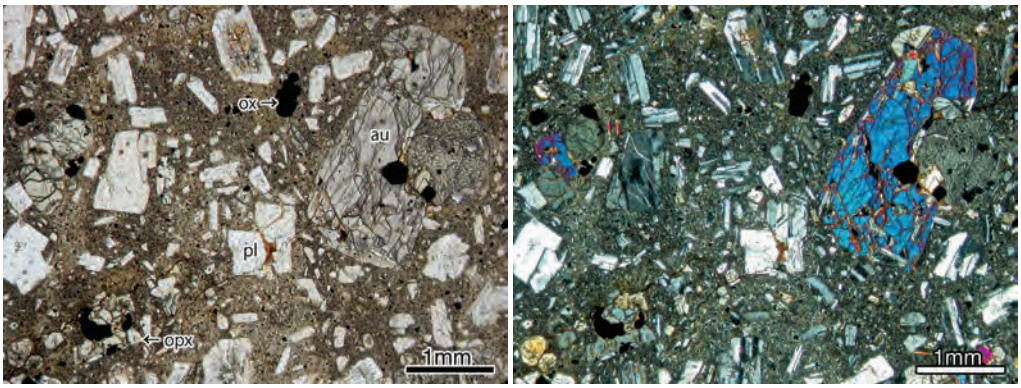
S01

S02

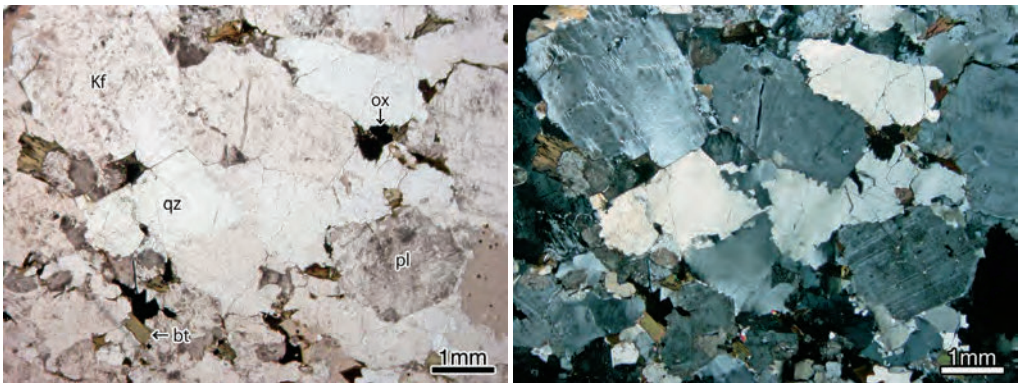
S04

第 299 図　試料の検出状況（2014-2 地点景石）

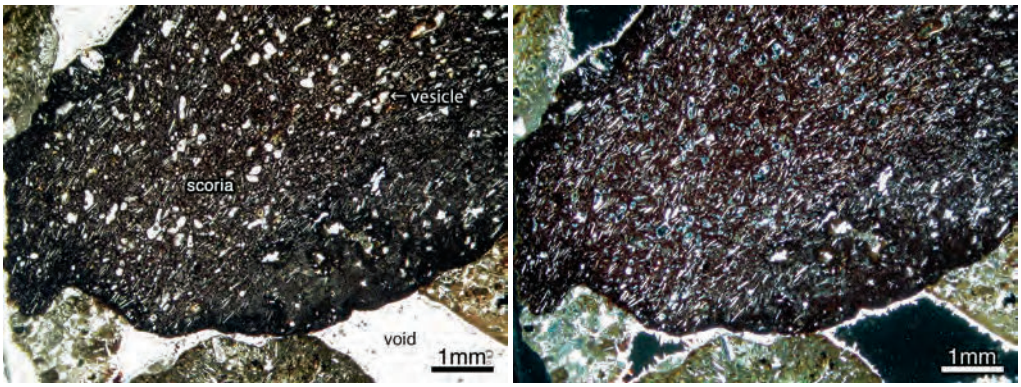
(a) 試料①



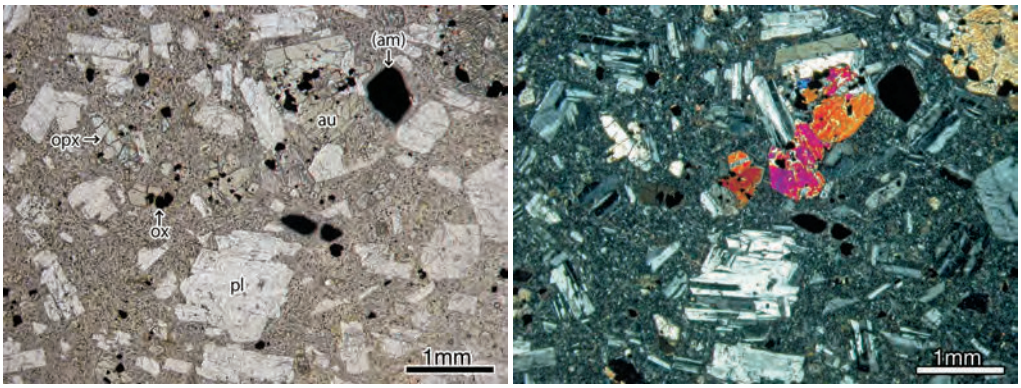
(b) 試料②



(c) 試料③



(d) 試料④



左列の写真は下方ポーラーのみの状態で、右列の写真は直交ポーラー状態でそれぞれ撮影。pl= 斜長石、au= オージャイト、opx= 斜方輝石、ox= 鉄 - チタン酸化物、qz= 石英、Kf= アルカリ長石、bt= 黒雲母、scoria= 急冷縁を有するスコリア、vesicle= 気孔、void= 孔隙、(am)= オパサイト化した角閃石。

第 300 図　岩石薄片の偏光顕微鏡像

第５節　珪藻・花粉分析

１．東ノ丸庭園遺構（2014-2 地点）の堆積物中の珪藻化石群集

藤根　久（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

珪藻は、10～500 μｍほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている［小杉 1988・安藤 1990］。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、金沢城 2014-2 地点で検出された東ノ丸庭園遺構の堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

（2）試料と方法

試料は、金沢城 2014-2 地点の東ノ丸庭園遺構で採取された堆積物 2 点である（第 58 表）。この東ノ丸庭園遺構は、寛永 8 年（1631 年）に廃棄された可能性が高いと考えられている。採取された試料は、庭園が機能していた際の表層部分と考えられている。

第 58 表　珪藻分析を行った試料

分析 No.	地点	遺構	層位	時期	堆積物の特徴
1	2014-2 地点	東ノ丸庭園	Ⅲ 1 層	寛永 8 年（1631 年）廃棄	黒褐～暗褐色（10YR 3/2 ～ 3/3）土壌、シルト質土
2			Ⅲ 2 層		黒褐色（10YR 2/2 ～ 2/3）礫混じり土壌、粘質～シルト質土

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

試料は、湿潤重量約 1g を採取し、30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、水を加え 1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業を 10 回ほど繰り返した。懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下 600～1500 倍で観察し、珪藻化石について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、堆積物試料については、処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1g 当たりの殻数を計算した。なお、珪藻化石が少なく、プレパラート全面を観察した。

（3）珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に［小杉 1988］および［安藤 1990］が設定し、［千葉・澤井 2014］により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の淡水種については、広布種（W）として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明（?）として扱った。以下に、［小杉 1988］が設定した海水～汽水域における環境指標種群と［安藤 1990］が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［外洋指標種群（A）］：塩分濃度が35ﾊﾟｰﾐﾙ以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

［内湾指標種群（B）］：塩分濃度が26～35ﾊﾟｰﾐﾙの内湾水中を浮遊生活する種群である。

［海水藻場指標種群（C1）］：塩分濃度が12～35ﾊﾟｰﾐﾙの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

［海水砂質干潟指標種群（D1）］：塩分濃度が26～35ﾊﾟｰﾐﾙの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類

が生活する。

［海水泥質干潟指標種群(E1)］：塩分濃度が12～30ﾊﾟｰﾐﾙの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

［汽水藻場指標種群(C2)］：塩分濃度が4～12ﾊﾟｰﾐﾙの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

［汽水砂質干潟指標種群(D2)］：塩分濃度が5～26ﾊﾟｰﾐﾙの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

［汽水泥質干潟指標種群 (E2)］：塩分濃度が 2～12 ﾊﾟｰﾐﾙの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

［上流性河川指標種群(J)］：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群 (K)］：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群(L)］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

［湖沼浮遊生指標種群(M)］：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群(N)］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群で

第 59 表　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、[千葉･澤井 2014] による）

No.	分類群		種群	1	2
1	*Actinocyclus*	*ingens*	A	1	1
2	*Actinoptychus*	*senarius*	?	1	
3	Coscinodiscus	spp.	?	2	2
4	*Stephanopyxis*	spp.	?		1
5	*Thalassionema*	*nitzschioides*	A	5	4
1	*Achnanthes*	*brevipes*	?	1	
1	*Achnanthes*	*coarctata*	Qa		6
2	*Achnanthidium*	*minutissima*	Qb	1	
3	*Amphora*	*normanii*	Qb		1
4	*Caloneis*	*molaris*	W	17	7
5	*Cymbella*	*ehrenbergii*	O		1
6	*C.*	*silesiaca*	W	2	
7	*C.*	spp.	?	2	
8	*Diploneis*	spp.	?	1	
9	*Epithemia*	*turgida*	W		1
10	*E.*	spp.	?		1
11	*Eunotia*	*bilunaris*	W	1	
12	*E.*	spp.	?	3	
13	*Hantzschia*	*amphioxys*	Qa	13	13
14	*Luticola*	*mutica*	Qa	1	1
15	*Navicula*	*goeppertiana*	W		1
16	*N.*	*pusilla*	W		2
17	*Neidium*	*alpinum*	Qa	4	
18	*N.*	spp.	?	4	1
19	*Nitzschia*	*perminuta*	W		1
20	*N.*	*tryblionella*	W	1	
21	*N.*	spp.	?	1	1
22	*Pinnularia*	*acrosphaeria*	O	1	1
23	*P.*	*borealis*	Qa	45	11
24	*P.*	*divergens*	W		1
25	*P.*	*gibba*	O	2	
26	*P.*	*interrupta*	W	3	
27	*P.*	*microstauron*	W	2	1
28	*P.*	*subcapitata*	Qb	15	2
29	*P.*	*viridis*	O	2	3
30	*P.*	spp.	?	15	7
31	*Rhopalodia*	*gibberula*	W	3	2
32	*Stauroneis*	*phoenicenteron*	O	1	
33	*S.*	*smithii*	W		1
34	*Surirella*	*angusta*	W	2	
35	*S.*	spp.	?	1	
36	*Synedra*	*ulna*	W	4	2
37		*Unknown*	?	5	
1		外　洋	A	6	5
2		海水不定・不明種	?	3	3
3		汽水不定・不明種	?	1	
4		沼沢湿地付着生	O	6	5
5		陸生Ａ群	Qa	63	31
6		陸生Ｂ群	Qb	16	3
7		広布種	W	35	19
8		淡水不定・不明種	?	27	10
9		その他不明種	?	5	
		海水種		9	8
		汽水種		1	
		淡水種		152	68
		合　計		162	76
		完形殻の出現率(%)		37.0	42.1
		堆積物1g中の殻数(個)		4.1E+04	1.6E+04

ある。
［沼沢湿地付着生指標種群(0)］：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
［高層湿原指標種群(P)］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。
［陸域指標種群(Q)］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。
［陸生珪藻Ａ群(Qa)］：耐乾性の強い特定のグループである。
［陸生珪藻Ｂ群(Qb)］：Ａ群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

（4）結果

堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が 5 分類群 5 属 3 種、汽水種が 1 分類群 1 属 1 種、淡水種が 36 分類群 18 属 28 種であった。これらの珪藻化石は、海水域における 1 環境指標種群（A）、淡水域における 3 環境指標種群（0、Qa、Qb）に分類された（第 59 表）。

以下では、堆積物中の珪藻化石の特徴と堆積環境について述べる。なお、海水種や汽水種は、基盤からの誘導化石と考えられる。

分析 No.1（Ⅲ 1 層）

堆積物 1g 中の珪藻殻数は 4.1×10^4 個、完形殻の出現率は 37.0% である。検出された珪藻化石は、主に淡水種であり、海水種と汽水種を僅かに含む。環境指標種群では、陸生珪藻Ａ群（Qa）が多く、陸生珪藻Ｂ群（Qb）や沼沢湿地付着生指標種群（0）を含む。

環境指標種群の特徴から、沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境と考えられる。

分析 No.2（Ⅲ 2 層）

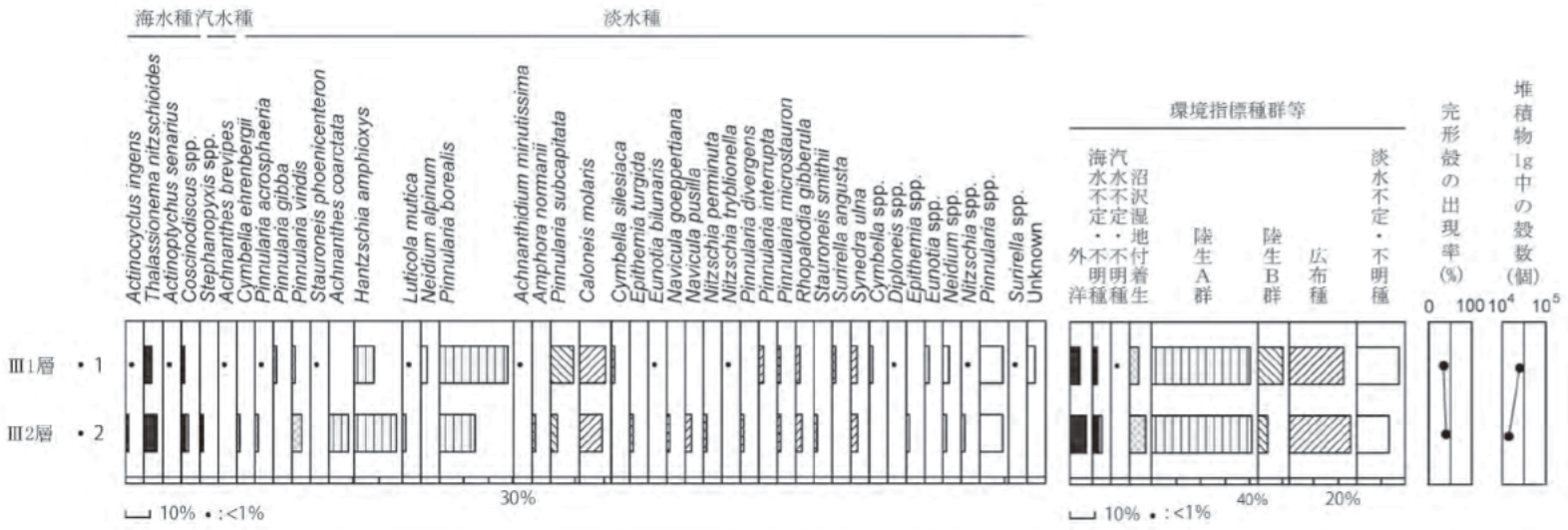
堆積物 1g 中の珪藻殻数は 1.6×10^4 個、完形殻の出現率は 42.1% である。検出された珪藻化石は、主に淡水種であり、海水種と汽水種を僅かに含む。検出された珪藻化石は、分析 No.1（Ⅲ 1 層）より少ない。環境指標種群では、陸生珪藻Ａ群（Qa）が多く、陸生珪藻Ｂ群（Qb）や沼沢湿地付着生指標種群（0）を含む。

環境指標種群の特徴から、沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境と考えられる。

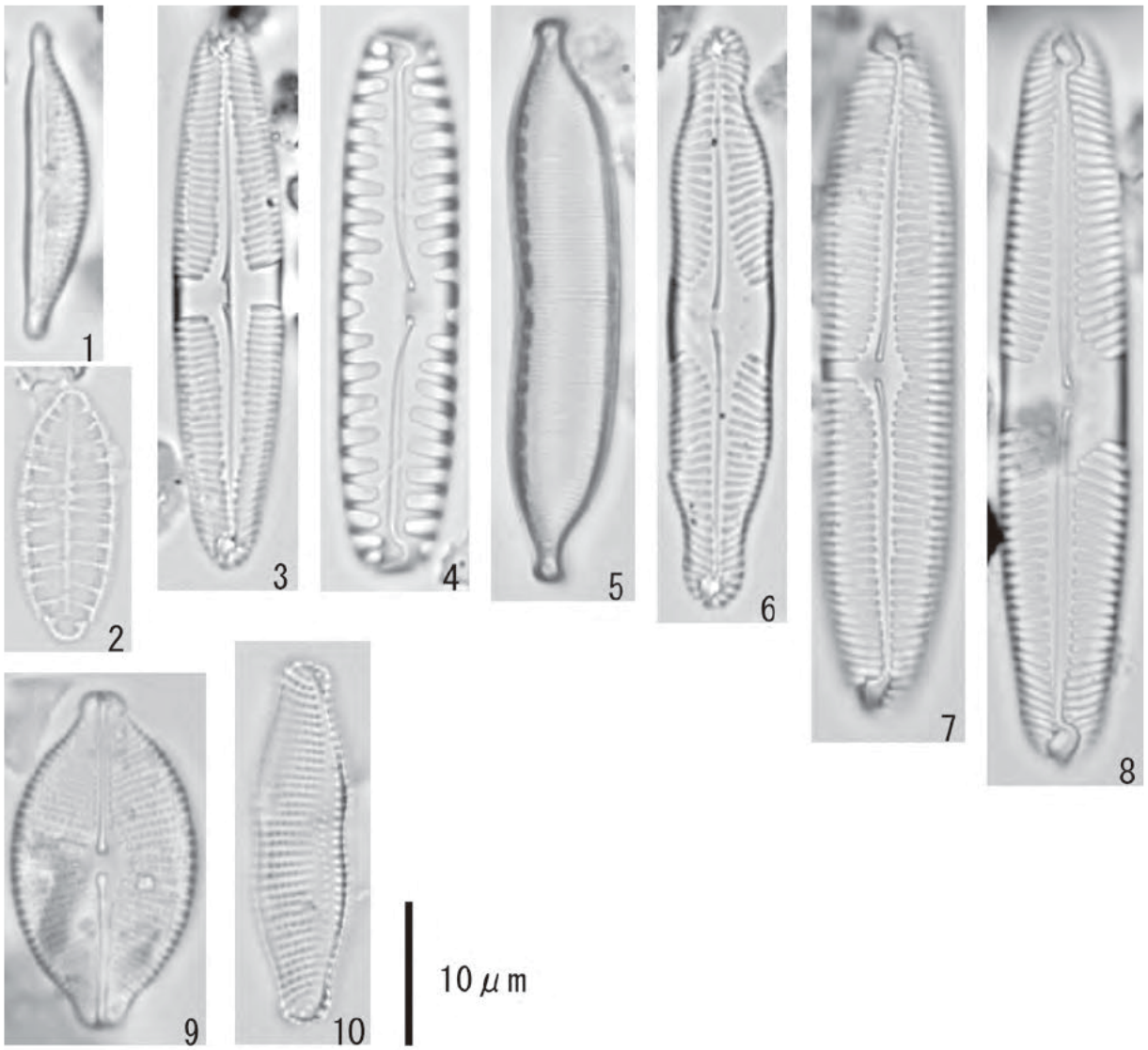
庭園遺構の下位層（Ⅲ 2 層）において珪藻化石が少ないものの、Ⅲ 1 層とⅢ 2 層ともに沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境であったと考えられ、常時冠水した環境ではなかったと考えられる。

（5）おわりに

2014-2 地点の東ノ丸庭園遺構から採取された堆積物について珪藻分析を行った。その結果、庭園遺構の下位層（Ⅲ 2 層）において珪藻化石が少ないものの、Ⅲ 1 層とⅢ 2 層の両者とも沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境であったと考えられ、常時冠水した環境ではなかったと推定された。



第 301 図　堆積物中の珪藻化石分布図（すべての分類群を表示）



1. *Amphora normanii* (No. 2) 2. *Surirella angusta* (No. 1) 3. *Caloneis molaris* (No. 1)
4. *Pinnularia borealis* (No. 1) 5. *Hantzschia amphioxys* (No. 1) 6. *Pinnularia interrupta* (No. 1)
7. *Pinnularia viridis* (No. 1) 8. *Pinnularia gibba* (No. 1) 9. *Navicula pusilla* (No. 2)
10. *Achnanthes coarctata* (No. 2)

第 302 図　堆積物中の珪藻化石

2．水溜状遺構（2007-1SX02）の珪藻化石群集

藤根　久（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

珪藻は、10～500 μ m ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている［小杉 1988・安藤 1990］。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、金沢城本丸北部調査区の水溜状遺構の堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。なお、遺構堆積物については花粉分析を行っている（花粉分析参照）。

（2）試料と方法

試料は、金沢城本丸北部調査区の水溜状遺構の堆積物 2 点である（第 60 表）。水溜状遺構では、床面に粘土（分析 No.2）が貼られ、その粘土層直上に粘質土（分析 No.1）が堆積していた。水溜状遺構は、最終的に宝暦 9 年（1759 年）の大火後の片づけ層で埋められ、廃絶されたと考えられている。

第 60 表　珪藻分析を行った試料

分析No.	試料名	時期	層位	堆積物
1	2007-1SX02	近世前期	Ⅲ2層	灰黄褐色（10YR4/2）粘質土
2			Ⅳb7層	灰白色（10YR8/1～2.5Y8/2）粘土

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

(1) 湿潤重量約 0.4～0.9g 程度を取り出し、秤量した後ビーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え 1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 5 回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下 600 倍および 1500 倍で観察し、珪藻化石について同定・計数した。なお、珪藻化石が少なかったため、プレパラート全面を観察した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1g 当たりの殻数を計算した（第 61 表）。

（3）珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群については、前項（1．東ノ丸庭園遺構（2014-2 地点）の堆積物中の珪藻化石群集）と同様である。

（4）結果および考察

堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が 6 分類群 6 属 1 種、海～汽水種が 1 分類群 1 属、汽水種が 1 分類群 1 属 1 種、淡水種が 28 分類群 14 属 14 種であった。これらの珪藻化石は、海水域における 1 環境指標種群（A）、淡水域における 5 環境指標種群（K、M、Q）に分類された（第 61 表）。以下では、各試料の珪藻化石の特徴と堆積環境について述べる。

分析 No.1（粘質土）

堆積物 1g 中の珪藻殻数は 5.7×10^3 個、完形殻の出現率は 13.9% である。淡水種の占める割合が高く、海水～汽水種を伴う。環境指標種群では、陸域指標種群（Q）が多く、湖沼浮遊生指標種群（M）や外洋指標種群（A）が出現した。外洋指標種群（A）やその他の海～汽水種は基盤層からの誘導化

石と考えられる。これら海～汽水種を除くと、短期間であるが水域を伴うジメジメとした陸域が推定される。なお、湖沼浮遊生指標種群（M）が出現したことから水深のある環境も考えられる。

分析 No.2（床貼り粘土）

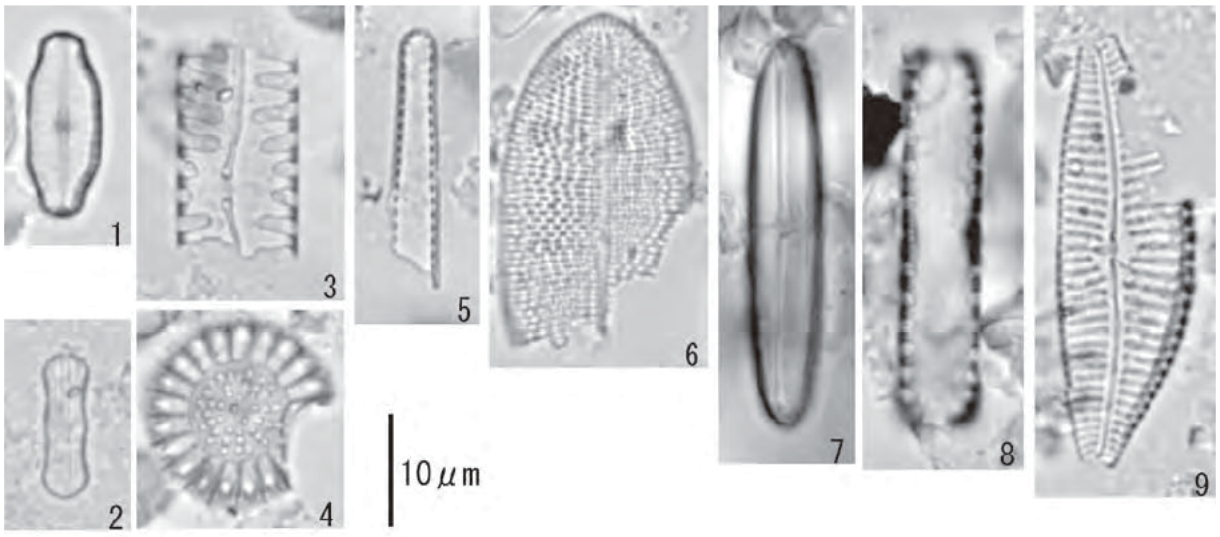
堆積物 1g 中の珪藻殻数は 1.3×10^3 個、完形殻の出現率は 20.0% である。珪藻化石は非常に少なく、床に貼った粘土自体は水成堆積物でないと考えられる。

（5）おわりに

金沢城本丸北部調査区の水溜状遺構の堆積物 2 点について珪藻分析を行った。粘土質シルト（分析 No.1）は、短期間ではあるが水域を伴うジメジメとした陸域が推定された。なお、床面に貼った粘土（分析 No.2）は水成堆積物ではないと考えられた。

第61表　堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、［小杉1988］および［安藤1990］による）

No.	分類群		種群	1	2
1	*Actinocyclus*	spp.	?	2	
2	*Coscinodiscus*	spp.	?	1	
3	*Denticulopsis*	spp.	?	2	
4	*Stephanopyxis*	spp	?	4	
5	*Thalassionema*	*nitzschioides*	A	19	1
6	*Thalassiosira*	spp.	?	5	
1	*Dictyocha*	spp.	?	2	
1	*Achnanthes*	*brevipes*	?	1	
1	*Aulacosira*	*islandica*	W	2	
2	*Cocconeis*	*placentula*	W	1	
3	*Cyclotella*	*radiosa*	M	2	
4	*Cymbella*	*turgidula*	K	2	
5	*C.*	spp.	?	3	
6	*Diploneis*	spp.	?	1	
7	*Epithemia*	spp.	?	1	1
8	*Eunotia*	*steineckii*	W	1	
9	*E.*	spp.	?	3	
10	*Hantzschia*	*amphioxys*	Q	4	
11	*Navicula*	*contenta*	Q	1	
12	*N.*	*goeppertiana*	W	1	
13	*N.*	*ignota*	W		1
14	*Neidium*	*bisulcatum*	Q	1	
15	*Pinnularia*	*borealis*	Q	4	
16	*P.*	*similis*	W	2	
17	*P.*	spp.	?	3	
18	*Rhopalodia*	*gibba*	W	1	
19	*Stauroneis*	spp.	?	1	1
20	*Synedra*	*ulna*	W	3	
21		Unknown	?	5	1
1		外　洋	A	19	1
2		海水不定・不明種	?	14	
3		海～汽水不定・不明種	?	2	
4		汽水不定・不明種	?	1	
5		中～下流性河川	K	2	
17		湖沼浮遊生	M	2	
6		陸　域	Q	10	
7		広布種	W	11	1
8		淡水不定・不明種	?	13	2
9		その他不明種	?	5	1
		海水種		33	1
		汽水種		1	
		淡水種		38	3
		合　計		79	5
		完形殻の出現率 (%)		13.9	20.0
		堆積物 1g 当たり殻数 (個)		5.7E+03	1.3E+03



1. *Navicula ignota* (No. 2)　2. *Navicula contenta* (No. 1)　3. *Pinnularia borealis* (No. 1)
4. *Cyclotella radiosa* (No. 1)　5. *Thalassionema nitzschioides* (No. 1)　6. *Cocconeis placentula* (No. 1)
7. *Neidium bisulcatum* (No. 1)　8. *Pinnularia borealis* (No. 1)　9. *Cymbella turgidula* (No. 1)

第 303 図　堆積物中の珪藻化石

３．水溜状遺構（2007-1SX02）の花粉分析

森　将志（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

金沢城本丸北部調査区の水溜状遺構（2007-1SX02）の堆積物試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料について珪藻分析を行っている（珪藻分析を参照）。

（2）試料と方法

金沢城では、近世前期に築造された水溜状遺構（2007-1SX02）が検出されている。水溜状遺構の底面には粘土が貼られており、粘土面上に暗灰褐～灰黄色の粘質土層（Ⅲ２層）が堆積していた。分析試料はこの暗灰褐～灰黄色の粘質土層から採取された。この試料について、次の手順で花粉分析を実施した。

試料（湿重量約 3g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸１の割合の混酸を加え 10 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉化石を選んで単体標本（PLC.1207～1212）を作製し、写真を図版に載せた（第 304 図）。

（3）結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 8、草本花粉 6、形態分類のシダ植物胞子２の総計 16 である。これらの花粉・胞子の一覧表を第 62 表に示した。なお、今回の分析試料には十分な量の花粉化石が含まれていなかったため、分布図は示していない。

花粉化石の含有量が少ないながらも樹木花粉で多く産出しているのはマツ属複維管束亜属、草本花粉ではイタドリ節であった。また、胞子が最も多く産出しており、単条溝胞子が 353 個、三条溝胞子が 45 個産出している。

第 62 表　産出花粉胞子一覧表

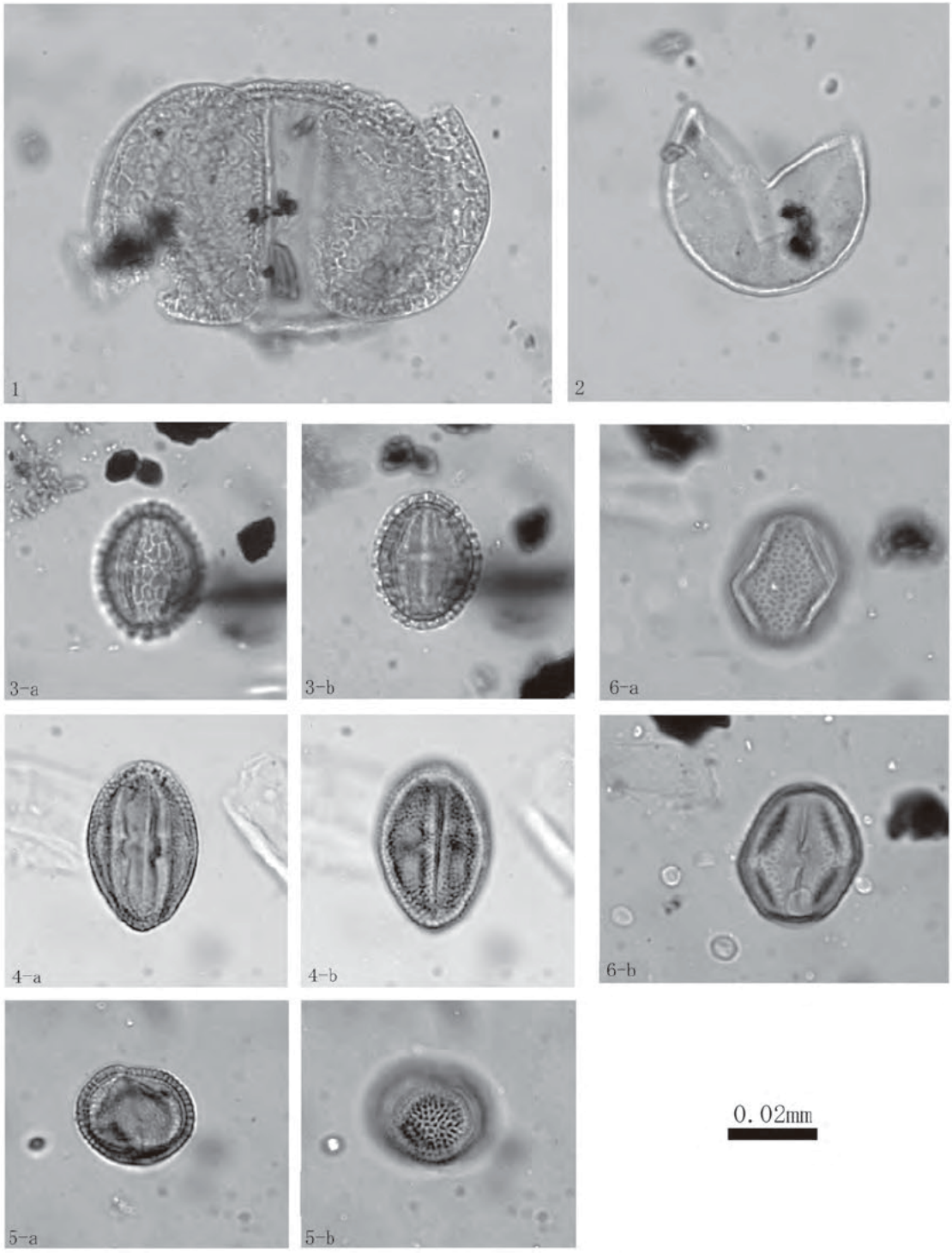
学名	和名	2007-1SX02 Ⅲ２層
樹木		
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	35
Sciadopitys	コウヤマキ属	1
Cryptomeria	スギ属	2
Salix	ヤナギ属	5
Alnus	ハンノキ属	3
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1
Castanea	クリ属	3
Phellodendron	キハダ属	8
草本		
Gramineae	イネ科	1
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節	22
Chenopodiaceae － Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	1
Brassicaceae	アブラナ科	1
Leguminosae	マメ科	1
Liguliflorae	タンポポ亜科	1
シダ植物		
monolete type spore	単条溝胞子	353
trilete type spore	三条溝胞子	45
Arboreal pollen	樹木花粉	58
Nonarboreal pollen	草本花粉	27
Spores	シダ植物胞子	398
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	483
Unknown pollen	不明花粉	2

（4）考察

今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。おそらく、堆積時や堆積後において、堆積物は酸化的環境に晒されたと思われる。胞子は乾燥に耐性があるため、樹木花粉や草本花粉に比べて多く産出している

のであろう。

産出花粉が少ないながら、花粉分析の結果から古植生を検討すると、樹木花粉においてはマツ属複維管束亜属の産出が多いため、城周辺にはニヨウマツ類からなる二次林が存在していたと思われる。草本類ではイタドリ節の産出が多く、水溜状遺構の斜面などにイタドリ節が生育していたと思われる。



1. マツ属複維管束亜属(PLC. 1207)　2. スギ属(PLC. 1208)
3. キハダ属(PLC. 1209)　4. イタドリ節(PLC. 1210)
5. アブラナ科(PLC. 1211)　6. マメ科(PLC. 1212)

第304図　2007-1SX02 Ⅲ2層から出土した花粉化石

2007-1SX02 検出状況（2004-4 地点） 東から

2007-1SX02 Ⅲ２層検出状況

2007-1SX02 Ⅳb7 層（底面・床貼粘土）検出状況

第 305 図 2007-1SX02 試料採取箇所付近

第6章　総括

第1節　金沢城庭園の特徴

1．庭園遺構の現況

本丸・東ノ丸

本丸北部の庭園は近世初期に廃絶し、跡地に作られた水溜状遺構も近世半ばに埋め立てられ、地表上に痕跡を留めていない。近代に入り、陸軍の弾薬庫が構築された際、かなりの範囲が損壊を受けたと推定される。平成16・18・19・20年度の埋蔵文化財確認調査において、弾薬庫法面の精査により、池遺構等が断面として検出されるに至り、弾薬庫の外側には埋蔵された状態で遺構が遺存していることが確かめられた。

東ノ丸南部の庭園も本丸と同様近世初期に廃絶したが、池遺構や築山は近世を通じ名残を留めた状態であったとみられる。近代に入り幾度かの埋め立てを受けた結果、池遺構の部分がごく浅い窪地になり、郭東面石垣上部の累状遺構部分に、築山跡と推定されるやや高まりが残る程度となっている。平成17・26年度の埋蔵文化財確認調査（発掘調査）、及び平成22・24・25・28年度のボーリング調査により、池遺構が埋没した状態で良好に遺存していることが明らかとなった。

二ノ丸

18世紀以降の史料にみえる泉水主体の庭園は、近代初期まで存続していたようであるが、廃絶時期ははっきりしない。現況では地表上に地割や構成要素の痕跡をほとんど留めておらず、数寄屋屋敷東石垣に組み込まれた石樋や溝状の切り込みが、庭園の流れの存在を暗示するのみとなっている。

二ノ丸の郭面一帯については、発掘調査（昭和43・44・52、平成11・13年度）が実施されており、御殿関連の遺構が検出されているが、辰巳用水の埋樋と思われる痕跡の他は、明確な庭園の遺構は確認されていない。大学校舎等との重複が著しいと想定される北部は、損壊を受けている可能性が高いが、南部（居間先土蔵周辺）については、ボーリング調査で池の堆積層とみられる土層が検出されていること等から、遺構の遺存が想定される。なお雛土蔵下石垣等、石垣自体が庭園と関わって築造された可能性もある。

玉泉院丸

近代に入り陸軍用地となって以降も、しばらく池の形状等を留めていたが、露天馬場の設営に伴い大部分が埋め立てられた。戦後には県スポーツセンター、石川県体育館が建っていた。また庭園の西部一帯は削平を受けている。地表上の遺構としては、周辺の石垣の他、堀状を呈する池北部が半ば埋まりながら地表上に姿を留めていた状態であった。平成20年度以後、金沢城公園整備事業に係り、池北部・西部、東側斜面、色紙短冊積石垣周辺等において埋蔵文化財確認調査が実施され、これらの箇所ではおおよそ近世の遺構が遺存していることが明らかになった。

金谷出丸

13代藩主前田斉泰の隠居による金谷御殿の建替に伴い、大きく改修された庭園が、廃藩後の御殿建物撤去後も存続し、尾山神社境内の庭園として現在に至っている（県名勝・尾山神社庭園（旧金谷御殿庭園））。池の水際にあった亭や、中島と池岸を結んでいた刎橋等は失われているが、滝・池・中島・石橋・築山等の構成要素は、基本的な景観や構造を良好に留め、現在も鑑賞の対象となっている。また敷地南側には、庭園の区画施設であり、築山の土留でもある石垣が延長80～90ｍにわたり遺存している。この他、築山から池際に至る廃絶された園路、刎橋の取付部等、現役ではない構成要素やその痕跡の幾つかも明瞭に看取される。維持管理上、大きく修築された箇所はあるが、概して造営時

の状況をよく残している。

蓮池庭

特別名勝兼六園の西側（北西側）に相当する。現在の景観は、延宝４年（1676）の造営以来、修築を重ねながら形成されてきたものとみられるが、唯一遺存する亭である夕顔亭（滝見亭）や翠滝の普請が行われた安永３年（1774）以降の 18 世紀後半が節目となり、以後竹沢庭と一体化する万延元年（1860）までに、現在まで受け継がれる要素が揃った。

明治の初期のうちに、蓮池門（兼六園門）・高之亭・内橋亭等の建物が撤去され（内橋亭は霞ヶ池池畔に移転）、建物は夕顔亭のみとなった。また明治７年（1874）に兼六公園となって一般に開放されるに及び、園内各所に茶店が建てられ、夕顔亭の建つ瓢池中島が地続きになる等の改変があった。また北部の高台では新たな園路が整備された。

その一方、斜面部分の割合が高いこともあり、北部等を除き、園路や水路等の位置は、近世段階を踏襲している場合が多い。また現在見所となっていない構成要素も点在しており、全体として近世段階の地割・構成要素が良く保存されている。

竹沢庭

特別名勝兼六園の東側（南東側）に相当する。台地上の高台が中心で、兼六公園の主体部として推移しており、泉水（池・流れ）・築山等見所となる主な構成要素は、補修等部分的な改変はあるようだが、概ね良好に保存されている。また敷地北辺には石垣・土塀基礎・通路跡（段状遺構）・水道関連遺構等、鑑賞の対象ではないが、歴史的に重要な構成要素が集中して認められる。敷地の東側には成巽閣（重要文化財、旧巽御殿）や金沢神社（竹沢鎮守）があり、主たる建造物は近世に遡る。

蓮池庭と同様に、明治７年（1874）の公園化に伴い、一時期には多くの茶店が進出した。この頃は近世とも現況とも異なる景観を呈していた段階であるが、明治 31 年（1898）には多くの茶店が取り払われ、大正 11 年（1922）には名勝に指定される等、「公園から庭園への回帰」［本康 2016 P347］と見なされる変遷をたどっている。

なお中央部の園路については、Ⅲ４期・Ⅳ期に顕著だった、地割に沿った格子目形状はみられず、公園化以後に新設された橋を結ぶルートや、敷地の軸に関わらない形状が目立っており、近世との差異が印象付けられる状況となっている。また敷地南側（南西側）中央部は、近代以降、建物が建設される等、大きく改変されている。

その他

丹後屋敷については、住宅や大型の施設等の敷地となっており、現況から地割の痕跡を看取するのは困難な状況になっている。特に西側・北東側はかなり損壊を受けているとみられる。堂形は長らく石川県庁の敷地であった場所で、移転時の立会いや発掘調査により、建物の基礎構造によって損壊の度合が異なっていることが判明している。状況によっては庭園遺構が埋蔵され、遺存している可能性がある。

２．構成要素

金沢城庭園の構成要素に関し、ここでは（１）堀・塁線の利用、（２）石の利用、（３）泉水と辰巳用水、という３つの観点から整理・検討する。

（１）堀・塁線の利用

城郭の地割とも大きく関わる堀や塁線については、東ノ丸・玉泉院丸・竹沢庭等で、庭園の構成要素として取り込み、改変・利用している事例が認められる。

東ノ丸では、東面石垣の最上部が初期の郭面（Ⅳ層上面）より約 2.5 ｍ高く、塁状を呈している。郭南部の池遺構南東辺はこの塁線に隣接しており、高まりに盛土を寄せてさらに斜面が作り出され、

景石が配置されている状況が確認された。

玉泉院丸では、ボーリング調査により、初期には二ノ丸との間の斜面下端に南北二条の堀が存在していたことが判明し、堀の下部を埋めつつ上端を拡張する形で池が形成されたと考えられている。また堀の途切れる土橋＝出入り口部分は、池の出島として整備されている。

竹沢庭は城郭外であるが、城下を防御する外総構の一角に接している。庭園南東角には総構土塁の残欠とされる山崎山があり、竹沢御殿造営時から取り込まれ、辰巳用水をこの下に通す等の造作が行われた。竹沢御殿存続時は表側に相当したためか、この他に目立った整備は行われていないようであるが、文久３年（1863）の巽御殿造営前後には庭園構成要素としての整備が進んだと考えらえる。

いずれにおいても堀・塁線は、庭園の構成要素となることで、当初の防御機能を失うか、低下させた状態であり、なかでも玉泉院丸の場合は、二ノ丸の前面からむしろ奥側に位置付けが変化していることとも関連し、城郭構造の全体的な変容との関わりが指摘される。

なお、金谷出丸も竹沢庭と同様、総構（内総構）に接しており、寛文・延宝期の城下絵図にも土居表現がある。現況では、郭南部に高い箇所で７ｍに及ぶ築山が残り、総構土塁を利用しているように見えるが、これは、17 世紀代に建造され慶応期まで存在した南土蔵跡地に重複し、また郭外縁から離れている点等、疑問点が多い。17 世紀末頃の景観年代を示す「金沢古城図」（石川県立図書館蔵）のうち、金谷門付近の図によると、郭南端の外縁に設けられた金谷門の東側空閑地に「此所高シ」との記載がある。また金谷出丸全体の図（「金谷屋敷之図」第 101 図 52-01・第 123 図）では、金谷門西側に南土蔵と判断される建物が描かれているが、建物と郭外縁との一間程度の間に塁状の高まりが表現され、郭西辺沿いに伸びている。総構土塁の基底幅は、広坂１丁目遺跡の検出例では８ｍ以上あり［金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006b・2007c］、絵図の描写とは合致しない。これらのことから、金谷付近の総構土塁は郭外縁に沿っていたが、やがて大きく削平され、南土蔵等が建てられた 17 世紀半ば～後半には小規模に残存する程度となったと解したい。現況の築山は、金谷御殿最終段階の庭園整備において、新たに造成されたと判断される。

（２）石の利用（第306・307図）

石の利用は多岐に渡るが、以下では石垣・石組・景石・石橋等について、若干の知見を記す。

石垣（第 306 図①～⑥）

上記の堀・塁線と同じく、城郭の防御に関わる重要遺構である。金沢城では、既存の石垣を庭園構成要素に取り込む明確な事例は知られていない。金沢城では、寛永８年（1631）以後、見せる石垣として切石積石垣が出現し、17 世紀後半には意匠に優れた各種タイプが発達する。玉泉院丸周辺（第 306 図①）においては、これら切石積石垣は、滝石組の機能・意匠を具えた色紙短冊積石垣をはじめ、あらかじめ庭園の主要な構成要素・見所として構築されたのであって、借景等として後から取り込まれたのではないと考えている。

このように切石積石垣と庭園は、玉泉院丸周辺では密接な関係にあるが、金沢城に関連する他の庭園では、切石積石垣を見所として積極的に採用している事例は、ほとんど認められない。

このうち本丸・東ノ丸については、切石積石垣が出現する寛永８年（1631）以前に廃絶している。二ノ丸主要部の庭園は、高所の平場に展開し、流れを主体とする平庭であり、切石積石垣が見所として設けられたとは考え難い。ただし二ノ丸数寄屋屋敷は、北側・東側の石垣面が意匠的であり、数寄空間としての一体性が意図されている可能性があるが、石垣構築時の郭内部の状況が判然としていない状況にある。

金谷出丸と蓮池庭では、ともに切石積石垣が多様化した 17 世紀後半に庭園が築造されているが、現況では玉泉院丸のような石垣は認められない。蓮池庭の中核となる翠滝周辺の石組は、18 世紀後半に修築されているが、長大な立石を所々に交える点等、玉泉院丸色紙短冊積石垣と類似する部分も

ある。しかし部材は自然石もしくは割石であり、積方についても、同じ頃の金沢城本体の粗加工石積石垣とはもとより全く異なった印象を受ける。

19 世紀以後に形成された竹沢庭では、比較的切石積石垣が多く認められる。このうち金沢神社（竹沢鎮守）本殿基壇・辰巳長屋基壇、霞ヶ池から北側へ突き出した水道石垣（第 306 図②）や、霞ヶ池南側排水口付近の護岸（③）は、金沢城石垣編年７期（享和・文化年間頃、19 世紀初頭）の流れを組む正面多角形・布積の切石積である。

辰巳長屋や金沢神社本殿の基壇は、建物の下部構造の一部であり、竹沢御殿や巽御殿といった、御殿空間との関わりで考えるべきであろう。霞ヶ池の護岸は、大抵の場合、下半は水面下となり、あまり目立たない。また水道石垣（桝下部分）は、竹沢庭北辺の斜面に沿って設けられた蓮池往来・役人往来には近接するものの、庭園主要部とは離れており、むしろ通路出入り口を意識したのかも知れない。いずれにしろこれらは、庭園の見所とは言い難い。

金城霊沢南東（背後）の石垣（④）は、正面長方形の切石材を斜位に据え、落とし積みとするもので、金沢城内ではみられない特殊な意匠である。この石垣により、極めて平板で垂直に近い崖面が作り出されており、これを意図したものとすると、玉泉院丸石垣と同様の効果を狙ったものと言えるかも知れない。隣接して、戸室石・滝坂石の切石を用いて積まれた鳳凰山の岩窟もあり、両者は一体で形成された可能性が考えられる。ただし城郭石垣から派生したものかどうか、玉泉院丸石垣群の伝統を継承しているかどうかは、検討の余地がある。

このように、庭園の主要な構成要素としての切石積石垣は、時期・区域が限定されており、金沢城庭園全体に共通するわけではない。とは言え、金沢城を特徴付ける遺構であることは論を待たず、切石積石垣と庭園との結び付きの成立時期・形成過程等が課題に挙げられる。

ところで蓮池庭・竹沢庭においては、川原石を築石の主体とし、隅角部付近に戸室石を用いた石垣が目立つ。竹沢庭の調練場土塁、栄螺山、巽御殿基壇（⑤）等が代表例であり、また金谷出丸の築山南面の石垣（⑥）もこのタイプである。これらの石垣は、単独で庭園の見所になるものとは考え難いが、金沢城中心付近ではあまり見られず、周辺・庭園空間に多い。

川原石主体の石垣は、金沢城下町にも多く認められ、「胴割石積」として、まちづくり・都市景観整備の観点からも注目されている［小林他 2009］。ただし栄螺山石垣の解体調査では、入念な裏込めが認められ、金沢城周辺の一群は、一般的な城郭石垣とも共通の特徴を持つ。このことから、技術系譜・構築の担い手が異なるとは一概に言い難いが、例えば略式的な様式だとすれば、金沢城本体よりも、外郭・郭外の屋敷＝庭園空間の方が、格式等の点から導入が容易であったと一応は推定できる。

一方、金沢城庭園の当該石垣の構築年代は、いずれも 19 世紀半ば以降とみられる。竹沢庭や金谷出丸では、19 世紀以降、地割の変更を伴う修築が連綿として継続しており、小規模ながら新たな石垣普請が生じる余地が多かった。この場合はむしろ新出の様式として採用されたとも考えられる。いずれにしても城下・郊外の状況も含め、整理・検討を要する課題である。

石組

金沢城庭園のうち、現在まで存続している兼六園（蓮池庭・竹沢庭）・金谷出丸庭園では、石組はそれほど目立っていない。蓮池庭・金谷出丸では、滝周辺の石組が最も大規模で、とくに前者の翠滝では巨大な立石も認められる。この他にはある程度まとまりをもつものとして、蓮池庭では新清水周辺、金谷出丸では鳥兜島とその対岸付近が挙げられる。池の護岸については、川原石積が主体であり、石組の範囲はさほど広くなく、概して小規模である。

竹沢庭では、栄螺山・七福神山・山崎山・鳳凰山の築山と、霞ヶ池南岸の一部、曲水東部の中島・出島（屈曲部）、曲水西部の七福神山付近の護岸等に、まとまった石組が認められる。ただしこれらの石組も、石材は比較的小規模で、構成される数量もさほど多くない。山崎山北西麓斜面の石組は、

範囲全長約 25 ｍを測る比較的大規模な石組であるが、石材は 40 点程度で、幅は２ｍを超えるものが２基あるが、高さは 1.5 ｍ程度が最大となる。また栄螺山は、周囲約 90 ｍ、高さ約９ｍを測る大規模な築山であるが、石組は全山に展開するものではなく、まとまったものは北側山麓や頂部付近に留まる。これらの庭園は、いずれも 18 世紀後半以降に修築・造営されたものであり、近世前期の状況ははっきりせず、その特徴も、時期的な傾向を示している可能性は残る。

発掘調査で判明した玉泉院丸庭園の場合は、やはり東側斜面の滝石組周辺に石材の集中が認められた。本庭園では、遺存していた景石以外に、景石の抜取痕が多数確認されている。これら抜取痕は、近代以後だけではなく、庭園存続時の改修に伴うものもあり、庭園造営当初の状況は明確ではない。なお、明治 13 年（1880）に兼六園に設けられた「明治紀念之標」の石積石材は、玉泉院丸から搬入されたものであり、平成３年の解体修理の際、130 石と算定されている［石川県兼六園管理事務所 1993］。

東ノ丸庭園については、寛永８年（1631）以前の遺構面において、３基の景石の配置が確認されているが、部分的な検出に留まっているので、庭園遺構全般の傾向は判然としない。いずれにせよ、近世後期以降の金沢城庭園では、石組は要所において限定的に設けているように思われる。

石組の配石の特徴として、金沢城庭園全体に共通する傾向を見出すまでにはまだ至っておらず、課題としたいが、ここではそれぞれの場所に応じた配置の事例を指摘しておく。竹沢庭の石組を代表する七福神山・山崎山については、ともに築山の高まりの手前において、左右に幅広く、奥行をあまり持たずに分布している点に共通性がある。しかし七福神山では、幅が狭く丈の高い景石は左側に寄せられ、中央付近には幅広い立石や、築山斜面に寄せ掛けた大型の平石が中心となる。山崎山では、３箇所程度に集中域が分かれ、立石・平石が散在・林立している印象を受ける。

後述するように、七福神山は福浦石（安山岩）主体、山崎山はこれに加え滝坂石・戸室石等多様な岩石種で構成され、現状の景観に落ち着いた時期が異なる可能性が高いが、その他にも、主な鑑賞方法の違いが、石組配置に関係しているように思われる。七福神山は、曲水西部を挟んで書斎と対面しており、背後の園外の景色とも関わって、眺めることが一義的であったと推定されるのに対し、山崎山は石組に沿うように園路があり、おそらく行歩とともに鑑賞されたと考えられる。

景石（第 306 図⑦～第 307 図③）

景石については、岩石種の特徴が庭園の景観を左右する重要な要素となる。

金沢城庭園では、主たる石垣石材で、金沢南東の戸室山一帯に産出する戸室石（角閃石安山岩、第 306 図⑦）、金沢南東、犀川上流に産出する滝坂石（スコリア凝灰岩、⑧）、能登・羽咋郡志賀町荒木海岸一帯から搬入された福浦石（安山岩、第 307 図①）、同じく能登・羽咋市の海岸地帯に産出する滝石（花崗岩・花崗閃緑岩、②）等がある。また産地は特定されていないが、能登地方の海岸部に推定される安山岩で、板状節理の発達した板石（③）が知られており、景石としてだけではなく、敷石等を構成する小型の部材としても多く出土する（第５章第４節参照）。

これら５種類が代表的な岩石種であるが、この他能登半島先端の珠洲市馬繋に産出する堆積岩で、木葉の化石を交えるもの（木葉石）や、金沢南方、伏見川上流で産出する溶結凝灰岩で、石造物にも用いられる坪野石、また砂岩や凝灰岩等も若干認められ、多様な様相を呈する。

寛永８年（1631）頃に廃絶した本丸・東ノ丸の庭園では、景石として、戸室石・福浦石・滝石・安山岩板石がすでに揃っている。また東ノ丸では、原位置を保ってはいないが、滝坂石と同様のスコリア凝灰岩の景石片が出土している。色調等、一般的なものとは異なるが、滝坂石の景石もこの頃までに出現している可能性を示唆している。

寛永期以後に成立した、玉泉院丸・金谷出丸・蓮池庭・竹沢庭での景石岩石種の構成には、ある程度の傾向が看取される。戸室石・福浦石は、各庭園において一定量認められ、最も安定して利用されている。前述した玉泉院丸の景石に関わる「明治紀念之標」石積石材においても、全 150 石中戸室

石が 44 個、福浦石が 73 個を数える［石川県兼六園管理事務所 1993］。安山岩板石は、成立時期の早い玉泉院丸庭園では小型石材を含め多く見られ、主体的であるが、金谷出丸・蓮池庭・竹沢庭では存在が判然とせず、17 世紀後半以後にはあまり用いられなかった可能性がある。滝坂石は、玉泉院丸では比較的少ないが（明治紀念之標石積中でも８個）、19 世紀代に新設された竹沢庭では、最も目立つ岩石種となっている。とくに、嘉永４年（1851）頃の造営とみられる鳳凰山では、岩窟内部の切石材としては戸室石にやや譲るものの、外部の景石はすべて滝坂石で構成されている。また山崎山や、蓮池庭の新清水等、1850～60 年頃の築造と推定される構成要素において、滝坂石は量的に優位を占める。

花崗岩・花崗閃緑岩の滝石は、石川県産の庭石としてとくに著名であるが、金沢城庭園においては少数で、石組の主体を占めることはない。ただし本丸や東ノ丸の庭園では、部分的な発掘にも関わらず検出されており、初期には目立っていた可能性がある。

戸室石については、矢穴を有し、割面を見せるものも多く、石垣石材採取との関係が想定されるが、形状は多様で、石垣材の転用が主流になっているとは必ずしも言えず、景石として吟味されている部分も大きいと思われる。戸室石以外については、滝坂石に一部矢穴が残るものがあり、長大な柱状を呈する材（曲水東部護岸）や、切石材（鳳凰山岩窟）が認められるが、概ね自然面をもって景色とし、配置されていると思われる。

石橋（第 307 図④～⑦）

石橋については、金沢城庭園では現在見所となっている箇所が多く、金谷出丸では図月橋、蓮池庭では黄門橋･日暮橋、竹沢庭では雁行橋（亀甲橋）･雪見橋等が知られ、それぞれ個性的な特徴がある。本丸庭園では、長方形の枘が付いた坪野石製の円柱状製品が出土している。玉泉院丸庭園でも同様の形状を呈した戸室石の製品が出土しており、これらについては可能性の一例として、石橋橋脚の部材が挙げられる。もしそうなら、本丸庭園の場合、寛永８年（1631）以前に遡る事例となる。玉泉院丸庭園に関する元禄元年（1688）の文献史料（「前田貞親手記」）には、扶持人大工により石橋が普請されたことを示す記述があり（第 22 表 41-07）、近世前期から庭園の構成要素として存在していた。

現存する石橋の中では、蓮池庭の黄門橋（第 307 図④）が先行する可能性がある。「太梁公日記」安永３年５月 10 日条では、蓮池庭から揚地（後の竹沢庭）に行く途中に石橋があることを記述しており（第 38 表 61-11）、これを黄門橋とする見方がある。寛政４年（1792）製作、同 11 年（1799）修正とされる「兼六園蓮池庭之絵図額」（第 145 図 62-07）では、現在とおおよそ同じ位置に石橋が描かれていて、遅くともこの頃には存在していたとみてよい。ただし現況とは異なり、巨大な台石は表現されていない。雪見橋は、竹沢御殿造営時の絵図には描かれておらず、天保８～９年（1837～38）頃の景観を示す「金沢御城内外御建物絵図」（第 149 図 62-16）に初めて現れる。黄門橋の台石が表現されるのもこの絵図からであり、竹沢御殿解体後しばらくしての普請とみなされる。

兼六園の造形意匠を代表する雁行橋（亀甲橋）と日暮橋は、絵図 62-16 には見られない。ただし雁行橋に先行して木製の八つ橋が、日暮橋に先行して木橋ないし柴橋が、それぞれ架かっている。両者は天保 10 年以降の景観を示す「竹沢并蓮池御庭御囲之図」（第 156 図）に揃って登場している。第４章でも記述した通り、黄門橋や雪見橋は、上面のみならず、側面の調整も丁寧であるが、雁行橋・日暮橋の橋板側面は粗く、本来露呈を前提にしたものではなかったと考えられる。また日暮橋の橋板は一枚板ではなく、橋の長軸に斜交するように多数のパーツに分かれている。このように雁行橋・日暮橋の橋板部材は専用材とは考え難く、特徴的な橋板は、竹沢御殿に伴う延段や敷石等の部材を転用したものと推察される。むしろ転用材を大胆に再構成したところに、妙味があるものと解したい。

金谷出丸の図月橋は、文献・絵図等の検討から、慶応２年～明治２年（1866～1869）の庭園普請に伴い設けられたと判断される。雁行橋・日暮橋以上に特異な構造・意匠を有するが、このうち橋本

①色紙短冊積石垣周辺［玉泉院丸］

②水道石垣（桝下）［竹沢庭］

③霞池護岸石垣［竹沢庭］

④金城霊沢南東石垣［竹沢庭］

⑤巽御殿石垣［竹沢庭］

⑥金谷出丸石垣

⑦戸室石［玉泉院丸］

⑧滝坂石［竹沢庭］

第 306 図　石の利用（石垣・景石）

①福浦石［竹沢庭］

②滝石［東ノ丸］

③安山岩板石［竹沢庭］

④黄門橋［蓮池庭］

⑤雁行橋（亀甲橋）［竹沢庭］

⑥日暮橋［蓮池庭］

⑦図月橋［金谷出丸］

⑧花崗岩切石［金谷出丸］

第 307 図　石の利用（景石・石橋等）

体部分を構成し、橋の両側面に端面（小端）を覗かせている瓦は、ほぼ腰瓦で占められているようであり、端面の調整からみて、幾つかのタイプが混在していることが窺える。腰瓦は、櫓や土蔵等の壁に貼られた平面略正方形の平板な瓦であり、慶応～明治期の普請により撤去・移転された文庫土蔵等にも用いられていたとすれば、図月橋に使われたのは新材ではなく、これらの転用材であることが想定される。ただし、金沢城庭園において一際目立つ特異性は、転用の有無に関わらず、別途その技術的・様式的系譜等、検討すべき課題が多い。

なお、金沢城庭園の添景物となる石造物は、燈籠・石塔・手水鉢等多様な種類がある。今回の調査では十分に検討し得なかったが、ここでは平板な矩形を呈する切石製品（第 307 図⑧）について若干の整理をしておきたい。この製品は、平面形が整った矩形を呈するが、厚みは一定ではなく、底面は不定形と推定され、浅く埋められた状態で設置されている。

金沢城庭園では、流れに架かる橋や、飛石・沢渡に対し、岸側に配置されている場合が多く、この他平地に置かれている事例も認められる。本丸・東ノ丸や玉泉院丸庭園の発掘調査では検出されておらず、竹沢庭や金谷出丸で目立つ傾向にあって、流行時期を反映している可能性はあるがはっきりしない。岩石種がほとんど花崗岩である点が特徴的であり、産地については地元・滝石だけではなく、御影石等、遠隔地からの搬入も考慮する必要がある。

（3）泉水と辰巳用水

泉水

泉水は庭園の構成要素としてしばしば主体を占め、金沢城でも例外ではない。最初期に想定される茶庭（露地）についてはともかく、これ以降の庭園においては泉水が備わっている。

本丸・東ノ丸においては、発掘調査・ボーリング調査により、池の存在が明らかになった。このうち本丸では、平面的な広がりは不明なものの、基盤を含めた断面が確認されていて、築造から廃絶の過程に関する知見が得られた。底面まで被熱していること等から、寛永８年（1631）の大火による廃絶が窺われるとともに、この時点で水を湛えていなかったことが判明した。実際に水を入れられたことがなかったかどうかは検討の余地があるが、城内の最高所に位置し、かつ寛永９年（1632）とされる辰巳用水開設以前の遺構として、安定した給水構造を欠いていたとみられる。

二ノ丸の泉水については、庭園全体同様、とくに 18 世紀以前の状況が課題となっているが、立地や御殿建物との関係上、当初から辰巳用水による流れを主体とするものだったと推察される。19 世紀前葉になると絵図に描かれる事例が増加し、この時点で居間先に小型の池があったことが窺える。この池に関しては、ボーリング調査でその遺存が推定されたが、詳細は今後の課題である。この他現存する遺構として、数寄屋屋敷東の石垣に組み込まれた石樋があり、絵図と照合することにより、近世末期における泉水の一部分であることが確かとなった。

玉泉院丸庭園は、寛永 11 年（1634）に築造されたことが「三壺聞書」［石川県金沢城調査研究所 2017b］等にみえる。池の形状は、寛文期以降、城絵図の多くに明確に描写され、この点については他の金沢城庭園とは異なる扱いを受けていたようである。発掘調査では、池・滝・流れ等の遺構が検出され、水性粘質土や砂利の堆積等、流水・湛水の痕跡が明瞭に認められるとともに、池と周辺において数次にわたる大規模な造成があり、二ノ丸からの流れの経路や池護岸等の変化も確認されている。しかし、池の位置や全体形状は、初期の堀を踏襲していた南側が埋め立てられた点を除くと、19 世紀中葉に至るまで大きく変わっておらず、基本的な地割は構築当初以来概ね継承されている。

現存する金谷出丸庭園・蓮池庭・竹沢庭では、現在は途絶している箇所もあるが、辰巳用水を動脈とする、滝・流れ・池・噴水等からなる複合的な泉水景観が今も認められる。維持管理上、他の構成要素に比べ、とりわけ補修の機会が多いものとみられ、全体は近世そのままの姿とは言えないが、遺構の特徴や絵図・絵画の描写との比較等からみて、受け継がれている部分もまた多いと考えられる。

蓮池庭は、玉泉院丸同様、構築当初の地割を概ね保っていると思われ、台地斜面という立地に応じ、落差のある滝や、比較的急勾配となって渓谷の趣をもつ流れ等が形成された。泉水景観の核となる翠滝は、18 世紀後半の改修以前から七瀬滝と呼ばれていて、その名称からすれば元は段落ちの滝であったことが推察され、現存する滝の造営に際しては、斜面裾の掘削等、地形の大きな改変があったことも想定される。また噴水や新清水等、19 世紀中葉頃には新奇な趣向も取り入れられている。

竹沢庭の泉水は、御殿建物の撤去に伴い、大規模化・広大化が進行し、金沢城庭園中、池・流れの規模が最大となった。これはその時々の修築の結果であり、現存する最終形態を目標としたものではなかったと考えられるが、例えば曲水と称される流れのうち、とくに南側に張り出した湾曲部は、流水の緩やかさや流れの幅、護岸の配石の目立たなさ等、蓮池庭側と対照的な景観が形成されていて、竹沢庭を特徴づける主要な要素となっている。

金谷出丸庭園の泉水は藩最末期に形成されたもので、慶応以前の構成要素をそのままの形では受け継いでいない。新設の滝は、屈曲をいくつも重ねた流路をもつ段落ちの滝で、若干先行する玉泉院丸庭園の下段の滝と比較すると、それほど高低差がなく、九十九折にも見えるほど屈曲が著しい。また池は第４章でも強調したが、それまでとは大きく異なる趣向によっている。いずれも庭園の中核をなすもので、当該期の庭園の強い個性は、泉水とその関連施設によるところがほとんどと言える。

辰巳用水（第 308～310 図）

本丸･東ノ丸を除き、上記の泉水すべての基幹となった辰巳用水については、その造営経緯や構造、維持管理や環境等、多数の論文・書籍で紹介されている。ここで取り上げる樋の形態と、金沢城・兼六園における経路についても、よく知られているところであるが、今回の調査で得た若干の所見を含め整理する。

樋の形態　金沢城一帯で確認された辰巳用水の樋については、木樋１：上下両側四面の板材を釘留したもの（第 308 図①）、木樋２:断面凹字形の本体と上部（蓋）を組み合わせたもの（②）、木樋３:半割した芯持材を刳り貫き組み合わせたもの、木樋４：板を桶状に組み、竹の箍を嵌め、周りを礫混じり粘土で被覆したもの（粘土巻木樋、③）、石樋：外形を直方体に整形し、芯部の通水部分を円筒状に刳り貫いたもの（④）、の５形態が知られている。

木樋１は、石川門前土橋の発掘調査で検出された［石川県立埋蔵文化財センター1997］。層位や樋掘方内の遺物等から、17 世紀前半に設置されたことが判明しており、寛永９年（1632）の構築当初に伴う樋に比定される。木樋２は、県庁跡地（堂形）の発掘調査で検出された［石川県教育委員会･(財)石川県埋蔵文化財センター2010］。年代の特定は難しいが、並走する石樋より先行すると考えられる。なお、文化３年（1806）頃の内容を示す「石川門から二ノ丸まで水廻樋之図」（第 38 図 32-08）には、「角樋」「金樋」との文字記載があり、前者は木樋２に該当する可能性がある。

木樋３・木樋４は鶴ノ丸第１次調査区（橋爪門南側の厩付近）の発掘調査で検出された［石川県金沢城調査研究所 2016d］。本調査区では石樋を含め三本の樋が確認されており、木樋３⇒木樋４⇒石樋の順で変遷したことが判明した。このうち木樋３は、本体が腐朽した部分に入り込んだ土壌の形状と「上ヶ水樋図り帳」扣（穴太政洋氏蔵）にみえる「丸樋」等の記載により、形態を推定したものである。木樋４は、12 枚程度の板で構成される桶状の本体に、漏水防止用として小礫混じりの粘土を巻き付けたもので、粘土の間に補強用の竹の箍を埋め込み、継手にも工夫を凝らした複雑な製作工程が復元されている。報告書では文献・絵図の検討から、木樋３を明和年間～文化４年までの間（1764～1807）には認められるとし、また木樋４の設置を文化５年～天保３年（1808～1832）の間と推定している。

石樋は、上記調査区の全てで検出されている他、従前より各書で報告されている著名な製品で、富山県砺波市（旧庄川町）に産出する緑色凝灰岩・金屋石で作られたことが判明している。なお近年、

帯磁率を用いた材質同定が行われており、金屋石の他、福井県の笏谷石製品も存在することが指摘されている［富山市教育委員会埋蔵文化財センター2015］が、形状や加工状況との対応等の課題がある。石樋の導入時期については、『庄川町史』下巻［庄川町史編さん委員会 1975］による天保 14 年（1843）説が知られているが、近年翻刻した金沢城代の日記（「村井長貞日記」、第 27 表 51-17）によると、天保 12 年（1841）には敷設されていることが知られ、なお検討を要する。

この他、昭和 44 年の二ノ丸の発掘調査において、極楽橋橋詰付近で検出された木樋・石樋について、辰巳用水の水道とする指摘がある［井上 1969］。このうち南北方向の石樋については、凝灰岩製の排水溝とするのが妥当と思われる。木樋のうち東西に配されるものは、辰巳用水の可能性が考えられるが、腐朽のため形態は不明である。石樋の中に収められていた小型の木樋については、臨時的な水道として考えられなくもないが、詳細が判然とせず、判断を保留せざるを得ない（第４章第３節参照）。

用水の経路　金沢城内における辰巳用水の経路については、［木越 2009］等に詳しいが、ここでは兼六園（蓮池庭・竹沢庭）や慶応～明治期の金谷出丸の状況も加えて概観する。

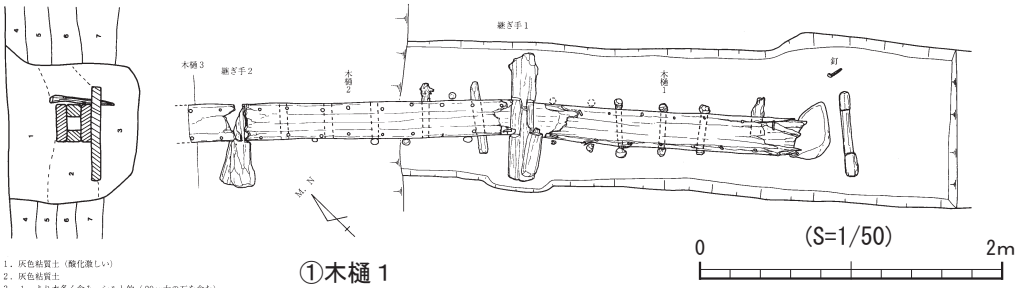
辰巳用水の経路については、近世前期では、18 世紀前半頃の「金沢城図」（金沢市立玉川図書館蔵）と同種の一群、近世後期では文政 13 年（1830）作成の「御城中壱分碁絵図」（横山隆昭氏蔵）と同種の一群、嘉永３年（1850）作成の「御城分間御絵図」（（公財）前田育徳会蔵）等、全体を俯瞰できる絵図資料が限られている。第 310 図は、金沢城・兼六園（蓮池庭・竹沢庭）の両区域を精密に描いた「御城分間御絵図」をベースとし、上記の絵図の他、部分的な経路を描いた絵図等の内容を合成・調整したものである。細部を省略した箇所があり、ある程度の時間幅をとっているため、図中の経路がすべて同時に存在したわけではなく、また各図を下図に合わせて合成しているため、位置の厳密さを欠く等問題もあるが、17～18 世紀前半、18 世紀後半～19 世紀初頭、19 世紀前半～中頃に三大別し、その間の全体を一覧し、変化の傾向を把握する意図で作成した。また第 309 図は経路について若干の差異を捨象して整理し、各段階の状況もあわせて示した概念図である。

第 310 図上段は、17～18 世紀前半頃の状況を示す。上流（南東・図右）について、城下町図では、山崎山辺りから、北西方向に進む経路が記載されている。一方 1750 年頃の景観年代を示す「金沢城御殿絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）では、蓮池庭東に桝があって、北東に屈曲し、後の水道上門（水樋上門）の西側あたりで埋樋となり、金沢城へ向かう経路が描かれている。後の竹沢御殿（庭）となる区域が、17 世紀末以後武家屋敷から揚地（藩有地）になり、辰巳用水の流路にも変化があったと推察されるが詳細は分からない。また南西に折れて、瓢池・堂形方面に向かう経路についても、詳細は判然としないが、部分的にいもり堀への給水を描く絵図や、蓮池庭の泉水に係る文献史料があり、存在は明らかである。蓮池庭の東側で、金沢城内と瓢池・堂形方面に分岐する形は、近世後期以後も継承されており、幹線的な経路となっている。

金沢城内に向かう経路は、石川門前土橋を通り、石川門の西側で、南方向（南門～二ノ丸）と北西方向（土橋門～金谷出丸）に分岐する。北西経路は、17 世紀後半、金谷出丸に馬場や庭園が設けられて以降に新設された可能性がある。南側経路は根幹の経路で、途中内堀に供給し、鶴ノ丸を経て二ノ丸居間先に至る。水道上門付近と二ノ丸の間は標高が低く、この部分は埋樋として水圧を保持し、二ノ丸居間先において開渠となる。金沢城内において辰巳用水が達した最高地点であり、二ノ丸庭園の流れを形成した後、玉泉院丸方面に流下する。18 世紀前半では数寄屋門を経由する流路のみ描かれているが、この他居間先下の色紙短冊積石垣に向かい、滝となる経路があった。

第 310 図中段は、18 世紀後半～19 世紀初め頃の状況を示す。上流をみると、水道上門の上手（東側）で、翠滝上流に至る経路が認められるが、その西側において、蓮池庭を貫流して南下する流れと、金沢城内に向かう埋樋が分岐する在り方は、前代と同様と思われる。

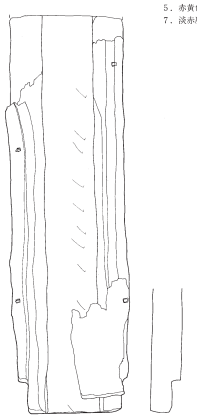
金沢城内では、石川門西側で分岐して金谷出丸に向かう経路が見られなくなる。廃絶を直接示す資



①木樋１

石川門前土橋　石川門調査区

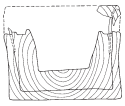
［石川県立埋蔵文化財センター 1997］Fig185 より転載

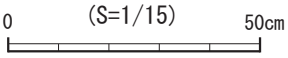


③木樋４　鶴ノ丸第１次調査区南端部（SD02）

④石樋　金谷出丸　金谷門付近

［石川県金沢城調査研究所 2016d］写真図版２より転載



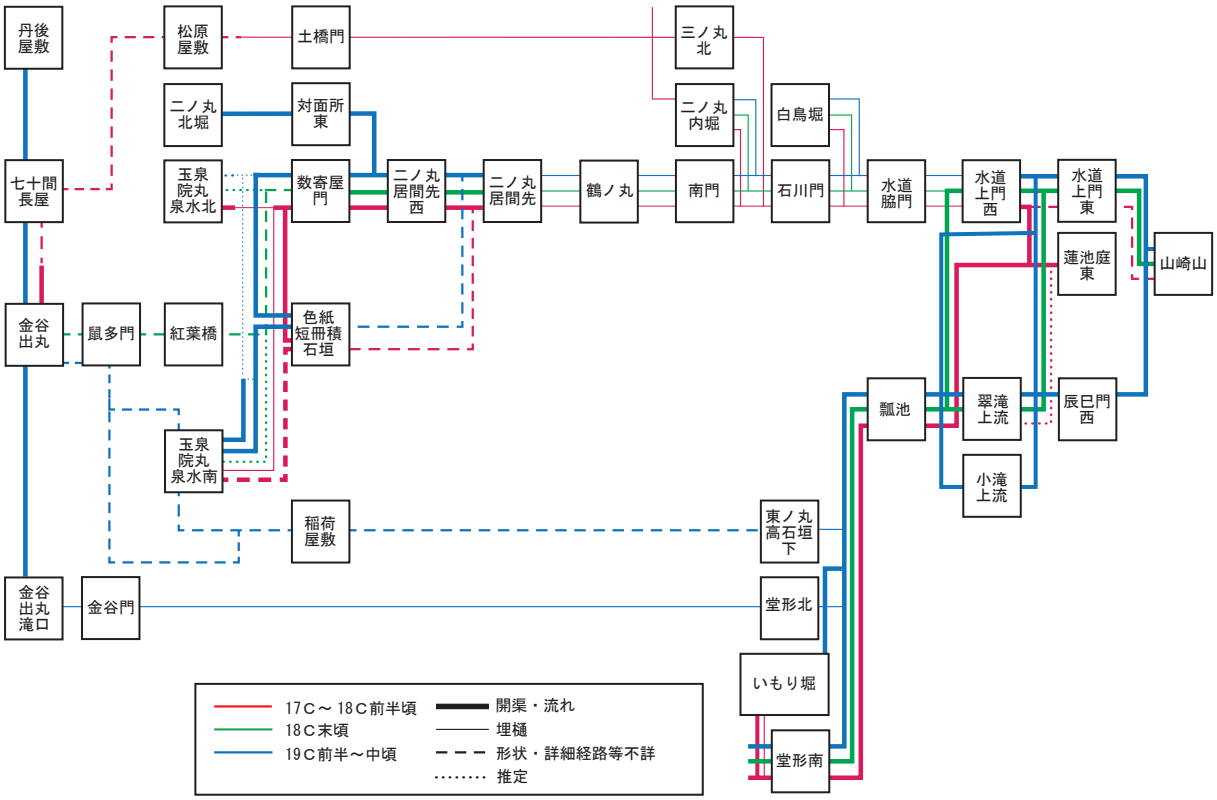


②木樋２

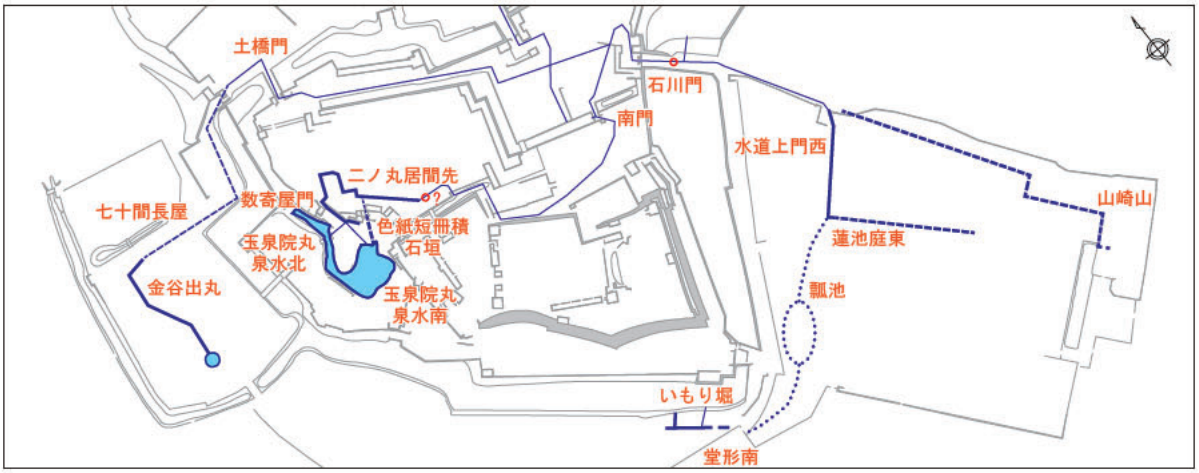
堂形　平成 16 年度調査５区北部

［石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010］第 79 図より転載

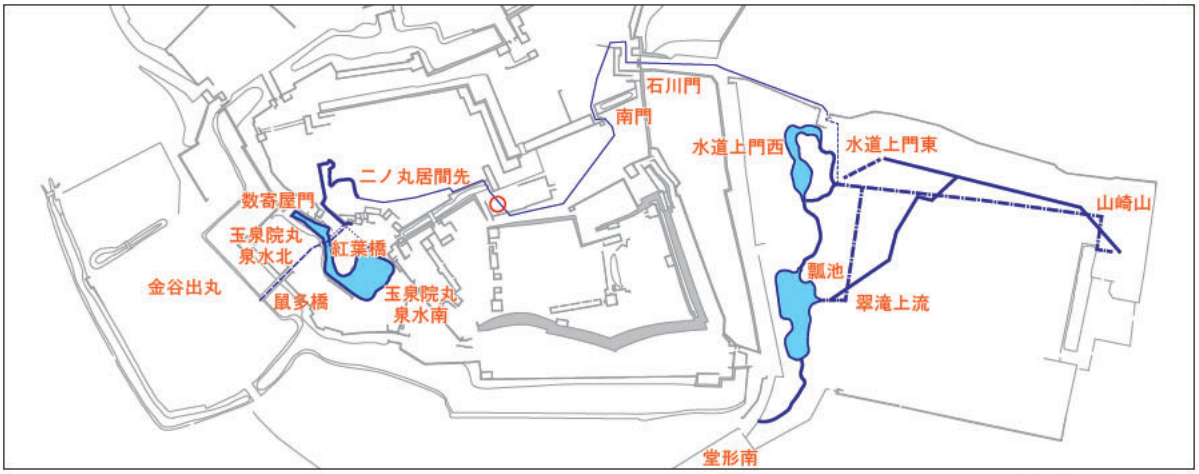
第 308 図　辰巳用水木樋・石樋



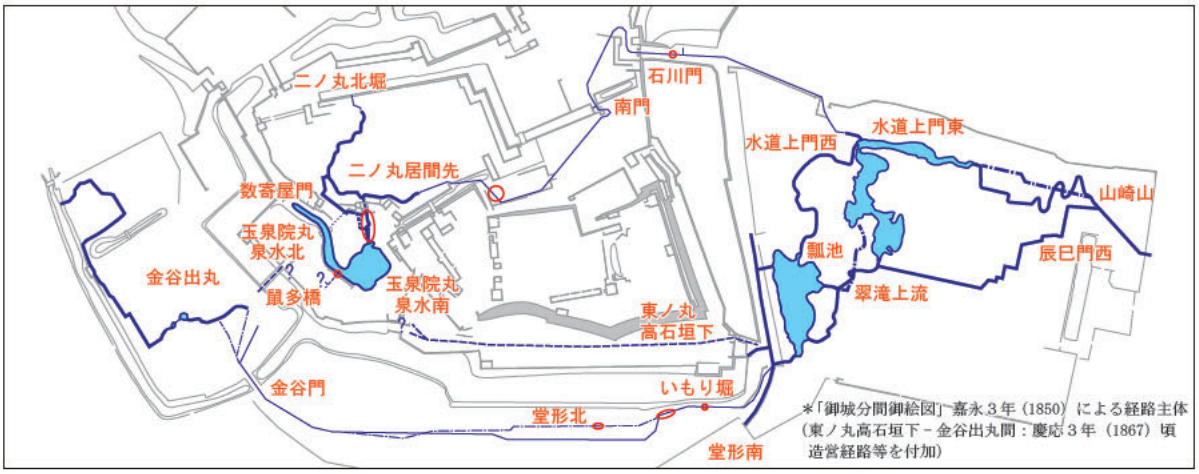
第 309 図　辰巳用水経路概略図



17C ～ 18C 前半頃



18C 後半～ 19C 初頃



19C 前半～中頃

開渠・流れ　　形状・詳細経路等不詳
埋樋　　推定
（若干先行する経路）　　発掘検出箇所

下図原図　「御城分間御絵図」［（公財）前田育徳会蔵］
縮尺：約 1/8,000

経路参照
17C ～ 18C 前半頃　：「金沢城図」（第 16 表 32-03 他）「金沢城御殿絵図」（第 16 表 32-06 他）［金沢市立玉川図書館蔵］等
18C 後半～ 19C 初頃：「金沢城図」「金沢城御殿絵図」「竹沢御殿絵図」（第 42 表 62-09）「学校御絵図」（第 42 表 62-10）［金沢市立玉川図書館蔵］
「石川門から二ノ丸まで水廻樋之図」（第 16 表 32-08）［石川県立歴史博物館蔵］等
19C 前半～中頃　：「御城分間御絵図」（第 17 表 32-20 他）「金沢御城内外御建物絵図」（第 17 表 32-16 他）［（公財）前田育徳会蔵］
「御城中壱分碁絵図」（第 9 図、第 17 表 32-14 他）［横山隆昭氏蔵］「金谷御殿御普請諸事留」（第 29 表 51-35 他）［金沢市立玉川図書館蔵］等

第 310 図　辰巳用水経路の変遷

料は知られていないが、「金谷御殿絵図」（第 102 図 52-06）の表現等から、宝暦９年（1759）の大火を契機に廃止に向かったと推定される。その一方、天明の初め頃（1781～）は、玉泉院丸から鼠多門橋に「釣樋」をして導水したとする史料があり（第 26 表 51-09）、近世前期経路の廃絶とも対応するものとして注目される。なお、当該史料では、堂形（「御馬場」）を経由して金谷出丸に至る新規経路（南廻り）の成立を「天明之末」（～1788）としている。

第 310 図下段は、19 世紀前半～中頃の状況を示す。当該期は情報が多く、短期間での経路の変動が窺えるが、図では、下図である「御城分間御絵図」（嘉永３年（1850））に描かれた経路を基本とし、若干前後する時期の代表的な経路を補足するに留めている。

上流の竹沢庭内は多くの水路網があり、ここでは主な経路のみを示した。庭園内の流路として、変化に富んだ形状が目立つ。また辰巳門西から翠滝上流に向かう南廻りの経路については、第４章第７節でも詳述した通り、園内に設けられた水田・畑等への給水を目的としたものと推察した。

二ノ丸に向かう幹線経路には大きな変動がないが、二ノ丸庭園内では、1808 年頃～1850 年頃まで、流れが御殿を貫き、二ノ丸北側の内堀に流下する状態にあった。なお玉泉院丸への経路については、水路を詳細に描いている筈の文政 13 年（1830）作成「御城中壱分碁絵図」に見られないという問題があり、この前後、玉泉院丸庭園の泉水への辰巳用水による給水が途絶していたという見方も示されている。この点については、第４章第３節でも触れた通り、二ノ丸の余水となった後、排水暗渠（万年樋）により数寄屋屋敷側に流下していた可能性も成り立ち、なお検討を要する。

金谷出丸への引水については、近世前期とは逆に南廻りの経路が設けられた。これは蓮池庭瓢池以南の水路から分岐し、堂形北部の馬場に沿って北西に伸長し、内総構堀の起点付近となる金谷門前の土橋を通って金谷御殿（屋敷）内に至るもので、瓢池南側と金谷出丸との間は低く、やはり伏越の理を応用しこの間は埋樋となっている。金谷御殿（屋敷）内では開渠となり、泉水の形状は短い期間で頻繁に変化するが、起点となる滝口が屋敷地の南東側にあって、水はおよそ北西方向に庭園を横断して流れ、園外に出たのちは北流するという形は踏襲されている。上記の通り造営年代を天明末とする文献史料があり、文政 13 年（1830）の「御城中壱分碁絵図」には描写されている。

金谷出丸への経路は、「御城中壱分碁絵図」「御城分間御絵図」という代表的な絵図に描かれていたこともあり、従来からよく知られていたが、「金谷御殿御普請諸事留」には、慶応３年（1867）、東ノ丸高石垣下を通り、金谷出丸に向かう経路の造営が記されており（第 29 表 51-35、41）、藩末期になって新たな導水路が加わることとなった。ただし玉泉院丸から金谷出丸にかけての状況については、いもり堀横断への対処を含め判然としない。また文献 51-36 によれば、用心水としての利用計画が窺え、庭園の泉水に供給されたかどうかは明らかではない。

第 309 図により経路のまとまりを見ると、蓮池庭の北東側から北回りで石川門－南門－二ノ丸に至る暗渠（埋樋）と、南回りで蓮池庭を縦断し堂形に至る開渠（流れ）が、近世を通じて継続していることが明瞭に窺える。近世後期になって新たに開拓された箇所のうち、特に大規模なものは、堂形や東ノ丸高石垣下を経由して金谷出丸に至る専用経路であった。庭園の泉水にのみ供給されていたとは言えないようであるが、金谷出丸への導水は、辰巳用水の性質を強く反映しているように思われる。

３．利用の状況と造営・管理体制

（1）利用の状況

兼六園（蓮池庭・竹沢庭）について検討された長山直治氏の研究［長山 2006b］では、現在の兼六園が鑑賞面から利用されていることに対し、「大名庭園は大名の生活の必要から生まれた庭園であって、多目的に利用されていた」ことを指摘されている（P243）。また池田仁子氏の研究［池田 2016］では、加賀藩の庭園を対象に、利用事例を 11 種類の形態に区分し、その多様な在り方を明確にしている。

金沢城庭園に関連する初期の利用事例として、本丸・東ノ丸に推定される、数寄屋での茶事（第7表21-01）、また「二の丸ノわき」の数寄屋での茶事（第11表31-01）が挙げられる。後者については庭園の実態は不明で、前者においても庭（露地）自体が主体ではないが、利用の記録がほとんどない中、茶事との関わりは注目される。

17世紀後半においても、茶事を中心とした重臣らへの饗応の記録がある一方、藩主の子女らの日常的な遊興の場としても大いに利用されている（第36表61-02・05）。また各庭園に備えられた馬場では、乗馬や射的が藩主自身、あるいは近臣らにより行われ、武芸の場でもあった。

近世後半に入ると、饗応・武芸・鳥猟の場として、多彩な利用の在り方を示す記録が増加する。また寛政期の史料では、月数回にも及ぶ藩主子女の遊興が記録されていて、頻度の点からは庭園利用の主体であったと思われる。

以上の通り、時期的な傾向を持ちつつ多目的に利用されている一方、庭園ごとの特徴も見受けられる。例えば蓮池庭は、17世紀後半以降、藩主による重臣を招いた饗応が行われた場として、最も主体的であったとみられる。ただし格式ある催しの場としてのみ利用されていたわけではなく、むしろ日常的な遊興の場としての利用が頻繁であり、利用形態のほとんどを網羅している。

蓮池庭に隣接する竹沢庭は、泉水･築山といった通常の見所の他、様々な作物を育てた畑があった。蓮池庭にも水田の存在を記載した絵図があるが、畑は竹沢庭の方に多かったと考えられる。また、竹沢庭には、竹沢御殿の解体資材が保管されており、資材置き場としての側面もあった。概して蓮池庭以上に、利用の振れ幅が広かったように推測される。

二ノ丸庭園については、最初期は、重臣を対象とした饗応の場でもあったとみられるが、藩主の居住空間と一体化している性質上、近世後期では、乗馬・射的・鉄砲稽古等の武芸、儀礼的な遊技である蹴鞠、水鳥の飼育、子女の遊興など、藩主の生活・嗜みに密着した利用が顕著となっている。ただし19世紀初期の一時期には居間・広式間の中庭に茶室が設けられていて、周辺とあわせてどのような利用がなされたのか気にかかる。また、二ノ丸居間先は、領内の長寿者の顕彰、漂流者の招聘等、藩主が平人身分と接する、御殿表向とは次元の異なる「窓口」としての側面があったが、これは金沢城の中枢である二ノ丸御殿に付属する庭園特有の性質と言える。

玉泉院丸庭園に関しては、上記二ノ丸の事例から、造営当初の寛永期には、家臣に対する饗応の場としての機能も有していたと推測されるが、当該期の史料を欠きはっきりしない。以後も利用に関する記録は少なく、元禄期や宝暦期に藩主側室・子女の出遊があったこと、天保期に病後の療養を兼ねた藩主の行歩があったこと（第23表41-10・14）くらいしか分からない。この他、城内では例外的に土人形等土製玩具がまとまって出土している（第85図）点も､藩主子女､あるいは隣接する二ノ丸広式･部屋方との関連が想起されるが、なお検討の余地がある。

ところで玉泉院丸庭園は、他の庭園に比べ、立ち入り制限が緩やかであったらしく、少なくとも18世紀後半から19世紀初め頃までは、一般の藩士が庭園内を往来することが可能であった（第23表41-11・12）。また玉泉院丸郭内では庭園空間と役所空間とが截然と区分されておらず、池（泉水）を堀と記載する史料（第29表51-40）も散見され、藩主子女の利用が想定されるにしても、庭園空間としての特異性が強く認識されていない期間があったと思われる。

金谷出丸では、近世を通じ変容が著しく、その特徴も一様ではなかったと推定されるが、利用に関する史料は多くない。19世紀初めから半ばにかけては、御殿・屋敷に付属した狭義の庭（内庭）と、その外側に馬場（外庭）・畑が配置される構成となった。外庭では儀礼的な射的である草鹿が行われた記録（第26表51-13・14）がある。また畑には柿の木が植えられていて［池田2016］、ここにも多目的な利用が窺える。

明治２年（1869）９月には、藩首脳陣や旧重臣家の隠居らを招いた饗応が催されている（第31表

51-52)。蓮池庭以外での饗応の事例として特異であるが、一つには慶応２年（1866）以来の修築が完了した披露、二つには版籍奉還後の新体制の結束を固める意味合いが込められていたと思われる。

なお、大名庭園、とりわけ江戸藩邸の庭園において、多彩な利用のうち、饗応の場としての性質に注目した研究も認められる［白幡 1997］。上記にみたように、金沢城庭園においても饗応の事例は少なくないが、藩主と同格以上の人物が対象となることは、前藩主の正室等身内を除けば見当たらず、多くの場合、重臣・近臣に対する慰労が目的であった。国許の庭園においては、饗応は他の利用目的に比べ、格別に比重を占めているようには窺えない。

（2）造営・管理体制

加賀藩では、石垣普請における穴生のような、築庭に携わる世襲の役職は置かれていない。「三壺聞書」によれば、寛永７年（1630）の本丸、同 11 年（1634）の玉泉院丸の普請では、五十人者・百人者と呼称される組織が編成されている（第７表 21-03、第 22 表 41-02)。これとの直接的な関連は不明であるが、延宝期には小者身分による三十人組が組織され、知行百石前後の平士がその奉行に充てられた。これは藩主出行の際に威儀を整えて扈従するとともに、普段は庭園普請・管理に従事するもので、そのため別名露路（露地）方とも称された。同様の役柄には他に手木足軽がある。

国許では、元禄元年（1688)、当時藩の茶頭を務めていた千宗室とともに、玉泉院丸庭園の修築を担当していることが活動の早い事例である（「前田貞親手記」)。「三十人頭一件」には、この頃、玉泉院丸にあった役所が庭園修築に伴い撤去され（第 22 表 41-08)、金谷出丸七十間長屋門付近の厩関連の建物を仮役所としていたことが記されている。玉泉院丸に露地方役所に改めて建てられたのは享保 12 年（1727）で（第 22 表 41-09)、この後は藩末に至るまで固定している。

近世後半における三十人頭（露地方奉行）の活動は、「太梁公日記」「世子御座所普請方御用主附一件」「金谷御殿御普請諸事留」等の一次史料に窺うことができる。「太梁公日記」では、二ノ丸・蓮池庭の普請や利用に関わり、藩主前田治脩の意向に従って精励する状況が窺われる（第 12 表 31-11・17)。「世子御座所普請方御用主附一件」では、世子前田慶寧の金沢居住に伴う金谷御殿の普請に関し、御用主附を命じられた大野定能（織人 馬廻頭・近習御用、660 石）が、藩主前田斉泰の庭園に係る意向を奉じつつ、三十人頭筆頭の木村平六らと談判して実務を進めている様子が記される（第 27 表 51-24、第 28 表 51-25～28 等)。三十人頭は、当該普請に関しては正式に被命されていないのであるが、大野の裁量により詮議に加えられ、褒賞にも預かっている。この取扱いをどう受け止めるべきか難しいが、普請方主附としては、庭園普請を主務とする三十人頭を重視していると見てよさそうである。

「金谷御殿御普請諸事留」では「御露地方」として所々に記述があるが、造営に支障のある立木の伐採、あるいは金谷御殿造営に必要とされる、城内の他の場所にある立木の伐採に関わるものがほとんどで、庭園普請に直結する案件は見当たらない。「諸事留」には詳述されていないが、この時の庭園普請は、御殿修築のために組織された「金谷普請所」ではなく、金谷の主となる先代藩主・前田斉泰付の組織（金谷広式）の側で行ったらしいが、不明なところが多い。

13 代藩主前田斉泰は、天保８年（1837）頃の竹沢庭造営の際にも、三十人組とは別に、「御庭方」を編成しており、「御次」の指示、つまり藩主の意を奉じた近臣の指示を速やかに反映させる処置とされる［長山 2006b］。三十人組とその他の組織との関係については、検討すべき課題が多く残っている。

金沢城の庭園に関する史料には、玉泉院丸庭園築造に係り、京都の「山作り」釵（剣）左衛門という人物を招聘したこと（第 22 表 41-02）以外、いわゆる庭師についての記載は見られない。ただし明治 36 年刊の『北国人物志』には、明治 13 年（1880）に兼六園内に設けられた「明治紀念之標」の石積を担当した大田小兵衛という人物について、金谷御殿や巽御殿の庭園を設営したとの記述がある。またこの他、能登・越中西部には、藩お抱えとの所伝をもつ「能登の駒造」という庭師によるとされる庭園が幾つか残る。金谷出丸庭園には、第４章で言及した通り意匠など斬新な面が看取され、町方

の庭師が関与した可能性も考えられるところであるが、更なる検証が必要である。

4．金沢城庭園の特徴と変遷の傾向

（1）各庭園の特徴

本丸・東ノ丸

寛永８年（1631）以前の御殿に付属した。初期は茶室に伴う茶庭が知られるのみで、独立した庭園が存在したかどうか明らかではない。17 世紀初頭には池庭（常時湛水の可能性低い）が造営され、表側（東ノ丸南部）・奥側（本丸北部）ともに配置された。寛永８年（1631）の大火を契機に、御殿が二ノ丸に移転すると、庭園も廃絶し埋め立てられており、単独では成立し得なかったと考えられる。

二ノ丸

寛永８年（1631）の大火後、二ノ丸御殿とともに造営され、御殿に付属・一体化していた。建物間の中庭を辰巳用水による流れが貫流し、小庭園が連続的に形成された。小庭園は視点場となる部屋（割）の名称を付されることがあり、御殿各所との結び付きが強い。それほど広がりを持たないが、辰巳用水を引いた城内最高地点でもあり、最も手をかけて整備されていたと推測される。

玉泉院丸

寛永 11 年（1634）に造営された。二ノ丸の西側、落差のある郭に立地するが、通路（松坂）で結ばれており、緊密な関係が窺える。初期金沢城期の堀を改修した池（泉水）と、東側斜面に築かれた、意匠性の高い石垣群が主な構成要素である。発掘調査や絵図記載等から、大規模な修築が行われたことが判明するが、平面形状・地割は比較的変容せずに推移している。利用状況に不明なところが多く、少なくとも 18 世紀後半～19 世紀初期まで、一般の藩士も容易に立ち入ることが可能だったと思われる。御殿との位置関係、石垣を主体とした構成要素、立ち入り制限の緩やかさ等、他と比較して特異な点も多い。

金谷出丸

17 世紀後半、城内中枢から離れた庭園空間として、蓮池庭よりやや早く成立したと考えられる。低い河岸段丘上の平坦面を占め、自然地形による起伏は小さい。17 世紀末期からは御殿敷地に隣接し、安永４年（1775）頃には御殿に取り込まれ、泉水等も縮小するが、19 世紀初期からは、馬場や儀式の場としての外庭、畑、御殿と一体化した内庭という区画組成が存続する。その一方、泉水（流れ・池）を主体とした構成要素は、10 年程度の単位で著しく変容した。現況では慶応２年～明治２年（1866～69）に造営された、奇抜・斬新な意匠の構成要素が目立つ庭園が保存されている。

蓮池庭

延宝４年（1676）、蓮池（百間）堀の東側にあった作事所跡地に造営された。玉泉院丸と類似した立地条件で、台地縁辺にあって起伏に富んだ地形に展開する。東側の崖地には辰巳用水を利用した滝が設けられ、南側の瓢池に流れ落ちていた。当初は座敷（屋敷）があり、二ノ丸御殿の改修工事の間、藩主が起居できる程の施設であった。享保 10～11 年（1725～26）に解体・縮小されたが、以後も蓮池亭・高之亭として中心的な庭園建造物として存続した。19 世紀初頭には、隣接する竹沢御殿の外庭に位置付けられるが、竹沢御殿の建物が解体されるに及び、格式差は残りつつも実質は一体化への道を歩んだ。玉泉院丸庭園と同様、成立以後の変容は比較的小さいが、利用に関する記録は多い。

竹沢庭

文政５年（1822）に完成をみた竹沢御殿に伴い造営された。当初は敷地北西側の一角を範囲とする比較的小規模な庭園であったが、御殿の主前田斉広が程なく死去し、建物が撤去されるとともに構成要素の変容が顕著となり、蓮池庭を凌駕する広大な庭園となった。ただし短期間での著しい変容にも関わらず、1850 年代までは御殿跡の地割をよく留め、御殿以前の学校鎮守跡等を旧跡として構成要

素に取り入れる等の傾向も認められる。万延元年（1860）に蓮池庭との間の塀や門が撤去され、両庭園は一体化したが、蓮池庭が大きな変化を受けなかったのに対し、竹沢庭の方は広大化傾向が一層進行し、現況に近い景観が形成されるに至った。

（2）変遷の傾向ー御殿との関わりを中心にー（第311～313図）

本節の最後に、金沢城庭園が生起し変容する過程について、御殿との関わりを軸として、相互関係にも留意しながら整理することで、近世城郭の構造変化理解の一助としたい。第 311・312 図には、時期様相における庭園・御殿空間の位置関係と、その変遷過程を示した。また第 313 図は、以下の説明の概略を図としてまとめたものである。

様相１

最初期の金沢城にどのような庭園が備わっていたか､確かなことは判然としないが､天正 15 年(1587)に金沢城を来訪した南部家重臣北信愛は、城内の数寄屋において茶の振る舞いを受けた折、飛石や手水鉢が配され、竹や杉が植えられた茶庭（露地）の様子を記している（第７表 21-01)。信愛は茶の他にも様々に接待を受けているが、この茶庭以外、庭園に関する記載はみられない。当該期の金沢城の庭園は、池庭等がまだ整備されていなかった可能性がある。

北信愛の訪問から数年のち、文禄･慶長の役に係り、文禄元年（1592）から翌年には前田利家自身、渡海拠点となった肥前名護屋に在陣した。現在特別史跡となっている肥前名護屋城と周辺の陣跡において、確認された庭園遺構は、飛石・延段・玉石敷等「茶の湯」に関連したものが大半を占めている［宮崎 2015］。前田利家陣跡の場合［佐賀県立名護屋城博物館 2008］は、大規模な池を備えている点が特徴となっているが、飛石・雪隠・蹲い台とも推定される玉石が充填された土坑等も見られ、やはり茶庭（露地）の要素が濃い内容となっている。

様相２（第 311 図　以下様相５まで）

前段階からの推移が明瞭でないが、慶長～元和期には、東ノ丸南部に比較的大きな池を伴う庭園が整備された。当該期には本丸・東ノ丸に御殿が構えられていて、東ノ丸唐門付近が大手出入口と考えられるので、東ノ丸南部の庭園は、表側に属していた可能性が指摘できる。家臣との対面の場からも望める庭だったのであれば、儀礼空間の一要素・装置としての性質を強く留めていたことになろう。

一方、元和７年（1621）の造成により拡張された本丸北部においても、池を伴う庭園が造営された。こちらはその位置から、奥側に属した可能性が考えられる。寛永８年（1631）以後の二ノ丸御殿では、表側に庭園は見られず、表・奥両方に庭園が揃う状態は、この時期の特徴であった。

両庭園で検出された景石や石造物の岩石種は、基本的に次代の庭園に継承されており、この点では明らかに連続性を見出すことができる。しかし両庭園は、池を伴いつつも、給水に係る十分な施設・体制が整っていなかったと思われる。憶測になるが、井戸からの汲み入れ等により単発的に湛水させていたのではなかろうか。また､寛永８年（1631）の大火を契機として埋め立てられ､何らかの「名残」を留めつつも廃絶している。御殿に付属する性質が強く、以後の庭園のように、近世を通じ存続しなかったのであるが、むしろ御殿とともに移転したと解するべきかも知れない。

様相３

寛永８年（1631)、３代藩主前田利常は二ノ丸を拡張して御殿を造営し、寛永 11 年（1634）には隣接する玉泉院丸に庭園を設けた（第 22 表 41-01・02)。二ノ丸内の庭園空間について、当初の状況は判然としないが、寛永９年（1632）には辰巳用水が城内に引き入れられており、堀の水を満たし、防火用水に利用されるとともに、庭園泉水への供給も当初から想定されていたことは想像に難くない。本丸・東ノ丸では困難だった水流のある庭園が、城外との比高差が約 25 ｍある高台において実現されたのみならず、金沢城庭園全体にとって、辰巳用水の利用は大きな画期となった。

二ノ丸では御殿建物の敷地が大きく、庭園の範囲としては、御殿南側の居間先と称された一画にや

やまとまった広さがある他は、建物間の中庭・明地といった小空閑地が対象であった。居間先にしても、17 世紀のうちに設けられた馬場が大部分を占めていた。このような状況において、二ノ丸庭園は、本丸・東ノ丸のそれとは大きく様変わりし、居間先や中庭を泉水が流れとなって貫くかたちになった。絵図史料では、18 世紀前半から流れ（泉水）が窺え、以後、時期によって経路の変動はあったが、御殿建物との一体性は、近世を通じて保持された。また西側の玉泉院丸庭園とは、北回りでは数寄屋屋敷・数寄屋門、南回りでは松坂門を経由し、斜面を下降する坂道（松坂）で結ばれていた。

玉泉院丸の庭園は、寛永 11 年（1634）に普請されているが、二ノ丸御殿造営段階から予定されていたものと推測される。玉泉院丸の地は、２代藩主前田利長の正室玉泉院が元和９年（1623）に死去して以後、明地になっていたと思しいが、この段階では、二ノ丸への上り口際には南北に堀が走り、中央に土橋があって、城の外郭として、中枢部を守る本来の軍事的機能をなお留めていたようである。二ノ丸の御殿敷地化に連動し、堀は下半埋め立て・上半拡張により園池に改変され、出入り口部は出島となり、庭園の中核を形成することとなった。あわせて玉泉院丸全体も、二ノ丸の奥側と連絡することで、防御上の外郭・前線的な位置から御殿背後の空間へと大きく変容した。ただし、玉泉院丸・二ノ丸間の門は、前者を外、後者を内としており、玉泉院丸が二ノ丸の後園的な位置づけになったとは言え、御殿を擁する二ノ丸を頂点とする格付けは、門の向きにおいても貫徹されていたと言える。

なお、御殿の背後で崖（石垣）下となる郭に位置する数寄空間として、大坂城・江戸城等にみられる山里丸（郭）とも類似するが、ここでは配置状況上の共通性の指摘に留め、比較検討は課題としておきたい。

様相３の庭は、御殿の奥側に設けられたものであり、表側には、泉水を伴うような庭園は認められない。これは前代からの大きな変化であり、金沢城において、庭園の儀礼装置としての意義が低下している表れのように思われる。

様相４

17 世紀後半、５代藩主前田綱紀の代に入り、城の外郭及び郭外の地に庭園が設けられた。延宝４年（1676）、元作事所であった「蓮池の上」に、後の兼六園を構成する蓮池庭が営まれたことは従来から注目されてきたが、これにやや先行して、金谷出丸に馬場・書院が存在したことも重要である。金谷出丸は、金沢城の外堀であるいもり堀の外側に位置する郭であり、城との位置関係において、蓮池庭と大差がない。金谷出丸・蓮池庭の当該期の動向は、大きくは共通すると考えておきたい。

金谷出丸に庭園が築かれた正確な時期は判然としないが、万治３年（1660）、前田綱紀の初入国に先立ち、城南側の郭外の地、堂形とともに馬場が造営されている。また寛文５年（1665）には、厩の他、「書院」の存在を示す史料（第 26 表 51-03）があって、この頃までに庭園も成立していたとみられる。延宝６年（1678）には改めて書院・亭が造営されており、このうち亭は、馬見所としての性格に加え、背後の池（泉水）に面しては茶室があり、やや後の史料によると、最初期の書院・庭園より後に成立したとみられる金谷文庫の「御用」（51-06）とも位置付けられていた。

金谷出丸は元来が平地に張り出した微高地で、概して平板な地形であり、この点では築庭に際し、さして恩恵を受けているようには思えないが、狭義の庭園だけでなく、馬場や文庫等とともに構成される、城郭中枢から離れた藩主の居所として選地されたものと推測される。

金谷出丸の整備とほぼ並行して、城内に移転した作事所の跡地に蓮池庭が造営された（第 36 表 61-01）。中心となる施設としてやはり「座敷」と称される建物があり、金谷における「書院」「座敷」と対比される。また馬場も造営されており、この点でも金谷と同様である。史料上で、当地を「御別所」と記す事例が一例のみ確認されているが（「葛巻昌興日記」［長山 2006b］）、庭園が主体となるような、外郭・郭外のある種の拠点としての、この頃の蓮池や金谷出丸の性格をよく示しているように思われる。

両者の違いとして、蓮池庭では小立野台地縁辺の崖地・高台を取り込んでいる点が挙げられ、金谷

以外の地にも築庭した動機の一つともみられる。庭園利用にかかる記録は蓮池庭が圧倒的に多く、水流の豊富さや眺望等、おそらく風光の点で金谷以上に好まれたと思しい。このように想定される利用の違いが、以後両庭園の性格が異なっていく前提となった可能性がある。

なお、外郭・郭外に庭園主体の屋敷が設けられたこと自体は、金谷が最初とは断言できない（第４章第８節）が、後代への影響という点では大きな画期として評価できる。

なお、この頃の二ノ丸の状況は明確ではないが、玉泉院丸では庭園の改修が行われ、とくに周辺の切石積石垣において、庭園の見所＝主要構成要素として、著しい意匠化が図られた。この年代については、従来より寛文年間（1661～73）としており、金谷の整備とほぼ並行していることになるが、本年度より着手した石垣確認調査の進捗とその結果を踏まえ、改めて検討したい。

様相５

元禄期以降、金谷出丸と蓮池は、その性格の差異が目立っていくが、御殿空間との関わりにおいて、巨視的には類似した過程を、ただし時間的なずれを有しながらたどることとなる。様相５では、金谷出丸・蓮池の両庭園が、ともに藩主の別邸的な性質を失っていく傾向が看取される。

金谷出丸では、貞享５（元禄元）年（1688）、５代藩主前田綱紀の養女豊姫の居所が設けられることとなった（「前田貞親手記」）。当初は藩主綱紀も頻繁に出入りしていたようであるが、藩主子弟が生活する本格的な屋敷（広式）が成立する端緒であり、庭園・馬場・文庫とは別の、より高次の要素が加わったことを意味する。ただし、絵図の描写を見る限り、18 世紀前半までは、金谷広式は塀で取り囲まれ、庭園等とは一線を画していた。庭園に即してみれば、座敷（書院）という核を失った形となり、広式の外庭的な扱いを受けていたかも知れないが、屋敷内には取り込まれていない。馬場・文庫と緩やかな一体性を保ち、金谷広式から相対的に自立していたとみられる。

蓮池庭の方は、金谷出丸で広式が成立した頃、なお藩主前田綱紀らの利用頻度は高く、とくに元禄９～10 年（1696～97）には、二ノ丸御殿改修のため、一時的ながら当地で政務を執っており、「蓮池御殿」と呼称された。郭外の藩主居所としての性質を考える上で、重要な出来事であった。

この頃、蓮池庭南東続きの高台（後の竹沢庭）にあった武家地を火除地として収公している（揚地）。綱紀には、これら高台の敷地を隠居所とする構想もあったようであるが、結局これは実現しなかった。

跡を継いだ６代藩主前田吉徳は、享保 10～11 年（1725～26）、一時期御殿の扱いを受けた中心的な座敷＝書院を解体し、より小型の亭として再建した。これが高之亭（蓮池亭）の直接の前身となる。このため金谷出丸とは細かな経緯は異なるものの、やはり藩主の居所としての性質が薄まったと言える。ただし庭園としての魅力は変わらなかったとみえ、歴代藩主がしばしば利用している状況が窺える。この頃の蓮池庭もまた、御殿から自立した庭園空間であった。

二ノ丸庭園については、18 世紀前半からようやく絵図に泉水（流れ）の経路がみられるようになる。藩主の常の居所である居間のみならず、子女らの居住する奥に回り込み、御殿との一体化が更に進行している様子が窺われる。

玉泉院丸は、金谷広式の成立と同じ頃、千宗室を奉行とし、亭や花壇が整備されたが（第 22 表 41-05～07）、蓮池庭とほぼ同じ享保 12 年（1727）、亭は撤去されたらしく、その跡地に三十人方（露地方）役所が建てられた。庭園管理の拠点としての位置づけは明確になったと言えるが、玉泉院丸の庭園自体の役割は低下したように思われる。庭園に関する史料は極めて少なくなり、以後の動向はしばらく判然としない。

様相６（第 312 図　以下様相７まで）

やはり金谷出丸が先行し、蓮池側は大きく遅れるが、これらの庭園と同じ敷地あるいは近接して御殿が設けられたことにより、程度の差はあれ、庭園が御殿に付属する状況が顕著となった。

金谷出丸には、安永４年（1775）、前藩主前田重教が入り、地割の変更を伴う大規模な改修が行わ

れ、庭園一帯は能舞台敷地等に吸収された。以後、泉水を伴う庭は、御殿建物と一体的な内庭となった。馬場はその外側において塀ないし熨斗立で囲繞され、御殿外庭に位置づけられた。

蓮池庭では、翠滝や滝見亭（夕顔亭）等、現在に存続する構成要素が整備された。一方隣接地では竹沢御殿が造営される。竹沢御殿の成立自体が、金沢城の城郭構造の変質を考える上で重要であるが、蓮池庭との関係から一端を窺うと、文政３年（1820）、御殿の造営中に両敷地間の道路が廃止され､蓮池庭が竹沢御殿に取り込まれる形となったことが注目される（第 38 表 61-15）。竹沢御殿には、「表御居間」の更に奥に「御書斎」があり、これを中心とする建物群に面して庭園があった。当初の兼六園とする見方が有力で、蓮池庭を取り込んだことで、内庭－外庭の関係が成立するが、これは竹沢御殿が、金沢城本体（二ノ丸御殿）に匹敵する拠点であることを一層明示している。

なお加賀藩においては、前藩主の隠居所や世子等の居所として機能したのは、国許では金谷出丸・竹沢の二カ所であったが、いずれも近接して庭園を主体とする屋敷が先行して存在した。御殿成立の事情は一様ではないが、ある程度類似の経過をたどり、庭園を吸収する、または付属させるに至っている。二ノ丸以外の御殿形成において、庭園を主体とする屋敷の存在が呼び水となっている一面が看取される。

18 世紀後半から 19 世紀初めにかけて、二ノ丸庭園の性格に変動はなく、宝暦９年（1759）・文化５年（1808）の大火で御殿が焼失し、再建される度に、ほぼ一体的に再生されている。一方玉泉院丸庭園では、周辺石垣の修築こそ行われているが、主要園路である松坂の通行制限が有名無実化していることや、色紙短冊積石垣前面の池（滝壺）が埋没していること等、前代の様相から引き続き、庭園の管理・整備において、優位に置かれているようには窺えない。

様相７

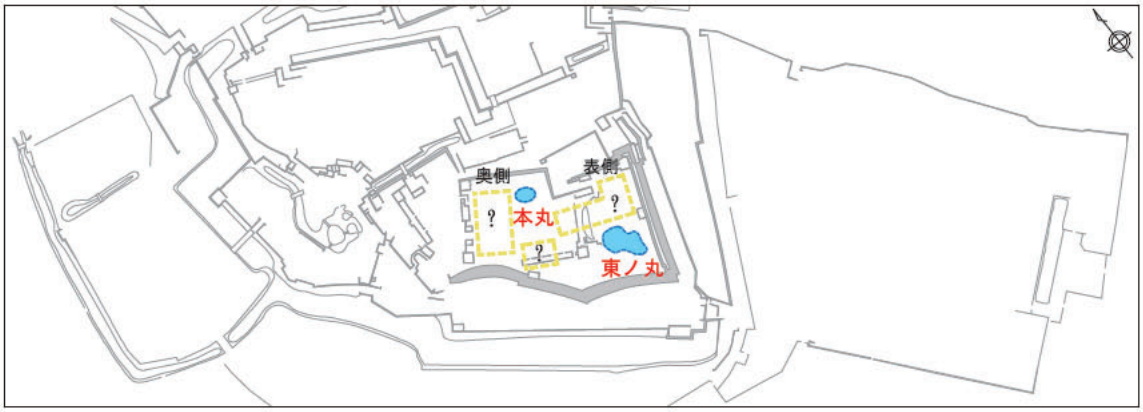
様相５・６は、庭園主体の屋敷空間が、御殿建物主体の空間を誘引しつつ、これに付属し、吸収されるとともに、金谷･竹沢の両御殿が、二ノ丸御殿と並列する拠点であることを際立たせることとなった過程と言えるが、様相７では、文政５年（1822）に一応の竣工をみた竹沢御殿が、２年後の文政７年に主の前藩主前田斉広の死去により、天保元年（1830）から建物の大部分が撤去されるという展開において、既に廃絶していた本丸・東ノ丸を除き、金沢城の庭園が全体的に整備・拡大される傾向が認められる。

竹沢庭では、内庭（竹沢）・外庭（蓮池）の枠組みは形式上しばらくそのままながら、縮小する御殿建物とは反対に、泉水等の庭園の構成要素は広大化する。これは一つには、天保９年（1838）に金沢に来住することになった、斉広の正室・真龍院への対応のためと思われるが、斉広の跡を継いだ 12 代藩主前田斉泰自身の意向も大きかったとみられ、真龍院の金沢居住以後も、庭園は短い周期で繰り返し修築され、その都度拡大している。縮小した御殿は、書斎周辺のみとなり、少なくとも御殿には常住者がおらず、蓮池庭を含め、実質的に庭園は御殿に付属するものではなくなった。

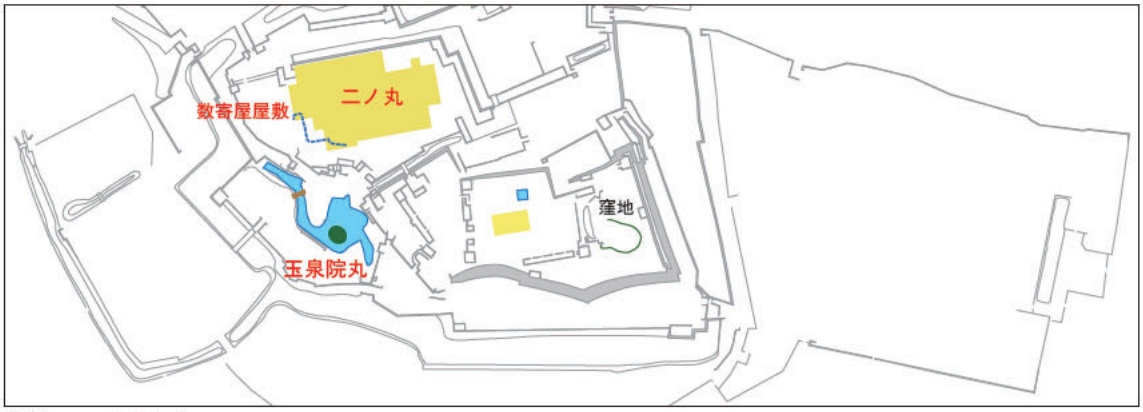
しかし竹沢庭の拡張に際しては、竹沢御殿に用いられたと推定される石材等が、おそらくそれと分かる形で構成要素に転用された。また、竹沢御殿に遡る藩学校時代の鎮守跡地等が区画され、由緒ある築山や島として整備された。

万延元年（1860）には両庭を区画していた門が撤去・移築され、庭が一体化した（第 41 表 61-35）。この段階では、両庭とも亭レベルの小規模建物しか見られない。文久３年（1863）には竹沢庭の南東に巽御殿が造営される。蓮池庭・竹沢庭（兼六園）との関係は検討を要するが、巽御殿敷地は広大化した兼六園のむしろ一画を占める程度の広さであり、また建物の周囲は塀で囲まれ、従前の竹沢御殿と庭園との関係とは明らかに異なっていた。ここではやはり、庭園構成要素の広大化がなお進行していると考えられる。

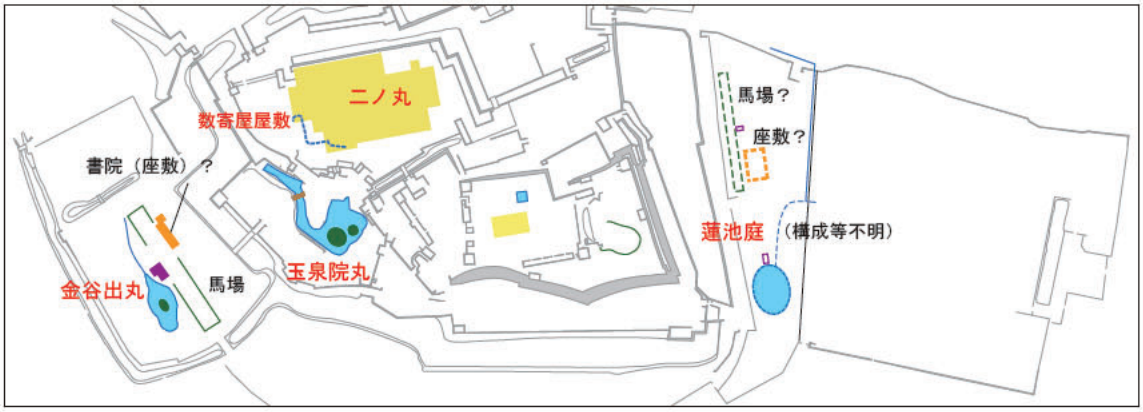
金谷出丸庭園は、竹沢庭と同様、居住者の交代に伴う御殿修築の度に形状が変容するが、御殿内



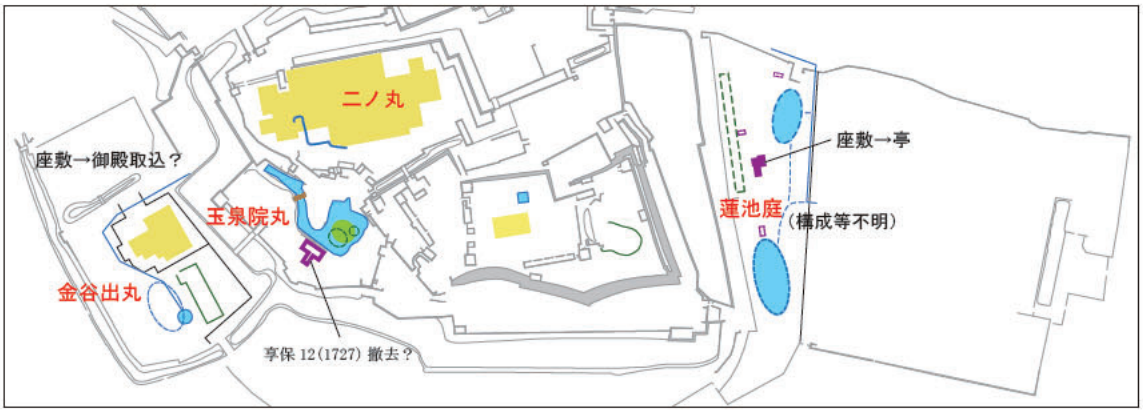
様相２　1631 年以前



様相３　1631 年～

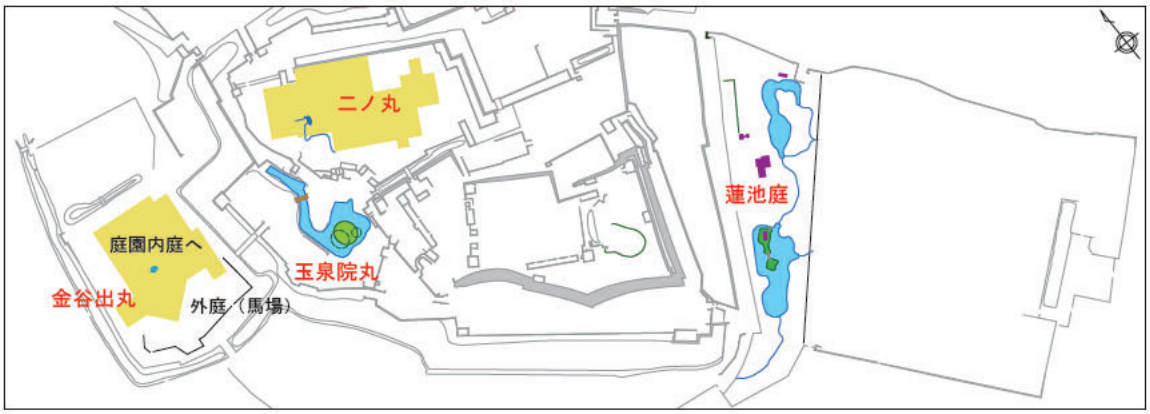


様相４　1660 年頃～

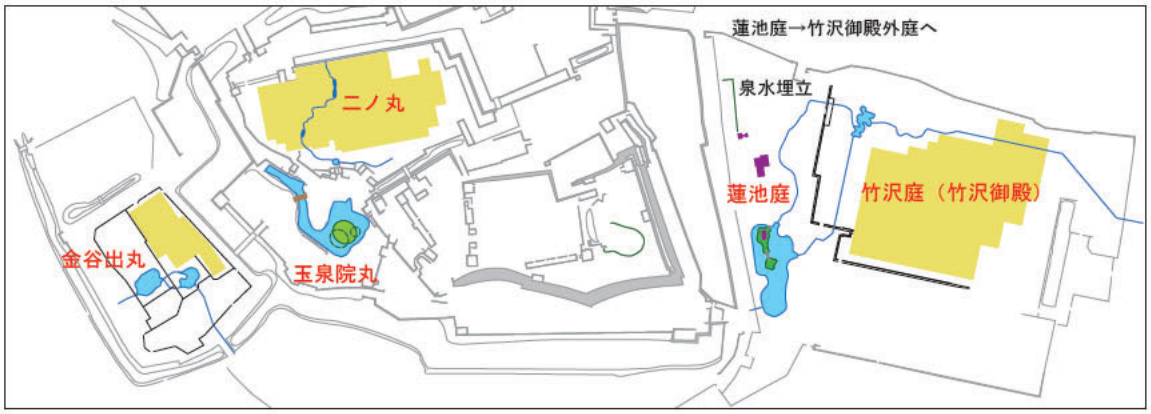


様相５　1688 年～　（1726 年頃の推定景観）

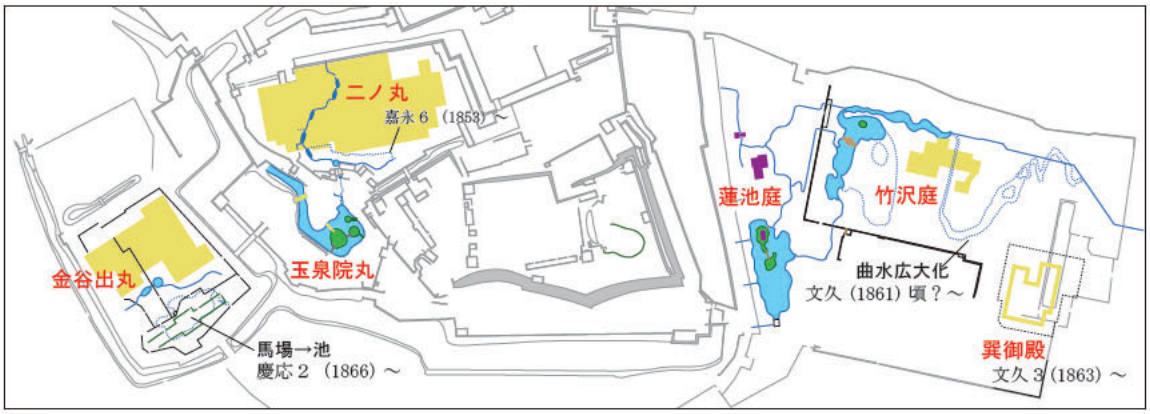
第 311 図　金沢城庭園・御殿空間の位置関係と変遷 1



様相６前半　1774 年～



様相６後半　1822 年～

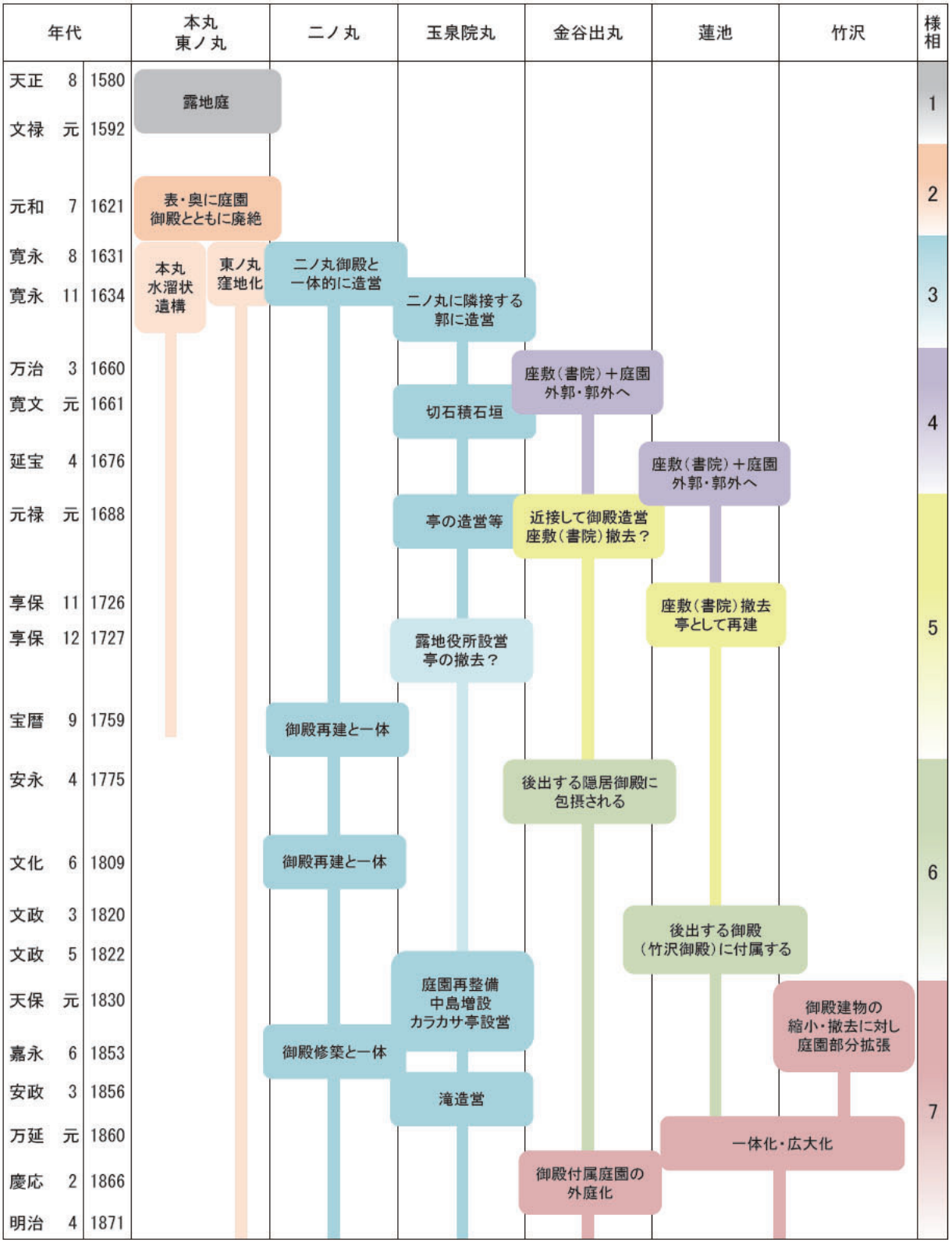


様相７　1830 年～

御殿主要部
座敷・書院
亭

下図原図「御城分間御絵図」［（公財）前田育徳会蔵］
縮尺：　約 1/8, 000
＊庭園（泉水）、御殿建物等を模式的に表示

第 312 図　金沢城庭園・御殿空間の位置関係と変遷２



第 313 図　金沢城庭園の変遷

庭としての枠組はしばらく維持された。しかし慶応２年（1866）、前藩主前田斉泰の隠居により、御殿敷地全体に及ぶ改修が行われた際、形状が大きく改まり、外庭の敷地まで広がる大規模な庭園となった。普請に際しては、庭を広くとりたい（第 28 表 51-32）という斉泰の意向があり、御殿における庭園範囲の比重が高まることとなった。

二ノ丸については、金沢城中枢を形成する御殿建物との関係上、庭園の拡大にも制約があったが、嘉永６年（1853）の御殿修築に際しては、数寄屋屋敷の一画に新たに平庭が設けられた。玉泉院丸庭園も、文政・天保期以降、中島と橋の造営、カラカサ亭の造営、滝の普請等、従前に比べると整備が進んだようにみえる。このうち滝については、17 世紀代に機能していた色紙短冊積石垣周辺の再興としての意味も考えられる。

金沢城庭園の変遷について、城郭構造の変化という視点から、主に御殿空間との関連を軸に整理した。上記では、築城当初は茶室に付属した茶庭が主体であったらしいこと（様相１）、寛永８年（1631）以前には、本丸御殿の表側・奥側に泉水（池）を有する庭園が配置され、本丸御殿とともに廃絶したこと（様相２）、寛永８年（1631）年以後、御殿建物と一体化した二ノ丸庭園が成立し、二の丸に隣接した玉泉院丸が、二ノ丸前面を防御する郭から、二ノ丸の後園的な空間に変容したこと（様相３）、17 世紀後半には、外郭・郭外の地に庭園主体の屋敷が成立したこと（様相４）、その後、これらの屋敷を取り込み、あるいは近接する形で、二ノ丸に遜色ない御殿空間が形成されたこと（様相５・６）、藩末期においては、これらにおいて、庭園敷地が拡大されること等を改めて指摘した。

変遷のかたちとしては、一見して著しい変容を遂げるもの（金谷出丸・竹沢庭等）と、比較的変容の小さいもの（玉泉院丸・蓮池庭等）がある。この場合、立地や御殿との関係がまず想起され、これらを差異形成の一因とみることは可能と思われる。ただし変容・変遷にも、構成要素の材質や形状の変化、構成要素の組成や地割の改変を伴う変化、郭間の関係・庭園敷地外の変化による影響など、いくつかの次元があり、これらが複雑な来歴とも関わり合っていること等から、上記の見方にのみ帰結するとは考え難い。

（3）城郭の構成要素としての庭園

庭園の様相形成には、藩主の資質に左右される場合も多いようであり、なかでも３代利常・５代綱紀・11 代治脩・13 代斉泰等については、築庭・利用に関わる意向や行為を示す史料・所伝が多くみられる。様相の変化には大局的な傾向も見出し得るので、藩主の資質・意向とされるものも、単に生得の気質に由来するのみではなく、藩主としての姿勢や時々の情勢認識、社会の風潮等との繋がりが想定される。ただしやはり藩主個人や子女・夫人等、藩主家・一族との強い関わりが目立つのは疑いないところであり、このことを踏まえ、城郭の構成要素としての、金沢城庭園の基本的な位置づけについて、以下のような見通しを考えている。

寛永８年（1631）以前、庭園は儀礼の装置としての機能をなお強く保持していたように思われるが、これ以後は近世を通じ、表向に代表される御殿の格式的・形式的な側面に対し、格式には寄らない側面が強まったとみられる。庭園空間は、藩主やその一族の生活の場であることを第一としたが[1)]、これと不可分に、城内の格式や形式から、ある程度距離を置いた別格の空間としての性格を併せ持ったと考えられる。

もっとも庭園内部においても、例えば馬場等は儀礼行為と結び付きやすく、上記のような見方は庭園のすべての部分に及ぶものではないが、およそ格式による部分が優勢な城郭にあって、柔軟性を備えた貴重な空間だったと考えたい。気随に行われているように見える頻繁な普請行為や、様々な利用に供される状況等も、このことと深く関連するように思われる。

５．課題と展望

（1）詳細調査への課題

前項では、各庭園の特徴と、全体の変化傾向について概略を示したが、これはむしろ詳細研究の前提というべき段階であって、この点を踏まえて、庭園の個々の構成要素に立ち戻り、これらを成立させている技術・機能・意匠等とどのように作用し合っているのか、改めて検証する必要があるが、この点について、十分な取り組みに至っていない。

絵図史料については、今回かなりの程度検討することができたが、信憑性が高いと判断できた景観内容を取り上げたのであって、史料上の微細な特徴等、追究すべき点はなお多い。とくに庭園を対象とした絵画については、美術史の分野でも注目されているが、技術や系譜、流行の背景等の諸問題に対し、ほとんど言及することができなかった。

文献史料については、庭園についてまとまった史料が知られているわけではなく、今回は長山直治氏らによる先行研究の他、普請・作事史料収集の過程で確認できたものを取り上げたが、ここでも従来知られていなかった知見が得られた。金沢市立玉川図書館所蔵の加越能文庫等、未検討の藩士の日記類に、庭園の記録が残されている可能性は極めて大きく、その有効な検索が課題となる。

（2）比較の視点

本報告で取り扱ったのは、金沢城に直接関係する庭園であり、従前の研究はこのうち兼六園に偏重し、また金沢城との関わりについて、必ずしも強く意識していない部分もあったので、兼六園以外の庭園を対象とすることで、ある程度相対化が図れたと考えている。ただし前田家の庭園は金沢のみではなく、富山藩や大聖寺藩といった支藩、また江戸藩邸にも存在するのであり、これらにかかる知見を深めることで、金沢城庭園の特徴と意義がより浮彫になる筈である。支藩においては、その独自性とともに、加賀前田家の庭園としての共通性がどのような形で見出せるのかが焦点となるだろう。江戸藩邸については、庭園づくりや利用の考え方等、国許の庭園にむしろ先行し、範となった可能性も考えられる。

なお、本事業の構想に際しては、中世・戦国期城館の発掘調査事例が進む中、小島道裕氏が提唱した「花の御所体制」（[小島 1998・2003・2009] 等）や、小野正敏氏の研究（[小野 1997] 等）に代表される、庭園を政治・社会の特徴や変動を示す要素として捉える研究動向にも示唆を受けている。一方で、城館・城郭構造と庭園の在り方は、室町期・戦国期については整理・検討が進んでいる印象を受けるが（[東国中世考古学研究会 2016] 等）、露地（茶庭）や山里丸の位置付け等を含め、織豊期・近世に至る過程の解明はなお大きな課題として残されているように思われる。金沢城庭園においても、その成立期に係る知見が断片的であり、新しい時期に向けた上記研究動向の進展が望まれる。

次節では、庭園史研究者の視点による「加賀藩の支藩などの庭園」「加賀藩前田家、富山藩前田家、大聖寺藩前田家の江戸藩邸庭園」「戦国城下町一乗谷の館・屋敷における作庭」の三編の調査研究報告を掲げた。上記の課題に対する、今後の取り組みへの指針を意図したものであり、これらを踏まえた比較検討を後日に期したい。

註

1）前述の通り、長山直治氏は、兼六園のような大名庭園について「大名の生活の必要から生まれた」とする［長山 2006b P243］。また岡山藩御後園（現在の後楽園）の利用状況等を検討した神原邦男氏は、藩主が日常生活を送る空間として、城と互いに補完する関係にあったとの見解を示している［神原 2003］。

第２節　関連調査研究

１．加賀藩の支藩などの庭園

飛田 範夫（金沢城調査研究委員会委員）

（1）はじめに

加賀藩の支藩というのは、本家に跡継ぎがなくなった場合に養子を送り出したり、本家の当主が幼少の場合に後見役となったりするという役割を担って設けられたもので、富山藩・大聖寺藩・七日市藩があった。また、加賀藩では江戸初期に引退した藩主が、小松城や高岡城などを居所として造営することもあった。金沢城の庭園の意味をさぐるために、支藩や加賀藩関連の城郭などにどのような庭園があったのかを、取り上げてみることにしたい。

（2）富山藩の庭園

天正 13 年（1585）に佐々成政が羽柴（豊臣）秀吉に敗れたために、成政の富山城は破却された。慶長２年（1597）に加賀前田家の第２代利長は富山城を復旧して居住したが、加賀藩主となったことから２年後には金沢城に移り、引退後の慶長 10 年に再び富山城へ移っている。しかし、同 14 年に大火で城が焼失したために、利長は魚津から新造した高岡城へ移ったが、前田家の第３代利常は隠居に際して、寛永 16 年（1639）に２男利次に、10 万石を与えて富山藩を創設した。

御露地役

元禄 16 年（1703）の『家中禄高帳』に「御露地之者」の項があり、

一　四両小判外ニ三人扶持、江戸御供之節一人扶持跡扶持被下候　近藤四郎右衛門
一　四両小判外ニ右同断　　平井勘十郎
一　四両小判外ニ右同断　　伊藤少兵衛

と記されている[1)]。役職として御露地役が設けられていて、彼らが藩関係の茶室まわりの露地の維持・管理をしていたと考えられる。

磯部御庭

第２代藩主前田正甫（1649～1706、在位 1674～1706）は産業奨励を積極的に行い、薬の専売によって巨万の富を得たという。家老の近藤善右衛門の磯部村（現、富山市磯部町）の屋敷で生まれて育ったことからか、元禄 15 年（1702）にここに別邸を造営している。

神通川の上流の東・西神通村から巨石を運び出して、東海道五十三次からヒントを得て土を盛って富士山の形につくり、植栽樹種に変化をつけて「茶の木山・躑躅花山・卯の花山」を設けている。樹木としてはウメ・サクラ・モモ・シダレヤナギ・スモモ・ナシ・ヤマブキ・フジ・カエデなどを植えていたという。園池は琵琶湖をかたどり、「八景」になるように周囲に茶屋や閣を建てたらしい。材木

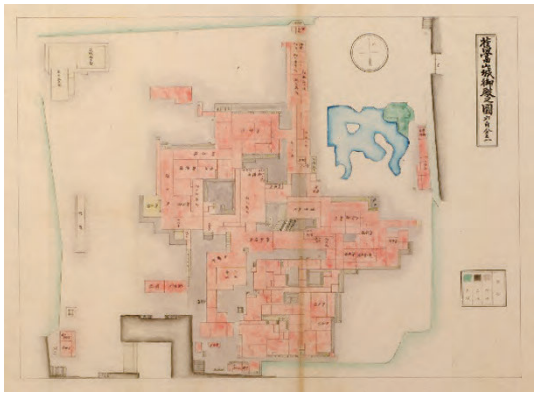
第 314 図　「磯部村御庭園之真景図」（模写図）［富山市郷土博物館蔵］

の入手や土木作業人の監督は、平吹町の萬屋武兵衛・池崎屋用助に命じている[2)]。

「磯部村御庭園之真景図」（模写図、富山市郷土博物館所蔵、第 314 図）に、その情景が巧みに描かれている。園池の中央部分に 10m 以上はある富士山型の山を築き、園池の中島などに橋を架けて庭園を巡れるようにしている。富士山型の築山の背後の水面が、神通川を表している。正甫の没後は放置されて荒廃したようだが、「磯部富士」は近代まで残っていた。明治年間の富山市地図に描かれているが、昭和 32 年（1957）に撤去されてしまった。別邸跡地には大正２年（1913）に富山県招魂社が建てられ、現在は護国神社と改称されている。

富山城本丸庭園

『前田氏家乗』（明治 23 年 (1890)）の付図に「旧富山城御殿之図」がある（第 315 図）。この図は門の配置から、富山城本丸の御殿と園池を描いていることがわかる。富山城はいくども焼失しているので、いつ頃の図かが問題になるのだが、正徳３年（1713）からその翌年の間に作成された「富山御本城屋形之図」（富山県立図書館所蔵）に、同じ形の本丸御殿の平面図が描かれているので、図２は延宝３年（1675）の焼失後から正徳４年まで存在した本丸御殿ということになる[3)]。



第 315 図　「旧富山城御殿之図」
（『前田氏家乗』付図）［富山県立図書館蔵］

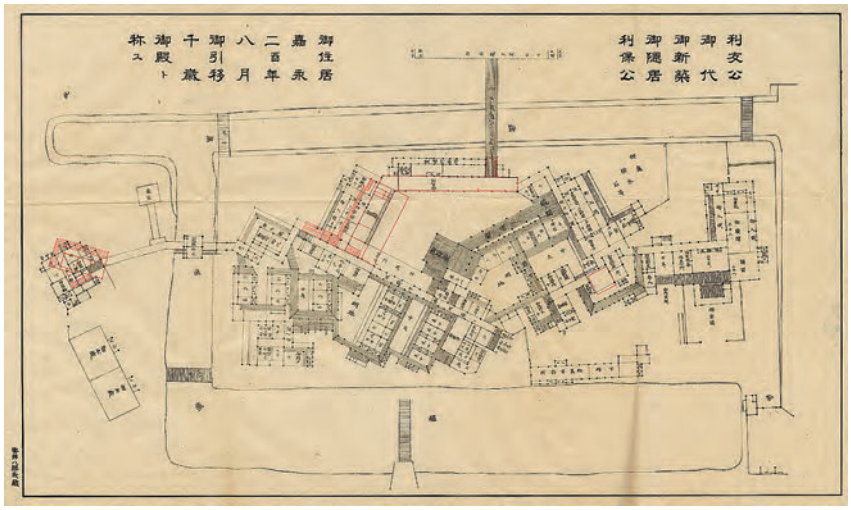
本丸御殿の東北側に位置する園池は、それほど大規模なものではない。北側と西側の護岸は直線的になっているが、南側の岸は出入りがあって、中央近くに中島が置かれ、東北側に築山が設けられている。水源がどのようになっていたのかは、この図からはわからない。

千歳御殿

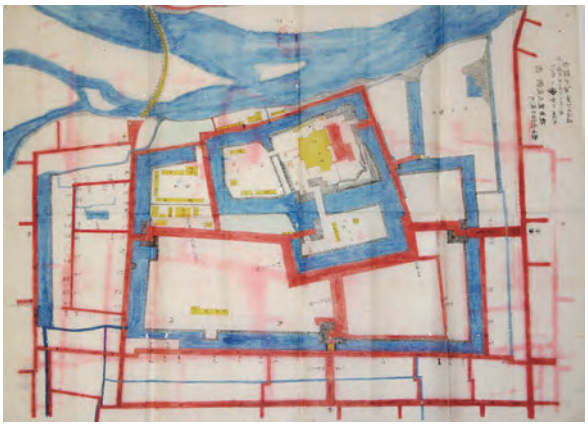
東出丸の千歳御殿（ちとせ）　富山藩の第 10 代藩主前田利保（としやす）（1800～1859、在位 1835～1846）は、産物方を設置して国産奨励を図ったが、藩政は改新派と守旧派に分かれて金沢藩の政治介入を招いている。嘉永２年 (1849) に隠居所として、本丸東側の東出丸に千歳御殿を建造した。同年５月の「触覚書」に、

> 来る二十八日吉辰（きっしん）（吉日）に就（つ）き、大殿様御城中の御屋敷え引き移り遊ばさる候旨、仰せ出され候。かつ右御屋敷向後千歳御屋敷と称え、千歳御殿と相唱え候様仰せ出され候。［原文、仮名交じり漢文］

とあるように、転居先と正式名称が家中に言い渡されている[4)]。



第 316 図　「千歳御殿平面図」［富山市郷土博物館蔵］



第 317 図　「越中国富山城主前田利同城囲之図」
［富山市郷土博物館蔵］

第 318 図　「越中之国富山桜木町一覧」
［富山市郷土博物館蔵］

「千歳御殿平面図」（富山市郷土博物館所蔵）に、不規則な建物配置が描かれている（第 316 図）[5]。堀に囲まれた縦長の地形という制約の中で、能舞台と観覧席を向かい合わせに設け、その南側に表向きの「御広間・御書院・表御居間」など、背後の北側には奥向きの「御休息所・御寝所」などを置き、北側の堀に渡り廊下を兼ねた「釣殿」を建て、その北方に「茶室梧桐舎（ごとうしゃ）・御涼所」を建造している。北側は神通川に接していたので、御涼所に２階を 45 度ずらして増築して、対岸の眺望を楽しめるようにしている[6]。

庭園は表御居間の東側に「御庭　樹木・石等」と記入されているから、小規模だがまとまったものが存在していたのだろう。北方の茶室梧桐舎の周囲には露地が設けられていたと考えられるが、茶室前には薬草園があったらしい。利保は本草学に強い関心があったことから、東側の堀を隔てた郭にも数千坪の薬草園を設け、『本草綱目』の掲載順に草花や樹木を植え並べていたという。利保は江戸で天保期（1830～1844）から開始された本草研究会の赭鞭会（しゃべんかい）に、福岡藩主の黒田斉清（なりきよ）などとともに参加しているほど熱心だった[7]。また、利保は千歳御殿とは堀を隔てた南側の三の丸内に寿縁（じゅえん）天満宮を創設して、周囲にウメを 100 種類も植栽することを行っている[8]。だが、この千歳御殿の存続期間は短く、安政２年（1855）２月に焼失してしまった。

再建された千歳御殿　『前田氏家乗』によると、利保は焼失後に三の丸内の弟利民の屋敷に逃れたが、その後薬草園を設けていた東出丸に隣り合う東側の郭に、新たに御殿を建造している。原図は慶応年間（1865～1868）頃と見られる「越中国富山城主前田利同（としあつ）城囲之図」（明治 23 年（1890）写し）には、「千歳御殿」という書き込みがあり、北東側に築山に接する池が描かれている（第 317 図）。この庭園部分の詳細は、明治９年頃の作成とされる「越中之国富山桜木町一覧」（富山市郷土博物館所蔵、第 318 図）に見ることができる[9]。「泉水」と書かれている園池は北・西側は石垣で囲まれ、東側にはマツと低木などを植えた小高い築山が設けられている。園池の石垣は当初からかどうかわからないが、築山は「蠑螺山（さざえやま）」と呼ばれていたらしい。築山の名称からは、兼六園の影響が考えられる。

この場所は明治５年に、稲荷町・北新地などに分散していた遊郭がまとめて移されて、「桜木町」と命名されて、現在は富山県で最大の歓楽街になっている。

富山城下の町屋の庭園

庭園をつくっていたのは、藩主だけではなかった。越中国砺波（となみ）郡下川崎村（現、富山県小矢部市下川崎）出身で農学者だった宮永正運（1732～1803）の著書『越の下草』に、「富山東堤町綿屋次右エ門といふ人、草花好の先生也。四海の珍草庭に満たるよし」と、町人の間にも草花の愛好家がいたことが述べられている[10]。

（3）大聖寺藩の庭園

江戸時代初期に大聖寺城には加賀藩の城代がいたが、元和元年（1615）に一国一城令によって廃城となっていた。加賀前田家の第３代利常は、寛永 16 年（1639）に３男利治（としはる）に７万石を与えて大聖寺藩を創設している。

大聖寺陣屋の庭園

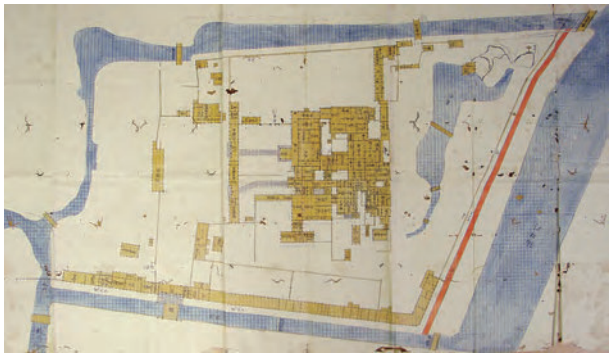
寛永 16 年の造営　初代利治は旧大聖寺城山の東側麓（現、加賀市大聖寺地方（じかた）町）に居館を構えた。正保４年（1647）の『寺岡与兵衛覚書』の「大正持御屋敷廻間数之覚」に、

一、百二間　　東之方　　一、百二十二間　　西之方
一、七十三間　　南之方　　一、九十三間　　北之方

と陣屋の規模が書かれている。陣屋の面積は１万 8946 歩（約 62,600㎡）で、敷地の中央部分に藩主の居館と役所が設けられていた[11]。現在、陣屋跡は錦城小学校と江沼（えぬま）神社になっている。

「創建時大聖寺藩邸図」（加賀市所蔵、第 319 図）では[12]、東方の大手門前に惣堀が掘られ、鯰（なまず）川（熊坂川）を利用して、南側から西側にかけて掘割が設けられている。北側は空堀に沿って通路があり、その外側が福田川（大聖寺川）になっていた。南側に間口６間の「外腰掛」があって、正面に「御名代門」が設置されていて、その先の玄関から表向き部分の「大書院」に行けるようになっていた。大書院の西側には大きく庭がとられているが、隅に「的場」が置かれていることなどからすると、ここには庭園は存在しなかったらしい。

大書院に続く御殿の東半分が台所と奥向きになっていて、藩主のための「奥御居間・御寝間」が建てられていた。北側の大規模な園池がある庭園は、建物から眺めるようになっていなくて、奥御居間に近い「奥色代（奥式台）」から出て巡るようになっていた。北西側に築山が設けられていて、その裾に園池に臨む「御亭（おちん）」が建てられ、東西 70 ｍほどある園池の中央に園池を二分するように、長さ 15 ｍほどの木橋が架かっていた。庭園に近い大書院奥の北西隅に「御露地奉行小屋」と書かれていることからすると、露地係は庭園の管理も行っていた可能性がある。



第 319 図　「創建時大聖寺藩邸図」（右が北）
［加賀市蔵］

第 320 図　再建時「大聖寺藩邸図」
（『大聖寺藩史』所収）

宝永元年の再建　元禄６年（1693）７月 14 日に「御殿不残（のこらず）焼亡」と『秘要雑集』に述べられているように、ほとんどの建物が焼失してしまった。以後、10 年間ほどはそのまま放置されたが、第３代藩主利直が宝永元年（1704）６月に入部をしたことから、同年 11 月６日に新御殿が建造されて、利直は移り住んでいる。

再建された藩邸を描いた「大聖寺藩邸図」（第 320 図）は[13]、大聖寺藩主の休息所として宝永６年 11 月に上棟された長流亭（川端御亭）が陣屋の北西角に描かれているので、宝永６年以降の制作になる。この藩邸図には、建物を分離・拡張した複雑な御殿が描かれているが、やはり園池は御殿とは隔離されていて、園池の南岸に建てられた亭で休憩するようになっていた。園池は中央の橋がなくなり、現

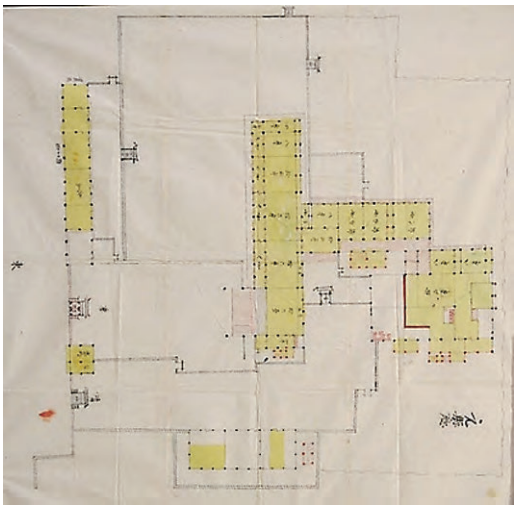
状のように江沼神社の社殿の横にある東西 20 mほどの中島が設けられ、その東側に突き出すように出島が築かれている。

『一蓬君日記』の宝永元年 12 月 15 日の条に「御露地内天神之社出来」とあるから、この新御殿には露地がつくられていたらしい。また同書には、正徳４年（1714）７月 25 日に第４代利章（としあきら）が、先代藩主が露地の築山内に建てた天神と諸道具を那谷寺に移したという記載があるので、露地には築山が設けられていたことがわかる[14]。

明治４年（1871）の廃藩置県で大聖寺藩は消滅して、藩邸の園池部分は松嶋社になっている。江沼神社と改称されたのは、明治 10 年のことだった。明治６年に「麻生篤」という人物が、松嶋社を描いた彩色の「百分之一象図」では、園池は「大聖寺藩邸図」とほぼ同じ形で、現状とも違っていないので、宝永６年以降は庭園の変化は少なかったことになる。

（４）七日市藩の庭園

七日市藩は前田利家の５男前田利孝（としたか）が、元和２年（1616）に大坂の陣の功労として上野国甘楽（かんら）郡内（現、群馬県富岡市七日市）に、幕府から１万石の領地を拝領したことから始まるもので、『加賀藩史料（編外）』は「邸地面積」を、6408 歩（約 21,100㎡）だったとしている。第９代藩主利以（としもち）の時期の寛政４年（1792）に罹災し、第 11 代藩主利豁（としあきら）の時期の天保 12 年（1841）にも焼失して、２年後の天保 14 年に再建されたが、安政元年（1854）に再び焼失して再興されている。12 代続いたが、明治４年（1871）の廃藩置県で消滅したために、正殿・書院・玄関を残して他は撤去された[15]。



第 321 図　「七日市県元県庁図」
［群馬県立文書館蔵］

現在、七日市陣屋跡地には群馬県立富岡高等学校が建っていて、遺構として正面玄関部分１棟と中門１棟が残っている。玄関の前面に園池が設けられているが、明治以後の「七日市県元県庁図」（群馬県立文書館所蔵、第 321 図）では玄関前は通路になっているから、園池は新しいものだろう。江戸時代には後方の藩主が居住した奥向きの建物の周辺あたりに、庭園はあったのではないだろうか。

（５）加賀藩関連の城郭・寺院の庭園

小松城の庭園

小松城は慶長５年（1600）に、丹羽長重（にわながしげ）が徳川方の前田利長に敗れたために、前田氏の支配となった。元和元年（1615）に一国一城令によって廃城とされたが、寛永 16 年（1639）に加賀藩前田家の第３代前田利常の隠居所として再築されて、二の丸・三の丸を増設するなど大規模な改修が加えられた。万治元年（1658）に利常が没してからは、城代や城番が置かれて幕末まで存続している。この小松城の庭園については、すでに造園家の田治六郎（1904～1970）が詳しく述べているが[16]、新しい史料も加えておきたい。

『加藩国初遺文』（『加賀藩史料［第２編］』所収）によると、寛永 17 年７月 22 日に小松城内に据える飛石を集めるように、細木角丞と岡本善太夫に旅費 16 日分として、それぞれに８匁ずつ与えているところからすると、この頃に城内の作庭が開始されたらしい。『政隣記』（『加賀藩史料［第３編］』所収）は「今年小松三俣之川岸、同川中等に御亭出來」としているので、同 19 年には小松の三俣川の岸と川中にも亭が建てられている。小松城内の植栽工事だろうか、『加藩国初遺文』によると慶安２年（1649）

には目ぼしい植木を、家臣の屋敷から召し上げるために、2月9日に次の「作木（剪定して形を整えた木）見立方申達」が出されている[17]。

> 其元作り木見立に、池上又右衛門方遣わされ候間、御城廻りならびに御家中の侍中、その外誰々に依らず、所持仕る作り木気遣いなく見及び候の様、御指図あるべきの旨仰せ出され候。その為かくの如く候。恐惶謹言。［原文、片仮名交じり漢文］。

『加賀藩史料（編外備考）』は、慶安元年に葭島に大亭を造り、傍らに花園を設け、承応元年（1652）には葭島に茶室を2棟設けたと述べているから、年代的に見て葭島の大亭（書院）のための庭木集めだったのだろう。次の茶室の工事になるのだろうか、『三壺聞書』の「葭嶋御露地普請之事」の項に、以下のように書かれている[18]。

> 宮城内藏助殿ハ能州（能登）より浜の松のこへたるを舟に積廻シ、葭嶋ニ上之、池上亦右衛門金沢へ被遣、大名・小名の嫌なく、露路を見廻り、御意相応之木并石等も宮腰へ廻シ、舟ニ而葭嶋へ積廻ス。金沢衆より石・植木・手水鉢・石燈籠思召に進上ス、分部卜齋・小原少九郎ハ御前をはなれす、木の立ふるまいを目明して、御意を請て植させけり、分部伊左衛門ハ、くし野より松を見立て、数千本葭島へ舟にて積廻ス、

しかし、利常が万治元年（1658）に没して、小松城には城代が置かれた。そのため城中の建設工事は中断されて、破却されるものもあった。だが、万治2年から延宝2年（1674）まで小松城代を務めた前田三左衛門（利常の兄利政の嫡子）が、書院や御成湯殿を再建して作庭を行い、「小松城中木石之覚」という一文を書き残している[19]。

一、五つ　手水鉢、敷石共ニ　内　四つ　ミかけ石　壱つ　つほノ石　（付箋は略）
一、壱つ　とひ石　一、壱本　五よう松
一、弐かふ　南天　一、拾九本　きり嶋つゝし
一、壱つ　手水鉢ミかけ石　一、拾壱かふ　かうやつゝし

〆御居間ノ庭

一、拾八　とひ石　内　六つ　能登石　拾弐　若狭石
一、四かふ　南天　一、弐本　梅ノかふ
一、壱つ　石燈籠ミかけ石　一、三かふ　杉かふ
一、八かふ　かうやつゝし　一、壱つ　手水鉢ミかけ石、敷石共ニ
一、壱つ　とひ石、但つほの石

〆御書院ノ前

一、五つ　手水鉢ミかけ石　内、四つ敷石共ニ
一、三かふ　かうやつゝし　一、壱つ　石燈籠ミかけ石　（付箋は略）

〆葭嶋ノ内

一、同所　馬見所、同雪隠共ニ　一、弐つ　とひ石　(付箋は略)

最初の部分は場所が不明だが、居間・書院・葭島の庭園に三左衛門が置いた飛石や石造品、植栽した樹木の詳細がわかる。

那谷寺の庭園

那谷寺（小松市那谷町ユ122）の「奇岩遊仙境」と呼ばれている巨大な岩山は、現在も景勝地として紅葉の時期に観光客でにぎわっている。小松に隠居した利常は、寛永17年（1640）からこの那谷寺の堂塔の再建を行い、同19年には本堂・三重塔などを完成させている。明治になって華王院が廃されたために、子院だった不動院が那谷寺の名を継ぐことになった[20]。

現在、国の名勝に指定されている庫裏の裏側の庭園は、寛永12年に庫裏が再建された際につくられたものという。庭園は前田利常の家臣で小松城の作庭に関わった別部（分部）卜斎が、庭造奉行に

なっている[20]。現在は古木の周囲の石組と飛石だけが残っている感じだが、後方の園池をともなったもののようなので、以前は整った庭園だったのだろう。

なお、東側には「三尊石」と言われる岩盤があって滝が落ちていて、ひとつの見所になっている。近世から園池もあったようだが、茶店があった昭和後半に整備されたものらしい。

高岡城

慶長14年（1609）3月18日に富山城が焼失したために、隠居していた加賀藩前田家の第2代利長は関野に移って高岡城を築いている。『続漸得雑記』（『加賀藩史料［第2編］』所収）によれば、慶長15年に桜馬場が造営されている。「山桜」の苗は太田村の宗右衛門が差し出したものだった。城郭図を見ると、「小竹藪」あたりに庭園が存在していたように見えるのだが、確実な史料は見当たらない。

能登の駒造

「加賀藩のお抱え庭師」との伝承をもつ「能登の駒造」という人物が存在していた。加賀藩領内の駒造の作とされる江戸中期の庭園として、次のものが残存する[21]。寺院や個人邸宅の庭園なので、大規模なものではなかった。

光久寺の茶庭（富山県氷見市飯久保）	宝永初年（1704）頃の作庭。県指定名勝。
城端別院善徳寺庭園（富山県南砺市）	庭園は市指定名勝。
弘願寺（石川県河北郡津幡町）	脇本陣的な役割を果たしていたという。
長龍寺（石川県羽咋郡志賀町）	山裾を築山としたもので園池が存在する。
岡部家（石川県羽咋郡宝達志水町）	建物は県指定有形文化財。庭園はその前面。
栗山家（富山県南砺市土生新）	庭園は一部縮小されている。

（6）おわりに

加賀藩の支藩にも庭園がつくられていたことがわかるわけだが、加賀藩などと比較するとどうなのだろうか。

加賀藩では兼六園が有名だが、文献や発掘結果からすると金沢城内には、本丸・東ノ丸・二ノ丸・玉泉院丸・金谷出丸などに庭園がつくられていた。藩主の休息のためばかりでなく、来客や家臣と接するのに憩いの場となる庭園は必要なものだった。『三壺聞書』によると、寛永11年（1634）に第3代前田利常は京都から呼んだ剣左衛門に、玉泉院丸の築山・園池・亭をつくらせている。利常が隠居所の小松城で、堀の中の島を使って庭園をつくっているのは、この延長になるのだろう。

元禄6年（1693）に焼失する以前の大聖寺陣屋には「御露地奉行小屋」が建てられていて、富山藩では元禄16年に「御露地之者」が存在していた。加賀藩の場合には、玉泉院丸庭園の構築の際には、力が強いということで相撲取りが使われていて、17世紀後半以後にも、三十人小者等や藩主御手廻の者が庭園の管理や修繕を兼任し「露地方」と呼ばれている。しかし、露地の作庭や維持・管理は茶事に関わることなので、責任者には茶道に精通した人物が選ばれていたと考えられる。加賀藩で茶道が盛んになっていたことが、支藩の大聖寺藩や富山藩に影響を与えて、露地関係の役職が設けられることになったのだろう。

なお、加賀藩のお抱え庭師と伝わる「能登の駒造」の手になるとされる庭園が、能登・越中に分布している。江戸城では、当初は「庭作り役」の武家が庭園の施工指導をしていたが、江戸後期には民間の植木屋が担当している[22]。駒造が宝永初年（1704）頃に活躍していたらしいことからすると、加賀藩でも次第に民間の植木屋が城中の庭園を作庭し、管理するようになった可能性が考えられる。明治13年（1880）に兼六園内に設けられた「日本武尊銅像」の石組を行なった大田小兵衛は、金谷御殿や巽御殿の庭園にも携わっていたという話が事実ならば、技術的には能登の駒造の後継者ということになる。

大名の江戸の下屋敷は広大な所が多かったために、大規模な庭園が造営されているが、国元では加賀藩の兼六園の場合のように、一層広大な敷地が得られたので自由に作庭することができた。第２代富山藩主の前田正甫が造営した磯部御庭も、そうした事例になる。熊本の成趣園と同様にここにも富士山が築かれているのは、参勤交代する大名の間で富士山が話題になることが多かったからだろう。富山藩第 10 代前田利保は城内に隠居所を設けたために面積的には小規模だったが、後世まで名が残る豪華な千歳御殿を建て、２階を増築した御涼所では眺望を楽しみ、再建した御殿にも園池を設けている。

１～２万石の大名は城郭を築けなかったので、小規模な陣屋を建造するしかなかった。七日市藩については明治の建物配置図しかないために庭園のことは不明だが、大聖寺藩では陣屋の４分の１を占めるほどの大規模な庭園を造営している。小幡藩の楽山園（群馬県甘楽町）や足守藩の近水園（岡山県岡山市）などの場合も庭園面積の比率が高いことからすると、庭園の造営についてはかなり自由がきいたようだ。

寺院の例では、利常が再建した那谷寺の庭園しか見いだせなかったが、富山城下では町屋の庭園にも草花が植えられていたことがわかる。江戸時代には城郭内や藩主の別邸だけでなく、寺院や城下の町屋にまで庭園がつくられていたことになる。庭園は江戸時代の人々に、潤いを与えていたと言えるだろう。

註および引用・参考文献

1）富山県 1974『富山県史（資料編５　近世下)』P59
2）富山市 1960『富山市史（第１巻)』P511・512
3）古川知明「富山城の絵図と文献」平成 27 年（2015）度金沢城大学講座
4）前掲『富山県史』P93
5）富山市郷土博物館 2007『特別展　再現 千歳御殿』
6）岡田悟・他 2007「富山城東出丸千歳御殿の平面構成と使われ方について」『日本建築学会計画系論文集第 621 号』P157～164
7）平野恵 2006『十九世紀日本の園芸文化』思文閣出版 P276
8）前掲『富山市史（第１巻)』P802
9）前掲『特別展　再現 千歳御殿』
10）岩倉規夫・他校注 1980「越の下草」『富山県郷土史会』P92
11）大聖寺藩史編纂会 1938『大聖寺藩史』P469
12）石川県金沢城調査研究所 2016『金沢城関連城郭等情報連絡会資料集―金沢城関連城郭等の絵図と文献』P25
13）前掲『大聖寺藩史』P741。前掲、金沢城関連城郭等情報連絡会資料集に再録、P25
14）前掲『大聖寺藩史』P472・473
15）石黒文吉 1933『加賀藩史料（編外)』P187・188
16）田治六郎 1942「前田利常の作庭と那谷寺庭園」『造園雑誌（9-2)』P18～21
17）新修小松市史編集委員会 1999『新修小松市史（資料編１　小松城)』小松市、P153
18）石川県金沢城調査研究所 2017『金沢城普請作事史料５ 三壺聞書』
19）前掲『新修小松市史（資料編１)』P155～157
20）1991『石川県の地名』平凡社 P239・240
21）石川県立図書館提供、レファランス共同データベース、国立国会図書館ホームページ
22）飛田範夫 2009『江戸の庭園』京都大学学術出版会 Ｐ５・６・29

2．加賀藩前田家、富山藩前田家、大聖寺藩前田家の江戸藩邸庭園

栗野　隆（東京農業大学）

（1）はじめに

本稿では、加賀藩前田家、富山藩前田家、大聖寺藩前田家が江戸に営んだ大名藩邸の庭園が、どのような特色があったのかを整理することを目的とする。

分析の対象は、江戸後期（文政～安政）の加賀藩前田家上・中・下屋敷、富山藩前田家の上・中・下屋敷、大聖寺藩前田家の上・中・下屋敷とする。例えば加賀藩前田家の大名藩邸では、本郷邸が最初下屋敷として造営され、上屋敷を経て明治元年に中屋敷となるが、本稿では文政から安政期の屋敷の位置づけで呼称する。

それぞれの庭園に関する先行研究としては次のものが挙げられる。飛田範夫氏は、加賀藩前田家上屋敷と下屋敷を取り上げ、上屋敷庭園の池水が湧水を利用し、下屋敷庭園が石神井川の川水を利用して庭園が営まれたことを明らかにしつつ、江戸後期における庭園の景観や主たる構成の概要について論じている[1)]。白幡洋三郎氏は加賀藩前田家上屋敷庭園を取り上げ、寛永期における庭園の造営、『三壺記』ほか文書資料の記事、「江戸図屏風」といった絵画から庭園景観の様子を論じている[2)]。東京大学育徳園の在り方検討ＷＧは、加賀藩前田家上屋敷庭園について庭園の変遷、構成要素、景観について詳細な検討を加えている[3)]。吉田政博氏は加賀藩前田家下屋敷を取り上げ、主として文政７年（1824）の「下屋敷御林大綱之絵図」を読み取って池泉、山、畑、植生（植栽）等の構成を詳細に検討している[4)]。原祐一氏は不忍池周辺の大名藩邸庭園からの園外景観の検討において、富山藩前田家上屋敷庭園、富山藩前田家中屋敷庭園を取り上げ、その眺望対象や地形、建物との関係について論じている[5)]。

本稿では、上記の先行研究を踏まえつつ、加賀藩、富山藩、大聖寺藩が営んだ庭園の立地、地割、意匠を検討し、前田家の大名庭園を知るための基礎的な知見を提示したい。

（2）加賀藩、富山藩、大聖寺藩の藩邸の立地

加賀藩、富山藩、大聖寺藩が営んだ藩邸の立地を知るため、まず所在地は安政３年（1856）の江戸の土地利用の状況を詳細に整理した『復元･江戸情報地図』（1994）[6)]を用いて藩邸の所在地を確認した。さらにその地形との関係を、参謀本部陸軍部測量局作成『五千分一東京図測量原図』（1883･1884 年）[7)]ならびに陸地測量部作成「東京一万分一地形図」（1909）[8)]で確認した。上記地形図は明治期の作成であるが、台地、谷、崖といった地形の特徴について江戸後期から明治期に至るまで、おおよそ継承されていると考えたためである。その立地的特徴をまとめたものが第 63 表である。立地タイプでは、地形図の分析から、①台上：山手台地の各台の上部に立地するもの、②台端：山手台地の各台の突端部分に立地し、台地上部、崖線を含むもの（事例によっては崖線下の低地部分を含む場合もある）、③平地：平坦な地形上に立地するもの（事例によって、山手台地の各台に近接した崖線下の低地、平野部内に立地するものがある）、④谷筋：山手台地の各台の谷筋に立地するもの、の大きく４つのタイプを導くことができた。

富山藩前田家藩邸の立地

富山藩は上屋敷を本郷に、中屋敷を池之端に、下屋敷を下谷坂本町に拝領した。

上屋敷は加賀藩前田家上屋敷、大聖寺藩前田家上屋敷に西接する。本郷台の東側突端部分に立地し、敷地縁辺部はおおよそ６メートル程度の高低差の崖となっている。原氏の研究によれば、不忍池への眺望を確保するために書院前の庭園部分を低く割平したようである[5)]。

中屋敷は池之端にあり、不忍池北西に近接する。本郷台東側の崖下に立地する。標高はおよそ 5.5 メートルの平坦な地形上に占置する。

第 63 表　富山藩・大聖寺藩・加賀藩の大名藩邸立地

藩	藩邸種別（安政期）	所在地	規　模	立　地	立地説明	庭園地割			地割根拠
						池	山	その他	
富山藩	上屋敷	本郷	1,475坪余	台端	本郷台東側の突端部に立地。			*平場*	⑤
	中屋敷	池之端	475坪	平地（崖線下）	本郷台の東側崖下の低地に立地。	▲			⑤
	下屋敷	下谷坂本町	10,000坪？	平地（低地）	上野台東側の低地に立地。	●		*樹林、水田、平場*	①、⑤
大聖寺藩	上屋敷	本郷	4,641坪	台上	本郷台の南辺上部に立地。				
	中屋敷	池之端	4,641坪	平地（崖線下）	本郷台の崖下の低地に立地。	●		*平場*	⑤
	下屋敷	下駒込	10,000坪	台端	本郷台の東側突端部に立地。	▲		樹林、平場	⑥
加賀藩	上屋敷	本郷	103,822坪	台上	本郷台の南辺上部に立地。	●	●	樹林	①、⑦
	中屋敷	上駒込	20,660坪	台上	本郷台の南辺上部に立地。	▲	▲	樹林、平場	⑥
	下屋敷	板橋	217,935坪余	台端・谷筋	石神井川の谷筋に立地し、上野台と本郷台の縁辺部と崖線、石神井川の谷筋上に立地。	●	●	川、樹林、田畑、堀、平場ほか	②、③

注：各藩邸の「規模」欄の記載は、『復元・江戸情報地図』平成6年（1994）によった。
「立地」欄の分類は、『復元・江戸情報地図』で所在地を確認し、『五千分一東京図測量原図』と「東京一万分一地形図」で当該屋敷位置の地形的立地状況から判断した。
「庭園地割」欄の●は、資料にもとづき存在が特定できたものを示す。▲は明治期の資料で推定されたものを示す。
その他の斜体表記も明治期の資料から推定されたものを示す。
「地割の根拠」の丸数字は、以下の資料を示す。
①「江戸藩邸絵図（1）江戸本郷邸間取図」文政10年（1827）以降、②「下屋敷御林大綱之絵図」文政7年（1824）、③「板橋邸絵図 」文政年間、④『復元・江戸情報地図』平成6年（1994）、⑤『五千分一東京図測量原図』明治16・17年（1883・1884）（日本地図センター複製、2011年）、⑥「東京一万分一地形図」明治42年（1909）（柏書房復刻『明治・大正・昭和　東京１万分１地形図集成』所収、1983年）、⑦『東京市史稿　遊園編第一』昭和4年（1929）

下屋敷は、不忍池より東へおよそ１キロのところにあり、上野台東側の標高では５メートル前後の低地に立地する。

大聖寺藩前田家藩邸の立地

大聖寺藩は、上屋敷を本郷に、中屋敷を池之端に、下屋敷を下駒込に拝領した。

上屋敷は、加賀藩前田家上屋敷と富山藩前田家上屋敷に挟まれており、本郷台南辺の標高ではおよそ 16 メートルの台地上部に立地する。

中屋敷は不忍池北西縁に近接し、富山藩前田家中屋敷に北接する。本郷台東側の崖下に立地し、標高ではおよそ 5.5 メートルの平坦な地形上に占置する。

下屋敷は、本郷台東側突端部分に立地する。台上の標高はおよそ 20 メートルで崖下は８メートルであるため、およそ 12 メートルの高低差を有していたことが分かる。本郷台東側の縁辺部にあったことから、特に江戸湾から房総方面への眺望に優れていたと考えられる。

加賀藩前田家藩邸の立地

加賀藩は上屋敷を本郷に、中屋敷を上駒込に、下屋敷を板橋に拝領した。

上屋敷は、水戸藩徳川家中屋敷に北接し、富山藩前田家上屋敷および大聖寺藩前田家上屋敷に東接する。邸宅は本郷台南辺上部に立地し、地盤面はおおよそ 23 メートルの標高にあり、地形的には邸宅内部に大きな窪地を有するのが特色である。

中屋敷は郡山藩柳沢家下屋敷に隣接し､本郷台の南辺上部に立地する。地盤面はおよそ標高 25 メートル付近である。

下屋敷は下板橋宿の北にあり、石神井川の谷筋を含みつつ、上野台と本郷台の縁辺部と崖線にまたがって立地し、藩邸内に山、谷、平坦地を有する地形的な変化にすこぶる富んだ邸宅であった。

（3）富山藩前田家藩邸庭園の地割・意匠

上屋敷の庭園

上屋敷の庭園は、すでに原氏が不忍池を邸内に取り込み、上野の山や限りない家々が望めたことを明らかにしている[5)]。松平定信晩年の自筆日記「花月日記」の記述により､書院の庭には大きなモミ（原文「もミ」）の木があったことが分かる[9)]。本邸宅の書院は明治期以降も東大医学部の施設として利用され[5)]、『五千分一東京図測量原図』にもその書院が描かれ、書院東側に庭園が存在していることが読み取れる。

第 322 図　富山藩上屋敷の庭園と不忍池との位置関係（図中赤丸が富山藩上屋敷書院）
出典：「五千分一東京図測量原図」（1883・1884 年）（日本地図センター複製、2011 年）

『五千分一東京図測量原図』に描かれた庭園が、東大医学部の施設になってから改造されたかどうかは不明であるが、書院東は砂の色で表現された平庭で、ところどころに樹木が植わっていることが読み取れる。書院庭の北にも芝生に曲線園路をめぐらした庭園が確認できるが、こちらも富山藩上屋敷時代のものかどうかは分からない。

中屋敷の庭園

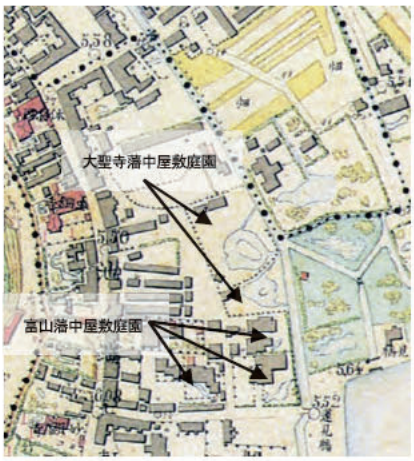
中屋敷の庭園は、『復元・江戸情報地図』には池の記載はないが、『五千分一東京図測量原図』には複数に数区画に屋敷が区切られ、３つの区画にそれぞれ１か所ずつ小池が描かれている。南東の区画の池は忍川に接続しており取水もしくは排水のために忍川を利用していたと考えられるが、明治期以降の築造の可能性があり、安政期のものとは断定できない。また、敷地の東面と南面の一部には生垣によって囲まれているように描かれている。

下屋敷の庭園

下屋敷の庭園は、『復元・江戸情報地図』にふたつの池を有する池庭が安政期には存在していたことが分かる。池は便宜上、東側の池を東池と呼び、西側の池を西池と呼ぶ。『五千分一東京図測量原図』では、ちょうど敷地が参謀本部陸軍部測量局による測量範囲から屋敷の北と東が外れており、東池は測量の範囲外となっているため庭園の状況は分からないが、「東京一万分一地形図」では、ほぼ同位置に池が描かれている。西池はほぼ同じ池の平面が『五千分一東京図測量原図』描かれており、西池周辺の安政期の庭園の姿が推定できる。『復元・江戸情報地図』から東池の規模を確認すると、南北約 60 メートル、東西 20 メートルである。北側に 10 メートル程度舌状に張り出した部分がある。西池は北西～南東方向に軸を持つ曲池で、特に南東隅に近くになるに従っては細く水路状になる。地形でいうと北が高く、南が低くなるので、池尻の水路に該当すると考えられる。明治前期では池は水田に排水されていたが、安政期ではどうであったかは分からない。取水方法も不明である。また、西池は西岸の中央部分近くに中島を浮かべている。『五千分一東京図測量原図』では、規模は長径（北西～南東方向）が約 70 メートル、短径（東西）で約 20 メートルである。周囲は木造の垣で囲まれ、底面は砂の色で樹木が西池周囲に存在している。

（4）大聖寺藩前田家藩邸庭園の地割・意匠

本節では大聖寺藩の藩邸庭園を取り上げるが、上屋敷については庭園に関する資料等を十分に得ることができなかったため、中屋敷と下屋敷の庭園について述べる。



第323図　富山藩中屋敷と大聖寺藩中屋敷の庭園（屋敷の東側に南流する川が忍川）
出典：『五千分一東京図測量原図』（1883・1884年）（日本地図センター複製、2011年）

第324図　富山藩下屋敷の庭園（図中の「前田邸」）
出典：『五千分一東京図測量原図』（1883・1884年）（日本地図センター複製、2011年）

第325図　大聖寺藩下屋敷の庭園（図中の「須藤邸」）
出典：「東京一万分一地形図」（1909）（柏書房復刻『明治・大正・昭和　東京1万分1地形図集成』所収、1983年）

中屋敷の庭園

中屋敷の庭園は、『復元・江戸情報地図』にふたつの池を有する池庭が安政期には存在していたことが分かる。『五千分一東京図測量原図』にもほぼ同じ形状の池が判読できる。池は便宜上、北側の池を北池と呼び、南側の池を南池と呼ぶ。北池、南池とも曲線の汀線を持ち、池中に両方とも中島を浮かべる。北池は南北約25メートル、東西約30メートル、中島は長径（北西～南東方向）で約19メートル、短径（南西～北東方向）で約9メートルの小判型の形をしている。南池は、南北約20メートル、東西約25メートルで、中島は南北約5メートル、東西約7メートルで円形である。

興味深いのはその取水方法である。水は、不忍池の西側を南流する人工河川・忍川から取水し、排水も忍川へと注げるように、北・南池それぞれにふたつずつ水路をともなっていることである。庭面は地形図上では砂の表現となっており、樹木等の表現はみられない。

下屋敷の庭園

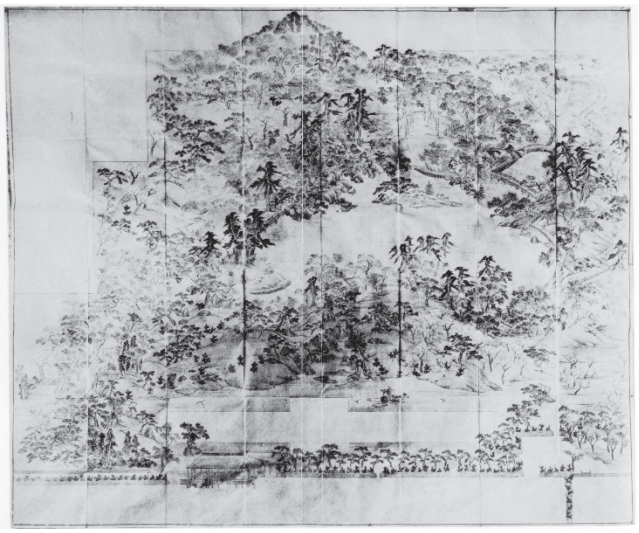
下屋敷の庭園は、『復元・江戸情報地図』には池の情報がないが、「東京一万分一地形図」では須藤邸の邸宅となっており、庭園は本郷台の台地上、斜面（崖線）、崖線下の低地の三面に分けられる。台地上部の北半は針葉樹林、南半は広葉樹林となっている。崖下には楕円形の池が描かれ、中島が浮かべられ、中島には社が記載される。現状では須藤公園として池は残っているが、社は現在も残る弁財天を祀った施設のことであろう。池の規模は長径（北西～南東方向）約50メートル、短径（北東～南西方向）約30メートルである。この水面が大聖寺藩下屋敷のものかどうかは不明であるが、崖線の下は水が湧きやすい地形的性質があることから、大聖寺藩下屋敷時代の池の可能性は否定できない。

（5）加賀藩前田家藩邸庭園の地割・意匠

上屋敷の庭園

加賀藩前田家の上屋敷庭園（育徳園）は、飛田氏、白幡氏によれば、元和2年（1616）年頃に拝領して下屋敷として造営され、寛永6年（1629）に将軍家光と大御所秀忠の御成のために庭園が拡大整備されたようである。このときに庭園の西側に浚渫土が築成されて栄螺山と呼ばれる築山が作られた。天和3年に上屋敷となった本庭園は、江戸後期には池の南側が拡張され、西南側には枯滝石組が設

第326図 「江戸藩邸絵図(1)江戸本郷邸間取図」（文政10年以降）の一部［横山隆昭氏蔵］



第327図 「育徳園」侯爵前田利為所蔵
出典：『東京市史稿　遊園編第一』（1929）

けられていた[1)、2)]。庭園は池泉を中心に周辺を園路で回遊するようにした池泉回遊式庭園である。庭園の地割としては池泉、栄螺山があり、池泉の四方は窪地を活用した崖の植栽地で、池泉北、東、南に築山がある。東方には平場があり、御馬見所を設けて矩形の区画で整備した馬場があった。もうひとつ、築山をともなう馬場と思しき空間が「江戸藩邸絵図（1）江戸本郷邸間取図」[10)]に見える。

庭園地割の中心を成す池の平面計画は略Y字形で、その規模は北側で東西約90メートル、南北約110メートルで、池中に南北約10メートル、東西約7メートル程度の中島が浮かぶ。池泉護岸は全体的に自然石とするが、特に西岸の大部分は巨石によって豪快な護岸を施すのが特徴である。『東京市史稿　遊園編第一』（1929）[11)]に掲載された庭園画「育徳園」（第327図、以下、庭園画と記載）では、南岸と西岸の一部を乱杭護岸とする。池泉には3橋が架かり、池泉北西に木造の反橋、南岸に木造の桁橋と八橋があった。東岸には舟着場も整備され、北東隅には舟屋も確認できる。中島は庭園画では五重層塔が建ち、高木の植栽は見られない。池を取り囲む崖・築山には、南にカラカサ御亭のほか、東に2棟、西に1棟、御亭という小規模な建物が建つ。また、池の北東には2棟の氷室が存在した。東の築山の東面は、豪快に立石を構成した枯滝石組が庭園画には見られ、主石を最も高く脇に2石を備えた三尊石組を採用している。築山・崖に設けられた園路は、南半は自然石の階段園路が多く、北半では四ツ目垣を備える。崖・築山の植栽は、自然樹形のマツが池岸と崖に多く庭園画に描かれる。池から離れるにしたがって広葉樹が多く描かれるが、ウメ等が表現されると思われるが判然としない。

栄螺山は庭園画に描かれているが、マツと思われる針葉樹が山裾に描かれ、山腹から山頂にかけては広葉樹が多く描かれている。

その他の庭園の点景物類として、まず石造物では中島の五重塔のほか、東の築山南東裾の雪見燈籠、西岸岬状の石組先端の三重塔（塔燈籠カ）、東岸縁辺部と西側の崖にも燈籠が見られるが、形状等は鮮明ではないために形式の特定はできない。また、庭園画には井戸が3基確認される。

中屋敷の庭園

中屋敷の庭園は、『復元・江戸情報地図』には特に池の地割は記されていないが、「東京一万分一地形図」には、敷地の西半に池が確認できる。

この地は明治11年（1878）に三菱財閥の創始者・岩崎弥太郎が加賀藩前田家、郡山藩柳沢家、および津藩藤堂家の藩邸の土地を得て庭園を復旧・改修し、弥太郎没後は弥之助と久弥が整備を継続した。

第 328 図　加賀藩中屋敷の庭園（図中の「岩崎邸」西半部分）
出典:「東京一万分一地形図」(1909)（柏書房復刻『明治·大正·昭和　東京１万分１地形図集成』所収、1983 年）

第 329 図　「江戸下屋敷絵図」(下屋敷御林大綱之絵図)（文政７年（1824））［金沢市立玉川図書館所蔵］

『岩崎弥太郎伝』[12]、『岩崎弥之助伝』[13]、『岩崎久弥伝』[14]には、駒込邸の庭園改修に関する記載がある。特に『岩崎弥之助伝』[13]には「鴨池」の改修の記事が見える。この池は三菱地所所蔵の実測図[15]から、方形をなす池に２島の楕円形の島を浮かべ、11 か所の引掘をともなった鴨場であった。岩崎家関連の伝記に旧前田家の藩邸部分に池を新造した記載がなく、池も大名別業に多数造成された鴨場である点を考慮すると、加賀藩中屋敷庭園は鴨場を主とした庭園であった可能性が指摘できる。池は長径（北西～南東方向）約 110 メートル、短径（北東～南西）約 70 メートルである。２島の島はおおよそ 20 メートル内外である。地形図では池の南西に広葉樹をともなう築山があり、周囲は針葉樹林が確認でき、南西隅には竹林の表現がなされている。

下屋敷の庭園

下屋敷の庭園は、「江戸下屋敷絵図」(下屋敷御林大綱之絵図)（文政７年(1824)）[16]、「板橋邸絵図」(文

第 64 表　加賀藩前田家下屋敷庭園の地割と構成要素

地割区分	境地、景物、土地の名称								施設の名称	
	山	木・樹林・神苑	田畑	池・出島・島	地形・岩	堀	平場	道・場所	建物	構造物
中央園地（観賞）	紅葉山 高山 琉球山 五葉松山 百足山 巌石山 櫛山 舟山 玄蕃山	七本松 次郎衛門松 椎林 稲荷	本梅畠 梅畠 杜若田	鸛の首 和歌浦 銀杏出崎 河原 由井ノ濱 中嶋 亀尾山 丸山 おこりの宮 大池 舟着 石神井川	七曲 谷切 大岩 弘法ヶ瀧 崖		薬師ヶ原 馬場		紙漉小屋 水車小屋 筆番所 御亭所 新御亭所 御舟小屋 舟山御亭所 玄蕃南番所 茅小屋 御鷹部屋	柵橋 柊橋 鳥居（北） 鳥居（南） 稲荷橋 東橋 八ッ橋 水車 藤棚
北園地（樹林）	おぐら山 松茸山 赤禿山 太郎兵衛山 柊山 向山	傘松	湯屋田			から堀 口堀		土手先道 中町場 □□里者道	北御番所 赤禿山御亭所 東面番所	
南西園地（生産）	金子山	柊林 神明森 は竹御薮 権現森 嶋ノ台	柿木畠 捨田 現左衛門畑		谷	新堀	五斗蒔 茅場 はりの木原		西ノ口番所 西御番所 金子御亭所	柵橋
南東園地（生産）	后狢山	大葉楓 榛御林 栗御林 唐竹御薮	御花畠 本御花畠 御畑			長堀	むしなか原 新茅場		狢御番所	御畑橋
内庭（生産）		孟宗御薮	内御畑							

第 65 表　「下屋敷御林大綱之絵図」にみる庭園の姿、景色の表現、様子

種別		名称	姿・景色の表現
中央園地（観賞）	山	紅葉山	「下屋敷御林大綱之絵図」では、和歌浦背後に見える落葉広葉樹の疎林として表現。
		高山	「下屋敷御林大綱之絵図」では、高木はなく、地被のみの表現。山頂は丸みを帯びた瘤状。「板橋邸絵図」では頂がやや細く、山裾が広がる。両図とも山頂へ登る道はない。
		琉球山	「下屋敷御林大綱之絵図」、「板橋邸絵図」でも、3つの小山が描かれており、三山時代の沖縄を象徴的に表現したものか。「下屋敷御林大綱之絵図」では、高木はなく、地被のみの表現。
		五葉松山	「下屋敷御林大綱之絵図」では、弘法ヶ瀧の築山の一部をなす駱駝の瘤状の小山。5本の松が見える。
		百足山	「下屋敷御林大綱之絵図」では、高木はなく、岩肌が表現され、山頂部は平坦面となる。「板橋邸絵図」では中段にも平坦面を頂とする添峰を描く。近江富士といわれる三上山と女山を模したものか。
		巌石山	水中に浮かぶ岩島で、松が生える。
		櫛山	「板橋邸絵図」では山状には描かれず平坦地に数本の桜が見える。
		舟山	馬の背状の山。三方から階段で山頂部に達する。山裾北と南に松林が見え、北西に桜が見える。山頂部に御亭所が建つ。
		玄蕃山	南辺に数個の瘤を持つ勾玉状の山。松の疎林が形成され、中腹には御鷹部屋も配置される。
		岩山	石神井川下流左岸側に聳える岩山。中腹部にも平地を持ち、山頂の平地には番所が建つ。疎らに松が生える。
	木・樹林・神苑	七本松	石神井川が蛇行する右岸縁辺部の階段状造成地に位置するが、「下屋敷御林大綱之絵図」では当該地に田圃の張り紙がされる。
		次郎衛門松	桜の木々の中に一際鮮明に描かれた1本の松。幹肌の色からアカマツと推定される。
		椎林	高山の西に広がる樹林帯として表現される。
		稲荷	松林で囲まれた森の中にある稲荷。鳥居（南）は石製で、鳥居（北）は朱塗りの木製と見られる。鳥居を潜ると2つの狐の狛犬が対を成して設置され、朱塗りの拝殿、本殿が見える。
	樹木畑・田畑	本梅畠	1本の枝垂樹形の広葉樹が見える。境地の名称からシダレウメか。その周囲は松の疎林となる。
		梅畠	数本のウメと考えられる広葉樹が見える。湾曲した岸辺には舟着がある。
		杜若田	十数枚の田の区画が形成される。
	水辺・出島・島	大池	庭園の中心をなす。池内に複数の島をもち、汀線は出島、入江など随所に屈曲を見せる。ただし河原や濱を表現したところは緩やかにカーブする。護岸は線のみで表現され細部意匠は不明。
		鶴の首	石神井川が蛇行した箇所に、小池を持つ細い水流が接続した箇所を指す。細い水流を鶴の首に、小池を頭に見立て呼称したと考えられる。
		和歌浦	大池北西岸から舌状に張り出した出島で、池に面して岩肌が水際に映える2つの丘が見える。丘上には松が生える。
		銀杏出崎	大池東岸に舌状に張り出した出島。イチョウと思しき木は見えず、池岸に張り出した1本のアカマツは下枝が池に延び、支柱が池中から立ってその下枝を支えている。
		河原	緩やかに曲がる大池東岸の一画。池岸に張り出した1本のアカマツは下枝が池に延び、支柱が池中から立ってその下枝を支えている。
		由井ノ濱	緩やかに曲がる大池東岸の一画。舟着きが設けられ、陸部は松等の樹木が疎らに生える。
		中嶋	平面形状は「板橋邸絵図」では西が鶴の嘴状に細く伸び、南北両脇に突起状に山があることから、象徴的に鶴島に見立てた可能性がある。「下屋敷御林大綱之絵図」では島は地被の表現で3本の松が見える。
		亀尾山	大池の西に浮かぶ島。亀を表した島らしく、「下屋敷御林大綱之絵図」では亀の尾のような細長い陸部が描かれる。数本の松があしらわれている。
		丸山	大池南岸中央から複雑に入り組んだ出島が中島方向に張り出し、出島東に3つの浮島がともなう。丸山はその浮島の1つ。「板橋邸絵図」ではほぼ正円形の平面で、「下屋敷御林大綱之絵図」では高木はなく、地被のみの表現となる。
		をこりの宮	亀尾山と和歌浦から橋が浮島にかかるが、その島ををこりの宮という。池岸に石製の三重層塔もしくは三重塔燈籠が置かれ、3本の松が生える。
		石神井川	庭園の東西を横切る流路で、大池に水を供給する。緩やかに蛇行しつつ、随所に橋が架かる。
	地形・岩	七曲	石神井川上流右岸岩肌の屈曲する階段状の山道。周囲は崖の切り立った岩肌として描かれる。
		谷切	石神井川から枝分かれした南下する細流が峡谷状の谷を流れるように描かれる。周囲は岩肌の崖に見える。
		大岩	大池南岸中央に見える凹凸をともなう巨岩。周囲は広葉樹が生え、東脇に石造物が見える。
		弘法ヶ瀧	大池の水を取水し、両岸を岩でくみ上げた布落ち状の瀧。瀧下の流路には橋が架かり、一部には丸太の乱杭護岸も見える。流下した水は石神井川に接続する。
		崖	石神井川左岸に共通して表現された岩肌の崖。上部には松林が形成されていたことが読み取れる。
	平場	薬師ヶ原	大池の南に位置する平原。
		馬場	薬師ヶ原南に位置する馬場。張り紙によって直線の道と馬止めが見える。また、その南にも道は見えないが馬止め状の土盛りが3箇所見える。

種別		名称	姿・景色の表現
北園地（樹林）	山	をぐら山	北西隅に位置する山。竹林が形成されているように描かれる。
		松茸山	をぐら山の南に位置する。松が描かれる。
		赤禿山	北七曲り道の西に位置する山。周囲の松林と同じように松が生える。山腹に御亭所が建つ。
		太郎兵衛山	北七曲り道と□□里者道（北東境道）の交差点西に位置する山。周囲の松林と同じように松が生える。
	樹木	傘松	土手先道西に位置する松だが、「下屋敷御林大綱之絵図」にはそれを示す松は描かれていないと思われる。
	田畑	湯屋田	北・東・西の3方向が3つの堀によって囲まれる。
	堀	から堀	をぐら山周囲に設けられた4つの空堀。くの字形に屈曲するもの、馬蹄形に湾曲するものが確認できる。
		口堀	傘松南にある堀。「板橋邸絵図」では四角い堀が2つ水路でつながるが、「下屋敷御林大綱之絵図」では楕円形の堀に描かれる。
南西園地（生産）	山	金子山	南辺に位置する山で、全体は松林で構成される。ただし西縁に小高い岩山が屹立し、頂上は平坦に造成され、御亭所が設けられた。
	森・樹林・神苑	柊林	「板橋邸絵図」には柊林とあるが、「下屋敷御林大綱之絵図」には草原のような表現となる。この区画に筆番所が建つ。
		神明森	周囲は、常緑針葉樹と思われる樹林で表現され、その中に小高い丘が描かれ、周囲の針葉樹林よりも濃い緑色で針葉樹林が描かれている。この場所が神明森と考えられ、その丘に至る階段園路も見える。
		は竹御薮	神明森南の針葉樹林の西側に表現された竹林。ハチクが生えていたと考えられる。
		権現森	西南隅に位置する森で、長方形の針葉樹林地として表現される。
		嶋ノ台	田の北側に小高い地形が表現され、丘の裾はウメと思われる落葉広葉樹林が見られる。丘の上部は平坦に造成され、密度高く常緑針葉樹林が描かれる。
	田畑	柿木畠	柊林の一画に長方形の柵があり、柿と考えられる落葉広葉樹3本が表現される。
		捨田	「板橋邸絵図」には捨田とあって20数枚の小ぶりの田の表現があるが、「下屋敷御林大綱之絵図」には張り紙がほどこされ、整形的で大きな田の表現に改められている。
		現左衛門畑	金子山北の谷に形成された畑。
	地形・岩	谷	現左衛門畑およびその一帯の細長い場所を指していると思われ、針葉樹林が描かれている。
	堀	新堀	石神井川上流から分水して南下する流路に接続した小判形の2つの堀。
	平場	五斗蒔	権現森北に位置し、全体は竹林で表現される。点々と常緑針葉樹、広葉樹が見える。
		茅場	五斗蒔と権現森の東に位置し、全体は草地の表現となる。ただし北半には点々と落葉広葉樹があり、南半は竹林、杉林が見える。
		はりの木原	ハリノキと思われる落葉広葉樹林が確認されるが、周囲は竹林、松林も見られる。
南東園地（生産）	山	后狢山	東縁の山で密な針葉樹林が描かれている。
	木・樹林・神苑	大葉楓	位置的には栗御林の南にあるが、楓の表現は見えず、当該地にはシダレザクラのような表現が見える。
		榛御林	東南隅の樹林であるが、ハリノキのような落葉広葉樹ではなく針葉樹林の表現となっている。
		栗御林	クリと考えられる数本の落葉広葉樹が描かれている。
		唐竹御薮	多角形の施設で区画され、その中に竹林表現が見られる。マダケが植栽されていたと考えられる。
	田畑	御花畠	むじなか原の南に位置するが、花の表現は見えず、松と落葉広葉樹の混植された様子が見える。
		本御花畠	御殿東に位置するが、松の疎林が確認できるものの、花は見えない。
		御畑	唐竹御薮の北に位置し、施設で区画される。区画の北に番小屋が建ち、南北に水路が流れる。
	堀	長堀	周囲が常緑針葉樹林で囲まれた東西方向に長い楕円形の堀。
	平場	むしなか原	松と落葉広葉樹の混植された様子が見え、表現上は御花畠と同様。
		新茅場	百足山の南にあり、茅の表現はなく、松の疎林が見える。
内庭（生産）	樹林	孟宗御薮	多角形の施設で区画され、その中に竹林表現が見られる。モウソウチクが植栽されていたと考えられる。
	田畑	内御畑	孟宗御薮の南の区画にあり、籾小屋が設置されていた。

政年間）[17] から、①中央園地（観賞）、②北園地（樹林）、③南西園地（生産）、④南東園地、⑤内庭（生産）という大きく５つの地割を有していたことが分かる。

中央園地は、石神井川の谷筋に立地し、北面では上野台の崖線を含みつつ、南面では本郷台の崖下低地にあたる。石神井川を水源として中島が浮かぶ大池を中心とした回遊式庭園である。高山を始めとする山々、和歌浦といった名所、瀧、水車等、数々の境地・景物を具備したものであった。池内に浮かぶ島には反橋を架け、舟での回遊も可能とした。北園地は、上野台の段丘に形成され、庭園背景の骨格を成すマツを主とした樹林地であったことが読み取れる。おぐら山、太郎兵衛山など複数の山が存在した。南西園地は本郷台の台地と崖下を含む生産園地である。田や畑、茅場などが見られる。金子山には御亭所が設けられた。南東園地も本郷台の台地と崖下を含む生産園地である。花畠、畑、茅場、などが確認される。内庭は御殿にともなう庭であるが、こちらも畑とモウソウチクの竹林が確認された。以上を整理したものが第 64 表、第 65 表である。

（6）おわりに

以上、加賀藩、富山藩、大聖寺藩が江戸に造営した江戸藩邸庭園の概要について述べた。各藩が営んだ庭園については、国元の庭園と比較検討すれば、各藩の庭園に関する理解も深まり、新たな観点によって特色が明確になると思われるが、本稿ではその点について着手することができなかった。後考に俟ちたい。

註および引用・参考文献

1）飛田範夫 2009『江戸の庭園―将軍から庶民まで』京都大学学術出版会

2）白幡洋三郎 1997『大名庭園』講談社

3）育徳園の在り方ＷＧ 2016「育徳園の履歴とあり方」（http://www.u-tokyo.ac.jp/fac03/b07_02_03_j.html、2017 年 12 月 15 日参照）。

4）吉田政博 2010「加賀藩江戸下屋敷平尾邸をめぐる―下屋敷絵図の検討を中心に―」『板橋区・金沢市友好交流都市協定締結記念　中山道板橋宿と加賀下屋敷』所収、P154-162、板橋区立郷土資料館

5）原祐一 2014「富山藩邸庭園の造園と借景に関する一考察」『平成 26 年度日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集』第 32 号 P50～51

6）児玉幸多監修 1994『復元・江戸情報地図』朝日新聞社

7）参謀本部陸軍部測量局 1883・1884『五千分一東京図測量原図』国土交通省国土地理院所蔵、日本地図センター複製 2011

8）陸地測量部 1909「東京一万分一地形図」柏書房復刻 1983『明治・大正・昭和　東京１万分１地形図集成』所収

9）岡島偉久子・山根陸宏 2000『翻刻　花月日記　松平定信自筆』（三）文化十一年八月～十月、「天理図書館館報ビブリア」第 113 号

10）横山隆昭氏蔵「江戸藩邸絵図（１）江戸本郷邸間取図」文政 10 年（1827）以降

11）東京市編 1929『東京市史稿遊園編第一』、臨川書店復刻 1973

12）岩崎家伝記刊行会編 1967『岩崎弥太郎伝（下）』岩崎家伝記（二）、東京大学出版会

13）岩崎家伝記刊行会編 1971『岩崎弥之助伝（上）』岩崎家伝記（三）、東京大学出版会

14）岩崎家伝記刊行会編 1961『岩崎久弥』岩崎家伝記（五）、東京大学出版会

15）藤森照信・青木信夫 1994『岩崎家四代ゆかりの邸宅・庭園』三菱広報委員会

16）金沢市立玉川図書館所蔵「江戸下屋敷絵図」（下屋敷御林大綱之絵図）（文政７年（1824））

17）金沢市立玉川図書館所蔵「板橋邸絵図 」（文政年間）

3．戦国城下町一乗谷の館・屋敷における作庭

藤田若菜（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

（1）はじめに

本論では室町時代後期（応永年間～天正年間）に活躍した、戦国大名[1)]の典型例ともいえる越前朝倉氏を取り上げる。他国の戦国大名と同様に、武力だけでなく文力をもって領国統治をおこなった、朝倉氏の京文化の導入ならびに領国文化の発展を文献史料から探り、そこに発掘調査によって検出された遺構や遺物から窺える庭園空間を重ね合わせることにより、作庭という行為を文力統治の一側面として整理しなおした。

そして近年、地方の国々を治めた戦国大名に関連する庭園遺構の発掘事例が増加したなかで新たな研究課題も認められていることから、安土・桃山時代への過渡期として、そして江戸時代へと続いていく庭園文化の発露としても位置付けられる、地方の室町時代後期の作庭に関し、今後の研究課題の一部を整理した。

（2）戦国大名の京文化導入と領国文化の発展

戦国大名は個人的な趣味嗜好ではなく、政治的・社交的な必要性から和歌や連歌といった文芸、蹴鞠や猿楽、茶の湯、立花、聞香といった芸能・遊芸を嗜み、そして在地芸能者の保護育成など、領国文化の発展に努めたことが知られている［米原 1976・1986］。戦国大名の典型例として、応仁・文明の乱を一つの契機として越前一国を治めた朝倉氏を事例にみると、京文化との交わりは長禄元年を例に、京都在国時代より始まっていることが分かる。続く応仁年間～文明年間には、一乗谷初代孝景が越前に下り、歴代の朝倉氏当主が在国して以降、本格的な京文化の導入が認められる。戦国大名は、応仁・文明の乱を避けて下向する文化人を自国に受け入れるとともに、戦国大名自身が望み、都の文化人の下向を実現させており、各国において京文化の導入が積極的に行われていた。

こうした京文化の導入の中には、戦国大名の統治・権力の画期を捉えて行われたと推定されるものがある。例えば朝倉氏の場合、永正９年（1512）に一乗谷４代として孝景が跡を継ぎ、その直後の永正 13 年（1516）に白傘袋・毛氈鞍覆の使用が許され、大永８年（1528）に御供衆に任ぜられ、ついに天文７年（1538）には御相伴衆に加えられている。それらの家格向上とほぼ時期を同じくして、大永３年（1523）には相阿弥より当主である孝景が『君台観左右帳記』の伝授を受け、続く大永４年（1524）には一乗谷初代孝景の甥にあたる朝倉景職が、村田宗珠より『君台観左右帳記』を相伝されている。さらに天文 13 年（1544）には一乗谷４代孝景に仕え、後に５代義景に仕えることとなる朝倉氏家臣の服部彦右衛門入道暹栄が、同じく村田宗珠より『君台観左右帳記』を伝授されている。一乗谷４代孝景に始まる当主・朝倉を名乗る同名衆・家臣への『君台観左右帳記』伝授は、朝倉氏の一代における急激な家格向上に伴い、将軍家の格式に応じた座敷飾りを行う必要性が高まったことが要因と推定されている［宮永 2006、小野 2017］。

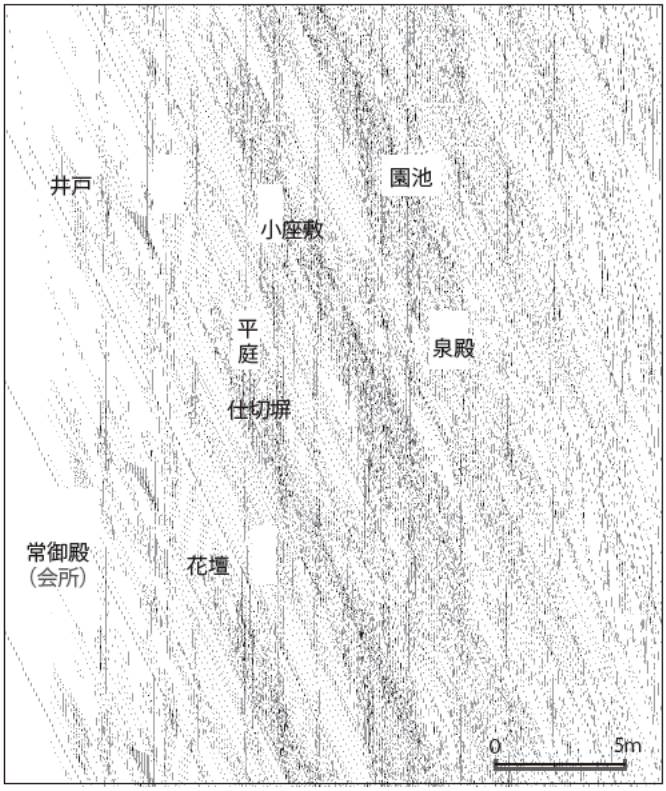
一乗谷においては孝景と景職が伝授を受けた後の天文４年（1535）、従三位であった富小路資直をもてなす「泉殿」での酒宴が孝景邸にて行われている。資直の紀行文に「泉殿」とあることから、園池にはりだした建物の存在が推測され、次項にて詳細を述べる朝倉館跡の検出遺構との類似点が認められる。さらに、天文 12 年（1543）には孝景の新造亭の記録もあり、前述の泉殿も含めそれらの座敷には、伝授された『君台観左右帳記』に基づき、『松屋名物集』の「越前朝倉」の項に見られる天目・肩衝など、朝倉氏の権威を象徴する多くの唐物が飾られたものと想像される。

第 66 表　一乗谷文化関連年表

和暦	西暦	京都	一乗谷・越前国	備考
長禄元	1457	孝景、このころ京都にて月次歌会を催す。		『草根集』 7 月 8 日
2	1468		孝景（一乗谷初代）が越前へ下る。以後、歴代在国する。	『大乗院寺社雑事記』 閏 10 月 14 日
文明 11	1479		一条兼良が越前に下向し、孝景の歓待を受ける。	『大乗院寺社雑事記』 9 月 11 日
18	1486		招月庵正広、氏景（一乗谷 2 代）在所に参上する。	『松下集』 5 月 10 日
			氏景、正広に 30 首和歌を詠ませる。	『松下集』 5 月 20 日
長享 2	1488	朝倉景冬、侍千人を率いて仙洞御所旧跡の松を東山殿に運ぶ。		『蔭涼軒日録』、『北野社家日記』 2 月 21 日
		景冬、人数三千人で松を引く。足利義政に見参し、銭三千疋を進上する。		『蔭涼軒日録』、『実隆公記』 2 月 23 日
延徳 2	1490		貞景（一乗谷 3 代）、招月庵正広を月次歌会に招く。	『松下集』 6 月 14 日 以降、8 月 5 日まで家臣宅等でも歌会。
3	1491		宗祇、貞景館で句を詠み、注をつける。	『下草』、『下草注』 5 月 2 日
8	1499		猪苗代兼載、貞景邸の連歌会にて発句する。	『園塵』 10 月 1 日
永正 3	1506	貞景、土佐光信に京中屏風一双を描かせる。この日、三条西実隆、これを見る。		『実隆公記』永正 3 年 12 月 22 日条
5	1508		飛鳥井雅康が、蹴鞠の奥義を記した免許状、『蹴鞠秘伝書』を孝景（一乗谷 4 代）に伝授する。	『蹴鞠秘伝書』奥書
10	1513		朝倉与三右衛門尉景職、観世座笛方彦兵衛（彦四朗栄次）より、笛の秘書を相伝される。	『笛遊舞集』（法政大学能楽研究所所蔵本）奥書
大永 3	1523		相阿弥から朝倉宗俊（一乗谷 4 代孝景）に『君台観左右帳記』が伝授される。	『君台観左右帳記』堀口捨巳氏所蔵本奥書　12 月
4	1524	朝倉与三右衛門尉景職、村田宗珠より『君台観左右帳記』を相伝される。		『君台観左右帳記』大谷大学本奥書　6 月 3 日
			驢雪鷹灞、朝倉景紀邸宅の庭にある紅白を接いだ梅を詩に詠む。	『翰林五鳳集』 6 月 3 日
天文 4	1535		孝景、富小路資直を自邸に招き、泉殿に酒宴を催しもてなす。	仮題『資直越前紀行』／米原正義著『戦国武士と文芸の研究』
12	1543		清原枝賢、越前に清原宣賢を訪ねる。孝景の新造亭に向かい、見参する。	『天文十二年記』 4 月 26 日
13	1544		服部彦右衛門入道逼栄が村田宗珠より『君台観左右帳記』伝授される。	『君台観粧牒』杏雨書屋所蔵本奥書　6 月 11 日
17	1548		宇治の国茶師堀平国＜次郎左衛門＞、越前朝倉氏の茶の売口門職を、同名与三兵衛尉に銭 20 貫文で売り渡す。	『田中忠三郎氏所蔵文書』 天文 17 年（1548）11 月 15 日
永禄 2	1559		宗養、義景（一乗谷 5 代）の連歌会に列席。	『宗養発句付句』
4	1561		義景、棗庄大窪浜に犬追物を行う。	『賀越闘諍記』、『朝倉始末記』 4 月 6 日
5	1562		義景、大覚寺義俊らをもてなすため、一乗脇坂尾に曲水の宴を催す。	『永禄五年一乗谷曲水宴詩歌』、『朝倉始末記』等　8 月 21 日
6	1563		義景、義俊ら十五番歌合を催す。	8 月 23 日
10	1567		足利義秋が一乗谷に入り、安養寺に滞在する。	『越州軍記』等　11 月 21 日
			足利義秋、朝倉館に内儀の御成あり。伊冊＜九郎左衛門入道＞、頭巾を免される。 義景、御成の御礼として助吉の太刀一腰以下を進上し、十一献、終夜の遊宴に及び、翌朝辰刻還御。 義景、舜挙筆の一幅を義秋に進上する。朝倉景鏡、座敷相論により出仕せず。	『越州軍記』等　12 月 25 日
11	1568		足利義秋、義景母武田氏（二位ノ尼）の宅に御成あり。終日終夜遊宴する。明朝辰刻還御。	『越州軍記』等　3 月 8 日
			朝倉義景、足利義昭を「朝倉屋形ノ艮、美景無双ノ名境」南陽寺に招き糸桜を観て和歌を詠み交わす。	『越州軍記』等　3 月下旬
			足利義秋（昭）が義景館で元服する。義景館にて盛大な宴を催す。	『越州軍記』、『永禄記』、『朝倉義景亭御成記』 4 月 21 日
			義景、足利義昭の御成を朝倉義景亭に仰ぎ、盛大に饗す。義景、皇帝筆山水・人形の一対を義昭に進上する。	『越州軍記』、『朝倉義景亭御成記』 5 月 17 日
天正元	1573	義景自刃、朝倉氏滅亡。	織田信長の軍勢により一乗谷放火される。	『越州軍記』 8 月 20 日 『越州軍記』、『本願寺文書』 8 月 18 日
		朝倉景鏡ら、入京して信長に饗応される。金銀・絵賛・巻物その他、数を尽くして信長に進上する。		11 月下旬（中旬か） 米原正義氏（1986）『戦国武将と茶の湯』, p.64

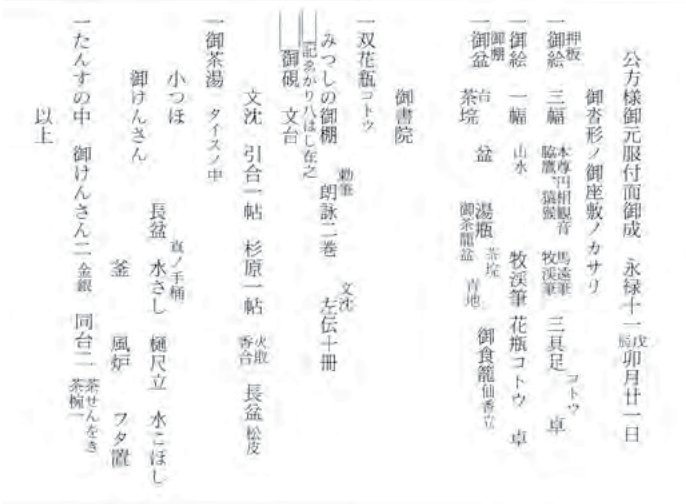
（3）文芸・芸能・遊芸の舞台としての館・屋敷空間

将軍家の格式に基づき、戦国武将の権威が空間として最大限に表現されたのは、将軍の御成空間であったことは想像に難くない。朝倉氏の場合、一乗谷５代義景の治世下の永禄 10 年（1567）に足利義秋は初めて義景邸を訪問しており、元服前でまだ将軍職に就いていないので、饗応儀式の用意は無用と伝えられての内々の御成であったにもかかわらず、朝倉氏は献立や進物など「式正ノ御成」に劣らないもてなしで義秋を迎えている。この時には既に遊宴のための空間がしつらえられていたと推測され、続く永禄 11 年（1568）４月 21 日、足利義昭の元服について御成をむかえ、茶会をした際の「御沓形ノ御座敷ノカサリ」の記録（『朝倉義景亭御成記』内閣文庫本・前田利嗣蔵本写本）より、押板には唐絵が飾られ、台子や茶筵筒に入れられた建盞などの唐物の茶道具が使われたことが分かっている。建築遺構の規模ならびに礎石配置、そして園池や枯山水様の平庭に面している点から、朝倉館の最も奥まった空間にある小座敷では茶の湯が行われたと推定されており、その脇の井戸遺構から出土した遺物も、小座敷にて茶の湯が行われたであろうことを裏付けている。特筆すべき出土品として、茶碗類とともに出土した高級家具用と考えられている鍵と、茶道具を入れるための持ち運び可能な箱型の戸棚（茶筵筒）の付札が挙げられる。これらは茶湯棚として使われていた筵筒とその鍵と推定されている［小泉 1990］。高貴なもののシンボルと理解されていたであろう、蝉をモチーフとした当主所有の「蝉之御たんすのか記」の付札から、蝉の御筵筒の存在が窺える。前述の「御沓形ノ御座敷ノカサリ」にも「たんす」が登場する。この「たんす」と蝉の御筵筒を直接結びつける確証はないが、当時最高位の客人である足利義昭をもてなすための特別な「たんす」として、蝉の御筵筒が使用された可能性が挙げられる。「御沓形ノ御座敷ノカサリ」から、朝倉館では客と亭主が一つの部屋で「タイス」の前に座りお茶を点て、特別な茶碗で丁重にもてなした様子も分かり、当時、京の町衆が筵筒を使った茶の湯をよく行い、永禄年間には座敷飾りをするような空間で台子を用いるようになったことから、数寄座敷の先進事例を示している可能性も指摘されている［中村 2009］。以上のことから、将軍家の格式に即した空間と、台子茶の湯といった当時の流行に基づく町衆の文化が織り交ざった空間が形成されていたことが窺われる。



第 330 図　朝倉館跡庭園と建物配置[2)]

また、枯山水様平庭と遣り水風の流れの蹲踞とも考えられる構成の一画は、次の時代に確立される茶庭の表坪ノ内の萌芽として注目されており［藤原 1998、吉岡 1999 等］、茶道の大成の過渡期における空間造形が窺われる。さらに花壇と枯山水様の平庭を区切る塀を境に、周囲の建物礎石間の狭間石も花壇部は切石、平庭部は玉石としており、これらは真とくずしの意匠表現であり、花壇の縁石の違いもこれと対応したものと考えられている［吉岡 1999］。このような「真とくずし」の空間認識は、室町時代の武家故実を継承した安土・桃山時代以降にも引き継がれ、発展していくこととなる。また、将軍の御成で必須とされ、朝倉館では仮設されていた能演の能舞台が常設されていくように、安土・桃山時代や江戸時代の発露としての空間表現も窺われる。


公方様御元服付而御成　永禄十一戊辰卯月廿一日
御杏形ノ御座敷ノカサリ
一押板御絵　三幅　本尊 円相観音 脇鷹 猿猴　馬遠筆 牧渓筆　三具足コトウ　卓
一御絵　一幅　山水　牧渓筆　花瓶コトウ　卓
一御棚御盆　台茶垸　盆　湯瓶茶垸 御茶籠盆　青地　御食籠仙香立
御書院
一双花瓶コトウ
みつしの御棚　勅筆　朗詠二巻　文沈　左伝十冊
記ゑかり八はし在之
御硯　文台
文沈　引合一帖　杉原一帖　火取香台　長盆松皮
一御茶湯　タイスノ中
小つほ　真ノ手桶
長盆　水さし　樋尺立　水こほし
御けんさん　釜　風炉　フタ置
一たんすの中　御けんさん二金銀　同台二茶せんをき 茶椀一
以上

第 331 図　公方様御元服付而御成（内閣文庫蔵[3)]）

第 332 図　井戸遺構より出土の付札

文芸等の舞台としての空間造成は、当主館に限ったものではなかったことが発掘調査にて明らかになっている。例えば朝倉氏の場合、城下町内で検出された庭園遺構は 18 箇所あり、当主宗家に関わる館跡や寺院跡のほか、武家や医師の屋敷跡などで確認されている。一乗谷における城下町の本格的な建設は、永正 3 年（1506）、一乗谷 3 代貞景が土佐光信に描かせた京中屏風の制作以後と想像される。この屏風は現代でいう洛中洛外図の初例とされており［小島 2009］、一乗谷の城下町は京都の町並を参考に建設が進められたと考えられる。例えば東西幹線道路の心々を 91 m（約 30 丈）に設定し、また朝倉宗家にかかわる館・寺院は谷の中心部の東側山裾に集められ、一乗谷川を挟んで西側山裾に大型武家屋敷が建ちならび、川の左岸の幹線道路沿いには町屋が軒を連ねたように、居館や屋敷の性格ごとに配置されるエリアが決まっていたことが分かっている［福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1998 等］。さらに、大型武家屋敷は谷の中心部に近いほど規模が大きく、武家屋敷にも家格差があったことが推測される。以上のような計画的な城下町建設の一部として、作庭が行われたと考えられる。

朝倉宗家に関わる館・寺院では、濠等を用いて山水を効率的に治水・利水するとともに、その一部を園池に導水したものと考えられる。一方、武家屋敷や医師の屋敷の庭園形態はいずれも枯山水様の平庭であり、これは屋敷の敷地に限りがあるために平庭の形態が選定されたと考えられる例もあるが、なかには大規模な武家屋敷で谷部に集まる豊富な山水を活かせる環境にあっても、徹底して平庭を配していることから、朝倉宗家に関わる館・寺院の庭園との差別化を図ったものと考える［藤田 2016］。京都における館・屋敷の階層性を視覚的に表現した事例として、洛中洛外図屏風の細川管領邸と典厩邸の描写の屋敷規模や表門の門形式、中門の唐破風の有無、園池と平庭などの描き分けが指摘されており［小野 1999・2016・2017］、このような都の価値観が一乗谷のような地方にも伝播し、将軍家の秩序に則った町づくりがなされていたと考えられる。なお、寺院跡と推定されている第 46 次調査区においては、帯水の痕跡が認められる池跡が検出されているが、朝倉宗家の館等で確認されている園池とは異なり、景石が認められず、また護岸形状も単純な楕円形を呈することから、鑑賞を目的とした園池とは異なる意図（調整池など）にて配されたものと類推し、分類からは除外した。

戦国大名の城下町を対象とした発掘調査事例の増加を待つ必要があるが、将軍や公家といった京都の上流階層が共有していた規範に則り、戦国大名は領国の城下町において館や屋敷の配置とあわせて作庭の普請を計画したのであろう。城下町の骨組みとして生活を支える治水や利水と同様、統治者としての品格や信頼性を支える屋台骨であった文芸や芸能、遊芸への造詣の深さ、その舞台となる庭園空間は、戦国大名の文力統治に不可欠な要素の一つであったと考える。

（4）おわりに　～今後の検討課題～

前項まで、京文化の導入と領国文化の発展により形成された、将軍家の格式と当時の流行が織り交ざった空間造成に触れてきたが、その作庭体制については検討できなかった。室町時代の京都においては山水河原者といった作庭集団の存在が知られているが、地方における作庭体制は不明な点が多い。一乗谷の庭園群を例にみると朝倉宗家の館・寺院庭園の滝石組や橋石組の構成の類似点や、当主館と家臣屋敷の平庭構成の類似点が指摘されている［藤原 1998］。以上のことから専門技術者の介在が推定でき、城下町一帯の作庭に関与した可能性が考えられる。江戸時代には小堀遠州に代表されるように、奉行職として建築や庭園の造営に携わる指示形態が知られ、越前国においても庭園の管理に携わる職が設定されているが、中世の作庭・庭園管理の体制は現時点では不詳である。地方の作庭や作庭後の庭園管理において、京都と同様に専門集団が関与したのか否か、そして戦国大名自身がどのように関わっていたのか、今後の検討課題としたい。

第 333 図　朝倉宗家に関わる館・寺院の滝石組（右側の滝副石が大きく、水分石が配されている点が共通）

矮小な話にはなるが、一乗谷では茶の湯に用いたと考えられている蹲踞用の手水鉢が出土している（第 15 次調査区出土）。同調査区にて茶の湯を行ったと推定されている小座敷の建物遺構と庭園遺構が出土しているものの、手水鉢が出土した井戸遺構とは約 50 ｍも離れており、庭園遺構との関連性は不明で、そもそも手水鉢であるのか疑問も呈されていた。疑問が呈された大きな理由はその形状にあり、現代に一般的に普及している手水鉢の上面が平滑であるのに対し、出土品は上面の一部を縁状に掘り残すという、手間のかかる造形となっている。この出土品が手水鉢であるか否かの検討材料として、同様の形状の現存品である玉泉園（金沢市小将町）の手水鉢を挙げたい。玉泉園は金沢城のほとりにあり、江戸時代初期の加賀前田藩の重臣、脇田氏の邸宅の庭園にはじまると考えられている。現在は料亭となっており、現代までに庭園の改変が重ねられたものと想像されるが、件の手水鉢がある蹲踞は、庭園の端に打ち捨てられたように現存している。同庭園内には越前松平家から脇田家へ授けられたと伝わる手水鉢もあり、また、朝倉氏滅亡以後、朝倉氏旧臣や職人が加賀藩に重用されたことからも、越前国と加賀国という隣国間の文化交流について、今後も検討できればと考える。

第 334 図　一乗谷出土の手水鉢

第 335 図　玉泉園現存の手水鉢

近年、地方の国々を治めた戦国大名に関連する庭園遺構の発掘事例が増加したことにより、戦国大名居館の発掘事例の比較を中心とした活発な議論が行われている（第 11 回東国中世考古学研究会シンポジウム「発掘調査成果でみる 16 世紀大名居館の諸相」（平成 27 年）・勝瑞城シンポジウム「戦国期・武家の館」（平成 28 年）など）。議論のなかでは、将軍家の格式に則った空間造成や土師質皿などの製品形態の導入がなされていた点など、各地方の戦国大名の文力統治に伴う共通項が、庭園遺構を含む大名居館跡の発掘調査によって確かめられてきている。しかし一方で、事例ごとの違い－多様性が意味するところは地域性によるものなのか、もしくは統治者の違いによるものなのかなど、新たな課題も生じている。これらの課題に対しては、各戦国大名によって異なる統治過程や支配領域などの諸条件を考慮する必要があると思われ、戦国大名の庭園空間における作庭意図について、今後さらに検討していきたいと考える。

引用・参考文献

米原正義 1976『戦国武士と文芸の研究』桜楓社
米原正義 1986『戦国武将と茶の湯』淡交社
宮永一美 2006「朝倉氏と『君台観左右帳記』の伝授」『若越郷土研究第五十巻二号（二八一号)』福井県郷土誌懇談会
小野正敏 2017「館・屋敷をどう読むか」『考古学と中世史研究 13　遺跡に読む中世史』高志書院
小泉和子 1990「蝉の御たんすの鍵」『よみがえる中世６　実像の戦国城下町越前一乗谷』平凡社
中村昌生 2009「書院から座敷へ」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要 2008』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
藤原武二 1998「戦国城下町の茶の湯と茶庭について」『福井県立博物館紀要　第６号』福井県立博物館
吉岡泰英 1999「一乗谷朝倉氏遺跡の庭園」『庭園学講座Ⅵ　日本庭園と石』京都芸術短期大学／京都造形芸術大学日本庭園研究センター
小島道裕 2009「洛中洛外図屏風「東博模本」の成立事情および「朝倉本」に関する考察」『総研大文化科学研究５号』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1998『越前朝倉氏・一乗谷』
藤田若菜 2016『奈良文化財研究所学報　第 96 冊　研究論集 18　中世庭園の研究 - 鎌倉・室町時代』「戦国城下町一乗谷の庭園文化」
小野正敏 1999「もうひとつの武器、館と庭園」『庭園学講座Ⅵ　日本庭園と石』京都芸術短期大学／京都造形芸術大学　日本庭園研究センター
小野正敏 2016「戦国期武家館の景観と意味」『勝瑞城シンポジウム　戦国期・武家の館資料集』藍住町・藍住町教育委員会

註

1）本論では「戦国大名」を、一国を治めた守護職もしくは守護職級の力を持った統治者と定義する
2）吉岡 1999 前掲書に加筆
3）財団法人歴史民俗博物館振興会 1998『陶磁器の文化史』より転載

引用・参考文献

安芸鞠子・小林照子・堀内秀樹2012「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報８』　東京大学埋蔵文化財調査室
安芸鞠子2006「東大構内遺跡出土の人形にみる一考察－工学部14号館地点の人形の様相と各期にみる成形技法－」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書７　東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』　東京大学埋蔵文化財調査室
赤穂市教育委員会2002『赤穂城跡二の丸庭園錦帯池発掘調査概要』
赤穂市教育委員会2008『名勝旧赤穂城庭園二之丸庭園整備概要報告書』
赤穂市教育委員会2013『名勝旧赤穂城庭園二之丸庭園整備概要報告書２』
安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42，73-88.
池田俊彦1998「茶室」『金沢市史　資料編17　建築・建設』　金沢市
池田仁子2016「加賀藩における庭の利用と保養・領民」『加賀藩研究を切り拓く－長山直治氏追悼論集』　桂書房
石川県1924『石川県史蹟名勝調査報告　第二集』
石川県1993『金沢大学跡地等の利用に関する提言』
石川県1995『金沢城跡整備実施計画報告書』
石川県2011『史跡金沢城跡保存管理計画書』
石川県2015『特別名勝 兼六園保存管理計画書』
石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所2012『特別名勝兼六園　栄螺山石垣等修理工事報告書』
石川県金沢城調査研究所2008a『金沢城調査研究所年報１』
石川県金沢城調査研究所2008b『絵図でみる金沢城』
石川県金沢城調査研究所2008c『金沢城石垣構築技術史料Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2008d『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2008e『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2009a『金沢城調査研究所年報２』
石川県金沢城調査研究所2009b『よみがえる金沢城２』
石川県金沢城調査研究所2010a『金沢城調査研究所年報３』
石川県金沢城調査研究所2010b『金沢城跡石垣修理工事報告書－玉泉院丸南西石垣－』
石川県金沢城調査研究所2010c『金沢城の三御門－河北門・橋爪門・石川門－』
石川県金沢城調査研究所2010d『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査概報２』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所2011a『金沢城調査研究所年報４』
石川県金沢城調査研究所2011b『金沢城石垣構築技術史料Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所2011c『金沢城跡－河北門－』
石川県金沢城調査研究所2011d『金沢城跡－二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅰ－』
石川県金沢城調査研究所2011e『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査概報３』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所2012a『金沢城調査研究所年報５』
石川県金沢城調査研究所2012b『金沢城跡－二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅱ－』
石川県金沢城調査研究所2012c『城郭石垣の技術と組織』
石川県金沢城調査研究所2012d『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査概報４』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所2013a『金沢城調査研究所年報６』
石川県金沢城調査研究所2013b『金沢城普請作事史料１』
石川県金沢城調査研究所2013c『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所2014a『金沢城調査研究年報７』
石川県金沢城調査研究所2014b『金沢城普請作事史料２』
石川県金沢城調査研究所2014c『金沢城跡－石川門付属太鼓塀－』
石川県金沢城調査研究所2014d『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所2015a『金沢城調査研究所年報８』
石川県金沢城調査研究所2015b『金沢城普請作事史料３ 奥村栄実御用番幷御城方日記』
石川県金沢城調査研究所2015c『金沢城跡－橋爪門－』
石川県金沢城調査研究所2015d『金沢城跡－玉泉院丸庭園Ⅰ－』
石川県金沢城調査研究所2015e『金沢城跡鼠多門・鼠多門橋遺構確認調査概報１』（現地説明会資料）
石川県金沢城調査研究所2016a『金沢城調査研究所年報９』
石川県金沢城調査研究所2016b『金沢城普請作事史料４』
石川県金沢城調査研究所2016c『金沢城跡石垣保存実態調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所2016d『金沢城跡－鶴ノ丸第１次・新丸第１次・尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋屋敷－』
石川県金沢城調査研究所2017a『金沢城調査研究所年報10』
石川県金沢城調査研究所2017b『金沢城普請作事史料５ 三壺聞書』
石川県金沢城調査研究所2017c『金沢城跡－玉泉院丸南石垣等－』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2003a『年報１』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2003b『研究紀要 金沢城研究 創刊号』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2004a『年報２』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2004b『御造営方日並記』上巻
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005a『年報３』

石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005b『御造営方日並記』下巻
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005c『金沢城フォーラム　記録集　石垣の匠と技』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006a『年報４』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006b『金沢城跡Ⅱ』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006c『よみがえる金沢城１』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006d『金沢東照宮（尾崎神社）の研究』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2007a『年報５』
石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2007b『金沢城代と横山家文書の研究』
石川県教育委員会1970『金沢城二ノ丸跡発掘調査概報』
石川県教育委員会1979『石川県の古庭園』
石川県教育委員会2001『金沢城フォーラム　いま甦る金沢城』
石川県教育委員会事務局文化財課「いしかわ文化財ナビ」［http://www.bunkazainavi.pref.ishikawa.lg.jp/］
石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会1991a『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』金沢城史料編
石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会1991b『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』金沢御堂史料編
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター1998『金沢城跡を掘る 1998』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター1999a『金沢城跡を掘る 1999』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター1999b『金沢城跡を掘る 1999』vol.２
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2000『金沢城跡を掘る 2000』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2001a『年報２（平成11年度）』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2001b『金沢市 三社町遺跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002a『金沢市 金沢城跡Ⅰ』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002b『金沢市 木ノ新保遺跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002c『金沢市 経王寺遺跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002d『金沢市 高岡町一ツ水溜跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002e『金沢市 前田氏（長種系）屋敷跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2007『金沢市 三社町遺跡』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2010『金沢市 金沢城跡１』
石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2012『金沢市 金沢城跡２－堂形（第３・４次調査）－』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2013『小松市 八幡遺跡Ⅱ』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2014a『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2014b『金沢市 小立野ユミノマチ遺跡』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2014c『金沢市 金沢城跡３－堂形（第５次調査）－』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2014d『金沢市 元菊町遺跡』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2015a『金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）Ⅱ』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2015b『金沢市 小立野ユミノマチ遺跡Ⅱ』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2016『金沢市 金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）』
石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター2017『金沢市　金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区）』
石川県兼六園管理事務所1993『兼六園「明治紀念之標」修理工事報告書』
石川県土木部営繕課2001『金沢城公園菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等復元工事報告書』
石川県土木部公園緑地課2013『金沢城公園　河北門復元整備工事報告書』
石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所2017『金沢城跡　玉泉院丸南石垣等』
石川県立埋蔵文化財センター1990『元菊町遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター1992『特別名勝 兼六園（江戸町跡推定地）発掘調査報告　－附　本多家上屋敷跡試掘調査報告－』
石川県立埋蔵文化財センター1996『金沢城跡車橋門発掘調査報告書』
石川県立埋蔵文化財センター1997『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター1998『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ』
石川県立歴史博物館1995『加賀藩主 前田斉泰』
石野友康2005「『寛文元年二年　日帳』」『研究紀要 金沢城研究』第３号　金沢城研究調査室
石原周次1998「庭園」『金沢市史　資料編17　建築・建設』　金沢市
井上鋭夫1969『金沢城跡の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会
井上喜久男1990「尾張陶磁（１）－近世初期の瀬戸物生産－」『愛知県陶磁資料館研究紀要』９
上野佳也1976「金沢城四十間長屋跡発掘調査概報」『日本海文化』№.３　金沢大学法文学部日本海文化研究室
宇佐見龍夫1987『新編 日本被害地震総覧』　財団法人東京大学出版会
氏家栄太郎（八木田武男編）1999『金沢市街温故叢誌　乾・坤』　北国新聞社出版局
内田仁2006『二條城庭園の歴史』　東京農大出版会
江戸遺跡研究会2001『図説　江戸考古学研究事典』　柏書房
小倉學1997「兼六園にまつわる民俗」『特別名勝兼六園－その歴史と文化－』　橋本確文堂
小倉學1998「金谷御殿の八幡宮」『石川郷土史学会々誌』第21号
小野正敏1982「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』№.２　日本貿易陶磁研究会
小野健吉2004『岩波　日本庭園辞典』　岩波書店
小野正敏1997『戦国城下町の考古学－一乗谷からのメッセージ』　講談社選書メチエ
尾山神社々務所1973『尾山神社誌』

垣内光次郎2001「第三章　近世・近代の瓦」『新修　小松市史　資料編３』　小松市
加藤力2017「小松城と初期兼六園との関連性について」『きくざくら 研究発表文集 第26号』　金沢城・兼六園研究会
金沢市2016『成巽閣庭園名勝地調査報告書』
金沢市・金沢市教育委員会1991『瓢箪町遺跡』
金沢市教育委員会1995『金沢市本町一丁目遺跡』
金沢市教育委員会1997a『安江町遺跡』
金沢市教育委員会1997b『金沢市本町一丁目遺跡Ⅱ　鍛冶片原地点』
金沢市埋蔵文化財センター1998『長田町遺跡　長町遺跡　穴水町遺跡』
金沢市埋蔵文化財センター1999『下本多町遺跡』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a『金沢市高岡町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001b『金沢市昭和町遺跡Ⅰ』
金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001c『金沢市醒ヶ井遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2002『石川県金沢市 彦三町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003a『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003b『石川県金沢市 高岡町遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003d『野田山墓地』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004a『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅰ（測量図編）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004c『石川県金沢市 久昌寺遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005a『石川県金沢市 片町二丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005b『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅱ（古代・中世編、測量図編２）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005c『石川県金沢市 木ノ新保遺跡Ⅱ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005d『平成16年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006a『石川県金沢市 市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006b『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅲ（近世編１）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2006c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅳ』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007a『石川県金沢市 兼六元町遺跡　彦三一丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007b『石川県金沢市 下堤・青草町遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007c『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅳ（近世編２）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008a『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅰ～西外惣構跡・東内惣構跡発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008b『野田山・加賀藩主前田家墓所調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009a『辰巳用水調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009b『石川県金沢市 広坂遺跡（１丁目）Ⅴ（金沢能楽美術館地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010a『平成21年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010b『石川県金沢市 東山一丁目遺跡』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011a『平成22年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011b『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅱ～西内惣構跡（主計町地点）発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011c『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅲ～西外惣構跡（武蔵町地点）発掘調査報告書～』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011d『石川県金沢市 土清水塩硝蔵跡調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012a『本多家上屋敷関連遺構調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012b『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（本多町三丁目地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012c『野田山・加賀八家墓所調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012d『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅳ 金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書 遺構編』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012e『平成23年度　金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013a『石川県金沢市　小立野四丁目遺跡―天徳院前田家墓所―』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013b『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅴ 金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書 遺物編』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013c『平成24年度　金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014a『平成25年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014b『石川県金沢市 片町二丁目遺跡（５番地点）』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014c『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅵ 東内惣構跡（枯木橋南地点）発掘調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2015a『平成26年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2015b『石川県金沢市 長家上屋敷跡調査報告書』
金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2016『平成27年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
金沢市史編さん委員会1998『金沢市史　資料編17　建築・建設』　金沢市
金沢市史編さん委員会1999『金沢市史　資料編３　近世一』　金沢市
金沢市史編さん室1965『金沢の百年　明治編』　金沢市
金沢市史編さん室1967『金沢の百年　大正・昭和編』　金沢市
金沢市役所1973『稿本　金澤市史』市街編第四　名著出版
金沢市立玉川図書館1992『金沢市立図書館所蔵　絵図・地図目録』
金沢市立玉川図書館2003『金沢市図書館叢書(四) 温故集録 一』
金沢大学創立50周年記念事業後援会2001『金沢大学50年史』通史編

金沢大学埋蔵文化財調査センター2000『金沢大学文化財学研究』２
金沢大学埋蔵文化財調査センター2002『金沢大学文化財学研究』３・４
金沢大学埋蔵文化財調査センター2003『金沢大学文化財学研究』５
金沢御堂・金沢城調査委員会1993『金沢城跡 金沢城跡遺構実態調査概要報告書』　石川県教育委員会
金子　智1994「近世瓦の基本分類-江戸遺跡出土品を中心に-」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第20集 哲学・史学編』　早稲田大学大学院文学研究科
関西近世考古学研究会2008『関西近世考古学研究16　土人形が見た近世社会』
神原邦男2003『大名庭園の利用の研究－岡山後楽園と藩主の利用－』　吉備人出版
紺野義夫1993『新版・石川県地質図（10万分の１）および石川県地質誌』　石川県
紺野義夫2001「石川県の地質に関連する調査研究の百年史年表」『石川県地質誌・補遺』　北陸地質研究所
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』
九州近世陶磁学会2008『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（東海・北陸・甲信越編）』
木越隆三2003a「元和～寛文期の金沢城修築について」『研究紀要 金沢城研究』創刊号　金沢城研究調査室
木越隆三2004「金沢城全域絵図の分類と編年－金沢城絵図調査報告Ⅰ－」『研究紀要 金沢城研究』第２号　金沢城研究調査室
木越隆三2006「金沢城作事所に関する断簡資料（１）－名倉氏採取襖下張文書（金沢大学文学部日本史研究室蔵）－」『研究紀要 金沢城研究』第４号　金沢城研究調査室
木越隆三2007「近世後期、石垣構築技術「秘伝」の形成過程」『研究紀要 金沢城研究』第５号　金沢城研究調査室
木越隆三2009「金沢城と辰巳用水」『辰巳用水調査報告書』　金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
木越隆三2013「金沢の惣構創建年次を再検証する」『日本歴史』第780号　日本歴史学会
北垣聰一郎1987『石垣普請』　法政大学出版局
北野博司2001「加州金沢城の石垣修築について」『東北芸術工科大学紀要』№８　東北芸術工科大学
北野博司2003「金沢城石垣の変遷１」『研究紀要 金沢城研究』創刊号　金沢城研究調査室
北野博司2004「金沢城石垣の変遷２－切石積石垣－」『研究紀要 金沢城研究』第２号　金沢城研究調査室
久保智康1989a「越前における近世瓦生産の開始について」『福井県立博物館紀要』３　福井県立博物館
久保智康1989b「近世中～後期越前における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』７
久保智康1992「近世後期南加賀における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』10
久保智康2001『北陸の瓦の歩み』　日本セラミックス協会北陸支部
久保智康2005「日本海域をめぐる赤瓦」『日本海歴史体系』第四巻　近世篇Ⅰ　清文堂
兼六園全史編纂委員会・石川県公園事務所1976『兼六園全史』　兼六園観光協会
後楽園史編纂委員会2001『岡山後楽園史』　岡山県
小島道裕1998「室町時代の小京都」『あうろーら』12号　21世紀の関西を考える会
小島道裕2003「江馬氏館と江馬氏－室町期の国人領主と館」『国立歴史民俗博物館研究報告』104
小島道裕2009「国人館と守護所」『史跡で読む日本の歴史７ 戦国の時代』　吉川弘文館
小杉正人1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27, 1-20.
小寺武久1989『尾張藩江戸下屋敷の謎』　中公新書
小林章・本田祐一・國井洋一2009「金沢における胴割石積みの利用の展開（論説編）」『造園技術報告集５』　日本造園学会
小林照子2012「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の年代的推移について」『東京大学構内遺跡調査研究年報８』　東京大学埋蔵文化財調査室
佐賀県立名護屋城博物館2008『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」 前田利家陣跡』
佐々木達夫1980「金沢城跡の発掘－一九七九年－」『日本海文化』№７　金沢大学文学部日本海文化研究室
佐々木達夫1981「金沢城跡の発掘－1977年－」『金沢大学日本海域研究所報告』第13号
貞末堯司・石崎俊哉・前田清彦1986「金沢城の発掘－1981－藤右エ門丸北側法面裾部発掘報告」『金沢大学日本海域研究所報告』第18号
貞末堯司・前田清彦・児玉剛1989「金沢城の発掘－1986年－黒門横北側県外部発掘調査報告」『日本海文化』№5　金沢大学文学部日本海文化研究室
下郷　稔1997「兼六園築庭の歴史」『特別名勝兼六園－その歴史と文化－』　橋本確文堂
庄川町史編さん委員会1975『庄川町史』下巻　庄川町
白幡洋三郎1997『大名庭園』　講談社選書メチエ
白峰　旬1998『日本近世城郭史の研究』　校倉書房
庄田知充2012「金沢・城と城下町の調査成果」『考古学ジャーナル』№.623　ニューサイエンス社
瀬戸　薫2000「『北信愛覚書』について－天正十五年の金沢城－」『加能史料研究』第12号　石川県地域史研究振興会
瀬戸市史編纂委員会編1993a『瀬戸市史』陶磁史篇四　愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会編1993b『瀬戸市史』陶磁史篇五　愛知県瀬戸市
瀬戸市史編纂委員会編1998『瀬戸市史』陶磁史篇六　愛知県瀬戸市
千田嘉博2000『織豊系城郭の形成』　東京大学出版会
高木喜美子2013『政隣記　従享保元年　到享保二十年』　桂書房
高木喜美子2014『政隣記　従延享四年　到宝暦十年』　桂書房
高木喜美子2015『政隣記　従宝暦十一年　到安永七年』　桂書房
滝川重徳1999「金沢城跡（本丸附段調査区）」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号　（財）石川県埋蔵文化財センター
滝川重徳2012「金沢城石垣の変遷と特徴」『城郭石垣の技術と組織』　石川県金沢城調査研究所
竹井巖2004「金沢の氷室と雪氷利用」『北陸大学紀要』第28号
龍居竹之介1997「兼六園のなりたち」『特別名勝兼六園－その歴史と文化－』　橋本確文堂
辰巳ダム関係文化財等調査団1983『加賀 辰巳用水－辰巳ダム関係文化財等調査報告書－』
田中徳英2008『加賀藩大工の研究』　桂書房

田端寶作1979『金沢城石垣刻印調査報告書』　城郭石垣刻印研究所
千葉　崇・澤井裕紀2014「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』30，7-30
坪井利弘1993『建築家のための瓦の知識』　鹿島出版会
坪井利弘1999『図鑑　瓦屋根』　理工学社
土田友信2000「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第４号　（財）石川県埋蔵文化財センター
東京大学理学部遺跡調査室1989『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書１　東京大学本郷構内の遺跡 理学部７号館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室2005『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書５　東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』
東京大学埋蔵文化財調査室2006『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書７　東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』
東国中世考古学研究会2016『発掘調査成果でみる16世紀大名居館の諸相－シンポジウム報告－』
冨田和気夫・湊屋玲美2002「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第７号　（財）石川県埋蔵文化財センター
富山市教育委員会埋蔵文化財センター2015『富山市内石造物調査報告書Ⅳ』
永井久美雄1998『近世の出世銭Ⅱ－分類図版編－』　兵庫埋蔵銭調査会
中村利則1997「数寄の風景－兼六園の茶屋の系譜－」『特別名勝兼六園－その歴史と文化－』　橋本確文堂
中村洋介・金幸隆・岡田篤正・竹村惠二2003「金沢市街地における河成段丘の形成時期と森本 - 富樫断層帯野町撓曲の第四紀後期における上下変異速度」『活断層研究』23号
長山直治2006a「兼六園とはどこのことか」『研究紀要 金沢城研究』第４号　金沢城研究調査室
長山直治2006b『兼六園を読み解く―その歴史と利用―』　桂書房
長山直治2014「蓮池庭・竹沢庭の推移と利用」『石川の歴史遺産セミナー講演録　第18～20回　加賀』　石川県立歴史博物館
長山直治・西村聡2005『大鼓役者の家と芸－金沢・飯島家十代の歴史－』　飯嶋調寿会
名古屋市2017『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書』
七尾市史編さん専門委員会2001『新修七尾市史３』
成瀬晃司1997「江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷－文様、銘款を中心に－」『東京大学構内遺跡調査研究年報１』　東京大学埋蔵文化財調査室
日本鬼師の会2001『城と鬼瓦』
日本海文化研究室1976『金沢城郭史料』日本海文化叢書第三巻　金沢大学法文学部日本海文化研究室
能芝　勉2005「京都伏見・深草産の土師質製品について」『江戸時代の名産品と商標』　江戸遺跡研究会
橋本確文堂企画出版室1997『特別名勝兼六園－その歴史と文化－』
服部　郁1993「幕末から明治の瀬戸窯」『遺跡に見る幕末から明治』江戸遺跡研究会第６回大会発表要旨　江戸遺跡研究会
彦根市教育委員会2011『名勝玄宮楽々園範囲確認調査報告書』
飛田範夫2009『江戸の庭園』　京都大学学術出版会
広瀬岳志2005「コビキ再考」『森宏之君追悼城郭論集』　織豊期城郭研究会
広瀬幸雄1997「「日本武尊像」の修理工事」『特別名勝兼六園－その歴史と文化－』　橋本確文堂
藤　則雄1999「金沢城「百間堀」の断層とその周辺の地形」『北陸の考古学Ⅲ』　石川考古学研究会々誌第42号　石川考古学研究会
藤　則雄1975「河岸段丘」『金沢周辺の第四系と遺跡』
藤澤良祐1987「本業焼きの研究（１）」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅵ』　瀬戸市歴史民俗資料館
（公財）文化財建造物保存技術協会2014『重要文化財金沢城石川門修理工事報告書』　石川県
文化庁1969『重要文化財金沢城　石川門・三十間長屋保存修理工事報告書』
文化庁2005『史跡等整備のてびき』　同成社
文化庁2013『発掘調査のてびき－各種遺跡調査編－』　同成社
文化庁文化財部記念物課2015『石垣整備のてびき』　同成社
日置　謙1956『改訂増補　加能郷土辞彙』　北國新聞社
増山　仁1997「金沢城下における近世墓－久昌寺墓地を中心として－」『第９回関西近世考古学研究会大会　西日本近世墓の諸様相』
増山　仁1999「金沢城跡」『金沢市史』資料編19考古　金沢市史編さん委員会
三浦ゆかり1999「金沢城跡いもり堀発掘調査」『石川県埋蔵文化財情報』第２号　（財）石川県埋蔵文化財センター
三尾次郎2017「彦根城の空間構造の変遷－御殿と庭園を中心に－」『佐和山御普請、彦根御城廻御修復－発掘・解体調査からみえてきたもの－』彦根教育委員会文化財部文化財課
見瀬和雄2000「金沢城の創建と前田利家」『石川県史だより』第39号　石川県立図書館史料編さん室
南源信2009「山崎山麓の氷室」『きくざくら』第18号　金沢城・兼六園研究会
湊屋玲美・土田友信2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第５号　（財）石川県埋蔵文化財センター
湊屋玲美・土田友信ほか2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第６号　（財）石川県埋蔵文化財センター
宮崎博司2015「肥前名護屋の庭園連遺構について」『研究紀要』第21集　佐賀県立名護屋城博物館
本康宏史2016「「兼六園」の呼称をめぐる若干の考察」『加賀藩研究を切り拓く－長山直治氏追悼論集－』　桂書房
森島康雄1993「聚楽第跡出土の軒平瓦」『京都府埋蔵文化財情報』49　（財）京都府埋蔵文化財センター
谷口明伸・増山　仁2004「前田土佐守家の下屋敷と醒ヶ井遺跡」『研究紀要』第１号　（財）金沢文化振興財団
山本幸雄2015『加賀藩記録並びに御作事所資料（一）』
吉岡康暢1985「金沢城の発掘」『金沢城と前田氏領内の諸城』日本城郭史研究叢書　第五巻　名著出版
米澤義光2009『加賀国・本吉いぶし瓦（本吉瓦）について』（有）米澤義直商店
和田龍介2014「金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区）」『石川県埋蔵文化財情報』第31号　（公財）石川県埋蔵文化財センター
和田龍介2015「金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区）」『石川県埋蔵文化財情報』第34号　（公財）石川県埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	かなざわじょうていえんちょうさほうこくしょ
書名	金沢城庭園調査報告書
副書名	金沢城史料叢書32
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	滝川重徳、庄田孝輔、柿田祐司、飛田範夫、粟野隆、藤田若菜、酒寄淳史、藤根久、森将志
編集機関	石川県金沢城調査研究所
所在地	〒920-0918　石川県金沢市尾山町10-５ TEL 076-223-9696
発行年月日	2018年３月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(㎡)	
かなざわじょうあと 金沢城跡	いしかわけん 石川県 かなざわしまるのうち 金沢市丸の内	17201	130200	36° 33′ 58″	136° 39′ 35″	20140901～ 20141031	50	保存目的調査
						20120402～ 20170926 (ボーリング調査、現況調査)	−	
けんろくえんいせき 兼六園遺跡	いしかわけん 石川県 かなざわしけんろくまち 金沢市兼六町	17201	130300	36° 33′ 44″	136° 39′ 43″	20120402～ 20170926 (現況調査)	−	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢城跡	城館	近世	池遺構（景石、傾斜面）、ピット等	陶磁器、瓦、金属製品、石製品	発掘調査・ボーリング調査（東ノ丸）、現況調査を実施
兼六園遺跡	城館	近世	—	—	現況調査を実施

要約

金沢城調査研究事業の一環として、関連する庭園について総合的に検討することにより、金沢城の特質を一層明確にし、併せて城郭の構成要素としての庭園の意義の解明に資することを目的に、平成24年度から29年度にかけて確認調査を実施した。

このうち東ノ丸では、平成26年度に発掘調査、平成24・25・28年度にボーリング調査を行い、従来判然としなかった近世初期の池遺構の広がりや構造の一部等を明らかにした。また金谷出丸の庭園（尾山神社庭園（旧金谷御殿庭園））や蓮池庭・竹沢庭（兼六園）を中心に、現存遺構の配置・遺存状況を確認するとともに、一部については詳細観察・計測・略測等を行い、絵図等との照合を通じ、近世段階の様相を検討した。

総じて遺構・文献・絵図史料を併せて検討・分析することにより、金沢城庭園の特徴とその変遷について知見を得、庭園の動向から金沢城の構造変化を考察した。

金沢城史料叢書 32

金沢城庭園調査報告書

平成 30（2018）年 3 月 30 日　発行

編集・発行　石川県金沢城調査研究所

〒920-0918　石川県金沢市尾山町10－5
電話　076（223）9696　　FAX　076（223）9697
http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html
メールアドレス　kncastle@pref.ishikawa.lg.jp

印　刷　　株式会社 ハクイ印刷